

# 志紀遺跡 (その2・3・5・6)

大阪府宮八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書

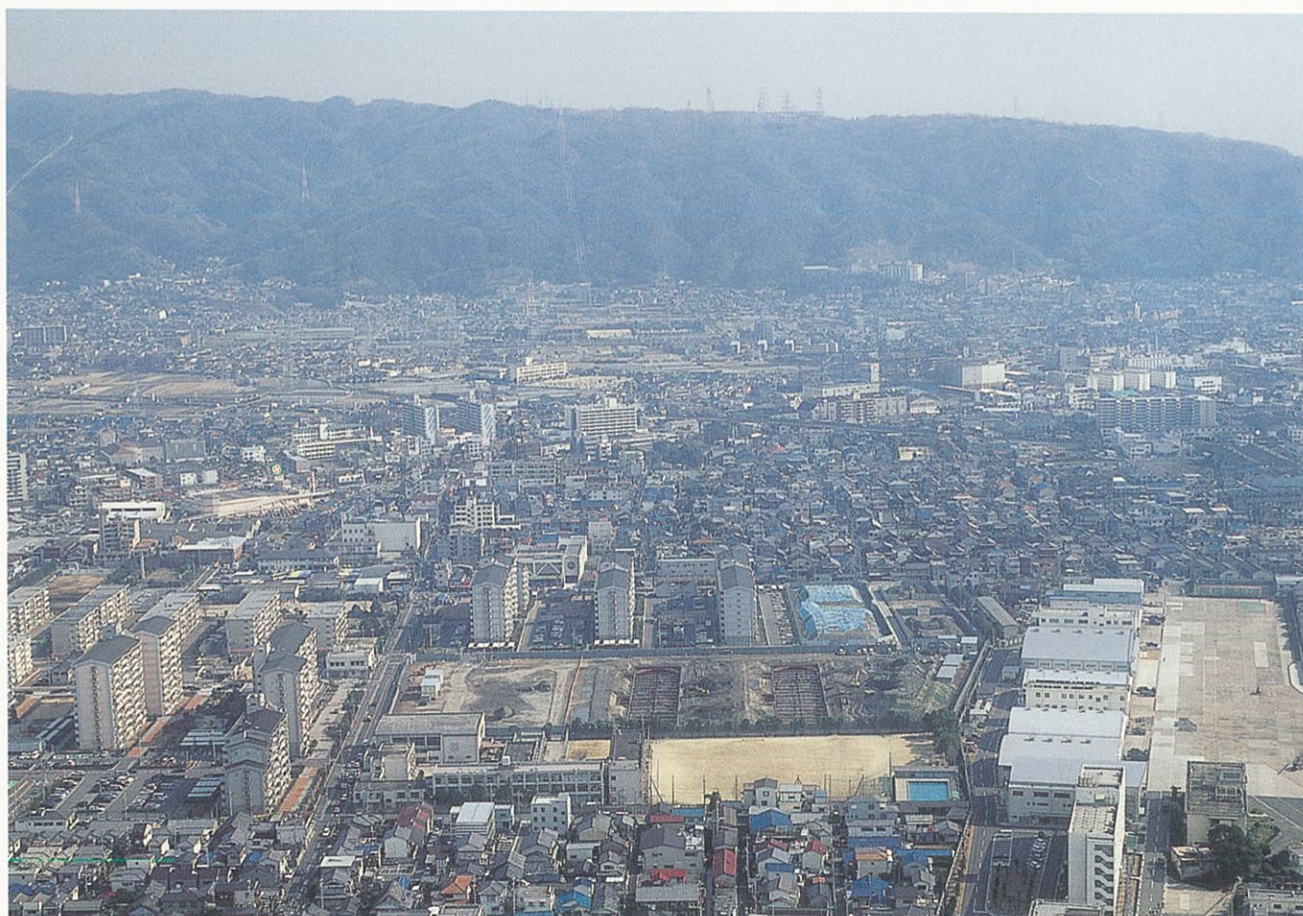
第1分冊

2002年3月



**北東上空からの志紀遺跡全景**

中央の空き地で3A・3B区、その右手、建設中の高層住宅のかけで2区を調査中。背後の八尾空港内にも田井中遺跡ほか広がる。画面奥、東から西に流れるのは1704（宝永元）年に付け替えられた大和川。1994年撮影。



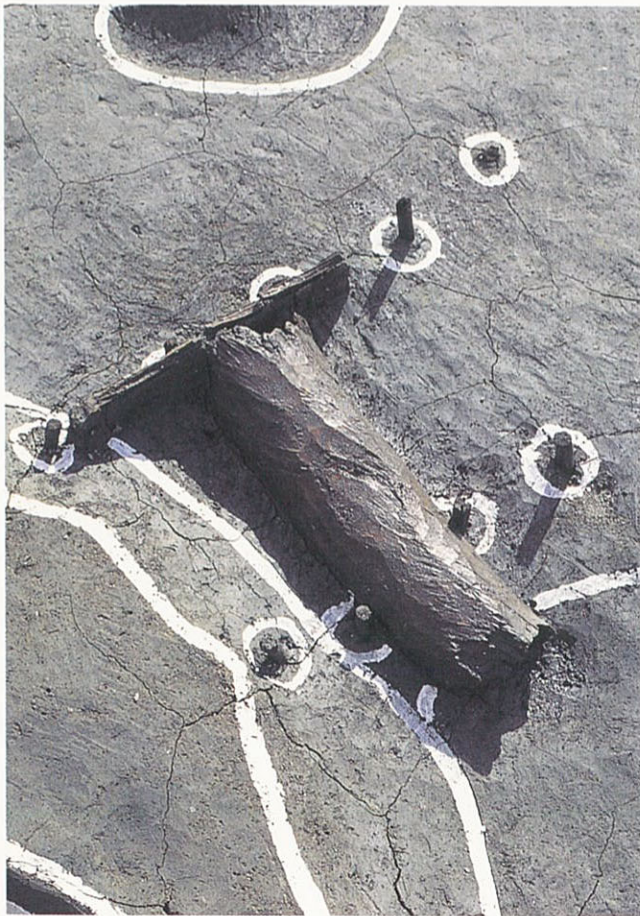
**西上空からの志紀遺跡全景**

手前中央で6B・6C区を調査中。上の写真では発掘中であった2・3区にも府営住宅がすでに建ち並んでいる。背景は大阪府と奈良県を隔てる生駒山地。2000年撮影。



3A・3B区第11面の小区画水田（西から）

地形に合わせてつくられた弥生時代中期末～後期初頭の小区画水田が良好に残っていた。



3A区導水管A13071-OX（北から）

弥生時代前期末の第13面で検出した導水管。流路の南に広がる水田に水を導く。



弥生時代前期のモミ

2A区第6遺構面で検出した弥生時代前期のモミ。

# 序 文

志紀遺跡は、大阪府営志紀住宅の建替え事業に伴う試掘調査によって発見された遺跡で、1983年以降、老朽化した木造住宅の建替えが計画的に行われ、発掘調査もその度に実施されてきました。また1995年には、阪神・淡路大震災が起きたことによって、急遽、仮設住宅が建設されることになり、一部では調査の順延が計られてきました。

今回の報告書は、1994年以降に調査が行われた4ヶ所の調査成果を取りまとめて報告するもので、ボリュームも本文702ページとかなり厚みのあるものになっています。なお、昨年度行われた志紀遺跡（その6）の調査をもって府営住宅の建替えに伴う当面の発掘調査は終了しました。

志紀遺跡は、過去に行われた調査によって弥生時代以降近世にかけての多数の遺構面が存在することが知られていましたが、その多くは水田などの農耕地を中心としたもので、水田景観の変遷などを考えていくうえで当センターが調査を行っている池島・福万寺遺跡と並ぶ重要な遺跡として知られていました。今回の調査でも弥生時代の水田や平安時代以降現代に至る条里地割などを検出することができました。また、弥生時代中期の打製尖頭器・石小刀など比較的出土例の少ない貴重な遺物も検出することができました。

なお、これからの検討課題としましては、志紀遺跡の南に隣接し、住居跡の存在や多量の遺物の出土から集落域と目される田井中遺跡との関係についてもう少し深く掘り下げて検証する必要があると、近辺での今後の調査に期待したいと思います。

最後になりましたが、発掘調査ならびに整理作業でお世話になった大阪府建築都市部住宅整備課、大阪府教育委員会文化財保護課、八尾市教育委員会をはじめとする多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成14年3月29日

財団法人 大阪府文化財調査研究センター  
理事長 水野正好



# 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市所在の志紀遺跡（その2）（その3）（その5）（その6）の発掘調査報告書である。なお、事業名は上記のように（そのX）であるが、本書では以下X区と読み替える。
2. 発掘調査は、大阪府営住宅の建て替えに伴い、大阪府建築都市部住宅整備課の委託により、財団法人（以下財）大阪府埋蔵文化財協会ならびに大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 各区の所在地、調査原因、調査機関、調査担当者、調査期間は次の通りである。
  - 2区 所在地：大阪府八尾市志紀町西1丁目  
調査原因：大阪府営八尾志紀第4期住宅建て替え  
調査機関：財大阪府埋蔵文化財協会  
調査担当者：西川寿勝  
調査期間：平成6（1994）年5月25日～平成6（1994）年10月31日
  - 3区 所在地：大阪府八尾市志紀町西2丁目  
調査原因：大阪府営八尾志紀南住宅建て替え  
調査機関：財大阪府埋蔵文化財協会  
調査担当者：地村邦夫・秋山浩三  
調査期間：平成6（1994）年4月26日～平成7（1995）年3月25日
  - 5区 所在地：大阪府八尾市志紀町西2丁目  
調査原因：大阪府営八尾志紀南住宅建て替え  
調査機関：財大阪府文化財調査研究センター  
調査担当者：田中一廣・本間元樹  
調査期間：平成11（1999）年6月23日～平成12（2000）年3月31日
  - 6区 所在地：大阪府八尾市志紀町西2丁目  
調査原因：大阪府営八尾志紀南住宅建て替え  
調査機関：財大阪府文化財調査研究センター  
調査担当者：本間元樹・市村慎太郎・野口 舞・鹿野 塁  
調査期間：平成12（2000）年6月1日～平成13（2001）年3月26日
4. なお、志紀遺跡（その1）（その4）については、すでに発掘調査報告書が刊行されている。
  - （その1）西川寿勝『志紀遺跡』財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第91輯 1995年
  - （その4）岩崎二郎・市村慎太郎ほか『志紀遺跡（その4）』財大阪府文化財調査研究センター調査報告書第25集 1998年
5. 調査・整理にあたって次の方々に御協力、御教示を頂いた。記して謝意を表する。  
安部みき子／栗田 薫／今泉里司／大野 薫／岡田清一／亀島重則／阪田育功／寒川 旭／田中清美／趙 哲濟／寺井 誠／富田克敏／成海佳子／西村公助／福永信雄／別所秀高／松尾信裕／宮武頼夫／森 勇一（敬称略、五十音順）

6. 本書の執筆は各区の調査担当者等が分担して行った。文責は目次に示す。
7. 編集は各担当者間の協議にもとづき、本間・鹿野が実務を担当した。
8. 出土遺物および図面・写真等は(財)大阪府文化財調査研究センターで保管している。
9. その他、各区ごとの細目については「第2～7部 第1章 調査の方法」を参照されたい。

## 凡 例

1. 本報告書中のレベルは全て T.P. (東京湾平均海面) である。
2. 方位は国土座標第VI座標系の座標北を示す。
3. 土色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』各年版を用いた。
4. 図・表・写真は報告書全体で通し番号とする。
5. 遺物には第2～7部の各部ごとに下記の4桁の番号を付ける。
 

第2部 (2区) : 2001～2268	第5部 (6A区) : 6001～6008
第3部 (3区) : 3001～3623	第6部 (6B区) : 6101～6376
第4部 (5区) : 5001～5090	第7部 (6C区) : 6501～6794
6. 遺物実測図の縮尺は、一部を除いて基本的に土器・金属器・木器は1/3、石器は2/3とする。調査区全体図、遺構図などは適宜縮尺を選択する。
7. 土器類の断面は、須恵器は黒塗り、瓦器は網かけ、その他は白抜きで表示する。
8. 石器の新欠は、白抜きで表示する。
9. 土器の編年・年代観は必ずしも統一していないが、主に下記の文献に依った。
  - 弥生土器：寺沢 薫・森井貞雄「各地域の様式編年 河内地域」(寺沢 薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年 近畿編I』木耳社 1989年)
  - 古式土師器：米田敏幸「土師器の編年 近畿」(石野博信ほか編『古墳時代の研究 第6巻 土師器と須恵器』雄山閣 1991年)
  - 須恵器：田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966年  
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
  - 古代の土器：古代の土器研究会編『古代の土器』1～5 1992～1998年
  - 中世の土器：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年
10. 弥生時代の石器の分類は、主に下記の文献を参考にした。
  - 平井 勝『弥生時代の石器』ニューサイエンス社 1991年
  - 秋山浩三『史跡池上曾根99』(財)大阪府文化財調査研究センター他 近刊

# 本文目次

## 第1分冊

巻頭カラー

序文	i
例言	iii
凡例	iv
目次	v

## 第1部 はじめに

第1章 調査にいたる経緯と経過	(本間)	1
第2章 位置と環境	(鹿野・本間)	4
第3章 調査の方法	(本間)	8
第4章 各調査区の対応関係	(市村)	10

## 第2部 2A・2B区の調査成果

第1章 調査の方法	(西川)	21
第2章 層序	(西川)	23
第3章 遺構と遺物	(西川・渡辺)	27
第4章 志紀遺跡2A区周辺における花粉分析	(文化財調査コンサルタント㈱)	71
第5章 小結	(西川・渡辺)	79
写真図版		81

## 第3部 3A・3B区の調査成果

第1章 調査の方法	(秋山・地村)	97
第2章 層序	(地村・秋山)	99
第3章 遺構と遺物	(秋山・地村)	103
第4章 自然科学的分析		
第1節 志紀遺跡3区における古環境復元	(㈱古環境研究所)	209
第2節 志紀遺跡3区発掘調査に伴う花粉化石等微化石分析	(文化財調査コンサルタント㈱)	233
第3節 志紀遺跡3区出土樹種鑑定の概要	(勸元興寺文化財研究所)	242
第4節 志紀遺跡3区出土土器片の付着物の分析	(勸元興寺文化財研究所)	245
第5節 志紀遺跡3区出土石鏃の付着物の分析	(勸元興寺文化財研究所)	255
第6節 志紀遺跡3区出土の鉄製鋤・鍬先の分析	(㈱九州テクノリサーチ)	259
第5章 小結	(地村・秋山)	268
写真図版		269



## 第4部 5区の調査成果

第1章 調査の方法	(本間)	297
第2章 層序	(本間)	298
第3章 遺構と遺物	(本間・野口・鹿野)	300
第4章 志紀遺跡5区の花粉・プラントオパール分析	(榊古環境研究所)	338
第5章 小結	(本間)	352
写真図版		355

## 第2分冊

### 第5部 6A区の調査成果

第1章 調査の方法	(市村)	365
第2章 層序	(市村)	366
第3章 遺構と遺物	(鹿野・市村)	368
第4章 志紀遺跡6A区第15層の花粉・植物珪酸体分析	(パリノサーヴェイ榊)	379
第5章 小結	(鹿野)	382
写真図版		383

### 第6部 6B区の調査成果

第1章 調査の方法	(市村)	385
第2章 層序	(市村)	387
第3章 遺構と遺物	(市村・鹿野)	391
第4章 自然科学的分析		
第1節 志紀遺跡6B区の花粉・植物珪酸体分析	(パリノサーヴェイ榊)	463
第2節 放射性炭素年代測定	(榊)パレオ・ラボ	471
第5章 小結	(鹿野)	473
写真図版		475

### 第7部 6C区の調査成果

第1章 調査の方法	(本間)	485
第2章 層序	(本間)	486
第3章 遺構と遺物	(本間・野口)	492
第4章 志紀遺跡6C区の花粉・植物珪酸体分析	(パリノサーヴェイ榊)	554
第5章 小結	(本間)	557
写真図版		559

## 第8部 考察

志紀遺跡の変遷と周辺遺跡	(市村)	575
八尾市志紀遺跡における縄文時代～中世の堆積環境の 変化過程とそれらに対応した耕作地の開発	(別所秀高)	595
志紀遺跡における縄文時代から中世の古環境解析	(辻本裕也・辻 康夫 ・田中義文・馬場健司)	605
志紀遺跡6区で認められた地震の痕跡	(寒川 旭)	614
昆虫化石群からみた遺跡の古環境復元	(西川)	625
志紀遺跡6区出土の動物遺体	(安部みき子)	639
志紀遺跡6区出土の植物遺体	(山口誠治)	647
河内湖岸域における初期弥生水田をめぐって	(秋山)	650
石くずからのメッセージ	(西川・渡辺)	664
志紀遺跡の石器製作	(野口)	677
志紀遺跡の条里水田	(地村)	689

# 挿 図 目 次

## 第 1 部 はじめに

図 1	調査地位置	2
図 2	志紀・田井中遺跡周辺の主要遺跡分布	4
図 3	志紀・田井中遺跡周辺の地形	5
図 4	調査区グリッド	9
図 5	各調査区の対応関係	20

## 第 2 部 2 A・2 B 区の調査成果

図 6	2 A 区西壁土層断面	24
図 7	2 B 区西壁土層断面	25
図 8	2 A・2 B 区単位層・堆積層の対応関係 と土色	26
図 9	2 A・2 B 区第 1 遺構面	29
図 10	2 区第 1 遺構面出土遺物	30
図 11	2 区第 1 層出土遺物	31
図 12	2 区第 2 遺構面出土遺物	32
図 13	2 A・2 B 区第 2 遺構面	33
図 14	2 区第 3 遺構面出土遺物	34
図 15	2 A・2 B 区第 3 遺構面	35
図 16	2 区第 4 遺構面・第 4 層出土遺物	36
図 17	2 A・2 B 区第 4 遺構面	37
図 18	2 A・2 B 区第 5 遺構面	39
図 19	2 A 区第 5 遺構面大溝の詳細および 出土土器	40
図 20	2 A 区第 5 遺構面大溝土層断面	41
図 21	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト石器 ・半製品	44
図 22	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト剥片 (I a 型式小～中)	45
図 23	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト剥片 (I a 型式中)	46
図 24	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト剥片 (I a 型式大)	47
図 25	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト剥片 (I b 型式小～中)	48

図 26	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト剥片 (I b 型式中～大)	49
図 27	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト剥片 (II a 型式小～中)	50
図 28	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト剥片 (II b 型式小～中)	51
図 29	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト剥片 (II b 型式中～大)	52
図 30	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト剥片 (III a 型式小～中)	53
図 31	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト剥片 (III a 型式中～大)	54
図 32	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト剥片 (III b 型式小～中)	55
図 33	2 区第 5 遺構面発見サヌカイト剥片 (III b 型式中～大)	56
図 34	2 区第 5 遺構面大溝 ・堤発見サヌカイト剥片	57
図 35	2 区第 6 遺構面出土遺物	60
図 36	2 A・2 B 区第 6 遺構面	61
図 37	2 区第 7 遺構面他出土遺物	62
図 38	2 A・2 B 区第 7 遺構面	63
図 39	2 A・2 B 区第 0 遺構面	65
図 40	南北溝出土近世遺物(1)	66
図 41	南北溝出土近世遺物(2)	67
図 42	南北溝出土近世遺物(3)	68
図 43	志紀遺跡調査区の配置	75
図 44	1 区東区東壁の花粉ダイアグラム	76
図 45	1 区東区南壁の花粉ダイアグラム	77
図 46	1 区西区西壁の花粉ダイアグラム	78
図 47	1 区・2 区遺構変遷図	80

## 第 3 部 3 A・3 B 区の調査成果

図 48	3 区地区割り	97
図 49	3 A 区土層断面	100

図50	3 B区土層断面	101	図88	3 B区第 6 面出土遺物	138
図51	3 B区第 0 層出土遺物(1)	103	図89	3 B区第 6 層出土遺物	139
図52	3 B区第 0 層出土遺物(2)	104	図90	3 A区第 6 層最下部出土遺物	140
図53	3 A区第 0 層最下部出土遺物(1)	105	図91	3 B区第 6 層最下部出土遺物	140
図54	3 A区第 0 層最下部出土遺物(2)	106	図92	3 A・3 B区第 7 面	141
図55	3 B区第 0 層最下部出土遺物	107	図93	3 A区大畦畔の重なり	142
図56	3 A・3 B区第 1 面	108	図94	3 B区自然流路B07001-OR	144
図57	3 A区第 1 面出土遺物	111	図95	3 A区第 7 面出土遺物	145
図58	3 B区第 1 面出土遺物	111	図96	3 B区第 7 面出土遺物	146
図59	3 A区第 1 層出土遺物	112	図97	3 A区第 7 層出土遺物	147
図60	3 B区第 1 層出土遺物	113	図98	3 B区第 7 層出土遺物	147
図61	3 A区第 1 層最下部出土遺物	114	図99	3 B区第 7 層最下部出土遺物	148
図62	3 B区第 1 層最下部出土遺物	114	図100	3 A・3 B区第 8 面	149
図63	3 A・3 B区第 2 面	115	図101	3 B区第 8 面導水施設B08005・08006-OX	152
図64	3 A区第 2 面出土遺物	118	図102	3 B区第 8 面出土遺物(1)	153
図65	3 A区第 2 層出土遺物(1)	119	図103	3 B区第 8 面出土遺物(2)	154
図66	3 A区第 2 層出土遺物(2)	120	図104	3 A区第 8 層出土遺物	155
図67	3 A区第 2 層最下部出土遺物	120	図105	3 B区第 8 層出土遺物	155
図68	3 B区第 2 層最下部出土遺物	120	図106	3 B区第 8 層最下部出土遺物	155
図69	3 A区第 3 面出土遺物	121	図107	3 A・3 B区第 9 面	157
図70	3 B区第 3 面出土遺物	121	図108	3 A区第 9 面出土遺物	159
図71	3 A・3 B区第 3 面	122	図109	3 B区第 9 面出土遺物	159
図72	3 A区第 3 層出土遺物	125	図110	3 B区第 9 層出土遺物	160
図73	3 B区第 3 層出土遺物	126	図111	3 A区第 9 層最下部出土遺物	160
図74	3 B区第 3 層最下部出土遺物	126	図112	3 B区第 9 層最下部出土遺物	160
図75	3 A・3 B区第 4 面	127	図113	3 A・3 B区第10面	161
図76	3 B区第 4 面出土遺物	128	図114	3 B区第10面遺構断面	164
図77	3 A区第 4 層出土遺物	130	図115	3 A区第10面出土遺物	164
図78	3 B区第 4 層出土遺物	130	図116	3 A区第10層出土遺物	164
図79	3 A区第 4 層最下部出土遺物	131	図117	3 B区第10層最下部出土遺物(1)	164
図80	3 B区第 4 層最下部出土遺物	131	図118	3 B区第10層最下部出土遺物(2)	165
図81	3 A・3 B区第 5 面	133	図119	3 A・3 B区第11面	166
図82	3 A区第 5 面出土遺物	134	図120	3 A区第11面出土遺物	169
図83	3 B区第 5 面出土遺物	135	図121	3 B区第11面出土遺物	170
図84	3 A区第 5 層出土遺物	136	図122	3 A区第11面しがらみA11103-OX	171
図85	3 B区第 5 層出土遺物	137	図123	3 A区第11面しがらみA11103-OX	172
図86	3 B区第 5 層最下部出土遺物	137		周辺等高線図	
図87	3 B区第 6 面	138	図124	3 A区第11層出土遺物	173

図125	3 B区第11層出土遺物(1)	173	図163	3 A区側溝ほか出土遺物	207
図126	3 B区第11層出土遺物(2)	174	図164	3 B区側溝ほか出土遺物	208
図127	3 B区第11層出土遺物(3)	175	図165	3 B区西壁の土層と試料採取位置	222
図128	3 A区第11層最下部出土遺物	175	図166	3 B区西壁における種実組成図	223
図129	3 A・3 B区第12面	176	図167	3 B区西壁の植物珪酸体分析結果	224
図130	3 A区第12面出土遺物	177	図168	3 B区西壁における花粉組成図	225
図131	3 B区第12面出土遺物	177	図169	3 B区西壁における樹木花粉組成図	226
図132	3 A区第12層出土遺物	180	図170	3 B区における植生・環境・農耕の変遷	227
図133	3 B区第12層出土遺物	180	図171	志紀遺跡調査区位置図	233
図134	3 A区第12層最下部出土遺物	181	図172	3 A区花粉ダイアグラム	235
図135	3 B区第12層最下部出土遺物	181	図173	3 A区珪藻ダイアグラム	236
図136	3 A・3 B区第13面	182	図174	3 A区珪藻総合ダイアグラム	237
図137	3 A区第13面出土遺物(1)	183	図175	木取り模式図	242
図138	3 A区第13面出土遺物(2)	184	図176	電子線マイクロアナライザーによる土器片 (試料No. 1)付着物を構成する元素のスペ クトル	247
図139	3 A区第13面出土遺物(3)	185	図177	電子線マイクロアナライザーによる土器片 (試料No. 2)付着物を構成する元素のスペ クトル	247
図140	3 B区第13面出土遺物	186	図178	電子線マイクロアナライザーによる土器片 (試料No. 3)付着物を構成する元素のスペ クトル	248
図141	3 A区第13面導水管A13071-OX	186	図179	電子線マイクロアナライザーによる土器片 (試料No. 4)付着物を構成する元素のスペ クトル	248
図142	3 A区第13層出土遺物	188	図180	電子線マイクロアナライザーによる土器片 (試料No. 5)付着物を構成する元素のスペ クトル	249
図143	3 B区第13層出土遺物(1)	189	図181	電子線マイクロアナライザーによる土器片 (試料No. 6)付着物を構成する元素のスペ クトル	249
図144	3 B区第13層出土遺物(2)	190	図182	電子線マイクロアナライザーによる土器片 (試料No. 7)付着物を構成する元素のスペ クトル	250
図145	3 A区第13層最下部出土遺物	190	図183	フーリエ変換型赤外分光光度計による土器 片(試料No. 1)付着物の吸収スペクトル (KBr法)	250
図146	3 B区第13層最下部出土遺物	190			
図147	3 A・3 B区第14面	191			
図148	3 A区第14面出土遺物	193			
図149	3 B区第14面出土遺物	193			
図150	3 A区第14層出土遺物	194			
図151	3 B区第14層出土遺物	195			
図152	3 A区第15面出土遺物	196			
図153	3 A・3 B区第15面	197			
図154	3 B区第15面出土遺物(1)	198			
図155	3 B区第15面出土遺物(2)	199			
図156	3 B区第15層出土遺物	201			
図157	3 B区第16面出土遺物	201			
図158	3 A・3 B区第16面	202			
図159	3 B区第16層出土遺物	203			
図160	3 A・3 B区第17面	204			
図161	3 B区第17面出土遺物	205			
図162	3 B区第17面付近出土遺物	206			

図184	フーリエ変換型赤外分光光度計による土器 片(試料No. 2)付着物の吸収スペクトル (KBr法)	251	<b>第4部 5区の調査成果</b>		
			図198	5区地区割り	297
図185	フーリエ変換型赤外分光光度計による土器 片(試料No. 3)付着物の吸収スペクトル (KBr法)	251	図199	5区南壁土層断面	299
図186	フーリエ変換型赤外分光光度計による土器 片(試料No. 4)付着物の吸収スペクトル (KBr法)	252	図200	5区第0層出土土器	300
図187	フーリエ変換型赤外分光光度計による土器 片(試料No. 5)付着物の吸収スペクトル (KBr法)	252	図201	5区第1面	301
図188	フーリエ変換型赤外分光光度計による土器 片(試料No. 6)付着物の吸収スペクトル (KBr法)	253	図202	5区第2面	303
図189	フーリエ変換型赤外分光光度計による土器 片(試料No. 7)付着物の吸収スペクトル (KBr法)	253	図203	5区第3面	304
図190	フーリエ変換型赤外分光光度計による 炭の吸収スペクトル(KBr法)	254	図204	5区第3層出土土器・石器	304
図191	電子線マイクロアナライザーによる石鏃 付着物を構成する元素のスペクトル	256	図205	5区第4面	305
図192	フーリエ変換型赤外分光光度計による 石鏃(No.3441)付着物の吸収スペクトル (KBr法)	257	図206	5区第4層出土土器	306
図193	フーリエ変換型赤外分光光度計による 石鏃(No.3441)付着物の吸収スペクトル (顕微反射法)	257	図207	5区第5面	307
図194	フーリエ変換型赤外分光光度計による 石鏃(No.3450)付着物の吸収スペクトル (顕微反射法)	258	図208	5区第5層出土土器・木器	308
図195	フーリエ変換型赤外分光光度計による 出土漆の吸収スペクトル(顕微反射法)	258	図209	5区第6面	310
図196	鉄・鋤先の鉄中非金属介在物のコンピューター プログラムによる高速定性分析結果(1)	266	図210	5区第6面ピット69	311
図197	鉄・鋤先の鉄中非金属介在物のコンピューター プログラムによる高速定性分析結果(2)	267	図211	5区第6面ピット69・溝87出土土器	311
			図212	5区第6面遺構の整理①～③案	312
			図213	5区第6層出土土器・木器(1)	314
			図214	5区第6層出土木器(2)	315
			図215	5区第7面	316
			図216	5区第7層出土土器	316
			図217	5区第8面	317
			図218	5区第8層出土土器	318
			図219	5区第9面	318
			図220	5区第9層出土石器(1)	319
			図221	5区第9層出土石器(2)	320
			図222	5区第10面	321
			図223	5区第10面溝92断面	322
			図224	5区第10面溝93断面	322
			図225	5区第10面溝92出土土器・石器(1)	322
			図226	5区第10面溝92出土石器(2)	323
			図227	5区第10層出土土器・石器(1)	325
			図228	5区第10層出土石器(2)	326
			図229	5区第11面	328
			図230	5区第11面I～III段階	329
			図231	5区第11面ピット232出土石器	331
			図232	5区第11層出土土器	332
			図233	5区第12面	333
			図234	5区第13面	335

図235	5区第14面	335	図264	6B区井戸2 墨書井戸枠	396
図236	5区第15面	335	図265	6B区井戸2	397
図237	5区第16面	336	図266	6B区第1層出土土器	398
図238	5区第16層出土土器・石器	337	図267	6B区第2面	399
図239	5区試料採取位置	348	図268	6B区第2面坪境20部分調査状況(左)と推定模式図	400
図240	5区南壁断面西における花粉ダイアグラム	349	図269	6B区第1面・第2面小溝合成図	401
図241	5区南壁断面東における花粉ダイアグラム	350	図270	6B区第2層出土遺物	402
図242	5区坪境溝における花粉ダイアグラム	350	図271	6B区第3面	403
図243	5区におけるプラント・オパール分析結果	351	図272	6B区第3面遺構推定図	404
図244	5区における局地花粉帯と推定される植生と環境	351	図273	6B区第3層出土遺物	405
図245	従来の花粉分析結果の比較と志紀遺跡5区の局地花粉帯の対比	351	図274	6B区第4面	407
<b>第5部 6A区の調査成果</b>			図275	6B区第4層出土遺物	409
図246	6A区地区割り	365	図276	6B区第5面	411
図247	6A区北壁断面模式	367	図277	6B区第5面溝47・48・49出土遺物	413
図248	6A区東壁断面模式	367	図278	6B区土坑53	414
図249	6A区第1・2・5面	369	図279	6B区第5層出土土器	415
図250	6A区第6・9・10・11面	373	図280	6B区第6面	415
図251	6A区出土土器・木器	374	図281	6B区第6面溝59出土遺物	416
図252	6A区第12・15・16面	376	図282	6B区第6層出土土器・木器	417
図253	6A区第16面ピット9	376	図283	5区・6区遺構合成図(奈良時代)	418
図254	6A区出土石器	377	図284	6B区第7面	419
図255	主要花粉化石群集	381	図285	6B区第7層出土土器・石器	420
図256	植物珪酸体群集と組織片の産状	381	図286	6B区杭分布状況と打ち込み深度模式図	422
<b>第6部 6B区の調査成果</b>			図287	6B区第6面時坪境交差点の杭列(第5面畦畔合成)	423
図257	6B区地区割り	385	図288	6B区図287杭群	424
図258	6B区南壁断面模式	388	図289	6B区杭群出土杭(1)	425
図259	6B区東壁断面模式	388	図290	6B区杭群出土杭(2)	426
図260	6B区第0層出土遺物	391	図291	6B区石出土状況と重さ模式図	427
図261	6B区第1面	392-393	図292	6B区第8面	428
図262	6B区第1面遺構推定図	394	図293	6B区溝66断面	429
図263	5区・6区遺構合成図(鎌倉時代)	395	図294	6B区第8層出土土器・石器	429
			図295	5区・6区遺構合成図(古墳時代)	430
			図296	6B区第9面	431
			図297	6B区第9層出土土器・石器(1)	432
			図298	6B区第9層出土石器(2)	433
			図299	6B区第9層出土石器(3)	434

図300	6 B区第10面	436	図335	6 B区の主要花粉化石群集の層位分布	465
図301	6 B区第9層下面土坑86・87出土土器	437	図336	植物珪酸体群集と組織片の産状	467
図302	6 B区土坑86断面	437			
図303	6 B区第10面出土土器	437	<b>第7部 6 C区の調査成果</b>		
図304	6 B区溝76断面	438	図337	6 C区地区割り	485
図305	6 B区溝77断面	438	図338	6 C区土層断面	488-489
図306	6 B区第10層ブロック土出土土器(1)	439	図339	6 C区第1面	492-493
図307	6 B区第10層ブロック土出土土器(2)	440	図340	6 C区第2面	495
図308	6 B区第10層ブロック土出土サヌカイ ト剥片集石状況	440	図341	6 C区第3面	496
図309	6 B区第10層ブロック土出土集石サヌ カイト剥片(1)	441	図342	6 C区第3層出土土器	497
図310	6 B区第10層ブロック土出土集石サヌ カイト剥片(2)	442	図343	6 C区第4面	497
図311	6 B区溝101断面	444	図344	6 C区第1～5面坪境断面	498
図312	6 B区溝102断面	444	図345	6 C区第4層出土土器・木器	499
図313	6 B区溝103断面	445	図346	6 C区第4層出土土器	500
図314	6 B区溝104断面	445	図347	6 C区第5面溝32・42出土土器	501
図315	6 B区土坑107断面	446	図348	6 C区第5面	502
図316	6 B区溝102出土土器・石器	447	図349	6 C区第5～8層断面模式	504
図317	6 B区溝103出土土器・石器・木器	448	図350	6 C区第5～7層の土器出土点数	504
図318	6 B区溝104出土土器	449	図351	6 C区第5層出土土器(1)・木器	505
図319	6 B区第10層出土土器	450	図352	6 C区第5層出土土器(2)	506
図320	6 B区第10層出土土器(1)	451	図353	6 C区第5層出土土器	507
図321	6 B区第10層出土土器(2)	452	図354	6 C区第6面	508
図322	6 B区第10層出土土器(3)	453	図355	6 C区第6面土器出土状況	509
図323	5区・6区遺構合成図(弥生時代)	454	図356	6 C区第6面出土土器	509
図324	6 B区第11面	455	図357	6 C区第6面遺構断面	510
図325	6 B区第11面出土土器	456	図358	6 C区第6面溝43出土土器(1)	511
図326	6 B区大畦畔出土弥生土器出土状況	456	図359	6 C区第6面溝43出土土器(2)	512
図327	6 B区第11層出土土器・石器	457	図360	6 C区第6面溝51土器出土状況	513
図328	6 B区第11層出土土器	458	図361	6 C区第6面溝46・51出土土器・石器	514
図329	6 B区第12面	459	図362	6 C区第6層出土土器・石器	515
図330	6 B区溝119・120断面	459	図363	6 C区第7面	516-517
図331	6 B区第13面	460	図364	6 C区第7面溝57出土土器	517
図332	6 B区第14面	460	図365	6 C区第7層出土土器・石器	518
図333	6 B区床付面深掘り部分	461	図366	6 C区第8面	519
図334	6 B区西側深掘り部分土層断面	461	図367	6 C区第8層・第9面川68出土遺物 グリッド割り	520
			図368	6 C区第8層出土土器	522
			図369	6 C区第8層出土土器(1)	523



図370	6 C区第 8 層出土石器(2)	524	図406	志紀・田井中・老原・木の本遺跡 調査区一覧	576
図371	6 C区第 8 層出土石器(3)	525	図407	志紀遺跡主要調査区層位関係想定図(2)	577
図372	6 C区第 8 層出土石器(4)	526	図408	平安時代末～鎌倉時代初頭面 合成図	578
図373	6 C区第 8 層中ピット67	527	図409	古墳時代後期面 合成図	580
図374	6 C区第 8 層中ピット67出土土器	527	図410	弥生時代前期末～中期初頭面 合成図	582
図375	6 C区第 9 面	528-529	図411	弥生時代前期面 合成図	583
図376	6 C区第 9 面川68東岸杭群	529	図412	老原遺跡主要調査区層位関係想定図	584
図377	6 C区第 9 面川68東岸杭群の杭	530	図413	木の本遺跡主要調査区層位関係想定図(1)	586
図378	6 C区第 9 面川68断面	531	図414	木の本遺跡主要調査区層位関係想定図(2)	586
図379	6 C区第 9 面川68出土土器(1)	533	図415	田井中遺跡東側主要調査区層位関係 想定図	588
図380	6 C区第 9 面川68出土土器(2)	534	図416	縄文時代晩期～弥生時代	591
図381	6 C区第 9 面川68出土石器	535	図417	古墳時代	592
図382	6 C区第 9 面川68出土木器(1)	536	図418	古代(飛鳥・奈良・平安時代前半)	593
図383	6 C区第 9 面川68出土木器(2)	537	図419	平安時代後半～鎌倉時代前半	593
図384	6 C区第 9 面川68肩部出土土器	538	図420	志紀遺跡周辺の地形分類	596
図385	6 C区第 9 面川68肩部出土石器	539	図421	調査地点位置図	597
図386	6 C区第 9 面遺構断面	541	図422	志紀遺跡Locs. A～Cの堆積柱状図	598
図387	6 C区第 9 面遺構出土土器	542	図423	志紀遺跡 6 C区南壁西半部(上)および 西壁(下)断面図	599
図388	6 C区第 9 面溝77出土石器	543	図424	志紀遺跡・田井中遺跡における既調査 地点の柱状図	600
図389	6 C区第 9 面遺構出土石器	544	図425	志紀遺跡・田井中遺跡の縄文時代晩期 ～弥生時代前期における堆積環境の変 化過程と集落の配置を示す模式図	602
図390	6 C区第 9 面溝74杭群	545	図426	調査地点の位置	605
図391	6 C区第 9 面溝74杭群の杭	546	図427	6 B区の主要花粉化石と植物珪酸体組成	606
図392	6 C区第 9 層出土土器・石器	547	図428	志紀遺跡および田井中遺跡の層序と 主要植物化石の産状	607
図393	6 C区第10面	548	図429	調査断面位置図	614
図394	6 C区第10面落込み90断面	549	図430	6 B区溝102北端東部の断面図	615
図395	6 C区第10面杭群	549	図431	6 B区溝102南端の断面図	615
図396	6 C区第10面杭群の杭	549	図432	6 B区溝103北端東部の断面図	616
図397	6 C区第10層出土石器	549	図433	6 B区溝103南端の断面図	616
図398	6 C区第11面	550	図434	6 C区溝78中央部の断面図	617
図399	6 C区第11層出土土器・石器	550	図435	溝102の西側における砂脈の平面図	618
図400	6 C区第12面	551	図436	砂脈の断面図(図435の北東縁)	619
図401	6 C区第13面	551			
図402	6 C区包含層出土土器・石器	553			
図403	6 C区の主要花粉化石群集の層位分布	556			
図404	6 C区の植物珪酸体群集と組織片の産状	556			
<b>第 8 部 考察</b>					
図405	志紀遺跡主要調査区層位関係想定図(1)	576			

図437	液状化した砂層の粒径加積曲線	619	図451	打点位置の違いによる剥片形状の変化	667
図438	南海地震と東海地震の発生時期	621		模式図	
図439	昆虫化石群の抽出から古環境の復元まで	628	図452	①・②グループの剥片	670
図440	昆虫化石群試料採集地点	628	図453	③～⑤グループの剥片	671
図441	弥生前期水田発見土器	628	図454	製品から見た製作工程復元模式図	673
図442	志紀遺跡出土モモ核の体積ヒストグラム	649	図455	5・6区サヌカイト製品組成率	678
図443	①段階における初期水田関係遺構の分布状況	653	図456	5・6区石器出土状況	678
図444	②段階における初期水田関係遺構の分布状況	654	図457	打製石器製作模式図	681
図445	③段階における初期水田関係遺構の分布状況	655	図458	5・6区出土剥片の長幅グラフ	682
図446	近畿における弥生前期水田関連資料	658	図459	1段階の剥片・石核・スクレイパー	683
図447	池島・福万寺遺跡の弥生時代水田	660	図460	2・3段階の製品・未製品・剥片	684
図448	第5遺構面直下の剥片散布域	664	図461	主な調査区と現行の条里地割	690
図449	剥片の型式分類	665	図462	第1段階の条里地割	692
図450	剥片群の型式別数量比	666	図463	第2段階の条里地割	695
			図464	第3段階の条里地割	697
			図465	第4段階の条里地割	700

# 目 次

表 1	志紀遺跡・田井中遺跡発掘調査一覧	3	表36	5区第11面 I 段階のピット一覧	329
表 2	志紀遺跡各調査区面・層対応関係(試案)	19	表37	5区第11面 II～III段階のピット一覧	330
表 3	2区第5遺構面他発見サヌカイト 観察表(1)～(3)	58・59	表38	5区第12面のピット一覧	332
表 4	花粉帯の比較	75	表39	5区における花粉分析結果	347
表 5	3A・3B区第1面畦畔一覧	109	表40	5区のプラント・オパール分析結果	348
表 6	3A・3B区第2面畦畔一覧	117	表41	6A区の花粉分析結果	380
表 7	3A・3B区第3面畦畔一覧	123	表42	6A区の植物珪酸体分析結果	380
表 8	3A・3B区第5面水田一覧	134	表43	6B区第1面畦畔計測表	398
表 9	3B区第6面水田一覧	139	表44	6B区第2面畦畔計測表	402
表10	3A区第7面水田一覧	143	表45	6B区出土サヌカイト剥片計測表	462
表11	3B区第8面水田一覧	150	表46	6B区の花粉分析結果	464
表12	3A・3B区第9面水田一覧	158	表47	6B区の植物珪酸体分析結果	466
表13	3A・3B区第10面水田一覧	162	表48	6B区放射性炭素年代測定および 暦年代較正の結果	471
表14	3A・3B区第11面水田一覧(1)	168	表49	6C区の花粉分析結果	555
表15	3A・3B区第11面水田一覧(2)	169	表50	6C区の植物珪酸体分析結果	555
表16	3B区第11面ピット一覧	172	表51	老原・木の本遺跡発掘調査一覧	577
表17	3A・3B区第12面水田一覧	178	表52	老原遺跡主要調査区発掘調査成果 概要一覧	584
表18	3A・3B区第13面水田一覧	183	表53	木の本遺跡主要調査区発掘調査成果 概要一覧	587
表19	3A区第13面ピット一覧	187	表54	田井中遺跡主要調査区発掘調査成果 概要一覧	589
表20	3A・3B区第14面ピット一覧	193	表55	昆虫化石群の抽出地点の時期と遺構	626
表21	3A・3B区第15面ピット一覧	200	表56	昆虫化石の時期別一覧表(1)	633
表22	3B区における種実同定結果	228	表57	昆虫化石の時期別一覧表(2)	634
表23	3B区における出土種実同定結果	229	表58	動物遺体の同定表(1)・(2)	641・642
表24	3B区西壁の植物珪酸体分析結果	230	表59	ウマの出現頻度表	643
表25	3B区における花粉分析結果(1)	231	表60	ウマの上顎切歯および臼歯の計測値	643
表26	3B区における花粉分析結果(2)	232	表61	ウマの下顎臼歯の計測値	644
表27	<sup>14</sup> C年代測定一覧	234	表62	ウマの椎骨の計測値	644
表28	花粉帯の比較	238	表63	ウマの橈骨の計測値	644
表29	樹種鑑定一覧(1)	243	表64	植物遺体同定結果一覧表	648
表30	樹種鑑定一覧(2)	244	表65	志紀遺跡出土モモ核計測値一覧	649
表31	各試料のE PMA、F T-I Rによる 分析結果	246	表66	志紀遺跡における初期水田諸段階の 編年的位置	651
表32	5区第5面のピット一覧	306			
表33	5区第9層出土のサヌカイト剥片	319			
表34	5区第10面溝92出土のサヌカイト剥片	322			
表35	5区第10層出土のサヌカイト剥片	324			

## 挿入写真目次

写真1	鍬・鋤先のマクロ組織 (×20)	261	写真6	志紀遺跡6C区西壁断面	599
写真2	鍬・鋤先の顕微鏡組織(1)	262	写真7	砂脈の断面形態	619
写真3	鍬・鋤先の顕微鏡組織(2)	263	写真8	6B区西端における砂脈の形態	620
写真4	鍬・鋤先の鉄中非金属介在物特性 X線像と定量分析値(1)	264	写真9	6B区東端における砂脈の平面形態	620
写真5	鍬・鋤先の鉄中非金属介在物特性 X線像と定量分析値(2)	265	写真10	現生昆虫の標本	628
			写真11	自然面・剝離面の質感と色調	668

## 写真図版目次

巻頭カラー図版1	北東上空からの志紀遺跡全景 (1994年)	西上空からの志紀遺跡全景 (2000年)
巻頭カラー図版2	3A・3B区第11面の小区画水田 (西から)	3A区導水管A13071-OX (北から)
	2区弥生時代前期のモミ	

写真図版1	2A区遺構(1)	81
	a. 第1遺構面 (南から)    b. 第2遺構面 (南から)	
	c. 第3遺構面 (南から)    d. 第4遺構面 (南から)	
写真図版2	2A区遺構(2)	82
	a. 第5遺構面 (南から)    b. 第6遺構面 (南から)	
	c. 第7遺構面 (南から)	
写真図版3	2A区遺構(3)	83
	a. 第1遺構面 (東から)    b. 第1遺構面 (西から)    c. 第1遺構面細部 (南から)	
写真図版4	2A区遺構(4)	84
	a. 第2遺構面 (東から)    b. 第2遺構面 (西から)    c. 第2遺構面細部 (北から)	
写真図版5	2A区遺構(5)	85
	a. 第3遺構面 (東から)    b. 第3遺構面 (西から)    c. 第3遺構面細部 (南から)	
写真図版6	2A区遺構(6)	86
	a. 第4遺構面 (東から)    b. 第4遺構面 (西から)    c. 第4遺構面細部 (西から)	
写真図版7	2A区遺構(7)	87
	a. 第5遺構面 (東から)    b. 第5遺構面 (西から)    c. 第5遺構面細部 (南から)	
写真図版8	2A区遺構(8)	88
	a. 第6遺構面 (東から)    b. 第6遺構面 (西から)    c. 第6遺構面細部 (南から)	
	d. 第6遺構面細部 (南から)    e. 第6遺構面細部 (西から)	

写真図版9	2 A区遺構(9)	89
	a. 第7遺構面(東から) b. 第7遺構面(西から) c. 土層堆積状況(南東隅)	
写真図版10	2 B区遺構(1)	90
	a. 第1遺構面(北から) b. 第2遺構面(北から) c. 第2遺構面細部(東から)	
	d. 第3遺構面(北から) e. 第4遺構面(北から) f. 第5遺構面(北から)	
写真図版11	2 B区遺構(2)・2 A区遺構(10)	91
	a. 2 B区第6遺構面(北から) b. 2 B区第7遺構面(北から)	
	c. 2 A区第5遺構面大溝5-4(北から)	
	d. 2 A区第5遺構面大溝5-2・5-3(北から)	
	e. 2 A区第5遺構面大溝5-2・5-3(北から)	
	f. 2 A区第5遺構面大溝5-5(西から)	
写真図版12	2 A区遺構(11)	92
	a・b・d. 2 A区第5遺構面大溝5-2堆積状況(北から)	
	c. 2 A区第5遺構面大溝5-4堆積状況(北から)	
	e. 2 A区第5遺構面大溝内土坑堆積状況	
	f. 2 A区第5遺構面土坑5-1 g. 2 A区第5遺構面土坑5-2	
写真図版13	2区出土遺物(1)	93
	2区出土土器・木器(第3～6遺構面出土)	
写真図版14	2区出土遺物(2)	94
	近世陶磁器と瓦	
写真図版15	2区出土遺物(3)	95
	2区第5遺構面他出土剥片	
写真図版16	2区出土遺物(4)	96
	2区第5～7遺構面出土石器	
写真図版17	3区遺構(1)	269
	3 A区第1面(東から) 3 B区第1面(西から) 3 B区第1面小区画水田(北から)	
写真図版18	3区遺構(2)	270
	3 A区第2面(西から) 3 A区第2面(北から) 3 B区第2面(東から)	
写真図版19	3区遺構(3)	271
	3 A区第3面(西から) 3 B区第3面(西から) 3 B区第3面(南から)	
写真図版20	3区遺構(4)	272
	3 A区第4面(西から) 3 B区第4面(西から)	
	3 B区第4面田下駄(3214～3220)出土状況(北西から)	
写真図版21	3区遺構(5)	273
	3 A区第5面(西から) 3 B区第5面(西から) 3 B区第6面(西から)	

写真図版22	3区遺構(6) 3A区第7面(西から) 3B区第7面(西から) 3B区第7面鉄製鋤・鍬先(3320:手前)出土状況(西から)	274
写真図版23	3区遺構(7) 3A区第8面(東から) 3B区第8面(東から) 3B区第8面導水施設B08005・08006-OX(南から)	275
写真図版24	3区遺構(8) 3A区第9面(西から) 3A区第9面(東から) 3B区第9面(東から)	276
写真図版25	3区遺構(9) 3A区第10面(西から) 3B区第9面(西から) 3B区第10面(東から)	277
写真図版26	3区遺構(10) 3A区第11面(西から) 3A区第11面しがらみA11103-OX(東から) 3B区第11面(西から)	278
写真図版27	3区遺構(11) 3A区第12面(東から) 3B区第12面(西から) 3B区第12面(南から)	279
写真図版28	3区遺構(12) 3A区第13面(東から) 3A区第13面導水管A13071-OX(北から) 3B区第13面(西から)	280
写真図版29	3区遺構(13) 3A区第14面(西から) 3A区第14面(北から) 3B区第14面(東から)	281
写真図版30	3区遺構(14) 3A区第15面(東から) 3A区第15面ピットA15007~15011-OP(掘立柱建物か)(南から) 3B区第15面(東から)	282
写真図版31	3区遺構(15) 3A区第16面(西から) 3B区第16面(西から) 3B区第17面(北東から)	283
写真図版32	3区出土遺物(1) 土器①	284
写真図版33	3区出土遺物(2) 土器②	285
写真図版34	3区出土遺物(3) 土器③	286
写真図版35	3区出土遺物(4) 土器④・⑤	287
写真図版36	3区出土遺物(5) 土器⑥・⑦	288
写真図版37	3区出土遺物(6) 土器⑧・⑨	289

写真図版38	3区出土遺物(7) 瓦①・②	290
写真図版39	3区出土遺物(8) 土製品・金属製品①・②	291
写真図版40	3区出土遺物(9) 石製品①・②	292
写真図版41	3区出土遺物(10) 石製品③・④サヌカイト(1)	293
写真図版42	3区出土遺物(11) 石製品⑤サヌカイト(2)・⑥サヌカイト(3)	294
写真図版43	3区出土遺物(12) 木製品①	295
写真図版44	3区出土遺物(13) 木製品②	296
写真図版45	5区遺構(1) 第1面(西から) 第1面(東から) 第2面(西から) 第2面(東から) 第3面(西から) 第3面(北から)	355
写真図版46	5区遺構(2) 第4面(東から) 第4面西部(北東から) 第5面(東から) 第5面西部(北から) 第6面(西から) 第6面(東から)	356
写真図版47	5区遺構(3) 第6面ピット69周辺(北から) 第6面ピット69(北から) 第7面西部(西から) 第7面(東から) 第8面(西から) 第8面(東から)	357
写真図版48	5区遺構(4) 第9面(西から) 第9面(東から) 第10面(西から) 第10面(東から) 第10面溝92(南から) 第10面溝92断面(南から)	358
写真図版49	5区遺構(5) 第10面溝93(南から) 第10面溝93断面(南から) 第11面(西から) 第11面(東から) 第12面(西から) 第12面(東から)	359
写真図版50	5区遺構(6) 第13面(西から) 第13面(東から) 第14面(西から) 第14面(東から) 第15面(西から) 第15面(東から) 第16面(西から) 第16面(東から)	360
写真図版51	5区遺物(1) 第3層出土砥石 第6面ピット69出土土師器 第6層出土土器	361
写真図版52	5区遺物(2) 第9層出土サヌカイト剥片	362

写真図版53	5区遺物(3) 第10層出土サヌカイト剥片	363
写真図版54	5区遺物(4) 第10層出土突帯文土器 第10面溝92出土縄文土器 第11面ピット232出土石鏃 第16層出土土器	364
写真図版55	6区全景 全景 [手前：6B区第3面] (北西から) 全景 [手前：6C区第9面] (南東から)	383
写真図版56	6A区遺構・遺物 第5面(北から) 第6面(北から) 第9面(北から) 第15面(北から) 出土遺物	384
写真図版57	6B区花粉分析	469
写真図版58	6B区植物珪酸体	470
写真図版59	6B区遺構(1) 第1面(東から) 第1面(西から) 第2面(東から) 第2面(西から) 第3面(東から) 第4面(東から)	475
写真図版60	6B区遺構(2) 第4面(西から) 第5面(東から) 第5面(西から) 第5面坪境交差点(南から) 第5面畦畔下土坑(南東から) 第6面(東から) 第7面(南東から) 第8面(南東から)	476
写真図版61	6B区遺構(3) 第9面(南東から) 土坑86(南東から) 第10面(南東から) 第10面(西から) 溝76断面(北から) 溝77断面(北西から) 溝101中央断面(北西から) 溝102北断面(南東から) 溝103北断面(南東から) 溝104南断面(北から)	477
写真図版62	6B区遺構(4) サヌカイト集石(西から) 土坑107(南西から) 第11面(南東から) 第11面(東から) 第11面畦畔上出土土器(西から) 第12面(西から) 第13面(東から) 第14面(東から)	478
写真図版63	6B区遺物(1) 第2層出土土器 第4層出土遺物 第5面溝48出土土器 第5面溝49出土銭貨 第6面溝59出土土器 第6層出土土器 第7層出土遺物	479
写真図版64	6B区遺物(2) 第9層出土石器 第9層下面土坑85・86出土土器	480
写真図版65	6B区遺物(3) 第10面出土石器 溝103出土石器 第10層ブロック土集石サヌカイト	481
写真図版66	6B区遺物(4) 第10層ブロック土出土石器	482



写真図版67	6 B区遺物(5) 第10層出土土器 第10層出土石器	483
写真図版68	6 B区遺物(6) 第11面出土土器 第11層出土土器	484
写真図版69	6 C区遺構(1) 第1面(西から) 第1面(東から) 第2面(東から) 第2面坪境(南から) 第3面(西から) 第3面(東から)	559
写真図版70	6 C区遺構(2) 第4面(西から) 第4面(東から) 第5面(西から) 第5面(東から) 第6面(西から) 第6面(南東から) 第6面溝群(北から)	560
写真図版71	6 C区遺構(3) 第7面(東から) 第7面(西から) 第7面(南東から) 第8面(東から) 第8面(西から) 第8面(南東から)	561
写真図版72	6 C区遺構(4) 第9面(西から) 第9面(東から) 第9面(南東から) 第9面ピット93・94(南から) 第9面川68杭群(北西から) 第9面川68杭群掘削状況(北から)	562
写真図版73	6 C区遺構(5) 第9面溝72断面(南東から) 第9面溝77断面(南東から) 第9面溝78断面(南東から) 第9面溝79断面(南東から) 第10面(東から) 第11面(東から) 第12面(南から) 第13面(東から)	563
写真図版74	6 C区土器(1) 第4層出土土器 第5面溝32出土土器 第5層出土土器(1)	564
写真図版75	6 C区土器(2) 第5層出土土器(2)	565
写真図版76	6 C区土器(3) 第6面溝43出土土器(1)	566
写真図版77	6 C区土器(4) 第6面溝43出土土器(2)	567
写真図版78	6 C区土器(5) 第6面溝43出土土器(3) 第6面溝51出土土器 第6面溝46出土土器	568
写真図版79	6 C区土器(6) 第8層ピット67出土土器 第8層出土土器	569
写真図版80	6 C区土器(7) 第9面川68肩部出土土器 第9面川68流路部出土土器 第11層出土土器	570
写真図版81	6 C区石器(1) 第8層出土石器	571

写真図版82	6 C区石器(2) 第9面溝77出土石器	572
写真図版83	6 C区石器(3) 出土打製石器 6605:第7面溝51 6736・6737:第9面川68肩部 6790:第9層以下 6791:第8層以下 出土石庖丁 6599・6600:第6面溝51 6637:第8層 6780:第9層	573
写真図版84	6 C区木器 第9面川68出土木製人形	574
写真図版85	溝土層断面(1) 1. 6 B区溝102北端東部の断面形態 2. 6 B区溝102南端西部の断面形態 3. 6 C区溝78中央部の断面形態	623
写真図版86	溝土層断面(2) 1. 6 B区溝103北端東部の断面形態 2. 6 B区溝103南端西部の断面形態 (遠景) 3. 6 B区溝103南端西部の断面形態 (近景)	624
写真図版87	昆虫化石の顕微鏡写真(1)	635
写真図版88	昆虫化石の顕微鏡写真(2)	636
写真図版89	昆虫化石の顕微鏡写真(3)	637
写真図版90	昆虫化石の顕微鏡写真(4)	638
写真図版91	6 B区出土動物骨・歯	645
写真図版92	6 B区出土動物骨	646



## 第1部 はじめに

第1章	調査にいたる経緯と経過	1
第2章	位置と環境	4
第3章	調査の方法	8
第4章	各調査区の対応関係	10



# 第1部 はじめに

## 第1章 調査にいたる経緯と経過

### 既往の調査

志紀遺跡では、昭和30年代の建築である府営志紀住宅建て替え事業に先立ち、昭和57（1982）年大阪府教育委員会が試掘調査を行い、遺跡として周知された。以後、大阪府教育委員会、（財）八尾市文化財調査研究会、八尾市教育委員会、（財）大阪府埋蔵文化財協会、（財）大阪府文化財調査研究センターにより、府営住宅と公務員宿舎の建設や下水道工事などに伴う発掘調査が20数次にわたって行われてきた。

志紀遺跡では近代から弥生時代にまで遡る水田遺構と縄文時代の面などが検出されており、各時期の水田景観の変遷が明瞭に追える点で重要な遺跡である。これまでの調査成果では平安時代以降は条里地割に規制された整然とした条里型水田、それ以前は自然地形に沿った小区画水田が卓越することが明らかになっている。水田以外にも特筆すべき成果として、畿内第Ⅰ様式の弥生土器と突帯文土器の共伴（S20・23／図1・表1の調査地に対応する）、弥生時代前期のピット群（S17・20・23）や稲作害虫（S16）、弥生時代中期初頭の大溝群（S14）、弥生時代中期の稲株痕（S9）、古墳時代後期の大畦畔に埋め込まれた梯子（S10）の検出などが挙げられる。

ところで、遺跡の位置する八尾市域は、旧大和川の河道部以外の大部分が遺跡といえるほどその密度が高い。志紀遺跡付近も例外ではなく、特に南西に隣接する田井中遺跡とは不可分の関係にある。

田井中遺跡は、昭和50（1975）年に陸上自衛隊八尾駐屯地内の下水道工事の際に弥生土器などが出土したことから遺跡として周知された。その後、駐屯地関係の構造物の建て替えや平野川および八尾空港北濠の改修に伴い30次近い発掘調査が行われている。志紀遺跡が各時代を通じて基本的に水田域であるのに対し、田井中遺跡の方が概して同時期の遺構面が高いレベルにあることから、集落などを構成する種々の遺構と多量の遺物が検出されている。なかでも平野川・北濠地区（T7・9・10・12・17・18・24・27・28）では突帯文土器の時期から弥生時代中期初頭にかけて変遷する集落の木棺墓が、駐屯地西部（T13・14・15ほか）では弥生時代の住居跡や多量の土器群が検出され、該期の集落の中心部と考えられている。一方、駐屯地の東部（T11以東）では弥生時代前期の方形周溝墓なども存在（T20）するが、遺構や遺物の密度は比較的lowく集落の中心部とは異なった様相を呈する。このあたりから徐々に標高が低くなり生産域である志紀遺跡に続いている。

さらに、田井中遺跡を中心に志紀遺跡にかけては、八尾飛行場が太平洋戦争中（当時は大正飛行場）に陸軍航空隊の基地となっていたことから、それに関係する構築物や遺物も出土している。

### （財）大阪府埋蔵文化財協会の発掘調査

平成5（1993）年度から、（財）大阪府埋蔵文化財協会は、大阪府営志紀住宅建て替えに伴う志紀遺跡1区～3区の発掘調査を実施した。1区（S14）の発掘調査は平成5（1993）年度に実施され、報告書（例言4参照）が平成7（1995）年3月に刊行されている。2区（S16）と3区（S17）は平成6（1994）年度に調査され、本書で報告する。

### 阪神・淡路大震災

平成7(1995)年1月17日午前5時46分、淡路島北部の深さ14kmを震源とするマグニチュード7.2の阪神・淡路大震災が発生した。被災地の惨状は記憶に新しい。

八尾市周辺では震度4で被害は小さかった。しかし、志紀遺跡も震災と無縁ではなかった。

発掘調査中の志紀遺跡3区では、被災者用の仮設住宅を建てるために調査終了を急いだ。古い府営住宅を取り壊して更地となっていた5・6区調査予定地にも仮設住宅が建ち並び、数年間にわたって利用されることになった。最終的に仮設住宅から被災者が退去できたのは平成11(1999)年の春で、その年の6月から志紀遺跡5区の発掘調査を実施した。

### (財)大阪府文化財調査研究センターの発掘調査

平成7(1995)年4月、大阪府下の埋蔵文化財発掘調査を担当する2つの財団、(財)大阪府埋蔵文化財協会と(財)大阪府文化財センターが統合され、(財)大阪府文化財調査研究センターが発足した。

(財)大阪府文化財調査研究センターは、平成8(1996)年度に志紀遺跡4区(S20)を発掘調査し平成10(1998)年3月に報告書(例言4参照)を刊行した。5・6区も継続して発掘調査される見通しであったが、上記阪神・淡路大震災の影響で、5区(S23)の調査開始は平成11(1999)年6月まで延期された。平成12(2001)年度に行った志紀遺跡6区(S24)をもって、大阪府営志紀住宅建て替えに伴う当面の発掘調査を終了した。

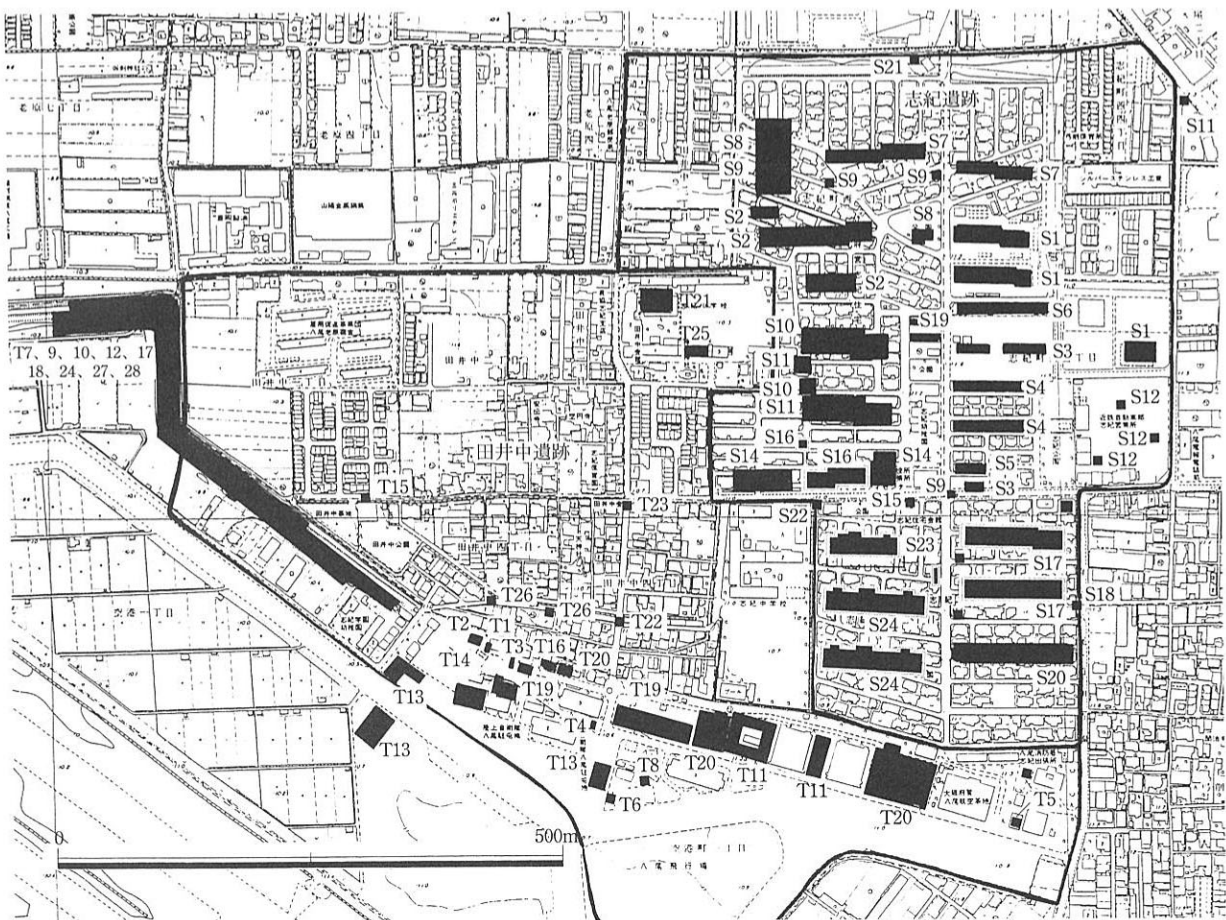


図1 調査地位置図

表1 志紀遺跡・田井中遺跡発掘調査一覧

志紀遺跡	調査年	報告書
S1	府教委1次	1983 未刊
S2	府教委2次	1985 『志紀遺跡発掘調査概要』 1986
S3	八文研田井中3次	1985 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(1994)』八尾市文化財調査研究会報告40 1994
S4	八文研田井中4次	1986 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(1994)』八尾市文化財調査研究会報告40 1994
S5	八文研田井中6次	1987 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(1994)』八尾市文化財調査研究会報告40 1994
S6	八文研田井中8次	1988 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(1994)』八尾市文化財調査研究会報告40 1994
S7	府教委3次	1988 「八尾市志紀遺跡の水田遺構」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第21回)資料』 1990
S8	府教委4次	1989 未刊
S9	府教委5次	1990 『志紀遺跡発掘調査概要IV』 1995
S10	府教委6次	1991 『志紀遺跡発掘調査概要II』 1992
S11	府教委7次	1991 『志紀遺跡発掘調査概要III』 1993
S12	八尾市教委91-319	1991 『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告25 1992
S13	八文研田井中9次	1988 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(1993)』八尾市文化財調査研究会報告39 1993
S14	府文協(その1)	1993 『志紀遺跡』大阪府埋蔵文化財協会報告書第91輯 1995
S15	八文研1次	1993 『八尾市文化財調査研究会報告42』 1994
S16	府文協(その2)	1994 『志紀遺跡(その2・3・5・6)』〔本書〕
S17	府文協(その3)	1994 『志紀遺跡(その2・3・5・6)』〔本書〕
S18	八文研2次	1995 『八尾市文化財調査研究会報告50』 1996
S19	府文セ(防)	1995 『田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次)』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集 1997
S20	府文セ(その4)	1996 『志紀遺跡(その4)』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第25集 1998
S21	八文研3次	1996 『八尾市文化財調査研究会報告60』 1998
S22	八文研5次	1998 『八尾市文化財調査研究会報告62』 1999
S23	府文セ(その5)	1999 『志紀遺跡(その2・3・5・6)』〔本書〕
S24	府文セ(その6)	2000 『志紀遺跡(その2・3・5・6)』〔本書〕
田井中遺跡	調査年	報告書
T1	八文研1次	1982 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告昭和63年度』八尾市文化財調査研究会報告17 1989
T2	八文研2次	1984 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告昭和63年度』八尾市文化財調査研究会報告17 1989
T3	八文研5次	1986 『田井中遺跡』八尾市文化財調査研究会報告46 1995
T4	八文研7次	1988 『田井中遺跡』八尾市文化財調査研究会報告46 1995
T5	八尾市教委63-279	1988 『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告20 1989
T6	八尾市教委90-29-1	1988 『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告23 1991
T7	府教委1次	1990 『田井中遺跡発掘調査概要I』 1991
T8	八尾市教委90-29-2	1990 『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告26 1992
T9	府教委2次	1990 『田井中遺跡発掘調査概要II』 1992
T10	府教委3次	1990 『田井中遺跡発掘調査概要III』 1993
T11	八文研10次	1988 『田井中遺跡』八尾市文化財調査研究会報告46 1995
T12	府教委4次	1990 『田井中遺跡発掘調査概要IV』 1994
T13	八文研11次	1993 『平成5年度八尾市文化財調査研究会事業報告』 1994
T14	八文研12次	1993 『平成5年度八尾市文化財調査研究会事業報告』 1994
T15	八文研13次	1993 『八尾市文化財調査研究会報告42』 1994
T16	府教委(その1)	1994 『田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次)』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集 1997
T17	府教委5次	1994 『田井中遺跡発掘調査概要V』 1996
T18	府教委6次	1995 『田井中遺跡発掘調査概要VI』 1997
T19	府文セ(その2)	1995 『田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次)』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集 1997
T20	府文セ(その3)	1996 『田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次)』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集 1997
T21	八文研14次	1996 『平成8年度八尾市文化財調査研究会事業報告』 1997
T22	八文研15次	1996 『八尾市文化財調査研究会報告60』 1998
T23	八文研16次	1997 『八尾市文化財調査研究会報告62』 1999
T24	府教委7次	1997 『田井中遺跡発掘調査概要VII』 1998
T25	八文研17次	1998 『平成10年度八尾市文化財調査研究会事業報告』 1999
T26	八文研18次	1998 『平成10年度八尾市文化財調査研究会事業報告』 1999
T27	府教委8次	1998 『田井中遺跡発掘調査概要VIII』 1999
T28	府教委9次	1999 『田井中遺跡発掘調査概要IX』 2000

調査機関 府教委：大阪府教育委員会 府文協：(財)大阪府埋蔵文化財協会 府文セ：(財)大阪府文化財調査研究センター  
八尾市教委：八尾市教育委員会 八文研：(財)八尾市文化財調査研究会



## 第2章 位置と環境

### 位置と地理的環境

志紀遺跡は、大阪府八尾市志紀町西1～4丁目・田井中2丁目に広がる。その中で、今回調査した志紀遺跡2・3・5・6区は、八尾市志紀町西1・2丁目に所在する。

遺跡の位置する河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川下流域に囲まれた低地で、旧大和川と総称される5本の河川（東から、<sup>おんぎ</sup>恩智川、<sup>たまぐし</sup>玉串川、<sup>くすね</sup>楠根川、<sup>ながせ</sup>長瀬川、<sup>ひらの</sup>平野川）や生駒山地に源をもつ小河川により形成された。縄文時代後・晩期までは、南から半島状に突き出た、現在の<sup>おんぎ</sup>上町台地の東側に河内潟がおだやかに広がっていた。弥生時代には、湖水準の低下で上町台地先



図2 志紀・田井中遺跡周辺の主要遺跡分布

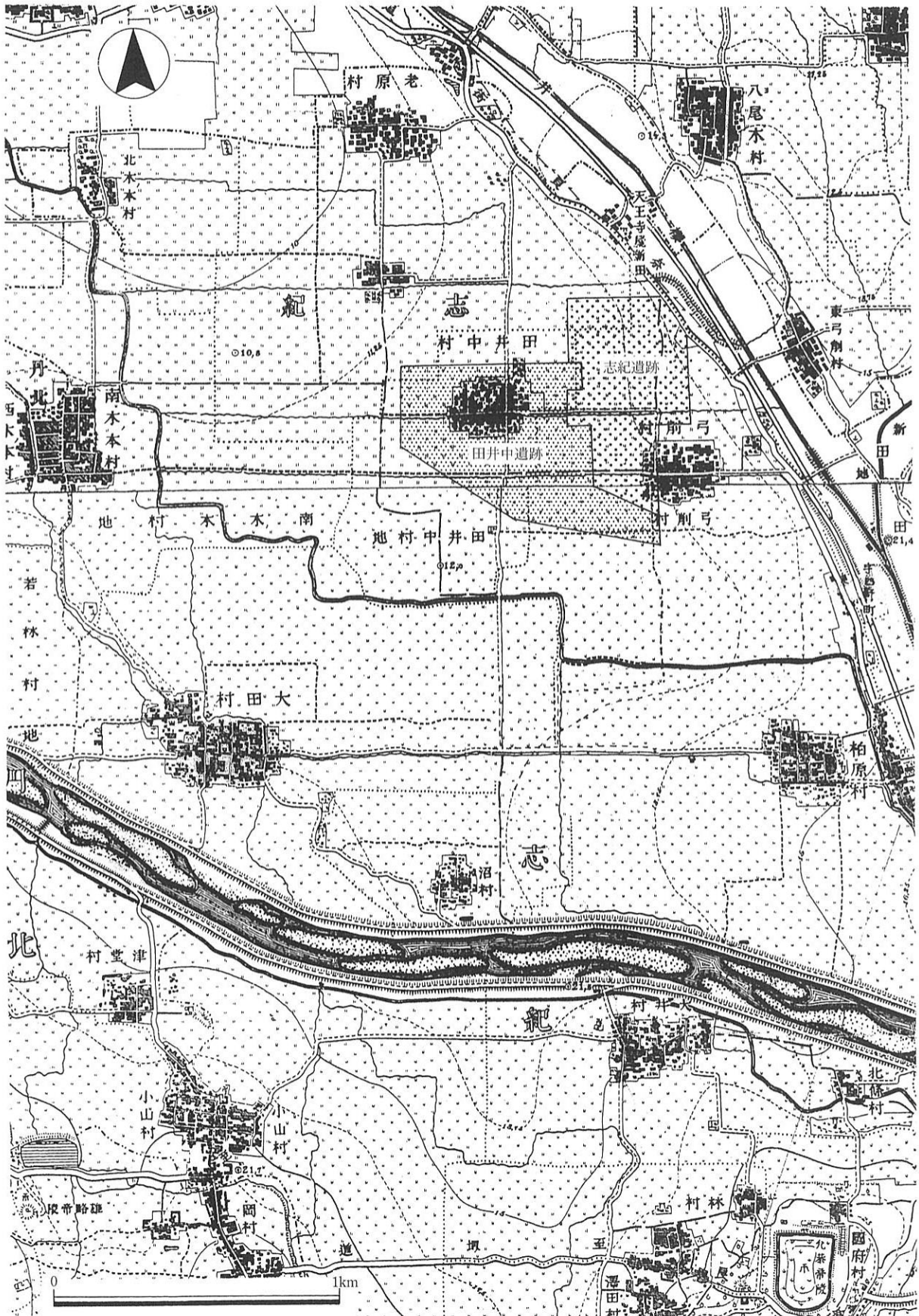


図3 志紀・田井中遺跡周辺の地形

端の砂嘴が伸び、河内潟に海水が流入しなくなった。そして、徐々に淡水湖となり、やがてそこに流れ込む大和川などの土砂によって陸化し河内平野となった。江戸時代に至っても河内湖のなごりの深野池や新開池がみられ、沼や低地帯がいたる所に存在した。宝永元（1704）年に大和川が付け替えられ、柏原市域から西流して堺市域で大阪湾に注ぐようになると河内平野では洪水が激減し、水田とともに畑も卓越するようになる。

遺跡は大和川が奈良盆地を経て河内平野に到達した地点から、北西に約3.5kmのところの位置する。この地域は、大局的にみると南東が高く北西に低い地形である。特に、自然地形の改変の度合いが小さかった近代以前にはその傾向が強い。河川も基本的に北西方向に流れている。遺跡の立地は扇状地性低地に分類され、発掘調査によっても洪水砂層が検出されている。

### 歴史的環境

旧石器時代には、羽曳野丘陵から北にのびる低位段丘上の北縁に長原、八尾南、国府などの遺跡が出現する。羽曳野周辺では他にも、翠鳥園、西大井遺跡で良好なユニットが確認されたり、住居址が確認されたはざみ山などの遺跡が点在する。それらの石器は大阪府と奈良県の境にある二上山のサヌカイトを石材としたものが多い。

縄文時代になると、前期には羽曳野丘陵北縁の遺跡群に加えて生駒山地西麓にも恩智などの遺跡が営まれた。後期から晩期前半には生駒山地西麓から羽曳野丘陵北縁にかけて遺跡数が増加し、志紀遺跡周辺でも恩智、船橋、国府、林などの遺跡が知られているが、低地部では遺跡の調査例は相対的に少ない。志紀遺跡でもこの時期の土器が僅かながら検出される。長原遺跡は晩期から弥生時代にかけての代表的な遺跡で、遺構とともに多量の刻目突帯土器と少量の弥生土器が共存している。

弥生時代には、前期には、河内潟岸に多くの遺跡が出現する。志紀遺跡の南西に隣接する田井中遺跡にも拠点的な集落が営まれている。中期には低地部で大規模な集落が出現し、志紀遺跡の周辺にも老原、弓削、木の本遺跡などがある。後期の集落遺跡は小規模化している模様だが、中期の諸遺跡に加え、小阪合、中田、跡部などの遺跡も営まれる。弥生時代から近代まで、自然堤防上に集落がそれよりやや低い所に水田が立地するという傾向があるが、初期の水田といえども湿地帯の最低部ではなく排水も可能な若干の高まりに水田が営まれている。

庄内式土器の時期には河内平野の諸遺跡で他地域系の土器がしばしば出土し、集団関係が広域化したことがうかがわれる。

古墳時代には、前期に位置づけられる古墳が、玉手山古墳群、松岳山古墳群といった丘陵上に造られるものと、久宝寺、八尾南遺跡などで見られるように低地に立地するものとある。中期には羽曳野丘陵に応神天皇陵に代表される古市古墳群、志紀遺跡西方に低位段丘上には長原古墳群が造営される。長原古墳群のように、河内平野でも沖積地に埋もれた古墳、いわゆる小方墳が数多く調査されている。後期から終末期には、生駒山地西麓を中心に群集墳が造営され、平野部には成法寺、小阪合、中田、弓削、八尾南などの遺跡で集落が営まれている。

奈良時代には、遺跡周辺は河内国志紀郡（長野・拝志・志紀・田井・井於・邑智・新家・土師の8郷からなる）に属し、その国府は国府遺跡から船橋遺跡にかけてと推定されている。生駒山地西麓を南北にはしる東高野街道に沿って、河内六大寺など多くの寺院が造営された。また、東西方向に走る磯齒津道（八尾街道）、大津道（長尾街道）といった官道も整備されていた。

平安時代以降、志紀遺跡周辺ではこれまでの調査成果からすると9世紀代を上限とする条里型地割に則って水田が開発されている。志紀郡内には山城醍醐寺領志紀北庄・南庄や奈良興福寺領志紀庄が存在したことが、平安時代～室町時代の文書に記載されている。志紀の地は交通の要衝であるとともに、南北朝期にはその両勢力の接点に位置していたために、しばしば戦場ともなった。

宝永元（1704）年、わずか8ヵ月の工事により、有史以来この地における人間の営みに多大な影響を与えた旧大和川は、柏原からほぼ西方の堺へと流路が付け替えられ、河内平野では洪水が激減した。そのかわりに志紀郡内の多くの土地が川床となり、また郡が南北に二分されることとなった。この地域ではかねてより綿作が行われていたが、大和川付け替え後はさらに旧河道に造成された砂地の耕作地において米を作る田と綿を栽培する畑が半々に営まれ、河内木綿の本場として商業経済が発達した。

戦後も昭和30年代までは条里型地割の残る水田地帯であったが、近年は市街化の進行が著しいためにその景観も変わりつつある。

このように、志紀遺跡一帯は弥生時代以来、生産の場としての役割を担い続けてきたのである。

## 参考文献

- 岩崎二郎編 1998『志紀遺跡（その4）－大阪府営住宅建替えに伴う発掘調査報告－』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第25集 （財）大阪府文化財調査研究センター
- 梶山彦太郎・市原 実 1972「大阪平野の発達史－<sup>14</sup>C年代データからみた－」『地質学論集』第7号
- 地学団体研究会大阪支部 1999『大地のおいたち－神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類－』築地書館
- 本間元樹編 1997『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）－陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書－』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第23集 （財）大阪府文化財調査研究センター
- 西川寿勝編 1995『志紀遺跡－大阪府営志紀住宅建て替えに伴う発掘調査報告－』（財）大阪府埋蔵文化財協会・調査報告書 第91輯 （財）大阪府埋蔵文化財協会
- 『八尾市史』1958 大阪府八尾市役所
- 平凡社地方資料センター編『大阪府の地名II』1986 平凡社

## 第3章 調査の方法

**志紀遺跡 2・3・5・6区的位置** 志紀遺跡は、大阪府八尾市志紀町西1～4丁目・田井中3丁目に所在する。そのなかで、本書に報告する2・3・5・6区は遺跡範囲内の南部に位置する。行政区画では、2区は八尾市志紀町西1丁目、3・5・6区は八尾市志紀町2丁目にあたる(図1)。

**調査区の呼称** 「志紀遺跡」の後の「1～6区」は、(財)大阪府埋蔵文化財協会および(財)大阪府文化財調査研究センター(平成7(1995)年4月、(財)大阪府埋蔵文化財協会と(財)大阪文化財センターの2財団を統合)が志紀遺跡で行った1～6回目の発掘調査ということを示す。また、今回の報告対象では2・3・6区で複数のトレンチを同時に調査した。その各々を2A区・2B区・3A区・3B区・6A区・6B区・6C区と呼称する。

**地区割り(図4)** 本書で報告する志紀遺跡の各区では、(財)大阪府埋蔵文化財協会が定めた方法で地区割りを行った。基本的に、国土座標VI系(原点 東経136°00'北緯36°00'・福井県越前岬付近)を基準とし、調査時には4×4m四方の区画にアルファベットと数字の組み合わせによる地区名を冠し位置を特定する。以下、その方法を具体的に述べる。

地区割りの基本は1/10000地形図である。大阪府下全域を南北6000mごとにA～O、東西8000mごとに0～8に分割し、「G-6」等と表示する①。この大区画を縦横各4分割し、すなわち16等分したものが1/2500地形図(都市計画図)で、東西2000m、南北1500mの区画となり、これに1～16の番号を付ける②。この地形図を12等分して1辺500mの正方形区画を作り、A～Lの記号を与える③。次にこの区画を25等分して1辺100mの正方形区画を作り、01～25の番号を与える④。さらに、この100m角の区画を625等分して1辺4mの区画に分け、アルファベット2文字で表す⑤。①～⑤を通して表示すると、たとえば志紀遺跡6B区の北東部の4m角のグリッドは「大G63-I04UP」となる。ただし、現地作業に際してはあまりにも煩雑なため、便宜的に500m角の区画以下の「I04UP」と略称した。現地ではこの4m角のグリッドを、遺物の取り上げ等の位置表示の基準とし、必要に応じて国土座標値も併用した。なお、各区の区画割りは「第2～7部 各区の調査成果 第1章 調査の方法」に掲げている。

**方位** 地区割り同様に国土座標に則り、座標北を採用した。遺跡周辺の座標北は、平成6(1994)年度の2区と3区の調査時には磁北より東へ6°27'、真北より西へ13'、平成11(1999)～平成12(2000)年の5・6区調査時には磁北より東へ6°27'、真北より西へ13'振れていた。

**高さ** 東京湾平均海面(T.P.)を適用した。T.P.と大阪湾低潮位(O.P.)とは、 $T.P.+0.0m=O.P.+1.3m$ の関係にある。

**面と層の呼称法** 人力による調査の開始される面を第1面と呼び、以下調査順に面の番号を付す。層名は、機械掘削停止面から第1面までの層を第0層と呼び、第1面と第2面との間の層を第1層とし以下同様である。なお、ここでいう算用数字の「層」はあくまでも掘削と遺物取り上げの単位であり、ある面と次の面との間の堆積は土層監察の結果○付き数字の土層に細分されることがある。

**その他** 地区割りの他に、遺構番号の付け方、遺物の取り上げ方法、図面作成、各種分析、整理作業の方法、調査担当者などについては、「第2～7部 各区の調査成果 第1章 調査の方法」に各区ごとの実情を記載している。



## 第4章 各調査区の対応関係

はじめに 本報告書で報告する各調査区は、それぞれが別個に調査を行い、結果も別個に報告する形式をとり、面や層の呼称においては統一をとっていない。その為、本報告書を読まれても、各部によって、例えば同じ「第5面」であっても全く異なる時期の面であることになっている。本章ではその煩雑さを若干和らげることを目的として、本報告書で報告されている各調査区間における層および面の大まかに対応関係を示すこととする。その際、(財)大阪府埋蔵文化財協会、および当センターが調査を行い報告済みである1区・4区との対応関係も記述する。

各層の対応関係を追うに当たって、基本的には各調査区の調査成果における時期比定を最たる参考事項とするが、当遺跡の性格である「水田遺構」という都合から遺物の出土量はその調査面積に比べ、極めて少ない。その制約から各調査区によって同一面であっても出土遺物に差が見られることが往々にしてあり得る。この原因は、遺物量の少なさという性格のみならず、当然、開発や土地利用における同一面の空間的時期差もあり得る。となると、層の特徴から同一面の比定を試みる事が考えられる。しかし、層の側方変化や、局地的な面の更新などが行われることも、同様に水田遺構が検出され広範囲の調査が行われている池島・福万寺遺跡の調査成果から明らかであり、鋼矢板により各調査区が分断された志紀遺跡では同一面の比定がより困難である。また、土壌学や堆積学的見地から詳細にものを語れないため、本章の同一面・層比定は、極めて大雑把で問題の多いものであることをあらかじめ言い訳しておく。なお、各層呼称は各調査区における報告の基本層序によることとし、報告の際の細分層も併せて使用する。表2の( )内と図5は全て細分層である。本章中では基本的に1・2区は細分層(○層)で、3～6区は基本層序(第○層)で記述する。言うまでもないが、図5の柱状図に示した各調査区各遺構面・層のレベルがその調査区全域に敷衍できない。また、図5では各調査区の層をつないでいるが、本来は検出されるべき面が層中に含まれることもあると思われる。その際は、その見えざる面を含む層の上面に線を引き、とりあえずの同一面としている。

**同一面・層比定の根拠** 以下で同一面・層の比定を試みるが、その際に参考にする事柄、根拠を示しておく。第一に、志紀遺跡一帯で比較的普遍的に見られる洪水堆積層である。上層から見てゆくと、まず機械掘削最終段階に確認され、T.P.+12.0m前後に見られ、13世紀頃までの遺物を包含する「鎌倉時代の洪水砂」などと呼称される層が挙げられる。つぎに、概ね条里制施工以前と以後の境目に見られ、7世紀頃までの遺物を包含する「古墳時代後期以降の洪水砂」(以下「条里境の洪水層」と呼称)が挙げられる。以下の層においても、6世紀前半頃や弥生時代後期頃などに、部分的な洪水堆積層が見られるが、それよりも根拠となりやすいのが黒色土壌化層であり、これが第二の根拠である。池島・福万寺遺跡での調査でも明らかにされているように、弥生時代以前にはわりあい広域的普遍的に黒色土壌化層が見られる。志紀遺跡においては、弥生時代全般で全域に亘らないものの、概ね同様であり、明瞭に黒色を呈する層が志紀遺跡の各調査区で確認されている。この中で最も普遍的であるのが、弥生時代前期から中期初頭頃の遺物を包含する黒色土壌化層である。部分的にこの層中に洪水堆積層や土壌化の弱い層を含み、細分が可能である。また、さらに下層でも黒色土壌化層が複数枚見られ、これらも同一面比定の根拠となるが、多くは自然堆積層で、土壌化部分と非土壌化部分との層界が漸移的で不明瞭であ

り、ほとんど遺構も遺物も見られない。

第三に、遺物である。第一・二でもふれたが、それらは特徴的な層に含まれる遺物である（比定が層→遺物→層、の順）。ここでは、対応関係が追にくい層の平行関係を推定するための遺物である（比定が遺物→層、の順）。まず、「鎌倉時代の洪水砂」と「条里境の洪水層」間では土壌化層が連続する部分が多い。しかし、これらの各層からの「瓦器」出土の有無が同一層比定の根拠となる。さらに下層の「条里境の洪水層」以下、弥生時代黒色土壌化層以上では、1～4面の古墳時代の遺構面（や弥生時代の遺構面）が確認されている。これらは、大きくは須恵器の有無で区別され、須恵器を含む層では数少ない資料からある程度時期を押さえることが可能である。なお、同一面の比定においては細かい型式に拘ることはあまりせず、各世紀を二分割、もしくは三分割した単位で大雑把なくくりとして一括する。当然のことながらこれは全ての遺物に関していえる。第四に遺構である。各面で検出されている遺構は水田の畦畔が多いが、一部の面では特徴的な遺構が検出されている。条里制の各面では畦畔が同様な場所に築かれるため同一面か否かの推定は難しいが、坪境の形状（溝や畦畔等）からの推定ができる。また、弥生時代前期後半から中期初頭頃には大溝が掘削されており、これも同一面比定の根拠となろう。

**各調査区の整理** 今回報告分については、本報告書の各部を参照していただくこととして、既に報告書が刊行されている1区・4区について、報告後の成果などを盛り込み、以下で簡単にまとめておく。

#### 1区

##### 第1面 平安時代末～鎌倉時代（12世紀）（⑩層）

もろい湧水層（⑪層） 奈良時代（8世紀代）の遺物を包含  
洪水堆積層「条里境の洪水層」（⑫層） 7世紀代の遺物を包含  
植物遺体を含む黒褐色の薄い粘土層（⑬層）

（報告書では作土だが、第2面廃絶段階の湿地状の堆積か？）

6世紀中頃から後半の須恵器（TK10～MT85）・土師器を包含

##### 第2面 古墳時代後期（6世紀後半）（⑭層）

洪水堆積層（⑮層）→旧地表面が断続的に存在（⑯層）→複数のもろい湧水層→  
薄い粗砂層（⑰層）→報告書では作土だが⑬層同様の湿地性の堆積物か？（⑱層）

⑱層は6世紀前半（TK23～MT15）須恵器を包含するが、それ以外の層は時期不明

##### 第3面 古墳時代後期（5世紀後半）（⑳層）

（⑱層や畦畔盛土中から出土した土器から6世紀前半にこの地点の開発が下る可能性あり。周辺で5世紀後半とされている面と同一面と考えられるが、開発時期の差と思われる。また、⑳層中からは布留式の出土もあり。）

（㉑層）5世紀中頃？の小型壺、椀？（報告書第14図2・3）（本来は須恵器伴うか？）

（㉒層）報告書では作土だが、湿地性の堆積か？

##### 第4面 古墳時代前期（4～5世紀）（㉓a層）大畦畔中から定型化した布留式以降の土器

第4面直下の溝 布留式土器出土

床土とされる粘土層（㉓b層）→西側ほど粗い洪水堆積層（㉓c層）弥生時代後期～布留式新相の土器が出土（これら㉓層細分層は一連の堆積であり、上方細粒化していった最上面が第4面と



し機能したと考えられる。)

第5面 弥生時代中期 (24層) 大畦畔から弥生時代中期の土器出土

(西区ではこの段階で大溝が検出されているが、報告書土層図(西区西壁)を見ると、第6面の遺構である。この断面で確認された溝は他の溝と堆積状況が異なるようで、溝埋没の時期差があると思われる。第5面については大畦畔の遺物から開発は中期であると思われるが、詳細な時期については不明であり、直上の洪水砂層(23c層)出土の遺物から布留式まで継続していた可能性も考えられる。)

第6面 弥生時代前期「黒色土壌化層」(25a層)

当面直上から石庭丁で出土。第6面上層からは前期新段階の土器が出土。

(25b層)部分的に見られ、やや黒っぽい縄文時代晩期の遺物を包含する層

第7面 (26層) この層からの遺物の出土なし

以下の各層も志紀遺跡一帯で見られる自然堆積層である。最下部には縄文時代晩期に相当すると思われる黒色土壌化層(26c・28層)が見られ、その上層には砂層(26b層)と上方細粒化したと思われる粘土層(26a層)が見られ、この上面が第7面である。

4区(その4)では3つのトレンチを調査し、それぞれ96-1・2・3区と呼称している。以下ではそれぞれ4A・4B・4C区と読み替えることとする。

4A区

第1面 鎌倉時代前期(13世紀)

第2層(2層) 12世紀前半(尾上編年II期前半)瓦器、同時期と思われる土師器等

第3層(3層) ほぼ同時期の瓦器、土師器等 第2・3層出土遺物に時期差は見られない。  
瓦器、黒色土器が出土するのは第3層まで

第2面 平安時代後期(12世紀前半)

第4層(5・7層) 概ね9世紀中頃以前の土器が出土しているが、時期が限定しがたい土師器もあり10世紀に下る資料を含む可能性あり。

第3面 平安時代前期(9世紀代)

第5層(8層) 下層の第6層の影響で砂が多く混じる部分も見られる  
9世紀後半~10世紀前半?の土師器、飛鳥時代の土師器  
報告書では当面を9世紀代としたが、10世紀まで下る可能性もあり。

第6層 「条里境の洪水層」 7世紀前半以前の土器

(第5層(8層)の中には飛鳥・奈良時代の複数の旧地表面を含む可能性あり)

第4面 7世紀代 土坑中から6世紀後半~7世紀頃の甌

第7層(11層) 6世紀前半以前の土器

第8層 洪水堆積層

土師器が若干出土しているのみだが、本来は須恵器が伴うものと思われる。

第5面 6世紀前半

第9層(16層) 5世紀後半以前の須恵器

(6世紀中頃の須恵器(混入)→土器埋納ピット?)

須恵器出土するのはこの層まで

第6面 5世紀後半

第10層 (⑰層) 弥生時代後期～布留式

第7面 古墳時代前期

第11層 (⑲層) 部分的な堆積 弥生時代後期土器の細片が出土したのみ

第8面 弥生時代後期

第12層 (⑳層) 部分的な堆積 弥生時代中期末の土器が僅かに出土したのみ

第9面 弥生時代中期末～後期初頭

第13層 (㉑層) 弥生時代前期末～中期中頭と考えられる土器が出土

第10面直上の一部には、植物遺体を含む湿地性の堆積物から上方粗粒化する洪水堆積層も見られた。

第10面 弥生時代中期中頭前後

第14層 (㉒層) 「黒色土壌化層」弥生時代前期・縄文時代晩期の土器が混在して出土

以下の各層においても遺物の状況は同様。

この面以下の各面では水田遺構は検出されない。

第11面 弥生時代前期

第15層 (㉓・㉔層) 「黒色土壌化層」

第12面 ベース面

第16層 (㉕・㉖層) 上層の影響で黒色を呈する部分もあるが、基本的に非土壌化層であり、以下の各層も自然堆積層。

4 B 区 4 A 区で確認された明瞭な洪水堆積層は、供給された方向が不明である 4 A 区第12面以下の自然堆積層や、西から供給された第10面を覆う洪水堆積層以外、東から供給されたと推定しており、4 A 区西端の北側延長に位置する 4 B 区や 4 C 区では同一面を比定する際の明瞭な洪水層はあまり確認されず、各面では殆ど遺構・遺物が確認されていない。なお、報告書段階とは若干層の対応関係が異なる。

4 A 区第6層「条里境の洪水層」→ 4 B 区5層中

4 B 区第6層 (⑤層) 7世紀(TK217～46か)の須恵器が出土→本層下面が6世紀後半～7世紀の遺構面か？

4 B 区第7層 (⑥層) → 4 A 区第7層 (⑪層) に対応？

(土壌化が明瞭な第8層 (⑨層) 以上と、土壌化の度合いが弱い第9層 (⑩層) 以下に大きく区分できる。これを頼りに、第9層 (⑩層) は 4 A 区第11層に対応すると思われる。)

4 B 区第10層下部 (⑫層) 洪水堆積層→ 3区⑫層の弥生時代後期洪水砂に対応？

4 B 区第11層下部 (⑬層) 洪水堆積層→ 4 A 区の第13層下部 (㉑層下部) に対応？

(4 A 区第13層は、西からの洪水により形成されたと考えられ、対応は妥当と思われる。)

4 B 区第12層 (⑮・⑯層) 「黒色土壌化層」弥生時代前期末～中期中頭に対応？

以下の各層は、自然堆積層。

4 C 区

第5層下部 (⑤・⑥層) 洪水堆積層→ 3区第1層下部 (⑦層) に対応？

第9層下部 (⑪層) 洪水堆積層→ 4 A 区第8層に対応？

## 第1部 はじめに

第12層 (⑮層) シルト層→3区第10層 B (⑳層) に対応？

第13層 (⑯層) →3区第11層 (㉑層) 弥生時代中期末～後期初頭に対応？

第14・15層 (⑰・⑱層) 「黒色土壌化層」弥生時代前期末～中期初頭に対応？

以下の各層は自然堆積層。

**対応関係の推定** 以上から、各調査区間の層・面の対応関係を想定しておく。すでに、各調査区の調査により、大まかな時期の一致を見つつある。以下では、大まかな時期ごとに面の対応関係とその根拠を提示することにする。根拠は基本的な第3の根拠である「遺物」を使用するが、それを補い第1・2・4の根拠も使用する。なお、各区の対応関係の部分で ( ) 内に示す時代は、各報告によるものであり、今回行った大まかな時期設定とは時期差がある部分もある。また、ここで対応関係を推定する地区は、遺物の出土が各層から概ね見られる1区・2区・3区・4A区・5区・6B区・6C区の主要地区とするが、一部でこれ以外の地区の対応関係も示す。

**12世紀後半～13世紀前半 (平安時代末～鎌倉時代初頭)** ここで同一面とするの第1の根拠の「鎌倉時代の洪水砂」に覆われている各面である。この洪水堆積層に含まれる遺物は、1区 (第1面直上粗砂層) では12世紀後半以降の外面にミガキが見られない瓦器皿、2区第1面を覆う粗砂層からも同様に瓦器・土師器等が出土、3区第0層では12世紀後半の瓦器が出土し、第1面からは13世紀前半の瓦器も出土している。6B区では13世紀前半の遺物が出土している。各区の第1面が該当する。なお、1区や2区・6B区などではこの面より上層からの掘り込みである鋤溝の検出もみられる。

**11世紀～12世紀前半 (平安時代後半)** この面は、瓦器を含む層に覆われる各面である。基本的に、上記の12世紀後半～13世紀前半の遺構面 (第1面) を構成する層中から瓦器が出土し、以下の層では瓦器の出土が見られないことが多い。しかし、5・6区ではさらに下層まで瓦器を含む層がある。瓦器を含む層は、3区第2面を覆う第1層 (⑥層)、4A区第2面を覆う第2・3層 (②・③層)、5区第4面を覆う第3層 (③・④層)、6B区第4面までを覆う第1～3層 (⑥～⑩層)、6C区第4面を覆う第3層 (③層) である。

以上から面の対応関係として、1・2区⑩層中－3区第2面 (11世紀代) －4A区第2面 (12世紀前半) －5区第4面 (平安時代頃) －6B区第4面 (奈良～平安時代) －6C区第4面 (平安時代中頃)、と推定することができる。なお、2区では⑩a層直上に何らかの掘り込みも見られ (本報告書図7:2 B区西壁上層断面参照)、この層直上が旧地表面であった可能性も考えられる。

なお、5区や6B・C区では12世紀後半～13世紀前半の面との間に複数の遺構面が検出されているが、これらは部分的な洪水による面の更新が12世紀代に行われた結果であると考えられる。また、他の調査区に比べ、時期が全体的に古いことから、今回比定した面より上面 (第3面) が対応する可能性も高く、比定の根拠とした遺物も混入の可能性は当然考えられる。このことから、図5や上記の対応関係では5・6B・6C区の第4面が対応するとしたが、第3面に対応する可能性も高いことをここで示唆しておく。なお、各区で良好な遺物の出土はあまり見られず、細かい時期差の推定をするのは難しい。

**9～10世紀 (平安時代前半)** この面は、基本的に上記の11世紀～12世紀前半の面を構成する層に

覆われる面である。各層に含まれる遺物は以下のとおりである。3区第3面を覆う第2層(⑧層)では8世紀中頃～9世紀であるが、9世紀代の資料は少ない。4A区第3面を覆う第4層(⑤層)では8世紀～9世紀中頃。5区第5面を覆う第4層(⑤層)では遺物が少ないものの、10世紀中頃の遺物を含む。ただし、第4面で10世紀頃の溝が検出されていることから第4面がこの段階から使用されていたと考えられる。6C区でも第5面を覆う第4層(⑤層)中からこの時期の遺物が出土しているが、第4面の溝から10世紀中頃の遺物が出土しているため、5区同様であると思われる。調査段階でこれらと同一面とした6B区第4面も同時期であろう。

以上から面の対応として1・2区⑩層中－3区第3面(9世紀初頭)－4A区第3面(9世紀代)－5区第4面－6B区第4面－6C区第4面、と推定することができる。

7～8世紀(飛鳥・奈良時代) この面は、基本的に上記の9～10世紀の面を構成する各層に覆われる面である。1・2区では⑪・⑫層から飛鳥・奈良時代の遺物が出土しているが、安定した土地ではなく、当該期の遺構面の検出はない。3区第4面を覆う第3層(⑩層)からは6世紀後半～7世紀頃の遺物が出土しており、第4面の時期は7世紀である。4A区では第4面を覆う第5層(⑧層)中にこの時期の遺物を含むが、「条里境の洪水層」とのかねあいから3区に対応する面はこの第5層中に存在すると推定される。5区第6面を覆う第5層(⑦層)はベース層であり、7～8世紀の遺物を含み、この層で覆われる第6面では上層からの掘り込みであるピットから8世紀中頃の遺物が出土しており、第6面がこの時期に相当する。6B区では第5・6面で遺構に伴いこの時期の遺物が出土している。6C区では遺物の様相が複雑であるが、第4層からこの時期の遺物が出土しており第5面が対応すると思われる。また、第5層中からは飛鳥Ⅲの土器埋納ピットと思われる遺物も出土しているが、上面の条里にはのらない位置である。

以上から、時期差がややあるものの、3区第4面(7世紀)－?－4A区第3面・第5層(⑧層)中－5区第6面(奈良時代中頃・8世紀中)－6B区第5・6面(8世紀半ば)－6C区第5面(奈良時代)、と推定できる。

飛鳥～平安時代各面について この時期の良好な遺構面が検出されない1・2区を除き、各面の検出状況、つまり面の更新状況は、大まかに3・4区と5・6区とで差が見られるようである。これは、3・4区(東側区)と5・6区(西側区)の間にあると思われる坪境を境に堆積状況が異なることによるものと思われる。飛鳥時代の面は3区で検出されているものの、必ずしも明瞭ではない。しかし、遺物は各調査区で出土しており、何らかの活動が行われていたことは考えられる。飛鳥時代～奈良時代にかけては比較的安定した時期であり、面の更新があまり行われなかったのであろう。また、3・4A区では10世紀頃は遺物の様相も不明瞭である。11世紀～12世紀前半の面を構成する層中に含まれる遺物に、10世紀の資料は殆ど含まれないように見え、作土と考えられる層からも11～12世紀の資料は含まれていない。ただし、5・6C区では10世紀の遺構が検出されており、今回はこれらの瓦器を含む層に覆われる各層を同一面としたが、地点的に使用に時期差があるのかもしれない。

6世紀後半～7世紀 この面は、「条里境の洪水層」に対応する層に覆われる面である。「条里境の洪水層」対応層は、1区では⑬層が相当し、6世紀中～後半(TK10～MT85)の須恵器と同時期の土師器

## 第1部 はじめに

が出土。2区では⑫層が相当し、杯Hなど飛鳥・奈良時代の土師器・須恵器が出土。3区では第4層B(⑫層)が相当し、7世紀前半の遺物が出土している。また、下層の第5層(⑬層)からも6世紀後半(MT85頃)の遺物が出土している。3区ではこの時期に、部分的な面の更新が行われていたようであり、ほぼ同時期の面が2面検出されている。4A区では第6層(⑧層)が相当し、7世紀前半の遺物が出土している。また、第6層に覆われる第4面検出土坑からは6世紀後半～7世紀頃の甕が出土している。5区では第7層(⑪層)が相当し、6世紀後半(TK43頃)の遺物が出土している。6B区では第7層(⑳層)から律令土器の混入が見られるものの、6世紀代(TK47～43)の遺物が出土している。6C区では第6層東側(⑱層)から6世紀初頭の若干古い時期の遺物が出土しているのみだが、第5層東側(⑧・⑪・⑭層)には下層から巻き上げたと思われる6世紀後半の資料も含むので、第6層東側は対応層として妥当であろう。ただし、第6層西側(㉑層)には、布留式期以前の遺物を含むのみであり、報告にあるとおり、第6層は東側と西側で堆積時期が大きく異なる。西側で見られるべき、東側の第6層相当層は、条里制の開発段階に5層内に攪拌されてしまったものと考えられる。このことは、第7層についても言える。

以上から、1・2区第2面(6世紀後半)－3区第5面(6世紀後～7世紀)・第6面(6世紀後半～末)－4A区第4面(7世紀代)－5区第8面(古墳時代)－6B区第8面－6C区第7面東側、と推定できる。

5世紀後半～6世紀前半 この面は、基本的に上記の各面を構成する層に覆われる面であり、一部では第1の根拠である洪水層が直上に見られる。1区では第3面が6世紀前半(TK47～MT15)の遺物を包含する⑱層(洪水層?)に覆われている。2区では同様に第3面が㉑層に覆われている。3区では第7面を覆う第6層から6世紀前半(TK47～MT15頃)の遺物が出土している。4A区では第5面を覆う第7層(⑪層)から6世紀前半(TK47～MT15頃)の遺物が出土している。なお第5面直上に見られる洪水層である第8層からは古墳時代前期遺物の混入が見られるのみであり時期比定に有効な遺物の出土は見られない。なお、第5面を構成する第9層(⑯層)からは上層からの土器埋納ピットに伴うと思われる6世紀中頃の須恵器の混入資料はあるものの、5世紀末の遺物が出土している。4区ではこの時期に部分的な面の更新が行われていたようであり、ほぼ同時期の面が2面検出されている。5区第8層(⑫層)・6B区第8層(㉑層)・6C区第7層東側(㉒層)ではより古い時期の遺物しか含まれないので、6世紀後半～7世紀の遺構面の構成層中に遺構面が存在した可能性が考えられる。

以上から、1・2区第3面(5世紀後半)－3区第7面(5世紀末)－4A区第5面(6世紀前半)・第6面(5世紀後半)（－5区第8面(古墳時代)－6B区第8面－6C区第7面東側)、と推定できる。なお、これらの各層からは定型化した布留式甕など、布留式以降の遺物を含むことが多く、これらの面の廃絶が5世紀ではあるものの、その開発は布留式まで遡る可能性も考えられる。

庄内式～布留式 1・2区第4面および1区第4面直下の遺構からは布留式が出土している。また、1区第5面直上に弥生時代後期～布留式の遺物を含む洪水層(㉓層)が見られる。第5面大畦畔中には弥生時代中期前半の遺物も見られるので弥生時代中期に開発された水田が布留式期に廃絶した可能性が考えられる。3区第8面を覆う第7層(⑰層)・第9面を覆う第8層(⑱層)からは弥生時代後期～庄内式(布留式?)の遺物が出土している。4A区第7面を覆う第10層(⑰層)からは弥生時代後期

～布留式期の遺物が出土している。調査地区により、庄内式が見られない箇所や、布留式が見られない箇所など、場所場所で出土遺物に差異が見られる。

以上から、1・2区第4面（4～5世紀）（・第5面）（布留式）－3区第8面・第9面（庄内式）－4A区第7面（古墳時代前期）、と推定しておく。なお、以下で記すが、この段階以前弥生時代中期後半までは面の更新が盛んな地区が見られる。

弥生時代後期 3区第10面を覆う第9層（⑲層）からは中期後半～後期にかけての遺物が出土している。4A区第8面を覆う第11層（⑲層）からは後期の遺物が僅かながら出土している。

以上から、3区第10面（後期前半）－4A区第8面（後期）、と推定できる。

なお、これらの面の下層の一部では「第1の根拠」である洪水堆積層が確認されており、それらは、3区⑳層－4B区㉒層－4C区㉓層である。

弥生時代中期後半～後期初頭 上記の各面を構成する各層や洪水層に覆われる面である。3区第11面を覆う第10層（㉑・㉒層）からは中期後半～後期の遺物が出土している。なお、第11面からも同時期の遺物が出土している。4A区第9面を覆う第12層からも同時期の遺物が出土している。なお、4B区第10面を覆う㉒層や4C区第12面を覆う㉓層からの遺物の出土はないものの、同一面であると考えられる。また、6B区では第9層（⑳層）中から中期後半の土坑が掘り込まれている。

以上から、3区第11面（中期末～後期初頭）－4A区第9面（中期末～後期初頭）－4B区第10面－4C区第12面（－6B区第9層中）、と推定できる。

弥生時代前期末・中期初頭（～中期？）「黒色土壌化層」上面が該当し、1・2・5・6B・6C区では大溝が検出されている。1区では第5・6面（㉔・㉕層）が該当し、第5面大畦畔からは中期前半の、6面を構成する㉕a層からは前期の遺物がそれぞれ出土している。第5面からは溝の掘り込みが見られる。第5面を構成する㉔層は黒色を呈していたとの報告はなされていないが、溝が掘削されていることから、この層に該当するものとしておく。2区も1区同様で第5a層（㉔a・㉔b・㉕a層）が該当し、第5面からは溝の掘り込みが見られる。遺物の出土はほとんど見られないが、1区成果と同時期と思われる土器が出土しているようである。3区では第12～14面（㉔～㉖層）が該当する。各層からは前期～中期初頭の遺物が出土している。4A区では第10・11面（㉗・㉘・㉙層）が該当し、前期～中期初頭の遺物が出土している。4B区では「第2の根拠」から第11面（㉙・㉚層）が該当する。4C区では、同じく第13・14面（㉗・㉘層）が該当し、報告書でも図化されていないが、前期と思われる土器片が出土している。5区では第10～14面（㉗～㉙層）が該当し、前期の遺物が出土している。6A区では「第2の根拠」から、第15～20面（㉚～㉜層）が該当する。6B区では第10～14面（㉗・㉘・㉙・㉚・㉛層）が該当し、前期の遺物が出土している。6C区では第9～12面（㉓～㉕・㉖～㉗）が該当し前期の遺物が出土している。各層では晩期の土器が同時に出土することも多い。また、非常に黒色を呈する層であり、旧地表面の積極的利用は弥生時代前期まで下るが、層が形成されたのは縄文時代晩期の可能性も考えられる。また、検出段階では各地区とも非常に湿地状であったが、地表面であった当初は乾燥していたようであり、この比較的乾燥した部分を積極的に水田として利用していたのであろう。

なお、この黒色土壌化層は、層中に洪水層やその側方変化であると考えられる非土壌化層が見られる。これを根拠に、細分が可能な地区もあり、大まかな平行関係を追うことができる。それらの地区—例えば3区—に関しては、多くの遺構面が検出されて、さらに古い段階の水田が検出されている。これらの細分層の対応関係については、文中では煩雑になるので、表2を参照されたい。

なお、この面の直上に含まれる遺物は、以下のとおりである。1区②<sub>3c</sub>層は後期～布留式、2区は布留式、3区第11層(②層)は、前期～中期、4A区第13層(②<sub>7</sub>層)は前期末～中期初頭、5区第9層(⑭～⑯層)は前期～中期、6B区第9層(⑳・㉑層)は前期～中期前半、6C区は第8層(㉒・㉓・㉔層)は中期前半。1・2区の出土遺物は他区と比べ、新しい傾向が見られ、面の存続が長く、廃絶が他区より新しい段階であったのかもしれないが、出土層位の詳細が不明であるので、より上面に近い層位からの出土であり、当面直上からの遺物には該当しない可能性も考えられる。

縄文時代後期～晩期 上記の「黒色土壌化層」下層には、縄文時代晩期の堆積と思われる、基本的に上方細粒化する粘土～砂(粒度はさまざま)で構成される洪水堆積層が見られる。この「黒色土壌化層」除去面の、砂もしくは粘土上面(ベース面)は、1・2区第7面、3区第15面、4A区第12面、5区第15面、6C区第13面が概ね対応する。各面で、ピット等の遺構が検出されており、3区ではそのピットから前期の集落域を想定している。当然のことながら、これらの本来の掘り込み面は上面であり、この面で検出される遺構は弥生時代段階の遺構が多いものと考えられる。

その下層でも、調査が行われているが、あまり顕著な遺構は検出されず、遺物も殆ど出土していない。

上記の洪水堆積層下層に再び「黒色土壌化層」が見られる。1・2区②<sub>6c</sub>層上面、3A区③<sub>4</sub>層・3B区⑤層上面、4区⑩層上面、5区⑲層上面、6B区深掘部⑤層上面、6C区⑤層上面が概ね対応する。この層は、縄文時代後期と考えられる。この層を除去した段階で、3区第17面や4A区第15面が検出されている。これらの面はほぼ同一面と思われるが、黒色土壌化層を除去した段階のベース面であると思われ、旧地表面ではないであろう。3区では縄文時代後期と思われる土器片が出土し、縄文時代後期に遡る可能性を示唆している。また、この黒色土壌化層も上述の弥生時代前期～中期にかけての黒色土壌化層同様、細分が可能であるが、掘削深度が及ばない調査区が多く、対応層と思われる層でも、地区により層相が異なる事が多い。このことから、対応関係についてはなかなか追いつらい。

おわりに 以上のように、今回報告の各区では縄文後期もしくは晩期以降、鎌倉時代までの遺構面が検出され、同時期の遺物が出土し、煩雑ながらもそれらの対応関係について整理を試みた。しかしながら、問題は多い。最後に、一部の時期に見られる遺物の断絶について記しておく。その時期とは、弥生時代中期中頃と11世紀頃である。弥生時代中期中頃の旧地表面は3・4区では弥生時代中期末～後期の遺構面もしくは、同面構成層中、5・6区では古墳時代遺構面～弥生時代前期末・中期初頭遺構面の間の洪水堆積層中であつたものと思われる。一方の11世紀頃の旧地表面は本文中でも記したように12世紀前半の遺構面もしくは同面構成層中であつたものと思われる。

表2 志紀遺跡各調査区面・層対応関係（試案）

	1区	2区	3区	4A区	4B区	4C区	5区	6A区	6B区	6C区
12c 後～13c 初 (11～12c)	第1面 (10層)	第1面 (10層)	第1面 (6層)	第1面 (2層)	第1面 (1層)	第1面 (1層) 第4面 (4層)	第1面 (1層) 第2面 (2層)	第1面 (7層) 第2面 (8層)	第1面 (6層) 第2面 (10層)	第1面 (1層) 第2面 (2層)
(洪水層?) 瓦器↓ 12c 前半			(7層) 第2面 (8層) (9層)	第2面 (5層) (7層)	第2面 (2層) 第3面 (3層)	(5層)	第3面 (3・4層)	第3面 (10層) 第4面 (11層)	第3面 (11層) 第4面 (12層)	第3面 (3層) 第4面 (5層)
9～10c	(11層) (12層)	(11a層) (11b層) (11c層) (12層)	第3面 (10層)	第3面 (8層)	第4面 (4層)	第6面 (8層)	第4面 (5層)			
飛鳥～奈良 (7～8c)			第4面 (11層) (12層)				第6面 (9層) (10層)	第5面 (15層) 第6面 (17層) (18層)	第5面 (14層) 第6面 (20層) (22層)	第5面
6c 後半～7c	(13層)	(13層)					(11層)			
6c 後～7c	第2面 (14層) (18層)	第2面 (14層) (20層)	第5面 (13層) 第6面 (14層) (15層) (16層)	第4面 (11層)	第6面 (6層)	第7面 (9層)	第8面 (12層)	第9面 (19層)	第8面	第7面東
(洪水層?) 5c 後～6c 前 ↑ (布留～5c 遺物) ↓ 4c～5c	第3面 (21層) (22a層) (22b層)	第3面 (21層) (22層)	第7面 (17層)	第5面 (16層) 第6面 (17層)	第7面 (9層)	第9面 (12層) 第10面 (13層)				
庄内	第4面 (23a層) (23b層)	第4面 (23a層) (23b層) (23c層)		第7面 (19層)	第8面 (10層)					
弥生後期～庄内			第8面 (18層) 第9面 (19層)							
弥生後期			第10面 (21層) (22層)	第8面 (20層)	第9面 (11層) (12層)					
弥生後期洪水層 中期後半～後期			第11面 (23層)	第9面 (27層)	第10面 (13層)	第12面 (16層)				
弥生前～中期中 「黒色土壌化層」 (洪水層) 「黒色土壌化層」	第5面 (24a層) (24b層) 第6面 (25a層) (25b層)	第5面 (24a層) (24b層) 第6面 (25a層) (25b層)	第12面 (24層) (25層) 第13面 (26層) 第14面 (27層)	第10面 (43層)	第11面 (15層) (16層)	第13面 (17層) 第14面 (18層)	第10面 第11面 (19層) 第13面 (20層) 第14面 (22層)	第16面 (28層) 第17面 (20層) 第20面 (22層)	第10面 第11面 (76層) 第12面 (77層) 第14面	第9面 (40層) 第11面 第12面
縄文晩期	第7面 (26a層) (26d層) (26b層)	第7面 (26b層)	第15面 (28層) (33層)	第12面 (51層)	第12面 (17層)	第15面 (19層)	第15面 (23層)	第21面 (33層)		第13面
「黒色土壌化層」	(26c層) (27層) (28層)	(26c層) (27層) (28層)	(34層) (37層) (38層)	(116層)	(26層)	(26層)	(29層) (30層) (31層)		(深5層)	(51層)
縄文後期			第17面	第15面						



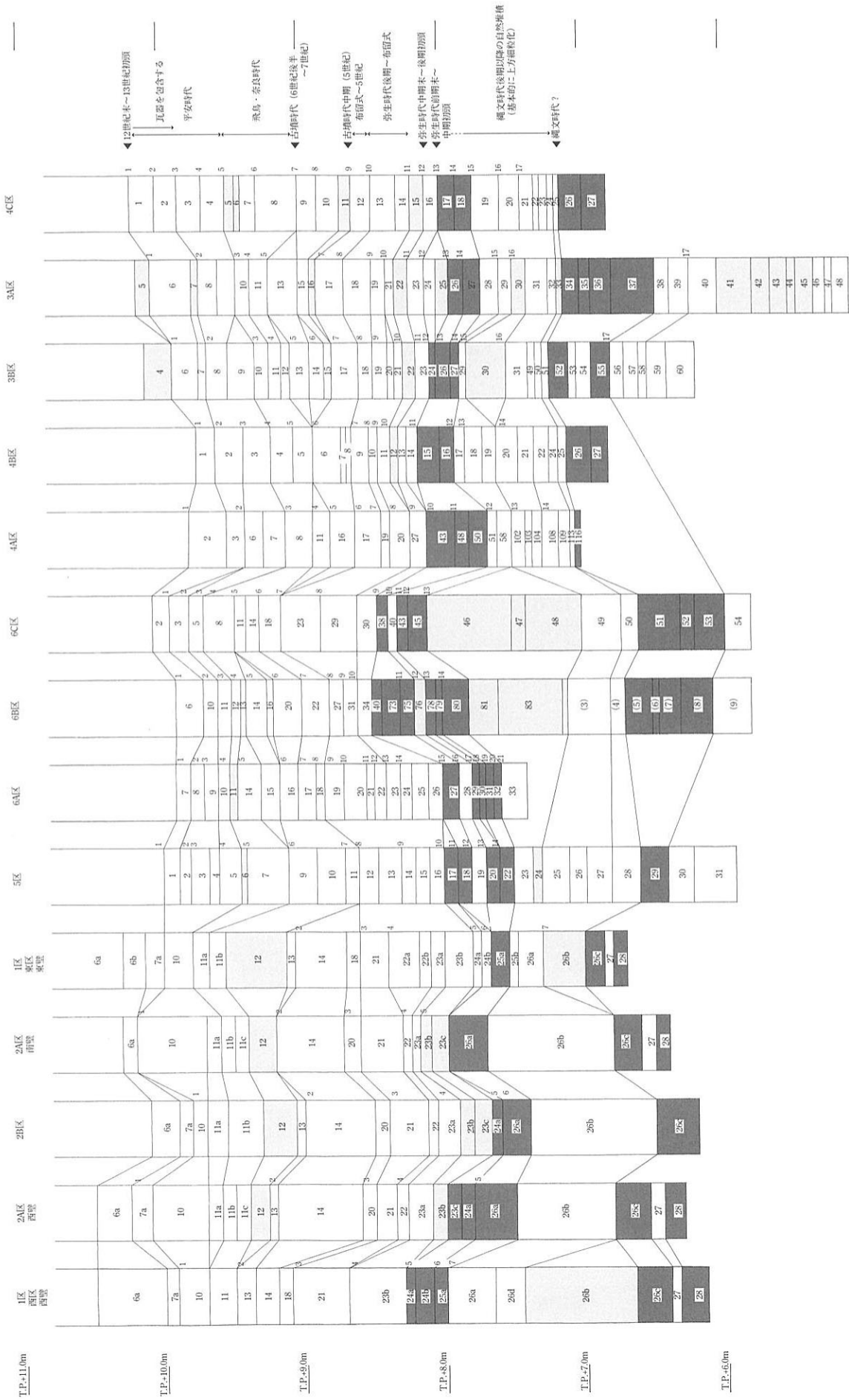


図5 各調査区の対応関係

## 第2部 2A・2B区の調査成果

第1章 調査の方法	21
第2章 層序	23
第3章 遺構と遺物	27
第4章 志紀遺跡2A区周辺における花粉分析	71
第5章 小結	79
写真図版	81



## 第2部 2A・2B区の調査成果

### 第1章 調査の方法

#### 調査区の位置と呼称

本調査区は八尾市志紀町西2丁目に所在する。志紀遺跡1区に東西をはさまれた中央に位置し、東は1区東区と接する。また、今回調査区も2か所に分かれる。東西に長い高層住宅開発による約1000m<sup>2</sup>の2A区と、浄化槽開発による約100m<sup>2</sup>の2B区である。両調査区は、第3部以降で報告する3～5区の市道をはさんで北側に位置する。

調査方法と遺構面の検出は隣接する1区の調査方法に準拠した。1区の詳細については(財)大阪府埋蔵文化財協会刊行『志紀遺跡』1995を参照されたい。また、1区と連続する遺構の説明を充実させるため、一部は重複して報告することとした。

#### 地区割りと遺物の取りあげ

現地調査は大阪府埋蔵文化財協会で行われている数字とアルファベットの組み合わせによる地区割りにのっとり、大阪府を区分した区画図より地区名を導いている。表記方法は以下による。

まず、八尾市南部は1/2500地形図(都市計画図)の大G6-3に位置する。この地図を12等分した500m方形区画を更に25等分した100m四方の範囲を示す記号として、E22～24が調査区周辺にあたる。この区画を625等分した4m四方のグリッドを調査の最小単位として遺物を取りあげた。

#### 遺構面の認定

志紀遺跡は度重なる洪水層で厚く覆われており、地表として活動の舞台となった遺構面は細かく観察すれば10面をこえる。今回の調査では既往の調査成果から導いて、特に水田遺構などが良好な状態で保存されている面に限って、6面の遺構面を設定し、1区の調査成果に対応するように継続調査した。6面の遺構面の時期は以下に示すとおりである。ただし、遺構面の時期を直接決定する資料は乏しく、既往の調査成果と伴遺物・土層の堆積状況から判断している。その後の3～5区や田井中遺跡の調査によって調査当時とは見解を訂正した部分もある。また、対応関係を明確に出来なかった部分もある。以下の遺構面は大阪府教育委員会の91年調査区にもほぼ対応する(大阪府教育委員会『志紀遺跡発掘調査概要』II 1993)。また、遺構は各遺構面ごとに通し番号つけ図化し、遺物を取りあげた。本報告にもこの番号をそのまま採用している。

(第0層) 機械掘削層など。府営住宅造成土・旧八尾飛行場造成土・江戸～明治時代耕作土など。  
3面程度の水田・畑作などの面がある。

第1遺構面 平安末～鎌倉時代(瓦器碗を伴う時期)

(第1層) 奈良時代～飛鳥時代の土器を含む洪水層。

第2遺構面 古墳時代後期(飛鳥寺下層式須恵器を伴う時期)

(第2層) 2面程度の水田面あり。古墳時代後期の土器を含む洪水層。

第3遺構面 古墳時代中期(5世紀後半の土器を伴う時期)

(第3層) 2面程度の水田面あり。布留式土器を含む洪水層・須恵器の出現直前頃か?

第4遺構面 古墳時代前～中期（4～5世紀か？確定出来ていない）

（第4層） 弥生時代終末（庄内期）の土器を含む洪水層。

第5遺構面 弥生時代中期前半？（前期末の可能性あり・いわゆる黒バンド層）

（第5層） 薄い堆積層（いわゆる青バンド層）。

第6遺構面 弥生時代前期（いわゆる黒バンド層）

（第6層） 薄い堆積層（いわゆる青バンド層）。

第7遺構面 縄文時代晩期（長原式土器を伴う時期。人工的な遺構はなく自然河川などが発見されている。いわゆる黒バンド層）

（第7層） 薄い堆積層（いわゆる青バンド層、人工遺物は発見されていない）。

#### 発掘調査工法と問題点

これまでの調査では永久構築物の基礎などが遺構に影響する部分のみ調査が行われてきた。具体的には府営住宅建て替えに伴って開発される高層住宅の住棟部分や集会所・浄化槽の基礎部分などである。

志紀遺跡の調査は当初、開地式で安全勾配をつけて深く掘削、あるいは二段切り梁りによる鋼矢板の垂直掘りだった。しかし、地表下4m以上にも古墳時代以前の遺構が確認され、下層の遺構調査が必要となった。平成2年度にはアースアンカー方式で鋼矢板を自立させる工法が採用された。ただし、費用や調査区外の遺構が部分的に破壊されるという問題があった。平成3年度以降の調査では機械掘削は斜め勾配をつけて断面逆台形に掘り進み、機械掘削後に調査区外周からアースウォウガーで攪拌した後、鋼矢板を自立で圧入する断面Y字形工法が採用された。この工法によって良好で安全な遺構観察、写真撮影が確認され、4次にわたって調査工法に採用された。ただし、この工法では機械掘削面積を広く確保することと、アースウォウガーが調査区外周で作業できる余地が必要と思われていた。しかし、この問題も調査区内に鉄板を置いてアースウォウガーが移動することで、調査区内の遺構に影響を与えることなく鋼矢板を打設する解決となった。今回調査区も以上の工法による。そして、工法の詳細については前掲『志紀遺跡』1995に報告され、大阪府埋蔵文化財担当者研究会などでも発表されていた。

ところが、志紀遺跡4区以降の調査ではこの工法は忘れ去られ、旧態依然の二段切り梁りによる鋼矢板の垂直掘りに後退してしまった。それはちょうど（財）大阪府埋蔵文化財協会が（財）大阪府文化財調査研究センターへ統合・改組された時期に一致する。発掘調査工法の後退は調査担当者が設計段階から参入して協議することなく、また、設計担当者や調査発注責任者もこれまでの調査実績を確認することなく、安易に事業を推進してしまったことに原因があると考えられる。

#### 自然科学分析について

志紀遺跡では弥生時代末期の土層をゆがめる形で地震断層の痕跡や液状化の痕跡が広く確認されている。折しも、今回調査の直後に阪神・淡路大震災が勃発し、発掘成果から地震研究の試みが注目されはじめた。また、1区で花粉等、微化石分析と珪藻分析をして古環境復元をおこなった。例えば、中世水田の裏作として綿花・アブラナの栽培が解明されたことなどの成果を得た。今回は以上の分析成果を基礎に各遺構面から昆虫化石を抽出し、局地的古環境復元を試みた。詳細は考察に示した。

最後に、現地調査・昆虫化石の抽出には以下の方々に参加・協力があつた（敬称略）。

井上孝司 浦 恭子 大坪武志 小川賢治 勝本千春 川原由加子 黒田 香 高野綾子 巽 耕一  
中川寿美 中村晶子 原 恵一 藤村泰之 松吉精一 村上由美子 村山律子

## 第2章 層序

### 基本層序 (図6～8 図版9c)

今回の調査は志紀遺跡において以前に確認された層を追認しながら調査を行った。層番号は遺構面の番号がその基盤となる層の番号に対応する。例えば、第1遺構面の基盤となる土が第1層である。他の調査区の層番号と対応するものでない。これまでの調査では洪水層の厚薄、粗密の差はあるものの基本的に堆積の状況は近似していた。このことはその上面に営まれた水田が広域に、かつ同時期に存在する証拠となるだろう。今後も、これらの層位関係の広がりを確認することによって、洪水のメカニズムと広域的な土地利用の実態解明が望まれる。

第0 a層 (1a・b・c) 府宮住宅造成土・盛り土。客土による。0.5～1 mを測る。

第0 b層 (2～4a・b) 戦後から現代の耕作土。及び、二次大戦の焼土(2)。戦中・戦前の旧八尾飛行場施設に伴う造成土(3)。畑作の耕土・床土(4a・b)。造成土直下には条里制地割りに添った近代・現代水田、畑の区画が明瞭に残る。

第0 c層 (4c・d・5・6a・b) 青灰色、暗緑灰色の粘土質シルト、シルト質粘土。中世から江戸時代にいたる畑作の耕土・床土など(4c・d・5)。中世の洪水による堆積物(6a・b)。

第1 a層 (7a～11d) 条里制水田に伴う耕土(7)と唐鋤痕跡や耕作溝(8)。水田床土(9～11)は緑灰色系のシルト質粘土。志紀遺跡ではこの直下に平安時代の遺構が確認されたこともある(11a～d)。今回調査では発見されなかった。本調査区ではこの層を基盤にした第1遺構面を確認している。

第1 b層 (12) 灰白色シルトで部分的にラミナを形成する。志紀遺跡全域で確認され、粗砂・中砂・微砂を含む厚い洪水層である。1 mをこえる厚さの場合もある。この洪水層を境に上面には方位に添った条里制水田が、下層には自然地形に添った小区画水田が検出される。上面の第1遺構面は平安時代末以降に造成されたもので、条里制水田の開始がいつまでさかのぼるのかは確認出来ていない。なお、洪水層には飛鳥時代、奈良時代の遺物を含むものの遺構はない。

第2 a層 (13・14) 水田耕土は茶褐色粘土(13)、床土は明灰色シルト・粘土(14)。志紀遺跡ではこの層が広範囲に確認出来ており、6世紀後半の土器を共伴する。

第2 b層 (15～19) 緑灰褐色粘土、暗緑灰色シルト質粘土。耕作土と床土の関係が確認できるものの土壌化が進んでおり、面の認識・詳細な分層は今回調査区では出来なかった。

第3層 (20・21) 水田床土は緑灰色シルト質粘土(21)。層間に挟まれる灰白色粗砂と有機物の混じる黒褐色粘土層(20)は薄いものの第3遺構面の耕作土となる。

第4 a層 (22・23a) 水田床土は暗緑灰色シルト質粘土(23a)。層間に挟まれる有機物の混じる赤黒褐色粘土層(22)は薄い耕土。下層の洪水層が土壌化し水田床土が形成されたようだ。

第4 b層 (22b・c) 緑灰色・暗緑灰色・灰色シルト～粗砂の洪水層。これまでの調査では本層から下層にかけて地震による正断層が認められている。弥生時代終末期の土器を含む灰色粗砂層が形成される場合もあり、その砂が地震のおり、噴砂となって吹き上がる地点も確認されている。

第5 a層 (24a・b・25a) 黒灰色強粘土。上面は第5遺構面の床土となる。上面に薄い耕土層がある(24a・b)。これまでの調査では弥生時代の小区画水田・多重の大溝などが発見されている。今回調査

S

X=-155,458,000

X=-155,448,000<sup>N</sup>  
(T.P)

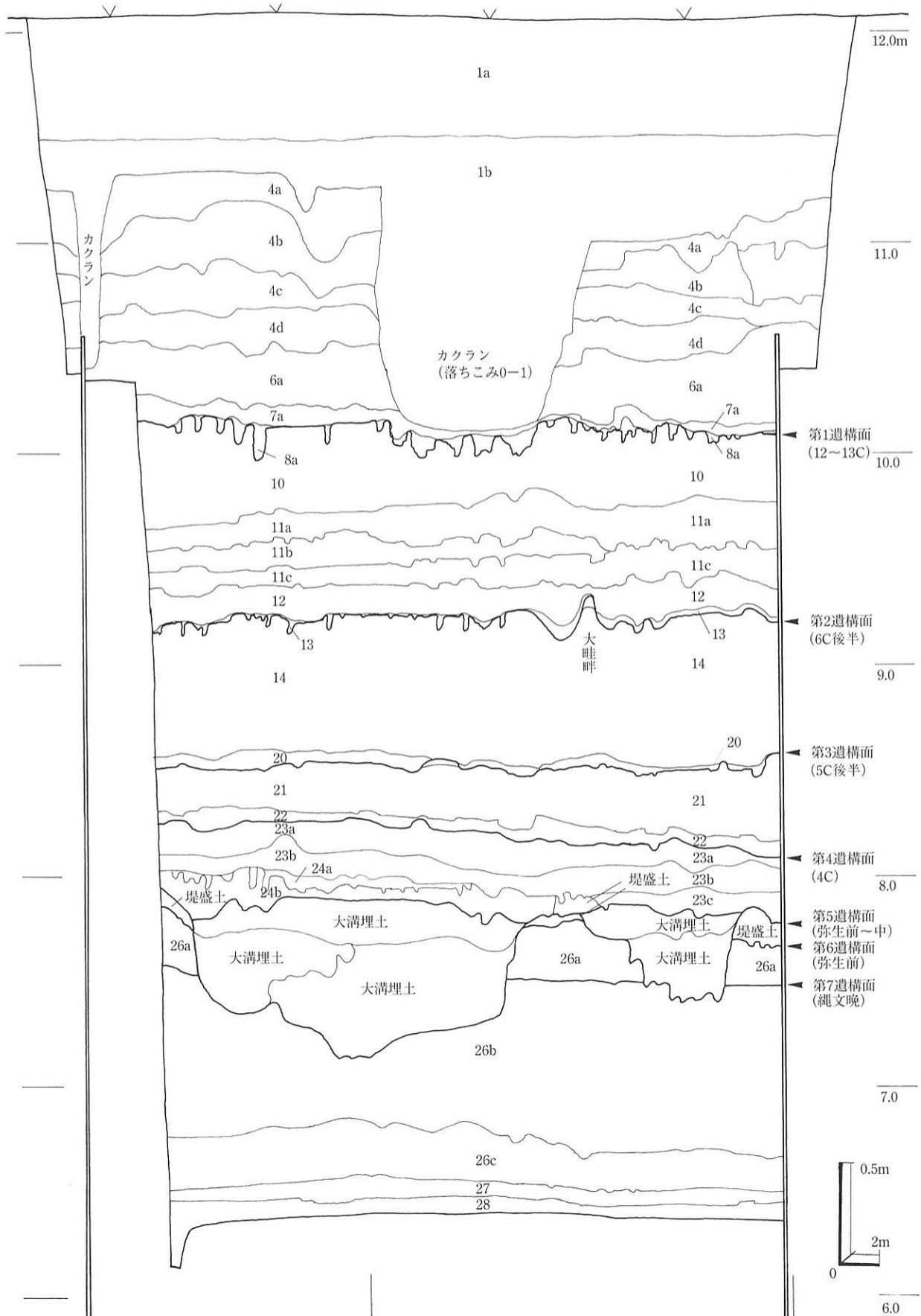


図6 2A区西壁土層断面 (垂直距離1/300 水平距離3/800)

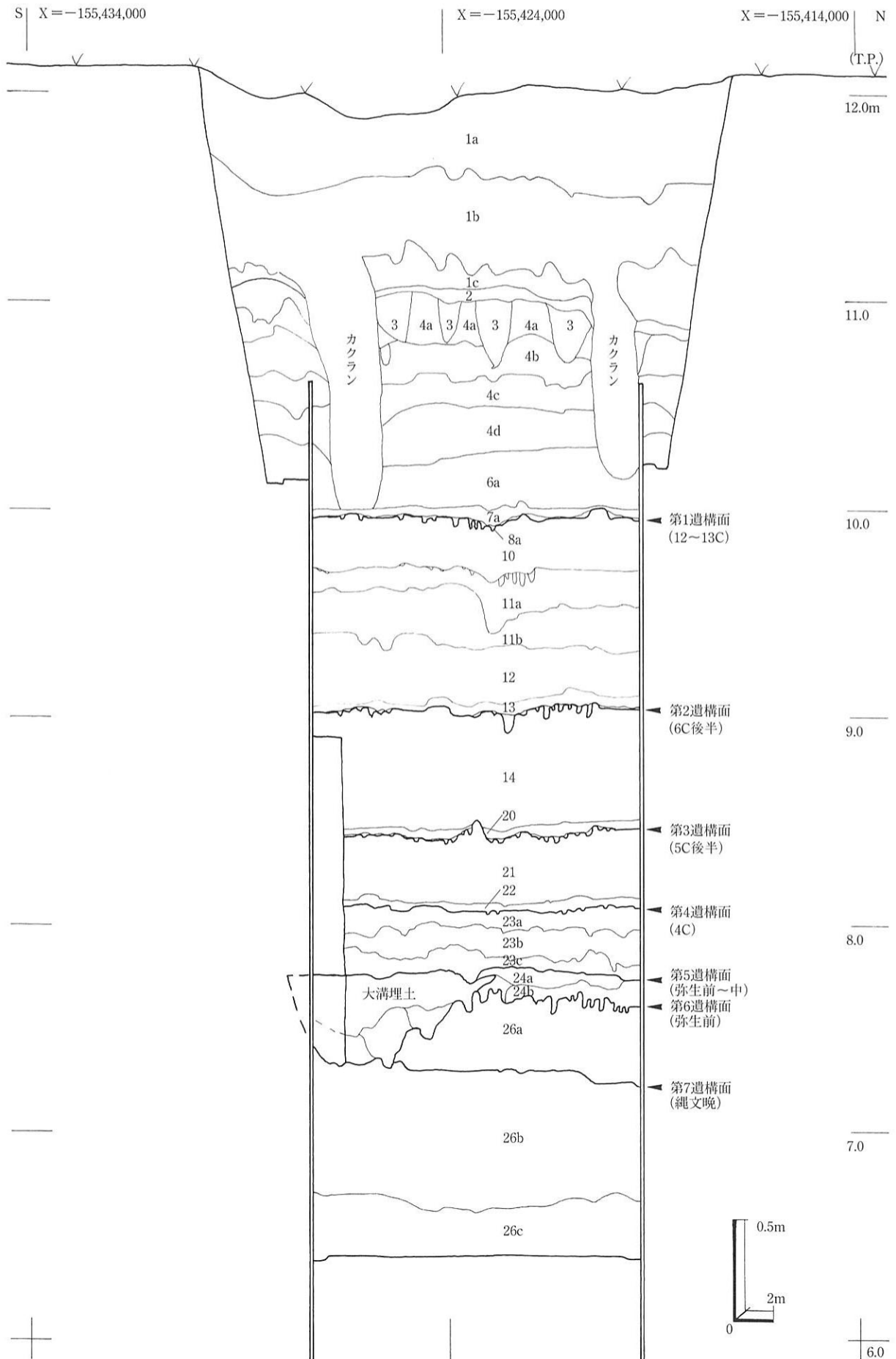


図7 2B区西壁土層断面 (垂直距離1/300 水平距離3/800)



区では西側に大溝、東側に水田があり、中央は空閑地だった。空閑地にはサヌカイト剥片が散乱する一角があり、遺構面と認識出来た。中河内で広範に確認できる黒バンド層と考える。

第5b層(26a・b) 水田床土は青灰色・緑灰色粘土。固く締まる。本層から下で生痕化石が発達して見られ、上層の黒灰色粘土が入るところもある。これまでの調査で広く発見される。中河内で広範に確認できる青バンド層と考える。この層を床土に第6遺構面である弥生前期の小区画水田が営まれる。志紀遺跡で水田が開始される時期を示す。ただし、同じ面から縄文時代晩期の土器も確認されており、縄文時代の地表面を造成しながら水田開発が行われたのか、水田が営まれている時期に縄文時代晩期土器が持ち込まれたのか判然としていない。

第6層(26c) オリーブ黒色粘土。固く締まる。第5a層の黒色粘土よりやや褐色気味である。植物遺体が薄いラミナを形成し、細かい互層となる。中河内で広範に確認できる縄文時代晩期の黒バンド層と考える。

第7a・7b層(27・28) 緑灰色粘土質シルト。黒褐色粘土。固く締まる。いわゆる青バンド層(27)と黒バンド層(28)。人工遺物は確認されておらず、形成時期はわからない。志紀遺跡では広範に確認出来、地山を認識するカギ層となっている。黒色粘土には植物遺体が多く含まれ、互層をなす。部分的に凹凸があり、自然河川や落ち込みが認められ、この凹凸は第6層にも影響する部分がある。

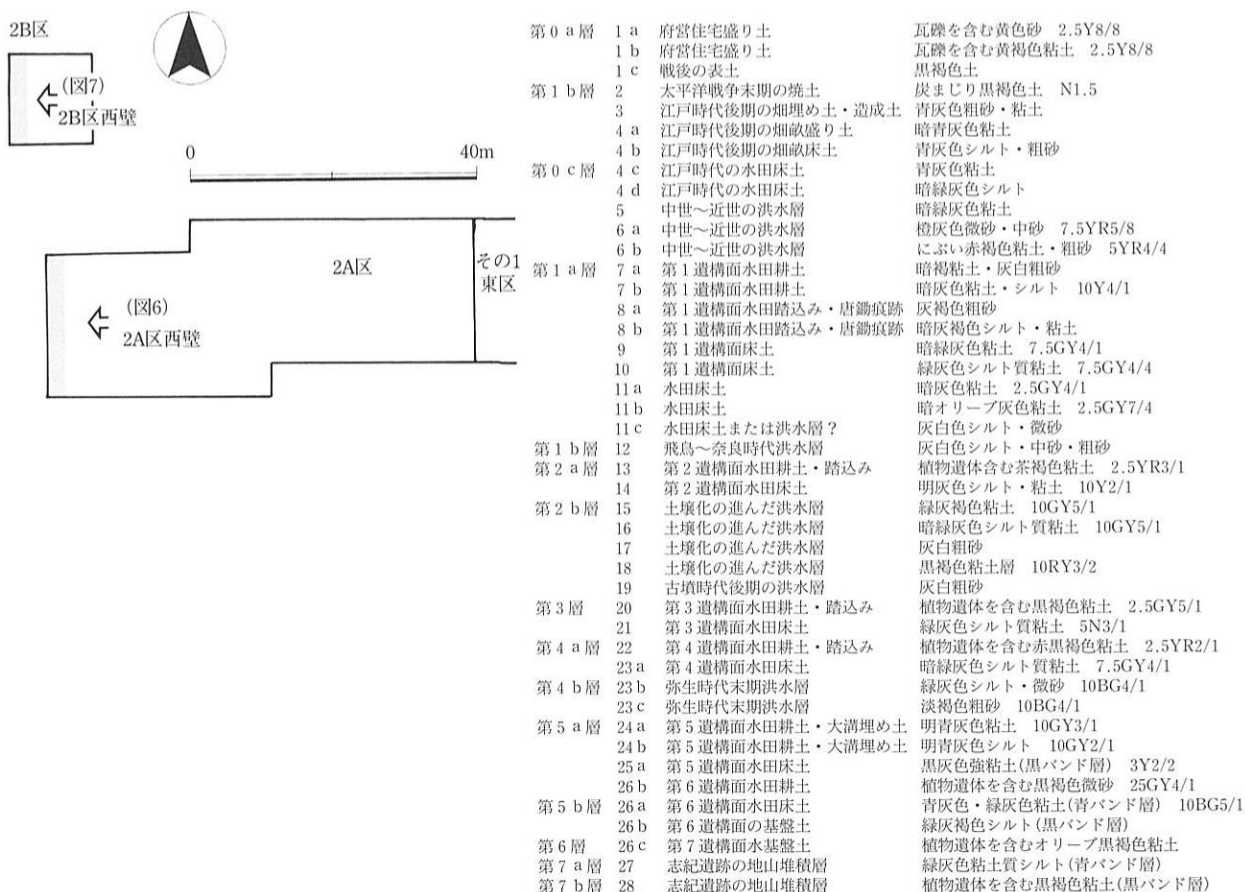


図8 2A・2B区単位層・堆積層の対応関係と土色

## 第3章 遺構と遺物

### はじめに

本章では7つの遺構面とその上面を覆う洪水層について、遺構・遺物概要を報告する。各遺構面の年代は第1章に示すとおりで、本報告書では2区調査のみに対応する。

志紀遺跡周辺では戦前・戦後の航空写真から碁盤目状の条里制水田が確認され、河内平野の条里制水田を研究するにあたってはやくから注目されてきた。しかし、近年まで見られた条里制地割りが中世以降、現代まで同じ形で引き継がれていたのかについては明確にされていない。

1区・2区調査では機械掘削時に江戸時代末～明治時代にかけての水路状遺構を確認、大量の陶磁器類を発見している。含まれた遺物からこの遺構面は大和川付け替え以降とわかる。そして、現代の志紀集落がある地表面から2m近く埋没した標高であることを確かめることができた。つまり、戦前・戦後の航空写真や陸測図から復元された条里制水田の年代は少なくとも遺跡周辺においては江戸時代にさかのぼらない地割りである可能性を指摘できる。さらに、その地割りが江戸時代以前と合致するのであれば、土地がかさ上げされる過程で地割りが踏襲され続けた実態を詳細に確認していく必要がある。

実際のところ、志紀遺跡で第0層として機械掘削で除去した地層には江戸時代から戦後にかけて、畑作が行われた畝溝群が重層的に広域に確認出来る。また、その間の時代には大正飛行場の施設や戦時下の食糧増産で著しく土地利用が変化した様だ。このような歴史を経て、江戸時代以前の条里制水田と現代の条里制地割りが合致するのであれば、そのメカニズムを追跡する必要があるだろう。現段階では航空写真に写し出された条里制地割りから、中世の条里制水田を安易に復元することは出来ないと考える。上述、江戸末から明治期にかけての水路状遺構と包含遺物については本章の8で報告、検討する。

### 1. 第1遺構面 (図9 図版1a・3・10a)

#### 第0層

本節の第0層は特に、第1遺構面直上を覆う洪水層、第0c層を中心に報告する。この層より上面は江戸時代の陶磁器を少量含む耕作土があり、それを切り込む様に現代の攪乱が多数ある。以上を機械掘削で除去した。耕作土の下を人力掘削で、精査すると中世の遺物を含む洪水粗砂層が現れた。この層を除去し、その下の微砂層を取り除くと緑灰色シルト質粘土の床土上に遺構面が見つかった。第1遺構面とした。

主要な遺構は南北に規則正しく並ぶ大畦畔とそれを切り込む形でほぼ東西に無数に穿たれた鋤溝群、両者に伴う足跡群である。足跡には牛馬のものと人間のものがある。

南北畦畔は条里制水田に伴うもので合計7条ある。第6次調査の畦畔に取りつく位置にあり、長地形の地割りを形成する。南北畦畔をつなぐ東西の畦畔も1条ある。南北畦畔にはすぐ脇に同じ幅の溝が取りつくものもある。鋤溝群は調査区中央の南北畦畔から東側にかけて連続的に切り込まれる。東端の南北畦畔を境にUターンする痕跡が連なる。東端南北畦畔の東側は南北方向に小溝群が並ぶ。鋤溝群が及ばない調査区中央から西側には鋤でD字形に掘り起こした痕跡が南北に連続する。この掘り起こし群は等間隔に3条分が明瞭に認められる。足跡は遺構面全体を覆う。これらの遺構は第1遺構面が地表にあったことを示し、基盤が比較的柔らかい状態になるよう浅く帯水していたことを予測させる。条里制

水田が洪水で覆われる直前の状況と考える。主要遺構の詳細は以下に示すとおりである。

### 第1遺構面の水田遺構（図9 図版1a・3）

南北大畦畔1-1は長さ約14.2m、幅約0.5m、A区の西端で検出され、さらに南北へ伸びると思われる。畦畔の上には灰白粗砂による洪水層が約3cm残っていた。中央は攪乱によって一部破壊されている。南北畦畔はこの大畦畔を起点にほぼ10.9m間隔に並ぶ。

南北畦畔1-2は長さ13.7m、幅0.5m、高さ0.1mを測る。畦畔はさらに北南へ伸びる。この畦畔から東西畦畔1-1が東に分岐し、南北畦畔1-3に取りつく。この畦畔の東側には南北溝1-1が取りつく。

南北畦畔1-3は長さ14.5m、幅0.5m、高さ0.1mを測る。畦畔はさらに北南へと伸びる。

南北畦畔1-4は長さ10.6m、幅1.8m、高さ0.1mを測る。畦畔はさらに北南へと伸びる。この畦畔は後の耕作で削平され、両側に南北溝1-2・1-3が痕跡をとどめることによってかろうじて存在が確認出来た。第6次調査の南北畦畔1-5に対応する位置にある。

南北畦畔1-5は長さ10.7m、幅1.6m、高さ0.2mを測る。畦畔はさらに南北へと伸びる。上面は後の唐鋤のUターン痕跡で削平されている（図版3c）。この畦畔の両側には南北溝1-4・1-5が取りつく。第6次調査の南北畦畔1-4に対応する位置にある。この畦畔を境に東側は小溝群が南北方向に西側に鋤溝が東西方向に穿たれる。

南北畦畔1-6はB区の西端から発見された。長さ5.5m以上、幅0.5mを測る（図版10a）。

南北溝1-1は長さ13.7m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。A区の南北畦畔1-2に取りつく溝である。この溝の西側には鋤溝群がほとんど及ばない。

南北溝1-2・1-3は長さ10m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。南北畦畔1-4の東西に取りつく溝である。南北溝1-4・1-5も長さ15m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。南北畦畔1-5の東西に取りつく溝である（図版3c）。

### その他の遺構

第一遺構面上には畦畔や水田面を問わず多数の足跡群が検出されている。足跡は牛馬が歩行したと思われる楕円形のくぼみ、人間が歩行した時の足跡、唐鋤をひいたと思われる痕跡がある（図版3c）。

東西方向の唐鋤の痕跡は南北畦畔1-2と南北畦畔1-5間の水田面にみられる。それは南北畦畔1-5上でUターンしている。唐鋤の痕跡は断面が半月状で深さ約7~15cm、幅は約15cm前後だった。この鋤溝群と方向や形態が共通する一群が1区でも発見されている。

南北畦畔1-5の東側では南北方向の小溝群が折り重なって発見された。南北畦畔1-5の西側でも同規模のものが点在しており耕作溝と考える。小溝群は長いもので13mをこえ調査区の南北に続く。短いもので約1m、幅はみな0.35m前後である。埋土は上層の暗灰褐色シルト・粘土によっており遺物はない。掘り底は船底形を示す（図版3c）。

### 第1遺構面の出土遺物（図10・図版12）

第1遺構面の遺構に伴う遺物は少ない。遺構面を覆う粗砂層から瓦器・土師器・青磁などが発見された。昆虫化石の抽出は水田を好む水生昆虫や食虫性昆虫、牛馬耕を示唆する食糞性昆虫があった。

瓦器は椀と皿がある。椀は内外面とも暗文が丁寧に施され、高台が高くふんばる古い型式が確認されている（2006~2013）。一方、暗文が粗雑化し、高台が貧弱になるもの（2022）、更に形骸化し外面が無調整で指頭圧痕を明瞭に残すもの（2021）がみられる。以上より、この遺構面の開発は平安時代末か

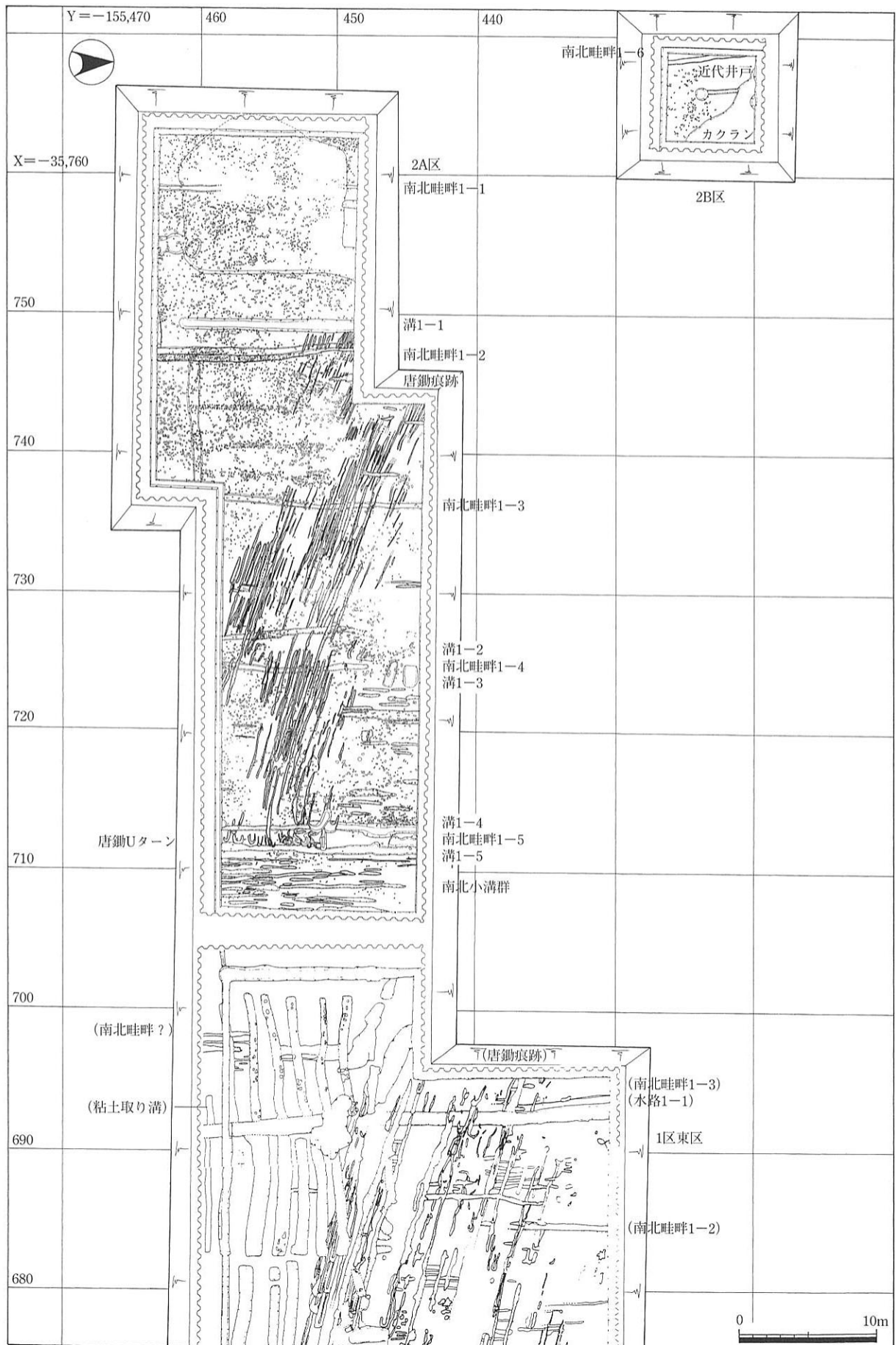


図9 2A・2B区第1遺構面(平安時代末~鎌倉時代前期)(1/400)

ら鎌倉時代初頭にかけておこなわれたと考える。以後、小規模な洪水を克服しながら、小溝群や唐鋤の痕跡などが残され、鎌倉時代中頃まで存続していたと考える。その後の土地利用の状況は上層の削平等によって明瞭でない。これらの成果は第6次調査・1区の成果に共通する。

## 2. 第2遺構面 (図13 図版1b・4・10bc)

### 第1層

第1遺構面の基盤である緑灰色シルト質粘土は土壌化がすすんだ土層であり、その下には灰白色シルトが中心のもろい湧水層が折り重なっていた。奈良時代の土器片や瓦が数点含まれていた。その下には粗砂・中砂・微砂層があり、飛鳥時代の遺物を含んでいた。今回調査ではこの間の遺構面は良好に残されておらず、検出していない。粗砂層を除去する段階で第2遺構面の大畦畔が顔を出した。第2遺構面の直上は、植物遺体を含む茶褐色の薄い粘土層によって覆われる。その粘土層は小畦畔を覆っていたが大畦畔の最上部まで達していなかった。

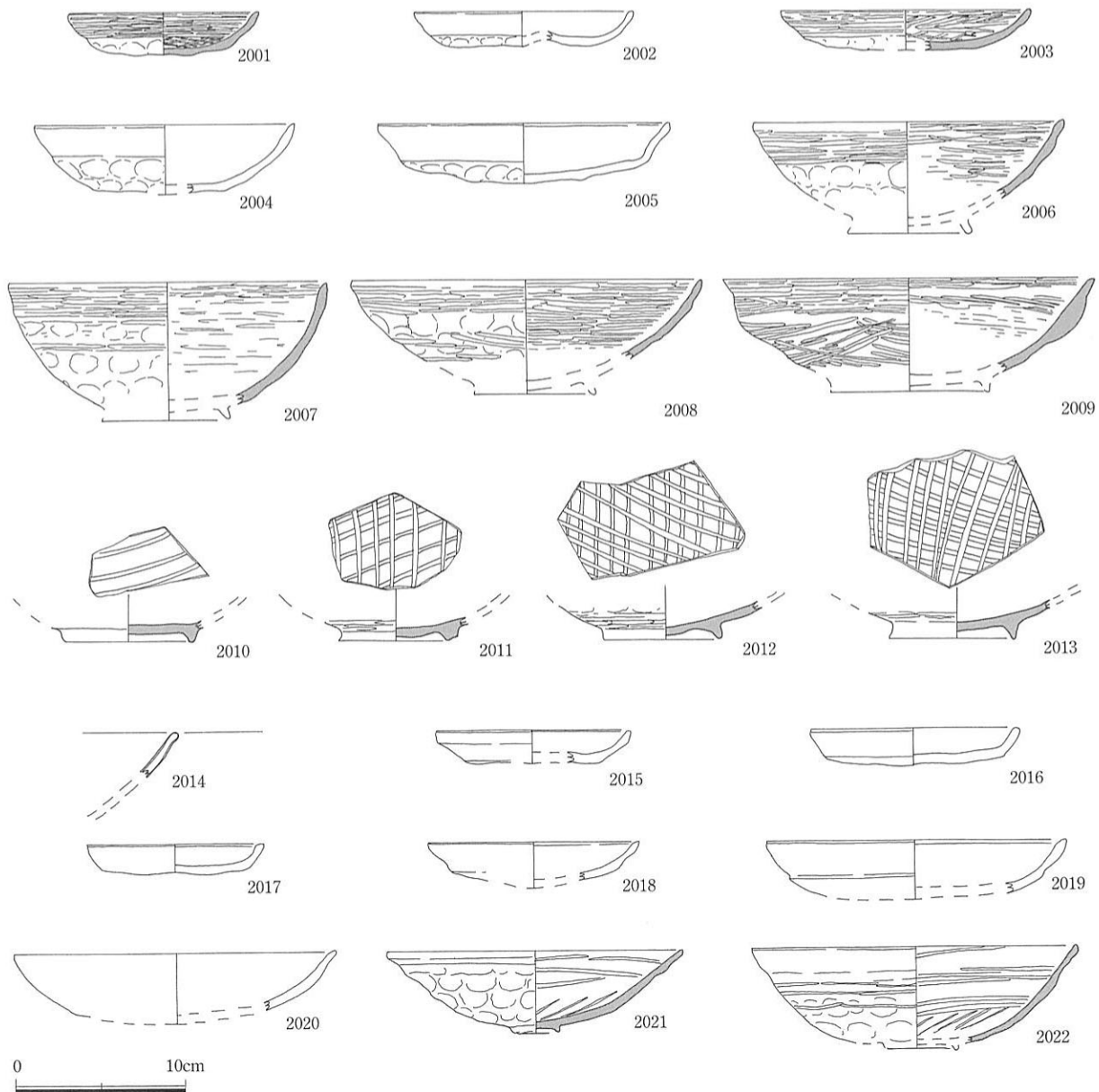


図10 2区第1遺構面出土遺物 (1/3)

## 第1層の出土遺物 (図11 図版12)

第2遺構面上層の洪水層中から発見された遺物は奈良時代から飛鳥時代のものが混在している。これらの遺物が洪水に伴うものか、かつてあった同時代の遺構面を削平したものか判然としない。付近の調査で奈良時代の遺構が散在することも知られている。今回の調査でも奈良時代のもと思われる瓦片が発見されている。それ以外に洪水層中より縄文時代後期の緑色片岩製石棒が確認されている。紀ノ川中流域から運ばれてきた石材だろう (図37-2211)。

飛鳥時代の土器には須恵器・土師器がある。土師器には粗い作りの高杯があり、酷似するものが7次調査で発見されている。椀は型づくりだろうが、形態が酷似する (2023~2026)。

須恵器は坏蓋の口径が小さく頂部無調整で口縁端部も丸い。須恵器杯身は立ち上がりの内傾がきつく端部の鋭さに欠ける (2027~2031)。以上の土器は飛鳥編年のIII段階、650年前後の年代を示す。

奈良時代の土器には須恵器・土師器・瓦がある。土師器皿は口縁端部を平らに仕上げるもの、つまみ上げるものがある。胎土が精練され、暗文が施される (2033~2035)。甕は外面に縦方向の刷毛目が密に施され、煤ける。口縁端部は丸く厚いもの、平らに発達するものがある (2037・2038)。以上の土器は平城編年のIII~IV段階、奈良時代でも中頃から後半に該当する。

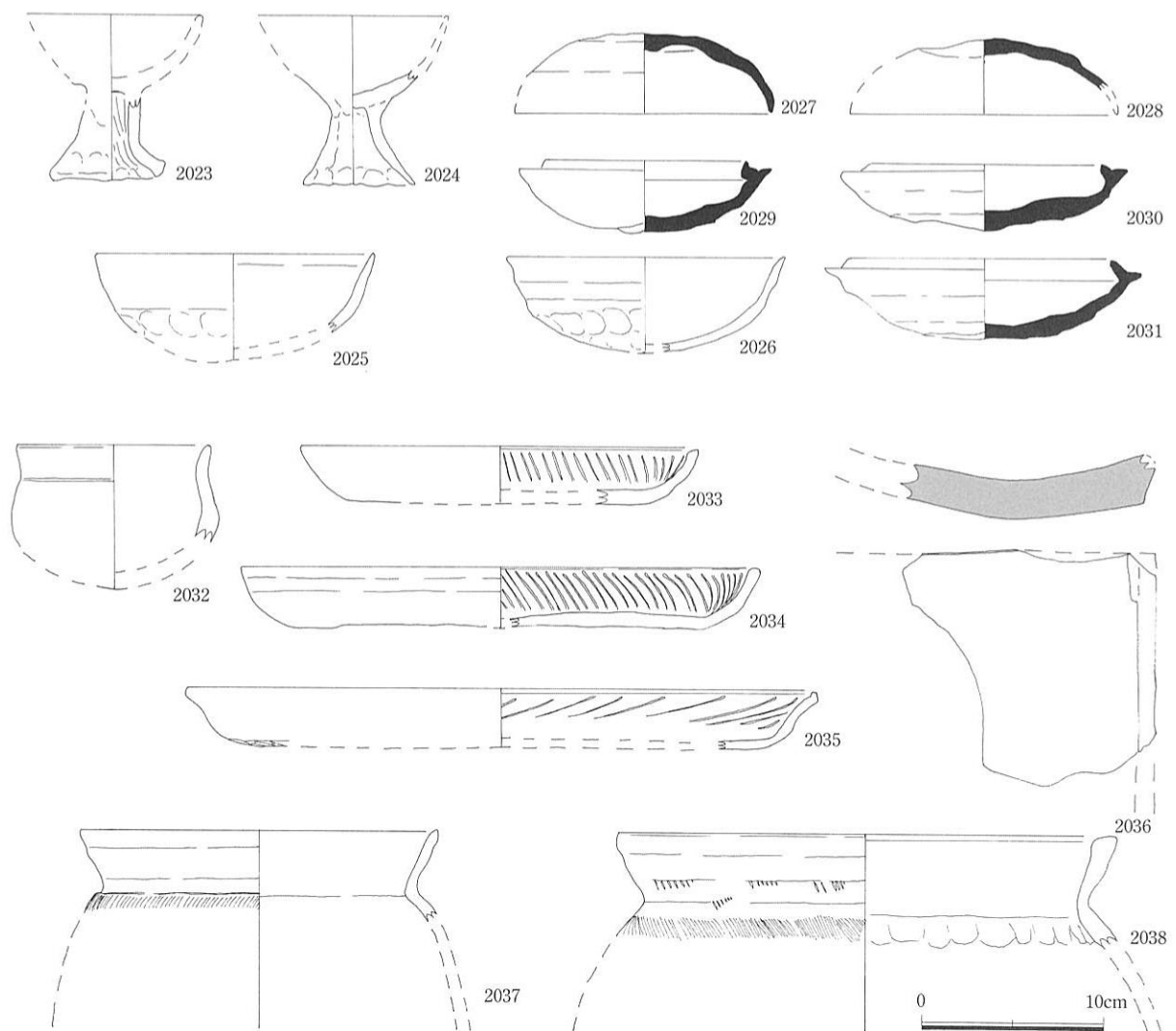


図11 2区第1層出土遺物 (1/3)

第2遺構面の水田遺構（図13 図版1b・4・10bc）

第2遺構面からは、南東から北西にはしる3本の大畦畔と、そこから網の目状に伸びる小畦畔によって区切られた水田が見つかった。しかも、遺構面全体には大人から子供までの人間の足跡が一面に残されていた。

南北大畦畔2-1は、全長14m以上、幅約0.9m、真北に対して約55°西にふれる大畦畔である。遺構はさらに南北に調査区外へと続く。この南北大畦畔2-1に直行するかたちで東側に1本の小畦畔が取りつく。南北大畦畔2-1に西側には一枚の小区画水田が、東側には2枚の小区画水田がある。

南北大畦畔2-2は、南北大畦畔2-1の東に位置する大畦畔である。全長16m、幅約0.7m、真北に対して約30°のふれをもつ。遺構は更に南北に調査区外へと続く。この南北大畦畔2-2に直行するかたちで東側に3本の小畦畔が取りつく。東側で直行する3本の小畦畔は、南北大畦畔2-2に平行する南北大畦畔2-3との間に4枚の小区画水田を形成する。

南北大畦畔2-3は、南北畦畔2-2の東に位置する大畦畔である。全長17m、幅約0.7m、真北に対して約30°のふれをもつ。遺構は更に南北に調査区外へと続く。この南北大畦畔2-3に直行するかたちで東側に2本の小畦畔が取りつく（図版4c）。

東西大畦畔2-1は南北大畦畔2-1と南北大畦畔2-2を結ぶ大畦畔で直行する4本の小畦畔を南北に分岐させる。

合計、2A区内に18枚の小区画水田が見つかった。また、2B区では小畦畔は確認出来なかったものの足跡は多数確認出来ている（図版10bc）。

第2遺構面の出土遺物（図12 図版12b）

遺構面直上から土師器・須恵器が見つかった。第1遺構面同様、水田を好む昆虫化石を確認した。

小形の土師器碗はこれまでの調査でもたびたび発見されている。暗文はない（2039）。

須恵器杯蓋は口径15.1cm、器高4.6cmを測る。作りは粗く、口縁端部を丸く仕上げる。須恵器杯身は立ち上がりが低く内斜し口径15cm以上を測る。同じ作りで脚部の付く有蓋高杯も発見されている。その他、壺口縁と底部片がある（2040～2045）。以上より、第2遺構面は6世紀後半に位置付けられる。

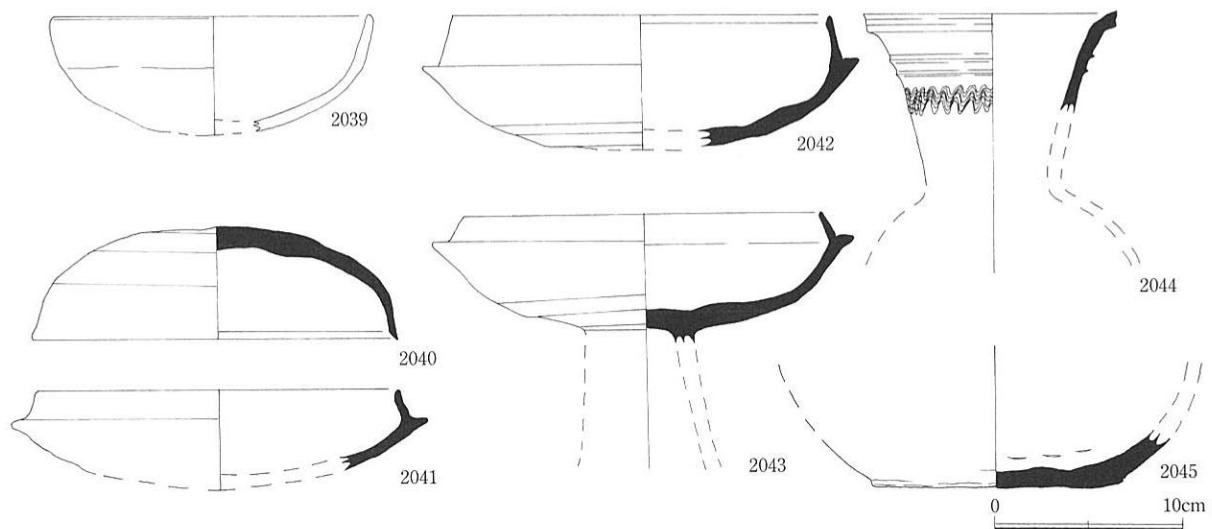


図12 2区第2遺構面出土遺物（1/3）



图13 2A・2B区第2遺構面（古墳時代後期）（1/400）



3. 第3遺構面 (図15 図版1c・5・10d)

第2層

第2遺構面の基盤である明灰色シルト質粘土の下にはいくつかの水田面がとぎれがちに続く。足跡の痕跡がこの遺構面もあったが1区の調査でも全体には拡がらないことがわかっていたため、割愛した。その下に薄い粗砂層と黒褐色粘土があり、下面は土壌化した粘土層がある。この粘土層は草根による侵食や水田耕作に伴う攪拌で層界を明快することが難しい。したがって、大畦畔の基底部から伸びる小畦畔の痕跡と足跡遺構を頼りに第3遺構面を検出した。これまでの調査と同じ要領である。

第3遺構面の水田遺構 (図版5)

第3遺構面からは、南東から北西にはしる3本の大畦畔と、そこから網の目状に伸びる小畦畔によって区切られた水田が見つかった。南北大畦畔3-1は全長14m以上、幅約0.8m真北に対して約10°西にふれる大畦畔である。遺構は更に南北に調査区外へと続く。上面は明瞭でなく基底部のみ検出された。この南北大畦畔3-1に直行するかたちで東側に1本、西側に2本の小畦畔が取りつく。

南北大畦畔3-2は南北大畦畔3-1の東に位置する。全長14m以上、幅約0.5mを測る。北端は西に曲がる。南北大畦畔3-2に直行する小畦畔が東に1本取りつく。南北大畦畔3-3は全長16m以上、幅約0.5mを測る。南北大畦畔3-1に取りつく小畦畔は土壌化が進み明快でない (図版5c)。

南北大畦畔3-4はB区東端で発見された大畦畔である。全長3m以上、幅約0.5m、南北大畦畔3-1あるいは南北大畦畔3-2に取りつくと考え。小畦畔は西側に1本ある。

第3遺構面の出土遺物 (図14 図版12b)

土師器碗は外面に指押さえの痕跡が明瞭に残る。口縁部をなで仕上げし、丸くする。土師器甕は外面の刷毛目は煤が付着して明瞭でない。内面は粗い削りが施されており、薄い器壁を作り出している。いずれも小片からの復元である。今回の調査では須恵器の発見はなかった (2046~2051)。

その他、大足の部位と思われる木片が発見されている。長辺35.5cm、幅2.8cmの針葉樹板材である。両端に突起状のほぞをもつ。よく似た部材が1区から2本発見されている (2052)。

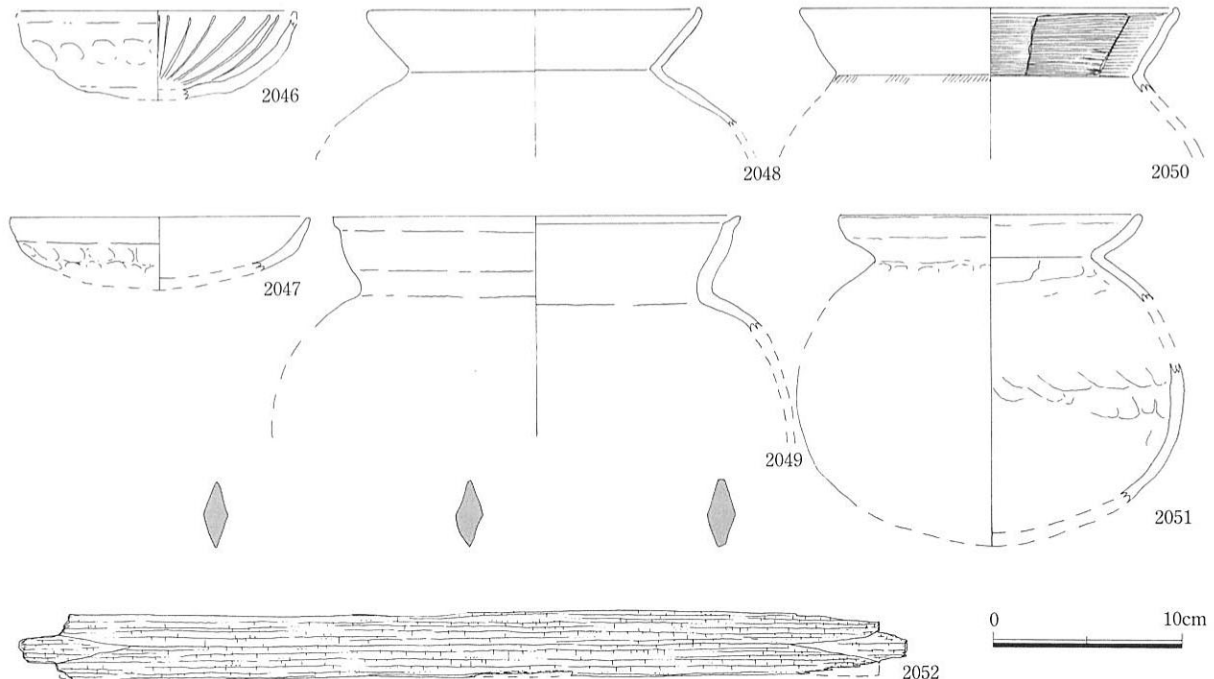


図14 2区第3遺構面出土遺物 (1/3)

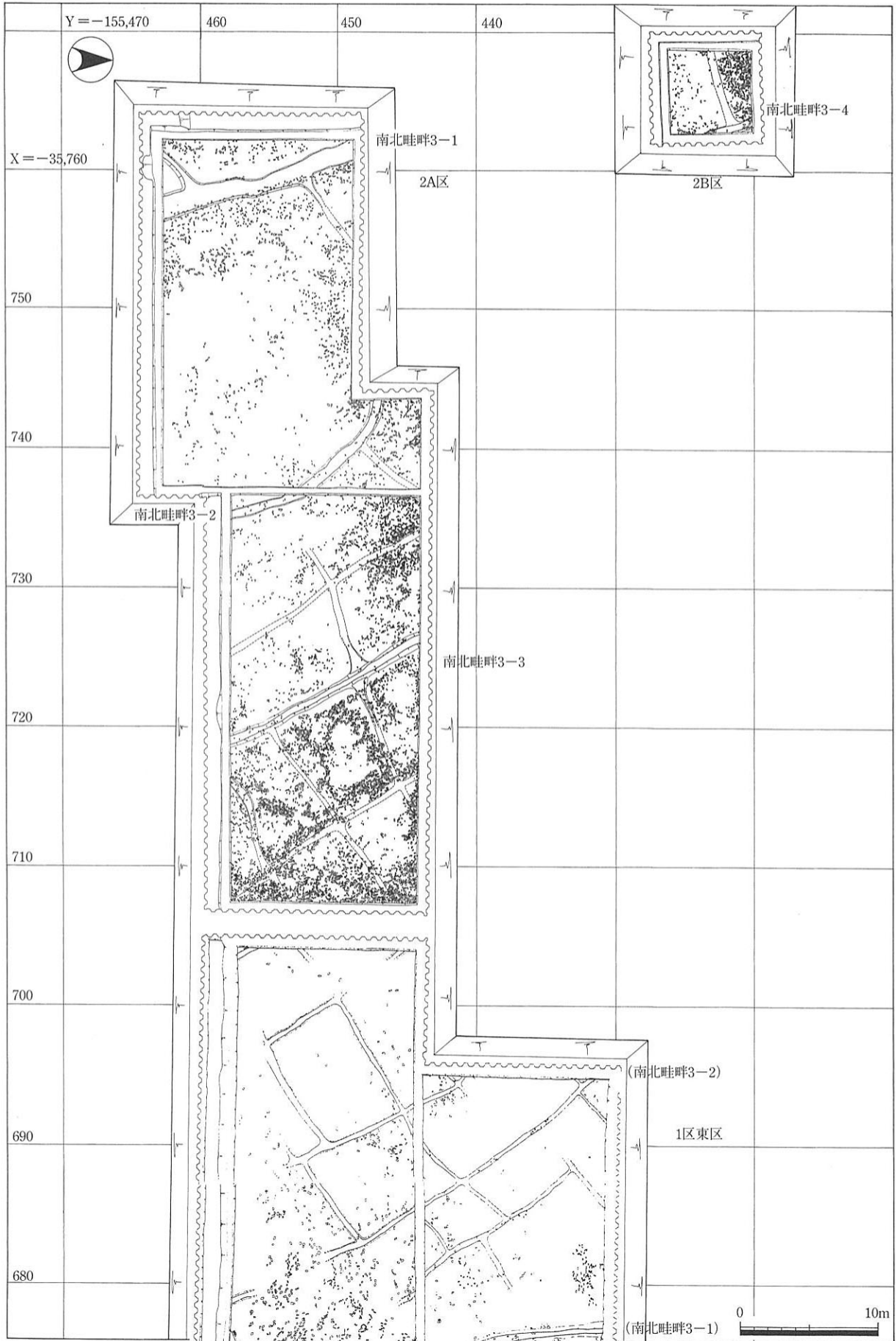


图15 2A・2B第3遺構面(古墳時代中期)(1/400)

#### 4. 第4遺構面 (図17 図版2a・6・10e)

##### 第3層

第3遺構面の基盤になる緑灰色シルト質粘土を除去すると薄い灰白色粗砂と植物遺体が混じる黒褐色粘土がみえた。この粘土層を薄くはがすと、第4遺構面の大畦畔が顔を出した。大畦畔からは小畦畔が派生し、第3遺構面の大畦畔とほぼ同じ位置から第4遺構面の大畦畔が発見されている。

##### 第4遺構面の水田遺構 (図版6)

南北大畦畔4-1は、全長16m以上、幅約0.5m、真北に対して約17°西にふれる大畦畔である。遺構は更に南北に調査区外へと続く。この南北大畦畔4-1に直行するかたちで東西に2本ずつ、小畦畔が取りつく。大畦畔の東西に隣接して溝が確認出来ている (図版6c)。

南北大畦畔4-2は、全長17m以上、幅約0.6m、真北に対して約17°西にふれる大畦畔である。遺構は更に南北に調査区外へと続く。この南北大畦畔4-2に直行するかたちで西に1本畦畔が取りつく。東側で直行する小畦畔は発見されなかった。大畦畔の東に隣接して溝と並行する畦畔が確認された。

小区画水田は第2、第3遺構面同様、連綿と拡がりをもち、調査区内だけでも27枚の水田があったと予想できる。

大畦畔と並行して3条の溝が発見されている。溝4-1は大畦畔4-1の西に隣接して伸びる全長17m以上、幅0.5m、深さ約5cmの素掘り溝である。溝は真北に対して約15°西にふれ、さらに南北へと続く。溝は小畦畔によって分断されていることから排水の機能より、大畦畔を構築するために土取りされた痕跡かもしれない。

溝4-2は大畦畔4-1の東に隣接して伸びる全長17m以上、幅0.5m、深さ5cmの素掘り溝である。真北に対して約15°西にふれ、さらに南北へと続く。溝4-1と同じ性格のものだろう。

溝4-3は全長13.5m以上、幅0.5m、深さ5cmを測る。溝は真北に対して約15°西にふれる。

##### 第4遺構面の出土遺物 (図16)

出土遺物は少なく、土師器甕口縁部の小片と高杯底部小片をわずかに図化できる程度だった。この状況はこれまでの調査と同様で、第4遺構面の年代観を確定する根拠を薄くさせる (2053~2056)。

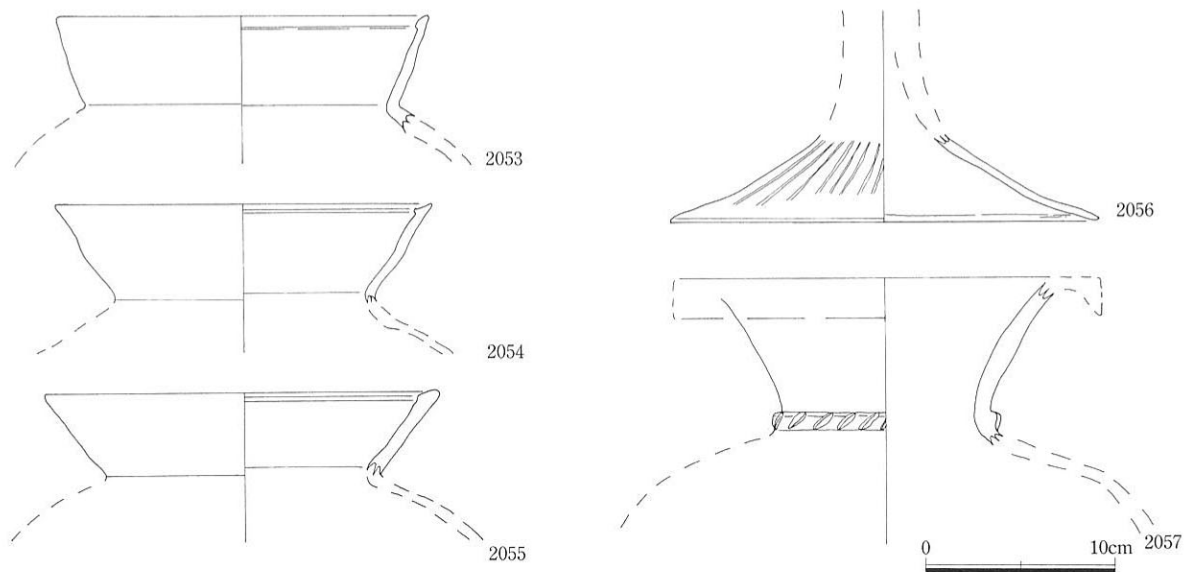


図16 2区第4遺構面・第4層出土遺物 (1/3)

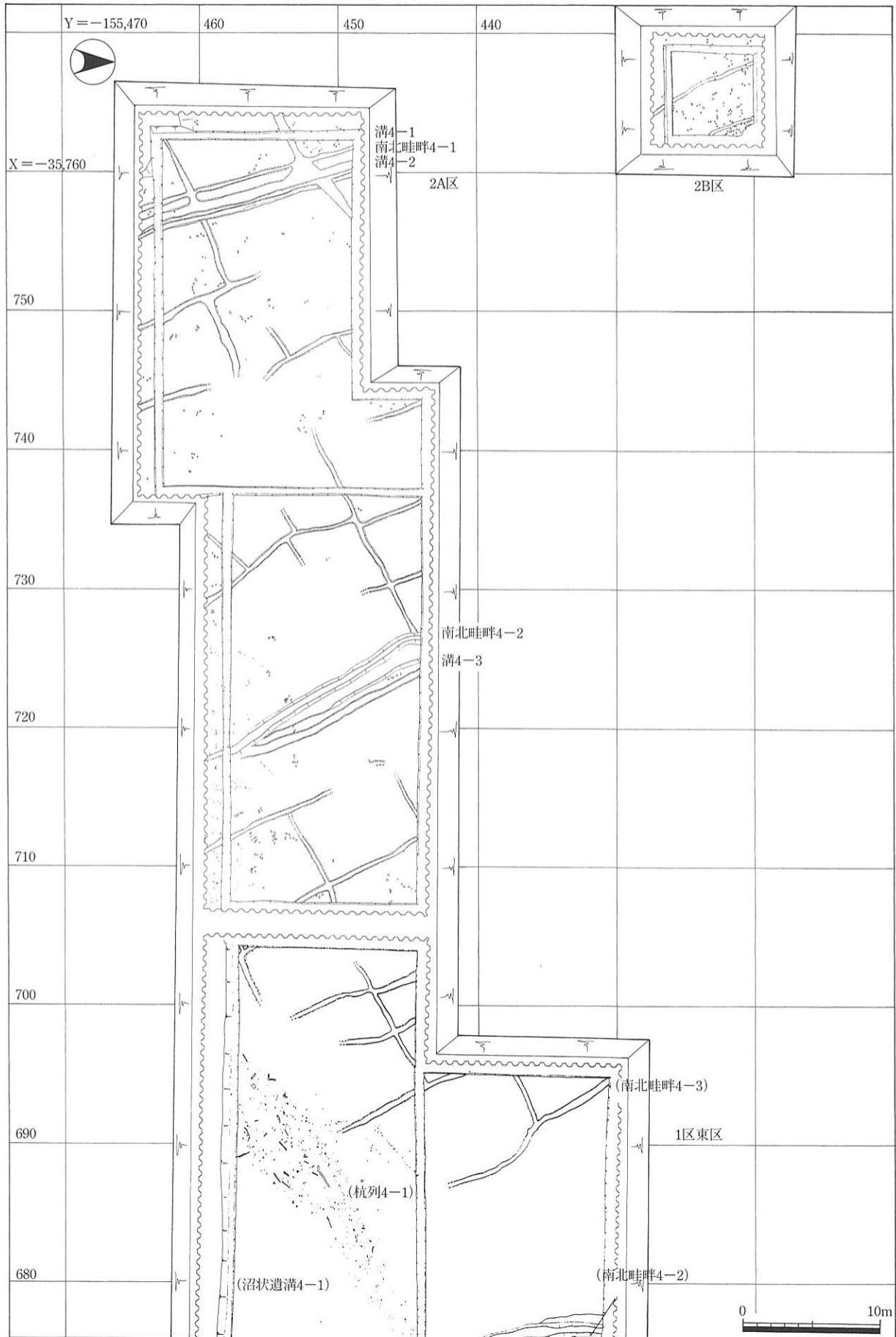


図17 2A・2B区第4遺構面(古墳時代前期)(1/400)

## 5. 第5遺構面 (図18 図版2a・7・10f・11・12)

### 第4層

第4遺構面の基盤になる緑灰色シルト質粘土(第4a層)を除去すると調査区の西側程粗い淡褐砂の洪水層(第4b層)が堆積していた。この洪水層は発達した部分では1mをこえ、上下2層に分層できる部分もある。しかし、堆積の違いが洪水の起源の違いによるものか、どれだけの時期差があるのか判断としない。また、今回調査区では発達した洪水層は見られなかったものの、弥生時代終末の土器小片がいくつか確認されている(2057)。

第4遺構面の基盤層は強く土壌化しているがこの洪水層の最上層になると考えられる。以前の調査で第4遺構面から弥生時代末期の土器が出土した。ところが、今回の調査でこの洪水層に弥生時代末から弥生時代後期の土器が含まれていることがわかり、第4遺構面出土土器も基盤の層に入っていた古い土器が巻き上がっていたと考えざるをえなくなった。また、第4遺構面下層遺構から布留期の土器が出土していることから第4遺構面は古墳時代前期かそれ以降、下層の洪水層が弥生時代後期から末期のいずれかと結論づけられた。

第4遺構面下層の洪水粗砂層を除去すると、調査区の東で網の目状の小畦畔が現われ、水田遺構の痕跡が確認できた。また、調査区の西端では溝状の落ち込みが確認され、1区西区で発見された大溝群に連続すると考えられる遺構があらわれた。

### 第5遺構面の水田遺構 (図18)

調査区の東側で発見された水田遺構は大畦畔がなく、地形に添った小畦畔で区切られた短冊状の11の小区画水田だった。小区画水田の西側は段状になっており、一部を堤にする。ただし、明瞭な盛り土は認められず、水田の境界を堤で区切ったというより、自然の傾斜をそのまま利用した様だ。

水田群の西側は空閑地となり、東西に発達した高まりの道状遺構が見られる。その西側には道状遺構によって分断された大溝群がある。A区で5条、B区で1条発見された。

### 大溝群 (図19・20 図版7c・11・12)

大溝5-1は長さ5m以上、幅2m以上、深さ0.6m以上を測る斜行溝である。埋め土の下層は地山の青灰色粘土と炭化物を大量に含む黒灰色粘土で、人為的に埋め戻されたブロック土の様相を示す。下層の上面には薄い青灰色シルトのラミナ層をもち、これは帯水した後に干上がったことを示すとおもわれる。遺構の大半は調査区外になる。大溝5-1の東岸は堤5-1が並行して伸びている。

大溝5-2は長さ10m以上、幅3.6m、深さ0.6mを測る溝である。大溝は道状遺構5-1を分断し、更に北へ伸びるようだ。道状遺構のとぎれる部分で土坑5-1・5-2を確認した。その西側の溝底には柱が渡されており、かつて板、あるいは橋が架けられていたと推定する。大溝の埋め土は地山青灰色粘土と黒灰色粘土が幾重にも折り重なった人為的な堆積土が下層に、水流がよどんで干上がったことを示す茶褐色強粘土が上層に堆積しており、一時期埋め戻された溝が再び一部を掘り直されたものの、やがて自然に埋没した状況だった。

大溝5-3は長さ8m以上、幅1.5m、深さ約0.3mを測る浅い溝で、道状遺構にさえぎられ、西に屈曲し、大溝5-2に注ぐ斜行溝である。埋め土は茶褐色強粘土で、大溝5-2の上層堆積物に共通する。大溝5-3は浅く、帯水した後に雑草が生い茂り、干上がりながら土壌化したと考える。

大溝5-4は南に長さ10m以上、幅4.1m、深さ0.7mを測る溝で道状遺構5-1によってとぎれる。埋め土の下層は炭化物を大量に含む黒褐色強粘土で、帯水の後に埋没していく過程がうかがえる。その

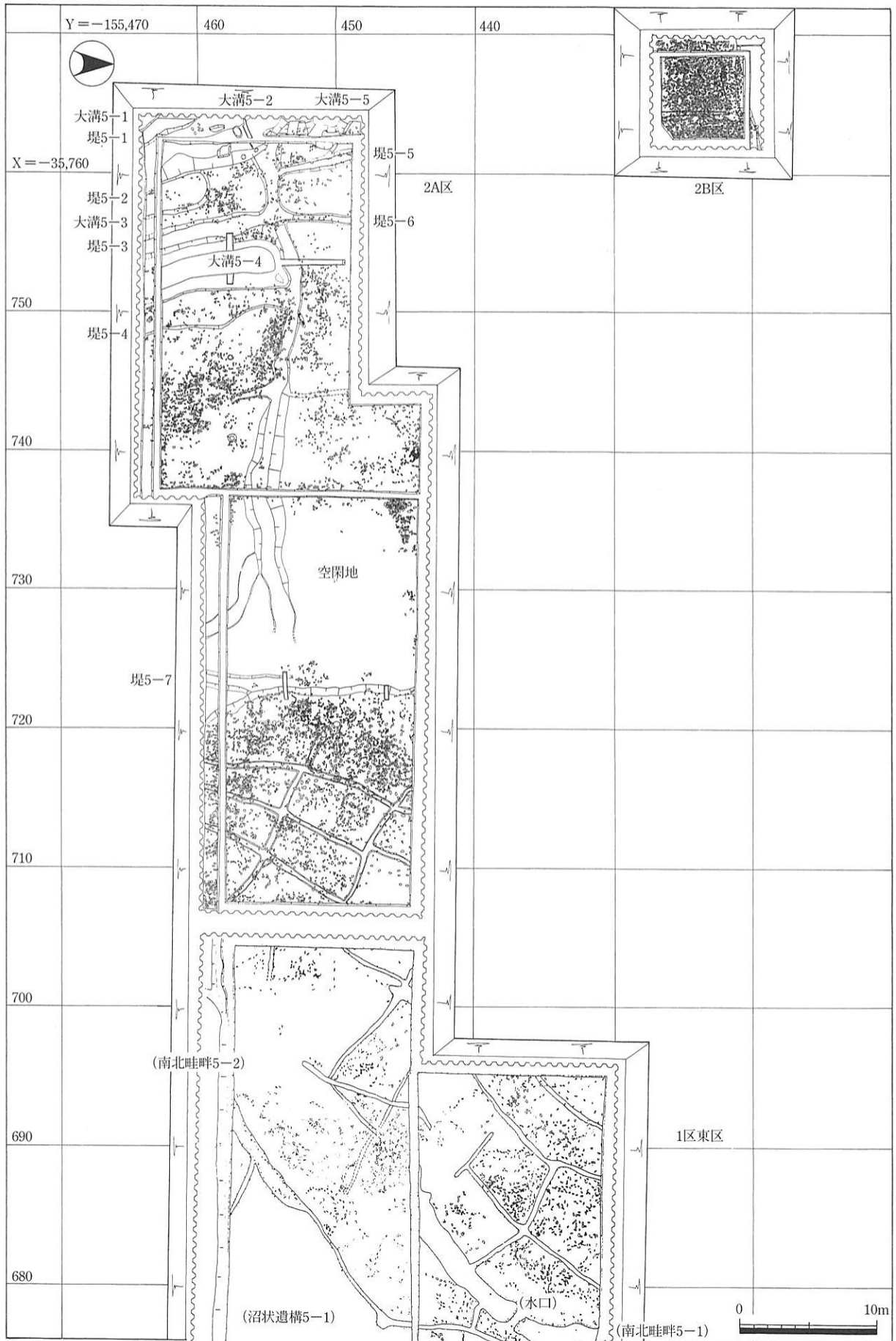


图18 2A・2B区第5遺構面 (弥生時代前~中期) (1/400)



図19 2A区第5遺構面大溝の詳細および出土土器 (3/400・1/3)

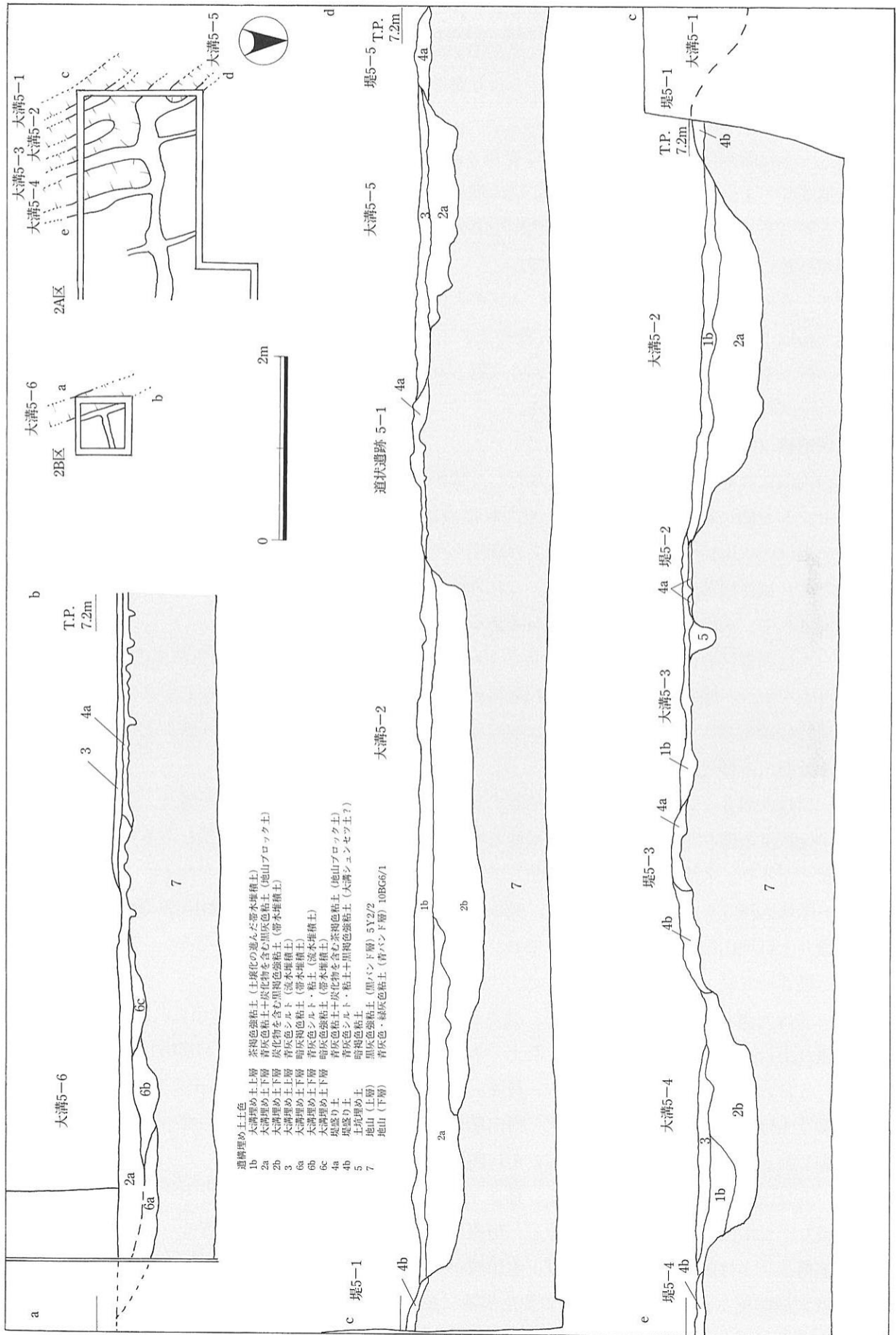


図20 2A区第5遺構面大溝土層断面 (1/40)



上面は踏み込みによって人間が歩いた痕跡も見られ、1区の大溝5-5・大溝5-8とよく似た様相を示す。下層の上面には薄い青灰色シルトと黒褐色粘土のラミナ層をもち、流水の状況がわかる。その上層は地山青灰色粘土と黒灰色粘土が幾重にも折り重なった人為的な堆積土で最終的に埋め戻されたと推測する。

大溝5-5は調査区の西北隅に部分的に発見された。長さとは幅は3m以上、深さ0.8mを測る。大溝は道状遺構5-1によって南がとぎれる。溝の埋め土の下層は地山の粘土で、人為的に埋め戻されたブロック土だった。その上面には薄い茶褐色粘土と青灰色シルトのラミナ層だった。帯水した後 ゆっくり干上がったことを示すものとおもわれる。

大溝5-6はB区の西隅で発見された。A区の大溝5-5と連続するものかもしれない。長さ8m以上、幅2m以上、深さ0.5m以上を測る。埋め土の下層は暗灰褐色粘土、青灰色シルト・粘土、暗灰色強粘土が折り重なっており、帯水と流水がくり返された様相を示す。上層は地山の粘土で、人為的に埋め戻されたブロック土の様相を示している。

#### 堤と道状遺構 (図19)

大溝の両側には堤状の高まりが大溝と並行して構築されている。大溝掘削時の土、あるいは堆積土をシュンセツした際に発生した土が盛り上げられたのだろう。大溝は道状遺構によって分断されるものの、この堤は道状遺構に連結し、道としての機能を持つ。しかし、堆積土は土壌化が進んでおり、埋没した溝と共に雑草に覆われた様相を示す。これは踏み固められた道状遺構と峻別できる状況で、道状遺構に規制されて、大溝と堤が構築されたと考えることができる。

堤5-1は調査区の西端に位置する。長さ4m以上、幅1mを測る。黒茶褐色粘土の地山上に約0.2mの盛り土をもつ。盛り土は炭化物を含む茶褐色粘土と地山粘土と青灰色粗砂などがブロックになったもので遺物は確認できなかった。これらは他の堤の土質と共通し、大溝掘削土が盛り上げられたと考える。堤を分断する形で溝が連結する。

堤5-2は大溝5-2をはさんで東に位置する。長さ5m以上、幅2m以上を測り、黒灰色粘土の地山上に7cm程度の盛り土をもつ。盛り土は他の堤と共通する。大溝5-2を掘削、あるいはシュンセツした土などだろう。大溝5-3が西に屈曲して大溝5-2と連結する部分でとぎれる。

堤5-3は大溝5-3の東に位置する。長さ9m以上、幅約1.5mを測り、地山に0.3m程の盛り土をもつ。盛り土は地山粘土ブロックによっており、大溝5-4を掘削した土などだろう。道状遺構5-1に連結し堤5-6につながる。

堤5-4は大溝5-4の東に位置する。長さ11m以上、幅約2mを測り、地山に0.2m程の盛り土をもつ。盛り土は大溝5-4などを掘削した土であろう。道状遺構5-1に北側が連結してとぎれる。

堤5-5は大溝5-5の東に位置する。長さ5.5m以上、幅約1mを測り、地山に0.4cm程の盛り土をもつ。盛り土は炭化物を含む茶褐色粘土と地山粘土、青灰色粗砂がブロック土になったもので大溝5-5を掘削した土などだろう。堤は土橋5-1に南側が連結してとぎれる。

堤5-6は大溝5-6の東に位置する。長さ5m以上、幅約0.6mを測り、地山に0.1m程の盛り土をもつ。盛り土は地山の粘土ブロックである。南側は道状遺構5-1と連結し、堤5-3とつながる。

道状遺構5-1は調査区の東西に伸び、水田域から1区西区の土橋群を連結させるものと考えられる。道状遺構は大溝群をこえて、田井中遺跡の弥生集落に及ぶと推測する。集落域と生産域を結ぶものだろう。調査区内で長さ37m、幅約2.5mを測る。西側は大溝5-2に分断される。橋などの施設が予想さ

れる。調査区の西側は地山を掘り残し、少量の盛り土を盛って形成される。調査区の中央部分は盛り土が発達するが東側はよくわからなくなるとぎれる。盛り土は土壌化が進んでおり、よく踏み固まっている。基本的に淡茶褐色粘土と灰白色粗砂がブロックになったものなどで構成される。

土坑5-1は大溝5-2の東岸から発見された柱穴状の遺構である。直径0.2m、深さ0.1mで上層は濃黒褐色強粘土が、下層はこの土と地山青灰色粘土が入り乱れる。この土坑の1m南東に土坑5-2がある。大きさ、深さ、埋め土ともに土坑5-1と共通し、2つが一連のものであると推測できる。道状遺構がこの部分でとぎれ、大溝5-2の底に柱状の部材が渡されていたことから、この土坑は木橋の痕跡である可能性が強い。このような痕跡は1区西区で3か所見つかっており、同じ機能と考える(図版12e~g)。

#### 空閑地

調査区の東には水田遺構が拡がり、その西端は自然地形を利用した段状になる明瞭な境界だった。一方、調査区西側の大溝群も堤が並行して営まれ、東端は明瞭である。その間は空閑地となって、両者を繋ぐ道状遺構以外に遺構は見られない。基盤の黒灰色粘土は土壌化が進み、植物遺体も含まれることから長らく放置されていたことがうかがえる。

遺構面の検出段階で道状遺構の北側にサヌカイトの碎片が確認出来た。これらの石屑はもともと面的に分布していたのだろうが、土壌化とともに土中に包含された様である。遺構面の直上から発見されたものと上面の黒灰色粘土中から発見されたものを分離することは出来たものの、面的な広がりの確認と微小な細片は回収出来なかった。

発見の状況から第6遺構面が埋没したあとから、第5遺構面が廃棄されるまでの間の時期と考えられる。付近の堆積土は土壌化の進んだ強粘土で遺物が一時期に洪水層に覆われた様子はなかった。したがって、一括性や原位置は明瞭に出来なかった。しかし、発見状況からみて空閑地を利用して石器製作が行われ、剥片のみ放棄されたと考える。

遺物の分布が広範囲に及ぶことから製作行為が複数に及んだ可能性はある。この遺構面は粘土基盤で自然礫はほとんど混入していなかった。5cm程度に薄く堆積土をはずしていったため、一定以上の大きさの剥片はほぼ回収出来たと考える。

#### 第5遺構面の出土遺物(図19)

大溝・堤から少量の弥生土器(2058~2061)とサヌカイト剥片が発見されている。いずれも小片で生活痕跡は薄い。1区では弥生時代中期前半の土器が堤や大溝から発見されており今回もその前後の時期と推測する。また、水田からは水生昆虫が、大溝群からは食葉性昆虫が見つかった。

#### 空閑地出土のサヌカイト剥片群(図21~33 表3 図版13・14)

空閑地で発見された剥片は総計121点に及ぶ。全てサヌカイトである。その他、製品としての石鏃9点(2062~2070)・石鏃未製品2点(2071・2072)・石錐未製品3点(2073~2075)・刃器(打製石庖丁?)未製品1点(2119)がある。自然面がよく残る母岩、石核と思われる肉厚の多面体は発見されていない。付近の調査でも母岩の発見例はなく、当遺跡へは採掘地より粗割りされたものが運ばれたとすべきだろう。その起源の大半は二上山と考えるが5点のみ、四国金山産の質感を示す剥片・石鏃(2062)がある。発見された剥片は最大長が10cm以上の大型のものも2点あり、微細なものまで様々ある。粗割り段階から仕上げまでの製作工程を予測できる。本文では剥片を形態から6分類し、図化した。分類の詳細と剥片の性格は考察に譲る。

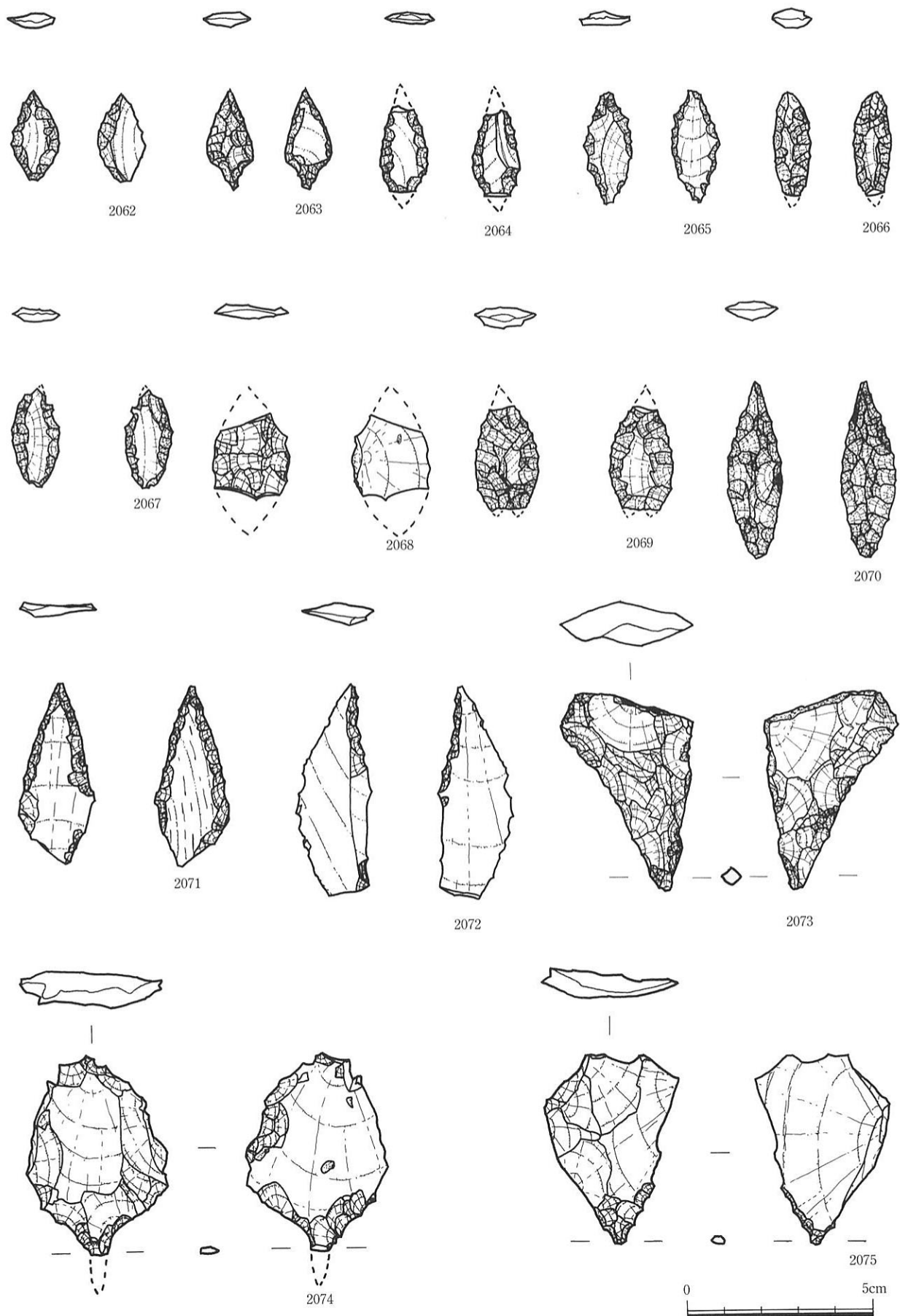


図21 2区第5遺構面発見サヌカイト石器・半製品(2/3)

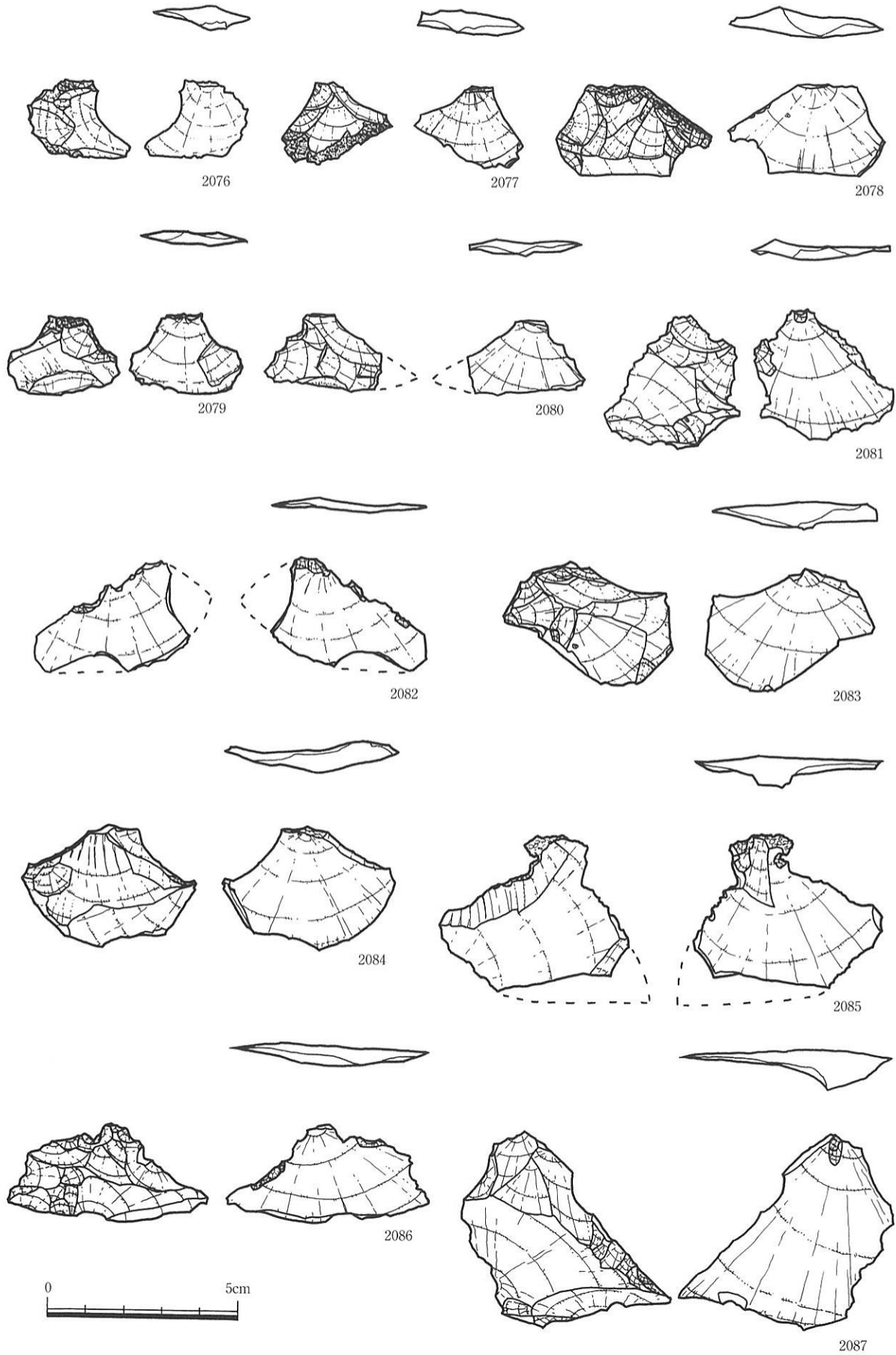


図22 2区第5遺構面発見サヌカイト剥片 (I a 型式小~中) (2 / 3)

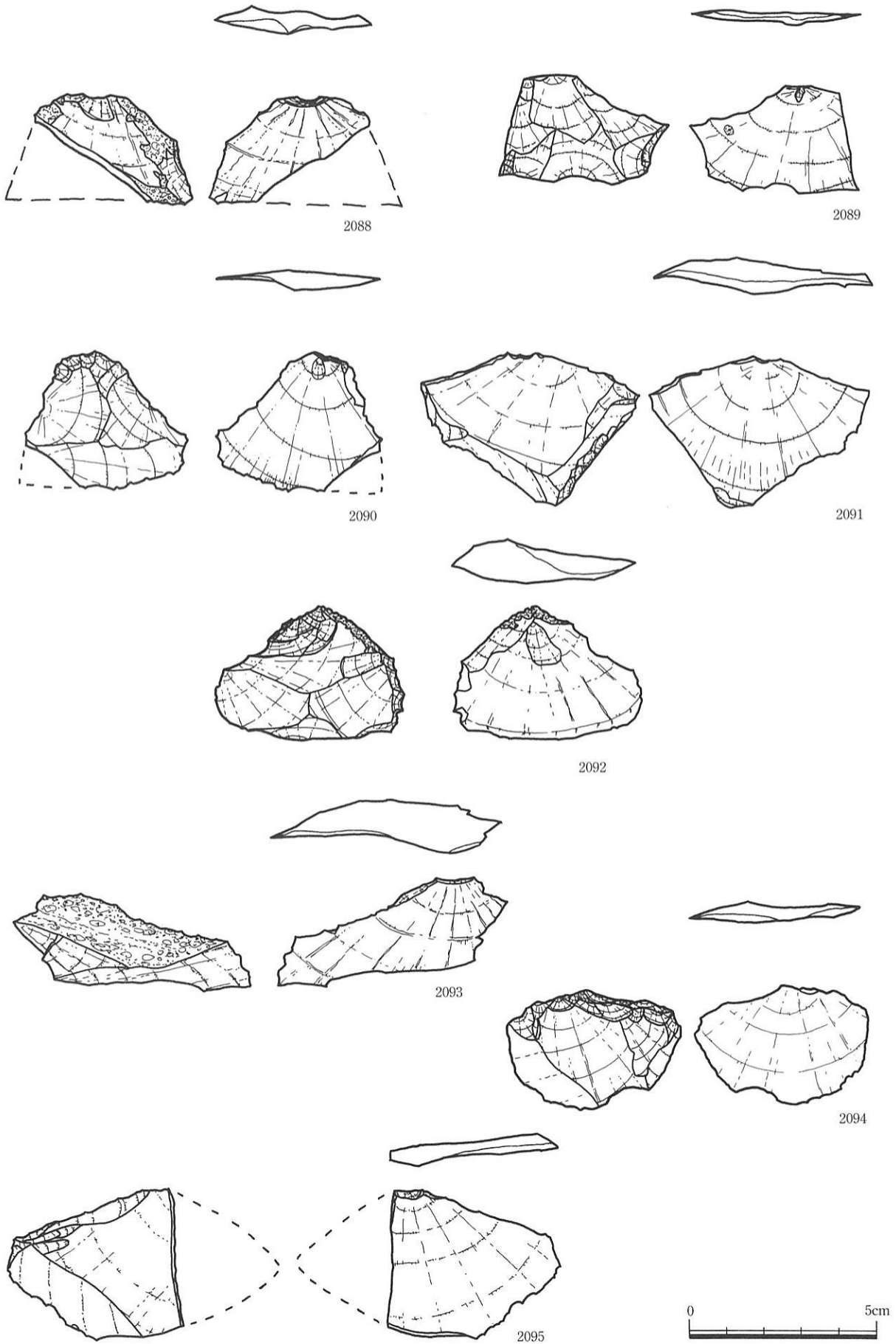


図23 2区第5遺構面発見サヌカイト剥片 (I a 型式中) (2 / 3)

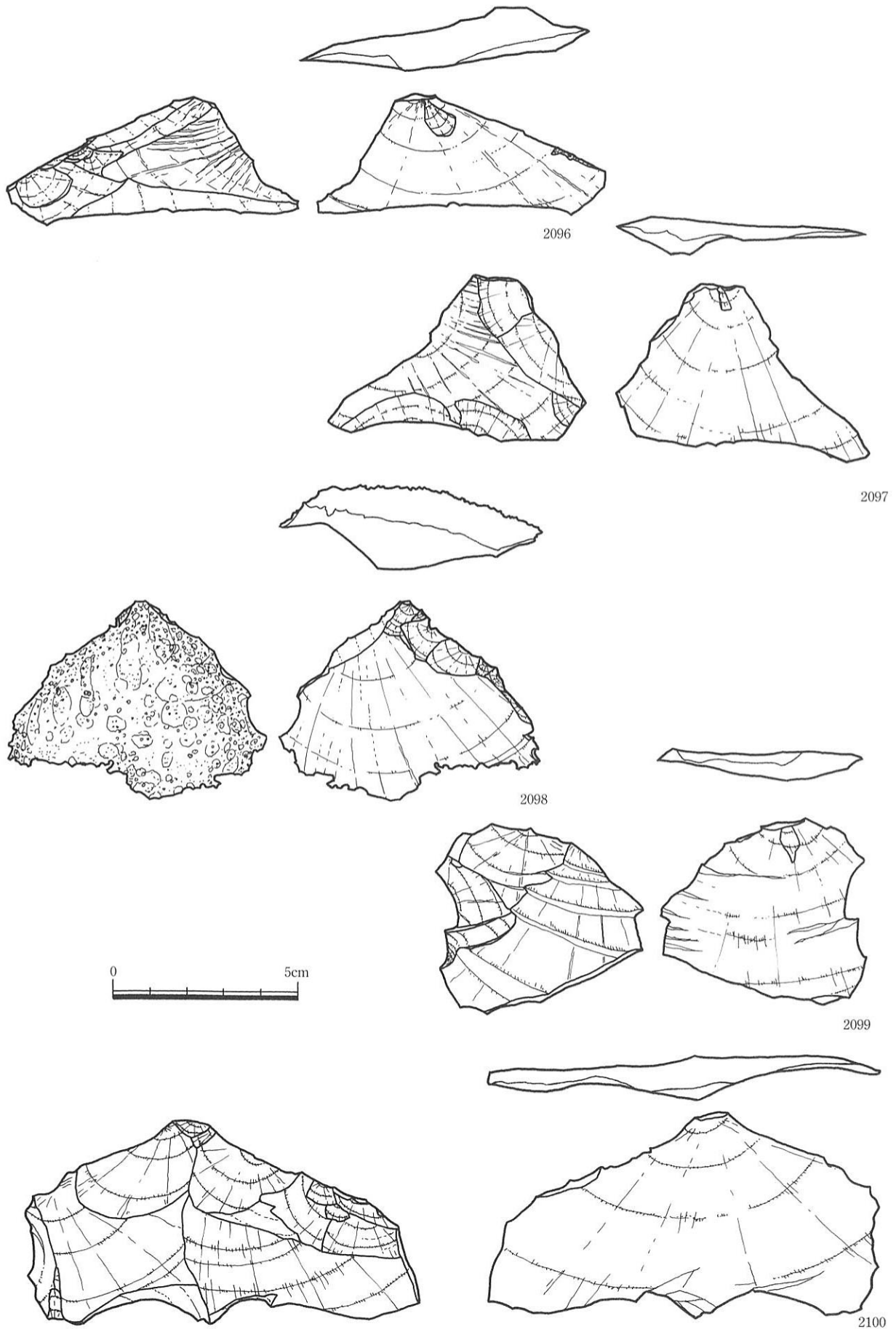


図24 2区第5遺構面発見サヌカイト剥片 (I a 型式大) (2 / 3)

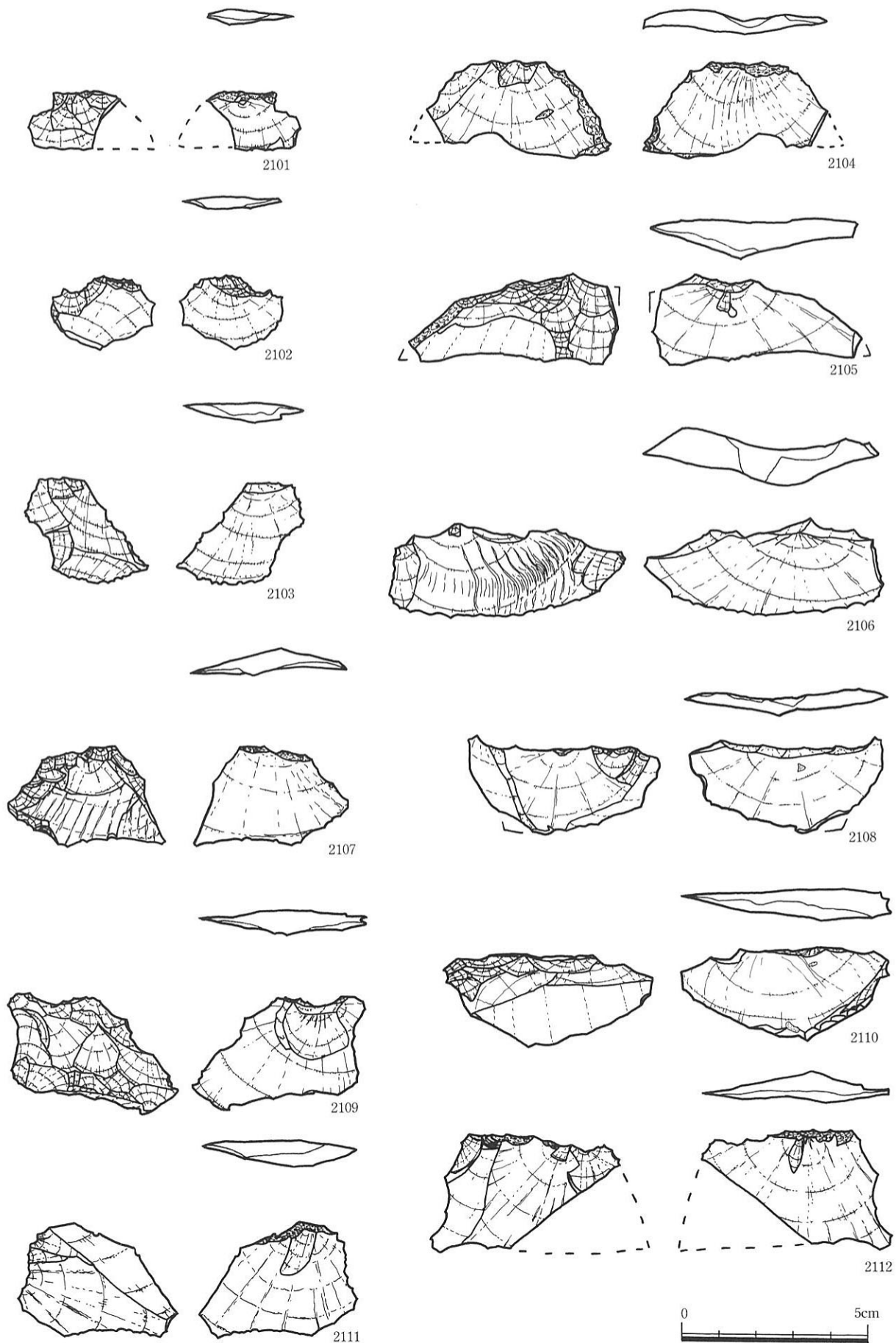


図25 2区第5遺構面発見サヌカイト剝片 (I b 型式小~中) (2 / 3)

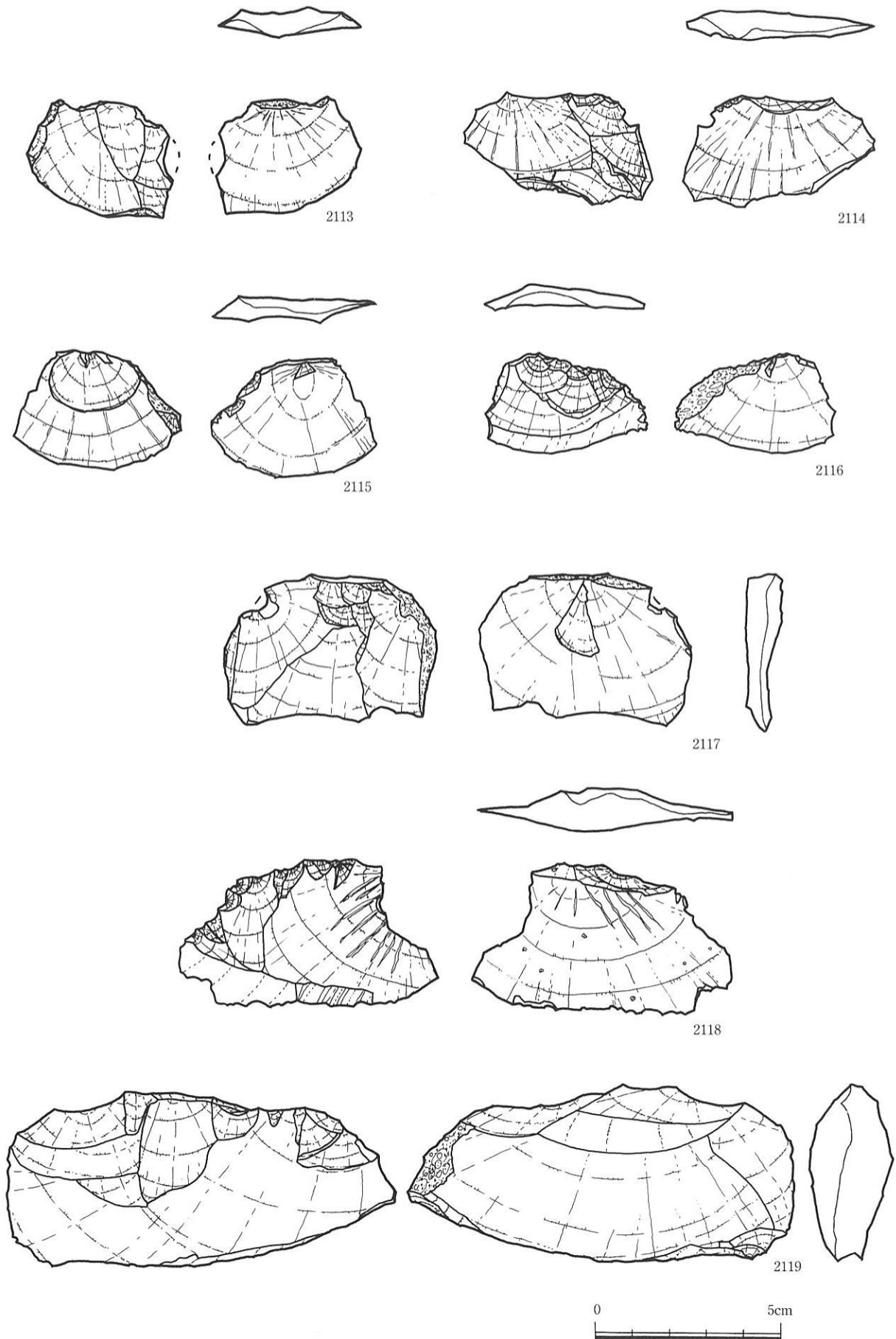


図26 2区第5遺構面発見サヌカイト剥片 (I b 型式中~大) (2 / 3)



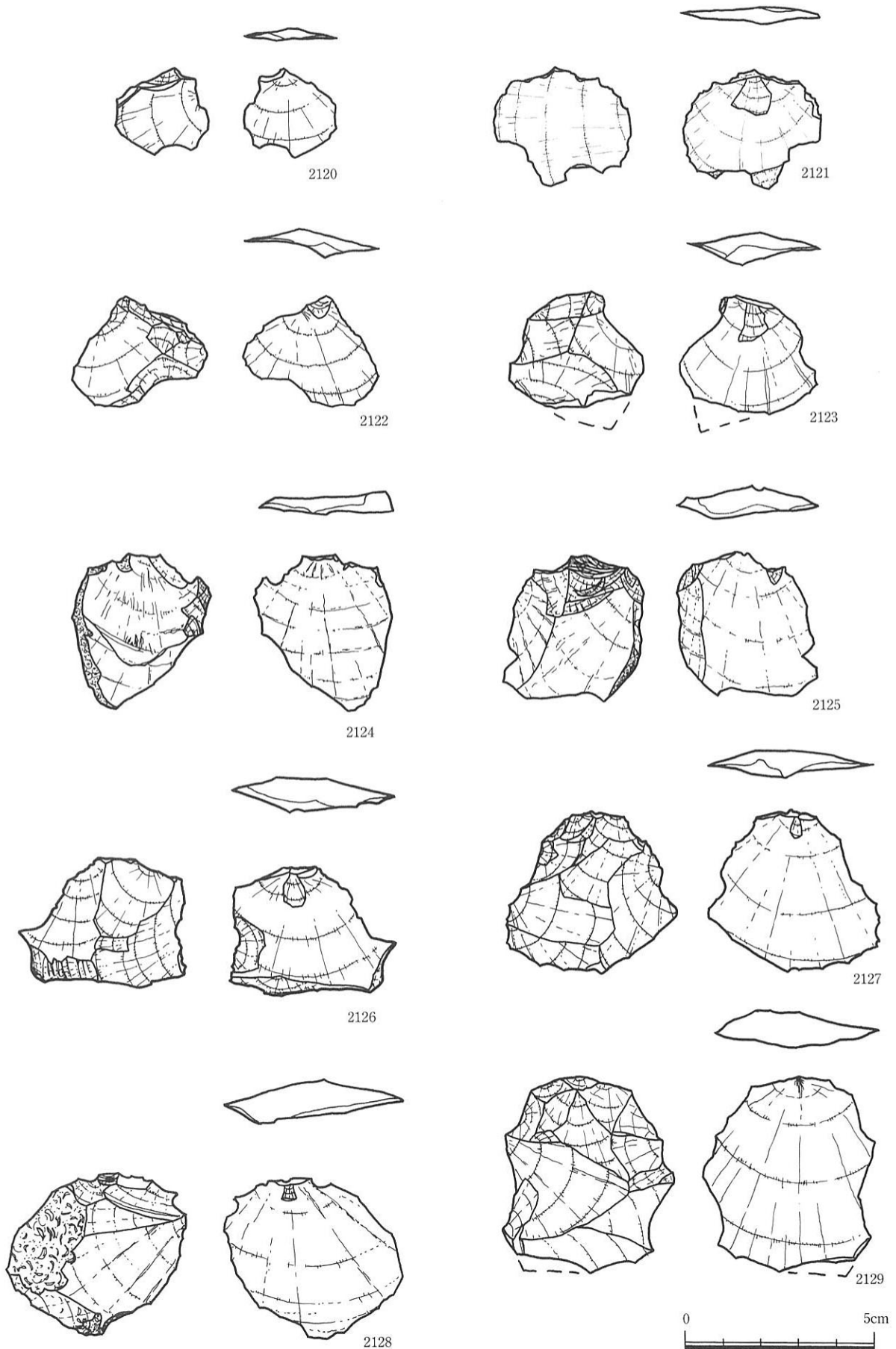


図27 2区第5遺構面発見サヌカイト剥片（Ⅱa型式小～中）（2／3）

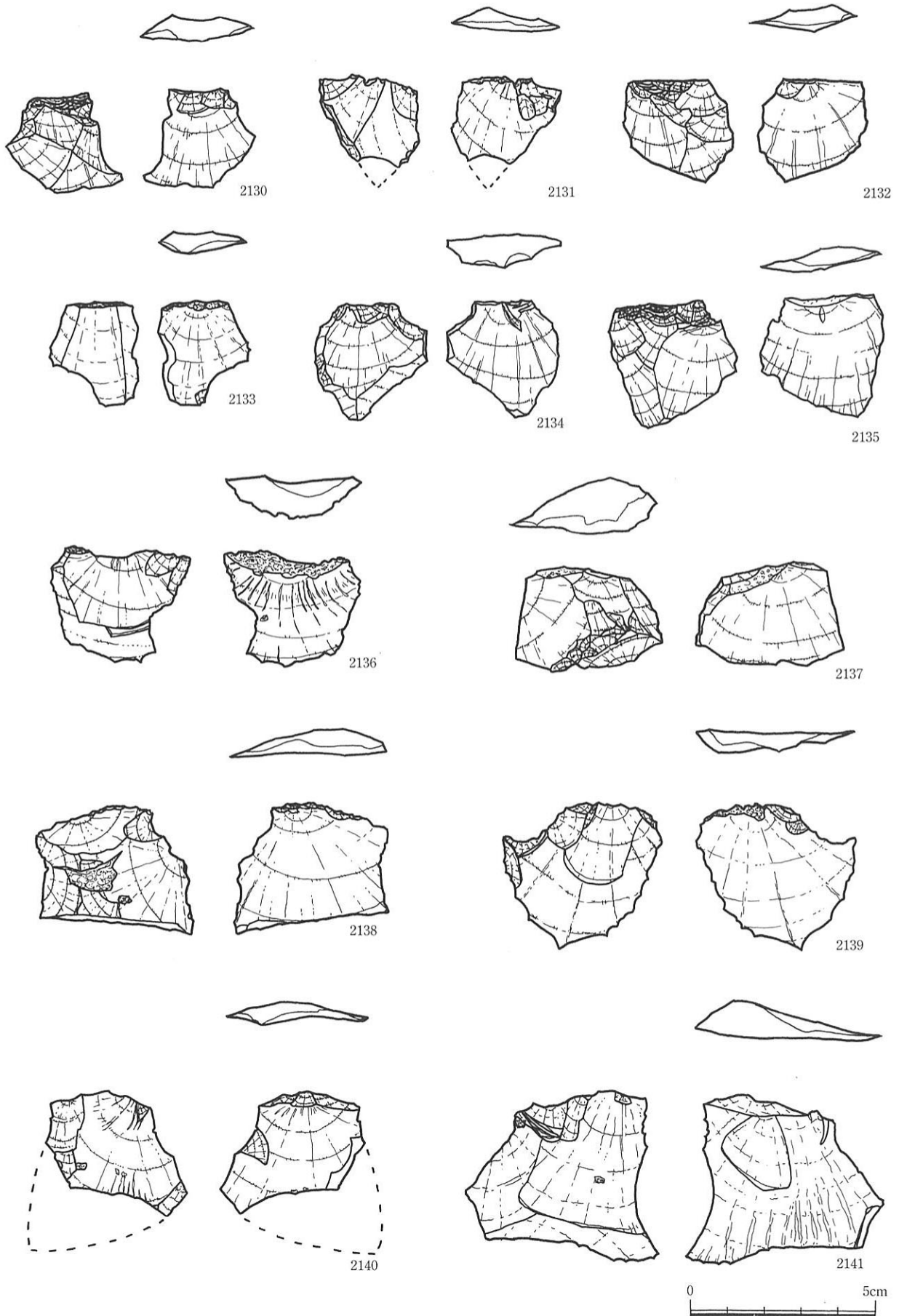


図28 2区第5遺構面発見サヌカイト剥片(Ⅱb型式小~中)(2/3)

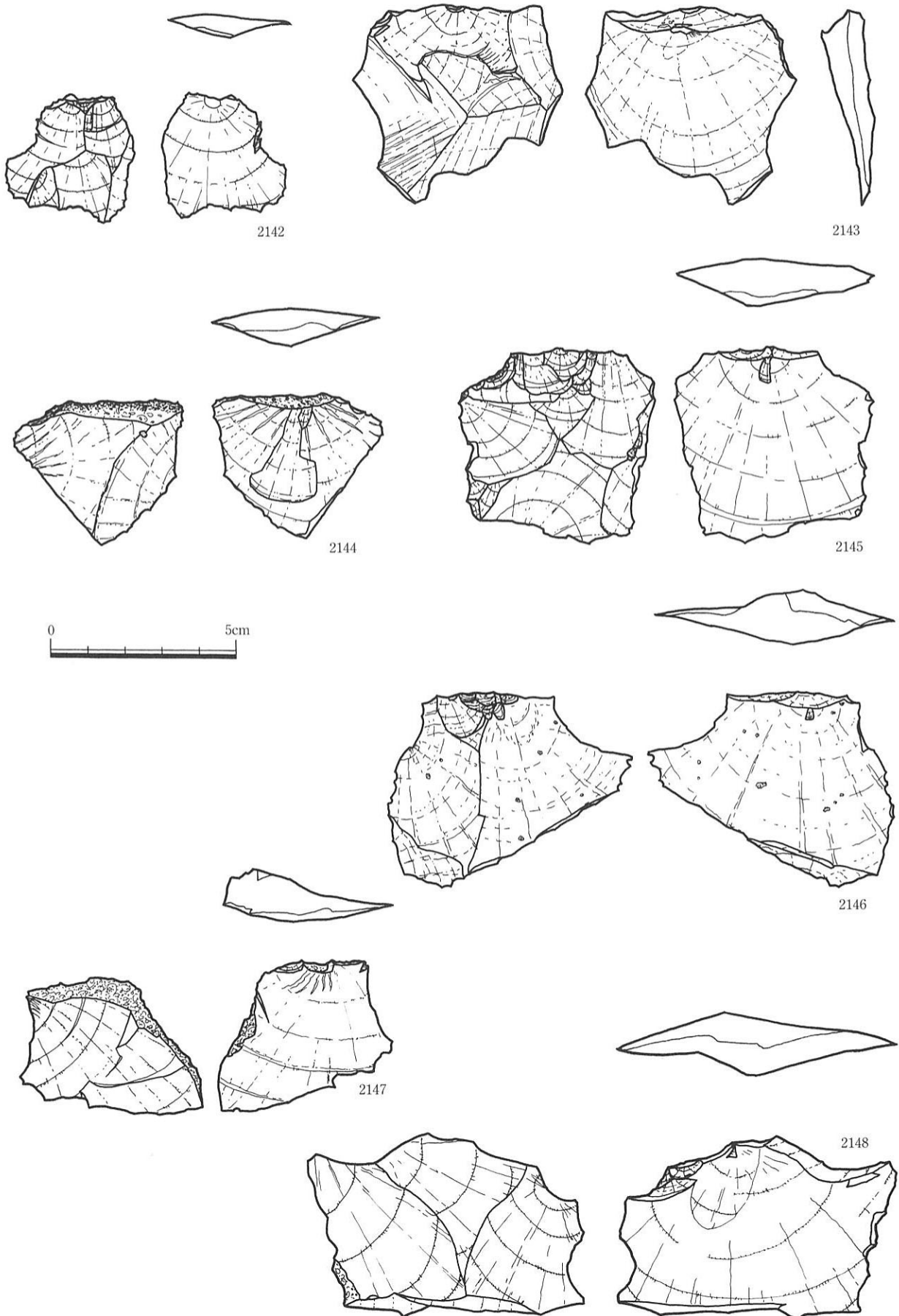


図29 2区第5遺構面発見サヌカイト剥片（Ⅱb型式中～大）（2/3）

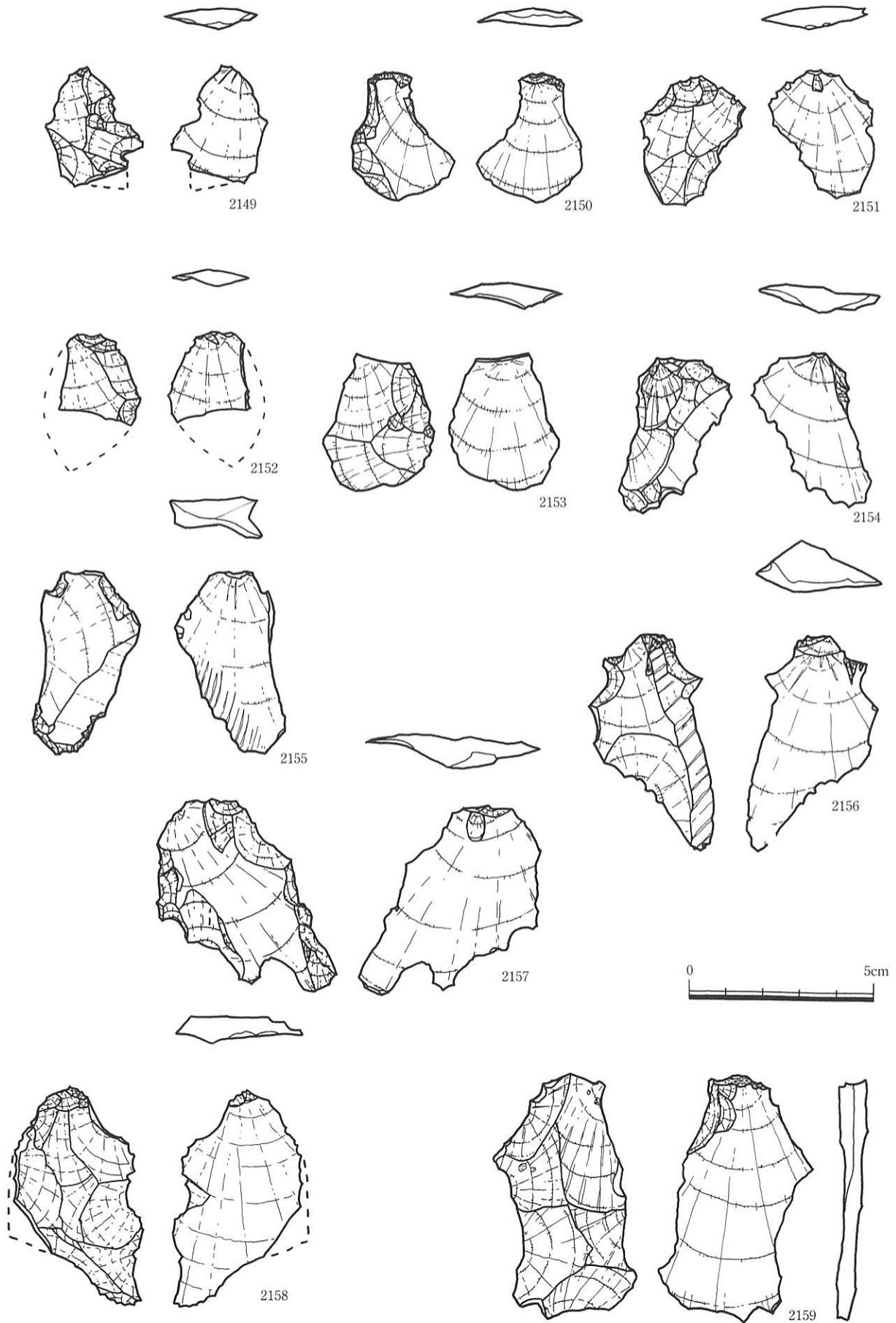


図30 2区第5遺構面発見サヌカイト剥片(Ⅲa型式小~中)(2/3)

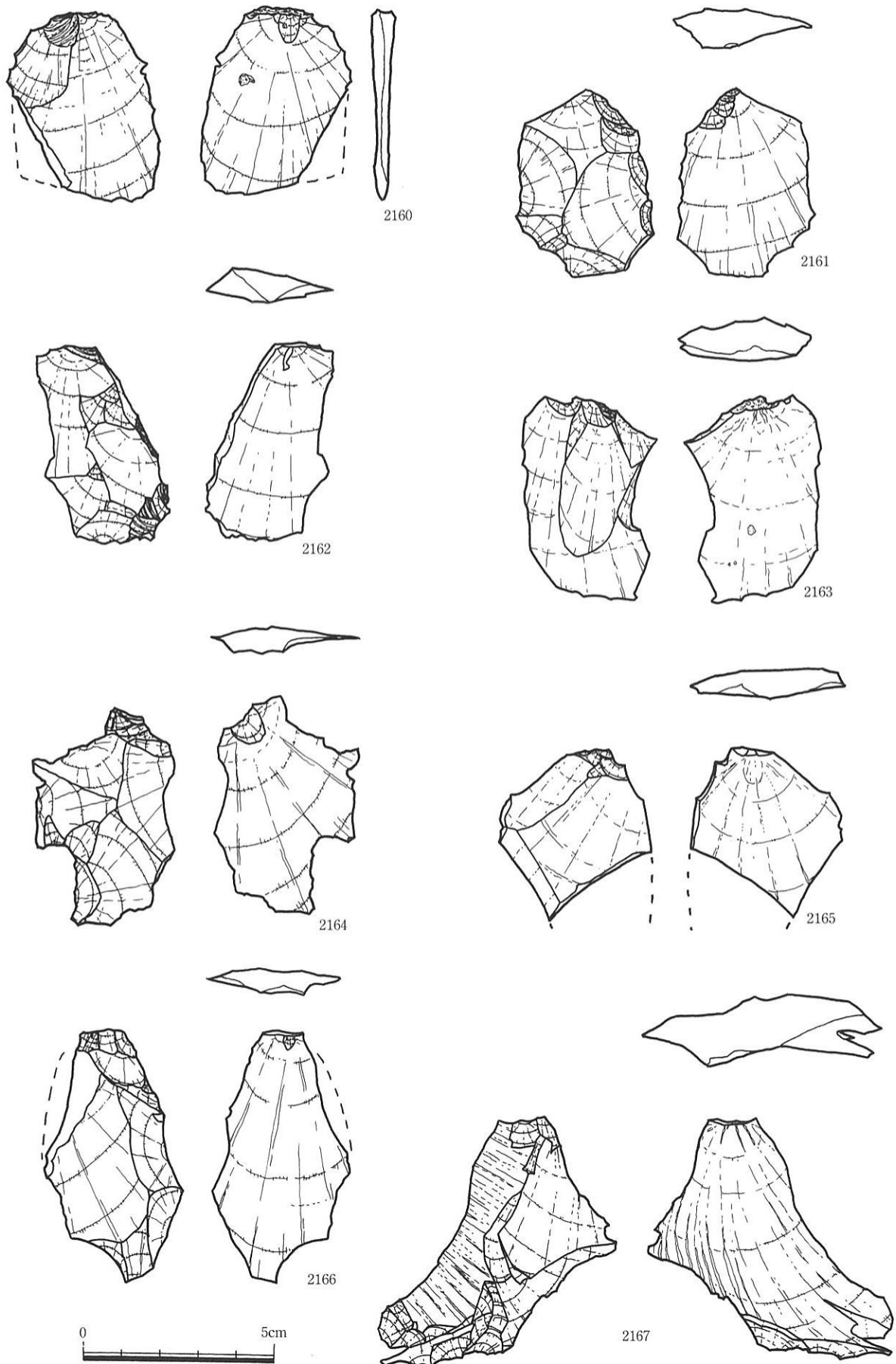


図31 2区第5遺構面発見サヌカイト剥片(Ⅲa型式中~大)(2/3)

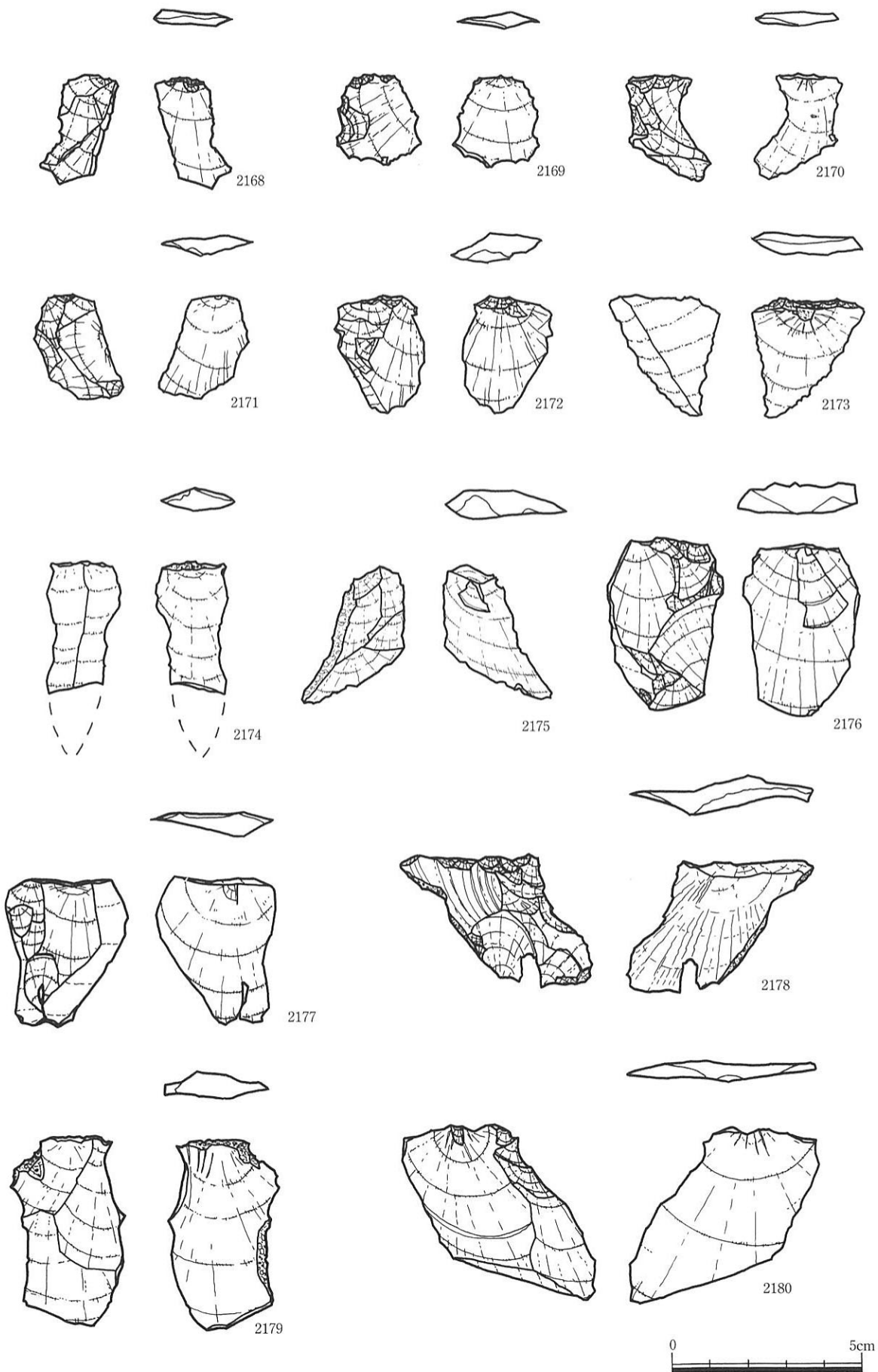


図32 2区第5遺構面発見サヌカイト剥片(Ⅲb型式小~中)(2/3)

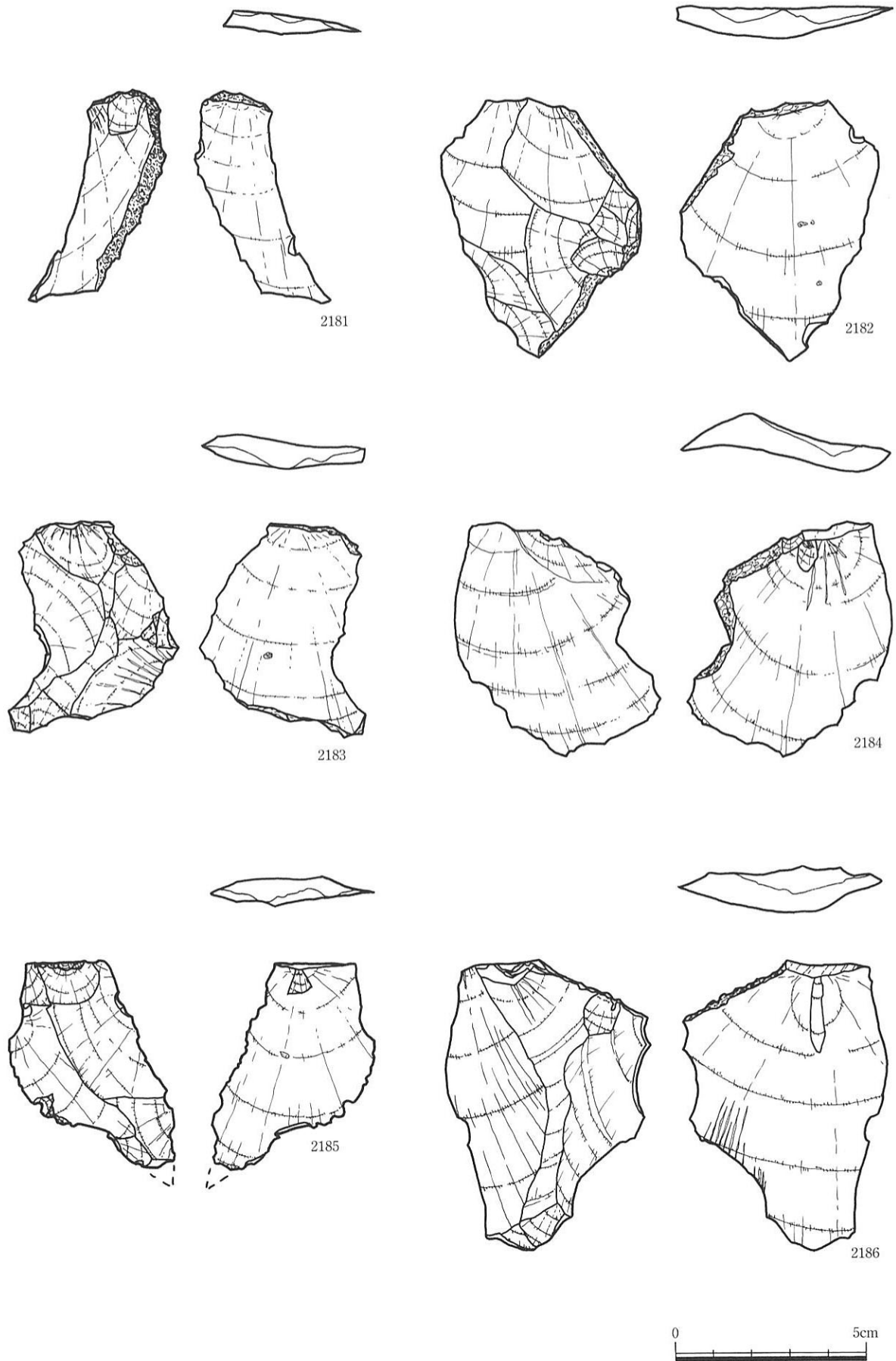


図33 2区第5遺構面発見サヌカイト剥片(Ⅲb型式中~大)(2/3)

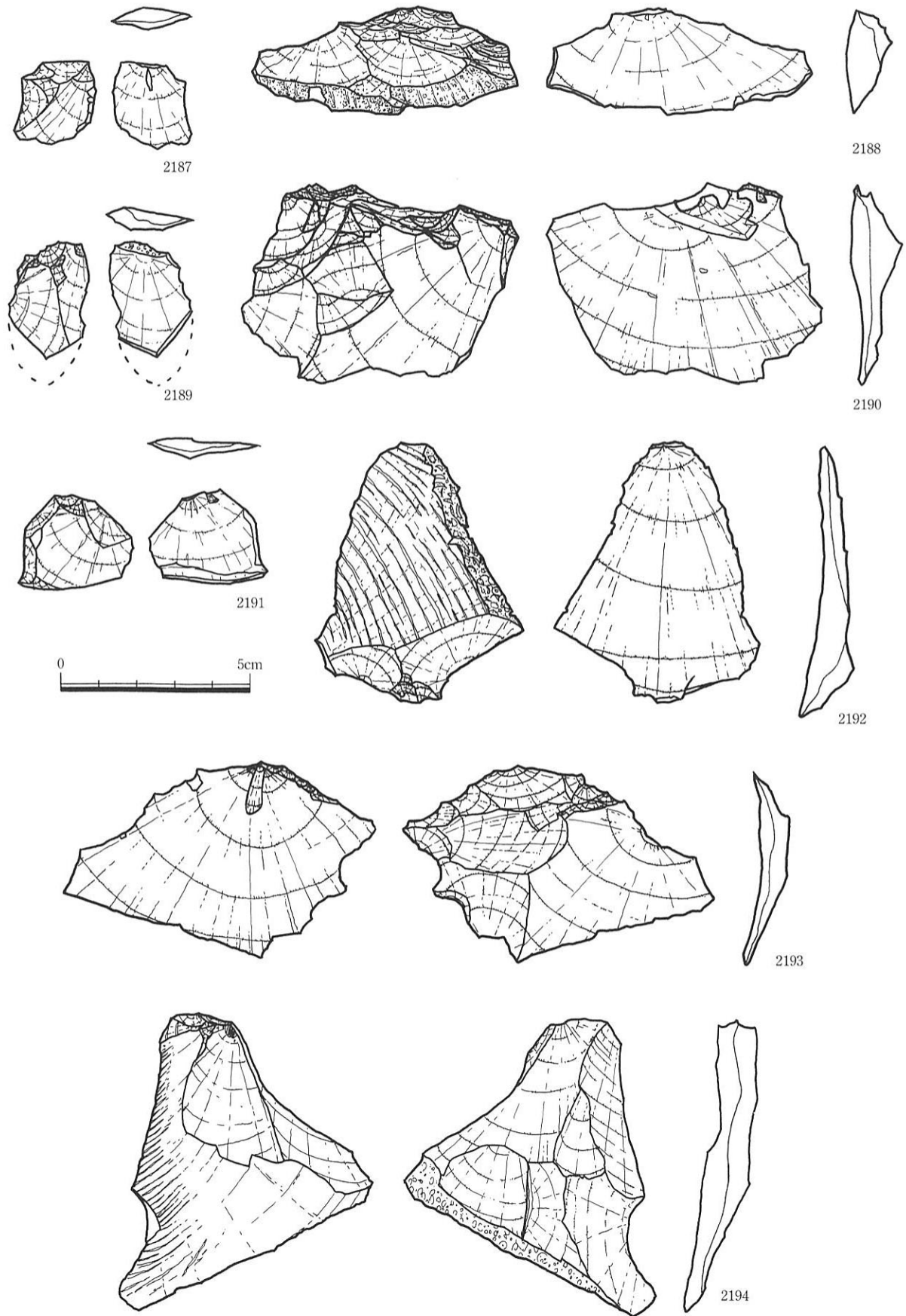


図34 2区第5遺構面大溝・堤発見サヌカイト剥片(2/3)



表3 2区第5遺構面他発見サヌカイト観察表(1)

挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土 層	実測 番号	挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土 層	実測 番号
2062	a	2.4	1.3	0.4	1.0	D	162	2069	c ?	2.9	1.7	0.6	2.7	C	158
2063	b	2.7	1.2	0.5	0.9	F	161	2070	a	4.8	1.9	0.6	2.7	D	157
2064	a ?	2.4	1.3	0.3	1.0	E	163	2071	d	4.9	2.1	0.4	2.6	E	155
2065	a	3.1	1.3	0.4	1.2	D	159	2072	d	5.7	2.0	0.6	3.8	E	154
2066	a	2.7	1.0	0.6	1.6	C	164	2073	e	5.4	3.5	1.2	12.9	D	153
2067	a	2.7	1.3	0.4	1.0	E	160	2074	f ?	3.8	5.5	1.1	17.3	D	152
2068	a ?	2.1	2.3	0.3	1.7	D	156	2075	e	3.6	5.6	0.8	8.5	D	151

a = 尖基型石鏃、b = 有茎型石鏃、c = 凹基型石鏃、d = 石鏃未製品、e = 単刃V型石鏃、f = 単刃T型石鏃

表3 2区第5遺構面他発見サヌカイト観察表(2)

挿図番号	型式	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土 層	実測 番号	挿図番号	型式	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土 層	実測 番号
2076	I a	2.0	2.6	0.7	1.7	D	141	2113	I b	3.0	3.9	0.8	7.1	D	136
2077	I a	2.1	2.9	0.6	2.2	D	72	2114	I b	2.9	5.1	0.8	6.6	D	75
2078	I a	2.4	4.0	0.8	4.7	D	71	2115	I b	3.2	4.4	0.6	6.5	C	17
2079	I a	2.1	2.9	0.4	1.7	D	121	2116	I b	2.6	4.3	0.7	4.1	D	123
2080	I a	1.9	3.2	0.4	1.8	E	104	2117	I b	3.9	7.0	1.1	18.8	D	86
2081	I a	3.4	3.7	0.6	3.4	E	106	2118	I b	4.1	5.7	1.0	16.4	B	9
2082	I a	3.0	4.1	0.3	1.8	D	142	2119	I b	4.7	10.3	2.2	83.6	D	149
2083	I a	3.2	4.4	0.7	7.1	E	109	2120	II a	2.3	2.5	0.3	1.0	D	44
2084	I a	3.2	4.6	0.9	5.8	D	128	2121	II a	3.2	3.5	0.4	3.2	D	139
2085	I a	4.0	4.9	0.8	6.3	D	147	2122	II a	2.8	3.1	0.5	2.9	E	36
2086	I a	2.6	5.3	0.6	4.6	E	99	2123	II a	2.9	3.7	0.8	4.9	E	30
2087	I a	4.1	5.4	1.1	10.9	E	31	2124	II a	4.1	3.7	0.7	5.6	D	56
2088	I a	3.0	4.2	0.6	4.6	D	55	2125	II a	3.8	3.7	0.9	9.4	D	53
2089	I a	2.9	3.6	0.3	4.2	E	34	2126	II a	3.2	4.4	0.9	9.4	D	115
2090	I a	3.7	4.4	0.5	3.6	D	113	2127	II a	4.2	4.5	0.8	9.3	D	101
2091	I a	3.9	5.9	1.0	10.8	D	95	2128	II a	4.2	4.7	1.1	12.7	D	66
2092	I a	3.5	5.1	1.2	17.5	D	62	2129	II a	5.0	4.7	0.9	13.9	D	41
2093	I a	2.7	6.3	1.6	10.5	D	58	2130	II b	2.7	3.1	0.7	4.0	E	25
2094	I a	3.0	4.7	0.6	4.8	D	74	2131	II b	2.3	2.9	0.6	2.2	D	145
2095	I a	4.0	4.8	0.8	9.1	D	144	2132	II b	2.7	3.0	0.6	2.8	E	37
2096	I a	3.7	7.9	1.5	23.5	D	61	2133	II b	2.7	2.4	0.6	2.6	D	78
2097	I a	4.8	6.8	1.0	9.8	D	117	2134	II b	3.2	3.1	0.9	3.2	D	22
2099	I a	5.1	5.8	0.7	18.6	D	48	2135	II b	3.2	3.4	0.6	3.8	E	29
2100	I a	5.6	10.7	1.3	41.4	D	45	2136	II b	3.1	3.7	1.2	6.0	E	70
2101	I b	1.5	2.5	0.4	0.9	D	126	2137	II b	2.8	4.1	1.5	13.3	E	35
2102	I b	2.0	2.7	0.3	1.3	D	131	2138	II b	4.2	3.4	0.8	10.6	D	108
2103	I b	2.7	3.3	0.6	1.8	D	124	2139	II b	3.9	4.3	0.6	5.0	E	63
2104	I b	2.7	3.9	0.7	4.9	D	140	2140	II b	3.4	3.9	0.6	5.3	D	132
2105	I b	2.2	5.7	1.0	8.4	E	27	2141	II b	4.8	5.3	1.0	15.3	D	52
2106	I b	6.4	2.5	1.6	12.3	D	105	2142	II b	3.7	4.6	1.0	10.6	D	68
2107	I b	2.7	4.2	0.9	4.3	D	59	2143	II b	5.2	5.3	1.3	19.1	D	84
2108	I b	2.3	5.2	0.5	4.6	E	26	2144	II b	3.3	3.4	0.6	2.7	E	89
2109	I b	2.6	4.5	0.6	5.1	D	135	2145	II b	5.3	5.8	1.4	25.1	C	6
2110	I b	2.4	5.5	0.9	8.3	D	112	2146	II b	5.2	6.6	1.5	28.1	D	92
2111	I b	3.2	4.3	0.5	5.3	D	60	2147	II b	4.0	4.7	1.5	14.8	G	64
2112	I b	3.2	5.2	0.9	7.6	D	73	2148	II b	4.7	8.0	1.5	39.8	D	38

表3 2区第5遺構面他発見サヌカイト観察表(3)

挿図番号	型式	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土 層	実測 番号	挿図番号	型式	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土 層	実測 番号
2149	III a	3.2	2.7	0.6	1.7	D	97	2189	III b	2.9	2.2	0.6	2.3	C	19
2150	III a	3.5	2.8	0.5	2.1	D	120	2190	I a	5.2	7.3	1.3	29.3	C	4
2151	III a	3.5	2.8	0.6	2.3	D	87	2191	II a	2.6	3.1	0.5	2.8	C	21
2152	III a	2.3	2.3	0.4	1.2	E	91	2192	III a	7.1	5.4	1.1	22.6	C	2
2153	III a	3.7	3.0	0.7	3.0	D	116	2193	I a	5.1	8.2	0.9	19.2	C	3
2154	III a	4.1	3.3	0.8	3.2	D	114	2194	III a	7.6	6.6	1.2	41.4	C	8
2155	III a	5.8	3.1	1.4	11.9	D	119		III a	8.2	8.5	1.3	34.8	C	1
2156	III a	4.9	2.7	1.1	5.6	D	146		III b	5.6	5.1	0.9	17.5	A	5
2157	III a	5.1	4.8	0.9	6.3	D	96		III b	6.3	4.0	1.0	14.3	B	7
2158	III a	5.9	3.6	0.7	7.9	D	94		I a	5.0	4.3	0.7	11.5	F	11
2159	III a	4.9	3.6	0.8	12.6	C	13		III b	5.2	3.5	1.4	17.0	C	12
2160	III a	4.9	3.9	0.6	7.8	C	16		I b	3.4	3.4	0.6	5.8	B	14
2161	III a	2.8	2.4	1.1	7.1	E	32		II b	3.4	3.3	0.6	3.8	F	15
2162	III a	5.1	3.5	0.9	9.5	D	102		II b	2.9	3.2	0.6	3.7	F	18
2163	III a	5.2	3.6	1.2	11.0	D	51		II b	1.8	2.8	0.6	2.4	D	23
2164	III a	4.7	5.3	0.5	7.7	D	39		III b	3.8	4.0	0.8	4.8	E	28
2166	III a	6.6	3.6	0.6	9.2	D	40		III b	3.3	2.0	0.5	1.9	D	43
2167	III a	6.2	6.3	1.8	18.8	D	88		II b	5.3	5.6	1.3	15.3	F	54
2168	III b	2.9	2.1	0.4	1.0	E	103		II b	2.7	3.4	0.8	4.6	G	57
2169	III b	2.3	2.2	0.5	1.5	D	125		III b	1.8	3.9	0.4	1.4	D	65
2170	III b	2.7	2.2	0.4	1.6	D	143		III b	4.4	3.3	1.0	7.0	A	67
2171	III b	2.9	4.6	0.4	1.4	E	33		III a	4.4	4.0	0.8	9.0	F	76
2172	III b	3.0	2.5	0.7	2.8	D	24		III b	7.1	5.2	1.9	21.5	F	79
2173	III b	3.1	3.0	0.6	3.1	D	137		III b	3.9	4.2	1.0	5.9	F	80
2174	III b	3.4	1.9	0.6	2.3	D	133		III b	3.6	2.4	0.5	2.5	A	81
2175	III b	3.3	2.9	0.9	3.3	D	107		II a	4.5	4.8	0.7	4.5	D	82
2176	III b	4.5	3.0	0.8	8.6	D	110		II a	3.2	3.3	0.5	2.9	D	83
2177	III b	3.8	3.2	0.6	5.1	D	42		II a	3.7	4.2	0.7	4.3	F	85
2178	III b	3.3	5.1	1.0	7.1	D	77		I b	3.2	4.7	0.8	9.6	A	90
2179	III b	4.9	2.9	0.7	6.8	D	130		—	5.0	7.1	2.2	40.4	F	93
2180	III b	4.6	4.9	0.8	5.0	D	111		II	4.5	4.9	0.5	3.4	G	98
2181	III b	5.5	3.6	0.5	5.4	D	69		—	3.2	1.9	0.6	2.2	D	100
2182	III a	6.7	5.2	0.8	25.4	D	46		I a	1.4	2.7	0.3	0.6	A	122
2183	III b	5.5	3.4	0.9	10.5	D	138		III a	3.4	2.9	0.6	1.7	G	127
2184	III a	5.9	5.4	0.9	23.3	C	47		I	1.8	2.0	0.2	0.6	D	129
2185	III b	5.4	4.2	0.7	8.6	D	118		II a	4.0	5.1	0.7	6.7	D	134
2186	III a	7.5	5.2	1.2	37.7	D	49		I	5.5	9.2	1.4	28.1	D	148
2187	II a	2.2	2.2	0.6	1.5	C	20		II a	2.6	2.4	0.4	3.1	E	167
2188	I a	2.8	7.0	1.1	13.6	C	10		II b	2.7	2.2	0.6	2.2	D	182

A = 第1～4遺構面上面、B = 第5遺構面上面・直上、C = 第5遺構面遺構(大溝・堤・土橋埋土)、  
D = 第6遺構面上面、E = 第6遺構面直上、F = 第7遺構面上面、G = 表採・上げ土など

6. 第6遺構面 (図36 図版2b・8・11a)

第5層

第5遺構面の基盤になる黒灰色粘土は層厚が薄く、0.1mに満たないものだった。この層を除去すると無数の足跡に微砂が入りこんだ遺構面が現われた。遺構面は調査区の西側が上層の大溝群によって破壊されているもののほぼ全面に及んでいた様だ。堤盛り土や道状遺構盛り土を丁寧に除去するとほぼ同じ位置に大畦畔と小畦畔が確認出来、その周囲に足跡が拡がった。

第6遺構面の水田遺構 (図36 図版8)

水田畦畔は短冊型に整然と並び、これまで発見された小区画水田の畦畔が地形に沿って蛇行するの 비해、企画的である。小畦畔はどれも幅0.3m前後、高さ5cm程度、畦畔の上に足跡は少なく、意図的に避けて歩行された様子がうかがえる (図版8c)。大畦畔に相当する突出した規模のものはみられない。大量に発見された足跡群は水田内を歩行したというより、水田土壌を攪拌する為に足踏みを繰り返したような折り重なりようだった。足跡は大人サイズのものともみられる長辺0.2m弱のものから長辺0.1mに満たない子供サイズのものも混在し、折り重なっていた。水田の労働に従事していた人々の構成が推測できる (図版8d)。上層の道状遺構とほぼ同じ位置に大畦畔6-1が確認出来た。大畦畔はほぼ東西に長さ46m以上、幅約2.5mを測る。大畦畔からは確認できるだけで北側に8本、南側に3本の小畦畔が分岐し、調査区内に32枚の小区画水田を形成する (図版8e)。

第6遺構面の出土遺物 (図35)

遺構面上面から石庖丁がみついている。緑泥片岩製である。刃部は摩滅の痕跡が少ない。長辺14.5cm、幅5.3cm、厚さ0.6cmを測る (2195)。水田面から21本のヤス状の木製品が散在して発見された。長さ6.8~23.5cm、直径約0.6cmを測る (2196~2207)。弥生土器片がいくつか見ついている。口縁端部に刻みを施し、二条の沈線の間にも指頭による列点を飾る甕がある (2210)。その他、甕・壺の底部のみいくつかある (2208・2209)。以前の調査で発見されたものも含め、この遺構面が弥生時代前期でも新段階に属す時期と考える。水田面からわが国最古の稲作害虫イネネクイハムシを抽出した。

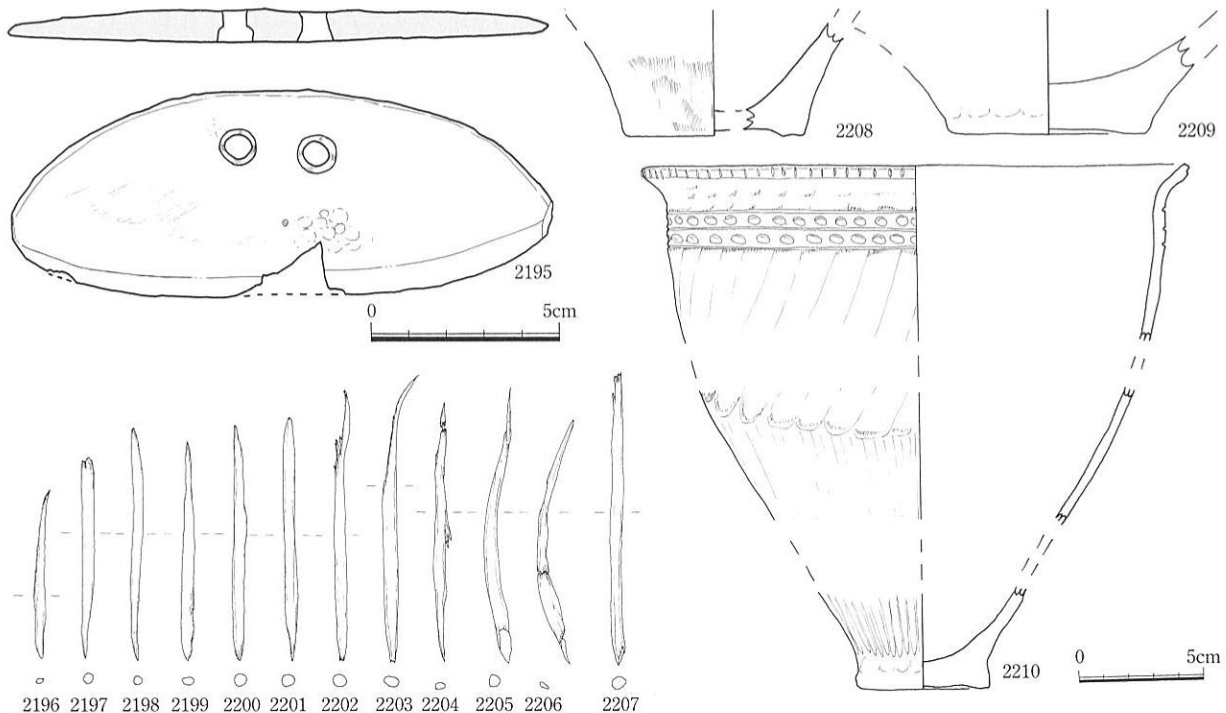


図35 2区第6遺構面出土遺物 (1/2・1/3)



図36 2A・2B区第6遺構面（弥生時代前期）（1/400）

7. 第7遺構面 (図38 図版2c・9・11b)

第6層

第6遺構面の基盤になる青灰色粘土・緑灰色粘土を取り除くとオリーブ黒色粘土層にあたる。この粘土層は土壌化が進み、植物による生痕化石が多数みられた。層界は平坦だが部分的な流水痕跡がある。

第7遺構面の遺構 (図38)

落ち込み7-1は調査区の西端に位置する。南から北に緩やかに落ち込み、掘り底に起伏は少ない。黒褐色強粘土で埋まり、植物遺体の薄いラミナを含む。自然の形成だろう。同様の落ち込みを調査区西側で3か所、調査区東端で1か所確認した。流水の痕跡が残るものもある。これまでの調査でこの様な落ち込み中から、縄文時代晩期の土器片や石器片が散在して発見されている。今回遺物は見つからなかった。土中から抽出した昆虫化石はツタの葉や低木の葉を食べる食葉性昆虫ばかりで付近の景観をうかがうことができる。

第7遺構面の出土遺物 (図37)

遺構面上面よりサヌカイト剥片がいくつか確認されている。これらは第5遺構面の剥片が混入した可能性を否定出来ない。その他、磨製石斧の破片が発見されている (2212)。色調は明るい緑灰色、緑色片岩だろう。体部の研磨は粗く、刃部のみ丁寧に研磨する。基部を欠損する。また、第2遺構面上面の洪水層 (第1層) より緑色片岩製の石棒が発見されている (2211)。下部を欠損し、先端は三角形に傘状にふくらむ。断面は円形に近い楕円形で全面よく研磨されている。最大長14.8cm、幅5.2cmを測る。府内では泉佐野市上之郷遺跡例に並ぶ優品である。形状より、縄文時代後期と考えられる。

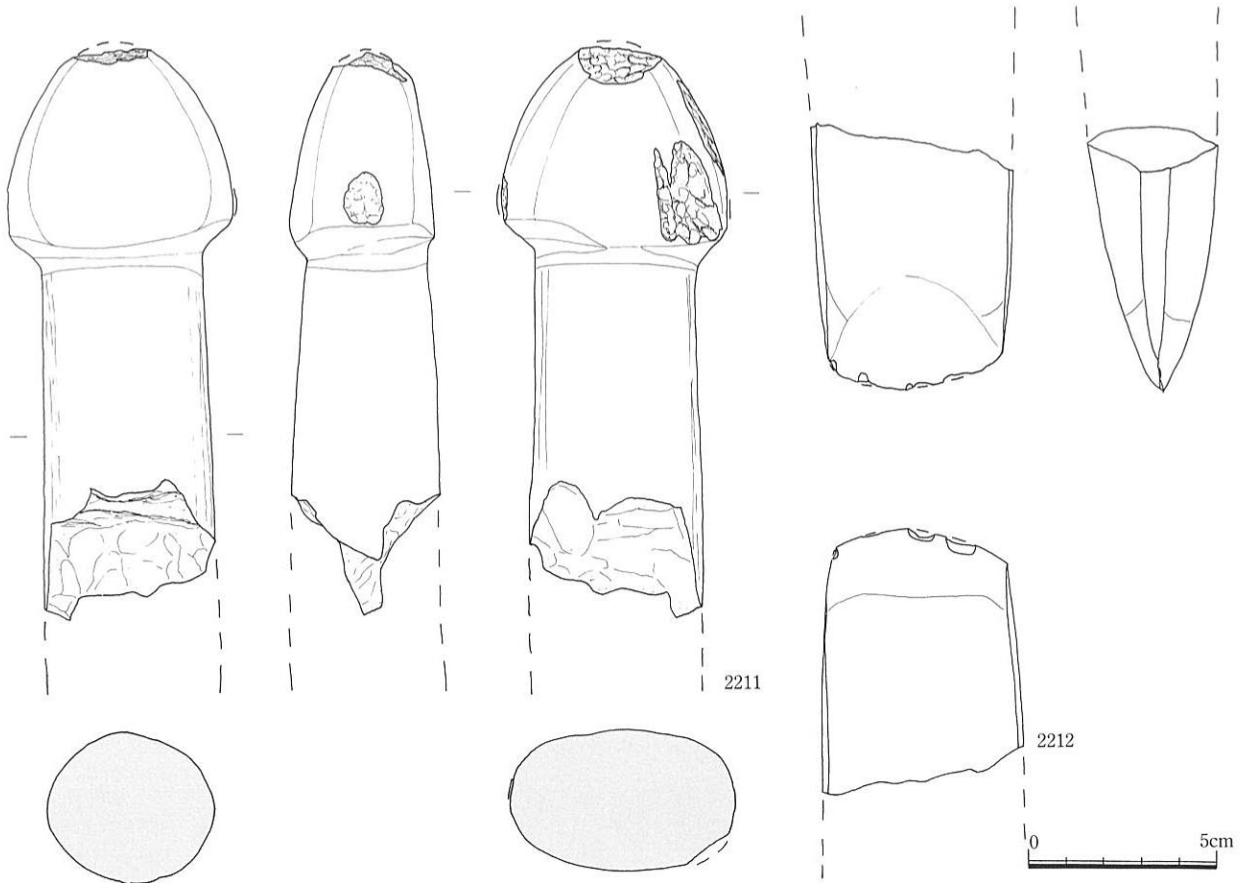


図37 2区第7遺構面他出土遺物 (1/2)

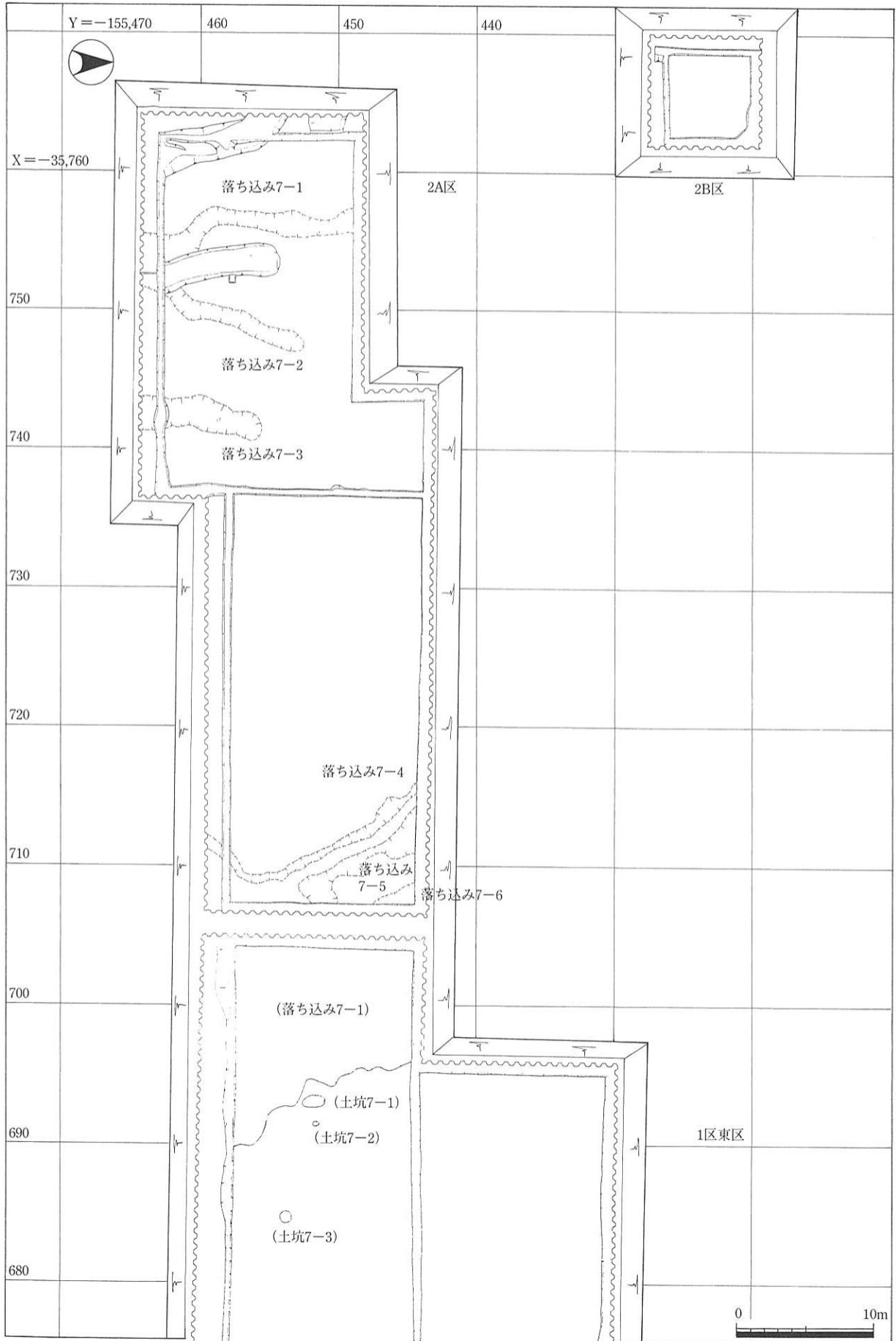


図38 2A・2B区第7遺構面（縄文時代晩期）（1/400）

## 8. 近世の遺構・遺物

志紀遺跡は大和川を起源とする洪水堆積層によって地表面が埋め立てられ、連綿とした重なりを見ることができる。18世紀はじめに現在の流路に改修されて以来、洪水層の堆積はおさまるものの、大正飛行場（後に八尾空港）建設と戦後の府営住宅建設に伴って再び厚く盛り土されている。

発掘調査は現在の地表面から中世の条里制水田が確認できる地層上面まで機械掘削して行った。ただし、その上面には近世・近代の耕作痕跡や遺構が面的に確認できることを承知していたが空港関連施設などの攪乱で良好に遺存しない部分が多いと判断していた。

1・2区の調査では人力掘削面に切り込まれた近世・近代の遺構についてのみ、部分的な手がかりを得るべく遺構・遺物を精査した。その結果、1区の西区では2条の南北溝と3基の土坑を確認した。2A区では落ち込み状遺構、3基の土坑、南北溝を検出した。2B区では井戸・落ち込み・土坑をそれぞれ1つずつ確認した（図39）。

このうち、3つの南北溝は上面の水田区割りに関するものと考えられる。1区南北溝0-1と2区南北溝0-1は約76mの距離を隔てて並行する。また、1区土坑0-2・土坑0-3と2区落ち込み0-1は遺構の周囲に沿って木杭が打ち込まれており、最近まで機能していた農業用の水溜めと考える。また、井戸0-1も農業用の水源だろう。上面に方形の木枠が残存していた。

以上の遺構には江戸時代後期から末頃の陶磁器が含まれていた。特に1区南北溝0-1・南北溝0-2の北隅から大量の陶磁器・瓦が集中して出土した。南北溝の廃絶段階と付近の集落から一括した投棄を推測できるものだった。

さて、この南北溝などは現地表面から約2m下層で、戦中・戦後の造成土をはずしても約1m埋没したものだ。この1mの層中には江戸時代の耕作痕跡が何面か確認できる。つまり、現在見られる水田区割りより更に2m下層に江戸時代後期から末の水田区割りを確認することができたわけである。

これまで、中・南河内の現在の水田地割りを古地図や航空写真などと照合させて、中世・古代の条里制地割りを復元する試みが行われてきた。しかし、上記の検討から志紀周辺では江戸時代の耕作痕跡も地中深くに埋没していることが確認出来、現在の水田地割りが古代・中世より踏襲されてきたことを証明することは難しいと考える。

### 南北溝発見遺物（図40～42 図版14）

見つかった遺物の大半は陶磁器・瓦である。陶磁器はコンテナ4箱、瓦は4箱あった。食膳具・調理具・貯蔵具・調度具など主要な器種が出揃っており、それらを使った人々の暮らしをよく伝えるものであった。

肥前磁器（2213・2214・2216～2223・2226～2233・2235・2236）は碗が多い。飯碗形（2216～2219）、端反碗（2220・2221）、広東碗（2223）などがある。主体は端反碗と広東碗であった。広東碗は18世紀後半～19世紀初頭に見られる器形である。蕉葉文蓋（2229）は広東碗に伴う蓋である。外面には二重格子目文（2223）の他に蕉葉文・山水文などが見られた。広東碗に変わって19世紀に多く出土するのが端反碗である。菊花文（2220）・花卉文（2221）・二重格子文・捻花文などが見られた。飯碗形には、いわゆる「くらわんか茶碗」に梅樹文（2216）や雪輪梅樹文（2217）があり、高台の内側に二重方形渦福をもつ青磁染付（2218）、陶胎染付柳文（2219）（註1）などがある。次いで多いものに鉢類（2233・2234・2227）がある。青磁小鉢（2227）のような小型品はほとんどなく、大型の端反鉢が目立つ。染付草花文輪花鉢（2230）は薄手で上手のものである。碗・鉢に比べて皿は極端に少なく、網目花文皿

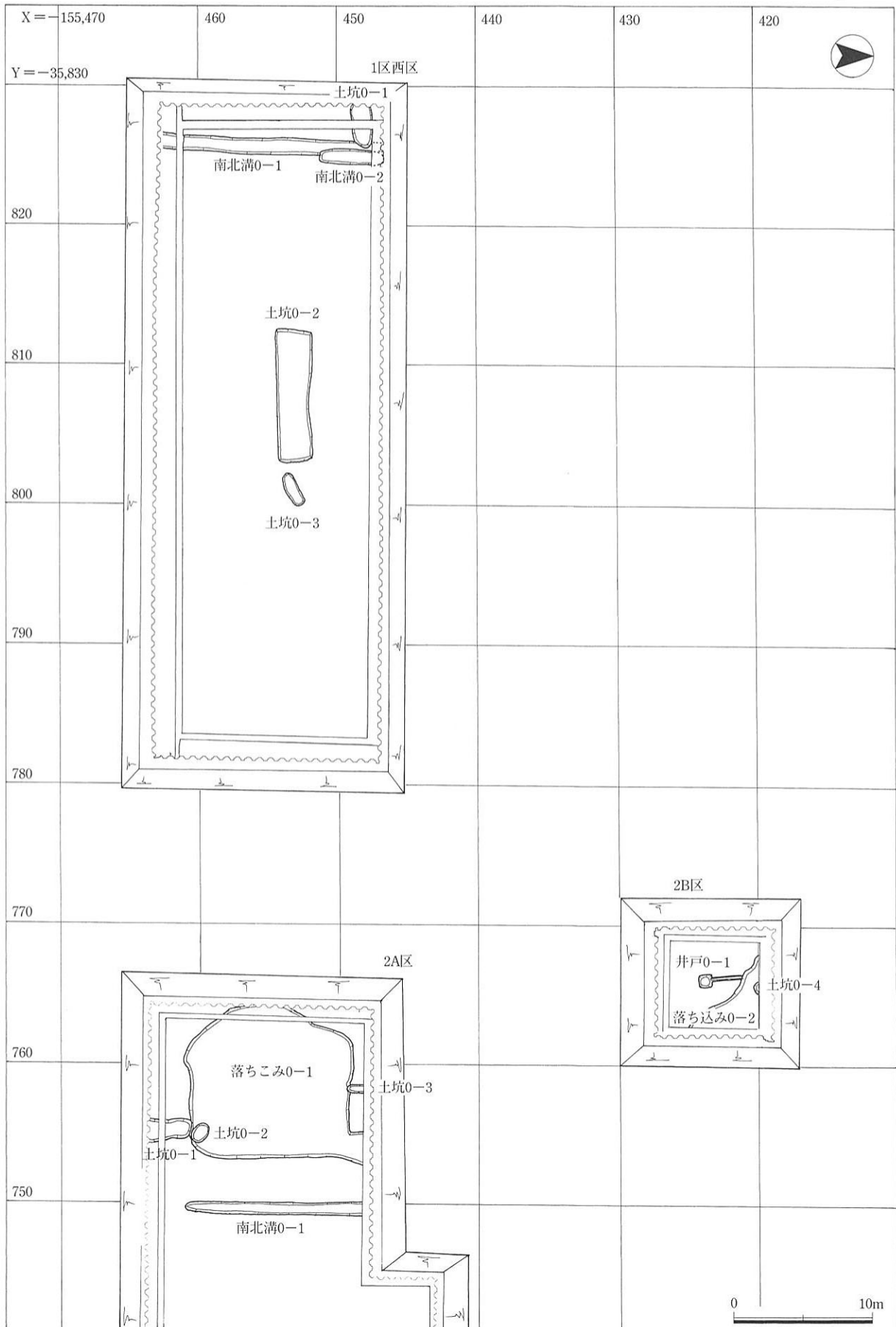


図39 2A・2B区第0遺構面 (近世・近代) (1/400)



第2部 2A・2B区の調査成果

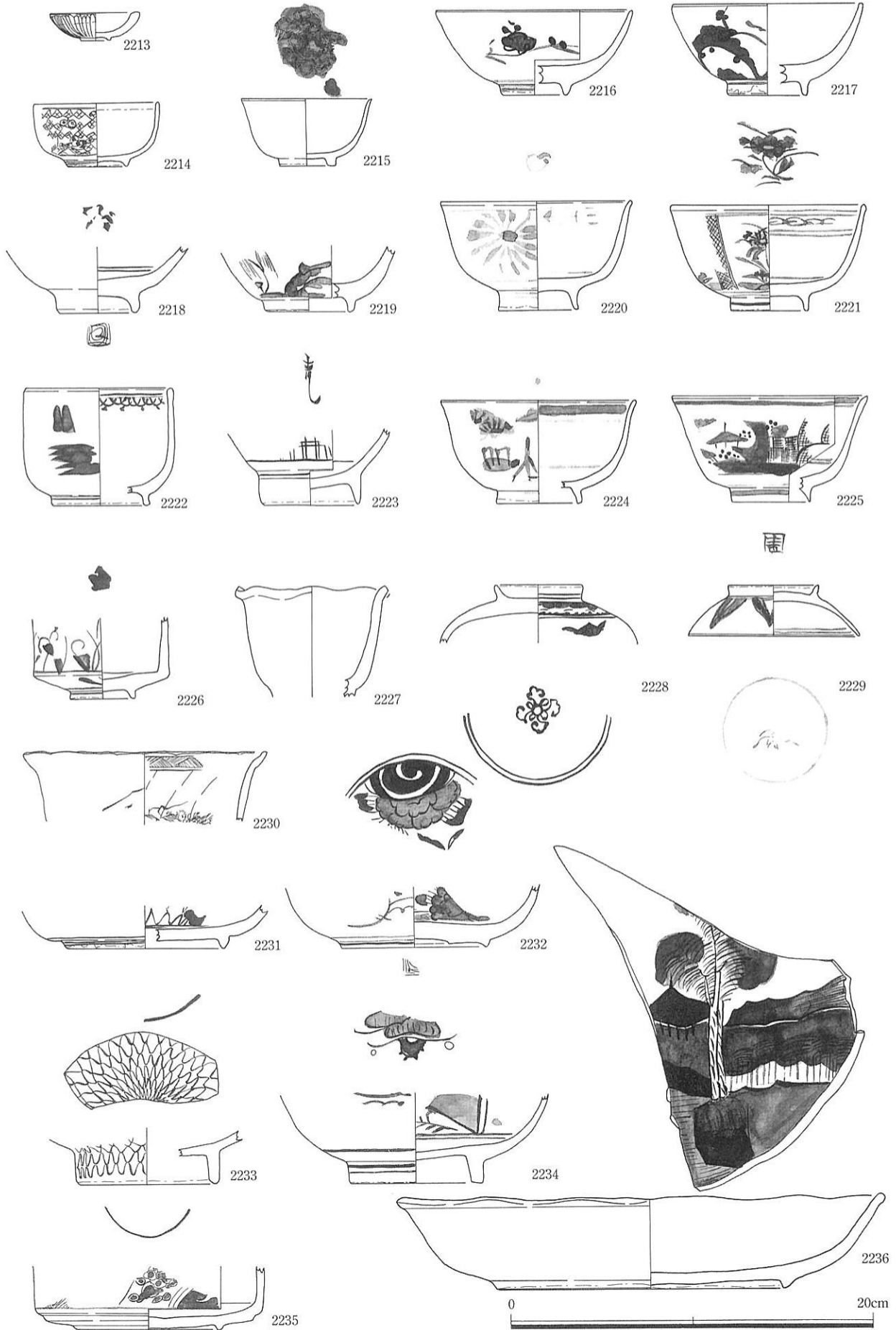


図40 南北溝出土近世遺物 (1) (1 / 3)

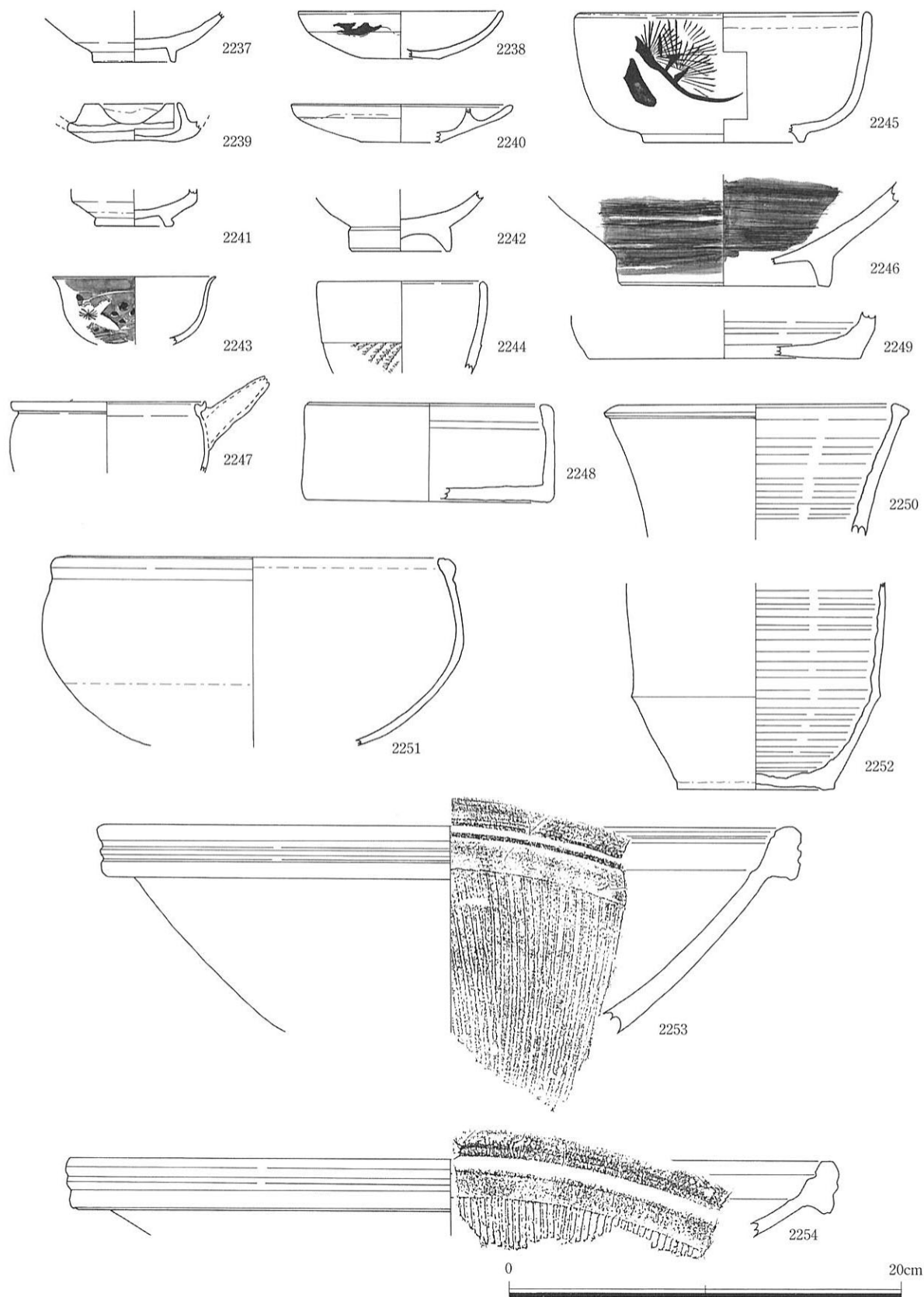


图41 南北溝出土近世遺物 (2) (1 / 3)

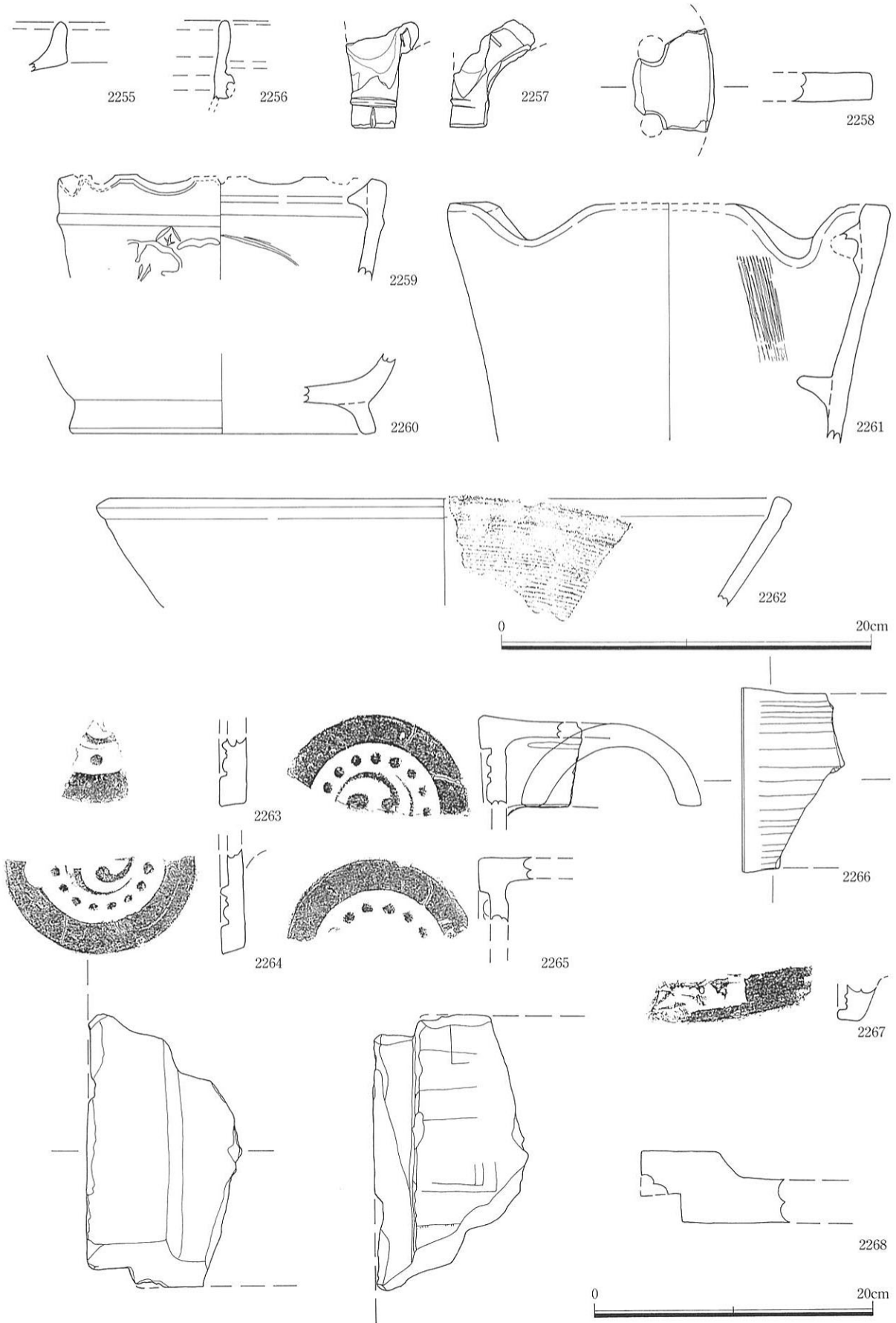


図42 南北溝出土近世遺物 (3) (1/3・1/4)

(2231)・青磁染付牡丹文深皿(2232)・楼閣山水文大皿(2236)の他にあと数点しか見られなかった。蓋物(2214)は同様の大きさのものが数個ある。化粧道具には、白磁紅皿(2213)のほかに、柿釉鬢水入が見られた。色絵段重(2235)は食物を入れることもあるが、白粉容れ兼白粉を溶く容器として使用されることも多い。

瀬戸・美濃焼磁器(2215・2224・2225)のほとんどが端反碗(2224・2225)、もしくはそれに伴う蓋であった。外面文様には、網干文(2224)・楼閣山水文(2225)などがある。瀬戸・美濃焼端反碗は19世紀前半には全国流通する。幕末に降るにつれ、小形化(器高の低下)傾向にあるという。今回見つかった端反碗は、比較的小形(口径10.8~12.8cm、器高5.7~5.9cm)である。

見込みに目痕をもつ、産地不明磁器染付鉢(2226)がある。19世紀に入ると各地で磁器生産が行われる様になり、産地の特定をむずかしくしている。

肥前陶器(2237・2242・2246)は、全て17世紀末~18世紀初頭に収まる特徴をもつ。呉器手碗(2242)は「献上手」とも呼ばれる前面施釉のものである。嬉野焼皿(2237)は透明釉が施される。嬉野焼皿はこの時期に爆発的に全国流通するもので、内野山窯で多量に生産されていたことが発掘調査によって明らかにされている。鉢は刷毛目文(2246)の他に三島手のものも見られ、全て大鉢であった。

京焼系陶器(2238~2241・2243・2247・2251)は陶器中で最も多い。筒形碗(2241)は見込みに目痕が残る。端反小碗(2243)の内面は白化粧土、外面は全体に鉄銹を塗り、その上からイチチンのほか、緑釉・鉄釉・白色釉により梅枝文を描く。18世紀末から煎茶が全国的に大流行するが、この碗も煎茶を飲むための碗である。京焼系陶器の調理具は行平(2247)や鍋(2251)の他にも土瓶・土瓶蓋・鍋蓋などが見られた。灯明皿(2238~2240)は全て灰釉が施されている。灯火具には柿釉灯明皿も見られた。

堺焼播鉢(2253・2254)は18世紀代から爆発的に全国流通する。今回の資料には播目が10本(2253)単位と9本(2254)単位のものが見られた。その他の播鉢も、見込みの播目を見る限り明石焼播鉢はなかった。

その他の陶器には、瀬戸・美濃焼(2244)・信楽焼(2249)・丹波焼(2252)・産地不明(2245・2248・2250)があった。大坂は江戸と比べ、18世紀以降瀬戸・美濃焼陶器の出土量は少ない。今回の資料には鎧茶碗(2244)が1点見られた。信楽焼甕(2249)は透明釉を施す。他に、鉄釉を施した甕もある。丹波焼には鉄釉徳利がある。イチチンによって体部に文字を描いたものもあった。他には、甕が見られた。蓋物(2245)は内外面に白化粧土を塗り、その上から鉄銹により松文を描く。松葉部分はスタンプによる。匣鉢形鉢(2248)の底部は離れ砂とリング状の焼き台痕が見られ、堺焼系の可能性がある。この形は鶏などの餌鉢に使われることがある。植木鉢(2250)は内面にロクロ目が顕著に残る。これも堺焼系の可能性がある。江戸時代後期には植物(朝顔や蘭など)を観賞用に栽培することが流行するが、専用器としての植木鉢が多量に流通するようになるのは19世紀以降のことである。

土師質土器(2255~2258・2260~2262)は大型製品が大半を占める。中でも火鉢(2260)・焜炉(2261)が多い。丸火鉢(2260)については上部・高台部の1/2が欠損しており、風炉となる可能性もある。この他には角火鉢も見られた。焜炉(2261)は外面を丁寧にヘラミガキする。円盤に穴をいくつかあけたサナとよばれる焜炉の付属品(2258)がある。焜炉(2261)に見られる内面中央突帯部の上ののせて使用する。通気を良くするために焜炉の中に入れられた仕切りである。瓦質土器焜炉(2259)の外面は型押しにより梅樹文が施され、上端部は花卉状に浅い切り込みが入る。

焙烙(2255・2256)は「煎る・炒める」といった調理法に使われるものである。外型作りによって製

作した底部に、外側へ若干張り出した低い口縁を持つもの(2255)と大和産の焙烙(2256)がある(註2)。大和産の焙烙は志紀遺跡周辺の遺跡でも見られ、奈良とを結ぶ街道による流通を考えさせる。外面に煤が付着していることから、鍋の類と考えるもの(2262)には、内面がハケによる調整、口縁部はナデ調整が施される。牛形の人形(2257)は、脚部のみ残存する。外面全体に泥キラが施され、型作り成形による。胎土は灰白色で、雲母を含む。伏見人形だろう。

瓦は丸・平瓦のほか、巴文軒丸瓦(2263~2266)・忍冬唐草文平瓦(2267)・道具瓦(2268)が見つかっている。いつから瓦葺になってゆくのかは、地域によって定かでないところがある。これらの瓦がどのような状態で葺かれていたのかは明瞭にできないが、志紀の集落における江戸期の建物を考える上で良好な資料である。

以上について、年代を抑えやすい瀬戸・美濃焼磁器(註4)と肥前磁器(註3)を中心に考えていく。瀬戸・美濃焼磁器の大半は染付端反碗(2224・2225)であった。瀬戸・美濃焼端反碗は19世紀前半から流通することが確認されている。今回の遺物はいずれも19世紀中頃のものである。肥前磁器を見ると、新しい様相のものには、端反碗(2220・2221)・鉢(2230)が挙げられる。これらも瀬戸・美濃焼端反碗と同様に19世紀中頃を下限とする。

その一方、上限を考えると18世紀後半に一般化する肥前磁器青磁染付碗が1点しか含まれず、18世紀末から出現する広東碗が多量にあった。広東碗の中でも先行する小広東碗が見られないことから、19世紀初頭が磁器群の上限とできる。

発見された遺物には、17世紀末~18世紀初頭の陶磁器が一部含まれた。しかし、18世紀初頭以降~後半頃の磁器がほとんどなく、溝の掘削時期とは考えにくい。したがって、遺構の埋没時期は19世紀初頭~幕末と考える。

中河内における近世農村の実態は考古学的にほとんど研究されていない。今回発見された遺物は近世後期陶磁器類を整理する上で、良好な資料と位置付けられよう。

(註1) 厳密に言えば陶胎製品は肥前陶器に入れるべきものであるかもしれないが、染付などを見る限り磁器製品の様相に近いと考え、肥前磁器に入れた。

(註2) 奈良県磯城郡田原本町などで製作していたことが調査によってわかっている。

(註3) 肥前陶磁器の年代決定は大橋康二氏の編年による。

大橋康二 1993 『肥前磁器』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社

(註4) 瀬戸・美濃焼磁器の年代決定は藤澤良祐氏の編年による。

藤澤良祐 1998 「近世瀬戸磁器編年の再検討—磁器端反碗を中心に—」『檜崎彰一先生古希記念論集』真陽社

## 第4章 志紀遺跡2 A区周辺における花粉分析

渡辺正巳

(文化財調査コンサルタント(株))

### はじめに

本報告は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が川崎地質株式会社に委託して実施した報告書を、渡辺がまとめなおしたものである。

志紀遺跡は大阪府中部の八尾市志紀に所在する、弥生時代中期から鎌倉時代に至る水田遺構を中心とする遺跡である。今回の報告では、新たに1区東区において花粉分析を実施したほか、川崎地質(1995)で報告済みの1区西区柱状試料について分析試料を追加して、花粉層序についての再検討を行った。

### 試料について

従来、川崎地質株式会社が分析を実施してきた調査区の配置を図43に示す。今回新たに報告する試料は1区東区東壁および南壁から採取した。東壁では発掘調査の状況に応じ、3地点で層が連続するように採取した。また、1区西区西壁地点は川崎地質(1995)の1区西区と同じ地点で、間を埋めるように採取している。試料採取層準を図44、45、46左端の模式柱状図に示す。また、1区西区西壁の試料Noは川崎地質(1995)当時から全て付けなおしている。

### 分析方法

花粉分析処理方法は渡辺(1995)に従っている。顕微鏡観察は光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行っている。また、原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定している。しかし、一部の試料では花粉化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数で200を越えることができなかった。

### 分析結果

花粉分析結果を図44、45、46の花粉ダイアグラムに示す。花粉分析を実施した試料のうちのいくつかでは、木本花粉の検出量が極めて少なかった。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。また、上記の木本花粉の検出数の少ない試料では、検出できた種類を「\*」で示した。

### 花粉分帯

花粉分析結果、および各地点の層序対比をもとに、花粉分帯を行った。花粉組成の変遷を見るために、下位から上位に向かって記載する。

#### ① IV帯(東区東壁試料No.32~27、西区西壁試料No.32~28)

アカガシ亜属が他の種類に比べ高い出現率を示すほか、特徴的に出現する種類はない。また草本花粉もほとんど出現しない。これらの試料のうち、東区東壁試料No.29~27、西区西壁試料No.28ではアカガシ亜属の出現率が80%程度と特に高く、東区東壁試料No.32~30、西区西壁32~29ではスギ属などの温帯針葉樹がやや高率を示す。このことから、IV帯をb亜帯(東区東壁試料No.32~30、西区西壁32~29)とa亜帯(東区東壁試料No.29~27、西区西壁試料No.28)に細分した。

② III帯（東区東壁試料No.26～7、西区西壁試料No.23～14）

アカガシ亜属が他の種類に比べ高い出現率を示すほか、スギ属などの温帯針葉樹やシイノキ属が特徴的に出現する。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）の出現率が高く、試料によりヨモギ属が高率となる。これらの試料のうち、東区東壁試料No.26～23ではコウヤマキ属が特徴的に出現する。また、東区東壁試料No.22～7、西区西壁試料No.23～18ではアカガシ亜属、イネ科（40ミクロン以上）以外には特徴的に出現する種類はない。さらに西区西壁試料No.試料No.17～14ではヨモギ属が高い出現率を示し、イネ科の出現率が上下の層準に比べ低い出現率を示す。

本来花粉帯（亜帯）は、同時間（地質学的に）を示すものであるが、ここでは便宜的に両地区を通じ共通に認めることのできる花粉化石群集をb亜帯（東区東壁試料No.22～7、西区西壁試料No.23～18）、東区でb亜帯の下位に認めることのできる花粉化石群集をc亜帯（東区東壁試料No.26～23）、西区でb亜帯の上位に認めることのできる花粉化石群集をa亜帯（西区西壁試料No.試料No.17～14）とした。

③ II帯（東区南壁試料No.12～7、東区東壁試料No.6～2、西区西壁試料No.13～8）

木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）が他の種類に比べ高い出現率を示すほか、スギ属などの温帯針葉樹や、アカガシ亜属もマツ属（複維管束亜属）と同程度の出現率を示す。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が高い出現率を示す。

④ I帯（東区南壁試料No.6～1、西区西壁試料No.7～1）

木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）が高い出現率を示し、草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が高い出現率を示す。これらの試料のうち、東区南壁試料No.2、1、西区西壁試料No.4～1ではアブラナ科も100%を越す高率となる。さらに、東区南壁試料No.2、1、西区西壁試料No.1ではスギ属の出現率が16%と他の種類に比べ高率となる。これらのことから、I帯をc亜帯（東区南壁試料No.6、西区西壁試料No.7、6）、b亜帯（西区西壁試料No.5～2）、a亜帯（東区南壁試料No.2、1、西区西壁試料No.1）に細分した。

### 既知の分析結果との比較

志紀遺跡では川崎地質株式会社（1993、1995）による花粉分析の報告がある。また渡辺（2002）により、3A区での花粉分析結果が報告されている。

今回の分析結果を上記の結果と比較すると、表4のようになる。川崎地質（1993）、渡辺（2002）に比べさらに上位の試料を対象として分析を行っている。

### 遺跡内の局地的植生について

今回の分析結果では西区では21層がIII帯a亜帯に、東区では21層がb亜帯に分帯できた（前述のように、「花粉帯」の定義からはこのような使い方には不都合がある。しかし、今回は便宜上このような使い方をしている）。このことから、21層堆積時には両地点で植生の差が生じていたものと考えられる。21層は第3遺構面直下の層準であり最終的な土地利用状況が判明している層準の一つである。東区では第3遺構面には、足跡を伴う畦畔遺構が検出され、水田の跡と推定されている。一方、西区西部では溝状の遺構が確認されているものの畦畔は検出されず、水田の可能性は低い。このような土地条件の違いにより、ヨモギ類が西区に生育していたと考えられる。

また25a層～26a層にかけても、東区と西区では花粉化石組成に違いが認められる。西区の25a、b層では花粉化石の検出量が少ないものの、ヨモギ属の花粉と、シダ類胞子が高い割合で出現する。この影響は東区でも表れ、同層準（ほぼIII帯c亜帯に対応）でヨモギ属がやや高率になり、シダ類胞子も多

数検出される。したがって、25a、b層の堆積当時にヨモギ属は西区を中心に生育していたと考えられる。

上記のように草本花粉の違いは、土地条件の違いなどにより説明が付き、地域差と考えられる有為な差が検出できた。一方木本花粉の組成では、III帯a亜帯でスギ属、III帯c亜帯でコウヤマキ属が特徴的な出現傾向を示す。一般にこの時期（縄文晩期頃）の平地の森林植生は照葉樹林で代表されており、III帯a亜帯、c亜帯で認められるスギ属、コウヤマキ属は山地中腹より上部の植生と考えられる。また草本花粉、シダ類胞子が多数検出できる事から、これらの時期に調査地周辺は草原であったと考えられる。以上のことから、ここでのスギ属、コウヤマキ属の出現は、堆積作用による特定花粉の濃縮、あるいは堆積後の土壌化過程での特定種の残存などが主な原因と考えられる。しかし、志紀遺跡3 A区（渡辺、2002）など遺跡内の広範囲で同様な現象が認められることから、遺跡内あるいは近辺でコウヤマキが生育していた可能性も否定できない。

### 古環境復元

ここでは、花粉分帯に対応する時期毎に、花粉分析結果より遺跡周辺の古環境を推定する。

#### ①IV帯期（～縄文時代晩期）

遺跡周辺の平地から生駒山地や石川上流の葛城・金剛山地の山麓にかけて、カシ類を要素とする照葉樹林が広く分布していたと推定できる。また、これらの山地の山腹から山頂にかけては、スギなどの温帯針葉樹を要素とする中間温帯林が分布し、山頂部にはブナ（現在の分布から推定）を要素とする冷温帯林の分布が推定できる。

遺跡周辺にはガマ属、セリ科、カヤツリグサ科、イネ科を要素とする湿地が広がっていたと推定できる。これに対し、微高地にはヨモギ属やシダ類が繁茂していたと考えられる。

一方、b亜帯からa亜帯でスギ属、ヒノキ科花粉の出現率が顕著に低下する。同時に堆積遺物が粗粒化する傾向にあることから、植生の変化ではなく堆積環境の変化に伴う花粉粒の選別が起こった可能性が高い。

#### ②III帯期（縄文時代晩期～古墳時代前期）

IV帯期（縄文時代晩期以前）に比べ、カシ類を要素とする照葉樹林が縮小し、スギなど温帯針葉樹を要素とする中間温帯林が拡大したと推定できる。いわゆる「弥生の小海退期」に相当し、気温の低下や降水量の増加が予想される。

縄文時代晩期には、西区を中心にヨモギ属やシダ類の繁茂する草原が広がっていたと考えられる。さらに西区では弥生時代前期まで草原は続いた可能性がある。西区では一旦弥生時代前期から古墳時代前期にかけて水田化した時期があったと考えられるが、古墳時代前期の内に、再度草原化する。また、弥生時代中期には西区全体に大溝（環濠？）が掘られている。

一方東区では25a層堆積時期以降、イネ科（40ミクロン以上）の出現率の急激な増加が認められる。また、東区の25a層上面（第6遺構面）には水田遺構が検出され、東区ではこの時期（縄文時代晩期、あるいは弥生時代前期）以降、稲作が行われていたと推定できる。

#### ③II帯期（古墳時代前期～鎌倉時代）

生駒山地や石川上流の葛城・金剛山地の山麓にかけては、アカマツ（現在の植生から推定）を要素とする二次林の分布域が急激に拡大する一方、カシ類を要素とする照葉樹林の分布域が縮小したと推定できる。合わせて、III帯期に分布域の拡大が推定される中間温帯林も分布域を縮小したと推定できる。ま



た、山頂部にはブナを要素とする冷温帯林の分布が推定できる。

一方イネ科（40ミクロン以上）花粉の高率で安定した出現や、水田遺構が検出されていることから、この時期では連続的に稲作が行われていたと推定できる。また、この時期の後半にソバの栽培が行われていた可能性がある。

#### ④ I 帯期（鎌倉時代～）

生駒山地や石川上流の葛城・金剛山地の山麓～山腹にかけて、アカマツを要素とする二次林が広く分布していたと推定できる。一方、カシ類を要素とする照葉樹林や、スギなどの温帯針葉樹を要素とする中間温帯林は、限られた地域にのみ分布していたと推定される。一方、イネ科（40ミクロン以上）花粉の高率で安定した出現から、稲作が行われていたと推定できる。また、I 帯期中期（b 亜帯期）には、アブラナ科花粉が高率で出現し、ワタ属花粉も数%の出現率を示す。アブラナ科花粉の高率出現は、大阪府南部地域では16世紀以降に主に見られる現象であり（藤田ほか，1991）、イネ科（40ミクロン以上）花粉、ワタ属花粉と共に検出されることから、栽培の「アブラナ（ナタネ）」に由来するものと推定できる。またワタは、大阪府内では室町時代後期（A.D.1521）以降に栽培が定着されていたと推定されており（武部，1981）、これに由来すると推定できる。またワタ属花粉が検出できたことから、I 帯期中期（b 亜帯期）は室町時代後期以降に相当する可能性が高い。さらに、I 帯期後期（a 亜帯期）でのスギ属の出現率の増加をスギ植林の影響によると推定すると、I 帯期後期（a 亜帯期）は近代以降に相当する可能性が指摘できる。

#### まとめ

今回の分析結果から、以下のことを考察した。

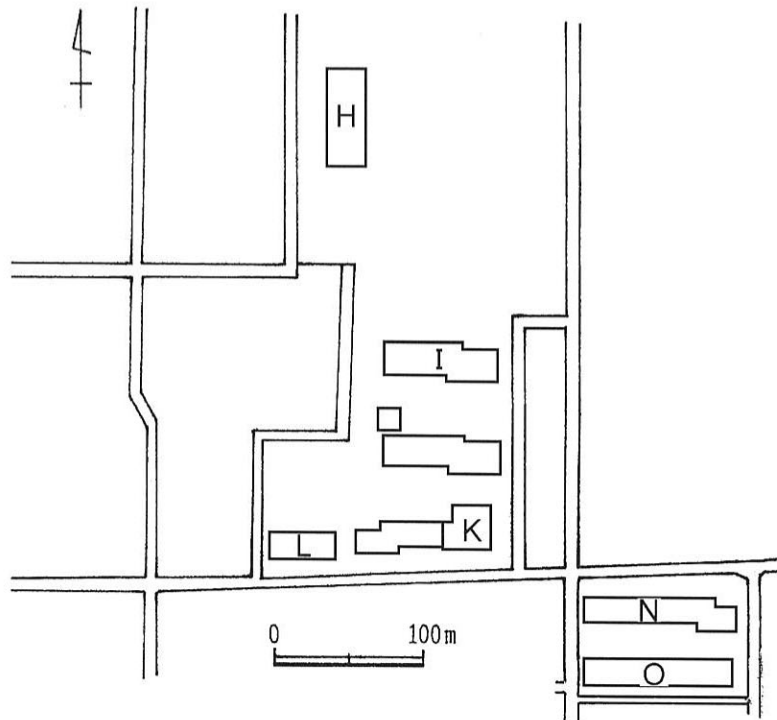
- (1) 花粉分析結果から I～IV の 4 花粉帯を設定し、さらに I 帯を a～c 亜帯、IV 帯を a, b 亜帯に細分した。
- (2) III 帯の内、局地的植生を表す花粉化石群集として a 亜帯、c 亜帯を設定した（本来の花粉帯の定義とは異なる。）。
- (3) IV 帯期（縄文時代晩期以前）から I 帯期（鎌倉時代～）にいたる、遺跡周辺の環境変遷を推定した。特筆すべき事は以下の点である。
  - ① 西区と東区の花成分組成の比較から、それぞれの地区を中心とした局地的植生を推定した。
  - ② 従来の分析では検出されていなかったワタ属の花粉が検出され、志紀遺跡内でも鎌倉時代以降（おそらく室町時代以降）綿花栽培が行われていたことが明らかになった。
  - ③ 従来の分析では認められなかったアブラナ科花粉の高率での出現が認められ、綿花栽培と同時期に、アブラナ（ナタネ）栽培も行われていたと推定される。

#### 引用文献

- 藤田憲司・古谷正和・渡辺正巳（1991）大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について。日本文化財科学会第8回大会研究発表会要旨集，33-34。
- 川崎地質株式会社（1993）志紀遺跡（第5次調査-A区、第6次調査-A区）におけるプラント・オパール分析および花粉分析。志紀遺跡発掘調査概要・III，43-51，大阪府教育委員会。
- 川崎地質株式会社（1995）志紀遺跡（93-西区）における花粉・珪藻分析。志紀遺跡—大阪府営八尾志紀住宅建て替えに伴う発掘調査報告書一，（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書，91，67-76。
- 武部善人（1981）河内木綿史。P275。吉川弘文館，東京。
- 渡辺正巳（1995）花粉分析法。考古資料分析法，84，85。ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳（2002）志紀遺跡3区発掘調査に伴う花粉化石等微化石分析。（本章第3部第4章第2節）

表4 花粉帯の比較

3A区			1区		91-A区	
			東区	西区		
I	c	平安～中世	I	a b c	中世～江戸	
						III 鎌倉
II		古中～平安	II		古後～鎌倉	II 6C後半
III	b	古前 ～ 弥前中頃	III	a	古中 ～ 古前	
	c	縄晩	III	b	縄晩～古中	I c b 弥前～5c後
IV	b	縄晩前半	IV	a b	縄晩～	I a ~前



凡例  
 H:5次A区 I:6次A区 K:1区東区 L:1区西区  
 N:3A区 O:3B区

図43 志紀遺跡調査区の配置

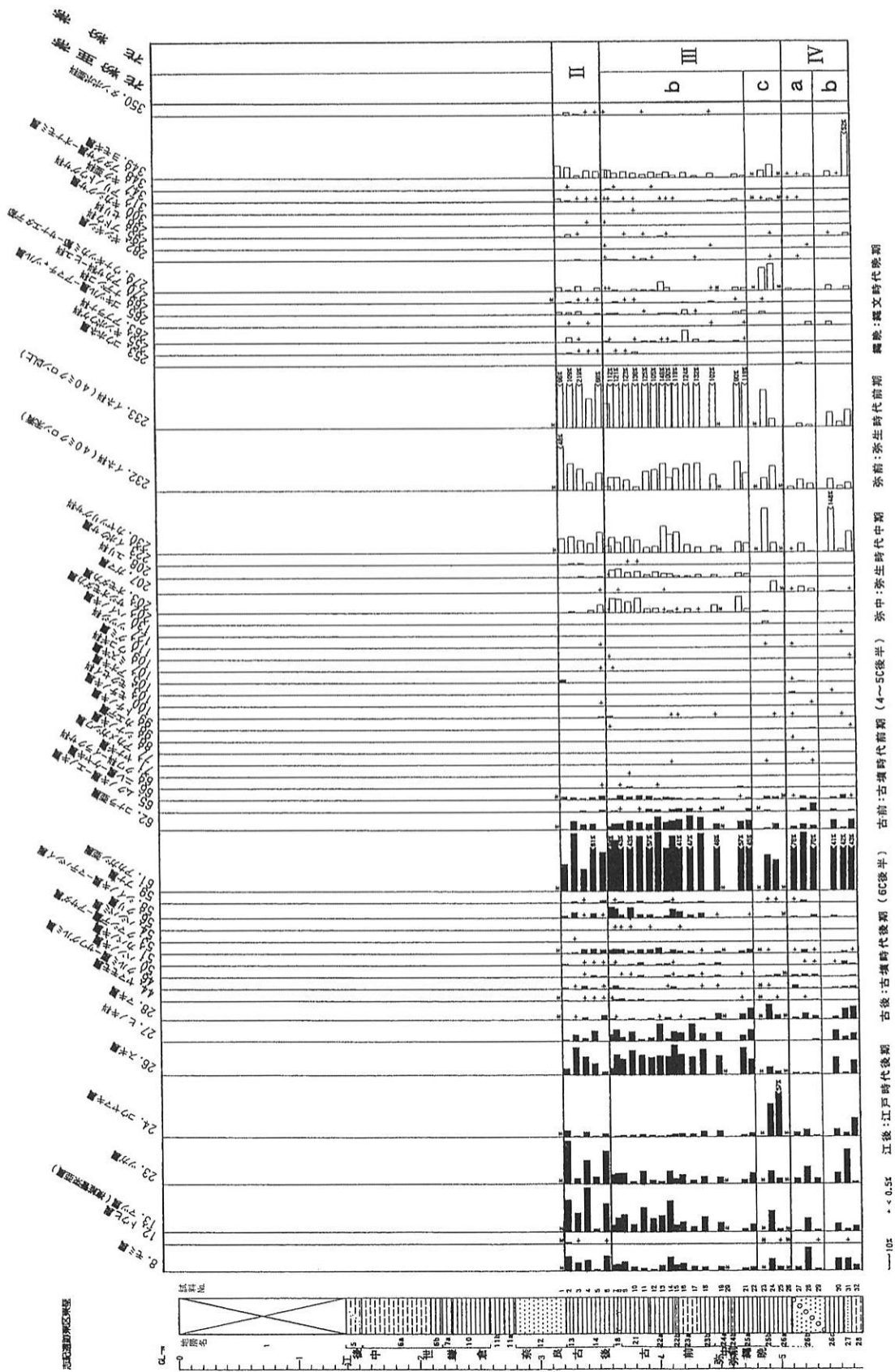
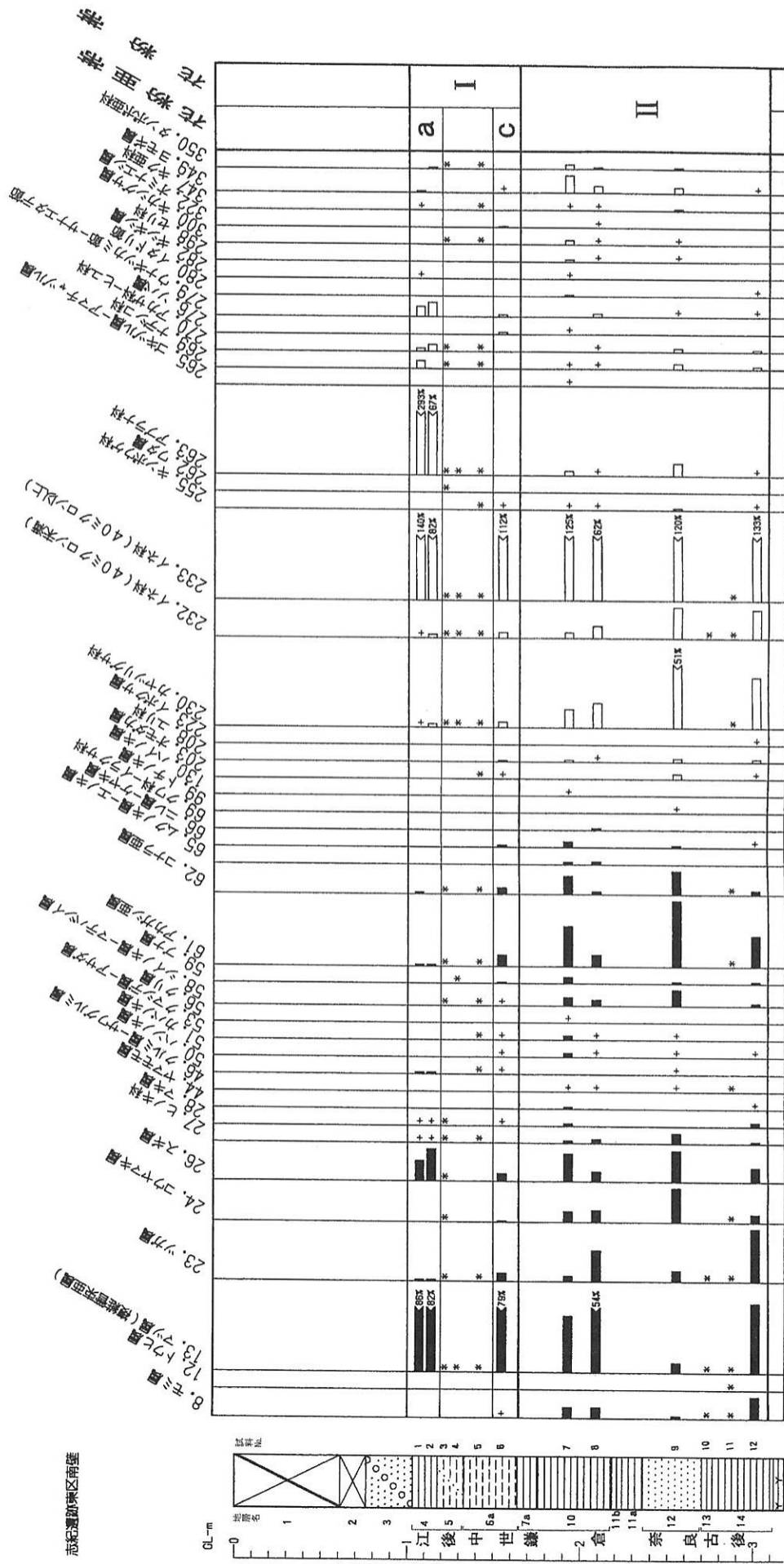


図44 1区東区東壁の花粉ダイヤグラム

江後:江戸時代後期 古後:古墳時代後期 (6C後半) 古前:古墳時代前期 (4~5C後半) 弥中:弥生時代中期 弥前:弥生時代前期 縄後:縄文時代後期



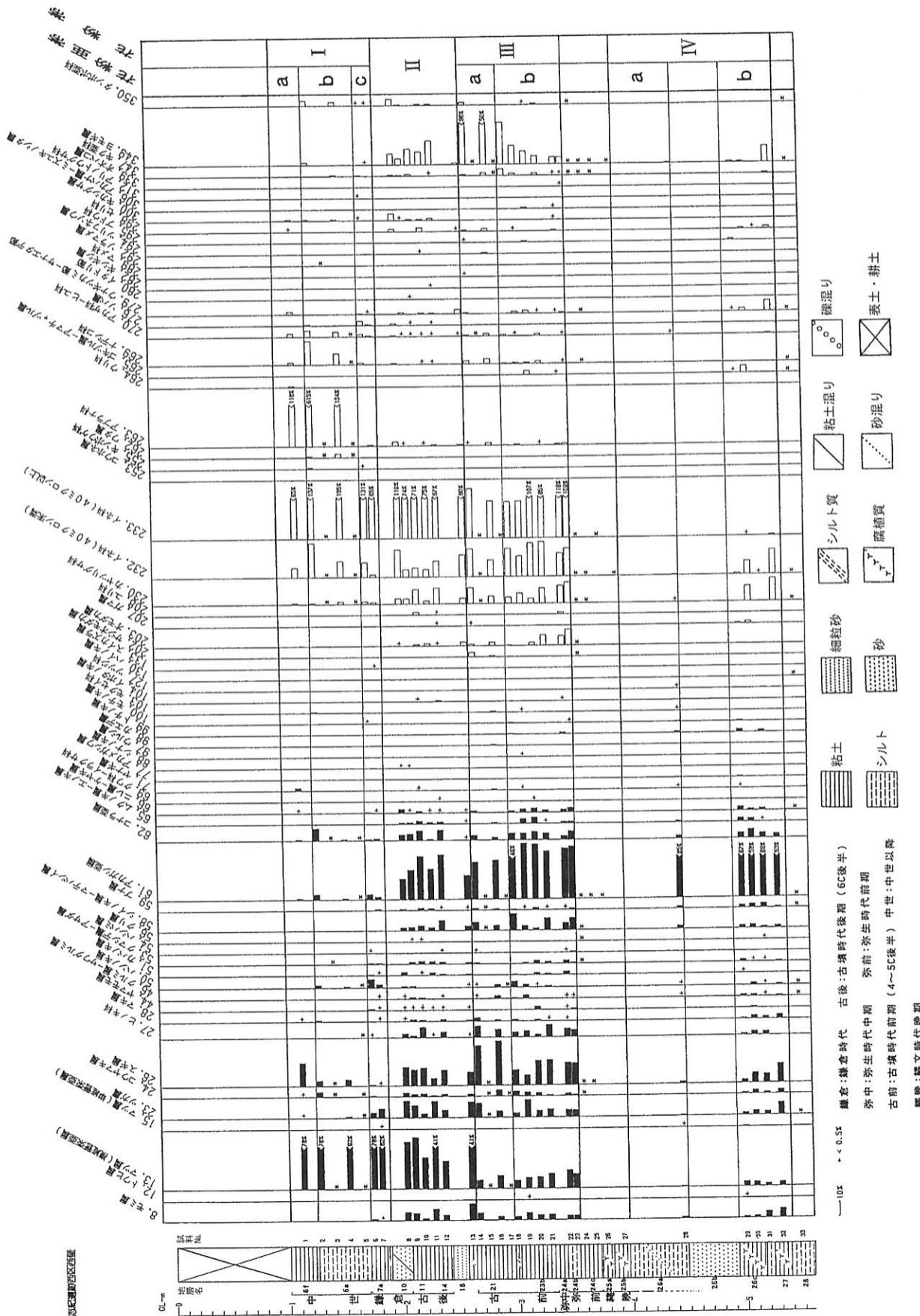


図46 1区西区西壁の花粉ダイヤグラム

## 第5章 小結

志紀遺跡2区では1区に連続する中世から弥生時代前期にいたる水田遺構と弥生時代前～中期の大溝群を確認した。以上は志紀遺跡の生産遺跡としての様相をより明確にすると共に、大和川の洪水に対処しながら大地を改変していった祖先の力強い息づかいを感じるものだった。以下に遺構変遷を中心に土地改変の様相を総括する。なお、石器製作・昆虫化石については考察に詳しい。

### 1. 条里制水田

2区では平安時代末以降の遺構面に条里制水田を検出した。南北に伸びる畦畔が約10.8m間隔で並行して形成される長地形の条里制水田がみられた。水田畦畔は人が歩ける様に踏み固められた大畦畔と水流を制御する小畦畔がある。水田面には裏作を示す耕作溝が東西方向と南北方向にうがたれている。自然科学分析ではアブラ菜科花粉の高率出現が見られ、栽培種が推測される。また、少量のワタ科花粉も見られた。その他、水田面には唐鋤を引いた痕跡と牛馬の足跡が発見されており、牛馬耕の定着がうかがえる。昆虫化石の抽出ではこの遺構面のみ食糞性昆虫（マグソコガネ）がみられた。

### 2. 小区画水田

弥生時代前期後半から古墳時代後期にかけて連綿と地形に添った小区画水田が調査区一帯に広がっていた様相を復元できた。小区画水田は南西方向から北東方向に短冊状の水田区画を形成する弥生時代前期・中期の水田類型と南東方向から北西方向に方形の水田区画を形成する古墳時代の水田類型に分けられる。前者は田井中遺跡集落と道状遺構で繋がれており、弥生時代中期の一時期には集落と生産域の間に大溝群が多条に営まれる。空闲地では石器製作も行われていた。一方、後者は大和川流路に並行して大畦畔がほぼ40～50m間隔で形成され、その間を網の目状に小畦畔が埋める形だった。大畦畔の位置は古墳時代の3つの遺構面を通してほぼ継承されており、経営形態の連続性を推測することができる。

以上の水田群からは低地性の植物遺体・花粉化石と共に様々な昆虫化石が発見されている。中でも各遺構面から稲作害虫（イネネクイハムシやイネノクロカメムシ）が数多く発見されており、生産実態を知る上で興味もたれる。また、弥生時代前期水田から発見されたイネネクイハムシはわが国最古の事例でこの地に水田耕作が始まって以来、害虫に苦しめられた実態を知ることができる。その他、発見された食虫性昆虫（ヤマトトックリゴミムシ）や水生昆虫（ガムシ）からよく陽のあたるよどんだ浅い水辺に稲が繁茂した風景が復元できた。

### 3. 大溝群

弥生時代中期の一時期には田井中遺跡集落と志紀遺跡水田群の間に掘削された大溝は1区・2区調査区にまたがり12条以上であることが判明した。ただし、同時にいくつの溝が機能したのかは判然としない。中河内では亀井遺跡集落などに多重環濠が発見されている。その性格は集落の防御よりも、排水・貯水の意味合いが強い。今回発見の大溝も帯水の痕跡が見られ、人為的に埋め戻されており、機能と労力からみても集約的に計画されたものと考えられる。ただし、堆積土中に土器や石器など生活痕跡を示すものが乏しく、集落との隔たりが推測される。また、発見された昆虫化石にはツタの葉を食べる食葉性昆虫（ドウガネブイブイなど）が多く含まれ、大溝上面の風景はツタに覆われた低木が生い茂るブチジャングルを復元する。大溝内を歩いた跡が残ることからも外界を遮断する深い藪だったようだ。

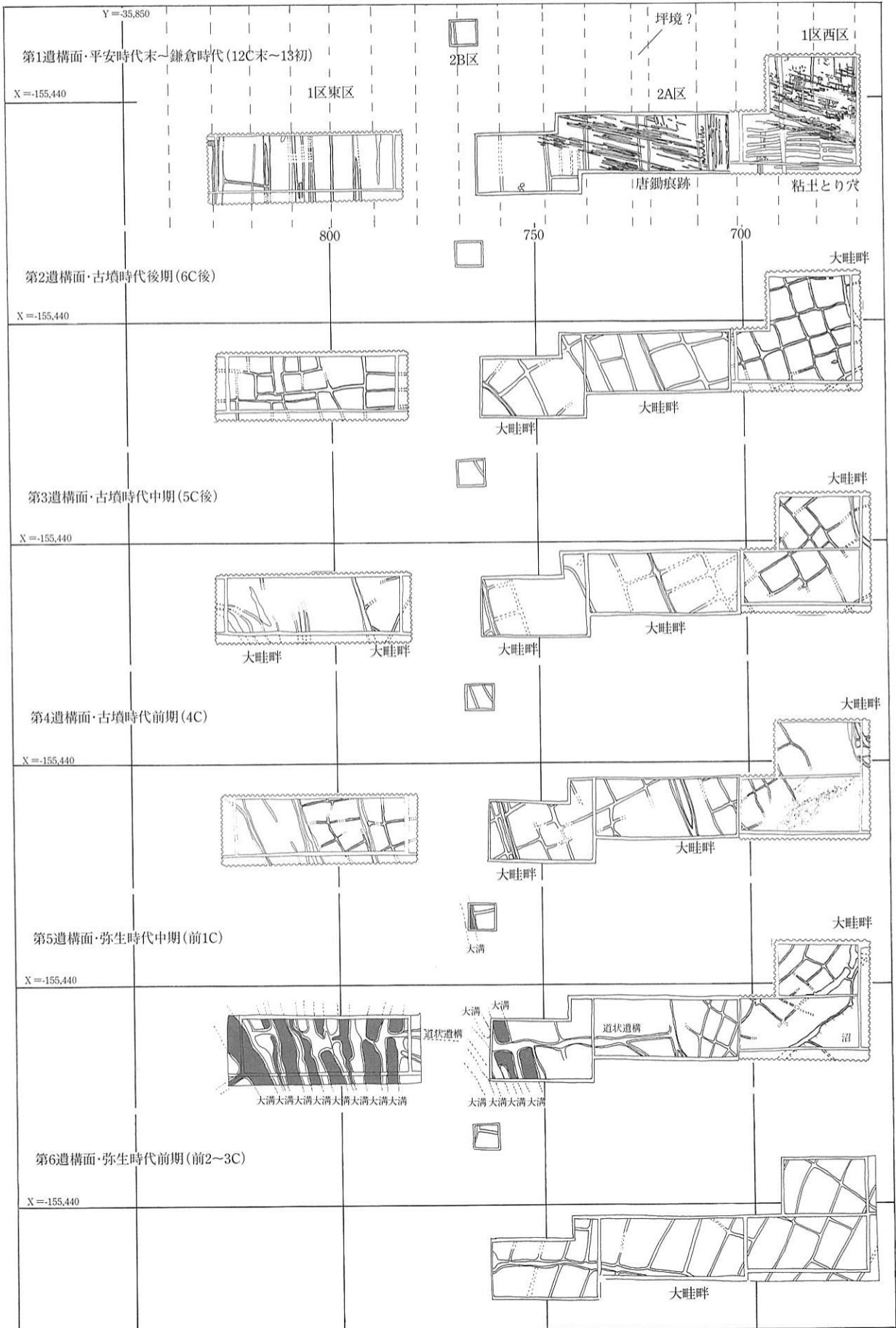
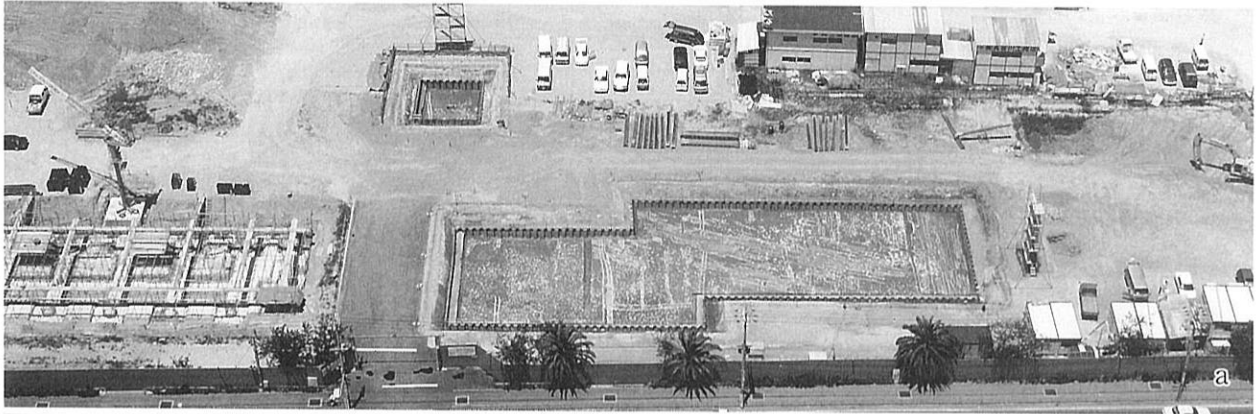


図47 1区・2区遺構変遷図 (1/1500)



a. 第1遺構面(南から) b. 第2遺構面(南から) c. 第3遺構面(南から) d. 第4遺構面(南から)





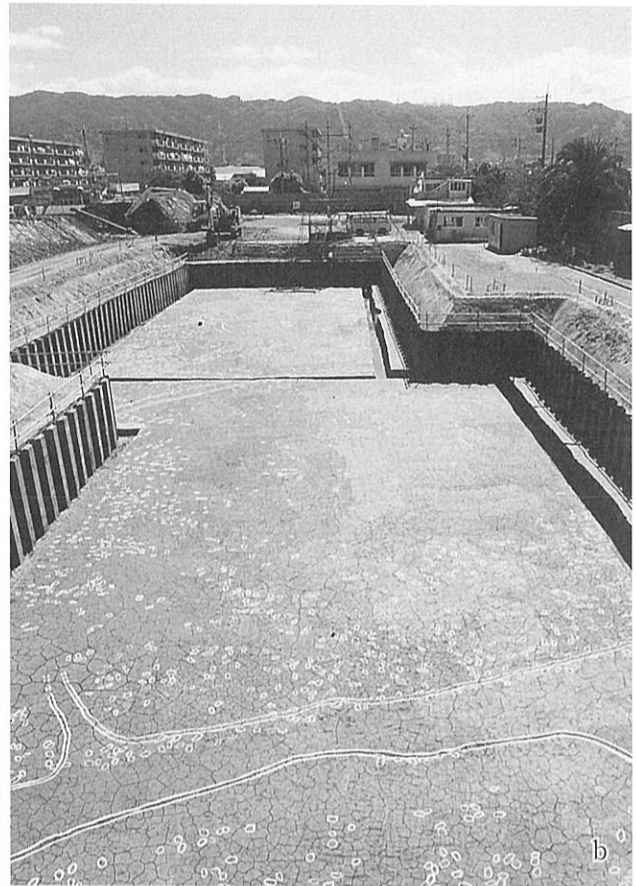
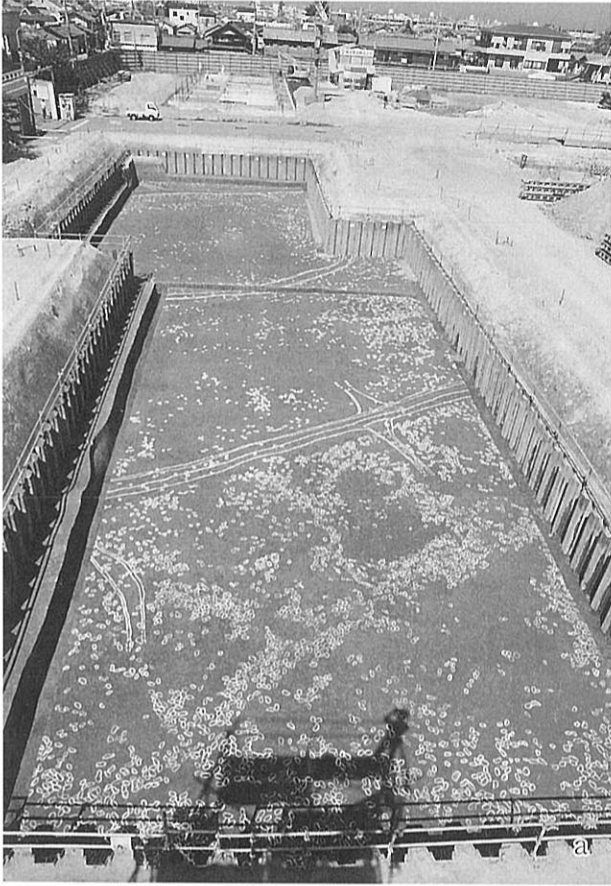
a. 第5遺構面(南から) b. 第6遺構面(南から) c. 第7遺構面(南から)



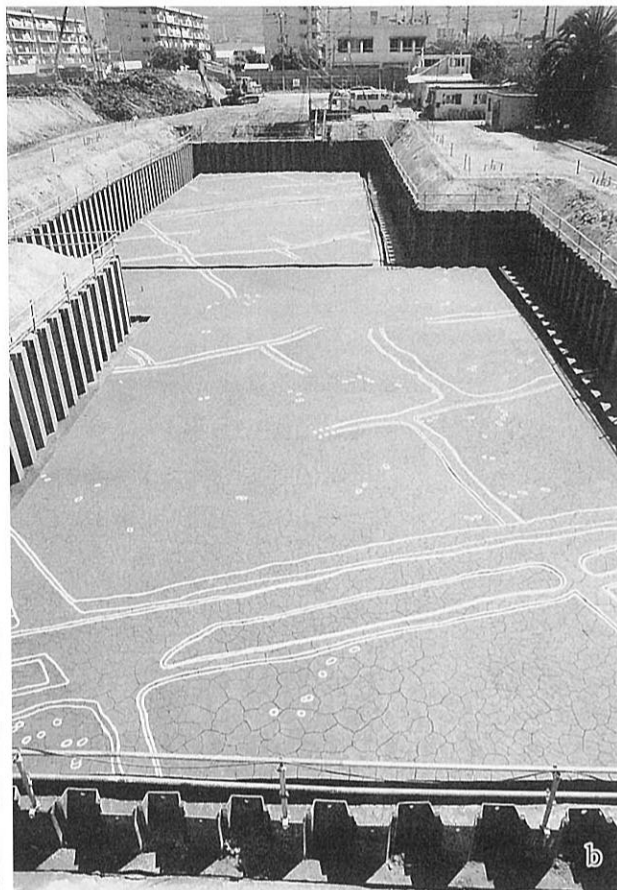
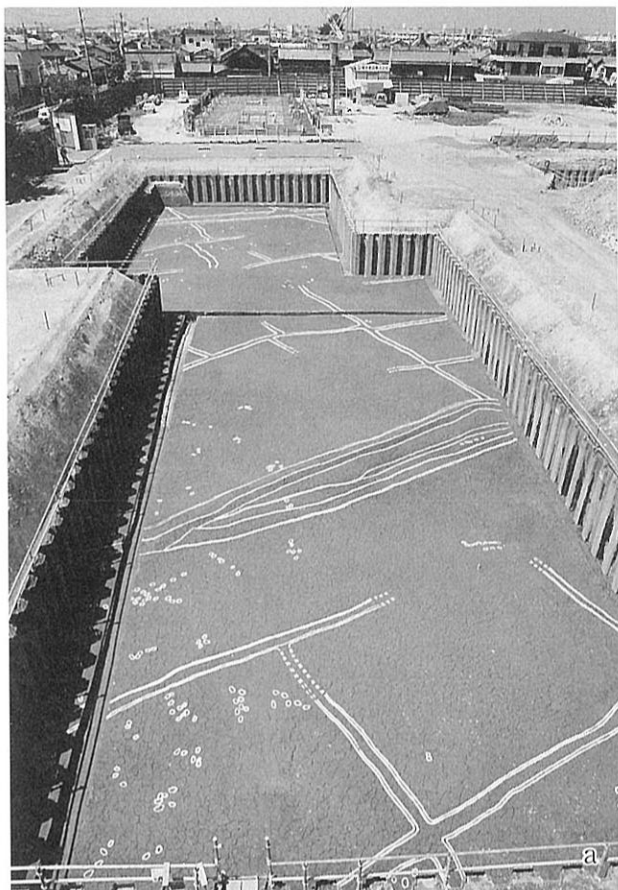
a. 第1遺構面(東から) b. 第1遺構面(西から) c. 第1遺構面細部(南から)



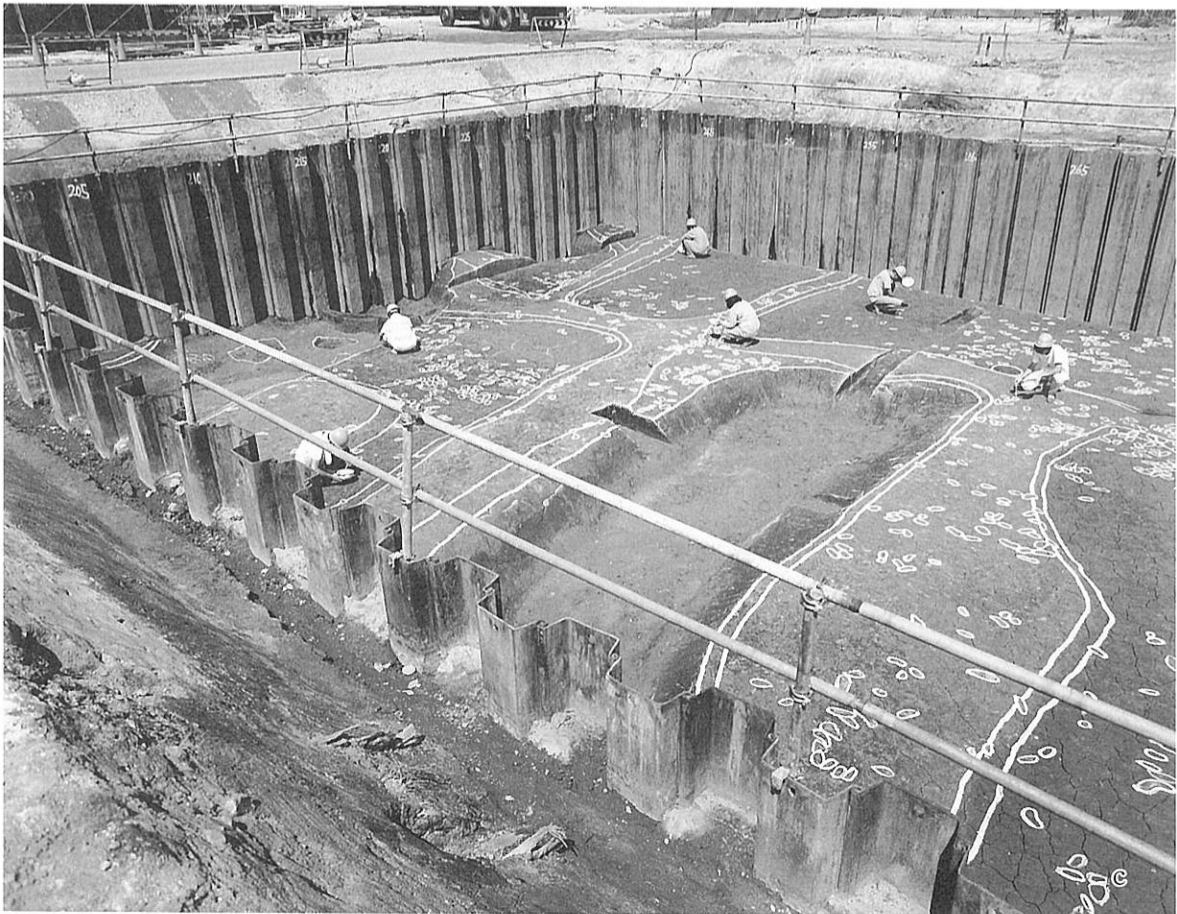
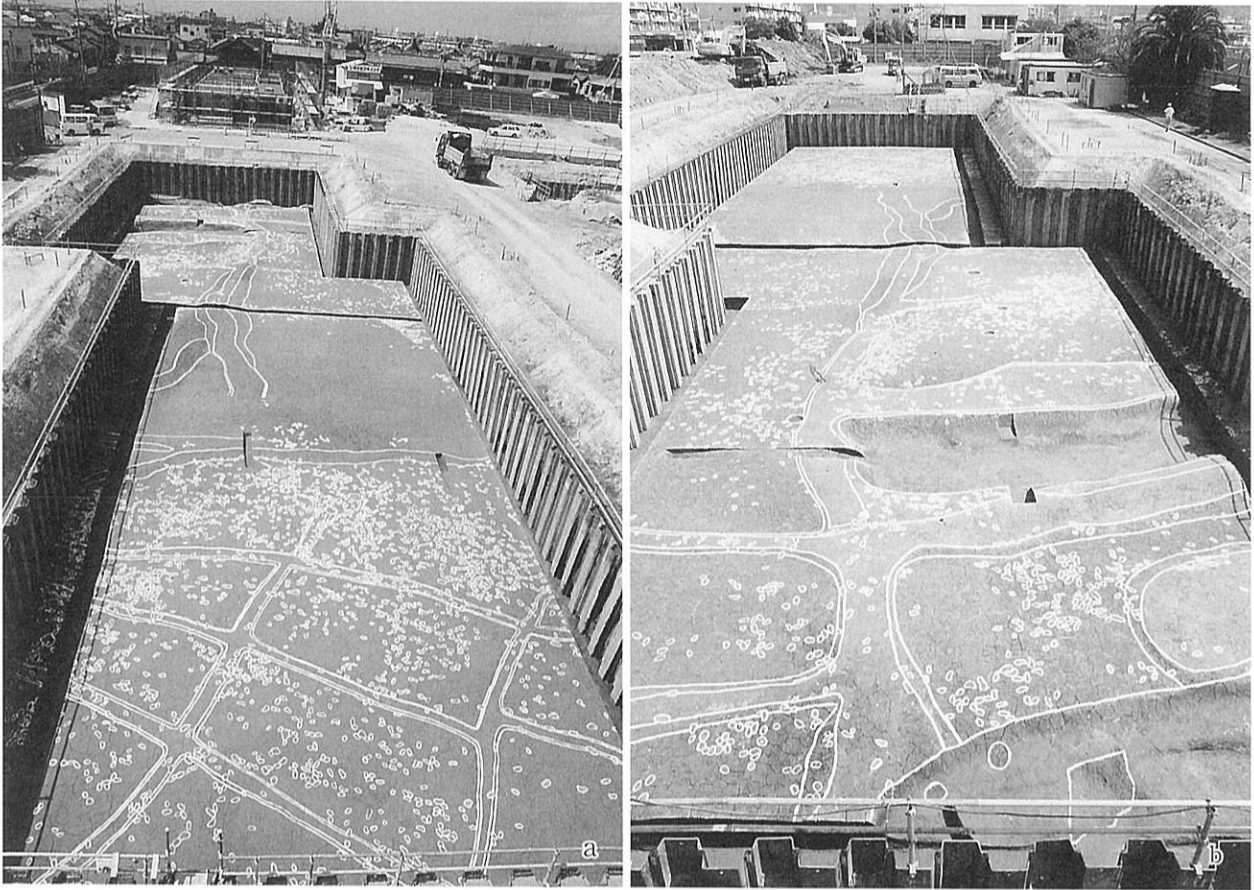
a. 第2遺構面(東から) b. 第2遺構面(西から) c. 第2遺構面細部(北から)



a. 第3遺構面(東から) b. 第3遺構面(西から) c. 第3遺構面細部(南から)



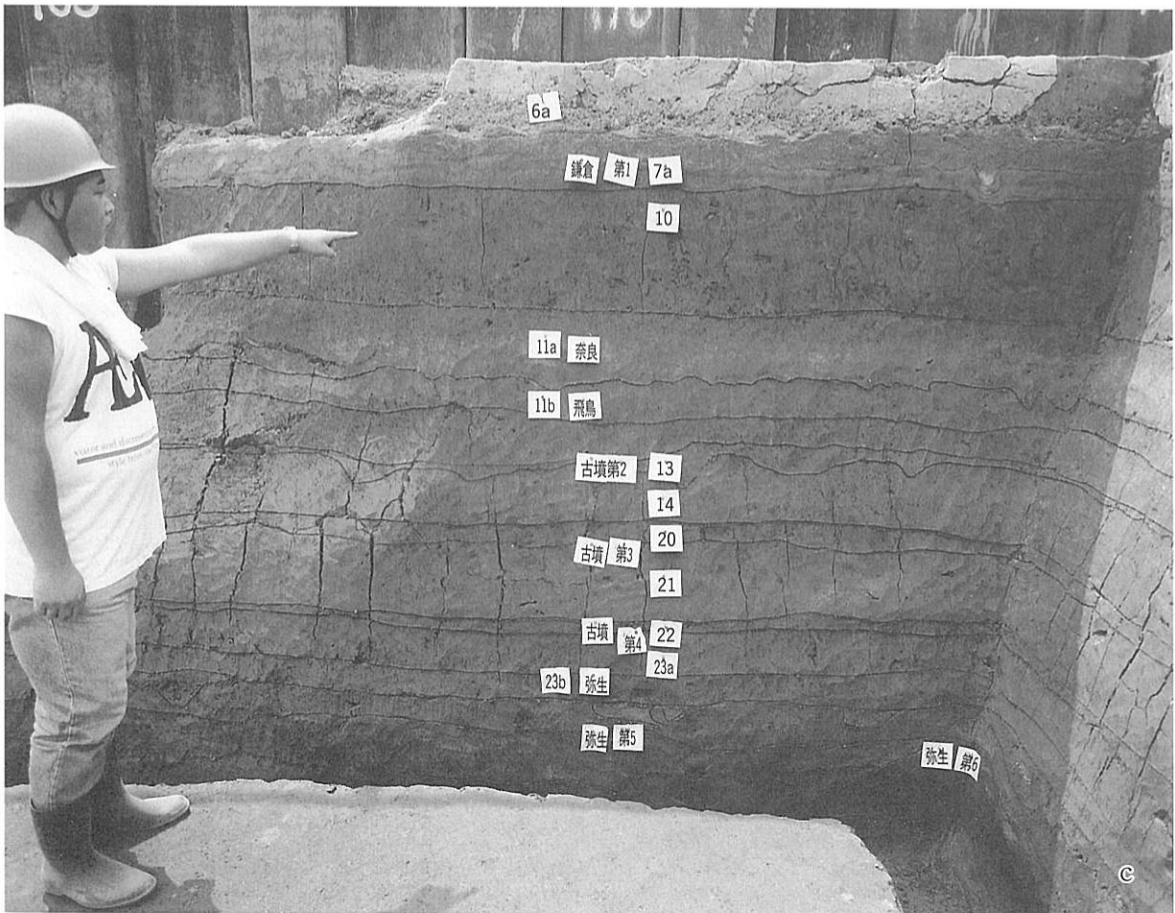
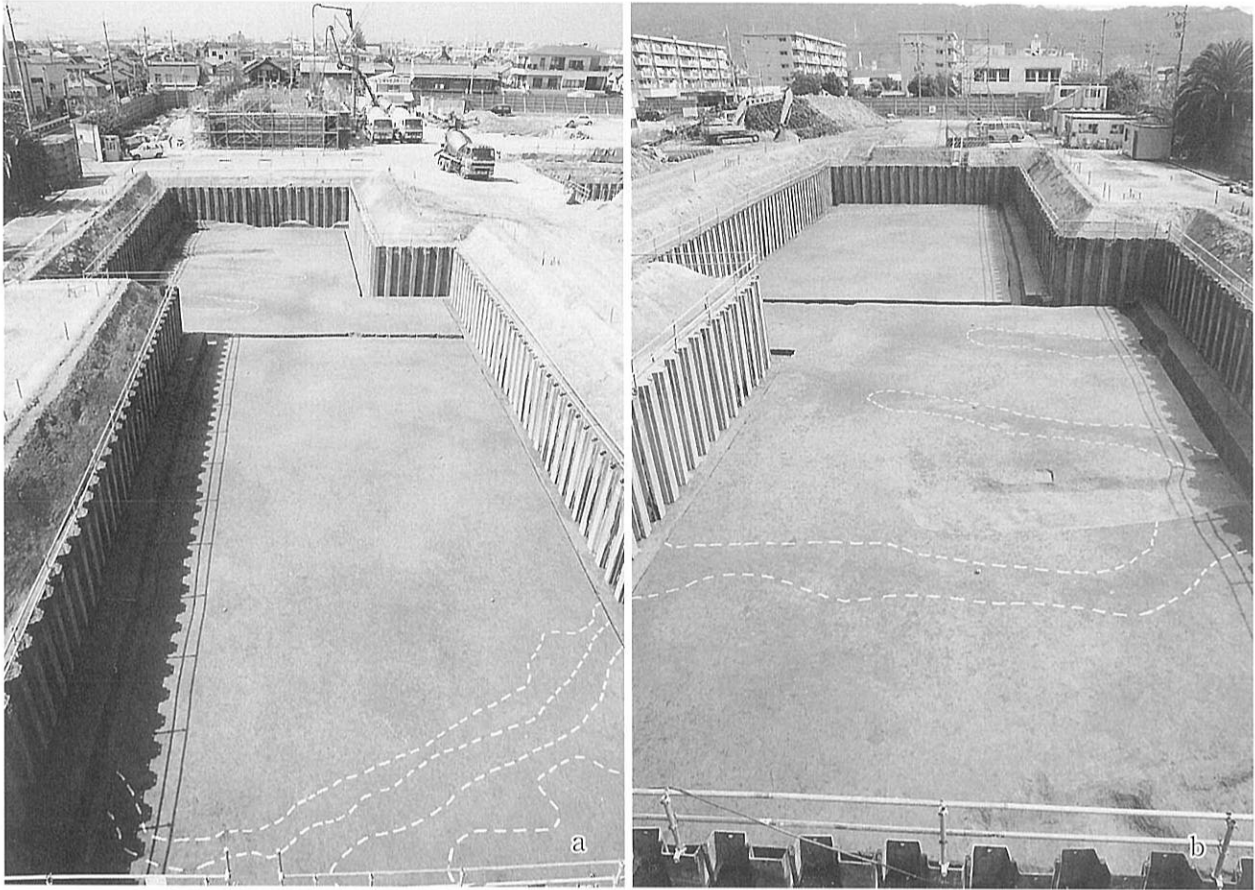
a. 第4遺構面 (東から)    b. 第4遺構面 (西から)    c. 第4遺構面細部 (西から)



a. 第5遺構面(東から) b. 第5遺構面(西から) c. 第5遺構面細部(南から)

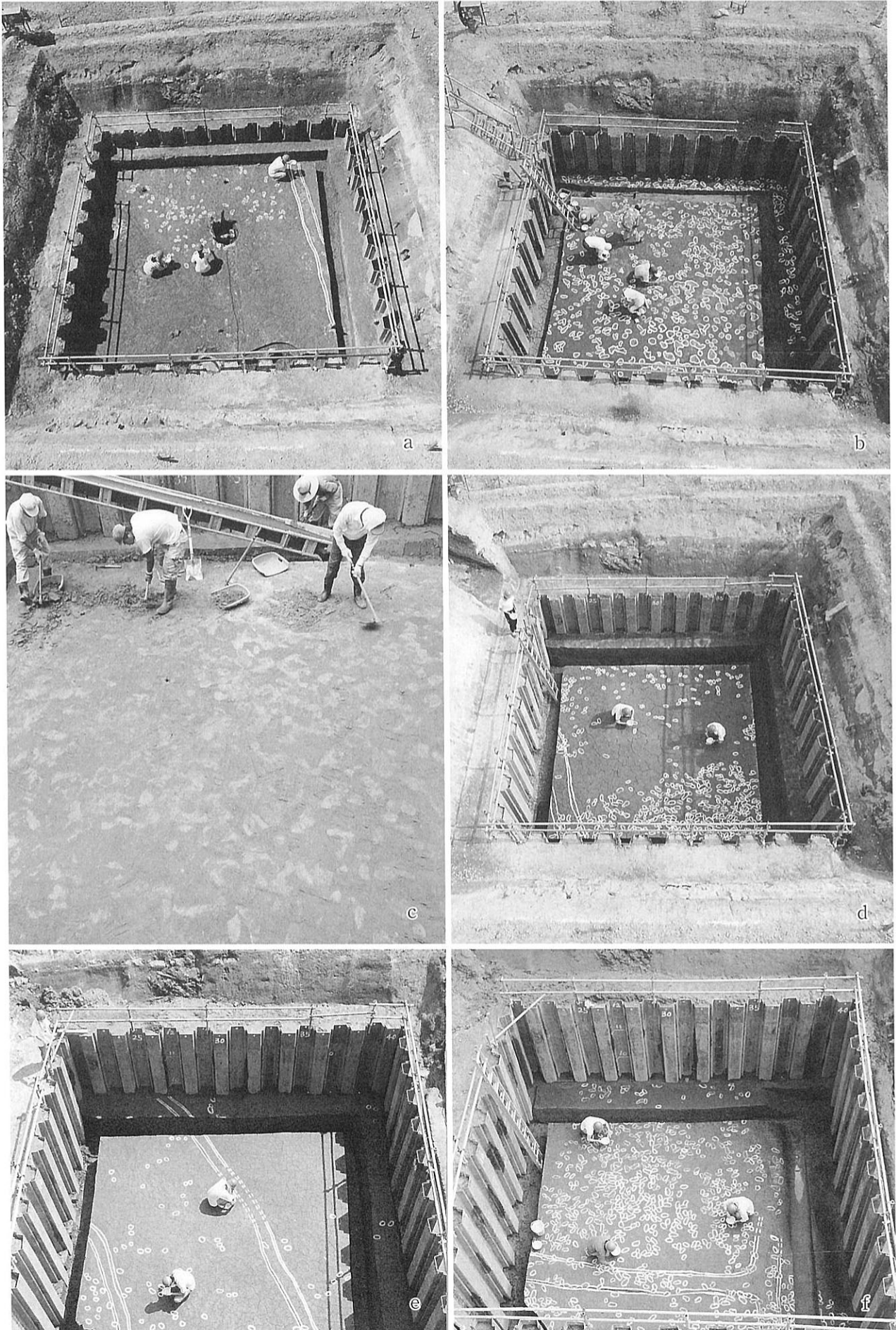


a.b. 第6遺構面(弥生前期) 全景 (a.東から・b.西から) c~e. 同上細部 (c.南から・d.南から・e.西から)



a. b. 第7遺構面(縄文晩期)全景 (a.東から b.西から) c.土層堆積状況(南東隅)

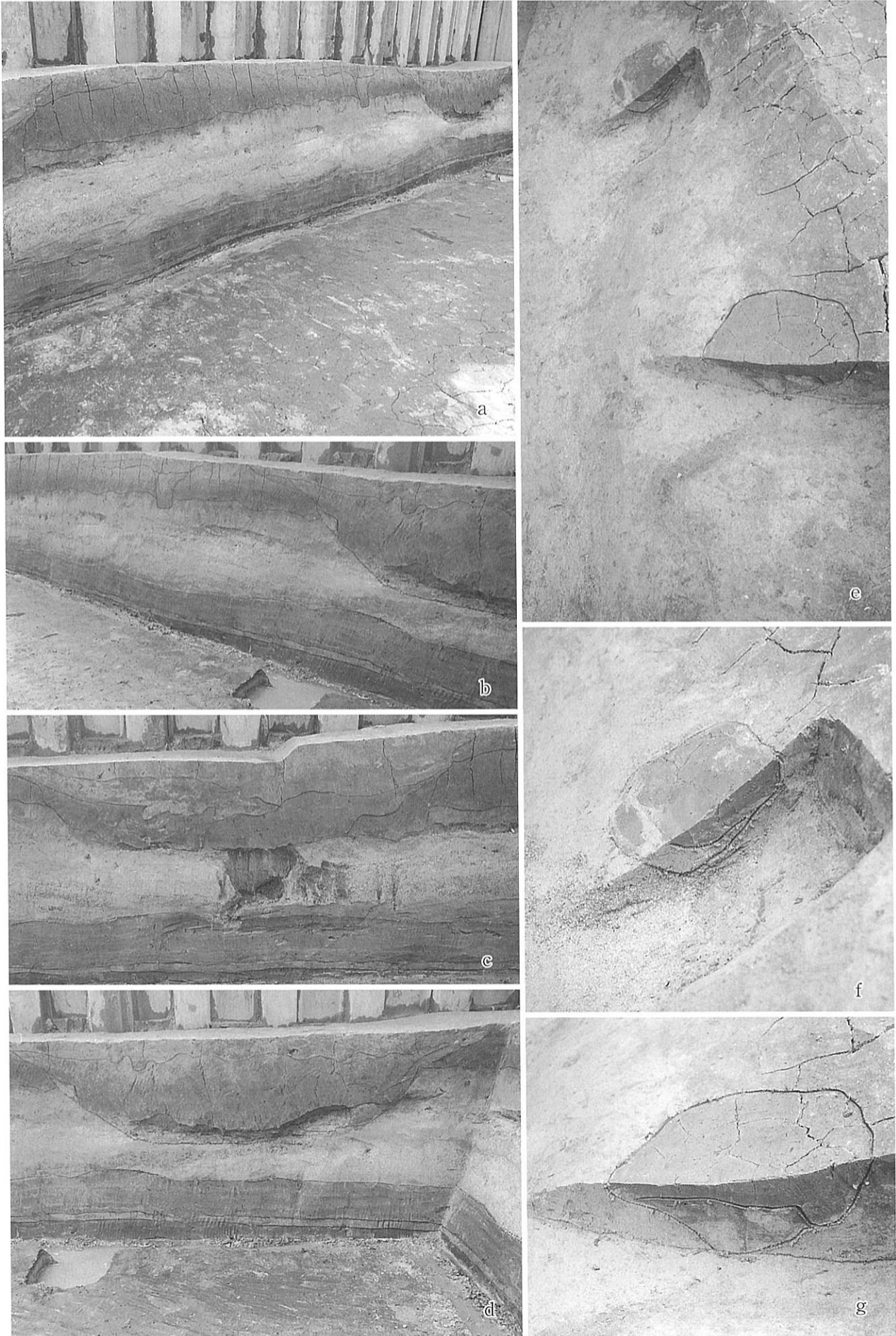




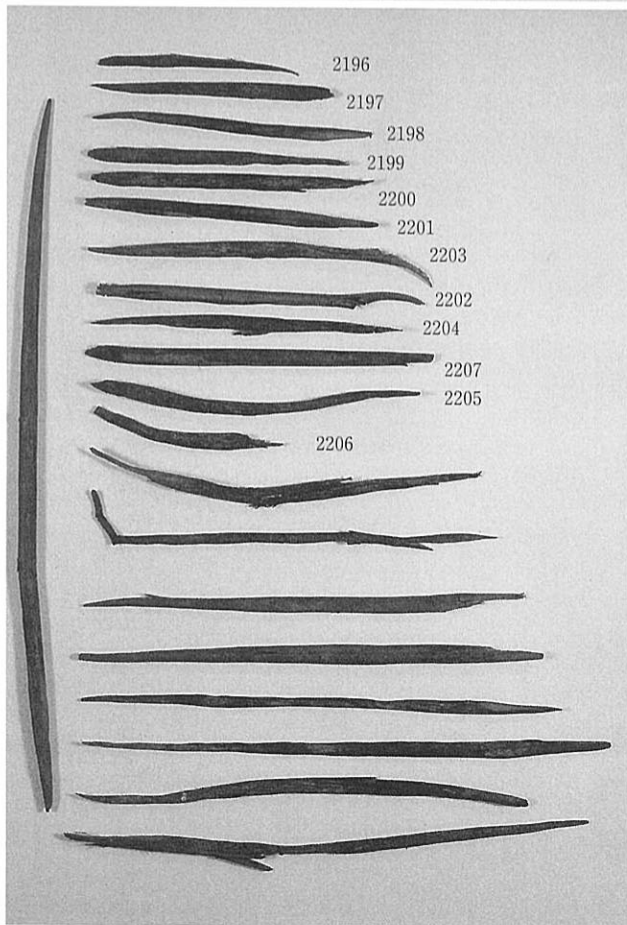
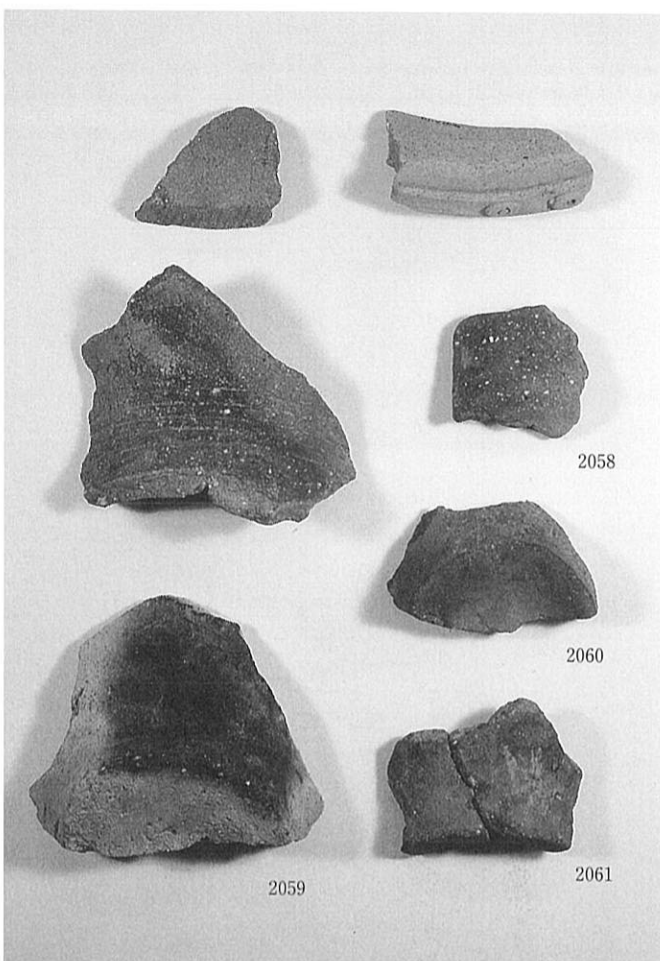
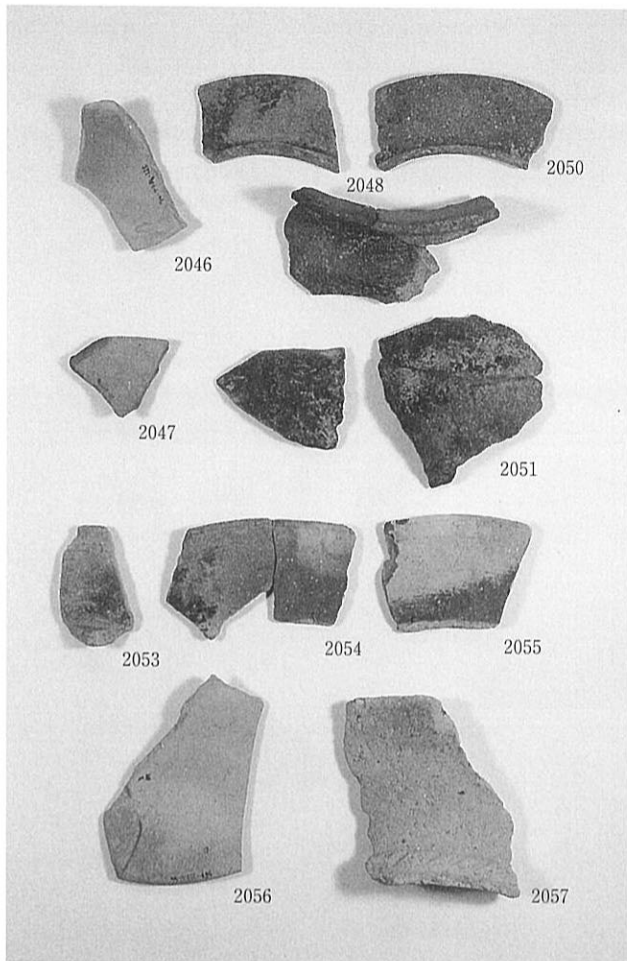
2 B区全景(北から) a. 第1遺構面 (12c~13c) b. 第2遺構面 (6c後) c. 同上細部 d. 第3遺構面 (5c後) e. 第4遺構面 (4c) f. 第5遺構面 (弥生前~中期)



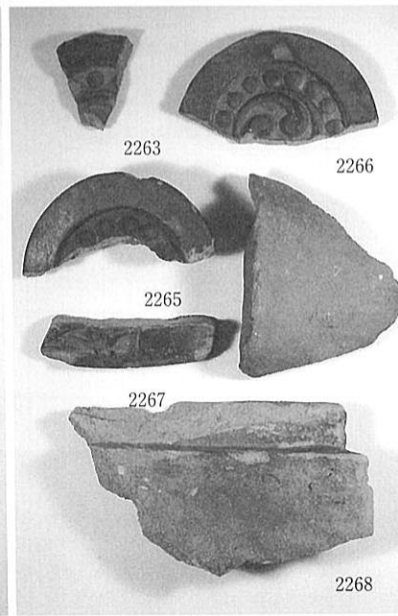
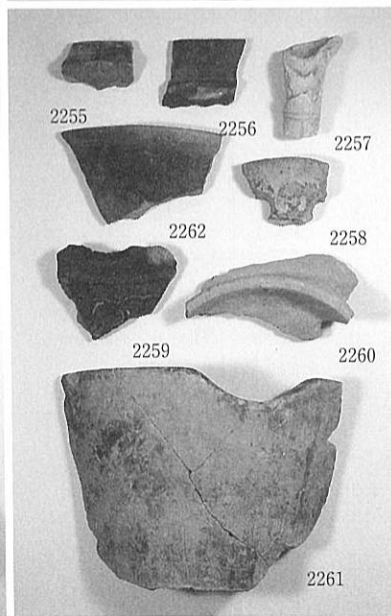
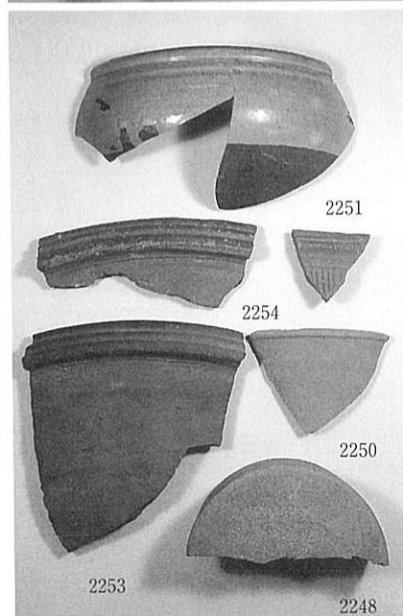
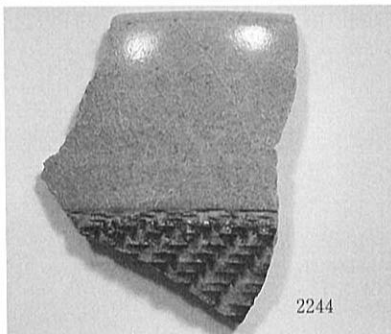
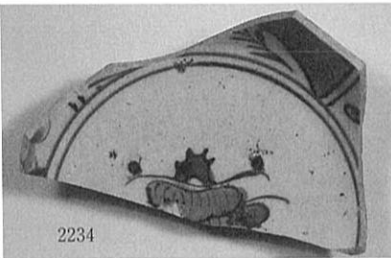
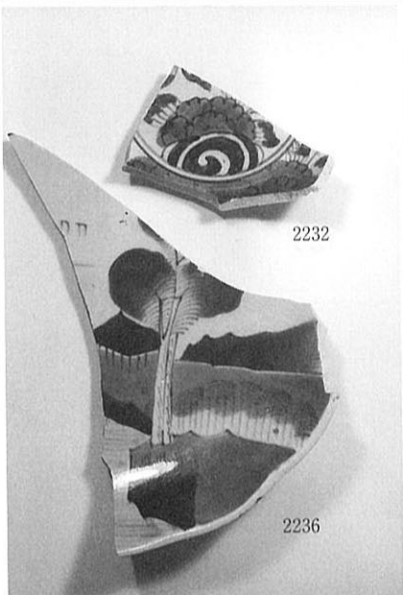
2B区全景(北から) a.第6遺構面(弥生前期) b.第7遺構面(縄文晩期) 2A区第5遺構面細部 c.大溝5-4(北から) d.大溝5-2・5-3(北から) e.同上 f.大溝5-5(西から)



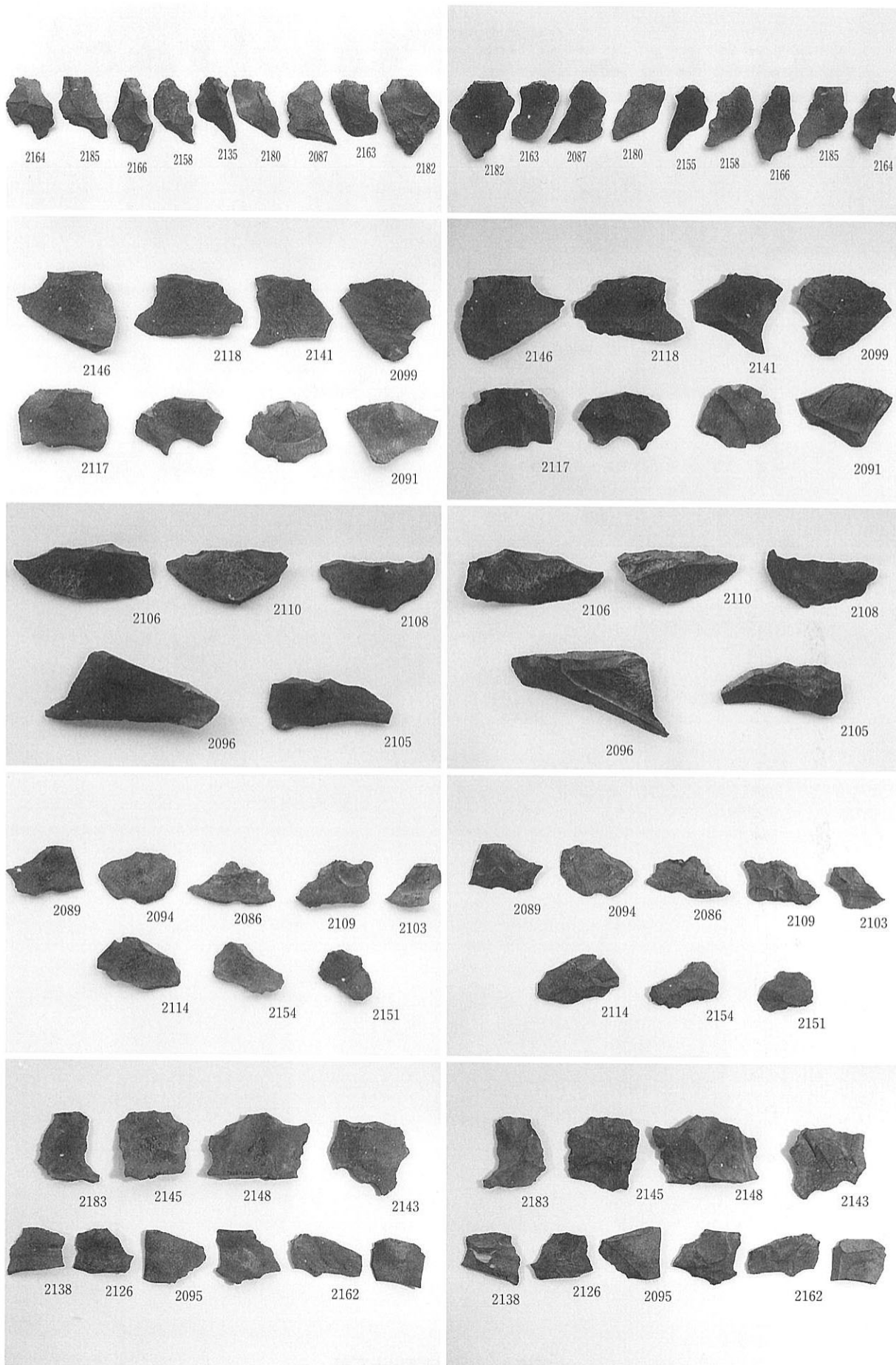
2 A区第5遺構面大溝堆積状況 (北から) a・b・d. 大溝 5-2 c. 大溝 5-4 e. 2 A区第5遺構面大溝内土坑堆積状況  
 f. 2 A区第5遺構面土坑 5-1 g. 2 A区第5遺構面土坑 5-2



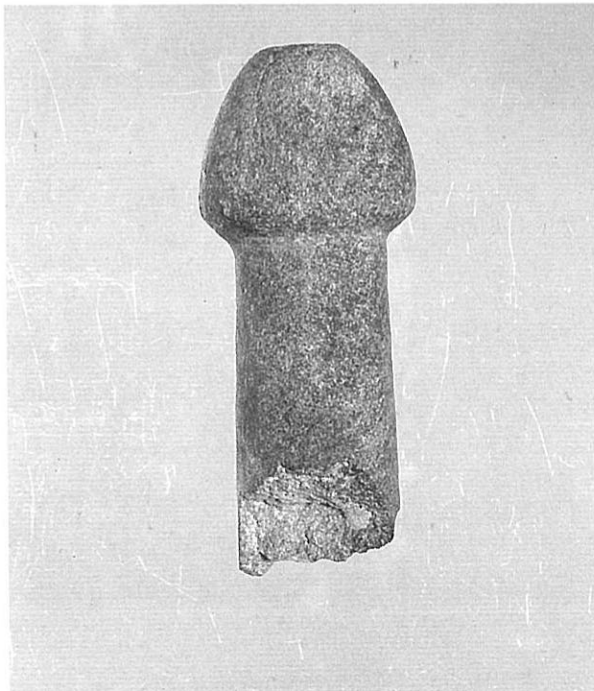
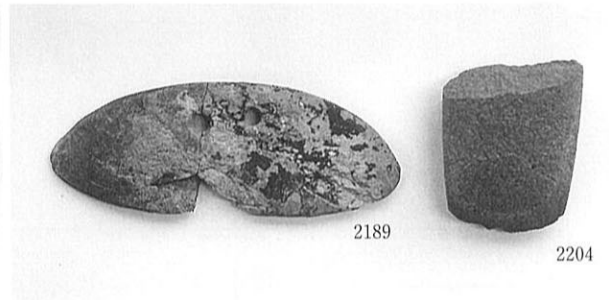
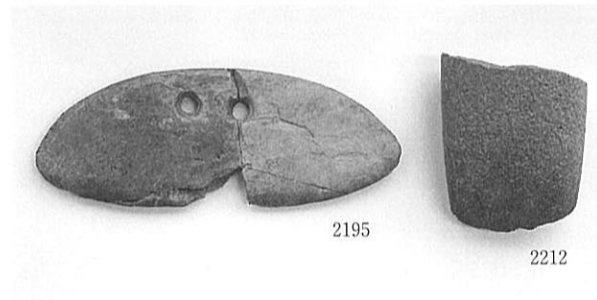
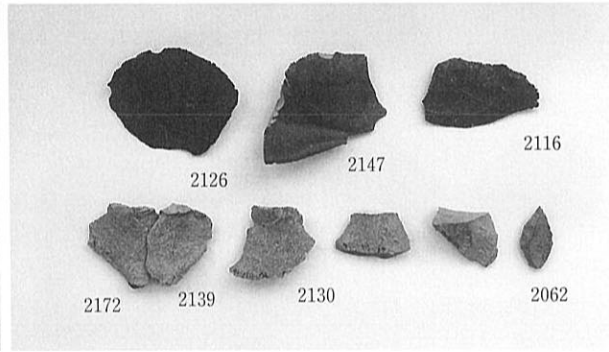
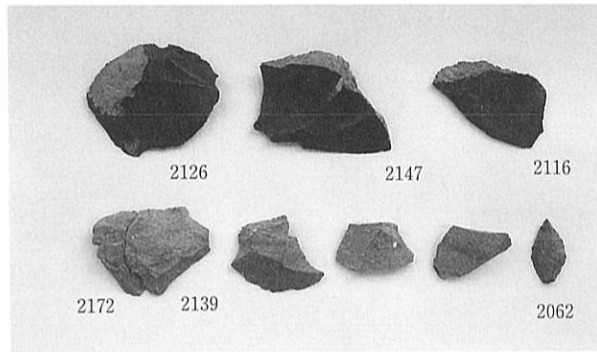
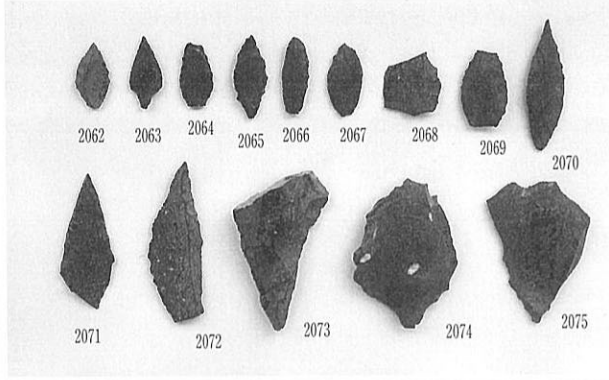
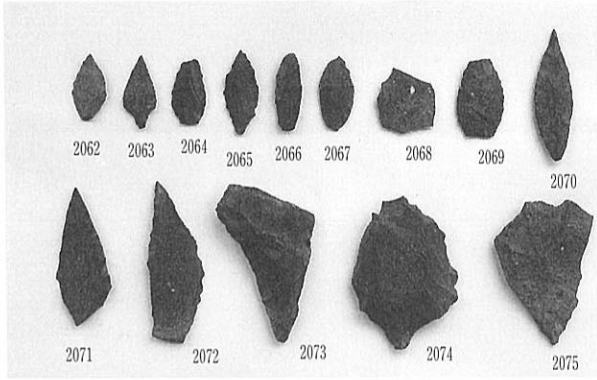
2区出土土器・木器(第3~6遺構面出土)



近世陶磁器と瓦



2区第5遺構面他出土剝片



2区第5~7遺構面出土石器

## 第3部 3A・3B区の調査成果

第1章	調査の方法	97
第2章	層序	99
第3章	遺構と遺物	103
第4章	自然科学的分析	209
第5章	小結	268
	写真図版	269





## 第3部 3A・3B区の調査

### 第1章 調査の方法

調査の方法についてはすでに第1部第3章において述べているので、ここでは3A・3B区の調査に直接関わる内容にとどめる。

#### 掘削方法

旧府営住宅建設のための盛土、および近世以降の旧耕作土・洪水層については重機による掘削を行った。機械掘削の深度はG.L.-1.7~1.8mであり、中世の洪水砂礫層上面を削り込んだところで止めている。本層より下層については、すべて人力により掘削した。

#### グリッドの設定

調査区の地区割りは、(財)大阪府埋蔵文化財協会の調査規定に基づいている(図48)。遺物の取り上げは本地区割り規定の最小単位である4mのグリッド単位で実施した(第1部第3章参照)。ただし調査を開始した直後は、この地区割り設定が間に合わず、仮の地区割りを設定した。これはA区、B区とも調査区西辺を南北軸、南辺を東西軸とし、両軸の交わる南西隅を起点とする10mグリッドである。この仮地区割りに基づいて遺物を取り上げたのは機械掘削時、および第1面検出作業の初期の段階であ

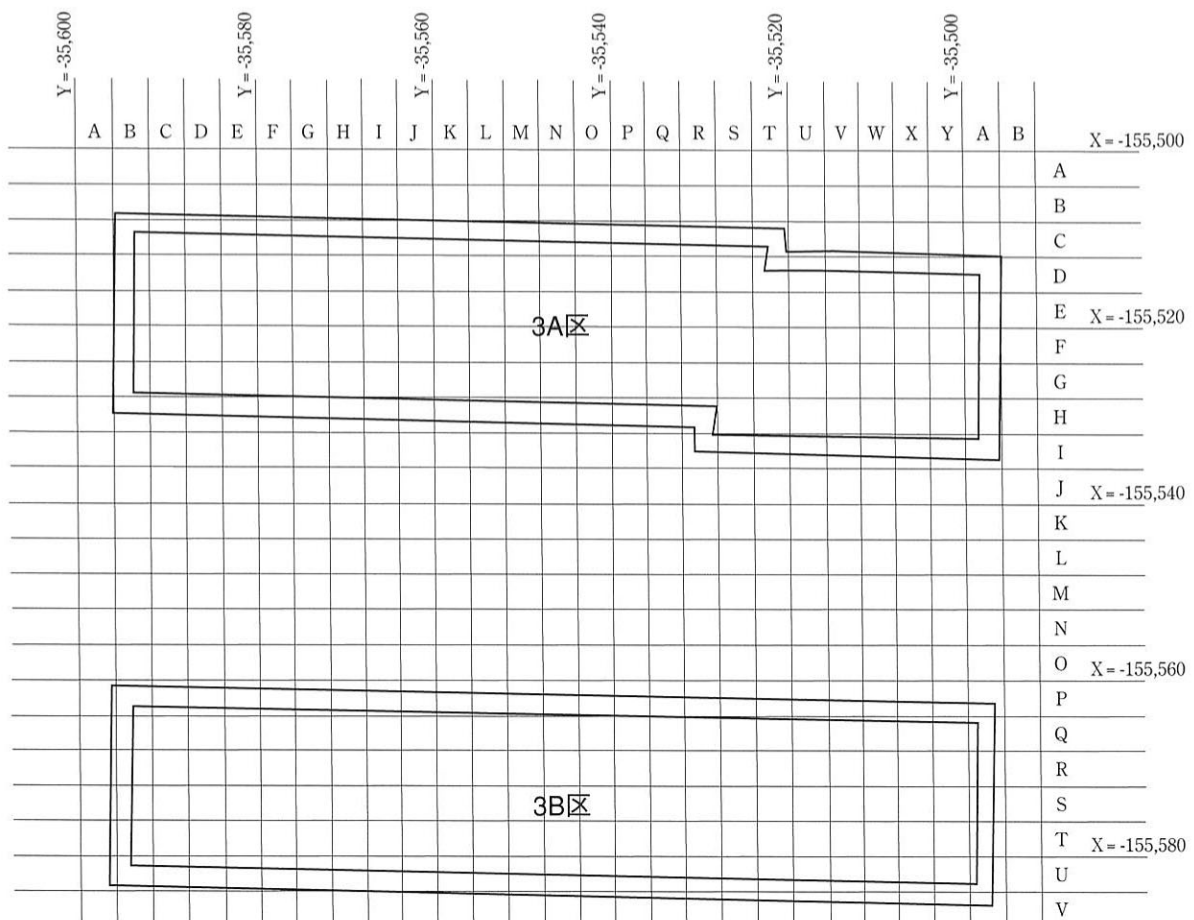


図48 3区地区割り

り、後述する「第0層出土遺物」に限られる。なお第3章の遺構・遺物の報告においては、遺構の検出位置、遺物の出土位置、下層確認トレンチの位置など必要に応じてこのグリッド名で表示する。

### 遺構名

遺構名は3A・3B区の別+遺構面(01~17)+遺構番号(001~)+(ハイフオン)+遺構の種類を表す記号、を組み合わせで表示する。番号は各遺構面においてそれぞれ、遺構の種類に関わらず3桁の通し番号で表している。遺構の種類は(財)大阪府埋蔵文化財協会の調査規定に従い付けた。主なものとしては、河川・流路OR、溝OS、土坑OO、ピットOP、田畑OZ、その他OXなどがある。

例： A11002-OR 3A区第11面で検出した遺構番号2の流路

また挿図中に遺構名を示す場合は、図が煩雑になるのを避けるため遺構名のうち下3桁の遺構番号のみで示し、遺構の種類を表す記号等は省略する場合がある。

### 測量方法

測量はヘリコプターによる航空測量を活用したが、当初予想していたよりも多くの遺構面を検出したこともあり、すべての遺構面で航空測量を実施することはできなかった。実施したのは第1~3、5、7、11~14面である。そのほかは地区杭を基準とした平板測量と細部の図化で対応した。

### 遺物の報告

遺物の実測図等の提示方法に関しては、本書の編集方針に準拠した大別層序に合わせて示した。ただ、調査地点は旧大和川の氾濫原に位置し、堆積状況は時に複雑である。編集方針に合致する大別層序を設定するために、比較的安定した堆積状況を示し、しかも3A・3B区間の対応関係が明快な地点を改めて選定した。これにより今回報告する各調査区間の対応関係が明確になった。しかしその結果、現地調査で遺物を取り上げる際に記録した層序とは厳密には対照できなくなる部分が生じてしまったことは明記しておく。ただ大別層序が各遺構面を基準にしたものであるために、それぞれの面の時期決定にあたっては具体的な問題はなかった。

なお第3部独自の提示方法として、大別層序のなかでも最下部からの出土として区別できる個体に関しては、「最下部出土遺物」として掲載している。例えば、ともに水田遺構面である「第7面」と「第8面」の間の諸層(第7面耕作土層や第8面被覆土層ほか)からの出土品は「第7層出土遺物」として報告するが、そのうち第8面直上層や第8面検出・精査時に検出した遺物については「第7層最下部出土遺物」として別に扱っている。これは「第7層出土遺物」の時期は、第7面機能時の上限および第8面機能時の下限をあわせて示し、「第7層最下部出土遺物」の時期は、第8面機能時期およびその下限をより限定的に示唆すると考えられるためである。遺物が少ないので時期決定が困難な場合が多い水田遺構の調査においては特に重要な作業と認識している。

### その他

木製品の断面図中の年輪は模式図である。

[謝辞] なお本地区の発掘調査・整理・報告書作成作業においては、朝榮卓也・池谷梓・稲岡知美・岩崎美紀子・宇川里香・岡田竜彦・折鶴剛・久保園覚・黒田香・古藤浩美・後藤理加・坂上豊・佐藤陽子・杉本友美・竹口智子・長尾恵・中嶋宏美・長友朋子・仲原知之・藤井文子・藤井宏和・藤原夏青・増井直樹・松下知代・山崎頼人・山田裕ほかの参加を得た。また、遺物撮影と写真焼き付けは当センター主査片山彰一、同調査補助員水取康一があたった。あわせて深謝申し上げたい。

## 第2章 層序 (図49・50)

**第0層** ①層は旧府営住宅建設のための盛土である。薄いところでは30cm、厚いところでは1m近く盛られていた。②層は近世から現代までの耕作土である。本層は細分が可能で、4～5層程度確認できた。断面の観察では畦畔は確認できなかったが、足跡の踏み込みの可能性のある凹凸が所々に認められた。③～⑤層は中世の洪水堆積層である。③層は3A・3B区を広く覆う洪水層である。本層は、3A区ではほぼ全面で砂礫であるのに対し、3B区ではシルトないし細砂であった。3A区ではこの砂礫層は第1面をえぐっており、激しい流れが一時的にせよあったことを示している。④層は3A区の大半および3B区において第1面を覆う層である。シルトないし粘質土である。⑤層は3A区の西端部でしか認められなかった層である。シルト～細砂と非常に粒子の細かい土層である。本層は本来調査区を広く覆っていたのではないかと考えられる。

**第1層** ⑥層は第1面水田耕作土である。砂粒を含む粘質土である。3A区では堅くしまり、粘性はそれほど高くないが、3B区では粘性が高いという違いがあった。⑦層は第2面を覆う土層である。本層は、3A区ではシルト～砂である。調査区中央および東半部において堆積しているが、西半部では堆積が認められず、⑥層が第2面を直接覆っている。一方、3B区の土質は3A区と異なり粘質土だが、砂粒を多く含んでいる。

**第2層** ⑧層は第2面水田耕作土である。3A区ではシルトであり、全体に粘性が低い。調査区の中でも西ほど粒子が粗くなり、西端部では細砂となる。3B区では粘質土だが、やはり⑦層に比して土質は粗い。⑨層は第3面を覆う土層である。3A区では土層模式図をとった地点では本層が認められなかったため図中には現れてないが、調査区東端部では堆積を確認しているため説明には加えた。3A区では砂、3B区では砂っぽい粘質土である。

**第3層** ⑩層は第3面水田耕作土である。3A・3B区とも粘土または粘質土である。ともに砂粒を多く含むが粘性は高い。

**第4層** ⑪層は第4面基盤層である。3A区ではシルト、B区では砂粒を多く含んだ粘質土である。⑫層は3B区でのみ認められた土層である。砂層だが土壌化が進んでおり、部分的に砂混じり粘質土となることもある。

**第5層** ⑬層は第5面水田耕作土である。3A・3B区とも粘土または粘質土で、粘性が高い。

**第6層** ⑭層は第6面水田耕作土である。本層は3A区では認められず、3B区でも西半部でのみ認められた。2.5GY8/1灰白色粘質土粒が混じる。⑮層は3A・3B区で土色、土質ともよく似ている。砂粒を多く含むシルトないし粘質土で、しまりはよい。植物遺体等に由来すると考えられる炭化物片を多く含んでいる。⑯層は3B区では認められず、A区でも西端部でのみ認められた。第7面の水田を覆う砂層で、細砂が主体である。

**第7層** ⑰層は第7面水田耕作土である。3A・3B区とも粘土ないし粘質土である。砂礫や植物遺体等に由来すると考えられる炭化物片は全く含まない。

**第8層** ⑱層は第8面水田耕作土である。3A・3B区とも粘土ないし粘質土である。砂粒を含むものの粘性は高い。

**第9層** ⑲層は第9面水田耕作土である。3A・3B区とも粘土ないし粘質土であるが、3A区では粘

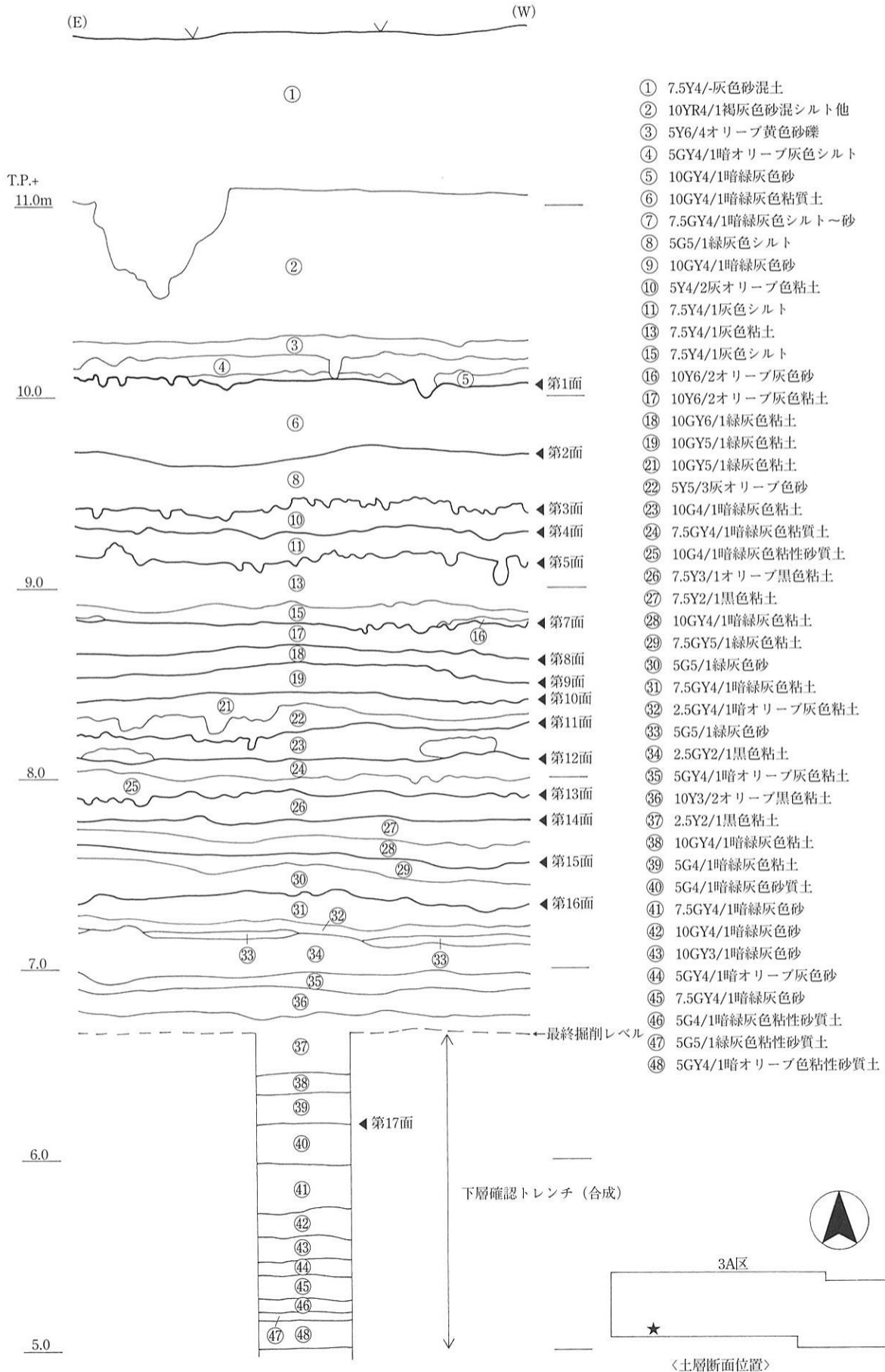


図49 3A区土層断面

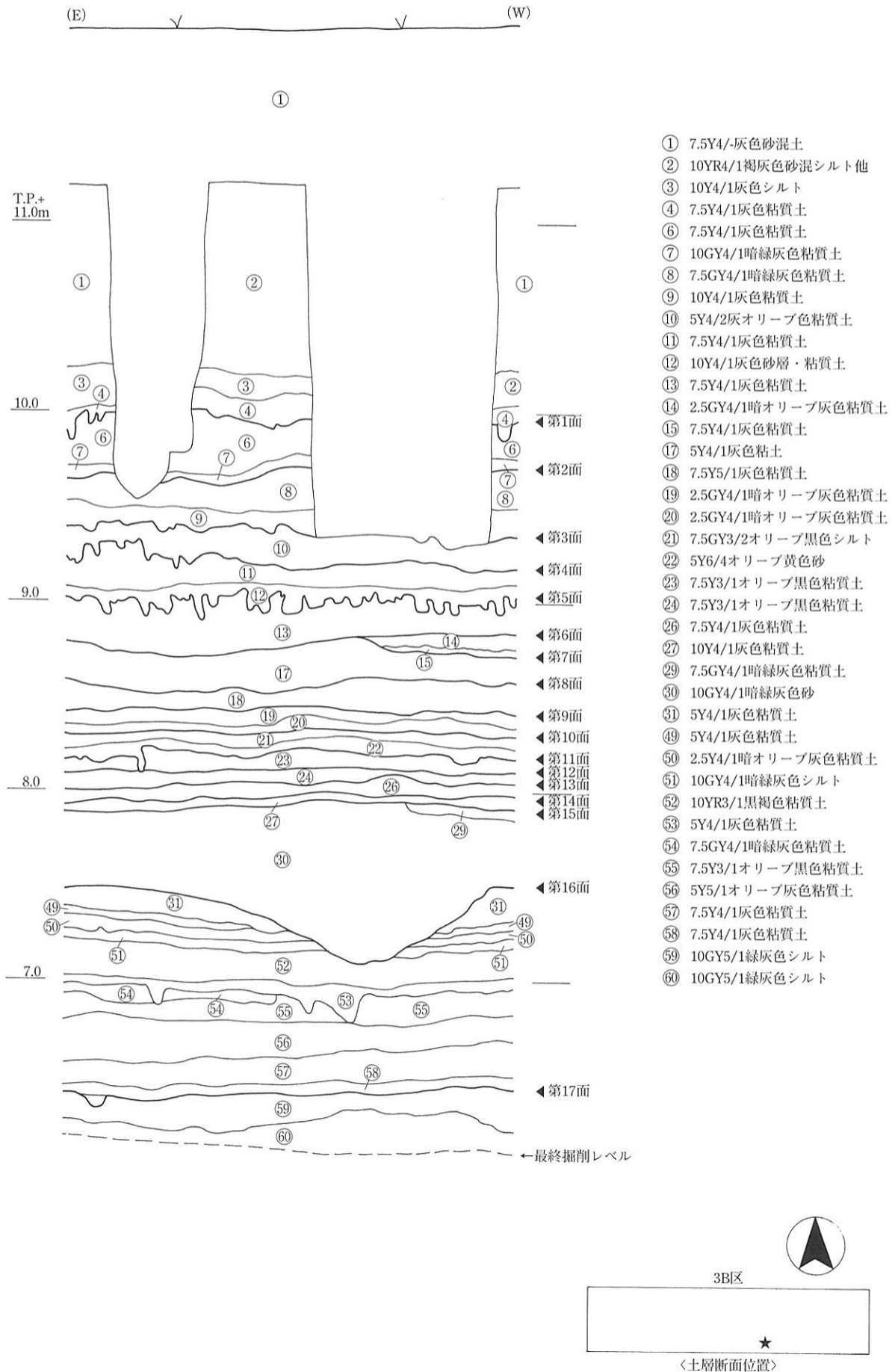


図50 3B区土層断面  
101

性が高く砂粒をほとんど含まないのに対し、3B区の土質は砂粒を含みやや粗いという違いがある。⑳層は第10面の水田を覆う土層である。本層は3A区ではまったく認められず、3B区でのみ確認した。砂粒を含んだ粘質土である。

第10層 ㉑層は第10面水田耕作土である。3A区では2mm程度の礫および砂粒を多く含む粘土である。植物遺体ならびにこれ等に起因すると考えられる炭化物片も多く含んでいる。また本層は調査区内でも地点による土質の違いが顕著であって、調査区の西端部ほど精良であり、東端部ほど砂礫を多く含んでいた。3B区では礫を含んだシルトである。㉒層は3A・3B区とも5mm程度の礫を含んだ粗砂であり、第11面の水田を覆っている。

第11層 ㉓層は第11面水田耕作土である。3A・3B区とも粘土ないし粘質土である。しまりはよく、植物遺体ならびにこれ等に起因すると考えられる炭化物片を多く含む。3A区では調査区東端部において部分的に砂がラミナ状に本層に入り込んでいるのが確認された。

第12層 ㉔層は第12面水田耕作土である。3A・3B区とも粘質土であり、白～黄灰色土が斑紋のように混じるのが特徴である。また砂粒ならびに植物遺体等に起因すると考えられる炭化物片も多く含んでいる。㉕層は第13面を覆う砂質土で、砂礫を多く含む。3A区では調査区全面に堆積していたが、3B区では認められなかった。

第13層 ㉖層は第13面水田耕作土である。3A・3B区とも土色、土質は共通しているが、3A区では植物遺体ならびにこれらに起因すると考えられる炭化物片を多く含む。3B区では白色土粒が斑紋のように混じっている。

第14層 ㉗層は第14面水田耕作土である。3A・3B区とも粘土ないし粘質土だが、3A区では植物遺体を多く含む上、調査区東半部では砂礫も多く含み、全体に堅くしめるのに対し、3B区では礫を多く含むものの粘性が強く、しまりはやや悪かった。㉘層は第15面を覆う粘土層である。3A区でのみ堆積が認められた。本層は厚さ10～15cm程度あり、しっかりとした粘土層であったため上面を精査したが遺構はまったく認められなかった。

第15層 ㉙層は第15面基盤層である。3A・3B区とも土色、土質は共通している。粘性が高く、植物遺体はほとんど層中に認められなかった。㉚層より下層は調査区全体が自然河川の流路にあたっている。㉛層は第16面で検出した大規模な自然河川の流路を埋める洪水砂礫層である。地点により粒径は異なるが、全体的には礫および粗砂が主体である。

第16層 ㉜層は第16面基盤層である。砂粒を多く含んだ粘土または粘質土である。これより下層は堆積が複雑である上、3A区では㉝層から下層はトレンチによる断面観察を実施したにとどまるため、3A・3B区間での土層の対応関係はほとんど不明である。ただ3A区では㉞～㉟層、3B区では㊱～㊲層が粘土、粘質土の複雑な堆積を示している。そして3A区では㊳層、3B区では㊴層を境にして、下層は砂ないしシルトに変わっている。3B区ではこの㊴層上面で遺構を検出した(第17面)。したがって、ここで層を大別するのが妥当であると考えている。なお第16層では、いずれの層からも植物遺体やこれに起因すると考えられる炭化物片を多く含んでいる。

第17層 B区㊵層は第17面基盤層である。精良なシルトである。3A区では平面的に調査していないが、先述の通り3A区と3B区では土層の大きな変化は対応していることから、粘土層から砂層に代わる㊶層が3B区の第17面基盤層である㊵層に対応すると考えられる。3A区㊷～㊸層ならびにB区㊹層はすべて細砂、砂質土、シルトである。

## 第3章 遺構と遺物

### 第0層出土遺物

第1面の上層を一括して第0層とする。前章で述べたとおり、第0層は①～⑤層からなるが、中世の洪水堆積層と考えられる③～⑤層出土遺物のみを取り上げる。本層からの検出遺物では、図51～55の個体を図化できた。

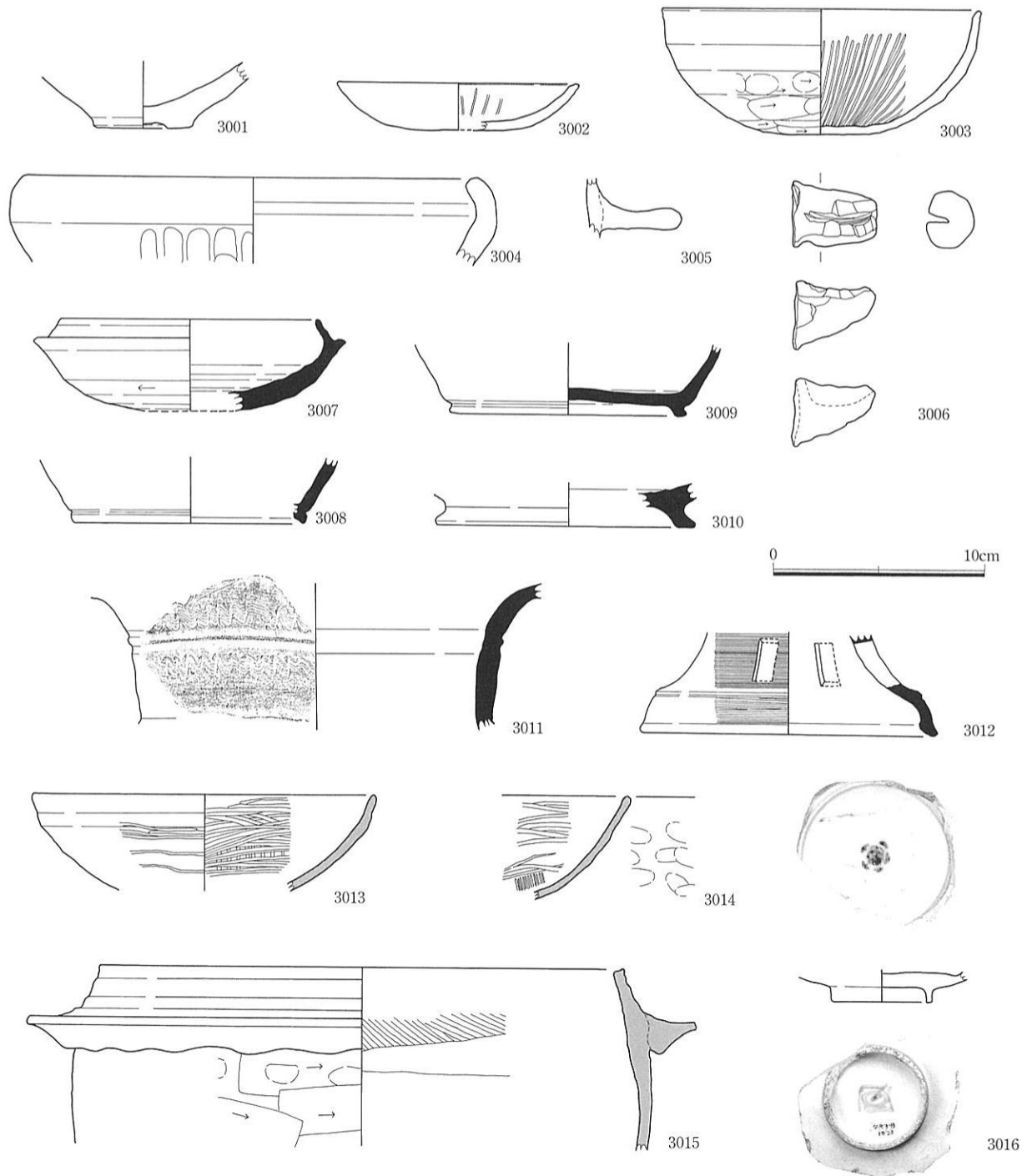


図51 3B区第0層出土遺物(1)



**B区第0層出土遺物** 弥生土器 (3001)、土師器 (3002~3006)、須恵器 (3007~3012)、瓦器・瓦質土器 (3013~3015)、磁器 (3016)、瓦 (3017~3019) がある。3001は壺の底部で、生駒山西麓産胎土である。弥生時代後期に属する。3002は皿Aで、内面に放射状暗文がみられる。奈良時代中葉 (平城宮III) に属する。3003は杯Cで、内面に放射状暗文がみられる。飛鳥時代 (飛鳥I~II) に属する。3004は鉢の口縁部で、器壁が厚く大形品である。平安時代に属するかと思われるがはっきりしない。3005は羽釜の鍔部で、生駒山西麓産胎土である。奈良時代後葉~平安時代初頭 (平城宮IV~平安京I中前後) に属する。3006は甗などの把手部で、上面に切り込みがみられる。古墳時代中期に属する。3007は杯Hである。古墳時代後期に属する。3008・3009は杯Bの底体部で、高台は底端部付近に取り付く。奈良時代末~平安時代初頭 (平安京I中前後) に属する。3010は壺の底部で、高台はやや長く外方に広がる。奈良時代~平安時代初頭に属する。3011は壺の頸部で、外面は櫛描き波状文で装飾される。古墳時代後期に属する。3012は壺の脚台部で、脚端付近の屈曲が大きくはない段階のものである。古墳時代後期に属する。3013・3014は椀の口縁部で、外面には、3013では部分的にヘラミガキがあるが、3014は遺存部では確認できない。平安時代末~鎌倉時代初頭 (和泉型III-2~III-3) に属する。3015は羽釜の口縁部付近で、体部はやや内湾しながら口縁端部にいたる。室町時代前半期に属する。3016は椀の底体部で、底部内外面に染め付け文様がみられる。江戸時代後期以降に属するが、これは混入であろう。3017は平瓦で、凸面に縄目タタキ、凹面に布目痕が残る。3018は平瓦、3019は丸瓦で、両者とも凹面に布目痕が残る。3017~3019はいずれも平安時代後半~鎌倉時代に属する。

**A区第0層最下部出土遺物** 土師器 (3020~3024)、製塩土器 (3025・3026)、須恵器 (3027~3030)、瓦器 (3031~3033)、陶磁器 (3034)、埴輪 (3035・3036)、石製品 (3037~3041) がある。3020は小皿で、鎌倉時代後半に属する。3021は甕の口縁部付近で、口縁端部は内面に肥厚される。古墳時代前期

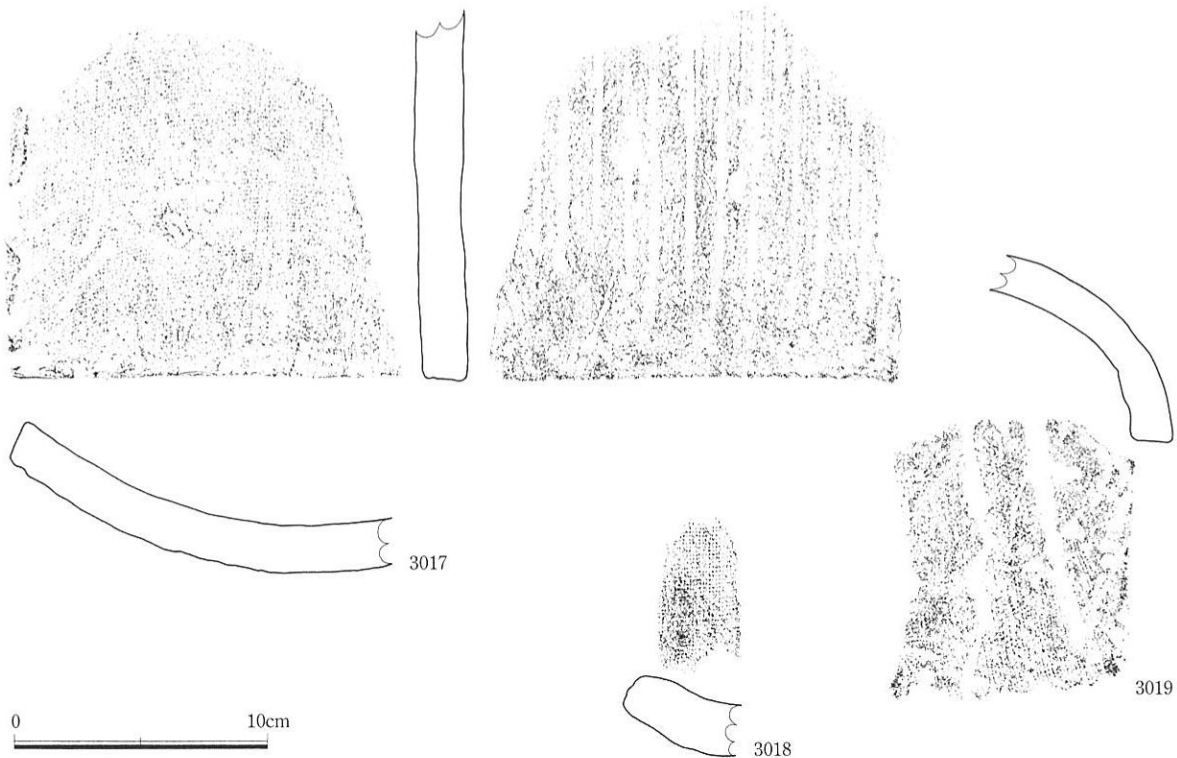


図52 3B区第0層出土遺物 (2)

(布留式前半)に属する。3022は甕の口縁部付近で、口縁端部は外面にややつまみ出される。平安時代後期に属する。3023は壺などの体部片で、外面はヘラ描きの鋸歯文様で装飾される。古墳時代初頭前後に属する。3024は甗などの把手部で、下面には複数の切り込みがある。古墳時代中期に属する。3025・3026は小形で長胴の椀形器形の体部片で、3026の外面にはタタキ痕がのこる。3025は古墳時代中期～後期、3026は古墳時代中期に属する。3027は杯H蓋で、天井部と口縁部の境の外面には稜をもつ。古墳時代後期に属する。3028は壺Lである。奈良時代後半～末に属する。3029は甕の口頸部で、口縁端部は上外方につまみ出される。古墳時代後期に属する。3030は筒形器台の筒部で、外面は櫛描き波状文で装飾され、長方形スカシ孔が2段分遺存する。古墳時代後期に属する。3031は椀の底部付近で、高台は低く見込みには斜格子暗文がある。平安時代末に属する。3032・3033は皿で、3033の内面には斜格子暗文がある。平安時代末～鎌倉時代初頭に属する。3034は青磁椀の底部である。平安時代末～鎌倉時代前半に

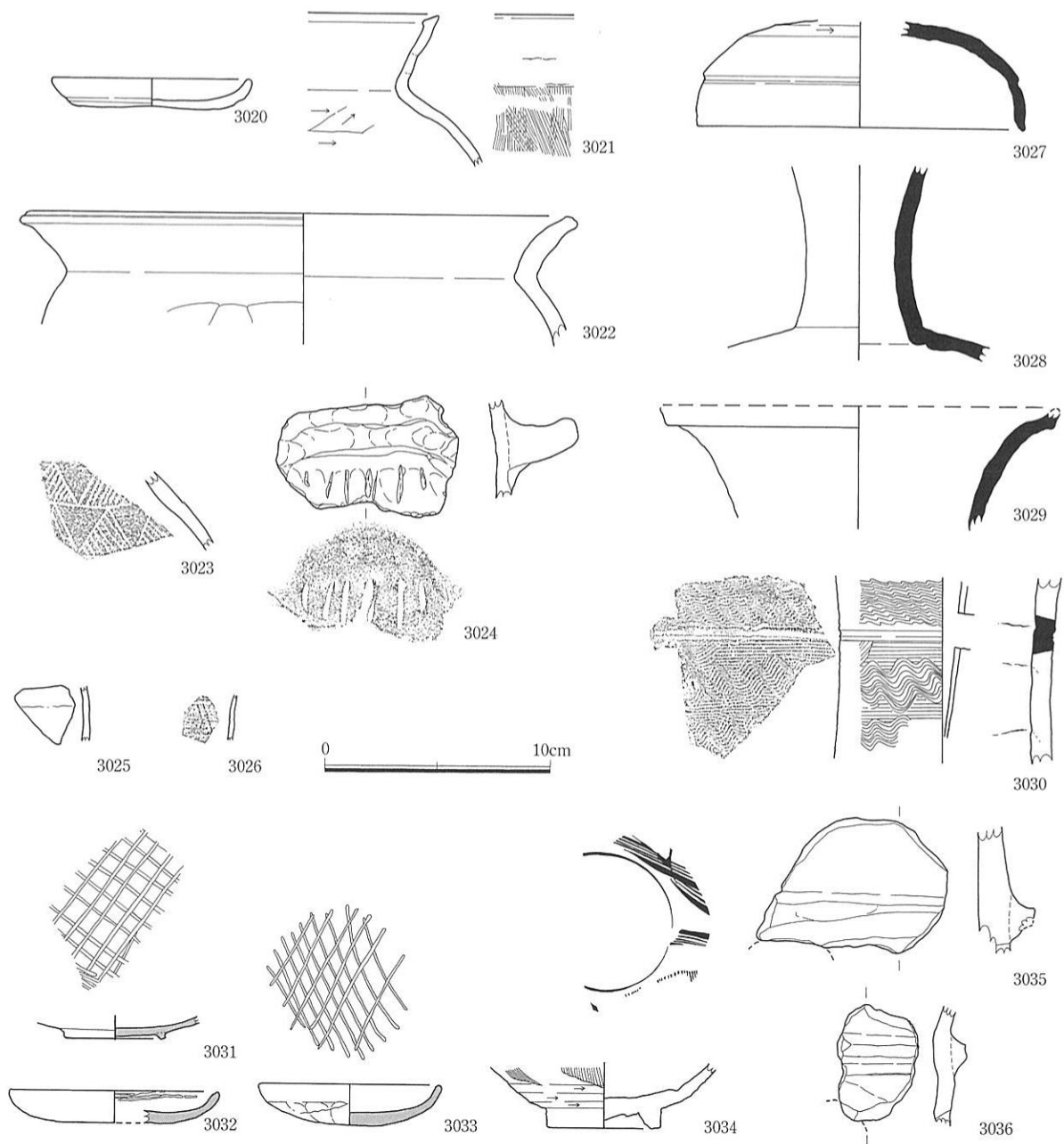


図53 3 A区第0層最下部出土遺物(1)

属する。3035・3036は円筒埴輪の突帯部付近で、突帯は、3035はやや高い形態、3036はやや低い台形状を呈する。古墳時代中期～後期前半に属する。3037～3041はサヌカイト剥片で、3038・3040・3041にはリタッチがある。3037～3039は水流によるローリングが顕著である。弥生時代前期～中期に属する。他に、動物骨を1点確認している。

**B区第0層最下部出土遺物** B区第0層最下部出土遺物とは、具体的には④層最下部から出土した遺物である。土師器(3042～3045)、須恵器(3046～3049)、瓦器・瓦質土器(3050～3054)、瓦(3055・3056)がある。3042は皿Aで、奈良時代後半～平安時代初頭に属する。3043は小皿で、平安時代末～鎌倉時代初頭に属する。3044は羽釜の口縁部から鏝部付近で、鏝部の長さによって口縁部の立ち上がりが高い。生駒山西麓産胎土である。奈良時代中葉(平城宮III)前後に属する。3045は甑の底部で、遺存部において、鋭利な工具による穿孔が3カ所確認できる。古墳時代中期に属する。3046は杯H蓋の口縁部付近で、口縁端部には面を持つ。古墳時代後期(MT15)に属する。3047は杯Hで、底体部は低い。古墳時代後期(TK209)に属する。3048は杯Bの底部付近で、高台は底端部より内側に寄った位置に取り付けられる。奈良時代前半(平城宮II・III前後)に属する。3050・3051は椀の口縁部付近で、外面のヘラミガキは、3050には若干あるが、3051にはない。平安時代末～鎌倉時代初頭(III-2前後)に属する。3052・3053は椀の底部付近で、見込みには斜格子暗文がみられる。平安時代末～鎌倉時代初頭(III-2前後か)に属する。3054は羽釜の口縁部付近で、口縁部は内傾する。室町時代前半に属する。3055は丸瓦、3056は平瓦で、ともに凹面に布目圧痕をとどめる。平安時代後半～鎌倉時代に属する。

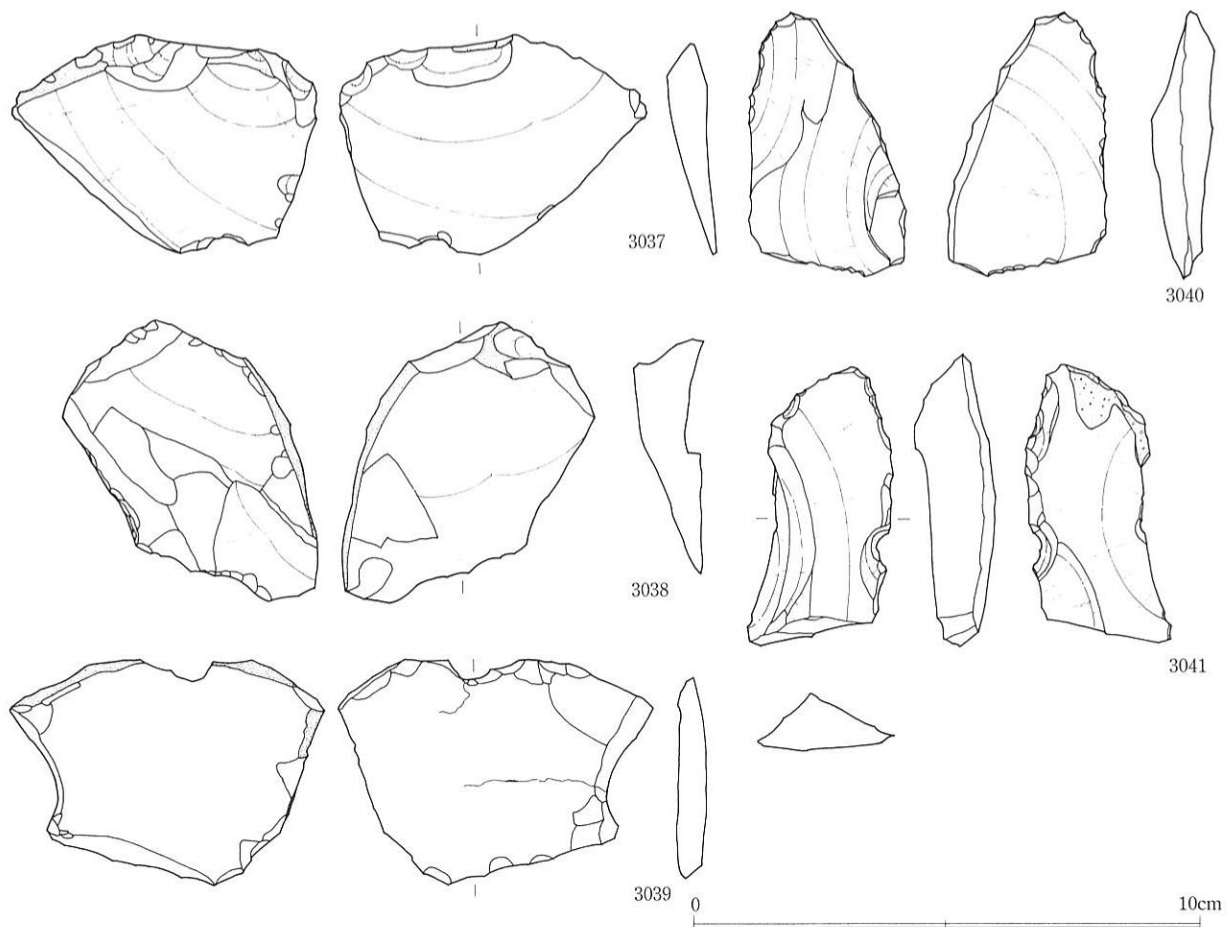


図54 3A区第0層最下部出土遺物(2)

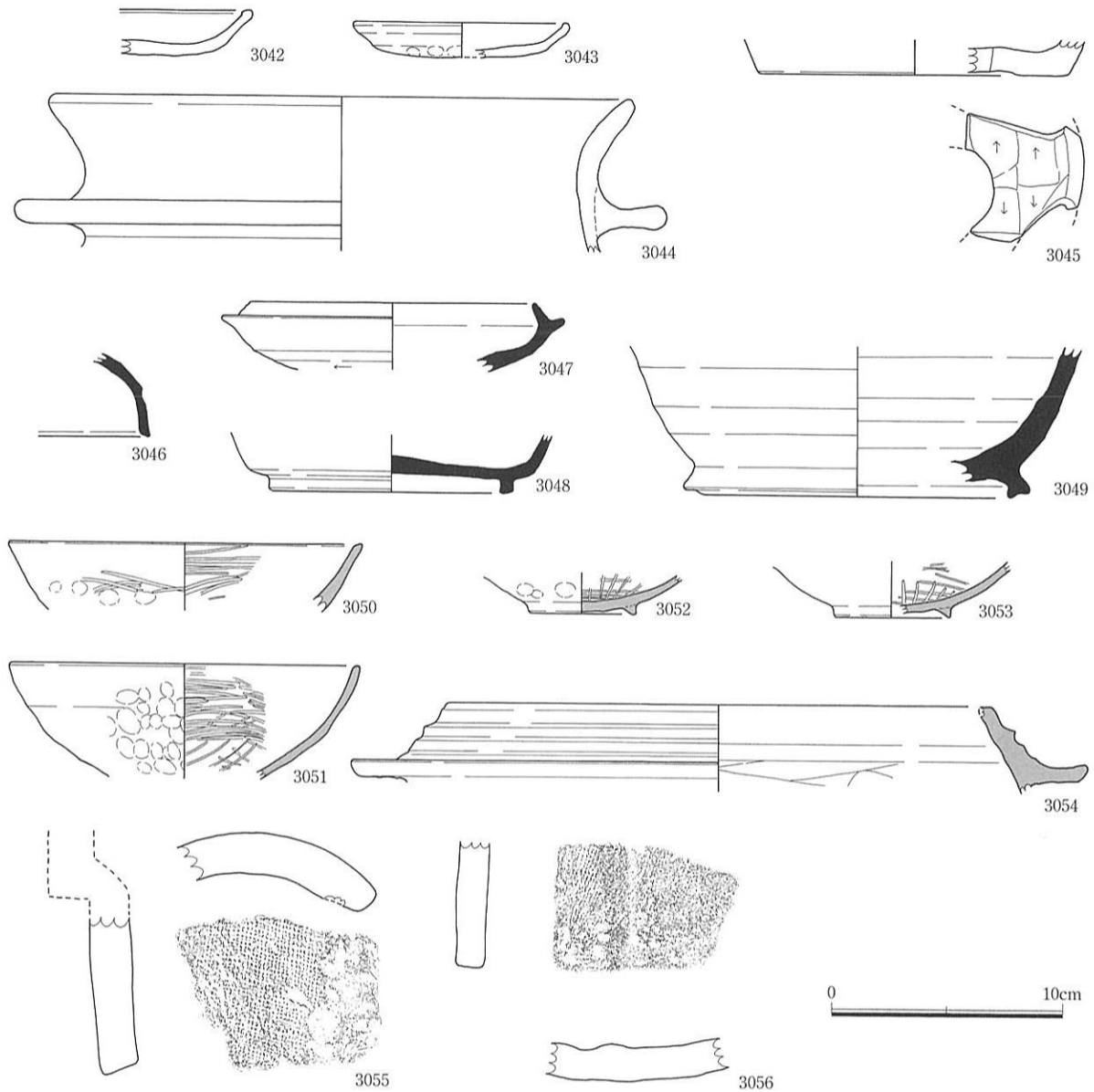


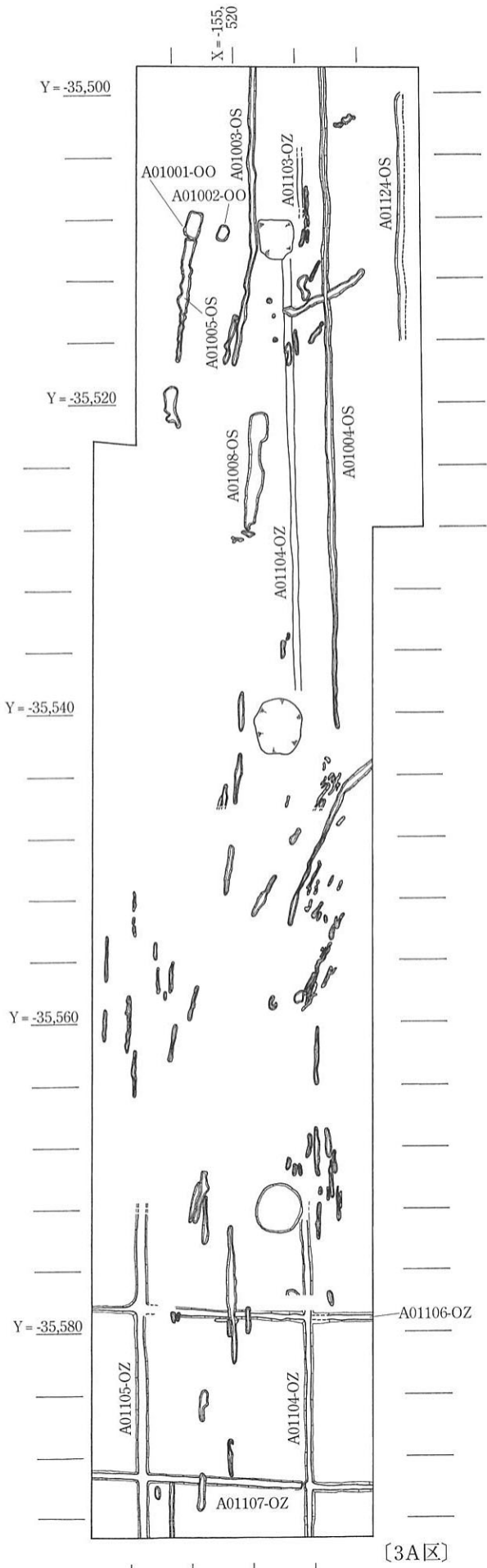
図55 3 B区第0層最下部出土遺物

第1面……………平安時代末～鎌倉時代の水田面

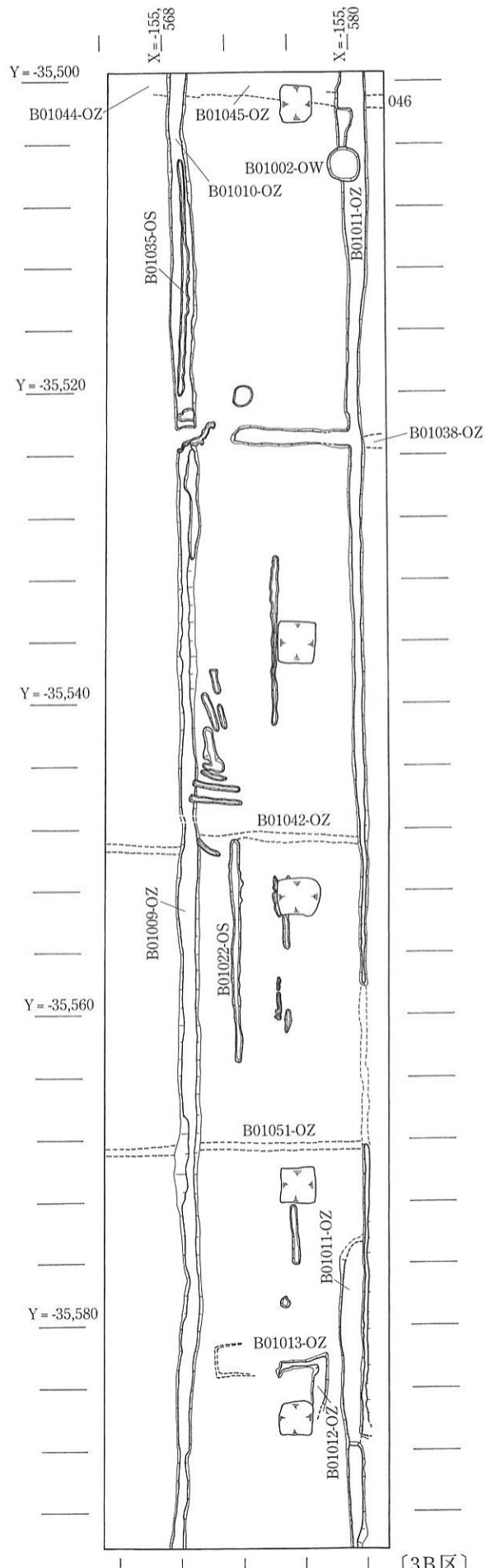
【概要】

本面では3 A・3 B区とも条里水田を確認した。畦畔や溝、鋤溝、足跡の他、土坑、自然流路などを検出している。3 A区では調査区西端部と東端部において畦畔を検出した。特に調査区西端部では水田面の直上に堆積した⑤層が残っており、これにパックされた形で水田一筆を検出した。しかし中世の洪水によって調査区中央部は幅5～15m、深さは最大15cm程度えぐられている。一方、3 B区では流路がそれたため、畦畔の残りは3 A区に比べ比較的良好であった。特に東西方向の畦畔は規模が大きいこともあり、良く残っている。南北方向の畦畔はほとんどが削平されていたが、痕跡や足跡の粗密から畦畔の位置を復元できたため、水田の状況をほぼ全面的に復元することができた。

本面のレベルは3 A区がT.P.+10.1～10.2m、3 B区がT.P.+9.8～9.9mである。



[3A区]



[3B区]

图56 3A·3B区第1面  
108

## 【遺構と遺物】

## 畦畔

畦畔は3A区で4条、3B区で6条検出した(表5)。

A01103-OZ 東西方向の畦畔である。調査区東端部で検出した。完全に削平されており、痕跡を確認したにすぎない。

A01104-OZ 東西方向の畦畔である。⑤層に覆われた調査区西端部ではよく高まりが残っていたが、調査区中央部以東は洪水により削平され、わずかに痕跡を確認したにすぎない。

A01105-OZ 東西方向の畦畔である。⑤層に覆われ、遺存状況は良好であった。

A01106-OZ 南北方向の畦畔である。⑤層に覆われ、遺存状況は良好であった。

A01107-OZ 南北方向の畦畔である。⑤層に覆われ、遺存状況は良好であった。東西方向の畦畔A01104-OZと交差する部分に水口が設けられている。

B01009・01010-OZ 東西方向の畦畔である。遺存状況は良好である。南北方向の畦畔B01017-OZと交差する部分に水口が設けられている。

B01011-OZ 東西方向の畦畔である。一部が側溝にかかっているため正確な規模は不明であるが、他に比べて大きいとみられる。特に西端部においては幅2mと非常に規模が大きい。

B01044・01045・01046-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されているが、痕跡および足跡の粗密から復元した。調査区東端の側溝にかかっているため、正確な規模は不明だが、他の南北方向の畦畔より大きいとみられ、坪境の可能性が考えられる。

B01017・01038-OZ 南北方向の畦畔である。遺存状況は比較的良好である。東西方向の畦畔B01009・01010-OZに交差すると見られる地点で途切れていることから、ここが水口であった可能性がある。

B01042-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されており、足跡の粗密から復元した。

B01051-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されており、足跡の粗密から復元した。

畦畔の概要は以上だが、水田一筆を検出した3A区西端部ではほぼ正確に10.9m(6歩)に区画されていると言える。これに対し3B区では検出した畦畔で見ると、やや不揃いである。

表5 3A・3B区第1面畦畔一覧

遺構名	方向	規模 (cm)		位置 (国土座標値)	畦畔間の距離 (平均)
		幅	高		
A01105-OZ	東西	70~80	2~5	X=-155,513.0~-155,513.0	10.5~11.3m (10.9m)
A01103・104-OZ	東西	30~70	3~7	X=-155,523.7~-155,523.5	43.5~45.5m (44.5m)
B01009・010-OZ	東西	60~170	6~11	X=-155,569.0~-155,567.8	10.5~12.2m (11.35m)
B01011-OZ	東西	80~200	3~12	X=-155,580.0~-155,579.5	21.5~22.5m (22.0m)
B01044・045・046-OZ	南北	不明	0	Y=-35,501.2~-35,500.5	25.5~26.5m (26.0m)
B01017・038-OZ	南北	90~110	2~7	Y=-35,523.0~-35,522.7	19.1~20.3m (19.7m)
B01042-OZ	南北	30~60	0	Y=-35,549.2~-35,548.5	9.7~10.8m (10.25m)
B01051-OZ	南北	50~60	0	Y=-35,568.8~-35,568.3	10.3~11.6m (10.95m)
A01106-OZ	南北	60~70	6~7	Y=-35,579.1~-35,578.5	
A01107-OZ	南北	50~60	5~6	Y=-35,590.1~-35,589.4	

また3B区で検出した2条の東西方向の畦畔のうち、南側のB01011-OZは特に規模が大きい。もうひとつの東西方向の畦畔B01009・01010-OZもしっかりしたものであることから、本水田は東西方向の長地型水田ではないかと推測している。南北方向の畦畔にも規模の大きいものがある。3B区東端で復元されたB01044・01045・01046-OZである。これは里境の可能性が高い。

#### 溝

溝は鋤溝等含めると多数検出している。ここでは遺物を出土した溝のみを報告する。

A01003-OS 3A区G63-I05FU～FYで検出した東西方向の溝である。幅30～50cm、深さ6cm、埋土は5Y7/3浅黄色中砂～粗砂である。遺物は土師器の小皿(3057)が出土した。鎌倉時代前半に属する。

A01004-OS 3A区G63-I05GO～GYで検出した東西方向の溝である。幅40cm、深さ14cm、断面形は台形である。埋土は10GY4/1暗緑灰色シルトである。この溝の位置は本面の水田区画と合致しないが、第2・3面の畦畔のほぼ直上であることから、やや時期の遡る遺構である可能性が高い。遺物は、土師器の小皿(3058)と皿A(3059)が出土した。平安時代末前後に属する。

A01005-OS 3A区G63-I05EU～EWで検出した鋤溝である。幅0.1～0.7cm、深さ8cm、埋土は5Y7/3浅黄色中砂～粗砂である。遺物は、瓦器椀(3060・3061)、白磁の椀(3062)が出土した。平安時代末～鎌倉時代初頭に属する。

B01022-OS 3B区G63-I05RJ～RMで検出した溝である。幅30～90cm、深さ10～20cm、埋土は5Y5/3灰オリーブ色砂である。遺物は、土師器の小皿(3063)と杯A(3064)が出土した。ともに調整にはヘラケズリはみられず、平安時代末(平安京VI)に属する。

B01035-OS 3B区G63-I05RX～RUで検出した溝である。東西方向畦畔B01010-OZ上にある。検出長15.25m、幅18～45cm、深さ2～8cm、埋土は5Y5/3灰オリーブ色粗砂である。遺物は、土師器の小皿(3065)が出土した。平安時代末～鎌倉時代初頭に属する。

#### 井戸

B区で井戸1基を検出した。ただしこの井戸は上層から掘り込まれた近世の遺構である。

B01002-OW 3B区G63-I05TX・UXで検出した井戸である。平面形は円形、規模は直径2.05m、検出面からの深さは0.8mである。腐朽していたが曲げ物井戸枠を備えている。井戸枠中央やや北よりには、節を抜いた孟宗竹が垂直に打ち込まれていた。井戸廃棄時の息抜きの竹筒と思われるが、湧水層まで打ち込まれた取水用の竹筒であるかもしれない。遺物は、陶器の椀(3066)、備前焼か唐津焼の大甕片(3067)、肥前磁器の椀(3068・3069)、平瓦小片(3070)が出土した。いずれも18世紀代に比定される。

#### 土坑

土坑はA区で2基を検出した。

A01001-OO A区G63-I05EWで検出した土坑である。平面形は隅丸長方形、規模は長軸1.8m、短軸0.95m、深さ20cmである。埋土は7.5Y6/3オリーブ黄色シルトである。遺物は出土しなかった。

A01002-OO A区G63-I05EWで検出した土坑である。平面形は隅丸長方形、規模は長軸1.0m、短軸0.75m、深さ10cmである。埋土は7.5Y6/3オリーブ黄色シルトである。遺物は出土しなかった。

#### 足跡・鋤跡先痕

今回の調査では削平によって著しく遺構面が損なわれている場合を除いて、多数の足跡を検出した。足跡の観察はまず何の足跡であるか同定することが必要である。しかし足を踏み入れた角度や踏み込みの深さによって、観察の条件は大きく重なる。四足歩行をする動物の場合は、前足と後足が重複するもの

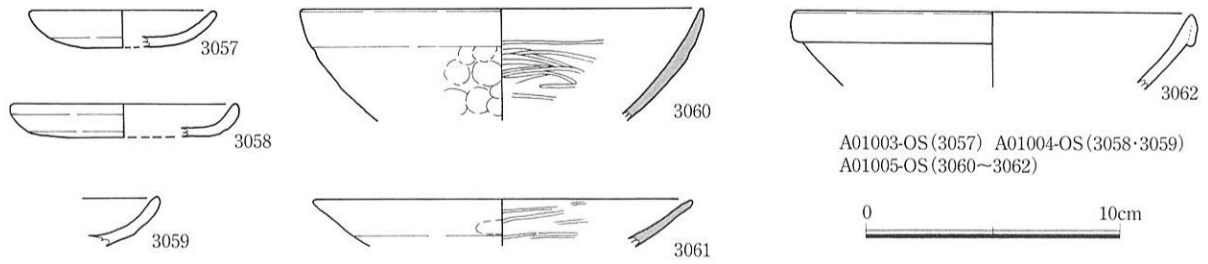


図57 3A区第1面出土遺物

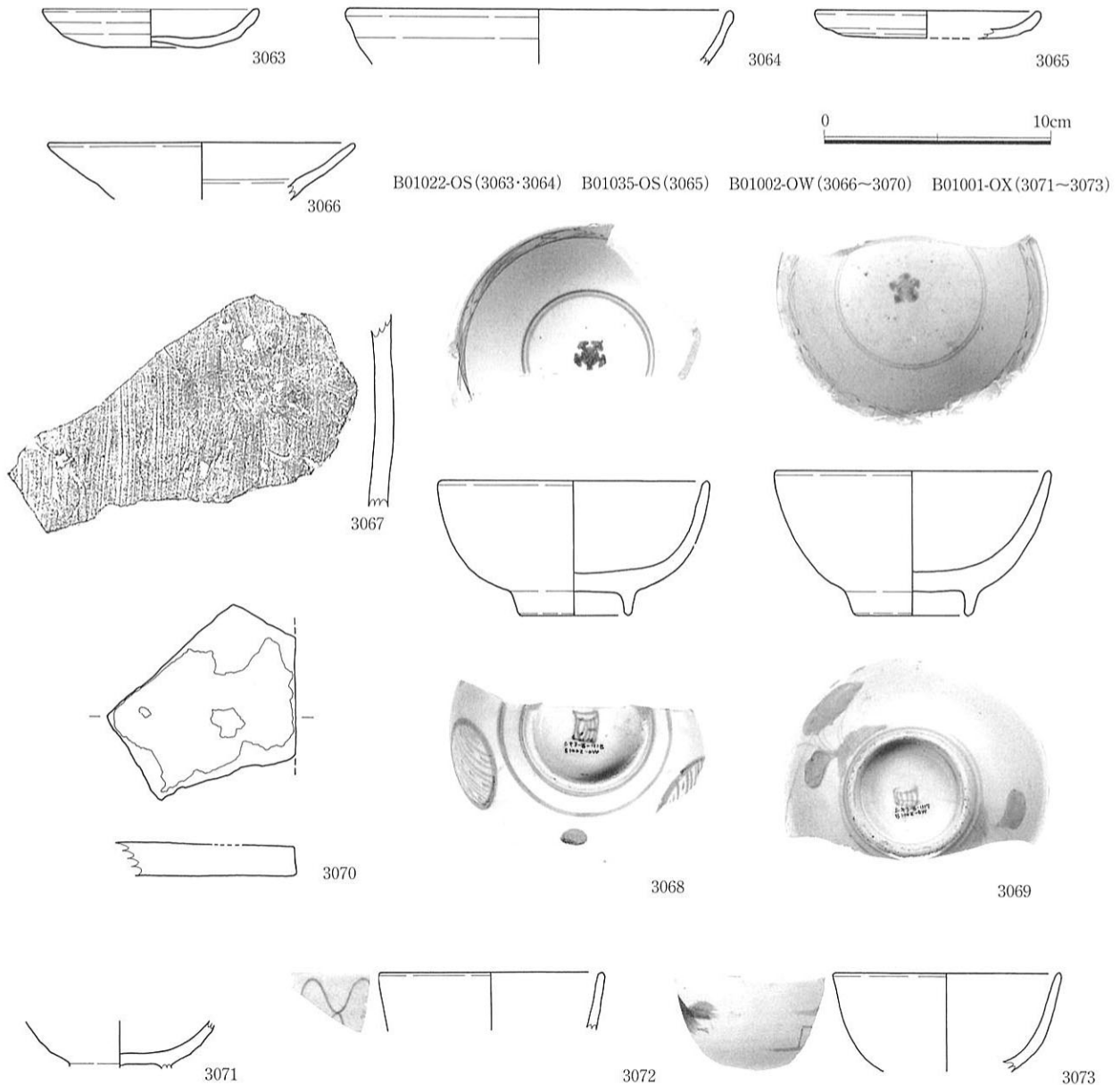


図58 3B区第1面出土遺物

もいるし、人でも多数の足跡がつくような状況では著しい重複を示すのが一般的である。単に遺構面を検出した状態では、判別に苦しむものが多数を占める。したがって、詳細な調査を行うには、足跡を埋める土を掘り出して、形状を観察する必要があると考えられる。しかし、そのためには莫大な時間と労力が必要となる。今回は調査開始時から、多数の遺構面が存在することが十分予想され、足跡の調査に



一定の制約を設けざるをえなかった。そこで足跡の同定は平面的な観察によって行うこととし、必要最小限の足跡のみ埋土を掘って調査する事にした。

本面には多数の足跡が残っていたが、平面的な観察よって判別がつく足跡は人および偶蹄目が多い。偶蹄目の足跡の大半は牛であるとみられる。また副蹄とみられる痕跡が付随する足跡もいくつか認められた。おそらくイノシシであろう。馬とみられる足跡もあるが、はっきりしたものは少ない。

また、鋤先痕も調査区の全面で検出した。平面形は方形もしくは半月形のものが多く、確認したものでは深さ5~10cm程度のもが多い。なお3B区G63-I05RE~TE・RF~TFでは鋤先痕が特に集中する一画が認められた。水田内に変則的な小区画が設けられていたようである(写真図版17-3)。

その他

上記以外に、上部からの攪乱坑B01001-OXから検出した遺物のいくつかを図示しておく。唐津焼の可能性のある椀(3071)、肥前陶磁の椀(3072・3073)があり、いずれも江戸時代に属する。

【時期】

第1面の年代は、遺構から出土した遺物、および第1面直上で検出した遺物から平安時代末~鎌倉時代初頭(12世紀後葉~13世紀前半)と考えられる。

第1層出土遺物

本層は⑥層と⑦層からなる。⑥層は第1面の水田耕作土、⑦層は第2面の水田を覆う土層である。本層からの検出遺物では、図59~62の個体を図化できた。

3A区第1層出土遺物 土師器(3074~3079)、須恵器(3080・3081)、瓦器(3082~3086)がある。3074~3077は椀ないし杯A、3078・3079は皿Aで、おおむね平安時代後半~鎌倉時代初頭に属する。3080は皿Aで、口縁端部の内面にわずかに段を備える。奈良時代後半~平安時代初頭に属する。3081は壺Mの底部である。奈良時代後半~平安時代初頭に属する。3082・3083は椀の口縁部である。平安時代末前後

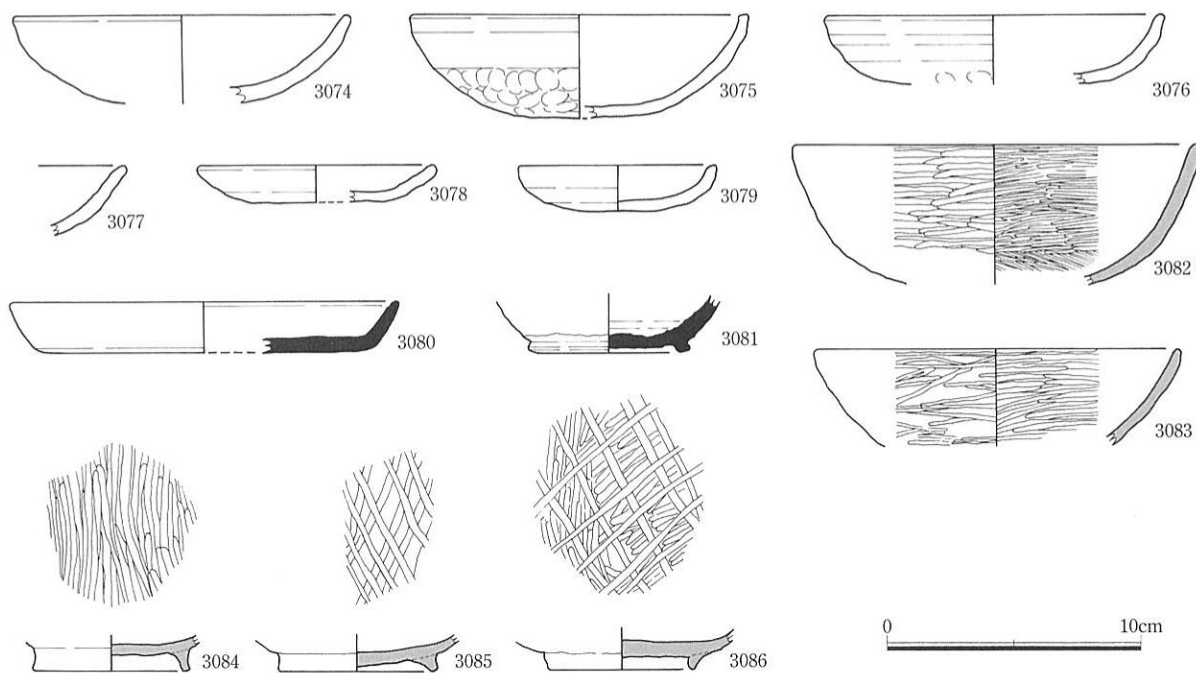


図59 3A区第1層出土遺物

に属する。3084～3086は碗の底部で、3085・3086の見込み部には斜格子文の暗文がみられる。平安時代末前後に属する。

3 B区第1層出土遺物 土師器(3087～3099)、黒色土器(3100～3103)、須恵器(3104)、瓦器(3105～3110)、木製品(3111)がある。3087～3096は杯Aないし皿類で、3087の口縁部内面には放射状2段暗文があるが、他にはヘラミガキは一切みられない。奈良時代初頭～平安時代末前後に属する。3097は

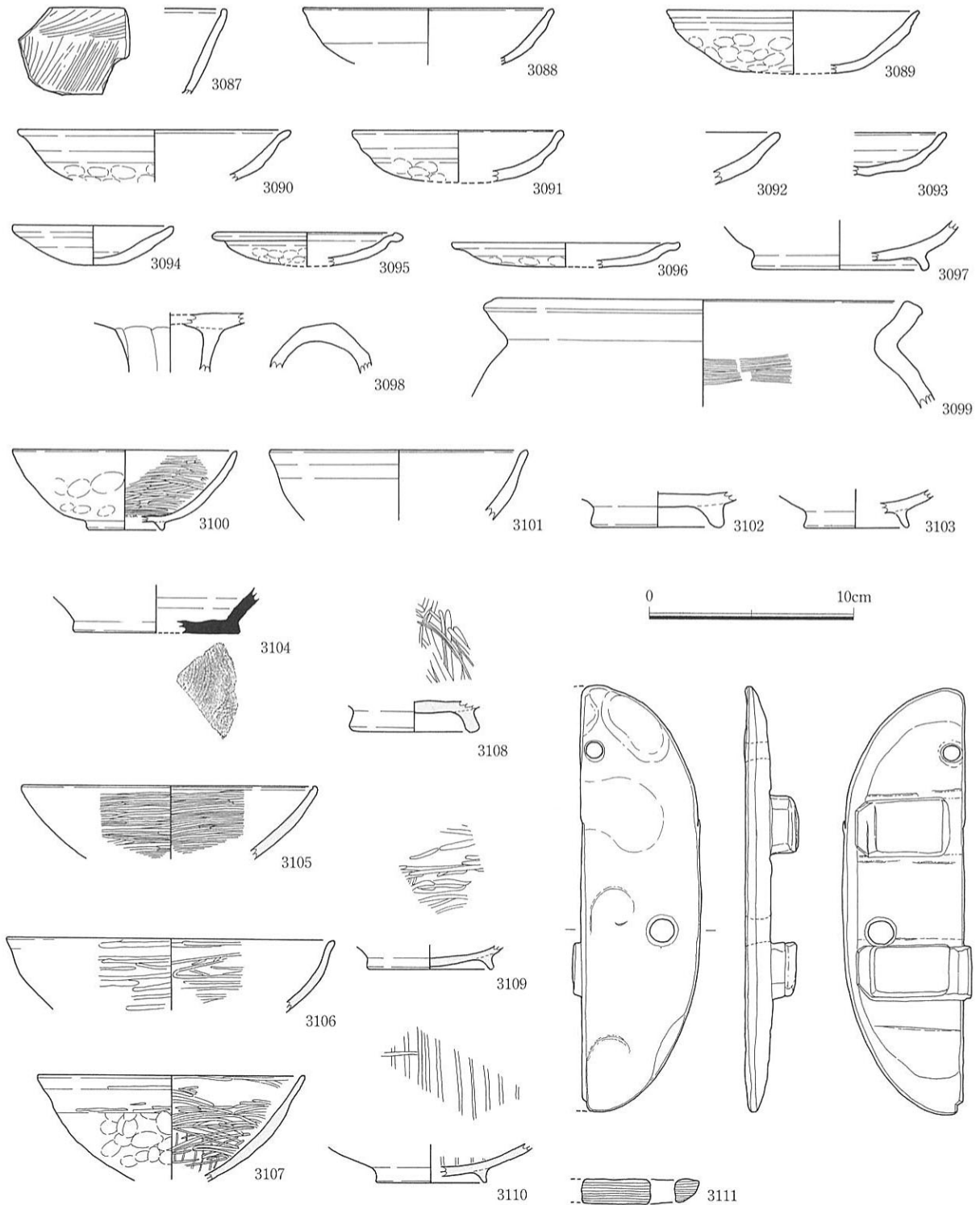


図60 3 B区第1層出土遺物

杯Bないし椀Bの底部である。平安時代末頃に属する。3098は高杯の軸部で、外面には面取りがみられる。奈良時代後半～平安時代初頭に属する。3099は甕の口縁部付近である。平安時代後半に属する。3100～3102は内面だけを黒色処理したA類、3103は内外両面を黒色処理したB類である。3100はほぼ全容が判明する椀で、生駒山西麓産胎土品の可能性がある。平安時代中葉に属する。3101は椀の口縁部で、やや厚手である。平安時代後半に属する。3102・3103は椀の高台部付近である。平安時代後半に属する。3104は壺類の底部で、底面は糸切り痕がのこる。平安時代後半に属する。3105～3107は椀の口縁部付近で、粗密の差があるがいずれも外面にヘラミガキがのこる。平安時代末～鎌倉時代初頭に属する。3108～3110は椀の底部である。3108は平安時代後葉に属する。3109・3110は見込み部に直線状のヘラミガキがあり、平安時代末～鎌倉時代初頭に属する。3111は下駄の半折品で、歯は削り出され、鼻緒孔が2孔のこる。樹種はスギである。鎌倉時代に属するとみられる。

**3A区第1層最下部出土遺物** 土師器(3112)、製塩土器(3113)、須恵器(3114)がある。3112は杯Aである。奈良時代後半(平城宮IV)に属する。3113は製塩土器の口縁部で、端部は内外面に肥厚する。奈良時代後半～平安時代初頭に属する。3114は壺Mの体部下半である。奈良時代後半に属する。

**3B区第1層最下部出土遺物** 土師器(3115～3118)、製塩土器(3119)がある。3115～3117は杯Aないし皿Aで、3117の口縁端部は肥厚される。平安時代初頭～後半に属する。3118は高杯の杯部最下から軸上端部で、杯・軸部は結合手法をとる。飛鳥時代前後に属するか。3119は体部小片で、厚手である。奈良時代後半～平安時代初頭に属する。

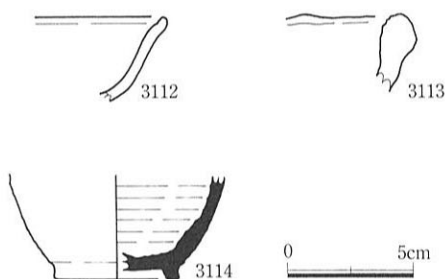


図61 3A区第1層最下部出土遺物

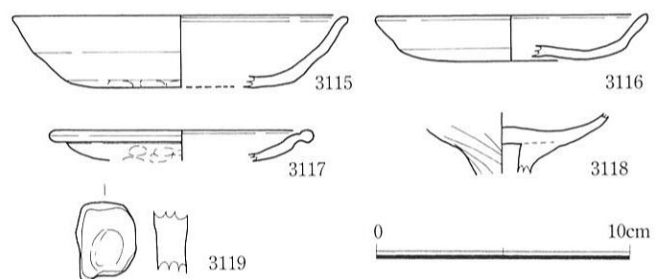


図62 3B区第1層最下部出土遺物

第2面……………平安時代後期の水田面

【概要】

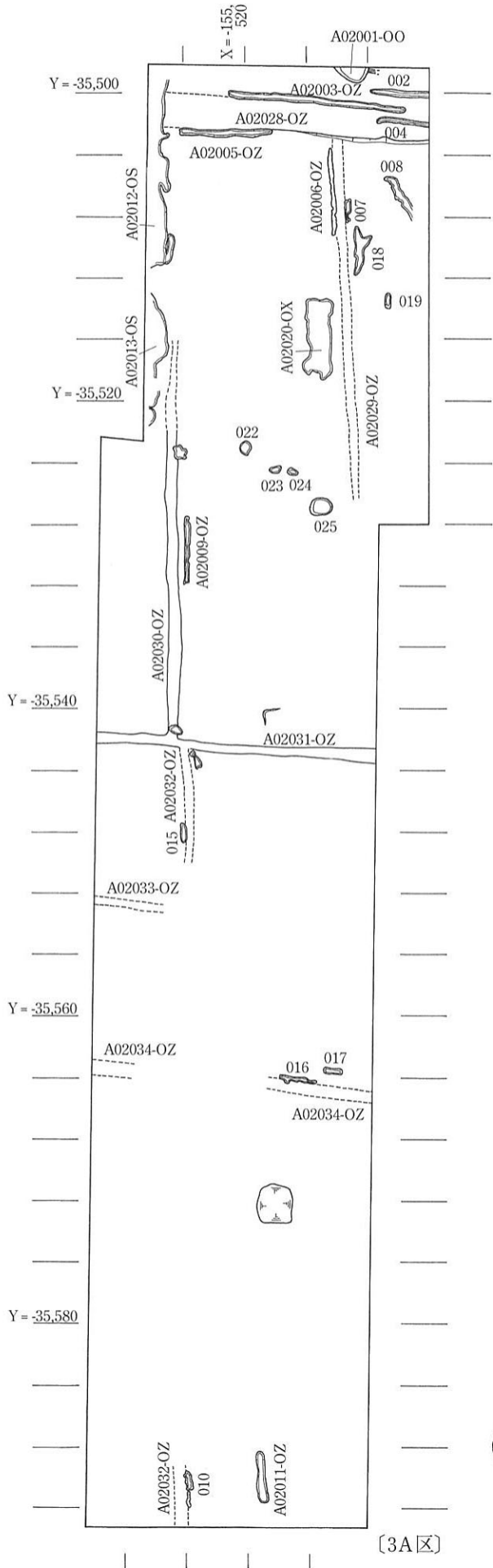
本面では第1面と同様、3A・3B区とも条里水田を確認した。畦畔、溝、土坑、鋤溝、足跡、農耕具痕等を検出している。本面の水田の遺存状況は第1面よりも悪く、畦畔の多くは削平されていた。したがってここで報告する畦畔は大半が遺構面上に残された痕跡や足跡の踏み込みの粗密から復元したものである。

本面のレベルは3A区がT.P.+9.50～9.70m、3B区がT.P.+9.35m～9.65mである。

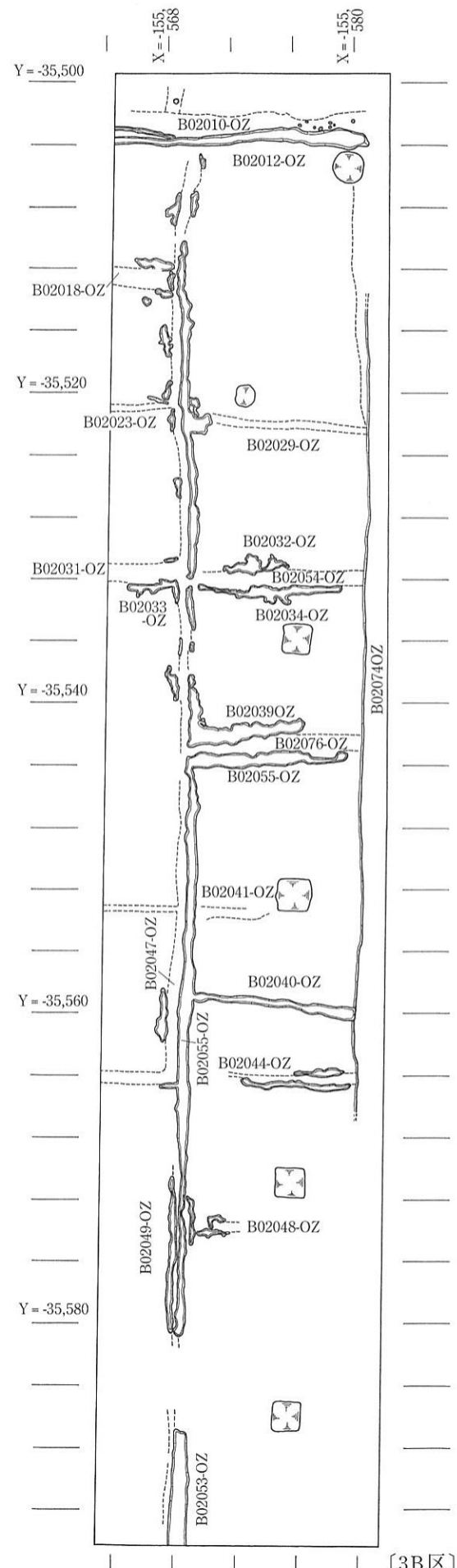
【遺構と遺物】

畦畔

畦畔は3A区で7条、3B区で12条を検出した(表6)。3A区では特に調査区西半部の遺存状態が悪い。削平を受けたため畦畔はもとより足跡や農具痕もまばらである。したがって西端部でも足跡の粗



[3A区]



[3B区]

图63 3A·3B区第2面  
115

密から畦畔の位置の復元を試みたが、一部を復元し得たにとどまり、それも確実なものとは言い難い。東半部では足跡、農具痕が全面で検出され、畦畔の痕跡も明瞭であったので、畦畔の復元は可能であった。一方3B区の畦畔もほとんどが削平されていた。しかし3B区では畦畔脇の浅い溝が残っているため、3A区にくらべて畦畔位置の復元が容易であった。

A02030-OZ 東西方向の畦畔である。完全に削平されているが、痕跡と、畦畔脇の浅い溝、足跡の粗密から復元した。推定規模は幅60～80cmである。

A02032-OZ 東西方向の畦畔である。完全に削平されており、畦畔脇の浅い溝と足跡の粗密から復元したが、非常に断片的にしかわからない。推定規模は幅80cmである。

A02029-OZ 東西方向の畦畔である。完全に削平されており、畦畔脇の浅い溝と足跡の粗密から復元した。推定規模は幅60～80cmである。

A02028-OZ 南北方向の畦畔である。北半分は削平されているが、南半分はわずかに高まりが残り、畦畔脇の浅い溝も残っていた。規模は大きく、幅180～230cm、現存高は2～4cmである。

A02031-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されているが、痕跡と足跡の粗密から復元した。推定規模は幅50～80cmである。

A02033-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されており、足跡の粗密から復元を試みたが、部分的に復元できたにすぎない。推定規模は幅50cmである。

A02034-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されており、畦畔脇の浅い溝と足跡の粗密から復元したが調査区の中央部が先述した中世後期の洪水によりえぐれているため、確実なものとは言い難い。推定規模は幅80cmである。

B02047-OZ 東西方向の畦畔である。完全に削平されているため、畦畔脇の浅い溝、足跡の粗密から復元した。推定規模は幅50～100cmである。

B02074-OZ 東西方向の畦畔である。本面ではB区で唯一高まりが残っていた。調査区南端部にあたり側溝がかかっているため、正確な規模は不明である。現存高は2～7cmである。

B02010-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されているため、畦畔脇の浅い溝、足跡の粗密から復元した。推定規模は幅100～150cmである。

B02018-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されているため、畦畔脇の浅い溝から復元した。推定規模は幅120cmである。

B02023-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されているため、畦畔脇の浅い溝、足跡の粗密から復元した。推定規模は幅40～50cmである。

B02029-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されているため、足跡の粗密から復元した。推定規模は幅40～60cmである。

B02031-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されているため、畦畔脇の浅い溝から復元した。推定規模は幅100～130cmである。

B02054-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されているため、畦畔脇の浅い溝から復元した。推定規模は幅100～120cmである。

B02076-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されているため、畦畔脇の浅い溝から復元した。推定規模は幅50～100cmである。

B02041-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されているため、足跡の粗密から復元した。推定規模は

幅40～70cmである。

B02044-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されているため、畦畔脇の浅い溝から復元した。推定規模は幅30～80cmである。

B02048-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されているため、畦畔脇の浅い溝から復元した。推定規模は幅60cmである。

これら畦畔の中では3A・3B区東端で検出した南北方向の畦畔A02028-OZとB02010-OZの規模が大きい。本畦畔は位置的に里境である可能性が高いとみられる。一方3B区南端で検出した東西方向の畦畔B02074-OZは第1遺構面同様規模が大きい、坪境にはあたらない。

なお本面では、水口は畦畔の残りが悪いためにはっきりとは確認できなかった。しかし3A区中央付近の東西方向畦畔A02030-OZが南北方向の畦畔A02031-OZに交わる付近であるG63-I05ODと、東西方向畦畔A02030-OZの東端付近であるG63-I05TDの2カ所が深くえぐれ、粗い砂礫が覆っていた。それぞれA02026-OZとA02021-OZとしている。これが水口の痕跡である可能性がある。

表6 3A・3B区第2面畦畔一覧

遺構名	方向	規模 (cm)		位置 (国土座標値)	畦畔間の距離 m (平均)
		幅	高		
A02030・032-OZ	東西	60～80	0	X=-155,515.2～-155,516.3	9.7～11.8m (10.75m)
A02029-OZ	東西	60～80	0	X=-155,527.0～-155,526.0	40.7～42.5m (41.6m)
B02047-OZ	東西	50～100	0	X=-155,567.7～-155,568.5	
B02074-OZ	東西	不明	2～7	X=-155,580.2～-155,581.1	11.7～12.6m (12.15m)
A02028-OZ	南北	180～230	2～4	Y=-35,501.1～-35,502.2	39.5～41.6m (40.55m)
A02031-OZ	南北	50～80	0	Y=-35,541.7～-35,542.7	9.6～11.0m (10.3m)
A02033-OZ	南北	50	0	Y=-35,552.3～-35,552.7	
A02034-OZ	南北	80	0	Y=-35,563.2～-35,564.9	10.7～12.6m (11.65m)
B02010-OZ	南北	100～150	0	Y=-35,502.5～-35,503.0	9.6～10.3m (9.95m)
B02018-OZ	南北	120	0	Y=-35,512.6～-35,512.8	8.1～9.6m (8.85m)
B02023・029-OZ	南北	40～60	0	Y=-35,520.9～-35,522.2	
B02031・054-OZ	南北	100～130	0	Y=-35,531.6～-35,532.0	9.4～11.1m (10.25m)
B07076-OZ	南北	50～100	0	Y=-35,543.0～-35,543.5	11.0～11.9 (11.45m)
B02041-OZ	南北	40～70	0	Y=-35,553.1～-35,553.5	9.6～10.5m (10.05m)
B02044-OZ	南北	30～80	0	Y=-35,564.0	10.5～10.9m (10.7m)
B02048-OZ	南北	60	0	Y=-35,573.6	9.6m (9.6m)

## 溝

本遺構面で検出した溝は、畦畔に沿って検出される浅いものがほとんどである。遺構名を列記すると、A02002～02011・02015～02018-OZ (OS) 等がこれにあたる。埋土はいずれも5Y7/3浅黄色中砂～粗砂である。出土遺物としては、溝A02003-OZ (OS) から土師器の皿 (3120)、溝A02012-OZから土師器の甕 (3121)、須恵器の椀 (3122)、製塩土器 (3123)、溝02013-OZから土師器の杯A (3124)、製塩土器 (3125) が確認できる。いずれも奈良時代後半～平安時代中葉前後に属する。

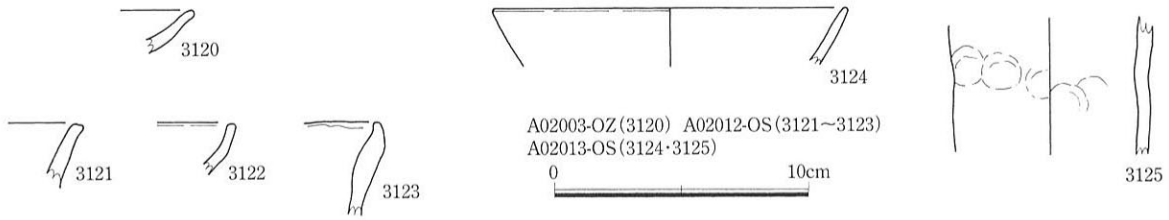


図64 3A区第2面出土遺物

### 土坑

土坑は3A区において1基を検出した(A02001-OO)。この土坑は⑦層から掘り込まれたものであり、畦畔や溝など本面の水田関連遺構より新しい。遺物は土師器片などの小片が出土したにとどまるが、第2面の時期と第1面の時期を考えると、時期は11世紀～12世紀代に収まることになる。

### 落ち込み

落ち込みは3A区で8カ所検出した。3カ所(A02012・02013・02020-OX)は規模が大きい。残る5カ所(A02019・02022～02025-OX)は規模が小さく浅いが、削平のため底部付近のみを検出していると考えられること、埋土が共通するという理由で、すべて落ち込みに分類した。埋土は5Y6/2灰オリーブ色砂混じりシルトである。

### 足跡・鋤先痕

第2面には足跡が多く残されている。3A区では西端部を除いて足跡の遺存状況は良好であった。3B区はほぼ全面で足跡を検出しているが、削平によって上部が飛ばされており、人か動物かの判断がつかないものがほとんどである。3A区の良い足跡を観察する限り、足跡の多くは人と牛の足跡が明瞭である。また本面では明瞭な鋤先痕はほとんど認められなかった。

### 【時期】

第2面の時期は、遺構から出土した遺物および第2面直上で検出した遺物から平安時代後期(11世紀代)と考えられる。

### 第2層出土遺物

本層は⑧層と⑨層からなる。⑧層は第2面の水田耕作土、⑨層は第3面を覆う土層である。本層からの検出遺物では、図65～68の個体を図化できた。

**3A区第2層出土遺物** 土師器(3126～3145)、製塩土器(3146～3149)、須恵器(3150～3163)、瓦(3164～3166)、鉄製品(3167)がある。3126～3133は杯Cないし杯Aで、3126の内面には放射状暗文があるが他には確認できない。飛鳥時代～平安時代前葉に属する。3134は皿Bの高台部付近で、高台は低い。奈良時代後半に属するか。3135は高杯の軸部で、外面に面取りがみられる。奈良時代後半～平安時代初頭に属する。3136・3137は高杯の杯基部と脚部で、おおむね同巧のつくりである。飛鳥時代～奈良時代初頭に属する。3138～3142は甕の口縁部付近で、いずれも体外面にハケメ調整をとどめない南河内産の甕である。奈良時代～平安時代前半に属する。3143・3144は羽釜の口縁部から鏝部付近で、生駒山西麓産胎土である。奈良時代後半前後に属する。3145は壺ないし甕の底部で、焼成前の穿孔がみられる。古墳時代前期に属するか。3146～3149は鉢形器形の口縁部と体部で、3146・3147の口縁端部は肥厚される。奈良時代後半～平安時代初頭に属する。3150～3153は杯B蓋である。いずれも奈良時代末～平安時代初頭に属する。3154～3156は杯Bの底部付近で、いずれも高台は底部端付近に取り付く。奈良

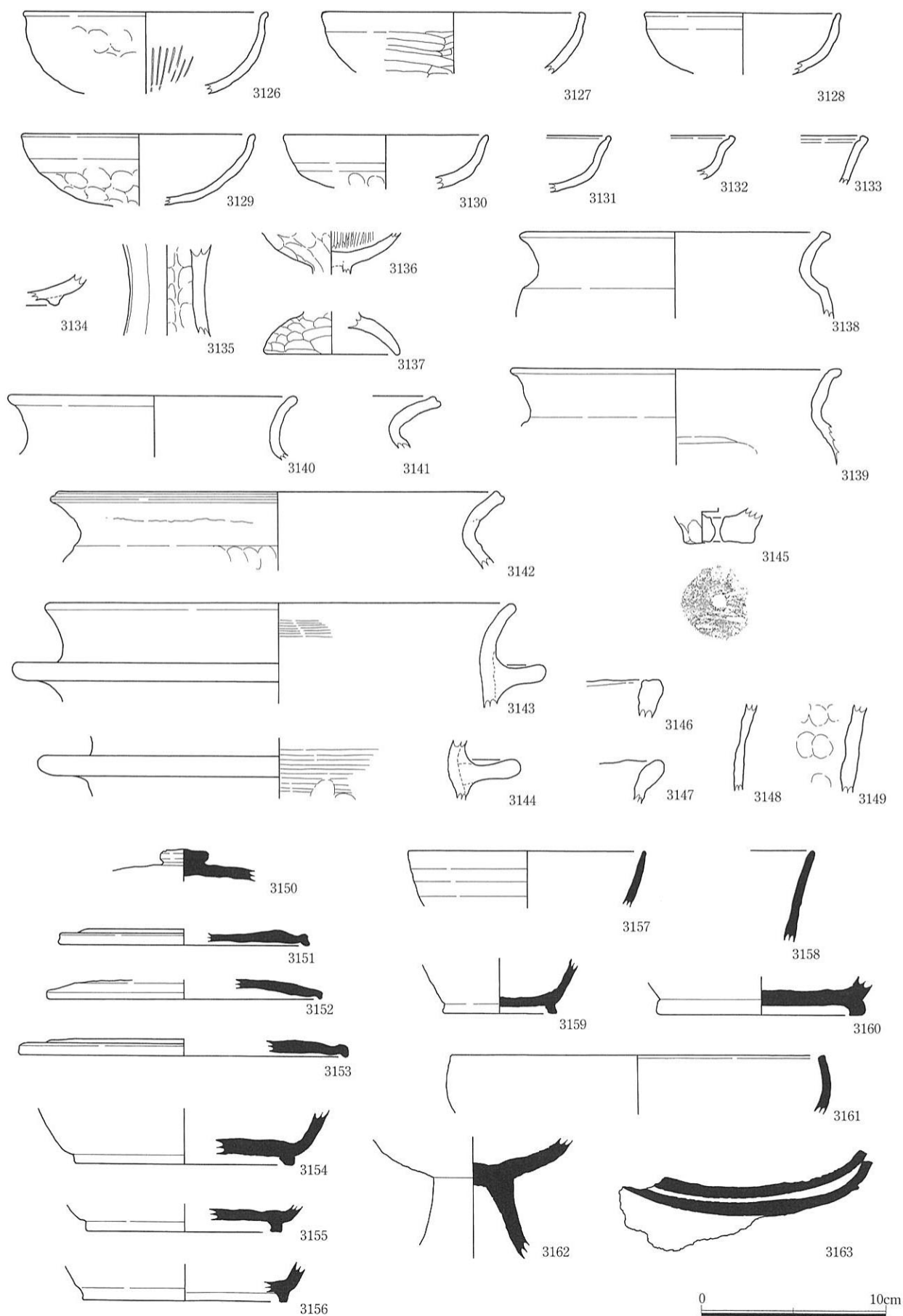


图65 3 A区第2層出土遺物(1)



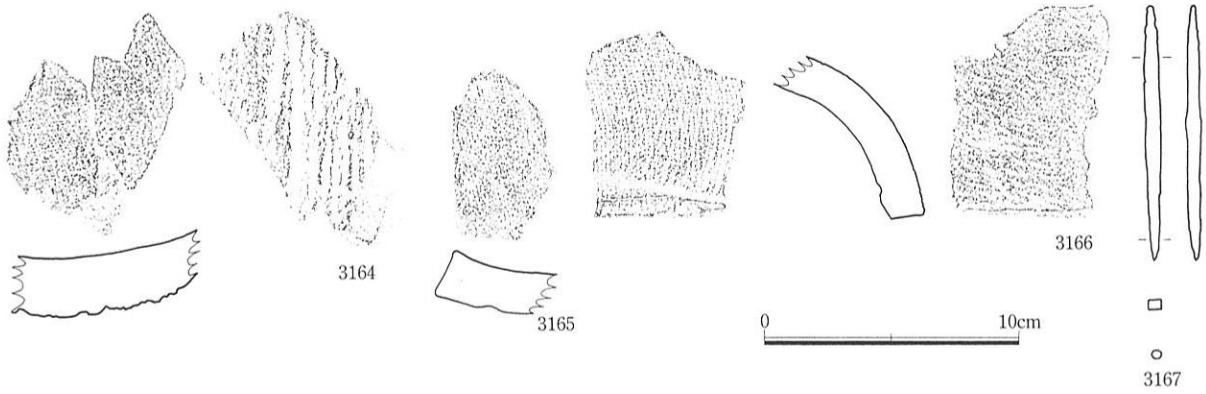
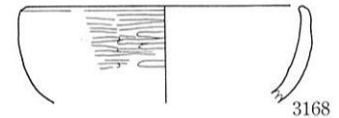


図66 3A区第2層出土遺物(2)

時代末～平安時代初頭に属する。3157・3158は杯Aないし杯Bの口縁部で、3157はやや内湾し、3158はやや外反する。奈良時代～平安時代初頭に属する。3159・3160は壺の底部付近で、3159は壺Lになる可能性がある。奈良時代～平安時代初頭に属する。3161は鉢A(鉄鉢形)の口縁部で、口縁端部は鈍い面を持つ。奈良時代～平安時代初頭に属する。3162は高杯の杯基部から軸部で、器壁が厚い。飛鳥時代に属するか。3163は大形甕の底部で、外面に焼成時の融着物が付着する。奈良時代～平安時代に属するか。3164・3165は平瓦、3166は丸瓦で、いずれも凹面には布目圧痕が、3164・3166の凸面には縄目タタキがのこる。奈良時代後半～平安時代に属する。3167は釘と推定でき、中央部の断面形は長方形を呈する。層位関係等から平安時代に属するか。他に動物歯を1点確認している。

3A区第2層最下部出土遺物 土師器(3168・3169)がある。椀ないし杯であり、外面にはヘラミガキが認められる。奈良時代後半～平安時代初頭に属する。



3B区第2層最下部出土遺物 土師器(3170～3172)、石製品(3173)がある。3170・3171は杯の口縁部、3172は杯皿類の底部で、3170の内面には放射状暗文が、3171の外面にはヘラケズリが施される。奈良時代中葉～末(平城宮III～V前後)に属する。3173は軽石の小転石で、顕著な加工はみられないが注意すべき遺物である。層位から平安時代に属すると考えておく。

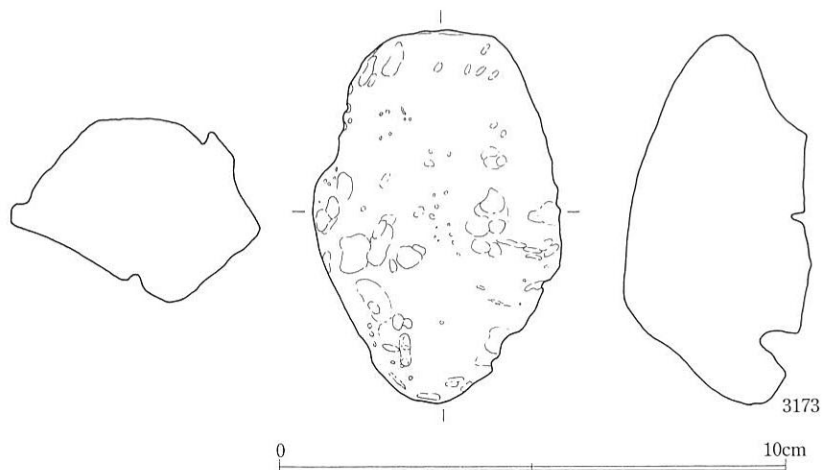
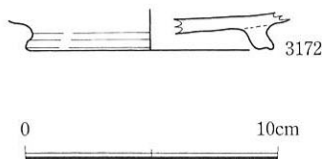
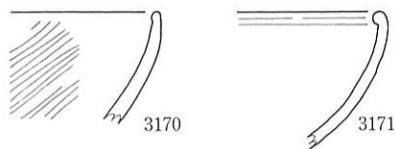
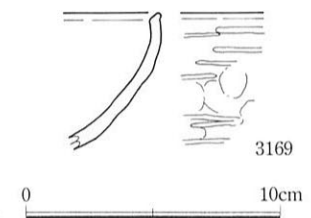


図67 3A区第2層最下部出土遺物

図68 3B区第2層最下部出土遺物

## 第3面……………平安時代初頭の水田面

## 【概要】

本面では第1・2面と同様、3A・3B区とも条里水田を確認した。畦畔、土坑、足跡等を検出している。本面のレベルは3A区がT.P.+9.30~9.50m、3B区がT.P.+9.15~9.35mである。

## 【遺構と遺物】

## 畦畔

畦畔は3A区で7条、3B区で10条を検出した(表7)。3A区では調査区東半部の遺存状態が良好であったのに対し、西半部は非常に悪かった。一方、3B区の畦畔はほとんどが遺存していた。

A03011-OZ 東西方向の畦畔である。一部を除き削平されており、足跡の粗密から復元した。規模は幅60~80cmである。

A03012-OZ 東西方向の畦畔である。遺存状況は良好であった。規模は幅80~100cm、残存高は4~6cmである。

A03006-OZ 南北方向の畦畔である。遺存状況は良好であった。規模は本面で最も大きく、幅100~170cm、残存高6~9cmである。遺物は、本畦畔の脇から須恵器(3174)が出土した。杯Bであり、ほぼ完形に復元できる。細かい位置づけは難しいが、高台の取り付けられる位置が底端部よりやや内側に寄っている、底部から口縁部への立ち上がりやや丸みを帯びているなど特徴があり、奈良時代中葉前後に属すると考える。

A03007-OZ 南北方向の畦畔である。遺存状況は比較的良好であった。規模は幅60~90cm、残存高5cmである。

A03008-OZ 南北方向の畦畔である。遺存状況は比較的良好であった。規模は幅90~100cm、残存高2~3cmである。

A03009-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されており、足跡の粗密から復元した。規模は幅60~80cmである。

A03010-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されており、足跡の粗密から復元した。規模は幅60cmである。

B03019-OZ 東西方向の畦畔である。遺存状況は良好であった。規模は幅70~150cmと大きく、残存高は2~9cmである。遺物は、畦畔の内部あるいは直上部から土師器の皿A(3175)と皿B(3176)が出土した。奈良時代後半~平安時代初頭に属する。

B03028-OZ 東西方向の畦畔である。遺存状況は良好であった。調査区南端部にかかっているため、正確な規模は不明である。残存高は3~10cmである。

B03020-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されていたが、痕跡が残っており復元した。規模は大きく、幅100~130cmである。

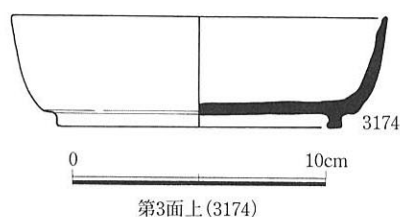


図69 3A区第3面出土遺物

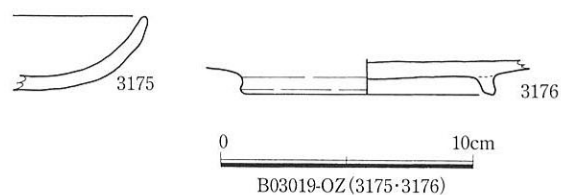


図70 3B区第3面出土遺物

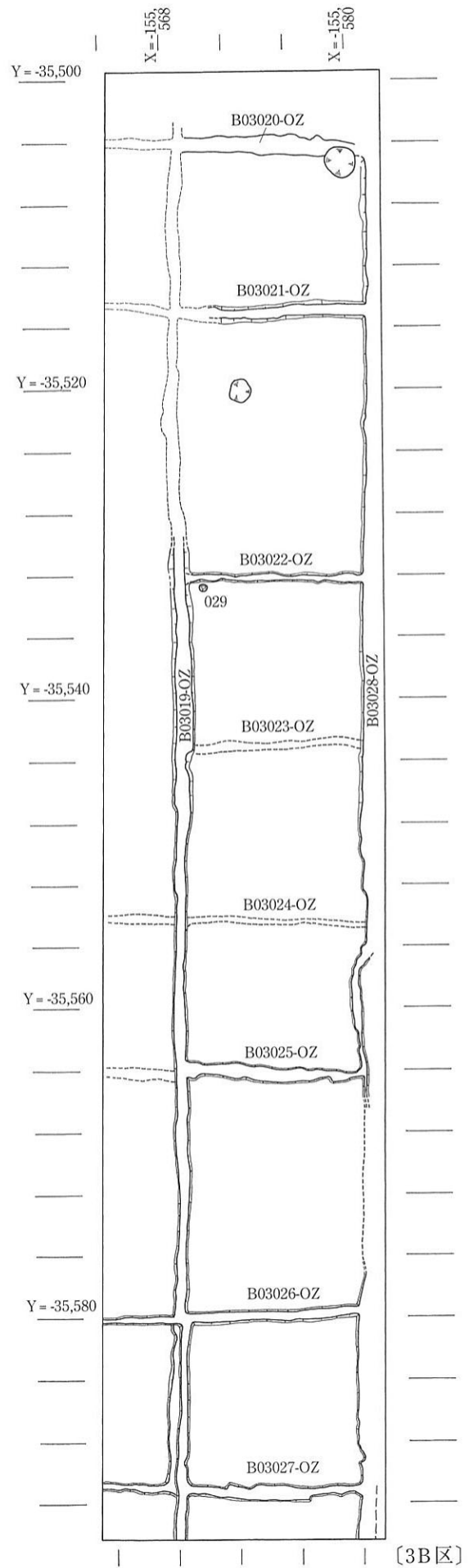
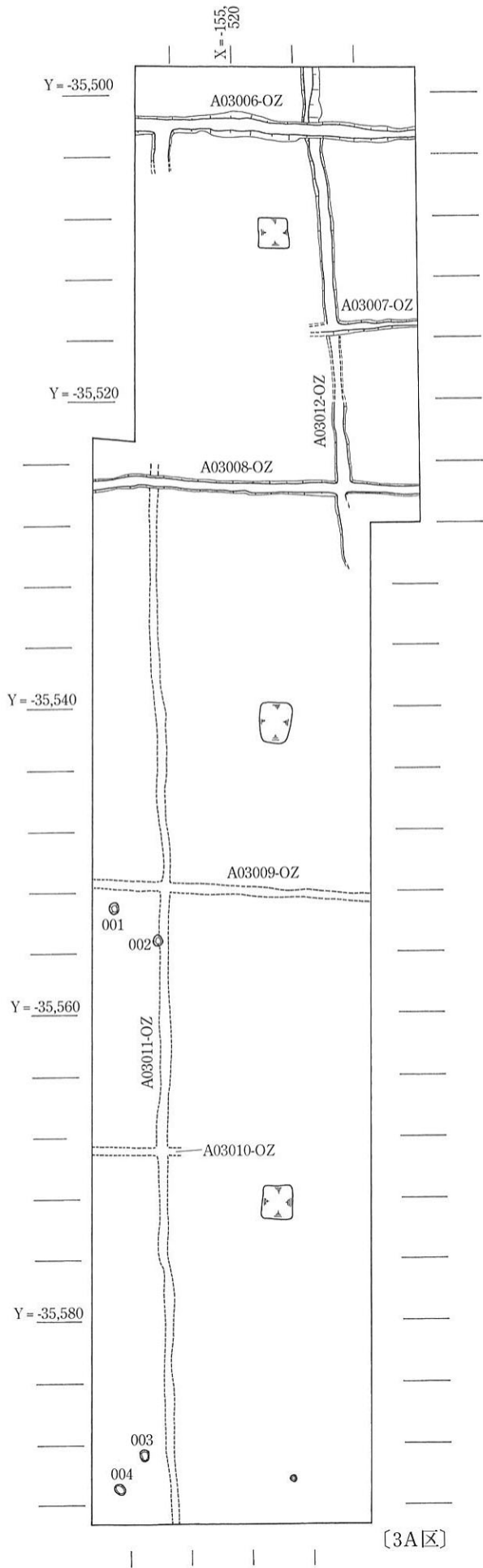


图71 3A·3B区第3面  
122

B03021-OZ 南北方向の畦畔である。遺存状況は比較的良好であった。規模は幅120cm、残存高は4cmである。

B03022-OZ 南北方向の畦畔である。遺存状況は比較的良好であった。規模は幅40～70cm、残存高は3cmである。

B03023-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されており、足跡の粗密から復元した。規模は幅50～70cmである。

B03024-OZ 南北方向の畦畔である。完全に削平されており、足跡の粗密から復元した。規模は幅30～70cmである。

B03025-OZ 南北方向の畦畔である。遺存状況は比較的良好であった。規模は幅40～100cm、残存高は2～4cmである。

B03026-OZ 南北方向の畦畔である。遺存状況は比較的良好であった。規模は幅70～90cm、残存高は5cmである。

B03027-OZ 南北方向の畦畔である。遺存状況は比較的良好であった。規模は幅60～120cm、残存高は4～7cmである。

本面の畦畔は3A区の遺存状況が悪かったものの、復元したものを含めれば調査区内の条里地割りをほぼ全面で窺うことができるものであった。この中で3A・3B区東端で検出した南北方向の畦畔A03006-OZとB03020-OZ、B区南端部の東西方向畦畔B03028-OZの規模が大きい。本面においてもA03006-OZ

表7 3A・3B区第3面畦畔一覧

遺構名	方向	規模 (cm)		位置 (国土座標値)	畦畔間の距離 (平均)
		幅	高		
A03011-OZ	東西	60～80	0	X=-155,514.5	10.6～12.5m (11.55m)
A03012-OZ	東西	80～100	4～6	X=-155,525.1～-155,527.0	41.0～43.9m (42.45m)
B03019-OZ	東西	70～150	2～9	X=-155,568.0～-155,569.0	
B03028-OZ	東西	不明	3～10	X=-155,580.0～-155,581.5	11.0～13.5m (12.25m)
A03006-OZ	南北	100～170	6～9	Y=-35,502.1～-35,502.9	12.6～13.4m (13.0m)
A03007-OZ	南北	60～90	5	Y=-35,515.2～-35,515.5	10.1～10.8m (10.45m)
A03008-OZ	南北	90～100	2～3	Y=-35,525.3～-35,526.0	25.3～26.9m (26.1m)
A03009-OZ	南北	60～80	0	Y=-35,551.3～-35,552.2	16.5～17.4m (16.95m)
A03010-OZ	南北	60	0	Y=-35,568.7	
B03020-OZ	南北	100～130	0	Y=-35,504.3～-35,504.5	10.3～10.7m (10.5m)
B03021-OZ	南北	120	4	Y=-35,514.8～-35,515.0	17.2～17.6m (17.4m)
B03022-OZ	南北	40～70	3	Y=-35,532.2～-35,532.4	10.6～11.1m (10.85m)
B03023-OZ	南北	50～70	0	Y=-35,543.0～-35,543.3	10.9～11.8m (11.35m)
B03024-OZ	南北	30～70	0	Y=-35,554.2～-35,554.8	9.2～10.1m (9.65m)
B03025-OZ	南北	40～100	2～4	Y=-35,564.0～-35,564.3	15.2～16.0m (15.6m)
B03026-OZ	南北	70～90	5	Y=-35,579.5～-35,580.0	10.8～11.5m (11.15m)
B03027-OZ	南北	60～120	4～7	Y=-35,590.8～-35,591.0	

と B03020-OZ は里境であると考えられる。また東西方向の畦畔 B03019-OZ と B03028-OZ はしっかりした畦畔であることから、東西方向の長地型水田であったと推測される。

#### 土坑

土坑は3A区で4基を検出した (A03001~03004-OO)。いずれも埋土は5Y4/3オリーブ色砂である。水口の痕跡の可能性を考えているが、畦畔の推定位置とは必ずしも一致せず問題がある。

#### ピット

ピットはB区で1基を検出した (B03029-OZ)。平面形は円形、規模は径40cm、深さ29cmである。埋土は7.5Y5/2灰オリーブ色砂である。遺物は出土しなかった。

#### 足跡・農具痕

第3面には3A・3B区とも足跡が多く残されている。判別できるものは人と偶蹄目である。偶蹄目の足跡は牛であると考えられる。また馬と思われる足跡も少数ながら含まれている。なお本面では明瞭な鋤鍬先痕はほとんど認められなかった。

#### 【時期】

第3面直上より出土した土器 (3174) から、第3面の年代は奈良時代中葉前後に遡る可能性がある。しかし小片の中には平安時代初頭 (9世紀初頭) と考えられるものも含まれていることから、ここではある程度確実な上限として平安時代初頭を考えておく。

#### 第3層出土遺物

本層は⑩層に相当し、第3面水田の耕作土である。本層からの検出遺物では、図72~74の個体を図化できた。

**A区第3層出土遺物** 土師器 (3177~3193)、須恵器 (3194~3202)、石製品 (3203) がある。3177は壺の口縁部で、大形の広口壺である。古墳時代前期に属する。3178は壺の体部で、丸底に推定できる。古墳時代前期に属する。3179は鉢で、ほぼ完存品である。古墳時代末~飛鳥時代に属する。3180は把手部で、鉢に取り付けられると推定できる。古墳時代中期前後に属する。3181~3183は高杯の杯部と軸部付近で、杯部と軸部下端に屈曲部を持つ。古墳時代前期に属する。3184~3188は高杯の軸~脚裾部で、3186以外はほぼ同巧のつくりを示す。飛鳥時代~奈良時代前半に属する。3189~3193は甕の口縁部付近で、口縁端部は内側にややつまみ上げられる3189から、内面に肥厚を持つ3193等がみられる。弥生時代後期末~古墳時代初頭 (庄内式~布留式) に属する。3194は杯H蓋の天井部で、外面にヘラ記号がある。古墳時代後期に属する。ヘラケズリの範囲からTK43に位置づけられる。3195は杯H蓋で、小形品である。飛鳥時代 (飛鳥II) に属する。3196は杯G蓋で、小形品である。飛鳥時代 (飛鳥I) に属する。3197~3201は杯Hである。口縁部の立ち上がりが長い3197はTK10ないしTK43の古相、3198・3199はTK43~TK209、立ち上がりの短い3200は飛鳥Iに属する。3201は体部で、口縁部の立ち上がりは低いと推定できる。古墳時代末~飛鳥時代に属する。3202は杯Gの底部付近で、底部は狭い平底状を呈する。飛鳥時代に属する。3203はサヌカイト塊で、各所に剝離痕をとどめるが、水流によるローリングが著しい。弥生時代前期~中期に属する。

**B区第3層出土遺物** 土師器 (3204・3205)、須恵器 (3206)、木製品 (3207) がある。3204・3205は杯Cで、内面に放射状暗文をとどめる。飛鳥時代 (飛鳥II~III) に属する。3206は杯Hで、口縁立ち上がりの基部は厚い。古墳時代後期 (TK43) に属する。3207は用途不明品で、板棒状品の両端部に切り込

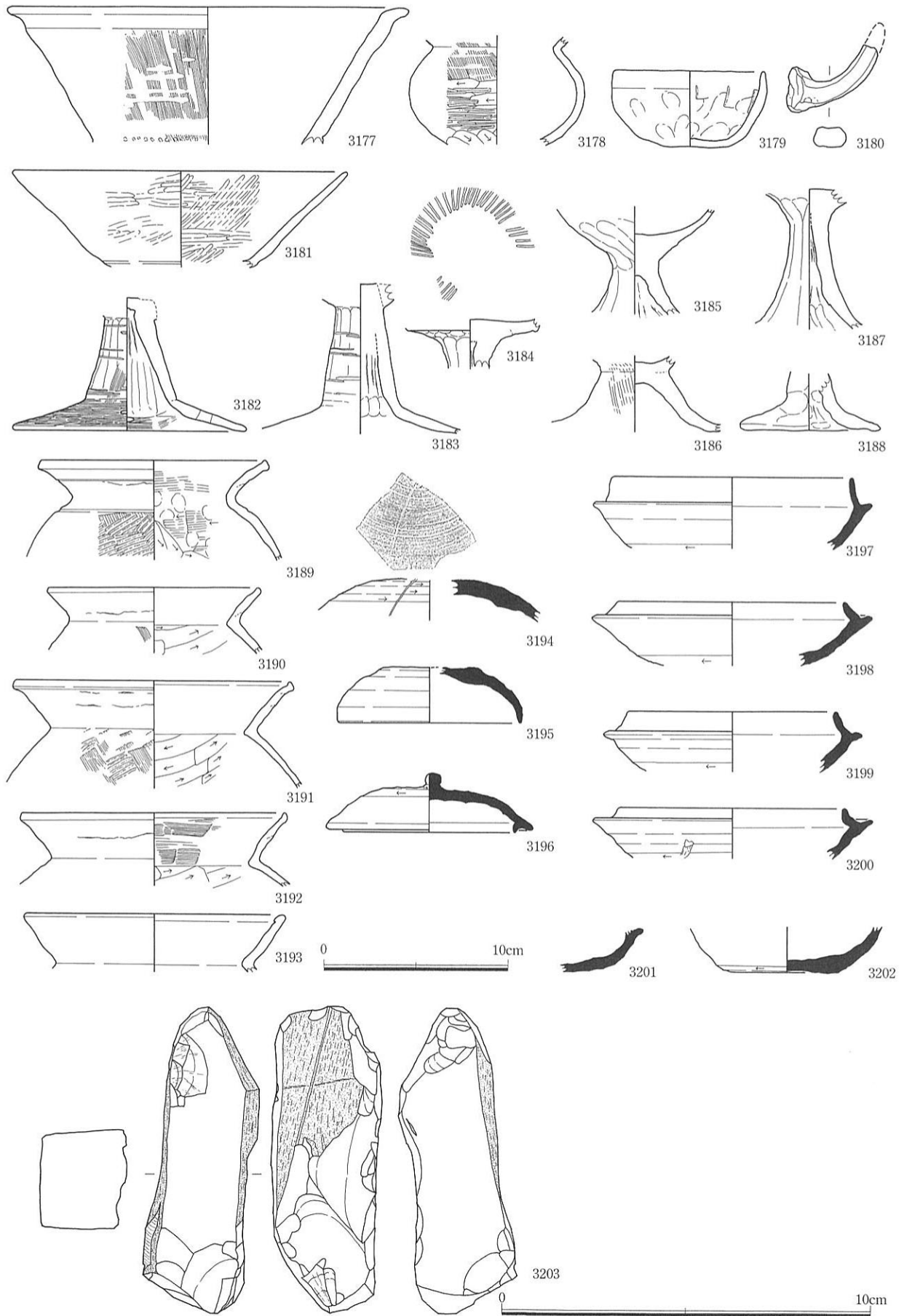


图72 3 A区第3層出土遺物

みがみられる。樹種はコウヤマキである。時期を決定する根拠に乏しいが、層位関係等から飛鳥時代～平安時代初頭に属する可能性がある。

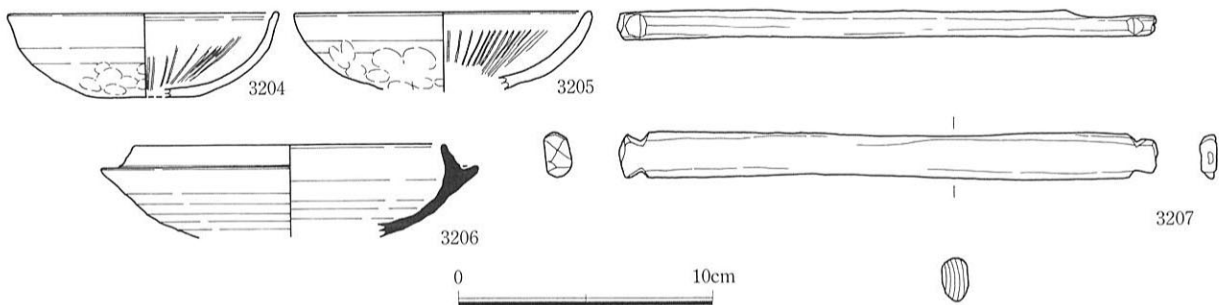


図73 3B区第3層出土遺物

**B区第3層最下部出土遺物** 土師器(3208・3209)、須恵器(3210・3211)がある。3208は高杯の軸部で、飛鳥時代に属する。3209は甕の口縁部で、頸部の屈曲は弱く、体部内面はヘラケズリが施される。飛鳥時代に属する。3210は杯H蓋で、口縁端部内面には鈍い段がある。古墳時代後期(TK10)に属する。3211は杯H蓋の天井部で、外面にヘラ記号がみられる。古墳時代後期(TK10～TK43前後か)に属する。

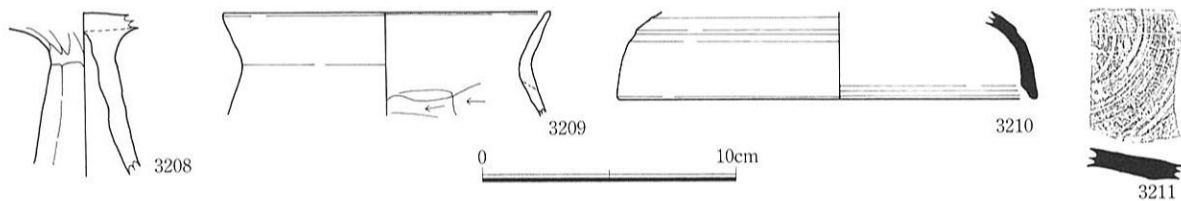


図74 3B区第3層最下部出土遺物

第4面……………飛鳥時代の遺構面

【概要】

本面では明確な遺構は確認されず、足跡を検出したのみである。この時期には本調査区付近は低湿地となり、水田耕作が一時行われていなかったと考えられる。

本面のレベルは3A区がT.P.+9.2～9.35m、3B区がT.P.+9.05～9.2mである。

【遺構と遺物】

擬畦畔

3A区では足跡以外の遺構は検出できなかった。本面基盤層である第4層⑩層(7.5Y4/1灰色シルト)の層厚が10cm程度と薄いために、遺存状況の良好な第5面の水田畦畔の高まりが本面精査時にすでに検出されてしまっている状態である。

3B区の状況も3A区とよく似ている。足跡以外の明確な遺構は検出できなかった。しかし足跡の粗密を観察したところ、足跡が非常に少ない調査区中央部では無理があるものの、比較的足跡の多い調査区東半部と西端部では部分的ながら畦畔が復元できるように観察された。

そこで、3B区において足跡の粗密を手がかりに畦畔の復元を試みたところ、東西方向のものが1条(1)、南北方向のものが3条(2)～(4)復元することができた。それぞれの畦畔の位置は東西方向の(1)が

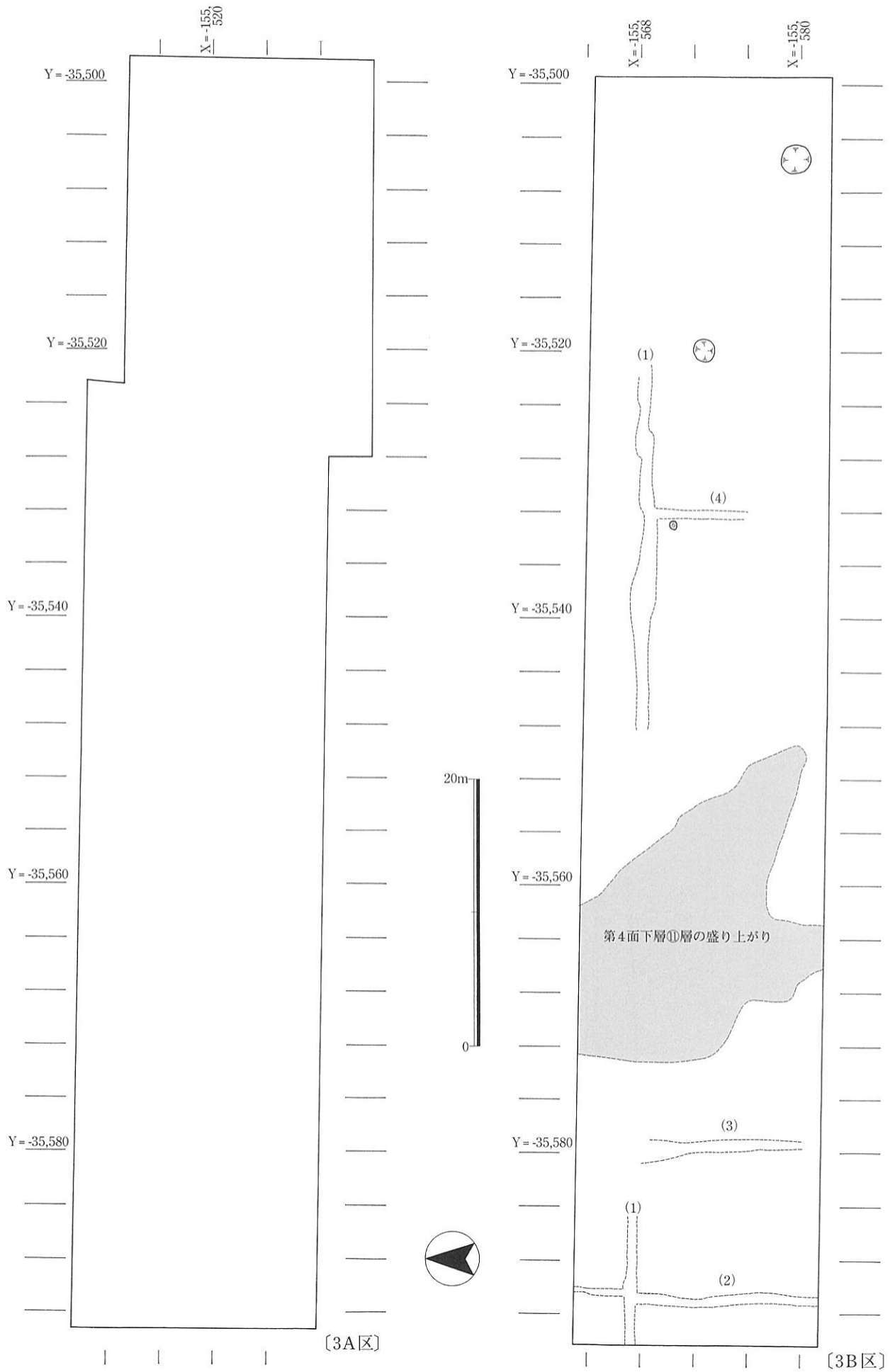


図75 3A・3B区第4面  
127



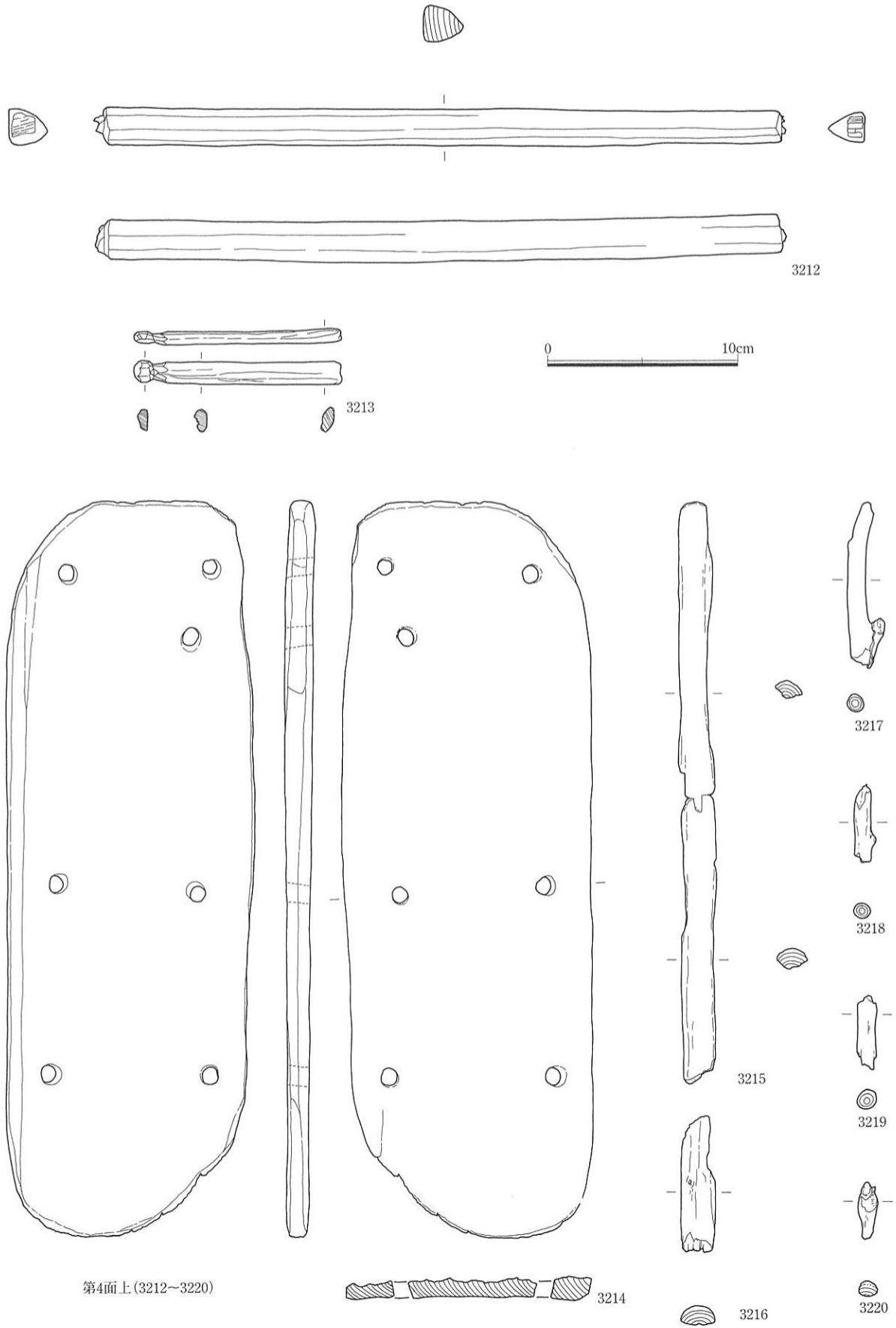


図76 3B区第4面出土遺物

X=-155,568.0~-155,568.5、南北方向の(2)がY=-35,590.5~-35,591.0、(3)がY=-35,579.5~-35,580.0、(4)がY=-35,532.0~-35,532.3である。

しかし(1)~(4)の畦畔の位置は、いずれも第3面で検出した畦畔の直下にあたる。これら(1)~(4)が平安時代初頭には確実に遡ると考えられる第3面の水田に先行する条里水田の畦畔であるのか、あるいは単に擬畦畔であるのかを検討した。その結果、本面で復元した畦畔は、第3面から深く踏み込まれた足跡によって第3面の畦畔が本面に「転写」された擬畦畔であると判断した。該当箇所では、第3層(第3面水田耕作土)は厚さ最大10cm程度と薄い上、第3層と本面の間には間層を挟まないために、踏み込みが本面にまで達する場合が多かったのだろう。したがって本面での条里畦畔の存在は否定される。ただし後述するように本面基盤層からもイネのプラントオパールは検出されており、比較的近郊では水田がつくられていた可能性はある。本調査地でも田下駄が出土し(写真図版20-3)、また上面からの踏み込みでない足跡も存在する。このように人の活動の痕跡ははっきりと残されている。

本面で出土した遺物には、図76に示した木製品がある。いずれも3B区において本面にほぼ接した状態で検出した。3212・3213は用途不明品である。3212は、断面三角形の棒状品の両端部に突起が作り出されていた痕跡を持つ。樹種はカヤである。3213は、棒状品の一端付近に切り込みを加え端部を瘤状に形づく。樹種は不明である。3214~3220は、上述した円形枠付き田下駄の各部材である。3214は足板であり、右に図示した平面図の側が上面で出土した。鼻緒孔が3孔確認できる。親指側の孔が左側に偏っているので、出土上面を使用時の上面とすると、右足用になる。この足板には、鼻緒孔以外に、両短辺近くに各2孔ずつの穿孔がみられる。これらは枠を取り付けた孔と推定できる。樹種はスギである。3216~3220は、足板の周辺から検出した小棒状ないし杖状品である。これらは本来は、平面円形に組まれ、足板短辺付近の穿孔部に蔓材等を用いて取り付けられていたと推定できる。3215・3216は同一材と考えられるが、他に比べるとやや太いので、足板に直交して配した横木材であった可能性もあるだろう。樹種は、3215・3216はアカガシ亜属かと推定され、3217~3220はヤナギ属である。

#### 足跡

足跡は、3A区では調査区西半部で多く検出した。しかし第1~3面に比べると明らかに数が少ない。特に調査区東半部ではまばらである。3B区では3A区よりも多くの足跡を検出している。3B区で足跡が検出できなかったのは、調査区中央部西寄りの部分に限られる。平面的な観察により判別のつく足跡は、人および偶蹄目に限られる。人の足跡は全面で見つかったが、歩行を追うことのできる足跡列は確認できなかった。また偶蹄目の足跡の大半は牛であるとみられる。馬と思われる足跡も少数だが確認している。

#### 【時期】

本面の時期は、本面直上から出土した遺物ならびに本面基盤層である⑪層から出土した遺物から、飛鳥時代(7世紀代)と考えられる。

#### 第4層出土遺物

本層は⑪層と⑫層からなる。⑪層は第4面の基盤層である。⑫層は第5面の水田を覆う砂層である。⑫層は3B区では調査区西端部を除く全面で堆積が認められたが、3A区では認められなかった。本層からの検出遺物では、図77~80の個体を図化できた。

3A区第4層出土遺物 土師器(3221~3228)、須恵器(3229~3236)がある。3221・3222は杯Cで、

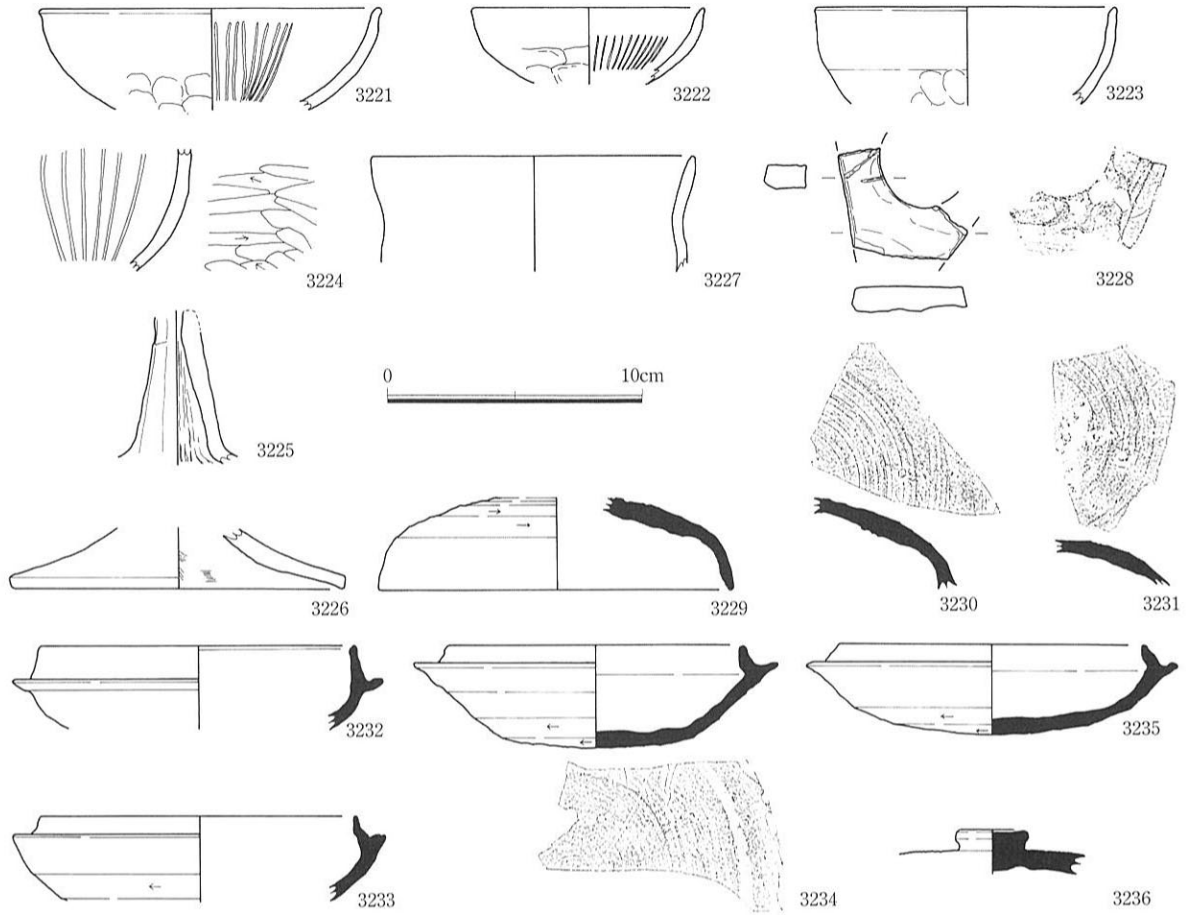


図77 3A区第4層出土遺物

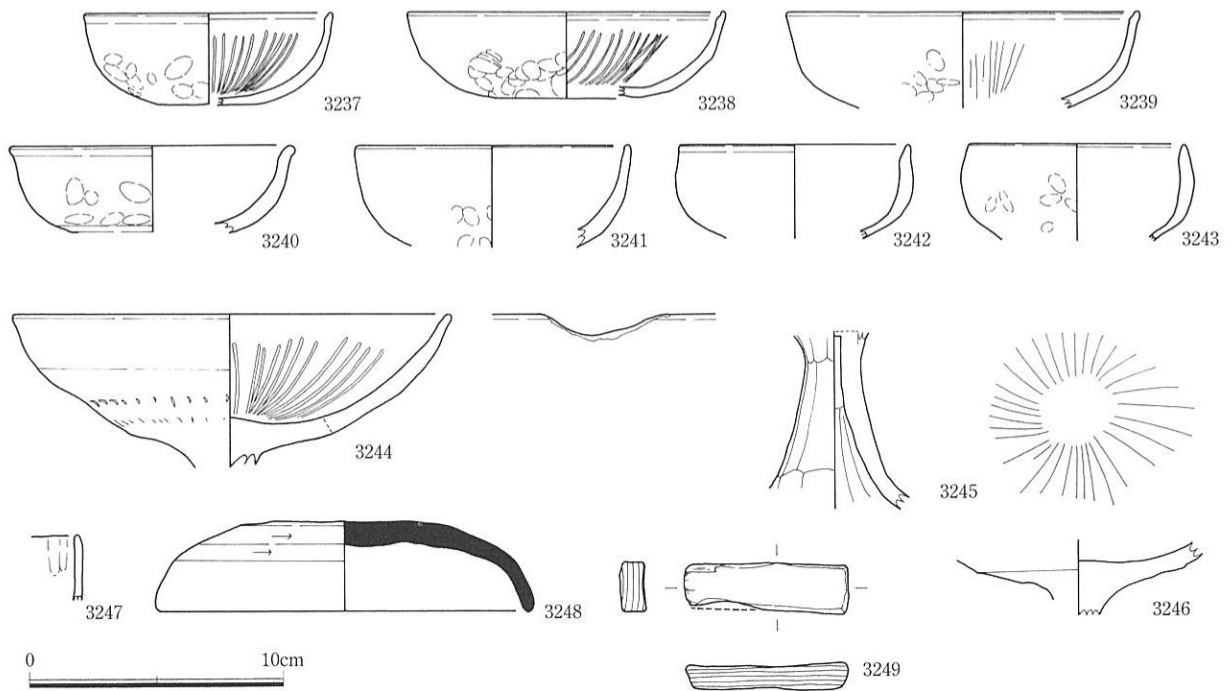


図78 3B区第4層出土遺物

内面に放射状暗文が施される。飛鳥時代（飛鳥II・III）に属する。3223は杯Gで、内面には暗文を持たない。飛鳥時代（飛鳥I前後）に属する。3224は杯Aないし杯Cで、器高がやや高く、内面に放射状暗文が施される。飛鳥時代（飛鳥I・II前後）に属する。3227は甕の口縁部付近で、頸部の屈曲は弱い。飛鳥時代に属する。3228は甕の底部で、切り込み孔が現状で3カ所確認できる。古墳時代中期～飛鳥時代の間に属することは確かだが、それ以上の特定は難しい。3225は高杯の軸部である。外面はヘラケズリの後ナデている。飛鳥時代に属する。3226は高杯の脚部で、古墳時代に属する。3229は杯H蓋で、外面の稜はなく口縁端部も素直におわる。古墳時代後期（TK43）に属する。3230・3231は杯H蓋の天井部で、外面にヘラ記号を持つ。口縁端部が残っていないが、時期は古墳時代後期（MT15～TK43）に属すると考える。3232～3235は杯Hである。口縁の立ち上がり部は3232ではやや長い。古墳時代後期（TK10～MT85）に属するか。3233～3235は古墳時代後期（TK43～TK209）に属する。なお、3234の底部外面にはヘラ記号を持つ。3236は高杯蓋のつまみ付近で、つまみの高さは低い。天井部にはカキメが施されている。古墳時代後期（TK10～TK43）に属する。

**3 B区第4層出土遺物** 土師器（3237～3246）、製塩土器（3247）、須恵器（3248）、木製品（3249）がある。3237～3239は杯Cで、内面に放射状暗文が施される。飛鳥時代（飛鳥II・III前後）に属する。3240～3243は杯Gないしそれに類した器形で、内面は暗文を持たない。飛鳥時代（飛鳥I前後）に属する。3244は高杯の杯部完存品で、内面に放射状暗文が施され、外面には、軸部にヘラミガキを施した際のものと同定できる工具の当たり痕がめぐる。口縁部の一部には意図的な打欠きがみられる。飛鳥時代に属する。3244・3246は高杯の軸部ないし杯基部で、3246の内面には放射状暗文が施される。飛鳥時代に属する。3247は鉢形器形の口縁で、器壁は薄い。古墳時代中期～後期に属する。3248は杯H蓋で、外面の稜はなく口縁端部も素直におわる。古墳時代後期（TK43）に属する。3249は用途不明品で、小形板状に加工される。樹種はサワラである。層位関係から古墳時代後期～飛鳥時代に属するとみられる。

**3 A区第4層最下部出土遺物** 土師器（3250）、須恵器（3251）、鉄製品（3252）がある。3250は杯Cで、内面に放射状暗文が施される。飛鳥時代（飛鳥II前後）に属する。3251は杯H蓋で、天井部は高く、外面の稜は鋭い。古墳時代中期（TK216前後か）に属する。3252は鉄釘で、断面は長方形を呈する。層位関係等から古墳時代後期～飛鳥時代に属するとみられる。

**B区第4層最下部出土遺物** 土師器（3253・3254）がある。3253は高杯の杯基部で、飛鳥時代に属する。3254は高杯の軸部で、軸部は太い。古墳時代後期以前に属するか。

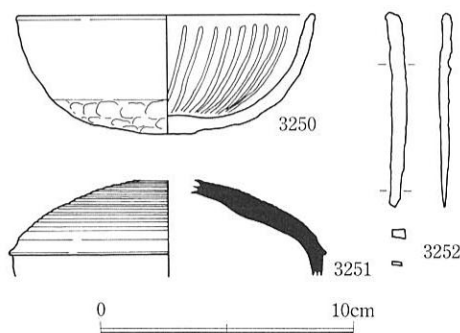


図79 3 A区第4層最下部出土遺物

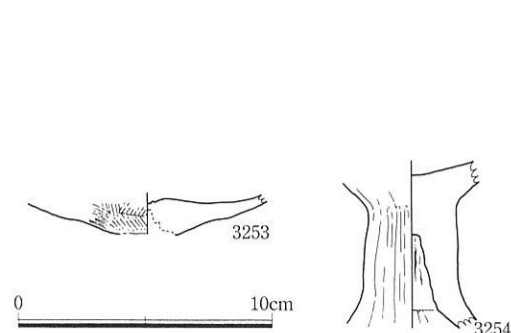


図80 3 B区第4層最下部出土遺物

第5面……………古墳時代後期～飛鳥時代の水田面

【概要】

本面では水田を検出した。検出した水田は第1～3面で検出した条里水田と異なり、自然地形にあわせてつくられた小区画水田である。幹線的な大畦畔が通り、小畦畔がこれに並行あるいは直交して水田を区画している。畦畔の他にはピット、足跡、農耕具痕等を検出した。

本面のレベルは3A区がT.P.+9.05～9.25m、3B区がT.P.+8.87～9.06mである。

【遺構と遺物】

畦畔

3A区で畦畔の遺存状況が良かったのは調査区西半部である。ただし西半部でも中央付近では畦畔は完全に削平されていたが足跡の粗密から畦畔A05007・05008-OZを復元した。調査区東半部では畦畔は全く検出されなかった。遺構面の現況は、調査区中央部がT.P.+9.05mと窪んでいるが、西端部と東端部のレベルはT.P.+9.15～9.25mと変わらない。しかし西端部には畦畔や足跡が残っているのに対し、東端部には足跡もほとんど残っていないことから考えると、調査区東半部は大きく削平を受けているものと考えられる。

3B区では3A区の西端部ほど畦畔の残りは良くなかったが、畦畔および畦畔の痕跡を調査区のほぼ全面で検出できたことで、小区画水田の状況をA区よりも広く復元することができた。また3B区の畦畔には3A区では検出されなかった幹線的な大畦畔が検出されている。

**大畦畔** 本面の大畦畔は3B区で検出した1条のみである。

**B05003-OZ** G63-I05QJ・QK・RK・RL・SL・SM・TMで検出した大畦畔である。規模は幅95～160cm、高さは6～8cm程度である。本畦畔は基本的に本調査区における最初の水田面である第14面（弥生時代前期中段階～新段階）以来維持されてきた大畦畔である。この大畦畔からは土師器（3257）と石製品（3258）が出土した。3257は高杯の軸部で、飛鳥時代に属する。3258は砥石で、柱状型に属する。破断面以外の4面を砥面としている。凝灰岩質砂岩製か。層位関係等から古墳時代後期～飛鳥時代に属する。

**小畦畔** 3A区の小畦畔はいずれもほぼ同規模で、規模は幅70～90cm程度、畦畔の現存高は5～10cm程度である。水口は検出していない。検出した範囲で見ると、南東－北西方向の畦畔はA05005-OZとA05006-OZが約1m程ずれているが、南西－北東方向の畦畔は直線的に通っている。これとは逆に3B区の小畦畔は大畦畔B05003-OZに並行する南東－北西方向の畦畔の方が通りがよい。南東－北西方向の畦畔をまずつくり、微地形にあわせて南西－北東方向の畦畔をつくることで水田を区画しているように看取される。もう1点注意されるのは小畦畔の規模が大畦畔B05003-OZを境に西と東では明らかに異なっていることである。大畦畔B05003-OZより西では小畦畔の幅はおおむね70～80cm程度であるが、東では規模が小さく、幅は40～50cm程度にとどまる。3B区でも水口は検出されなかった。畦畔の途切れる部分が数カ所あるが、間隔が広く不規則であり、水口とは断定しがたい。また調査区西端部と東端部周辺では畦畔を検出することはできなかった。この3B区東西両端部は、畦畔の残る調査区中央部より最大10cm程度高くなっている。ここには足跡がほとんど残っていないこと、部分的に畦畔と考えられる痕跡が認められることから、本来は水田であったものの、後世に削平を受けた可能性が高い。小畦畔からはほとんど遺物は出土していないが、B05057-OZから出土した土師器（3259）を図示しておく。高杯の軸部で、古墳時代後期に属する。

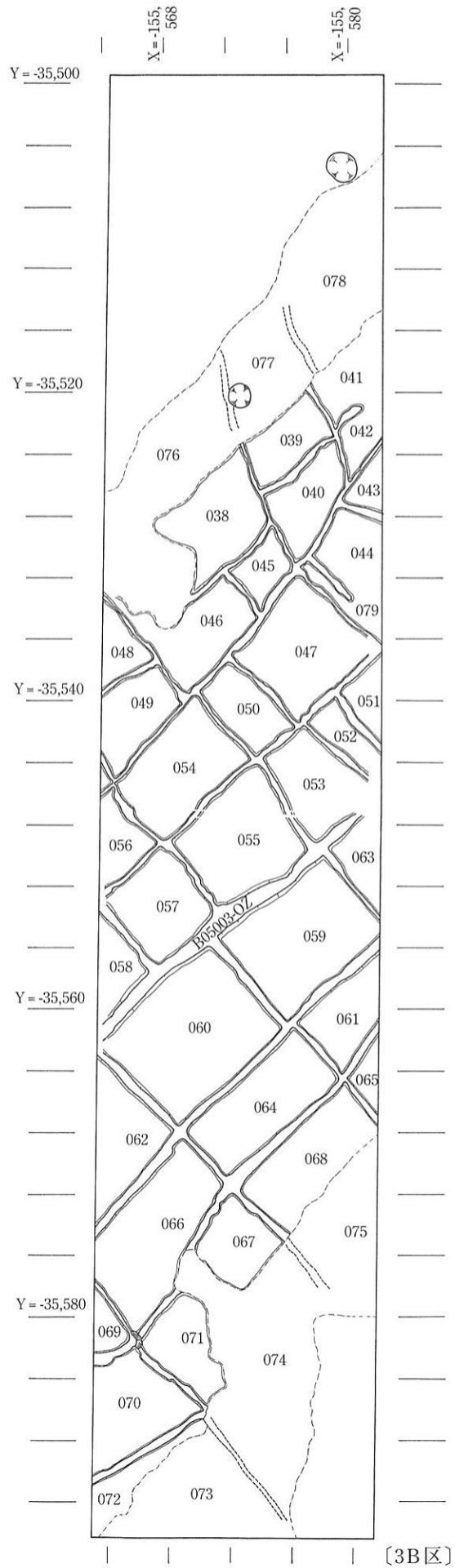
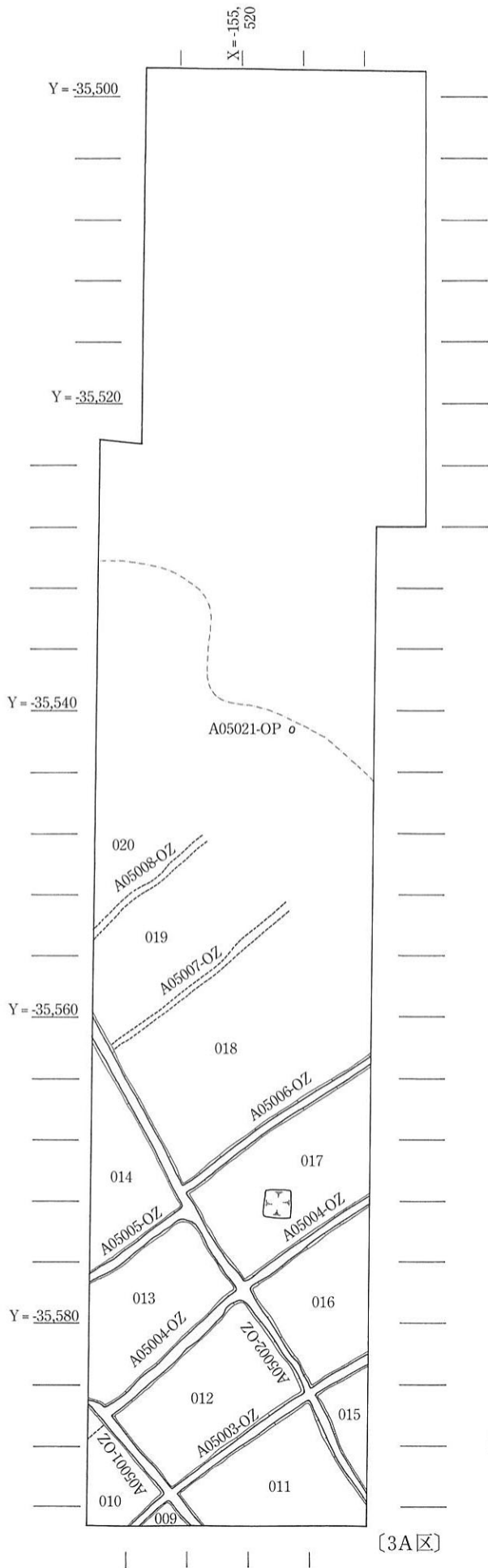


图81 3A·3B区第5面  
133

表8 3A・3B区第5面水田一覧

水田	面積	水田面のレベル	備考
A05009-OZ	—	—	
A05010-OZ	—	8.93~8.98m	
A05011-OZ	—	8.93~8.98m	
A05012-OZ	71.8㎡	8.93~8.98m	一筆を完全に検出
A05013-OZ	72.4㎡(推)	8.93~8.98m	
A05014-OZ	—	8.93~8.98m	
A05015-OZ	—	8.93~8.98m	
A05016-OZ	—	8.93~8.98m	
A05017-OZ	—	8.93~8.98m	
A05018-OZ	—	8.93~8.98m	
A05019-OZ	—	8.93~8.98m	
A05020-OZ	—	8.93~8.98m	
B05038-OZ	—	8.93~8.98m	
B05039-OZ	—	8.93~8.98m	
B05040-OZ	19.5㎡	8.93~8.98m	一筆を完全に検出
B05041-OZ	—	8.93~8.98m	
B05042-OZ	—	8.93~8.98m	
B05043-OZ	—	8.93~8.98m	
B05044-OZ	—	8.93~8.98m	
B05045-OZ	9.3㎡	8.93~8.98m	一筆を完全に検出
B05046-OZ	—	8.93~8.98m	
B05047-OZ	42.8㎡	8.93~8.98m	
B05048-OZ	—	8.93~8.98m	
B05049-OZ	—	8.93~8.98m	
B05050-OZ	17㎡	8.93~8.98m	
B05051-OZ	—	8.93~8.98m	
B05052-OZ	—	8.93~8.98m	
B05053-OZ	26.8㎡	8.93~8.98m	一筆を完全に検出
B05054-OZ	38.6㎡	8.93~8.98m	一筆を完全に検出
B05055-OZ	40.8㎡	8.93~8.98m	一筆を完全に検出
B05056-OZ	—	8.93~8.98m	
B05057-OZ	28.3㎡	8.93~8.98m	一筆を完全に検出
B05058-OZ	—	8.93~8.98m	
B05059-OZ	54.8㎡(推)	8.93~8.98m	
B05060-OZ	68.7㎡	8.93~8.98m	一筆を完全に検出
B05061-OZ	—	8.93~8.98m	
B05062-OZ	—	8.93~8.98m	
B05063-OZ	—	8.93~8.98m	
B05064-OZ	39.8㎡	8.93~8.98m	一筆を完全に検出
B05065-OZ	—	8.93~8.98m	
B05066-OZ	53.8㎡(推)	8.93~8.98m	
B05067-OZ	—	8.93~8.98m	
B05068-OZ	—	8.93~8.98m	
B05069-OZ	—	8.93~8.98m	
B05070-OZ	—	8.93~8.98m	
B05071-OZ	—	8.93~8.98m	
B05072-OZ	—	8.93~8.98m	
B05073-OZ	—	8.93~8.98m	
B05074-OZ	—	8.93~8.98m	
B05075-OZ	—	8.93~8.98m	
B05076-OZ	—	8.93~8.98m	
B05077-OZ	—	8.93~8.98m	
B05078-OZ	—	8.93~8.98m	
B05079-OZ	3.12㎡(推)	8.93~8.98m	

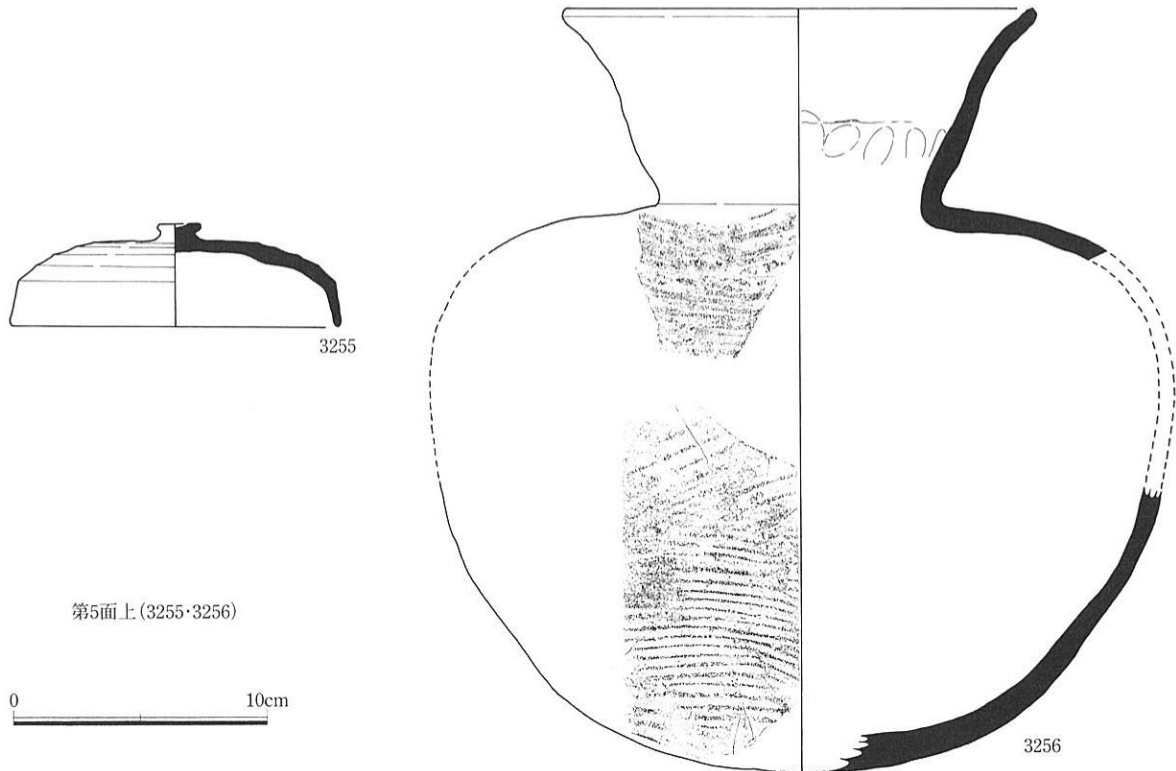


図82 3A区第5面出土遺物

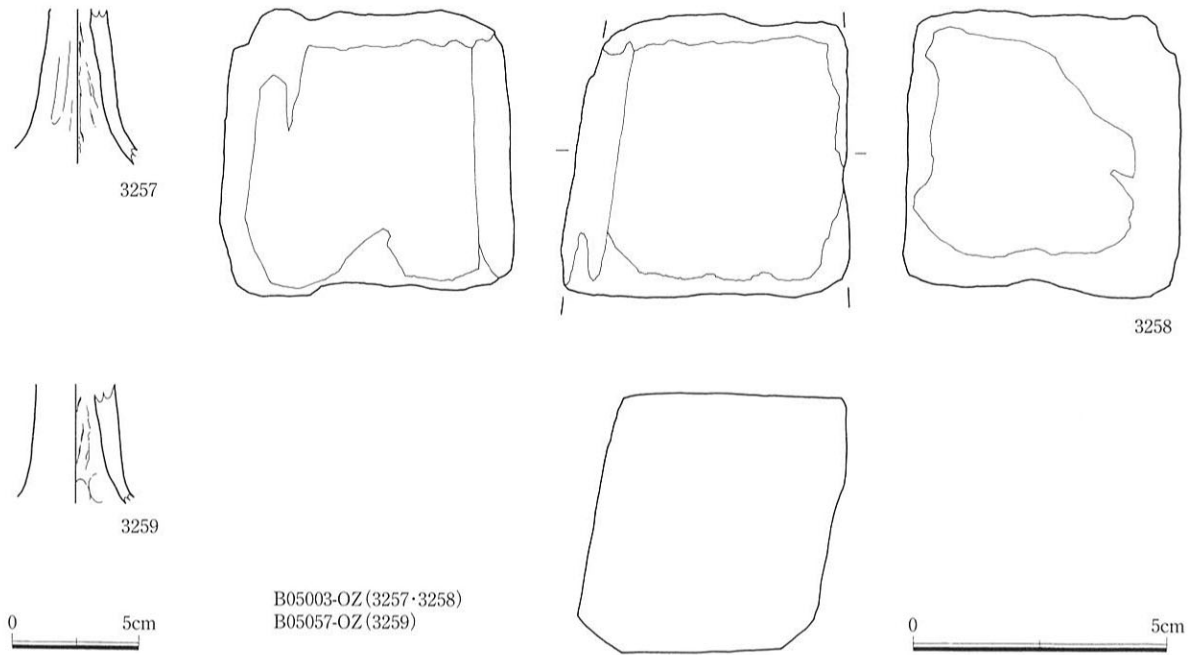


図83 3 B区第5面出土遺物

**水田** 以上の畦畔で区画された水田は3 A地区で12筆、3 B区で42筆、計54筆である(表8)。3 A区では面積の判明する水田は2筆であるが、平面形は整然としており、規模も70m<sup>2</sup>程度と大きい。一方、3 B区では面積の判明する水田が13筆あるが、最小が3.1m<sup>2</sup>(推)、最大が68.7m<sup>2</sup>と差が非常に大きいという違いがある。また水田の様相は、大畦畔B05003-OZの西側と東側では異なっている。まず面積だが、大畦畔西側の水田平均面積は54.3m<sup>2</sup>、東側の平均面積は22.6m<sup>2</sup>と倍近い差がある。水田の平面形も大畦畔東側は不整なものが多い。水田面のレベルは大畦畔の西側では緩やかに北西に向かって低くなるが、東側では各水田によりレベルがまちまちであることを考え合わせると、大畦畔東側は西側に比べて地形の凹凸があったため、微地形に合わせた小さい区画をとっているものと考えられる。不整な区画が多いのも同様の理由であろう。

#### ピット

ピットは3 A区で1基(A05021-OP)を検出しているが、遺物は出土していない。ただ後述するように、第7面段階で検出したピットA07018-OPは、本来は第5面の所産であると考えられる。

#### 足跡

足跡は、3 A区では西半部で、3 B区では東西両端部を除く全面で検出している。人と考えられるものが大半を占め、牛馬の明瞭な足跡はほとんどなかった。

#### その他

3 A区において第5面に接した状態で、ほぼ全容が判明する次の土器が出土した(図82)。3255は須恵器の高杯蓋で、つまみは小形になっている。古墳時代後期(TK43か)に属する。3256は須恵器の広口壺で、焼成は甘く土師器質に近い生焼け状態をなす。古墳時代後期に属する。

#### 【時期】

第5面の時期は第4層出土遺物および周辺の調査成果から推定して、古墳時代後期～飛鳥時代(6世紀後半～7世紀前半)と考えられる。



第5層出土遺物

第5層は第5面水田耕作土である。本層は⑬層だけからなる。本層からの検出遺物では、図84～86の個体を図化できた。

3A区第5層出土遺物 土師器(3260～3264)、製塩土器(3265・3266)、須恵器(3267～3270)、石製品(3271)がある。3260は鉢で、全形が明らかである。古墳時代後期(前半か)に属する。3261は鉢の口縁部付近で、口縁部には屈曲を持つ。古墳時代中期に属する。3262は高杯の軸部である。古墳時代中期～後期に属すると思われる。3263は甕の口縁部付近で、口縁端部は外方に拡張される。古墳時代後期に属する。3264は甕の口縁部である。端部は内側にやや拡張され、体部内面はヘラケズリが施される。生駒山西麓産胎土。古墳時代初頭～前期に属する。3265は鉢形器形の体部に脚台が付く。古墳時代前期に属する。3266は鉢形器形の体部で、器壁は非常に薄い。古墳時代中期～後期に属する。3267は杯H蓋の天井部から口縁部付近で、外面には鈍い稜がめぐる。古墳時代後期(TK10か)に属する。3268は杯Hの口縁部付近で、口縁端部内面には鈍いが段を持つ。古墳時代後期(MT15)に属する。3269は短頸壺の口縁部付近で、口縁はやや外傾して立ち上がる。古墳時代後期に属する。3270は高杯の脚部で、短脚で方形スカシ孔が穿たれる。古墳時代中期末～後期初頭(TK23～TK47か)に属する。3271は軽石で、一部に面を備えるが、人為によるものか確証はない。時期は特定できないが、層位関係から古墳時代後期～飛鳥時代に属すると考えておく。

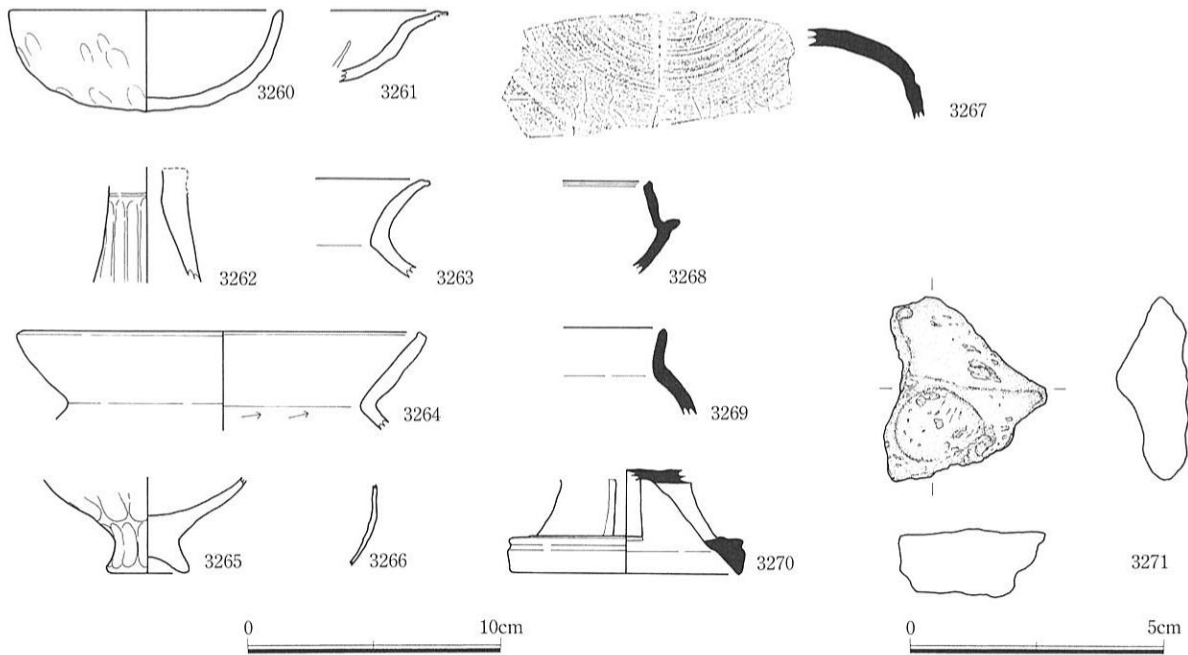


図84 3A区第5層出土遺物

3B区第5層出土遺物 弥生土器(3272)、土師器(3273～3276)、須恵器(3277・3278)がある。3272は壺の体部下半で、外面はヘラミガキ調整される。弥生時代後期に属する。3273・3274は鉢で、ほぼ全形が判明する。古墳時代後期に属する。3275は甕の口縁で、体部内面はヘラケズリが施される。古墳時代後期に属するか。3276は把手部で、鉢、甕などに付く可能性がある。古墳時代中期～後期に属する。3277は杯H蓋で、外面には鈍い凹線がめぐる。古墳時代後期(MT85～TK43)に属する。3278は杯Hの体部で、やや深い個体に推定できる。古墳時代後期(TK10～MT85前後)に属する。

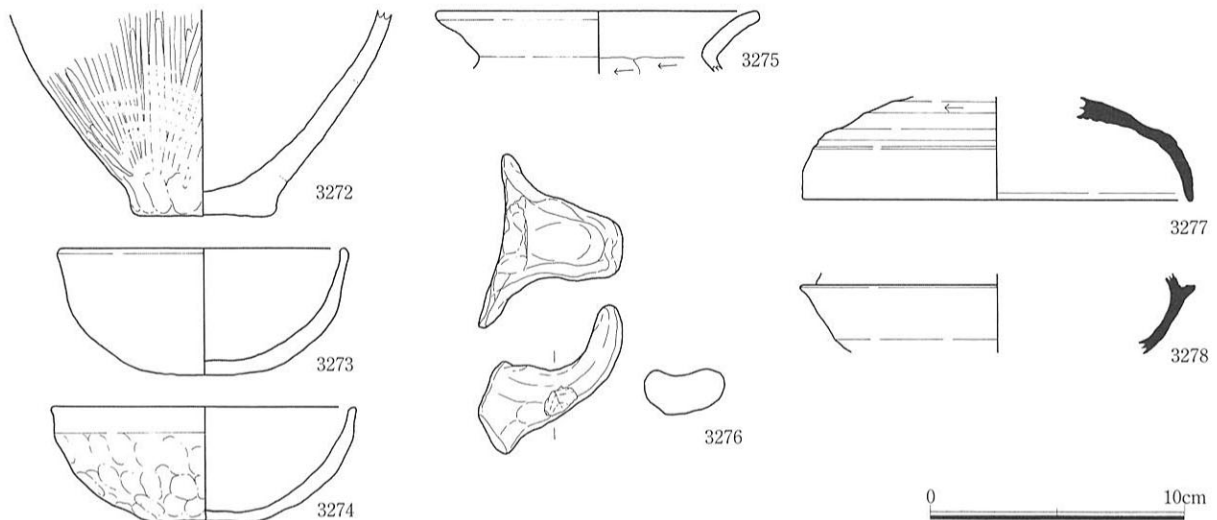


図85 3B区第5層出土遺物

3B区第5層最下部出土遺物 土師器(3279)がある。鉢の底部付近で、平底を呈する。外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整される。底部から体部への屈曲は明瞭で、器壁の厚さは6~7mmと均一である。韓式系土器である可能性が考えられる。古墳時代中期~後期に属する。

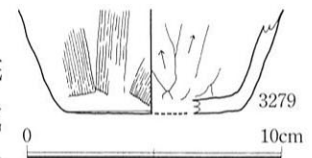


図86 3B区第5層最下部出土遺物

第6面.....古墳時代後期後半の水田面

【概要】

本面は3B区でのみ検出した。3A区では対応する遺構面は認められない。第6面の調査にとりかかった当初は、3A区においても第6面に対応する面があるのではないかと考えていた。それは3A区西端部では第5層⑬層(第5面耕作土)がおよそ厚さ25cmと厚く堆積しており、層中には足跡の踏み込みと考えられる砂が散在したため、第5層⑬層がさらに細分化できる可能性があると考えていたためである。しかし、断面観察を詳細に行ったが、第5層⑬層の細分は不可能であり、第6面に相当する面はないとの結論を出した。また第6面は3B区でも調査区全面で検出できたわけではない。調査区中央で検出した大畦畔B06003-OZの西側でのみ検出している。東半部は完全に削平されていた。

本面のレベルはおよそT.P.+8.7~8.9mである。

【遺構と遺物】

畦畔

本面の畦畔の遺存状況はあまり良好ではない。第5面同様、調査区中央で検出した大畦畔B06003-OZは規模が大きいためよく残っていたものの、小畦畔の遺存状況は悪かった。

大畦畔 大畦畔は1条を検出したのみである。

B06003-OZ G63-I05QJ・QK・RK・RL・SL・SM・TL・TMで検出した大畦畔である。第5面大畦畔B05003-OZの前身である。規模は幅160~220cm、高さは10~13cm程度である。遺物は、須恵器(3280~3283)が出土した。3280は杯H蓋の口縁付近で、外面には明瞭な稜を持たないが、口縁端部内面には鈍い段を備える。古墳時代後期(TK10)に属する。3281・3282は杯H蓋の天井部である。外面の稜の有無や口縁部が確認できないが、古墳時代後期に属すると考えられる。3283は杯Hの口縁部付近で、立ち上がり部

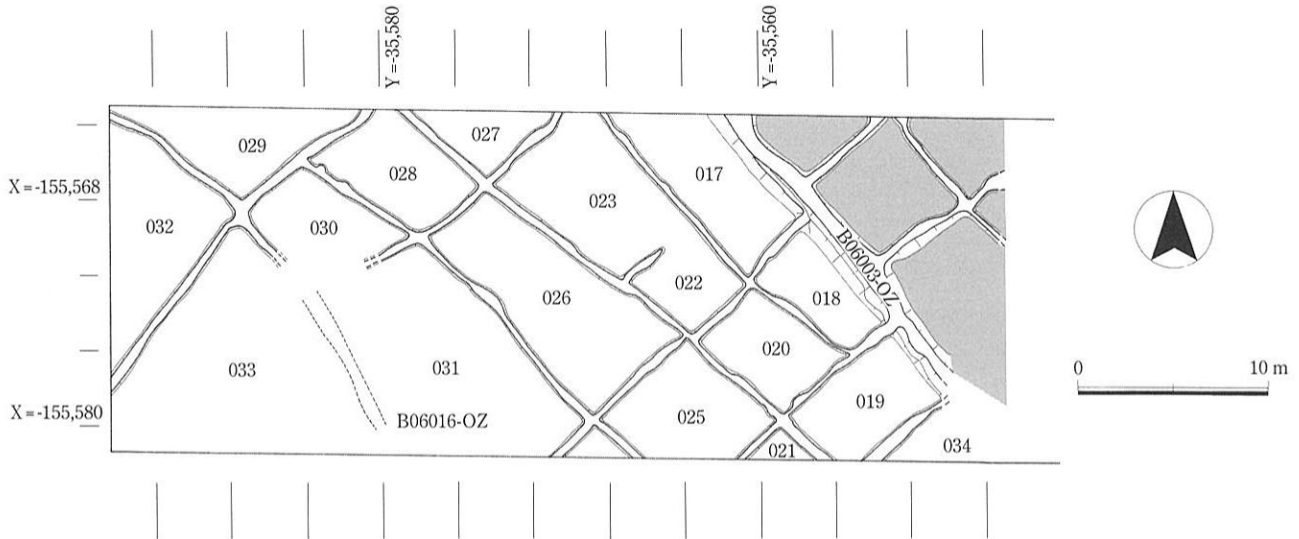


図87 3B区第6面

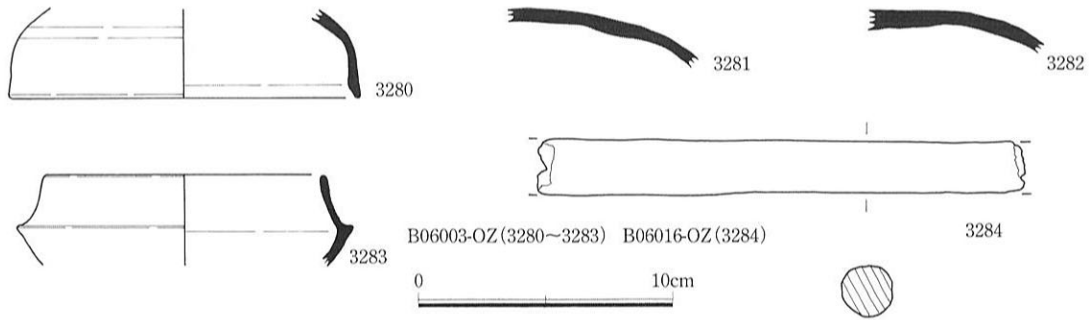


図88 3B区第6面出土遺物

は内湾しながら長く上外方にのびる。初期須恵器の範疇におさまる資料かと思われる。古墳時代中期（TK 216～ON46）に属する。

**小畦畔** 小畦畔の幅30～60cmである。削平のため、高さはほとんど残っていない。最もよく残っている部分で3cm程度である。多くは痕跡を確認したにとどまる。第5面同様、水口は検出されなかった。なお、畦畔B06016-OZの上面から、棒状の木製品（3284）が1点出土した。樹種はスギである。層位関係から古墳時代後期に属すると考えておく。

**水田** これらの畦畔により区画された水田は17筆を確認した（表9）。本面の水田は第5面の水田に比べるとやや不整な長方形をしたものが多く、一筆の大きさも最大のものがB06031-OZの108.1㎡（推）、最小はB06022-OZの16.5㎡と幅がある。ただ全体としては30㎡以下の小規模な水田が多い。

**足跡**

足跡は畦畔を検出した調査区西半部の全面で検出している。第5面よりもむしろ明瞭であった。本面の足跡は判別できないものも多いが、判断できるものについては人が大半を占めている。また牛と思われる偶蹄目の足跡が含まれている。

**【時期】**

本遺構面の時期は第5・6層ならびに遺構面直上出土遺物から、古墳時代後期後半（6世紀後葉～末）と考えられる。

表9 3B区第6面水田一覧

水田	面積	水田面のレベル	備考	水田	面積	水田面のレベル	備考
B06017-OZ	—	8.80~8.87m		B06027-OZ	—	8.71~8.75m	
B06018-OZ	18.7m <sup>2</sup>	8.81~8.83m	一筆を完全に検出	B06028-OZ	29.1m <sup>2</sup> (推)	8.71~8.73m	
B06019-OZ	28.8m <sup>2</sup> (推)	8.82~8.86m		B06029-OZ	—	8.75~8.78m	
B06020-OZ	24.5m <sup>2</sup>	8.77~8.83m	一筆を完全に検出	B06030-OZ	26.6m <sup>2</sup> (推)	8.73~8.75m	
B06021-OZ	—	—		B06031-OZ	108.1m <sup>2</sup> (推)	8.75~8.80m	
B06022-OZ	16.5m <sup>2</sup>	8.78~8.80m	一筆を完全に検出	B06032-OZ	—	8.72~8.82m	
B06023-OZ	47.3m <sup>2</sup> (推)	8.74~8.83m		B06033-OZ	—	8.75~8.78m	
B06025-OZ	36.4m <sup>2</sup> (推)	8.76~8.85m		B06034-OZ	—	8.85~8.85m	
B06026-OZ	60.3m <sup>2</sup>	8.74~8.78m	一筆を完全に検出				

第6層出土遺物

第6層は⑭~⑯層からなる。⑭層は第6面耕作土であり、2.5GY4/1暗オリーブ色粘質土である。先述した通り、本層はB区でのみ確認した。⑮層は3A区西端部ならびに3B区では第7面の水田を覆う土層である。3A・3B区とも7.5Y4/1灰色シルトである。⑯層は3A区でも部分的にしか認められず、調査区西端部Y=-35,552以西に限られている。本層が第7面を覆っていた範囲内では畦畔ならびにその痕跡が明瞭に検出されたことから考えて、新たな水田の造成による削平を免れた部分と考えられる。10Y6/2オリーブ灰色砂である。第6層からの検出遺物では、図89~91の個体を図化できた。

3B区第6層出土遺物 弥生土器(3285)、土師器(3286~3289)、製塩土器(3290)、須恵器(3291~3293)がある。3285は壺の頸部付近で、屈曲部の外面には刻目を加えた突帯がめぐる。弥生時代後期に属する。3286・3287は小形丸底壺で、古墳時代前期(布留式前半)に属する。3288は高杯の口縁部で、内外面ともていねいにヘラミガキされる。古墳時代中期(布留式後半)に属する。3289は甕の口縁部で、内湾し端部は外方につまみ出される。古墳時代中期(布留式後半)に属する。3290は鉢形器形の体部で、古墳時代後期に属する。3291は杯H蓋で、外面の屈曲部には稜がある。古墳時代後期(MT15)に属する。3292は杯H蓋で、外面にはヘラ記号がある。古墳時代後期(TK10か)に属する。3293は杯Hで、ほぼ全容がうかがえる。底体部外面にはヘラ記号がある。古墳時代後期(MT15~TK10か)に属する。

3A区第6層最下部出土遺物 土師器(3294・3295)、須恵器(3296)がある。3294は壺の口縁付近であ

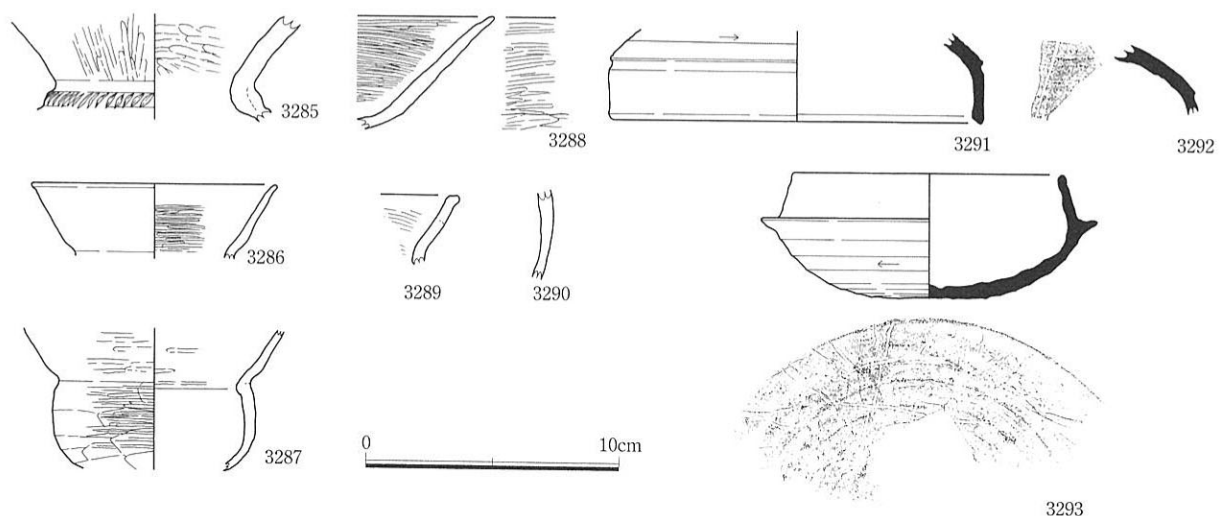


図89 3B区第6層出土遺物

る。古墳時代中期前後に属するか。3295は甕の口縁付近で、口縁端部の内面はわずかに肥厚する。古墳時代前期（布留式前半）に属する。3296は杯Hの口縁付近で、口縁端部の内面には鈍い段を持つ。古墳時代後期（MT85～TK43）に属する。

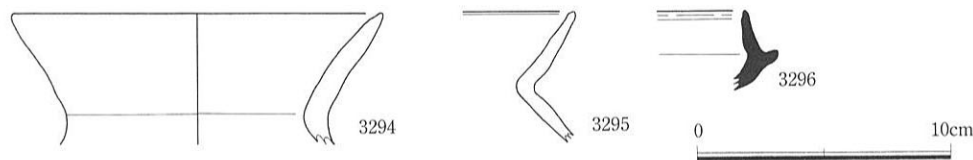


図90 3A区第6層最下部出土遺物

3B区第6層最下部出土遺物 弥生土器（3297・3298）、土師器（3299～3303）、製塩土器（3304）、須恵器（3305）がある。3297は壺の体部で、外面は櫛描き直線文で装飾される。弥生時代中期前葉に属する。3298は長頸壺の口縁部で、端部はやや外面につまみ出される。弥生時代後期に属する。3299は二重口縁壺の口縁部で、外面は櫛描き波状文で装飾される。古墳時代前期初頭に属する。3300は高杯の脚端部である。古墳時代前期に属する。3301は台付き鉢の脚台付近で、生駒山西麓産胎土である。古墳時代前期に属するか。3302は甕の口縁部付近で、口縁端部は内側に肥厚される。古墳時代前期（布留式前半）に属する。3303は甕の体部で、内面に靱殻圧痕が観察できる。古墳時代前期～中期に属する。3304は浅い鉢形器形の口縁部で、外面に粗いタタキ痕がみられる。古墳時代後期後半に属する。3305は杯Hの口縁部付近で、立ち上がり部は内湾しながら長く上外方にのびる。体部外面には手持ちヘラケズリがみられる。初期須恵器の範疇におさまる資料である。古墳時代中期（TK216～ON46）に属する。

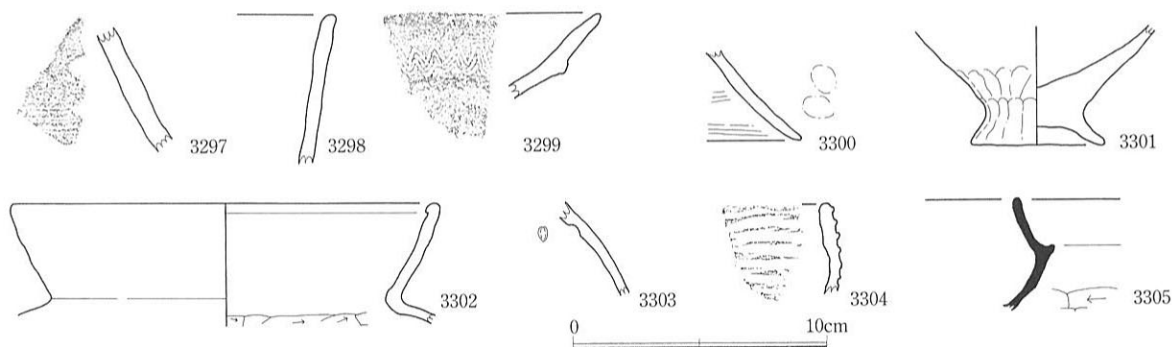


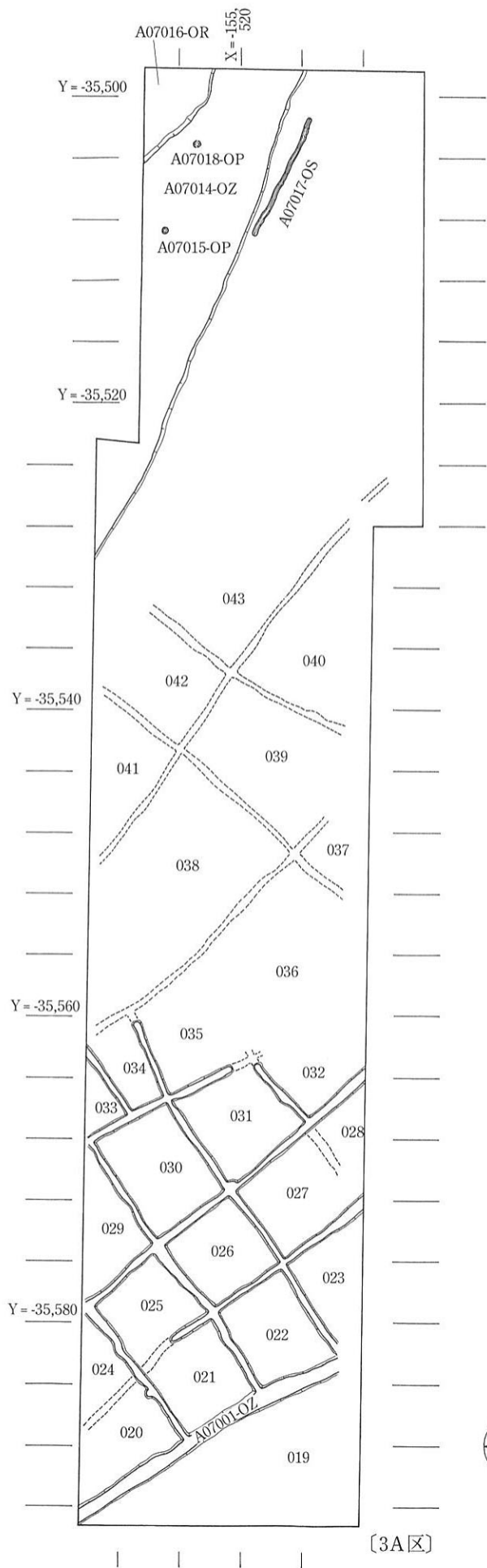
図91 3B区第6層最下部出土遺物

第7面……………古墳時代中期末の水田面

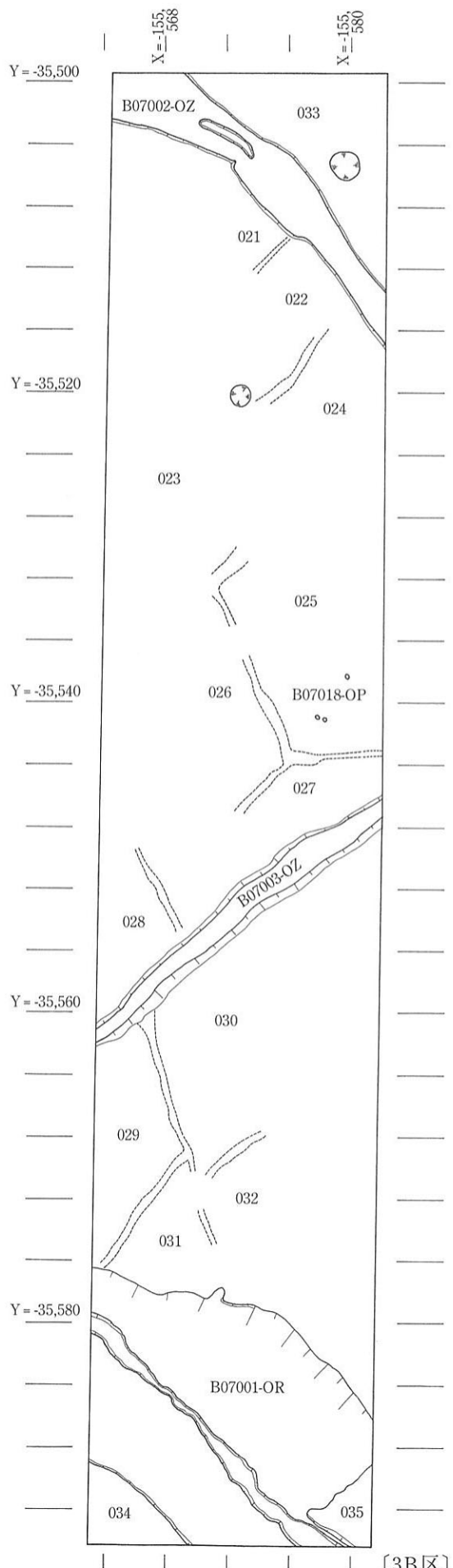
【概要】

本面では小区画水田を検出した。畦畔の遺存状況は第5面に比べて悪かったが、3A・3B区で大畦畔ならびに水路と考えられる比較的規模の大きな流路が検出され、水田の様子が一層明らかになった。畦畔の他にはピット、足跡痕等を検出している。

本面のレベルは3A区がT.P.+8.74～9.07m、3B区がT.P.+8.54～8.94mである。両調査区ともに南東隅が最も高く、北西隅に向かって低くなっている。



[3A区]



[3B区]

图92 3A·3B区第7面  
141

【遺構と遺物】

畦畔

3A・3B区とも畦畔を検出したが、両調査区における畦畔の遺存状況は対照的であった。3A区では調査区全面が削平されていたが、調査区西半部において畦畔の痕跡が明瞭に残っていた。これに対し調査区東半部では削平が著しく、足跡もまばらで、畦畔の位置を推定復元することは困難であったが、北東隅部において削平を免れた大畦畔1条を検出している。3B区では、調査区中央部と調査区東端部でそれぞれ大畦畔を1条検出したが、全体に削平が著しい。足跡の粗密から畦畔の復元を試みたものの、全体図に示しているとおおり、部分的にしか復元できなかった。

**大畦畔** 大畦畔は3A・3B区で2条ずつ検出された。

**A07001-OZ** G63-I05CC・DC・DD・ED・FD・FE・GEで検出した大畦畔である。規模は幅90～137cm、高さは1～3cm程度遺存している。3B区B07003-OZの延長線上に位置しており、一連の畦畔である可能性が高いと考えられる。

**A07014-OZ** G63-I05CR～CT・DT～DY・EU～EY・FW～FYで検出した大畦畔である。規模は十分明らかにできないが、検出した範囲では幅5.0～7.7m、高さは5～10cmである。本大畦畔は図93に示すように第10面A10001-OZ以来、維持されてきたもので、その規模から考えても、調査区周辺における基幹的な大畦畔であったと考えられる。

**B07002-OZ** G63-I05QY・RX・RY・SW・SX・TV～TX・VV・VWで検出した大畦畔である。規模は幅2.0～3.5m、高さ3cmである。検出範囲から推測すると、A07014-OZに直交するものと考えられる。遺物は、土師器の甕(3309)が出土した。体部上半部破片であり、口縁端部は内側に肥厚され、肩部外面には櫛描き波状文がみられる。古墳時代前期(布留式前半)に属する。

**B07003-OZ** G63-I05QJ・QK・RK・RL・SL・SM・TL・TMで検出した大畦畔である。規模は幅1.55～2.8mと

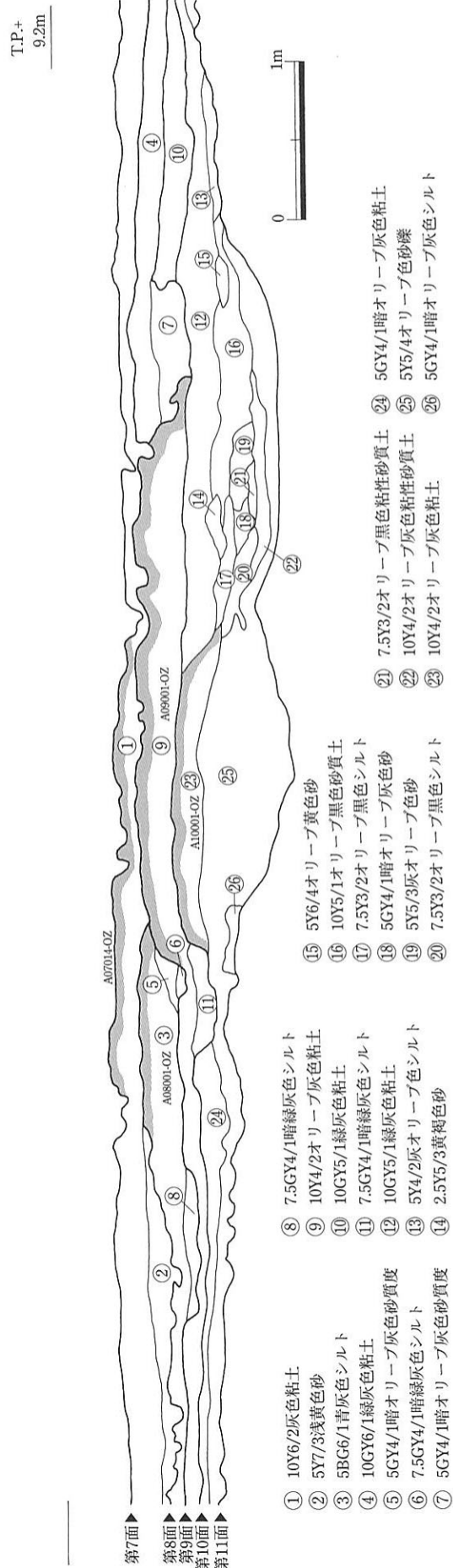


図93 3A区大畦畔の重なり

第6面大畦畔B06003-OZとほぼ同等である。畦畔の高さは西側の水田面のレベルからは23～27cmあり、遺存状況は良好である。本大畦畔はA区大畦畔A07001-OZにつながるものと考えられる。遺物は、弥生土器の壺（3310・3311）が出土した。これらは弥生時代後期（～庄内式期）に属する。

**小畦畔** 小畦畔の規模はおおよそ幅50～80cm程度である。全体に削平が著しいため、良く残っているものでも高さは2～3cm程度である。

**水田** これらの畦畔によって区画された水田は、3A区で25筆検出された（表10）。もっとも畦畔の遺存状態が良く、確実に一筆の水田と認められるのは調査区西端部の16筆である、その中でも規模を計ることのできる、あるいは推測することのできる水田は10筆に限られる。これらの事例から水田の規模を考えると、面積の平均は33.2㎡と、第5・6面の水田に比べて面積が小さいことが指摘できる。平面形もこれまでの水田が北東－南西方向の辺に比べて北西－南東方向の辺が長い長方形のものが多かったのに対して、本面の水田は正方形を呈するものが多い。

表10 3A区第7面水田一覧

水田	面積	水田面のレベル	備考	水田	面積	水田面のレベル	備考
A07019-OZ	—	8.74～8.81m		A07032-OZ	—	8.80～8.82m	
A07020-OZ	—	8.71～8.81m		A07033-OZ	—	8.78～8.84m	
A07021-OZ	28.4㎡	8.79～8.83m	一筆を完全に検出	A07034-OZ	15.5㎡	8.81～8.84m	一筆を完全に検出
A07022-OZ	30.9㎡	8.80～8.83m	一筆を完全に検出	A07035-OZ	32.0㎡(推)	8.81～8.85m	
A07023-OZ	—	8.81～8.83m		A07036-OZ	91.3㎡(推)	8.80～8.86m	
A07024-OZ	—	8.75～8.81m		A07037-OZ	—	8.87～8.88m	
A07025-OZ	27.7㎡	8.80～8.84m	一筆を完全に検出	A07038-OZ	—	8.81～8.87m	
A07026-OZ	27.8㎡	8.78～8.85m	一筆を完全に検出	A07039-OZ	68.4㎡(推)	8.89～8.99m	
A07027-OZ	32.4㎡(推)	8.79～8.82m		A07040-OZ	—	8.87～8.99m	
A07028-OZ	—	8.81～8.82m		A07041-OZ	—	8.82～8.93m	
A07029-OZ	—	8.78～8.82m		A07042-OZ	—	8.94～8.96m	
A07030-OZ	37.3㎡	8.77～8.84m	一筆を完全に検出	A07043-OZ	—	8.91～8.95m	
A07031-OZ	31.9㎡	8.79～8.83m	一筆を完全に検出				

## 流路

本面では流路を2条検出した。いずれも水田の用水路として機能していたと考えられる。

**A07016-OR** G63-I05DY・EYで検出した大畦畔A07014-OZに沿って流れる流路である。調査区北東隅で検出したため、規模は不明である。現状では幅3.15m、深さは10cmである。本流路は非常に浅い上、底も平坦であることから考えて、自然流路ではなく、大畦畔に伴う人工の用水路であるかもしれない。埋土は細かい砂粒を含んだ10Y3/1オリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。

**B07001-OR** G63-I05QB～QF・RB～RF・SB～SF・TB～TEで検出した流路である（図94）。流路中央部の深い部分をB07001b-OR、中央部以外の浅い部分をB07001a-ORとした。中央部のB07001b-OZは幅55～100cm、深さは肩部から底まで約25cmである。埋土は3層からなる。このうち最上層はB07001a-ORと共通で、同時に埋没したことを示している。B07001a-OZは幅14.5mあるのに対し、深さは最深部で約10cmと浅い。また流路の肩もゆるやかで、明確でない部分もあった。また杭列がB07001b-OZに沿って、肩から30～120cm離れた所に打ち込まれている。おそらく流路B07001a-OZとした部分はB07001b-OZが溢れたことにより遺構面が削られた部分であろう。B07001b-OZに沿って打ち込まれた杭列の存在から、B07001b-OZの両肩には規模の大きい畦畔が伴っていたことも可能性として想定される。



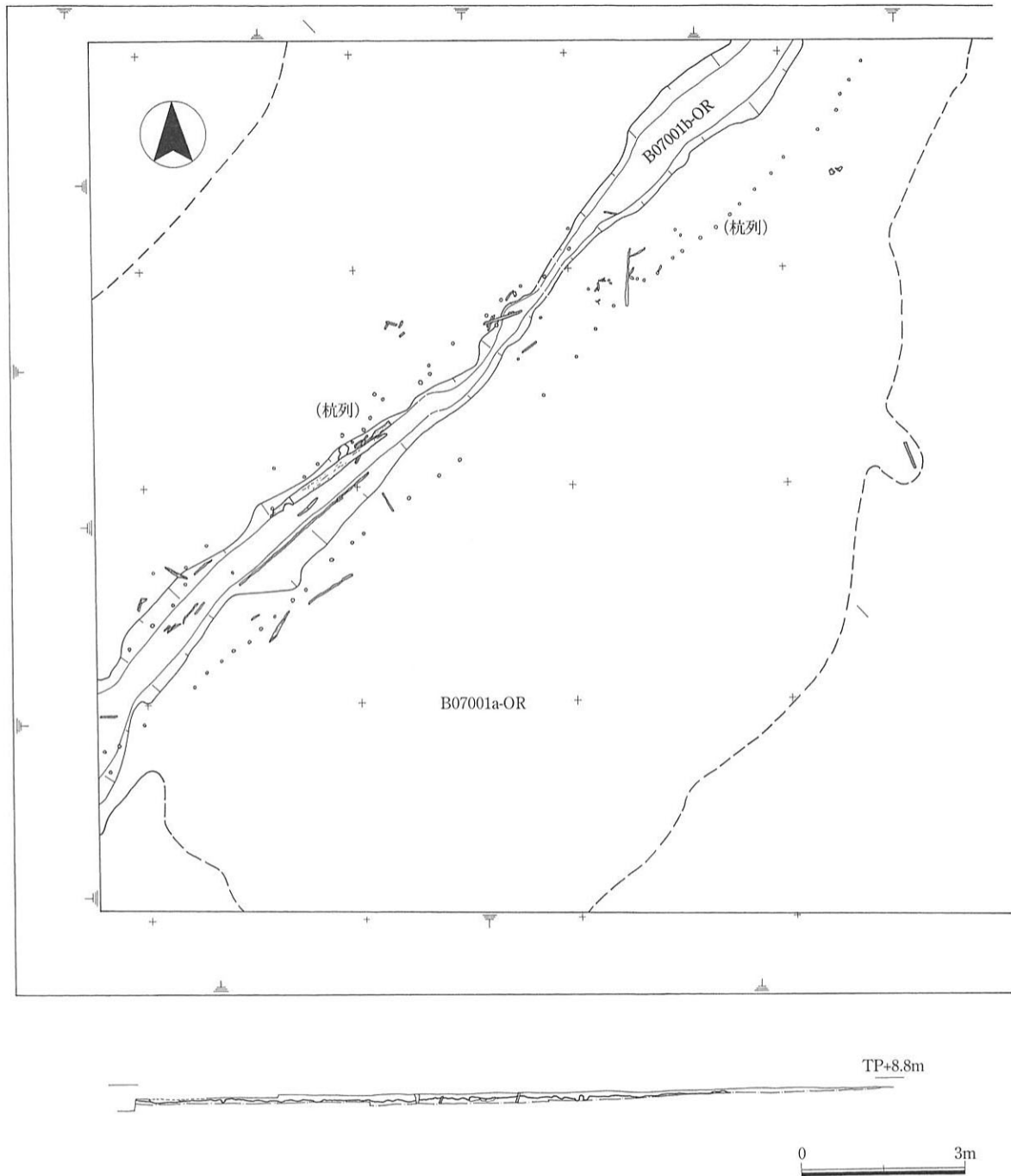


図94 3B区自然流路 B07001-OR

遺物は、縄文土器の深鉢（3312）、弥生土器の壺（3313）、土師器の甕（3314～3316）、須恵器の杯H蓋（3317・3318）、木製品（3319）が出土した。3312は底部付近で、生駒山西麓産胎土である。縄文時代晩期末（長原式）に属する。3313は口縁部で、弥生時代後期に属する。3314～3316は庄内式期に属し、3314・3316は生駒山西麓産胎土である。3317は屈曲部外面の稜は顕著ではないが、口縁端部はやや外反し内面には段を備える。古墳時代中期後葉（TK216）に属する。3318は高杯蓋になる可能性もあるが、外面に稜を備え、口縁部は短い。古墳時代中期（TK73）に属する。3319は板状品で、鋤・鍬等の農具

である可能性が高い。樹種はアカガシ亜属である。共伴土器等から、古墳時代中期に属するとみられる。他に今回は図示できなかったが、B07001b-OR部から、建築部材と推定できる資料を含む、多くの木材が出土した（樹種としてはアカガシ亜属、モミ、サワラ等があり、第4章第3節参照）。

#### 溝

溝は3A区で1条検出している。

A07017-OS G63-I05FW~FY・GYで検出した溝である。長さ8.45m、幅22~28cm、深さは3cm程度である。埋土は10Y3/1オリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。本溝は大畦畔A07014-OZに沿っており用水路と考えられる。

#### ピット

ピットは3A区で2個、3B区で3個検出した。遺物が出土したA07018-OPのみ詳述するが、これは本来第5面の遺構とすべきものである。

A07018-OP G63-I05EYで検出した土器埋納ピットである。平面形は円形で、直径40cm、深さ6cmである。ピットの埋土は2層である。遺物は、ほぼ完形に復元できた杯C（3306）が1個体出土した。3306は内面に放射状暗文を持ち、底部外面はヘラケズリ調整される。飛鳥時代（飛鳥I）に属する。本ピットは、埋土が他のピットと異なっていること、および遺物の出土状況、遺物の時期から考えて、第5面精査時に見落としていた遺構である蓋然性がきわめて高い。

#### 足跡

本遺構面には多数の足跡が残っていた。判別がつく足跡の多くは人である。足跡の埋土は3A区では10Y6/2オリーブ灰色、3B区では7.5GY5/1緑灰色と若干の違いがあるものの、ともに細砂である点は共通している。

#### 第7面出土遺物

3A区において第7面に接した状態で、ほぼ全容が判明する以下の土器が出土した（図95）。これらは本遺構面の時期を推定するうえで重要資料となる。3307は土師器の鉢で、口縁部付近は屈曲部を持ち、内面には放射状暗文が施される。古墳時代中期に属する。3308は土師器の甕で、球形の体部から口縁部が内湾しながら上外方にのびる。古墳時代中期に属する。

また、3B区においては第7面に接した状態で、鉄製品（3320）と木製品（3321・3322）が出土した。3320は鉄製の鋤・鍬先で、流路B7001-OR 東肩東約15mの位置で出土した（写真図版22-3）。幅9.8cm、長さ7.4cm、厚さ2.5cm、重さ124.71gをはかる。鉄板の左右両端を折り曲げた製品で、保存状態も良

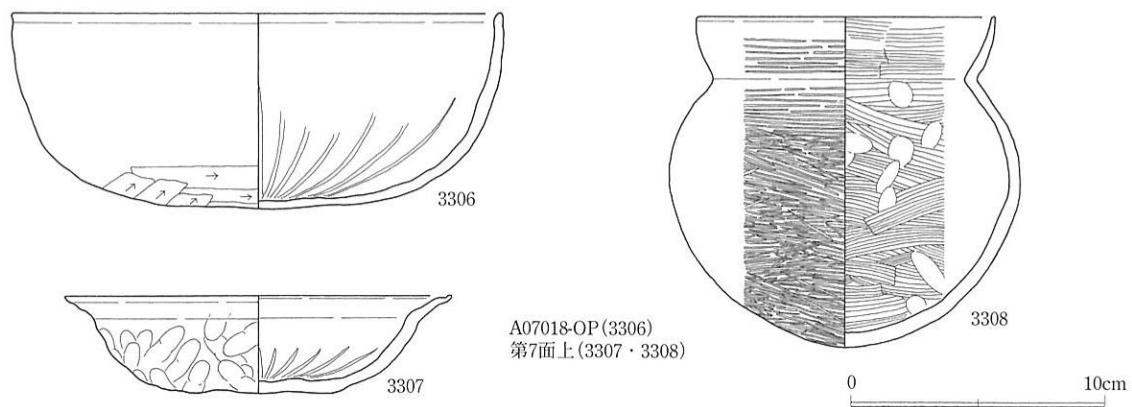


図95 3A区第7面出土遺物

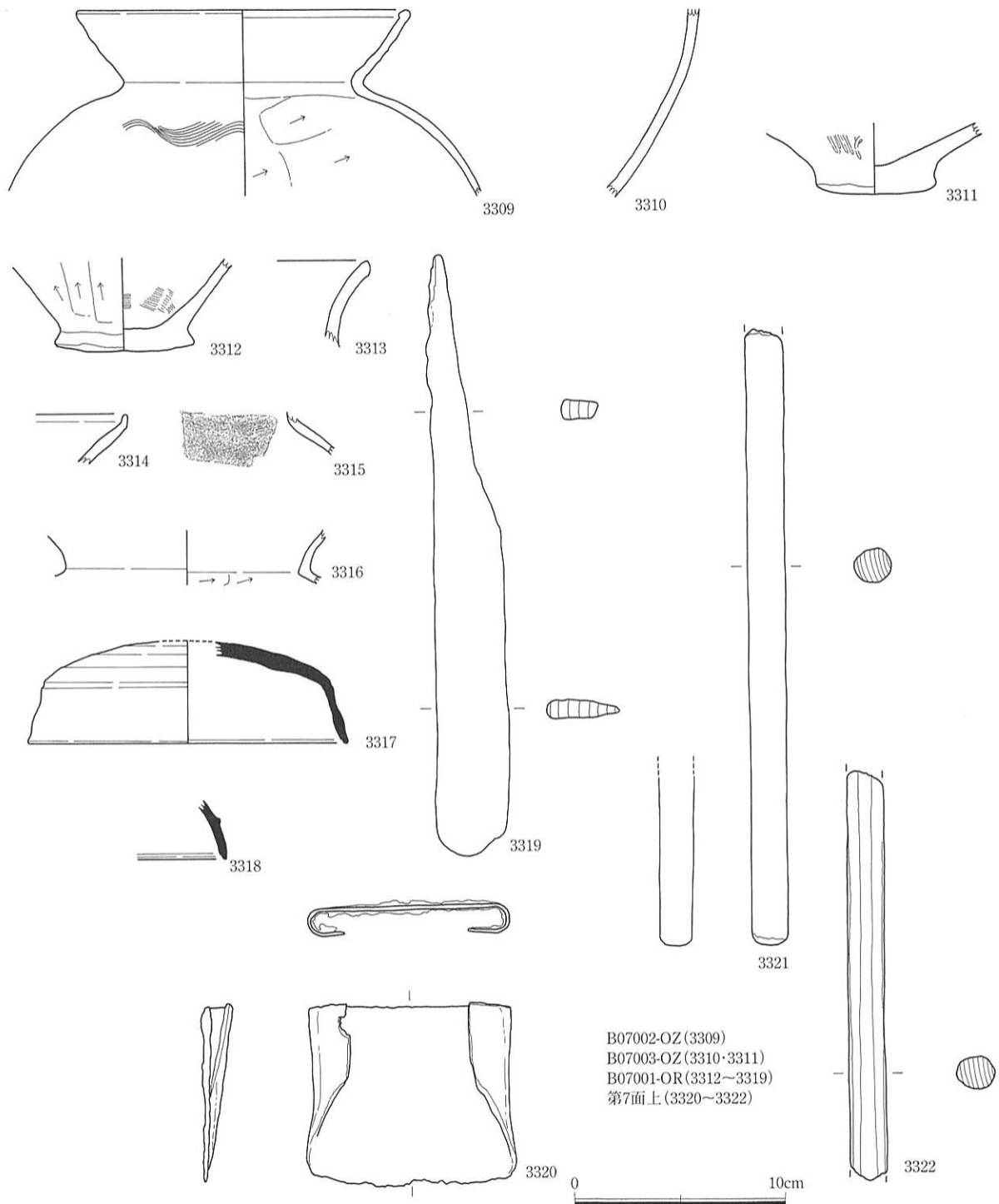


図96 3B区第7面出土遺物

い。冶金学的分析の結果では、鉍石系極軟綱母材を成形加工した後に、強度改善に浸炭焼入れを施した高度な鍛冶技術によって製作されており、朝鮮半島産の炒綱の可能性が高いという（後掲の第4章第6節参照）。遺構面の時期から、古墳時代中期に属する。3321・3322はともに棒状品で同一個体の可能性がある。樹種はともにスギである。

【時期】

本面の時期は、第6層出土遺物および本面直上の出土遺物から、古墳時代中期末（5世紀末）と考えられる。

第7層出土遺物

第7層は⑰層だけである。⑰層は第7面耕作土である。本層からの検出遺物では、図97～99の個体を図化できた。

3 A区第7層出土遺物 弥生土器 (3323～3326)、土師器 (3327・3328) がある。3323は広口壺の口縁部で、端部に刻目がめぐる。弥生時代後期に属する。3324は広口壺ないし器台の口縁部で、外面に凹線文がめぐる。生駒山西麓産胎土である。弥生時代後期に属する。3325は甕の口縁部で、弥生時代後期に属する。3326は甕の体部下半で、生駒山西麓産胎土である。弥生時代後期に属する。3327は甕の口縁部で、端部は上方につまみ上げられる。生駒山西麓産胎土である。庄内式期に属する。3328は鉢で、口縁部は屈曲して上外方にのびる。古墳時代前期に属する。

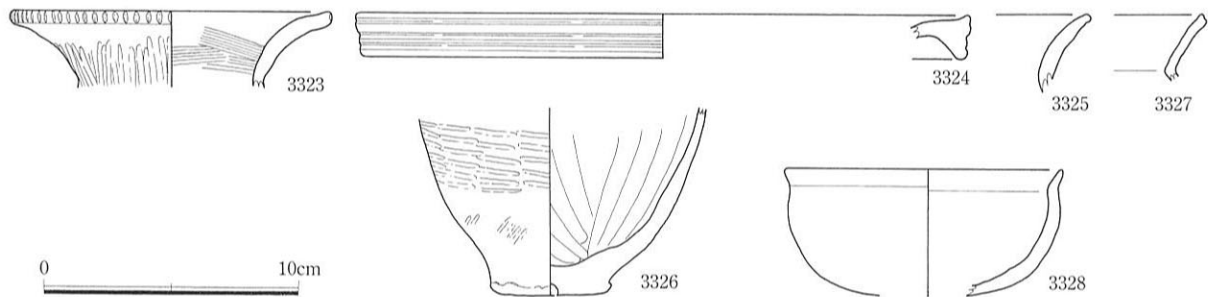


図97 3 A区第7層出土遺物

3 B区第7層出土遺物 弥生土器 (3329・3335・3336)、土師器 (3330～3334) がある。3329は壺の底部で、生駒山西麓産胎土である。弥生時代後期に属する。3335は甕の体部で、内面にヘラケズリがみられる。弥生時代後期に属する。3336は甕で、全容が判明する。生駒山西麓産胎土である。弥生時代後期に属する。3330・3331は小型丸底壺の口縁部付近で、古墳時代前期（布留式）に属する。3332は、壺の口縁部で、内湾して上外方に立ち上がる。庄内式期に属する。3333は壺の体部で、肩部の外面は櫛描き波状文で装飾されるが、全周はしない。庄内式期に属する。3334は高杯の脚端部で、円孔が穿たれる。

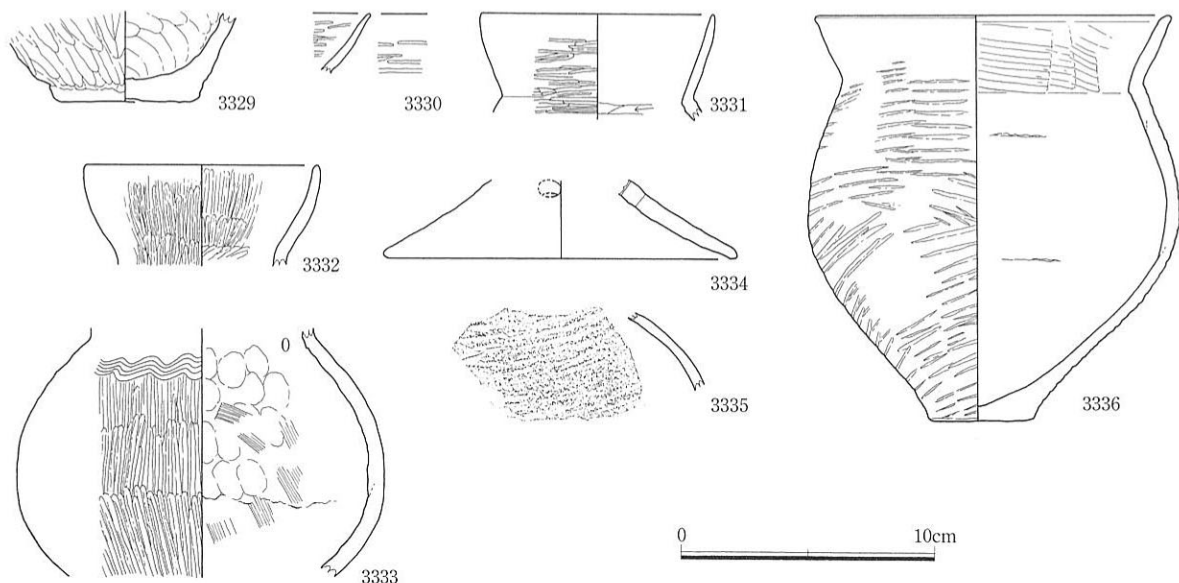


図98 3 B区第7層出土遺物

庄内式期～布留式期に属する。

3B区第7層最下部出土遺物 弥生土器(3337)、土師器(3338～3342)、石製品(3343)がある。3337は広口壺の口縁端部で、竹管文を加えた円形浮文で装飾される。弥生時代後期に属する。3338は二重口縁壺の口縁部で、大形品に復元できる。生駒山西麓産胎土である。庄内式期に属する。3339は高杯の軸部付近で、脚裾には円孔が穿たれる。庄内式期に属する。3340は甕の口縁部で、端部は上外方につまみ出される。弥生時代終末期～庄内期に属する。3341・3342は甕の口縁部で、このうち3342は生駒山西麓産胎土である。ともに庄内式期に属する。3343はサヌカイト製の剝片である。

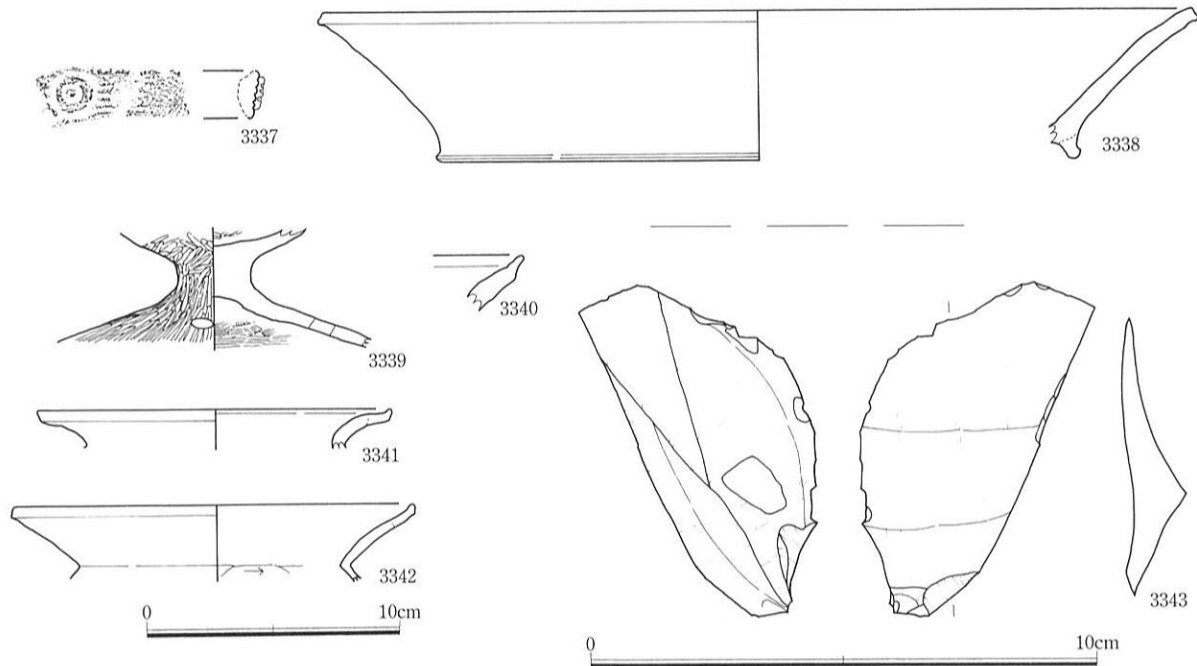


図99 3B区第7層最下部出土遺物

第8面……………古墳時代前期初頭の水田面

【概要】

本面では小区画水田を検出した。全体に削平が著しい。畦畔の他にはピット、足跡痕等を検出した。本面のレベルは3A区がT.P.+8.57～8.92m、3B区がT.P.+8.25～8.85mである。

【遺構と遺物】

畦畔

3A・3B両地区とも畦畔を検出したが、全体に遺存状況は良くなかった。第7面と対照的に、3A区の遺存状況が悪い。本区では、調査区全体が著しく削平を受けているようである。調査区北東隅で大畦畔1条を検出した以外は、まったく畦畔は残っていない。わずかに調査区中央部において、少数の足跡と痕跡から畦畔が復元できる可能性があるにとどまる。大畦畔の脇には溝およびピットが残っているが、溝は途中から極端に細く浅くなっており、削平の著しさを示している。本面では足跡が非常に少ないことも同様の理由であろう。3B区でも削平は著しいが、調査区西端部、中央部、東端部において大畦畔を1条ずつ検出した。また調査区東半部では小畦畔も確認できた。

大畦畔 上述の通り、3A区で1条、3B区で3条検出した。

A08001-OZ G63-I05DU・DV・EVで検出した大畦畔である。第7面A07014-OZの直下に位置している。規

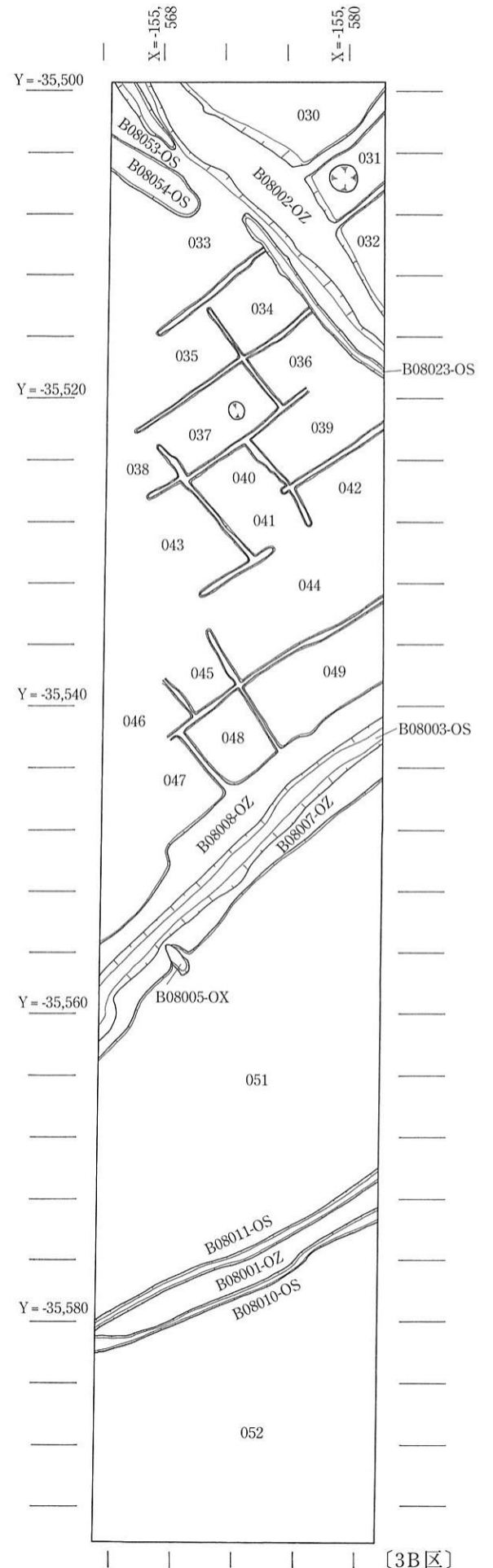
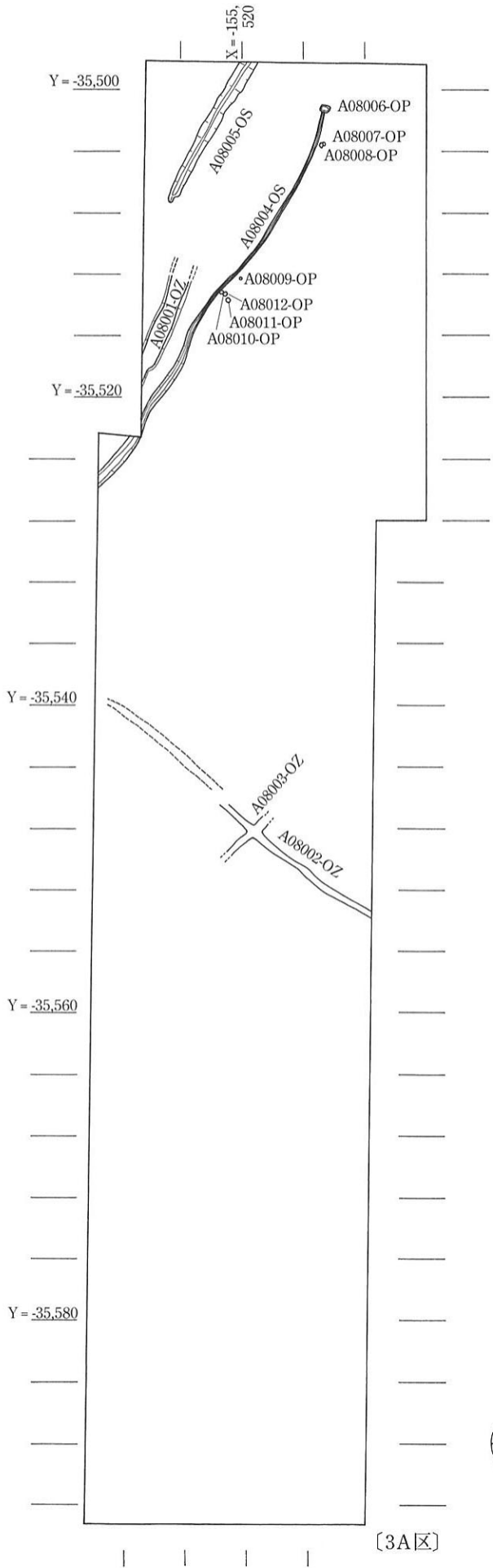


图100 3 A · 3 B区第8面  
149

模は幅1.4mである。高さは5～6cm程度遺存している。両脇には水路と考えられる溝A08005-OSとA08004-OSが伴っている。

B08001-OZ G63-I05QE・QF・RF・SF・SG・TG・UGで検出した大畦畔である。両脇には水路と考えられる溝B08010-OSとB08011-OSが伴っている。畦畔そのものは完全に削平されているが、両溝の間隔である1.2～1.6mを本来の畦畔の幅とみなしてよいと考える。

B08007・08008-OZ B08007-OZはQJ・QK・RK・RL・SL・SM・TM・TN・UNで、B08008-OZはG63-I05QK・QL・QM・RM・RN・SN・SO・TO・UOで検出した大畦畔である。規模はB08007-OZが幅1.4～1.8m、高さは1～2cm、B07008-OZは幅1.3～3.0m、高さは1～2cmが残存している。両畦畔は平行し、間には水路と考えられる溝B08003-OSを挟んでいる。両畦畔とこの溝をもってひとつの大畦畔とみなすことができる。溝を含めた全体の規模は、幅4.5～5.5mである。この大畦畔で特に注目されるのは水路から水田への導水施設が検出されたことである。詳細は後述する。

B08002-OZ G63-I05RX・RY・SW～SY・TV～TX・UVで検出した大畦畔である。第7面の大畦畔B07002-OZの直下に位置している。本面で検出した3条の大畦畔の中では、もっとも遺存状況が良好である。規模は幅2.3～4.5mで、高さは15cm程度遺存している。水路と考えられる溝B08023-OSとA08053-OSが伴っている。遺物は、畦畔内から土師器(3344・3345)が出土した。3344は手焙形で、覆い部は櫛描き波状文と竹管文で装飾される。庄内式期前後に属する。3345は壺の体部で、櫛描き直線文、同列点文、竹管文で装飾される。庄内式期に属する。

**小畦畔** 小畦畔は先述した通り、3B区のみで検出しており、3B区の中でも調査区東半部にあたる、中央部の大畦畔B08007・08008-OZと東端部のB08002-OZによって画された範囲でだけ遺存していた。しかし削平は著しく、多くが痕跡のみを検出したにとどまる。規模は幅30～60cm、高さは良好なものでも1～2cm程度である。

**水田** これらの畦畔によって区画された水田は、3B区で20筆を確認した(表11)。このうち完全に検出されたものは6筆であり、削平のため全体は検出されていないが推定可能なものが他に3筆ある。水田の平面形は正方形ないし長方形である。水田の規模は最小が10.8㎡、最大が38.5㎡(推)であり、平均すると23.3㎡となる。第7面の水田よりもよりにさらに区画が小さいことが指摘できる。

表11 3B区第8面水田一覧

水田	面積	水田面のレベル	備考	水田	面積	水田面のレベル	備考
B08030-OZ	—	8.78～8.80m		B08040-OZ	15.9㎡	8.54～8.60m	一筆を完全に検出
B08031-OZ	—	8.77～8.80m		B08041-OZ	10.8㎡	8.56～8.58m	一筆を完全に検出
B08032-OZ	—	8.67～8.77m		B08042-OZ	—	8.57～8.61m	
B08033-OZ	—	8.61～8.70m		B08043-OZ	—	8.55～8.62m	
B08034-OZ	24.1㎡	8.68～8.71m	一筆を完全に検出	B08044-OZ	—	8.54～8.55m	
B08035-OZ	31.3㎡(推)	8.60～8.67m		B08045-OZ	21.4㎡(推)	8.50～8.54m	
B08036-OZ	19.1㎡	8.65～8.70m	一筆を完全に検出	B08046-OZ	—	8.44～8.50m	
B08037-OZ	29.0㎡	8.65～8.70m	一筆を完全に検出	B08047-OZ		8.43～8.52m	
B08038-OZ	—	8.43～8.50m		B08048-OZ	19.2㎡	8.52～8.55m	一筆を完全に検出
B08039-OZ	38.5㎡(推)	8.60～8.66m		B08049-OZ	—	8.55～8.56m	

## 溝

溝は7条検出した。畦畔に伴う水路6条を報告する。

A08004-OS A区のG63-I05CS・DT・DU・EU・EV・EW・FW・FXで検出した溝である。溝A08005-OSとともに大畦畔A08001-OZに伴う。著しい削平を免れた部分では、規模は幅70～75cm、深さは5cm程度であるが、大半は削平のため、幅15cm程度、深さは1～2cm程度しか残っていない。埋土は10GY5/1緑灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

A08005-OS A区のG63-I05DX・EX・EYで検出した溝である。溝A08005-OSとともに大畦畔A08001-OZに伴う。削平のため途中で途切れている。規模は幅70～100cm、深さは8cmであった。埋土は5BG6/1青灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

B08010-OS B区のG63-I05QE・RF・SF・TF・TGで検出した溝である。溝B08011-OSとともに大畦畔A08001-OZに伴う。規模は幅40～60cm、深さは5cmである。埋土は10Y4/1灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B08011-OS B区のG63-I05QF・RF・SG・TG・THで検出した溝である。溝B08010-OSとともに大畦畔A08001-OZに伴う。規模は幅60～70cm、深さは5cmである。埋土は10Y4/1灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B08003-OS B区のG63-I05QK・QL・RL・RM・SM・SN・TN・TO・UOで検出した溝である。大畦畔B08007-OZとB08008-OZに伴う。規模は幅1.4～1.7m、深さは7～12cmである。埋土は5Y4/1灰色粘質土である。遺物は、弥生土器(3346～3353)、木製品(3354)が出土した。3346は壺の体部で、生駒山西麓産胎土である。3347・3348は鉢である。ともに生駒山西麓産胎土である。3349は鉢の口縁で、生駒山西麓産胎土の可能性はある。3350は高杯の杯部で、生駒山西麓産胎土の可能性はある。3351・3352は高杯の脚部で、3352は生駒山西麓産胎土である。3353は甕の底部で、内面には炭化物が厚く付着する。いずれも弥生時代後期後半(～その直後期)に属する。3354は用途不明品で、板棒状品の側縁に切り込みを備える。樹種はヒノキ科。共伴土器等から弥生時代後期後半(～その直後期)に属する。

B08023・08053-OS B区のG63-I05QY・RY・SW・TU・TW・UUで検出した溝である。大畦畔B8002-OZに伴う。削平のため両者は途切れているが一連の溝であると考えられる。規模は幅50～110cm、深さは5～10cmである。埋土は5Y4/1灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

## 導水施設

3 B区では水路と水田を結ぶ導水施設を検出した(図101)。本面の導水施設は削平は受けているものの、その具体的な姿が窺える良好な資料である。この導水施設は二つの部分からなっている。水路である溝B08003-OSの流れをせき止めるように設置された「しがらみ」と大畦畔B08007-OZに設置された導水管部である。

B08006-OX G63-I05QKで検出した「しがらみ」である。溝B08003-OSと両脇の大畦畔にかけて杭が打ち込まれているのを確認した。杭の太さは直径5～10cmである。おそらくこのしがらみによって水をせき止めて水位を上げ、導水管からの取水を容易にしたものと考えられる。

B08005-OX G63-I05RK・RLで検出した導水管部である(写真図版23-3)。しがらみB08006-OXの南3.5mにあたり、溝B08003-OSの西側の大畦畔B08007-OZに設けられていた。畦畔が削平されているために、ほぼ露出した状態で検出している。底面上の導水管の規模は長さ70cm、直径20～25cmである。ほぼ水平に据えられていた。導水管の固定および畦畔の補強のために、周囲には杭が打ち込まれている。特に水田への出水口付近に多く打ち込まれているのは水流の影響を考慮してのことであろう。事実、出



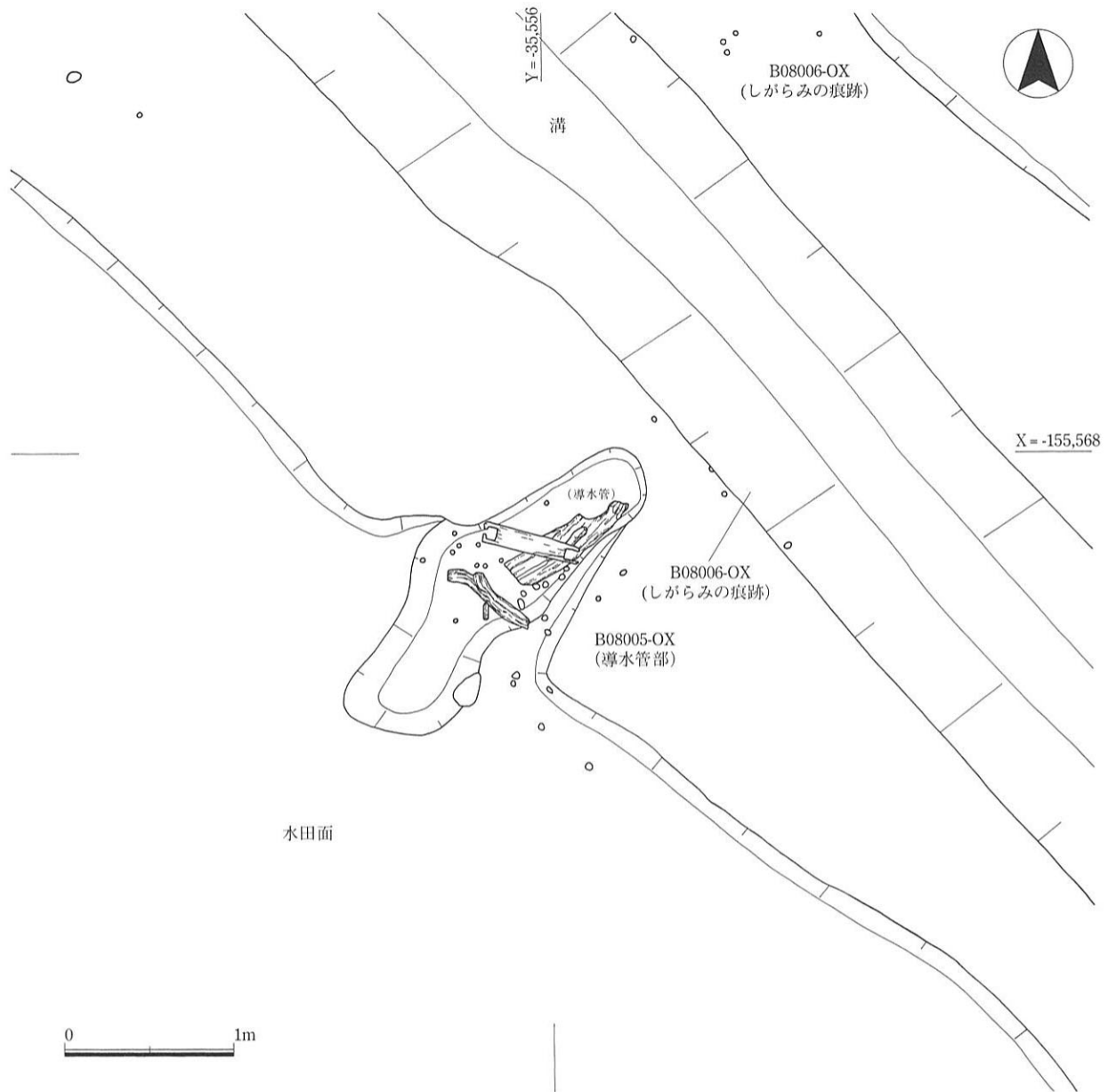


図101 3B区第8面導水施設 B08005・08006-OX

水口付近は水田面が幅50cm、長さ130cm、最深部で約10cm程度えぐれている。出排水口から15cm離れたところに長さ60cm、径10cmほどの木が横倒しの状態で杭で固定されていたが、水流による水田面のえぐれをできるだけ防ぐために、水流の勢いを弱めるよう設けられたものと考えられる。なお導水管の上に両端に臍孔をあけた板状木製品（3357）が載っていた。導水管の上面を保護するために転用されたものと思われる。遺物は、弥生土器（3355・3356）と上述した木製品（3357）がある。3355・3356は甕の体部で、弥生時代後期に属する。3357は幅約12cm、長さ約54cm、厚さ約2cmの板状品の短辺近くに方形孔を穿った製品で、孔の一边にあたる部分は両端とも欠損している。腰掛けの座板の可能性が考えられる。樹種はスギである。同伴遺物や溝B08003-OSの出土遺物等から推定して弥生時代後期後半に属する。

ピット

ピットは7個を検出した。いずれも3A区であり、溝A08004-OSに沿って分布している。柱痕跡が認められるものはなかった。また遺物は出土しなかった。

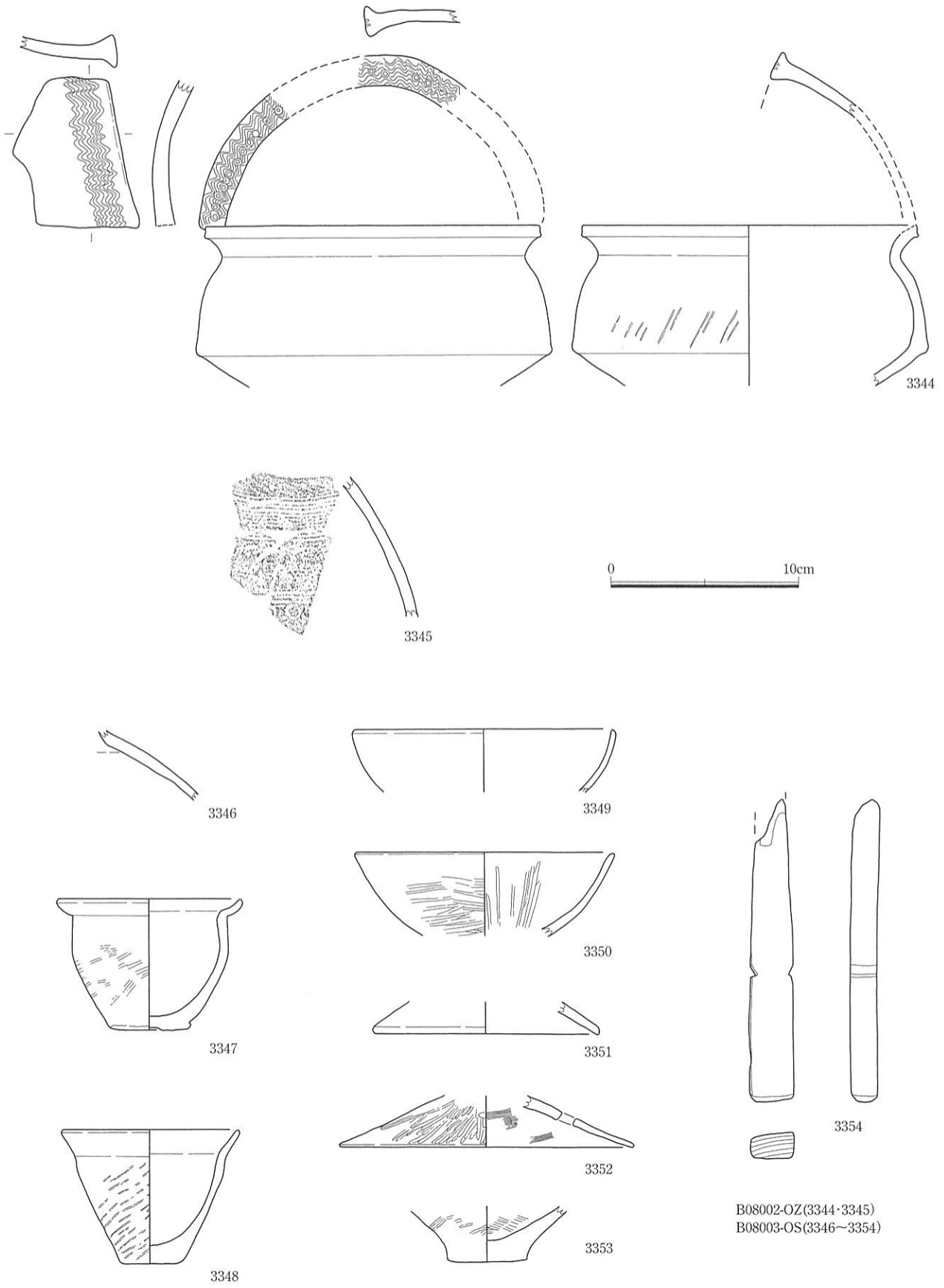


图102 3 B区第8面出土遺物(1)

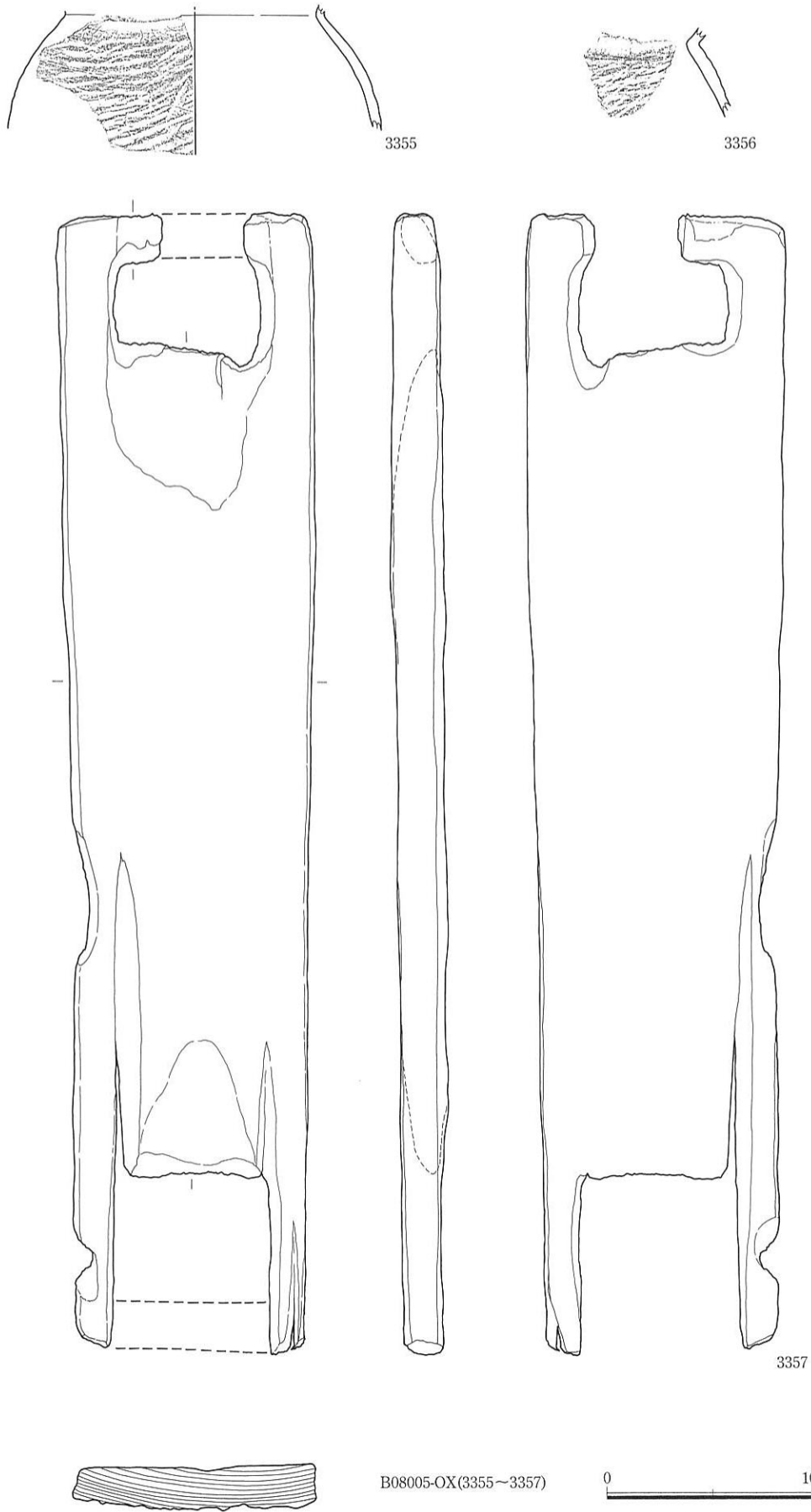


図103 3B区第8面出土遺物(2)

## 足跡

本面では足跡は非常に少なかった。3 A区では主に調査区中央部と調査区北東隅部、3 B区では小区画水田を検出した調査区東半部に限られる。確認された範囲でも足跡の密度は低い。なお足跡は明瞭なものについては人に限られ、動物のものは確認できなかった。

## 【時期】

本面の時期は、第7層から出土した遺物が庄内式土器を下限とすることから、古墳時代前期初頭であると考えられる。

## 第8層出土遺物

第8層は⑩層に相当する。本層は第8面耕作土である。本層からの検出遺物では、図104～106の個体を図化できた。

3 A区第8層出土遺物 弥生土器(3358)、土師器(3359)がある。3358は長頸壺の口縁部で、端部は先すぼまりにおわる。弥生時代後期前半に属する。3359は甕の口縁部で、生駒山西麓産胎土である。庄内式期に属する。

3 B区第8層出土遺物 木製品(3360・3361)がある。ともに棒状品で、同一個体の可能性が高い。樹種はアスナロである。

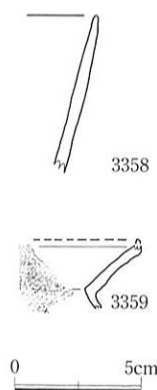


図104 3 A区  
第8層出土遺物

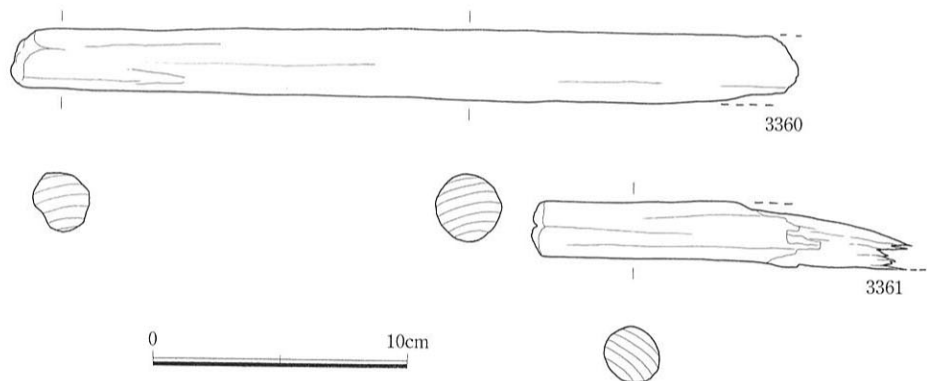


図105 3 B区第8層出土遺物

3 B区第8層最下部出土遺物 弥生土器(3362・3363)がある。3362は長頸壺の口縁で、端部はやや外反する。弥生時代後期前半に属する。3363は甕の口縁付近で、口縁端部は上下にやや肥厚される。弥生時代中期前半に属する。

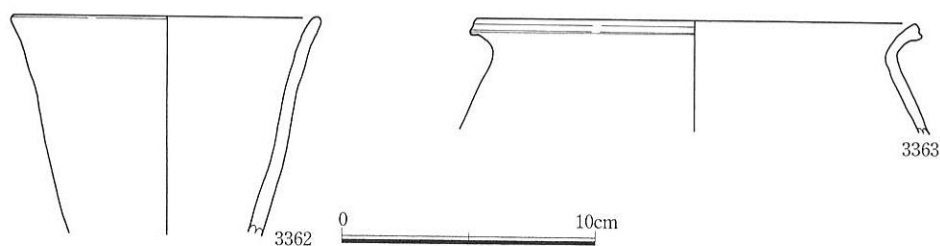


図106 3 B区第8層最下部出土遺物

第9面……………古墳時代前期初頭の水田面

【概要】

本面では小区画水田を検出した。畦畔の他には溝、杭列、足跡痕等を検出した。

本面のレベルは3A区がT.P.+8.40~8.78m、3B区がT.P.+8.18~8.45mである。

【遺構と遺物】

畦畔

3A・3B両地区とも畦畔を検出した。全体に遺存状況は悪く、調査区のほぼ全面が削平されている。しかし畦畔の痕跡は認められたため、水田区画をある程度復元することは可能であった。

**大畦畔** 3A区では、調査区北東隅で用水路と考えられる溝4条を伴う大畦畔を1条を検出した。3B区では調査区西端部、中央部、東端部において大畦畔を1条ずつ検出した。西端部の大畦畔B09001-OZと中央部の大畦畔B09007・09008-OZの間は畦畔も完全に削平されていたが、部分的に痕跡のみは確認することができた。

A09001-OZ G63-I05DU・DV・EV・EW・FW~FY・GX・GYで検出した大畦畔である。規模は幅1.3~3.4m、高さは16~21cmである。本大畦畔の両脇には並行して流れる溝が2条ずつ伴う。

B09001-OZ G63-I05QE・QF・RE・RF・SF・SG・TF・TGで検出した大畦畔である。規模は幅0.8~1.9m、高さは削平のため残っていない。両脇には並行して流れる溝が1条ずつ伴う。

B09002-OZ G63-I05UU・UV・TV~TX・SW~SY・RX・RYで検出した大畦畔である。規模は幅1.2~2.1m、高さは20~32cmである。本大畦畔の南側に沿って杭列が検出されているが、これは後述する。遺物は、畦畔内から弥生土器もしくは土師器(3365~3367)が出土した。3365は甕の口縁部付近で、生駒山西麓産胎土である。庄内式期に属する。3366は甕の口縁部である。弥生時代後期後半~庄内式期に属する。3367は甕の体部である。弥生時代後期後半~庄内式期に属する。

B09007・09008-OZ 3B区中央部で検出した並行する2条の大畦畔である。両畦畔の間には溝B09003-OSが流れている。B9007-OZはQK・QL・RK・RL・SL~SN・TM~TO・UN・UOで検出し、規模は幅0.5~1.0m、高さ5cmである。B9008-OZはQM・RM・RN・SN・SR・TO・TP・UO・UPで検出し、規模は幅1.1~2.0m、高さは5cmである。両畦畔と溝B09003-OS全体が大畦畔として機能していたと考えられる。

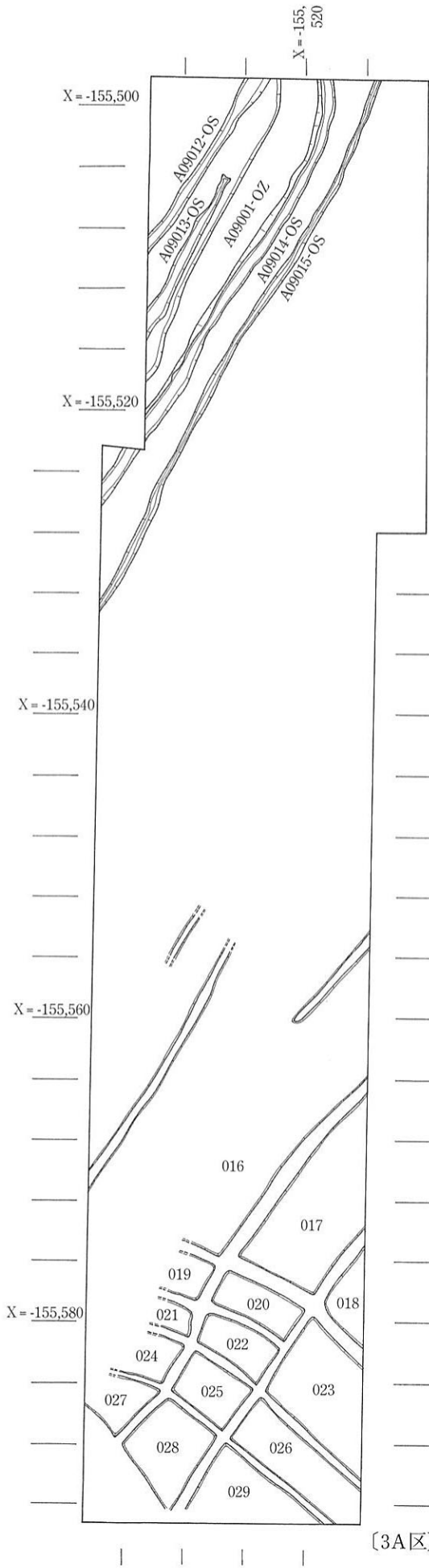
**小畦畔** 小畦畔は削平の影響が著しい。3A区では特に削平が著しく、ほとんど畦畔の高まりは残っていなかった。図示した小畦畔は、わずかに確認できた痕跡を頼りに復元に努めたものであるが、畦畔の幅が約80cm前後とかなり広く、痕跡からの復元には不安も残した。また調査区西半部でしか復元はできなかった。3B区でも畦畔の残りは悪かったが、削平されたものも明瞭に痕跡が残っていた。畦畔の規模は幅50~60cm、高さは良く残っているもので約5cm、多くは1~2cm程度であった。

**水田** これらの畦畔によって区画された水田は、3A区で14筆、3B区で19筆を確認した(表12)。このうち完全に検出されたものは3A区で4筆、3B区で5筆の計9筆である。3B区では全体は検出されていないが推定可能な水田が他に2筆ある。面積は最小が11.4㎡、最大が46.7㎡(推)、平均すると26.8㎡である。水田の平面形は長方形のものが多く、なお3B区では調査区東端部の区画がやや変則的であるが、本面より下層では顕著にこの傾向がみられる。

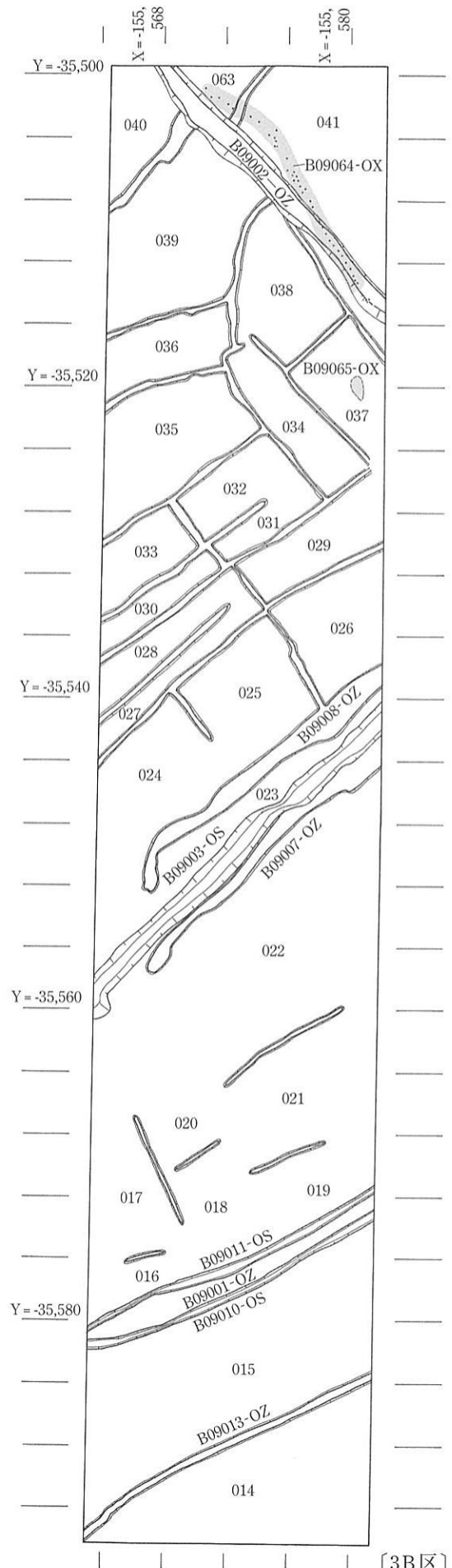
溝

溝は3A区で4条、3B区で3条の計7条を検出した。いずれも大畦畔に伴う用水路と考えられる。

A09012-OS G63-I05DW・DX・EX・EYで検出した溝である。溝A09013~09015-OSとともに大畦畔A09001-



[3A区]



[3B区]

图107 3 A · 3 B区第9面  
157

表12 3A・3B区第9面水田一覧

水田	面積	水田面のレベル	備考
A09016-OZ	—	8.48～8.50m	
A09017-OZ	—	8.48～8.52m	
A09018-OZ	—	8.48m	
A09019-OZ	—	8.47～8.51m	
A09020-OZ	12.1㎡	8.48～8.51m	一筆を完全に検出
A09021-OZ	—	8.47～8.51m	
A09022-OZ	11.4㎡	8.50～8.52m	一筆を完全に検出
A09023-OZ	—	8.48～8.52m	
A09024-OZ	—	8.47～8.58m	
A09025-OZ	13.3㎡	8.48～8.50m	一筆を完全に検出
A09026-OZ	—	8.50～8.52m	
A09027-OZ	—	8.52～8.58m	
A09028-OZ	22.2㎡	8.40～8.42m	一筆を完全に検出
A09029-OZ	—	8.50～8.52m	
B09024-OZ	—	8.33～8.38m	
B09025-OZ	46.7㎡	8.41～8.46m	一筆を完全に検出
B09026-OZ	—	8.39～8.45m	

水田	面積	水田面のレベル	備考
B09027-OZ	—	8.36～8.38m	
B09028-OZ	—	8.34～8.38m	
B09029-OZ	38.4㎡(推)	8.42～8.46m	
B09030-OZ	—	8.36～8.45m	
B09031-OZ	11.9㎡	8.43～8.46m	一筆を完全に検出
B09032-OZ	23.6㎡	8.44m	一筆を完全に検出
B09033-OZ	—	8.40～8.45m	
B09034-OZ	31.8㎡	8.50～8.54m	一筆を完全に検出
B09035-OZ	—	8.48～8.54m	
B09036-OZ	—	8.50～8.52m	
B09037-OZ	41.3㎡(推)	8.45～8.50m	
B09038-OZ	41.6㎡	8.60m	一筆を完全に検出
B09039-OZ	—	8.45～8.48m	
B09040-OZ	—	8.41～8.46m	
B09041-OZ	—	8.62～8.68m	
B09063-OZ	—	8.45m	

OZに伴う。規模は幅58～113cm、深さは4～7cm程度である。埋土は7.5GY4/1暗緑灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

A09013-OS G63-I05DV・DW・EW・EXで検出した溝である。溝A09012・09014・09015-OSとともに大畦畔A09001-OZに伴う。規模は幅41～109cm、深さは4～14cm程度である。削平のためか、途中で途切れている。埋土は5GY4/1暗オリーブ灰色砂質土である。遺物は出土しなかった。

A09014-OS G63-I05CS・CT・DT・DU・EU～EW・FW～FY・GYで検出した溝である。溝A09012・09013・09015-OSとともに大畦畔A09001-OZに伴う。規模は幅44～96cm、深さは6～15cm程度である。埋土は5GY4/1暗オリーブ灰色砂質土である。遺物は出土しなかった。

A09015-OS G63-I05CR・DR～DT・ET～EV・FV・FW・GW・GYで検出した溝である。溝A09012～09014-OSとともに大畦畔A09001-OZに伴う。規模は幅23～71cm、深さは2～7cm程度である。埋土は10Y4/1灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

B09003-OS G63-I05QK・QL・RL・RM・SM・SN・TN・TO・UOで検出した大畦畔B09007・09008-OZに伴う溝である。規模は幅1.45～1.7m、深さは7～12cm程度である。埋土は7.5Y5/1灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B09010-OS G63-I05QE・RE・RF・SF・TF・TGで検出した溝である。溝B09011-OSとともに大畦畔B09001-OZに伴う。規模は幅40～65cm、深さは4～8cm程度である。埋土は10Y3/1オリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B09011-OS G63-I05QF・RF・SF・SG・TGで検出した溝である。溝B09010-OSとともに大畦畔B09001-OZに伴う。規模は幅40～70cm、深さは5～8cm程度である。埋土は10Y3/1オリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。

#### 杭列

3B区では杭列を2カ所検出した。

B09064-OX G63-I05RY・SX・SY・TW・TX・UV・TVで検出した杭列である。大畦畔B09002-OZに沿って打ち込まれている。杭の大きさは現存する長さ30～50cm、直径は5～8cm程度である。

B09065-OX G63-I05UT・UUで検出した杭列である。水田B09037-OZのほぼ中央に打ち込まれている。杭の大きさはB09064-OX とほぼ同じである。部分的な検出にとどまっており、詳細は不明である。

#### 足跡

本面では足跡は非常に少なかった。3 A区では主に調査区中央部と調査区北東隅部、3 B区では小区画水田を検出した調査区東半部に限られる。確認された範囲でも足跡の密度は低い。なお足跡は明瞭なものについては人に限られ、動物のものは確認できなかった。

#### 第9面出土遺物

3 A区において第9面に接した状態で、ほぼ全容が判明する土器(3364)を検出した。これは本遺構面の所属する時期を推定するうえで重要資料となる。3364は高杯で、杯部はやや内湾しながらもおおむね直線状に上外方にのびる。脚部は外反しながら端部にいたり、円孔が全周に4個穿たれる。弥生時代後期終末に属する。

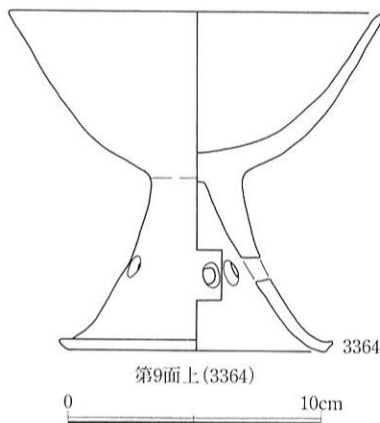


図108 3 A区第9面出土遺物

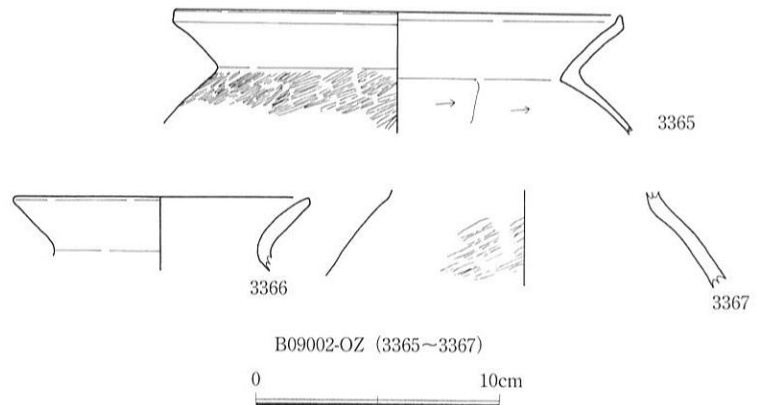


図109 3 B区第9面出土遺物

#### 【時期】

本面の時期は、第8層ならびに本面直上から出土した遺物が弥生後期～庄内式土器を下限とすることから、古墳時代前期初頭であると考えられる。第8面にかなり近接した時期と位置づけることができよう。

#### 第9層出土遺物

本層は⑬層と⑭層からなる。⑬層は第9面耕作土である。⑭層は第10面を覆う土層だが、3 B区でのみ堆積が認められた。本層からの検出遺物では、図110～112の個体を図化できた。

**3 B区第9層出土遺物** 弥生土器(3368～3372)がある。3368は鉢の口縁付近で、口縁部は外面に肥厚され、外面全体に櫛描き簾状文、同列点文、刺突文で装飾される。生駒山西麓産胎土である。弥生時代中期後半に属する。3369は鉢の口縁部付近である。弥生時代後期に属する。3370は高杯の軸部で、円孔が穿たれる。弥生時代後期前半に属する。3371は高杯の口縁部である。口縁端部の開きは小さく、端部からやや下がった位置に屈曲部を持つ。口縁部外面にはヘラミガキが波状に施される。弥生時代後期前半に属する。3372は甕の体部で、弥生時代中期後半の属するか。



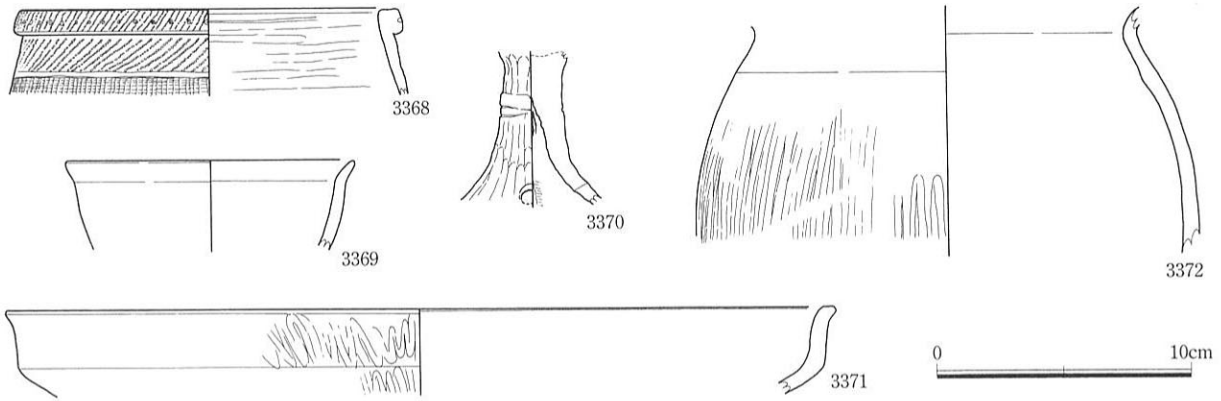


図110 3B区第9層出土遺物

3A区第9層最下部出土遺物 弥生土器（3373・3374）がある。3373は壺の頸部である。生駒山西麓産胎土である。弥生時代後期前半に属する。3374は壺の体部でおそらく肩部に近い部位と思われる。外面に竹管文がみられる。生駒山西麓産胎土である。弥生時代後期に属する

3B区第9層最下部出土遺物 弥生土器（3375）がある。壺の体部で、外面には黒色物質が塗布される。小片のため時期決定は難しいが弥生時代前期に属する可能性がある。

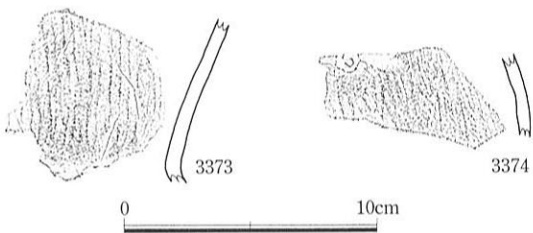


図111 3A区第9層最下部出土遺物

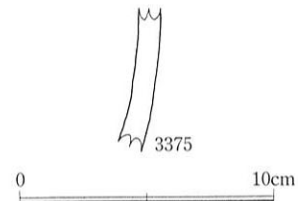


図112 3B区第9層最下部出土遺物

第10面.....弥生時代後期前半の水田面

【概要】

本面では小区画水田を検出した。畦畔の他には溝、土坑、ピット、足跡を検出した。

本面のレベルは3A区がT.P.+8.29~8.65m、3B区がT.P.+8.18~8.42mである。

【遺構と遺物】

畦畔

3A・3B両地区とも畦畔を検出した。3A区では、調査区全体が著しく削平を受けていた。しかし調査区北東隅で用水路と考えられる溝4条を伴う大畦畔を1条を検出した他、西端部でも大畦畔を含む畦畔の痕跡を確認している。3B区では調査区のほぼ全面で畦畔を検出し、全体像が明らかになった。調査区東半部と西端部の畦畔の遺存状況は比較的良好であり、一定程度の高まりを確認できるものがあった。また削平の影響が大きい調査区中央部の西よりの地点でも畦畔の痕跡を確認できた。

大畦畔 本面では3A区で2条、3B区で1条を検出している。

A10001-OZ G63-I05DU・DV・EV~EX・FW~FYで検出した大畦畔である。規模は幅1.5~2.7m、高さは16~20cmである。本大畦畔の両脇には並行して流れる溝が2条ずつ伴う。この大畦畔は下層の第11面

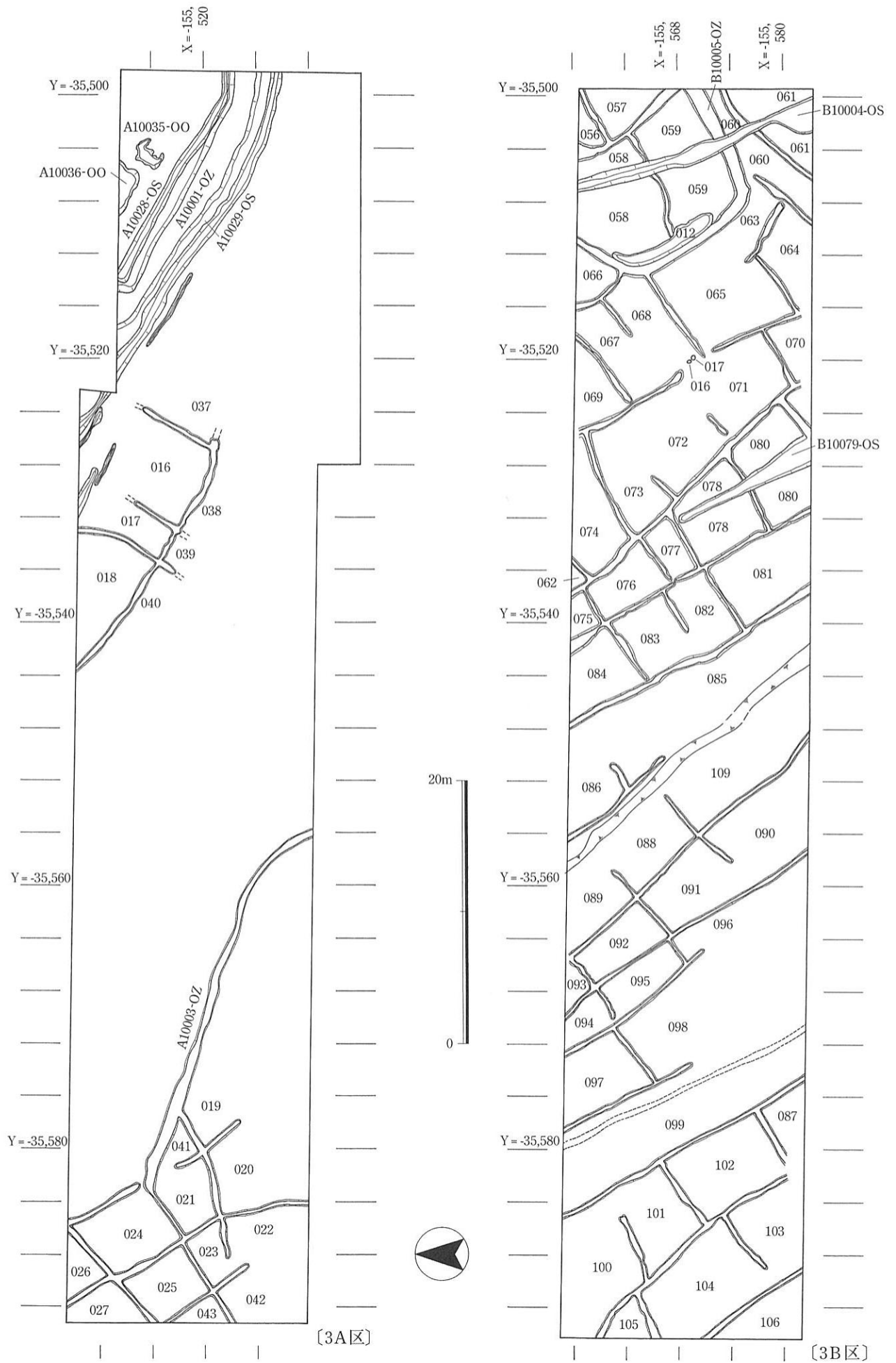


图113 3 A · 3 B区第10面  
161

の流路 A11001-OR が埋没した際の砂礫層の高まりを利用してつくられていた。

A10003-OZ G63-I05DE・EE～EH・FH～FK・GKで検出した大畦畔である。規模は幅50～110cm、高さはほとんど残っていない。本大畦畔は途中で小畦畔へと連続し、途切れてしまう格好である。本大畦畔の直下には第11面の流路A11002-ORの肩の高まりを検出したが、本大畦畔が小畦畔へと連続する部分の直下ではこの肩の高まりが流路の溢水によって削平されていることを確認した。したがって本畦畔は第11面の流路 A11002-OR の肩の高まりをそのまま踏襲してつくられていることが判明した。

B10005-OZ G63-I05QV・QW・RV・SV～SY・TW・TXで検出した大畦畔である。本大畦畔は他の大畦畔と異なり、環状に巡るものである。規模は幅90～110cm、高さ1～2cmである。

小畦畔 小畦畔は削平の影響が著しい。特に3A区では削平のため、ほとんど畦畔の高まりは残っていない

表13 3A・3B区第10面水田一覧

水田	面積	水田面のレベル	備考	水田	面積	水田面のレベル	備考
A10016-OZ	—	8.43～8.51m		B10073-OZ	19.2㎡	8.25～8.27m	一筆を完全に検出
A10017-OZ	—	8.45～8.47m		B10074-OZ	—	8.24m	
A10018-OZ	—	8.42～8.46m		B10075-OZ	—	8.24～8.25m	
A10019-OZ	—	—		B10076-OZ	16.9㎡	8.23～8.26m	一筆を完全に検出
A10020-OZ	—	—		B10077-OZ	8.7㎡	8.24～8.27m	一筆を完全に検出
A10021-OZ	15.9㎡	8.30～8.32m	一筆を完全に検出	B10078-OZ	30.5㎡	8.27～8.32m	一筆を完全に検出
A10022-OZ	—	—		B10080-OZ	—	8.32～8.35m	
A10023-OZ	9.0㎡	8.29～8.31m	一筆を完全に検出	B10081-OZ	—	8.30～8.41m	
A10024-OZ	29.7㎡	8.30～8.36m	一筆を完全に検出	B10082-OZ	17.3㎡	8.30～8.41m	一筆を完全に検出
A10025-OZ	19.8㎡(推)	8.27～8.29m		B10083-OZ	21.3㎡	8.27～8.36m	一筆を完全に検出
A10026-OZ	—	8.28～8.34m		B10084-OZ	—	8.26～8.29m	
A10027-OZ	—	8.26～8.27m		B10085-OZ	—	8.27～8.37m	
A10037-OZ	—	—		B10086-OZ	—	8.27～8.29m	
A10038-OZ	—	—		B10087-OZ	—	8.25m	
A10039-OZ	—	—		B10088-OZ	35.8㎡	8.30～8.31m	一筆を完全に検出
A10040-OZ	—	—		B10089-OZ	—	8.28～8.29m	
A10041-OZ	5.0㎡	8.31～8.32m	一筆を完全に検出	B10090-OZ	—	8.30～8.32m	
A10042-OZ	—	8.30～8.42m(推)		B10091-OZ	30.4㎡	8.29～8.32m	一筆を完全に検出
A10043-OZ	—	8.27～8.29m		B10092-OZ	19.7㎡	8.29～8.30m	一筆を完全に検出
B10056-OZ	—	8.23～8.25m		B10093-OZ	—	8.27～8.28m	
B10057-OZ	—	8.24～8.30m		B10094-OZ	—	8.26～8.29m	
B10058-OZ	—	8.23～8.30m		B10095-OZ	16.8㎡	8.30～8.31m	一筆を完全に検出
B10059-OZ	45.9㎡	8.30～8.38m	一筆を完全に検出	B10096-OZ	—	—	
B10060-OZ	—	8.35～8.39m		B10097-OZ	—	8.22～8.27m	
B10061-OZ	—	8.36～8.38m		B10098-OZ	—	—	
B10062-OZ	—	8.25～8.26m		B10099-OZ	—	8.17～8.27m	
B10063-OZ	—	8.40～8.42m		B10100-OZ	—	8.17～8.22m	
B10064-OZ	—	8.37～8.42m		B10101-OZ	30.0㎡	8.19～8.20m	一筆を完全に検出
B10065-OZ	55.0㎡	8.28～8.42m	一筆を完全に検出	B10102-OZ	38.8㎡	8.20～8.25m	一筆を完全に検出
B10066-OZ	—	8.26～8.28m		B10103-OZ	—	8.22～8.25m	
B10067-OZ	22.5㎡(推)	8.24～8.27m		B10104-OZ	54.2㎡(推)	8.20～8.27m	
B10068-OZ	25.2㎡	8.25～8.29m	一筆を完全に検出	B10105-OZ	—	8.24～8.25m	
B10069-OZ	—	8.24～8.25m		B10106-OZ	—	8.23m	
B10070-OZ	—	8.36m		B10108-OZ	—	8.36m	
B10071-OZ	33.6㎡	3.28～8.36m	一筆を完全に検出	B10109-OZ	—	8.31～8.37m	
B10072-OZ	39.5㎡	8.23～8.30m	一筆を完全に検出				

なかった。痕跡による復元が中心になるが、幅は30～60cm程度であったと考えられる。これに対して3B区では削平を受けてはいるものの、わずかながら高まりを残す畦畔も多い。規模は幅40～60cm、高さは1～2cm程度であった。

**水田** これらの畦畔によって区画された水田は、3A区で19筆、3B区で52筆を確認した(表13)。このうち一筆が完全に検出されたものは3A区で4筆、3B区で17筆の計21筆である。他に一筆全体は検出されていないが、規模の推定が可能な水田が3A区に1筆、3B区に2筆ある。以上の24筆を見ると、水田の平面形は正方形ないし長方形のものが多い。規模は最小が5.0m<sup>2</sup>、最大が55.0m<sup>2</sup>、平均26.7m<sup>2</sup>である。3B区東端部だけ水田区画が乱れている点は、第9面と同じである。

#### 溝

溝は3A区で7条、3B区で3条の計11条を検出した。3A区の溝のうち5条は畦畔脇にみられる浅いくぼみ状の小溝であるため、これを除いた残る5条を報告する。

A10028-OS G63-I05DV・DW・EW・EX・FX・FYで検出した溝である。溝A10029-OSとともに大畦畔A10001-OZに伴う。規模は幅50～85cm、深さは7～9cmである。遺物は出土しなかった。

A10029-OS G63-I05CS・CT・DT・DV・EV・EW・FW・FX・GX・GYで検出した溝である。溝A10028-OSとともに大畦畔A10001-OZに伴う。規模は幅0.35～1.15m、深さは7～10cm程度である。埋土は10Y4/1灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

B10004-OS G63-I05QX・RX・SX・SY・TY・UYで検出した溝である(図114)。規模は幅0.82～1.4m、深さは11～14cmである。埋土は最大5層からなる。この溝は他の畦畔を切っており、本面の中ではB10079-OSとともに新しい遺構である。遺物は出土しなかった。

B10012-OS G63-I05QV・RV・RW・SWで検出した溝である(図114)。規模は長さ8.85m、幅1.02～1.36m、深さは6～11cmである。埋土は2層からなる。遺物は出土しなかった。

B10079-OS G63-I05SQ・SR・TR・TS・UR・USで検出した溝である(図114)。規模は幅0.6～2.0m、深さ11cmである。埋土は10Y4/1灰色粘土などである。この溝は本面の中ではB10004-OSとともに新しい遺構である。遺物は出土しなかった。

#### 土坑

土坑は3A区の北東隅部で2基(A10035・10036-OO)を検出した。いずれも不整形で深さ5cm以下、浅い窪み状のものであった。遺物は出土していない。

#### ピット

ピットは3B区東半部で2個を検出した。小畦畔が途切れ、水口の可能性がある部分に並んで検出されている。

B10016-OP B区G63-I05STで検出したピットである(図114)。平面形は円形で、規模は直径24cm、深さ11cmである。埋土は2層からなる。柱痕は検出しなかった。遺物も出土しなかった。

B10017-OP B区G63-I05ST・SUで検出したピットである(図114)。平面形は円形で、規模は直径33cm、深さ16cmである。埋土は2層からなり、上層、下層ともB10016-OPと同じである。柱痕は検出しなかった。遺物も出土しなかった。

#### 足跡

足跡は3A区では非常に少なかった。3B区では調査区中央部西寄りの畦畔が削平されている部分では足跡は全く検出できなかったが、調査区西端部および東半部では多数の足跡を検出している。足跡の

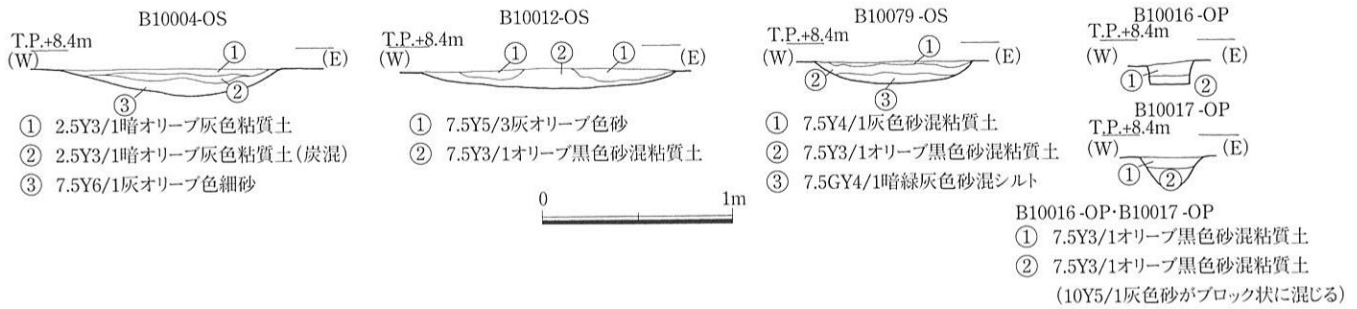


図114 3B区第10面遺構断面

うち判断のつくものは全て人であると考えられた。

### 第10面出土遺物

3A区において第10面に接した状態で、やや大形の破片として図115の土器が出土した。3376は直口壺の口縁部で、外面に幅の狭い凹線文がめぐる。生駒山西麓産胎土である。弥生時代中期末～後期初頭に属する。

#### 【時期】

本面の時期は、第9層ならびに本面直上から出土した遺物は弥生後期前半を下限とすることから、本面の時期は当該期と考えられる。

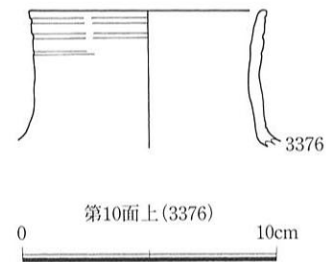


図115 3A区第10面出土遺物

### 第10層出土遺物

本層は①層と②層からなる。①層は第10面耕作土である。②層は第11面を覆う砂層である。本層からの出土遺物では、図116～118の個体を図化できた。

3A区第10層出土遺物 弥生土器(3377)がある。全体のわかる高杯である。弥生時代後期前半に属する。

3B区第10層最下部出土遺物 弥生土器(3378・3379)、木製品(3380)、石製品(3381～3387)がある。3378は壺の体部である。生駒山西麓産胎土である。弥生時代中期末に属すると思われる。3379は壺の体部下半である。弥生時代後期初頭に属する。

3380はヤス状品で、両端が尖る。樹種は不明。層位関係から弥生時代中期後半～後期に属するとみられる。3381～3387はサヌカイト製の剥片で、全くといってよいほど加工痕や使用痕がみられない。大部分は石核から打剥した直後の状態を維持しているようで、剥離縁辺は鋭利である。層位関係からは弥生時代中期後半～後期に相当するが、一部は、下層

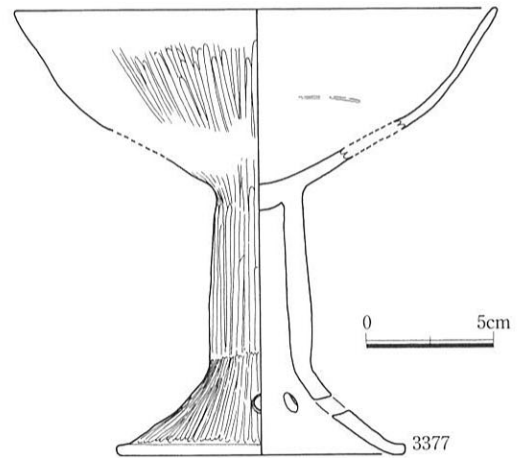


図116 3A区第10層出土遺物

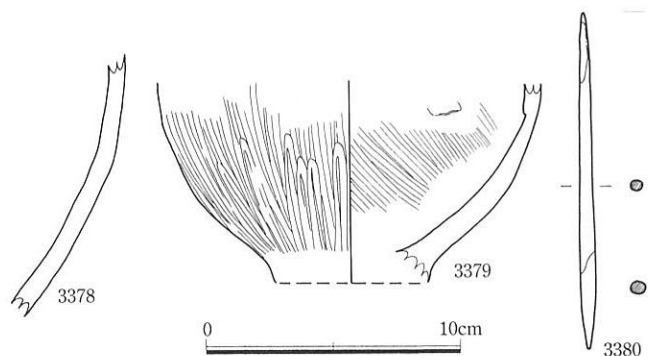


図117 3B区第10層最下部出土遺物(1)

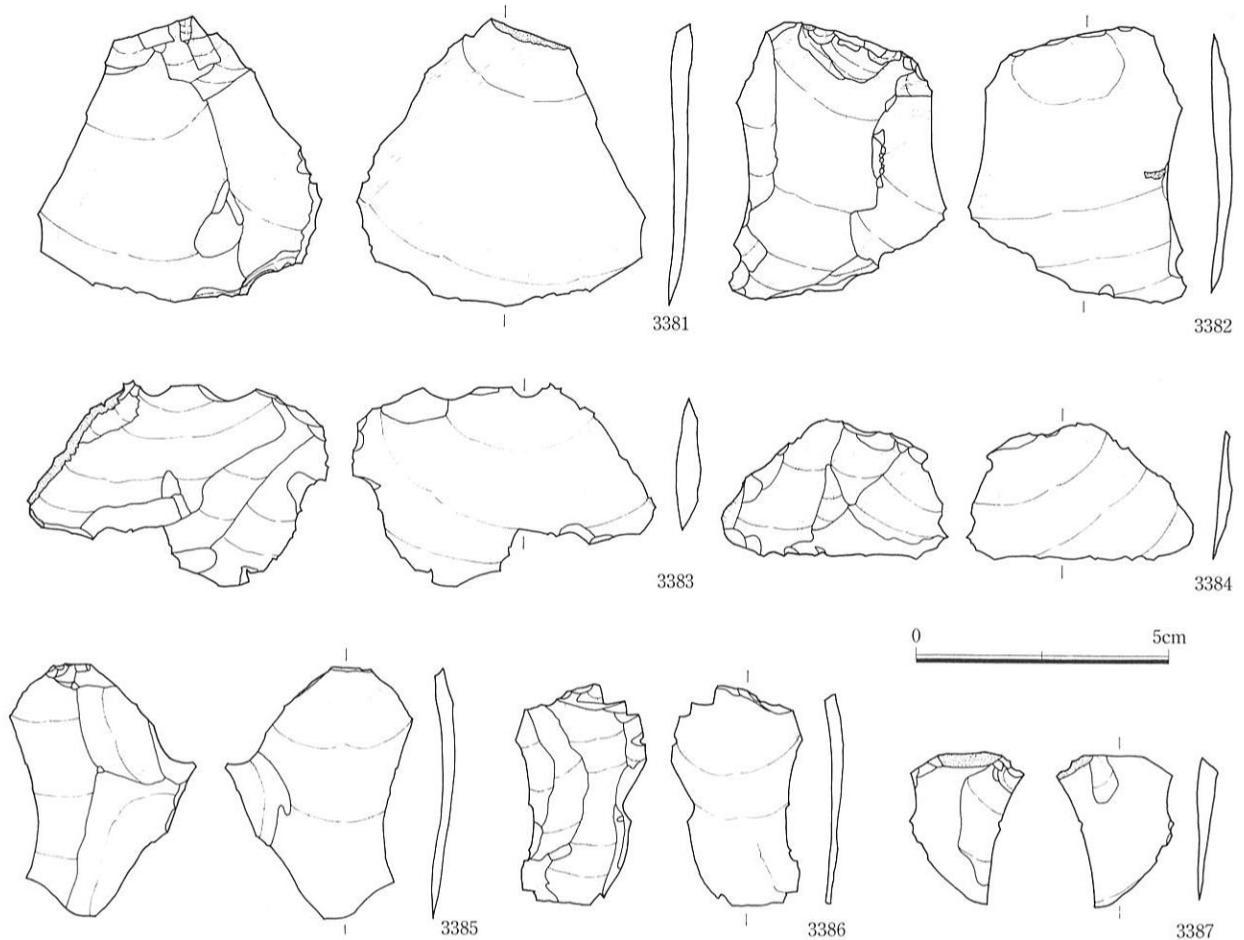


図118 3 B区第10層最下部出土遺物(2)

に遺構面や包含層が存在する弥生時代前期の所産である可能性が高い。

第11面……………弥生時代中期末～後期初頭の水田面

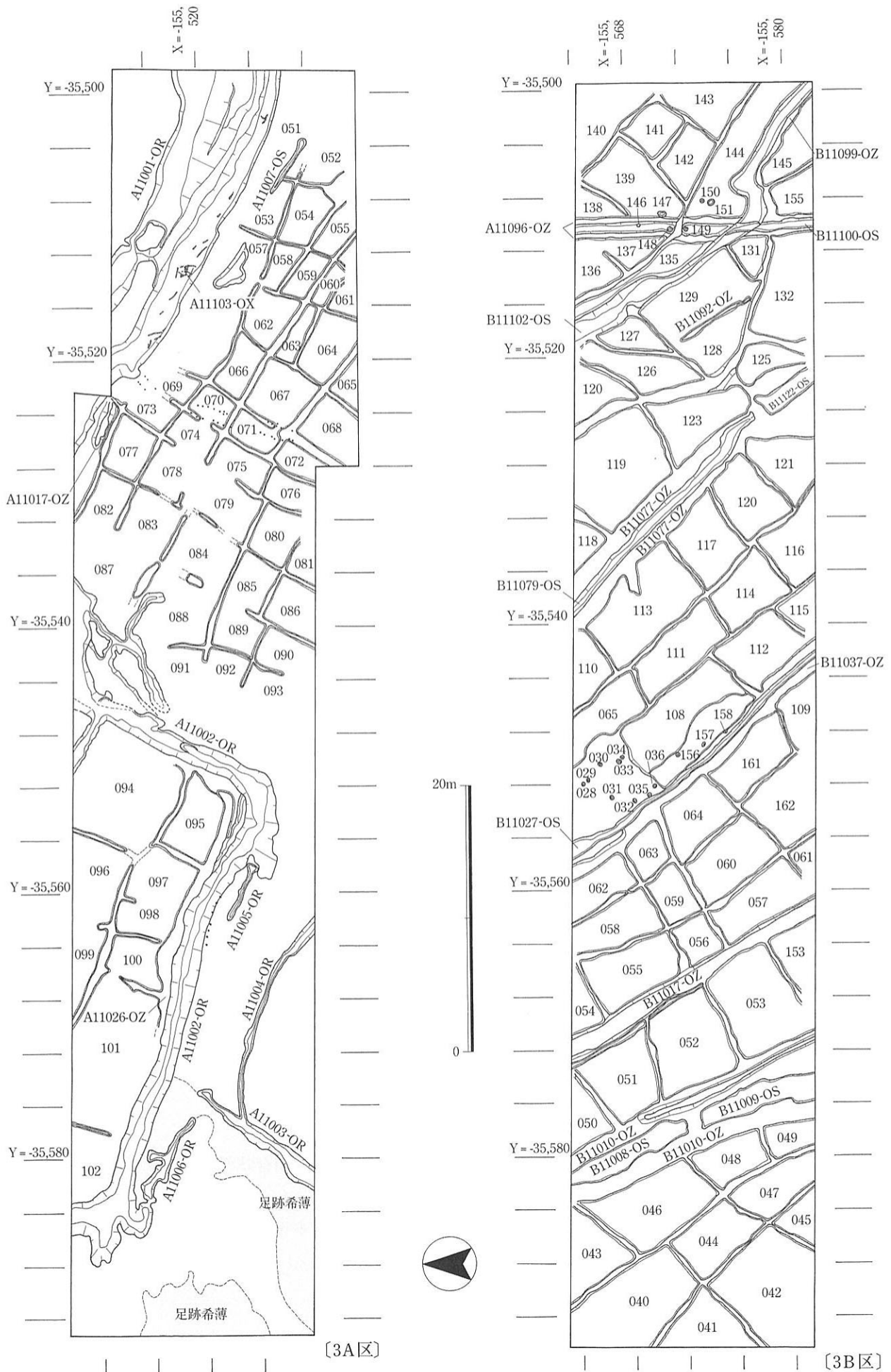
【概要】(巻頭カラー図版2)

両調査区ともに小区画水田を検出した。全体に遺構面の遺存状況は良好である。3 A区では小区画水田とともに、調査区内を蛇行して流れる流路と、この流路から水田へ取水するためのしがらみを検出した。一方、3 B区では用水路と考えられる溝を伴った大畦畔を軸に区画された水田を調査区全面で検出している。本面のレベルは3 A区が T.P.+8.12~8.42m、3 B区が T.P.+7.98~8.23mである。

【遺構と遺物】

畦畔

3 A・3 B区とも本面は②層によって覆われていたために、畦畔の遺存状況は良好であった。3 A区では畦畔の遺存状況は非常に良好であり、調査区内を蛇行する流路 A11001・11002-OR の左右に水田が展開している。畦畔の遺存状況が悪かったのは、水流の影響を受けやすい流路の際と調査区東半部の中でも流路の南側に限られている。この付近は足跡が多く残っているが、明確な畦畔の痕跡はなく、また足跡の粗密から畦畔を復元することもできなかった。



[3A区]

[3B区]

图119 3A·3B区第11面

**大畦畔** 3 A区では大畦畔2条を検出した。大畦畔は流路A11001・11002-ORの左右肩部にわずかに残っていたが、本来は流路に沿ってつくられ、その堤防として機能したものであろう。3 B区では大畦畔6条を検出している。大畦畔は並行して整然とつくられている。

A11017-OZ G63-I05SD/STで検出した大畦畔である。規模は幅90~100cm、高さは1cm、検出長は4mである。しかし図123に示した等高線図をみればわかるように、流路A11001-ORの際には緩やかな盛り上がり部分が部分的に残っている。おそらく本大畦畔はしがらみから取水する部分(G63-I05VE/VF)が開口していた以外は流路に沿って延びていたものと考えられる。

A11026-OZ G63-I05HE~KE/KF~MF/MEで検出した大畦畔である。規模は幅50~150cm、高さは3~5cmである。

B11010-OZ G63-I05EQ/FQ/ER~GR/FS/GS/FT~HTで検出した大畦畔である。規模は幅4.2~5.7m、高さは2~5cmである。中央に溝状の遺構B11008・11009-OSを検出している。

B11017-OZ G63-I05HQ/HR/IR/IS/JS/IT/JTで検出した大畦畔である。規模は幅1.5~1.8m、高さは5~10cmである。

B11037-OZ G63-I05KQ/LQ/LR/MR/LS/NS/MT~OTで検出した大畦畔である。規模は幅1.7~4.1m、高さは3~6cmである。中央に溝B11027-OSが流れている。

B11077-OZ G63-I05PQ/QQ/QR/RR/RS/SS/ST/TT/SU/TUで検出した大畦畔である。規模は幅2.4~5.2m、高さは3~6cmである。中央に溝状の遺構B11079・11122-OSを検出している。

B11096-OZ G63-I05WQ~WUで検出した大畦畔である。規模は幅1.5~2.1m、高さは7~9cmである。中央に溝B11100-OSが流れている。南-北方向に直線的に伸びるの唯一の例である。大畦畔B11099-OZとは交差しており、これに先行することが判明しているが、下層の第12面では本大畦畔の前身と考えられるものは検出していない。またその延長も3 A区では検出できなかった。

B11099-OZ G63-I05UQ/VQ/UR/VR/VS/WT~YT/YUで検出した大畦畔である。中央に溝B11102-OSが流れている。本畦畔は大畦畔の中では遺存状況が悪く、南端部で畦畔の盛り上がりを検出した他は、痕跡を残すのみであった。規模は幅1.5~2.2m、高さは5cmである。

**小畦畔** 小畦畔も遺存状況は良好である。幅は40~80cm程度、高さは5cm前後であり、特に遺存状況が良い部分では高さ10cm程度が残っている。このうちB11001-OZとB11004-OZとした小畦畔からは遺物を検出している。B11001-OZからは石製品(3395・3396)が出土した。ともにサヌカイト製の剥片で、全くといってよいほど加工痕や使用痕がみられない。大部分は石核から打剥した直後の状態を維持しているようで、剥離縁辺は鋭利である。層位関係からは弥生時代中期後半~後期に相当するが、一部は下層に関連する弥生時代前期の所産である可能性が高い。B11004-OZからは、石製品(3397)が出土した。顕著な加工を施した痕跡がみられない小円礫であるが、本調査区から複数点の土製投弾が検出されていることから、自然礫を利用した石製投弾である可能性が高い。重さは約3.1gを量る。投弾ならば、円頭短型に相当する。時期の特定はできないが、下層に関連する弥生時代前期の所産となる可能性もあろう。

**水田** これらの畦畔によって区画された水田は3 A区で52筆、3 B区で62筆を検出した(表14・15)。このうち一筆が完全に検出されたものはA区で22筆、B区で31筆である。また他に規模が推定可能な水田が3 A区に8筆、3 B区に3筆ある。これらの水田を見ると、平面形は正方形ないし長方形のものが大半を占めているが、やはり3 B区東端部に限って区画が乱れており、三角形や非常にいびつな方形のものが認められる。また水田の規模は3 A区では水田一筆の面積は3.1~55.1(推) m<sup>2</sup>、平均12.5



表14 3A・3B区第11面水田一覧(1)

水田	面積	水田面のレベル	備考	水田	面積	水田面のレベル	備考
A11051-OZ	-	-		A11100-OZ	11.7㎡	8.15~8.19m	一筆を完全に検出
A11052-OZ	-	-		A11101-OZ	-	8.12~8.18m	
A11053-OZ	-	8.33~8.39m		A11102-OZ	-	8.16~8.17m	
A11054-OZ	11.0㎡	8.32~8.35m	一筆を完全に検出	B11040-OZ	-	8.04~8.08m	
A11055-OZ	6.1㎡(推)	8.35~8.40m		B11041-OZ	-	8.12~8.19m	
A11056-OZ	-	-		B11042-OZ	-	8.05~8.16m	
A11057-OZ	-	-		B11043-OZ	-	8.038.12m	
A11058-OZ	5.81㎡	8.38~8.41m	一筆を完全に検出	B11044-OZ	20.5㎡	8.03~8.09m	一筆を完全に検出
A11059-OZ	6.1㎡	8.37~8.40m	一筆を完全に検出	B11045-OZ	-	8.04~8.06m	
A11060-OZ	3.1㎡	8.38~8.40m	一筆を完全に検出	B11046-OZ	33.7㎡	8.04~8.09m	一筆を完全に検出
A11061-OZ	-	8.33m		B11047-OZ	-	8.05~8.09m	
A11062-OZ	11.1㎡	8.34~8.37m	一筆を完全に検出	B11048-OZ	13.7㎡	8.00~8.03m	一筆を完全に検出
A11063-OZ	4.8㎡	8.32~8.33m	一筆を完全に検出	B11049-OZ	-	7.98~8.04m	
A11064-OZ	14.5㎡(推)	8.29~8.34m		B11050-OZ	-	8.03~8.05m	
A11065-OZ	-	8.28m		B11051-OZ	24.9㎡	8.06~8.12m	一筆を完全に検出
A11066-OZ	9.1㎡	8.30~8.33m	一筆を完全に検出	B11052-OZ	34.1㎡	8.12~8.15m	一筆を完全に検出
A11067-OZ	16.1㎡	8.29~8.33m	一筆を完全に検出	B11053-OZ	37.6㎡	8.14~8.16m	一筆を完全に検出
A11068-OZ	-	8.29~8.31m		B11054-OZ	-	7.99~8.04m	
A11069-OZ	-	8.32~8.33m		B11055-OZ	24.4㎡	8.04~8.09m	一筆を完全に検出
A11070-OZ	6.0㎡	8.30~8.33m	一筆を完全に検出	B11056-OZ	7.9㎡	8.04~8.08m	一筆を完全に検出
A11071-OZ	6.6㎡	8.32~8.34m	一筆を完全に検出	B11057-OZ	21.3㎡	8.06~8.08m	一筆を完全に検出
A11072-OZ	-	8.31~8.32m		B11058-OZ	18.4㎡(推)	8.01~8.04m	
A11073-OZ	7.3㎡(推)	8.33~8.36m		B11059-OZ	9.8㎡	8.02~8.07m	一筆を完全に検出
A11074-OZ	7.5㎡	8.30~8.36m	一筆を完全に検出	B11060-OZ	23.3㎡	8.06~8.09m	一筆を完全に検出
A11075-OZ	9.4㎡	8.33~8.36m	一筆を完全に検出	B11061-OZ	-	8.04~8.05m	
A11076-OZ	-	8.31~8.33m		B11062-OZ	-	8.01~8.09m	
A11077-OZ	11.2㎡	8.33~8.35m	一筆を完全に検出	B11063-OZ	8.2㎡	8.02~8.08m	一筆を完全に検出
A11078-OZ	10.7㎡	8.34~8.37m	一筆を完全に検出	B11064-OZ	18.9㎡	8.06~8.09m	一筆を完全に検出
A11079-OZ	18.0㎡	8.30~8.33m	一筆を完全に検出	B11065-OZ	-	8.09~8.11m	
A11080-OZ	12.1㎡(推)	8.28~8.31m		B11108-OZ	29.8㎡	8.08~8.15m	一筆を完全に検出
A11081-OZ	-	8.27~8.28m		B11109-OZ	-	8.11~8.14m	
A11082-OZ	8.8㎡(推)	8.33~8.35m		B11110-OZ	-	8.10m	
A11083-OZ	14.4㎡(推)	8.32~8.35m		B11111-OZ	22.5㎡	8.12~8.15m	一筆を完全に検出
A11084-OZ	18.5㎡	8.31~8.34m	一筆を完全に検出	B11112-OZ	21.0㎡	8.13~8.16m	一筆を完全に検出
A11085-OZ	10.6㎡	8.27~8.31m	一筆を完全に検出	B11113-OZ	38.5㎡	8.10~8.12m	一筆を完全に検出
A11086-OZ	-	8.25~8.27m		B11114-OZ	18.0㎡	8.14~8.18m	一筆を完全に検出
A11087-OZ	-	8.33~8.37m		B11115-OZ	-	8.14~8.17m	
A11088-OZ	26.0㎡(推)	8.28~8.32m		B11116-OZ	-	8.14~8.17m	
A11089-OZ	9.9㎡	8.28~8.31m	一筆を完全に検出	B11117-OZ	21.5㎡	8.10~8.17m	一筆を完全に検出
A11090-OZ	-	8.25~8.26m		B11118-OZ	-	8.04~8.08m	
A11091-OZ	-	8.29~8.30m		B11119-OZ	49.8㎡(推)	8.03~8.07m	
A11092-OZ	-	8.25~8.26m		B11120-OZ	19.7㎡	8.10~8.19m	一筆を完全に検出
A11093-OZ	-	8.27~8.28m		B11121-OZ	-	8.11~8.17m	
A11094-OZ	55.1㎡(推)	8.16~8.22m		B11123-OZ	22.1㎡	8.05~8.09m	一筆を完全に検出
A11095-OZ	17.3㎡	8.16~8.20m	一筆を完全に検出	B11124-OZ	-	8.06~8.07m	
A11096-OZ	-	8.15~8.19m		B11125-OZ	16.5㎡(推)	8.06~8.12m	
A11097-OZ	16.4㎡	8.20~8.23m	一筆を完全に検出	B11126-OZ	16.2㎡	8.01~8.08m	一筆を完全に検出
A11098-OZ	9.0㎡	8.19~8.21m	一筆を完全に検出	B11127-OZ	7.4㎡	8.02~8.03m	一筆を完全に検出
A11099-OZ	-	8.14~8.20m		B11128-OZ	14.0㎡	8.05~8.10m	一筆を完全に検出

表15 3A・3B区第11面水田一覧(2)

水田	面積	水田面のレベル	備考	水田	面積	水田面のレベル	備考
B11129-OZ	28.7㎡	8.04~8.08m	一筆を完全に検出	B11141-OZ	9.4㎡	8.10~8.12m	一筆を完全に検出
B11131-OZ	4.7㎡	8.04~8.08m	一筆を完全に検出	B11142-OZ	11.7㎡	8.12~8.13m	一筆を完全に検出
B11132-OZ	-	8.10~8.15m		B11143-OZ	-	8.11~8.18m	
B11135・ 11144-OZ	-	8.08~8.19m		B11145-OZ	-	8.14~8.19m	
B11136-OZ	-	8.10~8.12m		B11153-OZ	-	8.12~8.19	
B11137・ 11138-OZ	22.5㎡	8.07~8.12m	一筆を完全に検出	B11155-OZ	-	8.14~8.15m	
B11139-OZ	26.4㎡	8.08~8.15m	一筆を完全に検出	B11161-OZ	19.7㎡	8.04~8.13m	一筆を完全に検出
B11140-OZ	-	8.08~8.13m		B11162-OZ	-	8.05~8.12m	

㎡、3B区では4.7~49.8(推)㎡、平均21.1㎡と、3A区の水田の方がかなり小規模である。なお3B区水田B11040-OZからは、石製品(3398)が出土した。サヌカイト製の石鏃で、有茎型に属する。基部の一部は欠損する。弥生時代前・中期の所産である可能性が高い。

流路

流路はA区で6条を検出した。A11003~11006-ORの4条は規模は小さいが、A11001・1002-ORから派生すると考えられることから流路に含めて報告する。

A11001-OR A11001-ORはA区G63-I05SC/TC/TD~WD/UE~YE/VF~YF/XG/YGで検出した流路である。本流路は図93に示したように大きく2時期に分けて捉えることができる。検出した規模は幅5.5~6.7mであるが、これは2時期の流れがずれて重複しているためであり、それぞれの時期の流路幅はおよそ2.5~3.5m程度と考えられる。深さは10~20cmである。第1段階の溝は砂礫で一気に埋没しているのに対し、第2段階の流路は細砂、シルト、粘質土が主であり、比較的緩やかな流れであったものと考えられる。第1段階の流れをA11001a-OR、第2段階の流れをA11001b-ORと呼称する。A11001b-ORからは、しがらみA11103-OXを検出している。また遺物は、弥生土器(3388~3391)が出土した。3388は長頸壺の

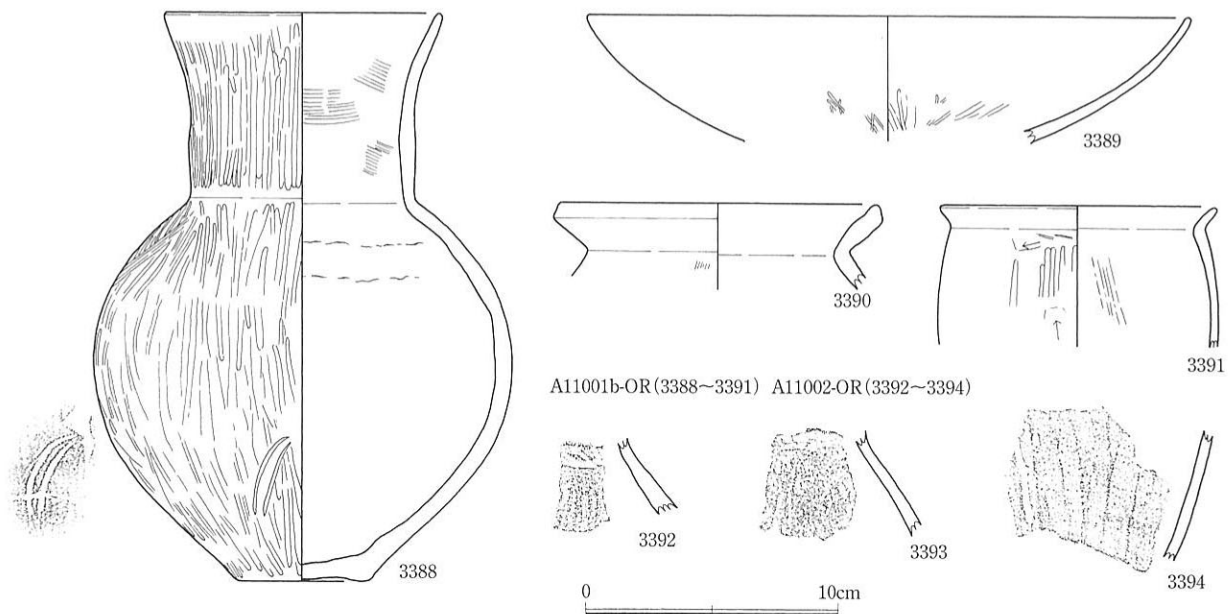


図120 3A区第11面出土遺物

ほぼ完存品で、体部下半に記号文がみられる。弥生時代後期前葉に属する。3389は高杯の杯部で、浅く内湾しながら上外方にのび口縁端部にいたる。弥生時代後期前葉に属する。3390は甕の口縁付近で、口縁部は厚い。弥生時代中期末～後期初頭に属する。3391は甕の上半部で、口縁端部は先すぼまりにおわる。弥生時代中期末～後期初頭に属するか。

A11002-OR G63-I05DC/EC/DD~GD/GE~KE/JF~JM/KG~MG/ME/NE/ND/NC/OCで検出した流路である。規模は幅1.4~2.1m、深さ8~20cmである。埋土は砂礫が主体である。A11002-ORはおそらくA11001-ORと同一の流路であると考えられるが、埋土の状況からするとA11001a-ORに対応する可能性が高い。遺物は、弥生土器(3392~3394)が出土した。3392・3393は壺の体部で、生駒山西麓産胎土である。同一個体の可能性がある。弥生時代中期後半に属するか。3394は甕の体部で、外面にはヘラケズリが施される。弥生時代中期に属する。

A11003-OR G63-I05GE/FF/GF/EG/FGで検出した流路である。規模は幅40~125cm、深さは7~10cm、埋土は5Y7/4浅黄色粗砂が主体である。遺物は出土しなかった。

A11004-OR G63-I05FF~HF/HG~JGで検出した流路である。A11003-ORにつながる。規模は幅25~50cm、深さは2~6cm、埋土は5Y3/1オリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。

A11005-OR G63-I05JF/KFで検出した流路である。本遺構は小規模であるが、A11002-ORの一時的な洪水の痕跡と考えられるため流路に含めた。規模は検出長4.6m、幅30~90cm、深さは4~6cm、埋土は5Y7/4浅黄色粗砂である。遺物は出土しなかった。

A11006-OR G63-I05ED/FD/EE/FEで検出した流路である。規模は幅40~105cm、深さは2~7cm、埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

溝

溝は3A区で1条、3B区で5条を検出した。3B区の溝はいずれも大畦畔に伴う溝である。

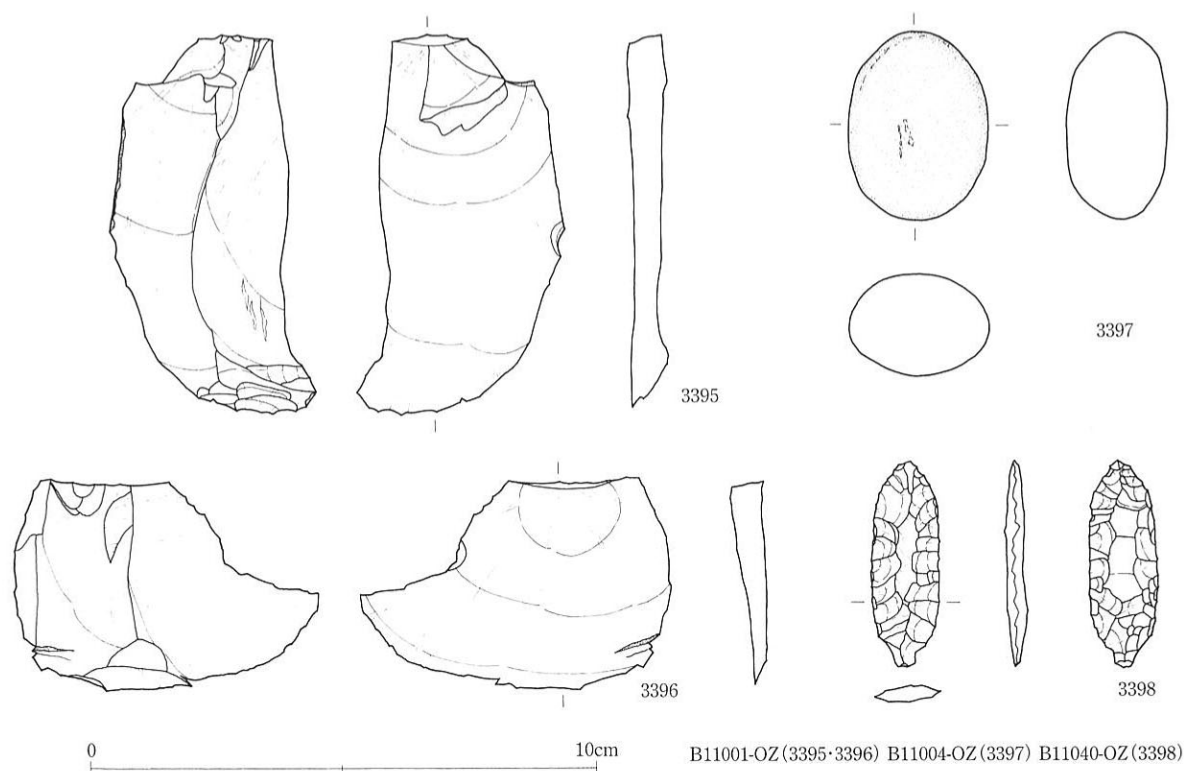


図121 3B区第11面出土遺物

A11007-OS G63-I05XG/XH/YG/YHで検出した溝である。規模は幅25～60cm、深さは8～9cm、埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B11008・11009-OS G63-I05EQ/FQ/FR/FS/GR/GSで検出した、大畦畔B11000-OZに伴う溝である。陸橋部で分断されていることから、用水路としての機能は考えにくい。規模は幅1.3～1.9m、深さは3～10cm、埋土は5Y6/4黄色砂である。遺物は出土しなかった。

B11027-OS G63-I05KQ/LQ/LR/MR/MS/NS/NT/OT/OUで検出した、大畦畔B11037-OZに伴う溝である。規模は幅35～100cm、深さは5～11cm、埋土は7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B11079・11122-OS G63-I05PQ/QQ/QR/RR/RS/SS/ST/TT/TUで検出した大畦畔B11077-OZに伴う溝である。陸橋部で分断されていることから、用水路としての機能は考えにくい。規模は幅65～140cm、深さは4～8cm、埋土は7.5Y5/2灰オリーブ色細砂である。遺物は出土しなかった。

B11100-OS G63-I05WQ～WUで検出した、大畦畔B11096-OZに伴う溝である。規模は幅55～100cm、深さは8～17cm、埋土は7.5Y6/3オリーブ黄色粗砂などである。遺物は出土しなかった。

B11102-OS G63-I05UQ/VQ/VR/VS/WS/WT～YT/YVで検出した、大畦畔B11099-OZに伴う溝である。規模は幅35～185m、深さは5～9cm、埋土は7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土である。溝 B11100-OS を切っている。遺物は出土しなかった。

しがらみ

A区流路A11001-OZ内でしがらみを1カ所検出した。

A11103-OX G63-I05VE で検出したしがらみである(図122、写真図版26-2)。10本の杭が流路の流れをふさぐように並べて打ち込まれている。杭は、長さ80～90cm、上端部幅4～6cm、下端部幅10cm、厚さ2～3cmの短冊状の板の先を尖らせてあるもので、幅広の面が流れに向かうように揃えられている。上端面が狭いのは乾燥による痩せであろう。しがらみ全体の幅は1m余りであったと考えられる。このしがらみがつくられたのは先述した流路A11001a-ORの段階にあたる。また図123に示すように、しがらみA11103-OXの南側の水田面は、明らかに本地点からの流水によって浅くえぐれていることが確認できるから、このしがらみによって水位を上げ、流路の南側に広がる水田に給水していたことは確実である。

なお、しがらみに用いられていた杭10本のうち9本を樹種鑑定した結果、ツブラジイ2本、スタジイ6本、マテバシイ1本であった(第4章第3節参照)。

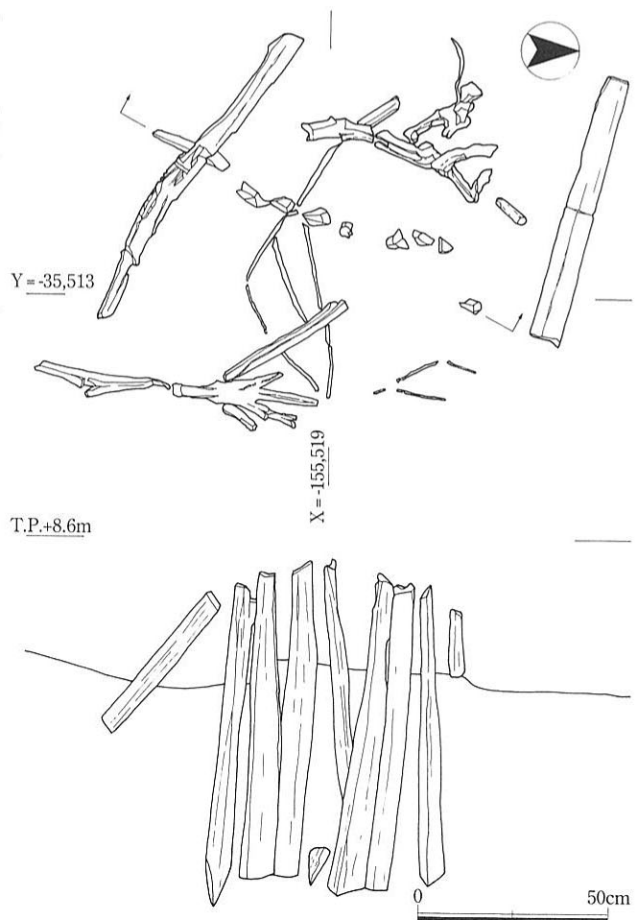


図122 3 A区第11面しがらみ A11103-OX

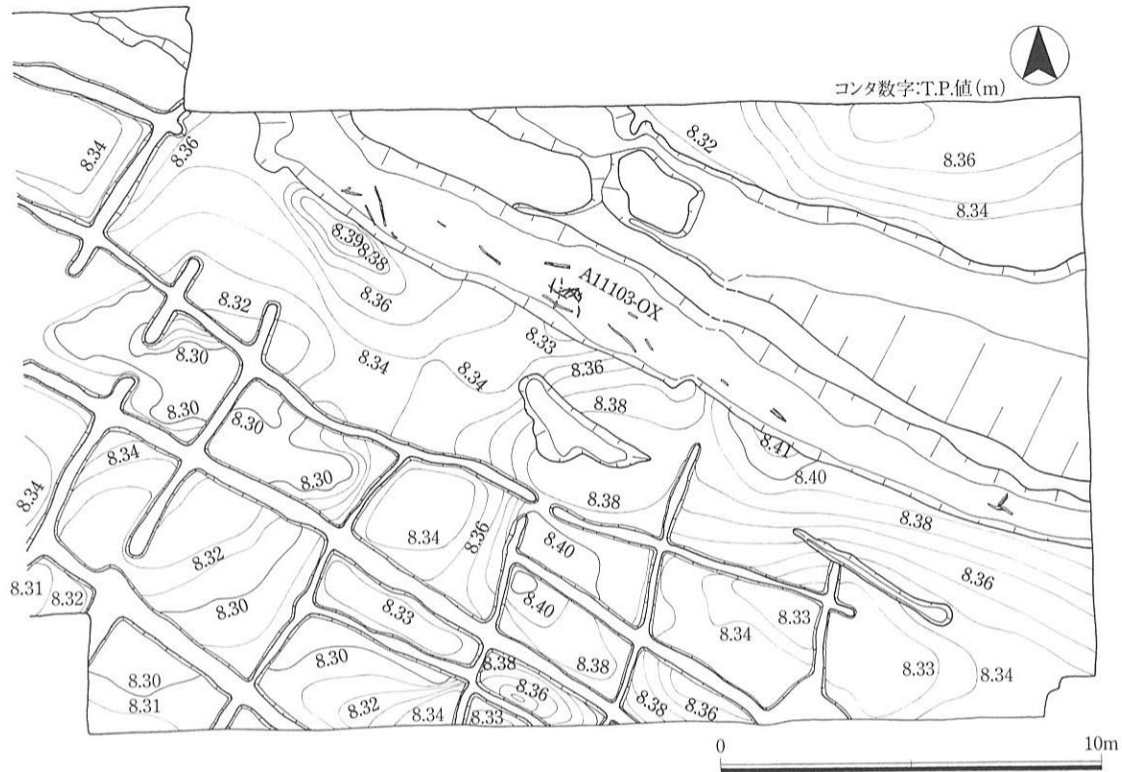


図123 3A区第11面しがらみ A11103-OP 周辺等高線図

表16 3B区第11面ピット一覧

遺構名	地区割	平面形	長径×短径	深さ	埋土	遺物
B11028-OP	G63-105MQ	楕円形	28×21cm	10cm	5Y3/2オリーブ黒色粘質土	なし
B11029-OP	G63-105MQ	楕円形	28×20cm	12cm	5Y3/2オリーブ黒色粘質土	なし
B11030-OP	G63-105MQ	楕円形	30×22cm	8cm	5Y3/2オリーブ黒色粘質土	なし
B11031-OP	G63-105LQ	円形	32×28cm	12cm	5Y3/2オリーブ黒色粘質土	なし
B11032-OP	G63-105LR	円形	30×20cm	16cm	5Y3/2オリーブ黒色粘質土	なし
B11033-OP	G63-105MQ	不整形円形	32×32cm	21cm	5Y3/2オリーブ黒色粘質土	なし
B11034-OP	G63-105MQ	円形	22×21cm	14cm	5Y3/2オリーブ黒色粘質土	なし
B11035-OP	G63-105LR	円形	29×25cm	11cm	5Y3/2オリーブ黒色粘質土	なし
B11036-OP	G63-105LR	円形	31×27cm	20cm	5Y3/2オリーブ黒色粘質土	なし
B11156-OP	G63-105MR	円形	29×25cm	16cm	5Y3/2オリーブ黒色粘質土	なし
B11157-OP	G63-105MS	楕円形	30×18cm	17cm	5Y3/2オリーブ黒色粘質土	なし
B11158-OP	G63-105NS	円形	19×19cm	14cm	5Y3/2オリーブ黒色粘質土	なし
B11146-OP	G63-105WR	円形	25×25cm	12cm	5GY3/1オリーブ灰色粘質土	なし
B11147-OP	G63-105WR	不整形楕円形	60×35cm	16cm	5GY3/1オリーブ灰色粘質土	なし
B11148-OP	G63-105WR	不整形円形	42×39cm	12cm	5GY3/1オリーブ灰色粘質土	なし
B11149-OP	G63-105WS	円形	30×30cm	16cm	7.5Y3/1オリーブ黒色シルト	なし
B11150-OP	G63-105WS	楕円形	30×28cm	13cm	2.5Y3/1暗オリーブ灰色粘質土	なし
B11151-OP	G63-105WS	楕円形	50×40cm	15cm	2.5Y3/1暗オリーブ灰色粘質土	なし

ピット群

ピット群は3B区において2カ所検出した(表16)。調査区中央部G63-I05LQ/MQ/LR/MR/MS/NSで検出したピット群の付近は周囲の水田面よりも一段高くなっている。なんらかの施設があった可能性が高い。また調査区東端部 G63-I05WR/WS で検出したピット群は大畦畔 B11096-OZ 付近に集中していた。

足跡

本面は比較的削平の影響が小さかったこともあり、足跡は3A・3B区とも非常に多かった。これらの足跡のうち判断のつくものはすべて人であった。

【時期】

本面の時期は、第10層ならびに本面直上から出土した遺物は弥生中期末(IV様式末)～後期前葉を下限とすることから、本面の時期は当該期と考えられる。

第11層出土遺物

本層は第11面耕作土である㊸層だけからなる。本層からの検出遺物では、図124～128の個体を図化できた。

3A区第11層出土遺物 弥生土器(3399)がある。壺の頸部付近の小片である。最下端にヘラ描き沈線文が1条認められる。弥生時代前期後半(I様式新段階)に属する。

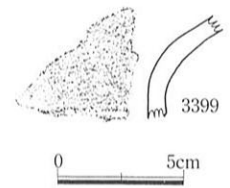


図124 3A区  
第11層出土遺物

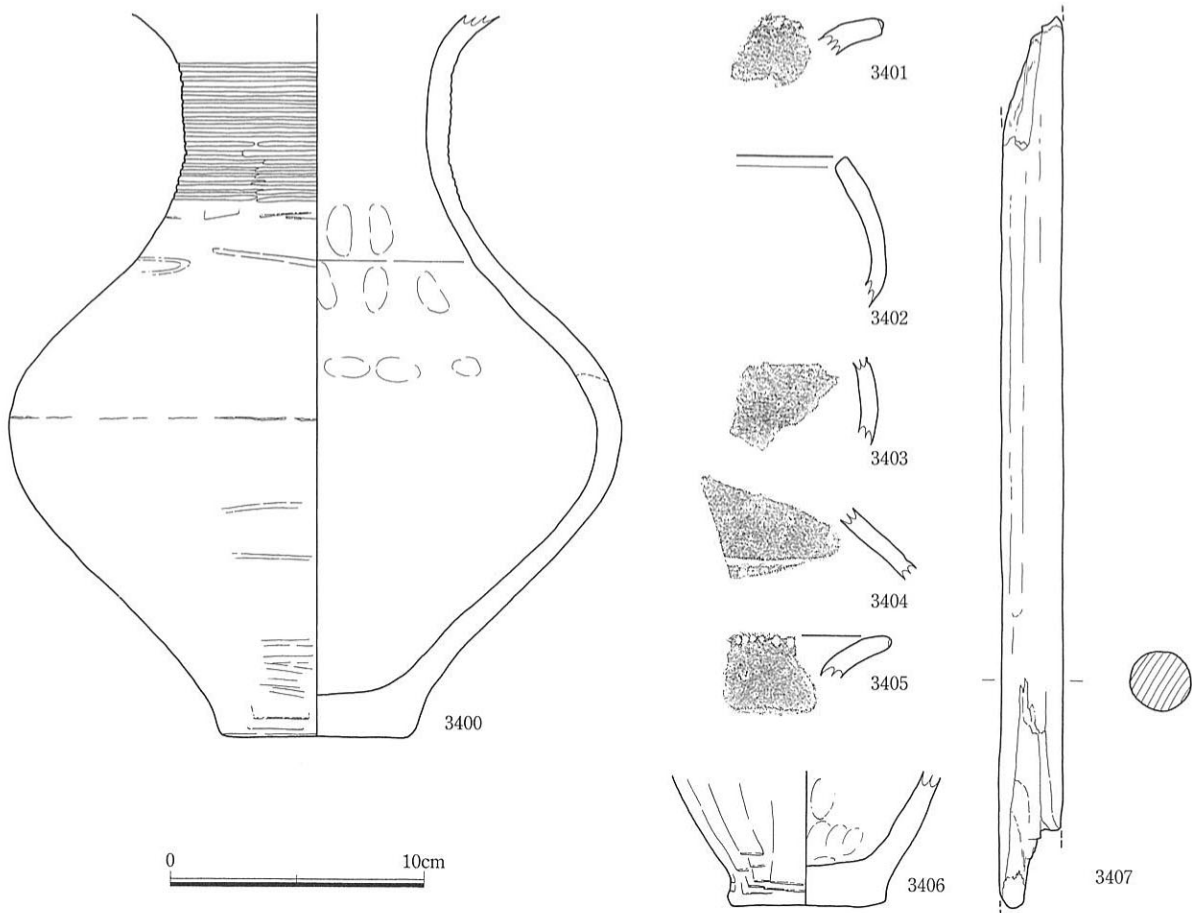


図125 3B区第11層出土遺物(1)

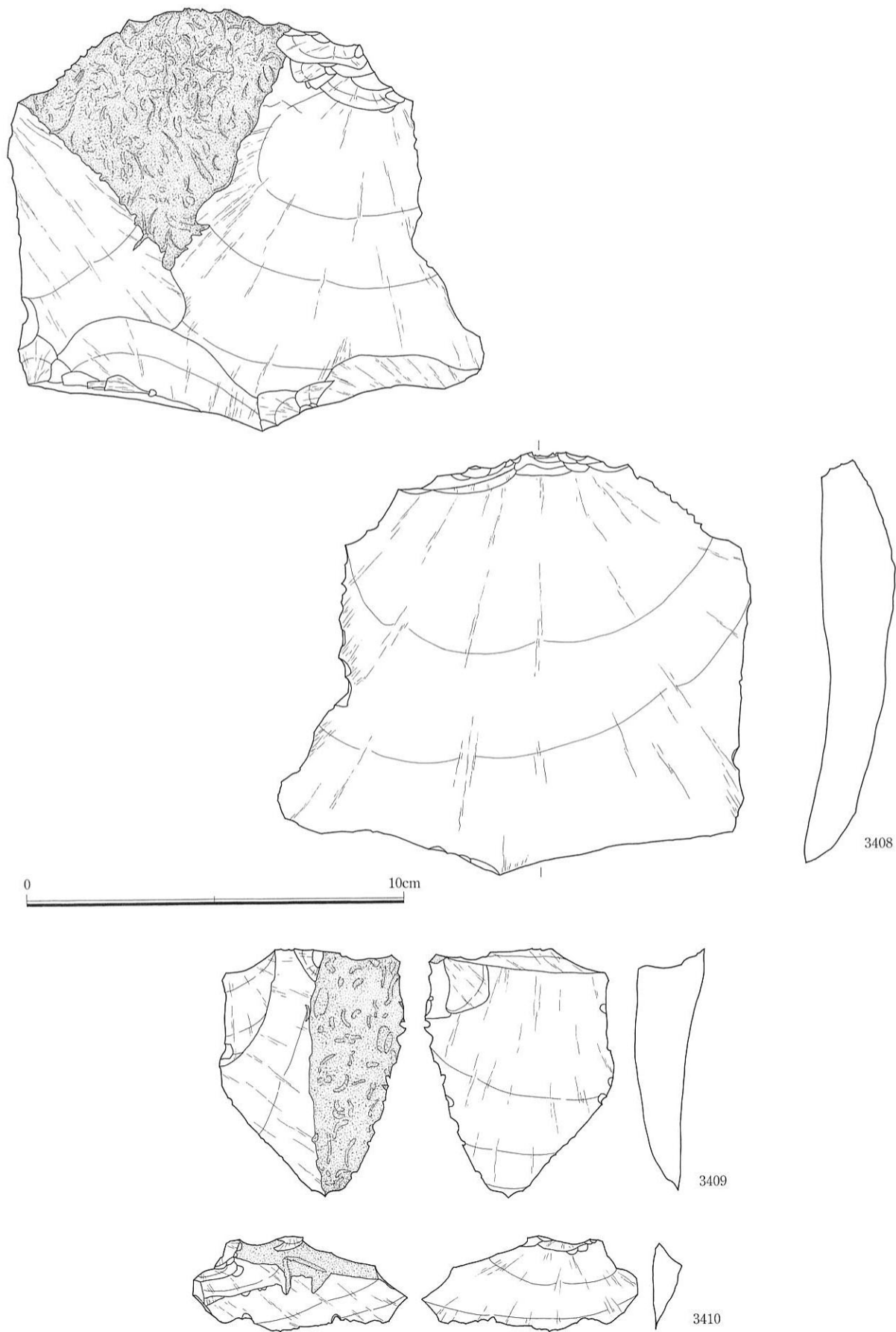


図126 3B区第11層出土遺物(2)

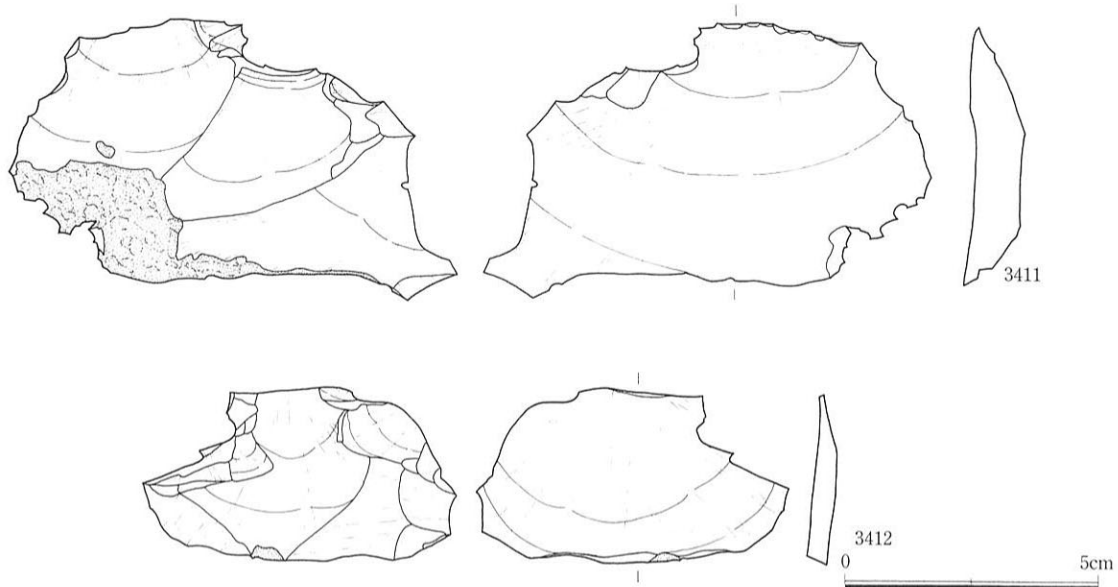


図127 3 B区第11層出土遺物 (3)

3 B区第11層出土遺物 弥生土器 (3400~3406)、木製品 (3407)、石製品 (3408~3412) がある。3400は壺で、口縁部は欠損するがほぼ全容が判明する。頸部にヘラ描き沈線文が18条みられる。3401は壺の口縁部の小片で、端面に刻目を加える。3402は無頸壺の口縁部から体部にかけての破片である。生駒山西麓産胎土である。3403は壺の体部で、最上端にヘラ描き沈線文が1条みられる。3404は壺の体部で、遺存最下端にヘラ描き沈線文が1条みられる。3405は甕の口縁部付近で、口縁端部に刻目を加え、最下端にヘラ描き沈線文が1条みられる。3406は甕の底部付近である。これらの土器はいずれも弥生前期後半 (I 様式新段階) に属する。3407は棒状の木製品である。両端部が失われているために判断の手がかりがないが、農具などの柄となる可能性がある。樹種はサワラである。時期の限定は難しいが第11面の年代より遡ることは確かで、弥生時代中期前葉~前期後半に属する可能性がある。3408~3412はサヌカイト製の剥片で、全くといってよいほど加工痕や使用痕がみられない。多くの個体で自然礫面が遺存している。大部分は石核から打剥した直後の状態を維持しているようで、剥離縁辺は鋭利である。3408は、今回の調査で確認した剥片のなかでは最も大きく、幅12.6cm、長さ11.3cm、厚さ1.9cmを測る。弥生時代前期後半に属する可能性が高いものと考えている。

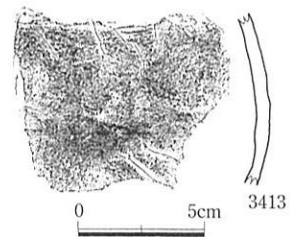


図128 3 A区第11層最下部出土遺物

3 A区第11層最下部出土遺物 弥生土器 (3413) がある。甕の体部で、遺存最上端で口縁部に移行する部位にあたる。弥生時代中期前葉に属する。

第12面.....弥生時代前期後半~中期初頭のの水田面

【概要】

本面では小区画水田を検出した。3 A区では水田と調査区内を流れる流路を検出している。流路の痕跡は複雑で、特に調査区東半部では畦畔の痕跡も残さないほど削平されている。水田を営むには本調査区付近は非常に不安定であったかと思われる。一方3 B区では3 A区と状況が異なり、調査区中央部を除き全面で畦畔ならびに水路を検出している。

本面のレベルは3 A区が T.P.+8.00~8.35m、3 B区が T.P.+7.94~8.17mである。



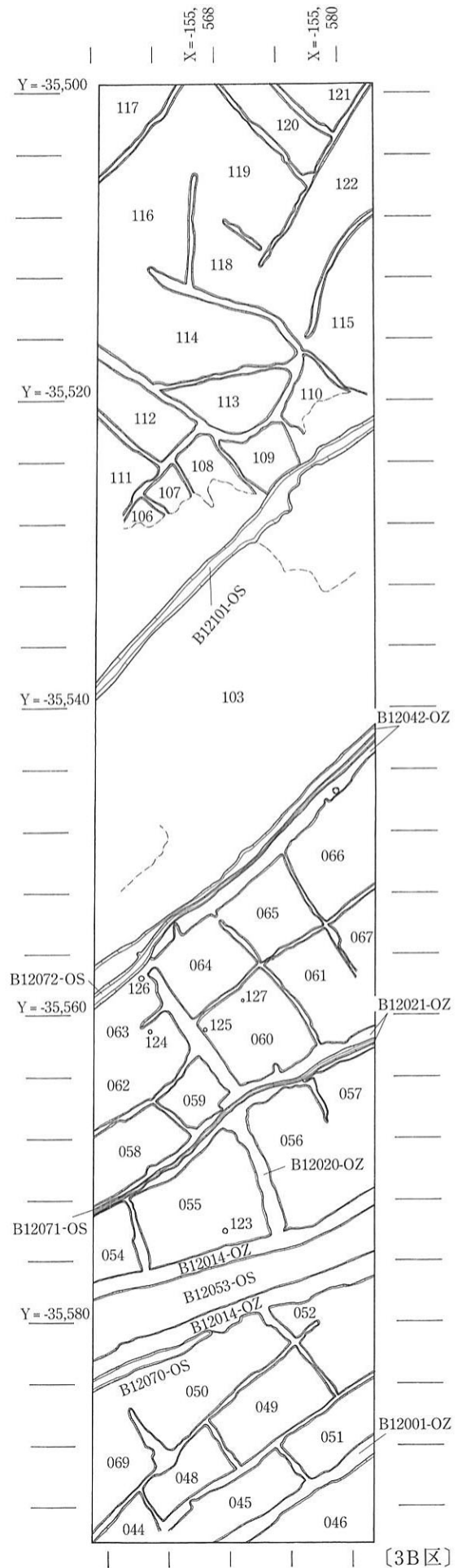
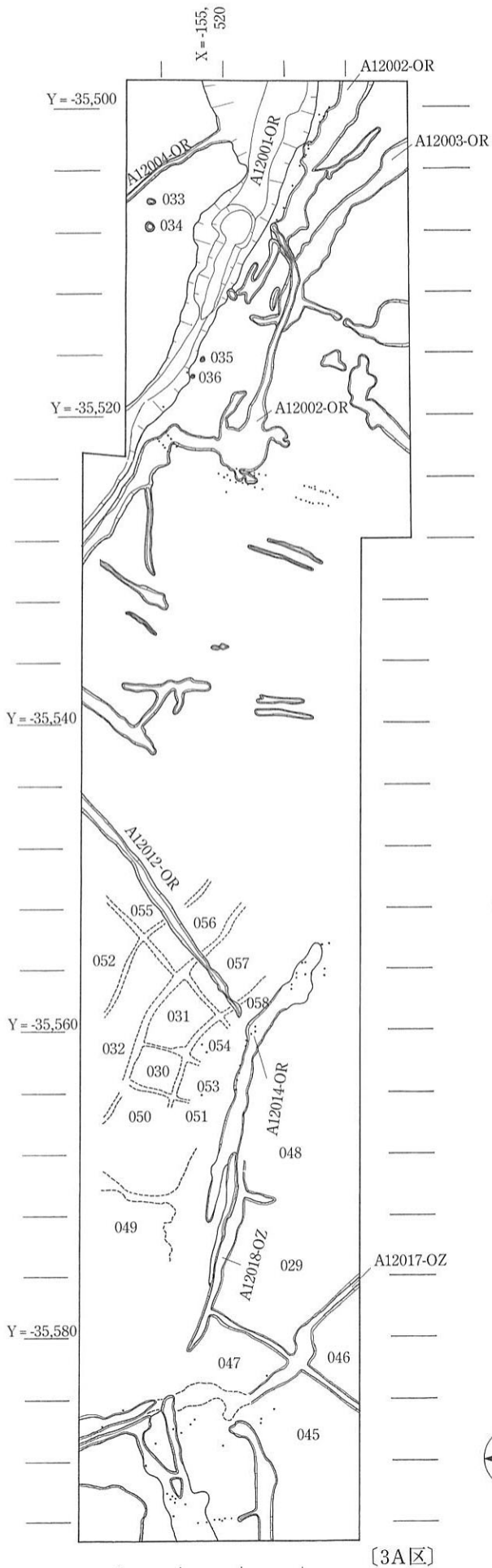


图129 3A·3B区第12面

## 【遺構と遺物】

## 畦畔

3 A区では畦畔のほとんどが完全に削平されて、遺存状況は非常に悪い。これに対し、3 B区も削平は著しかったが、調査区中央部を除いてほぼ全面で畦畔およびその痕跡を検出した。

**大畦畔** 大畦畔は3 A区で2条、3 B区で4条検出した。

A12018-OZ G63-I05EF/EG/FGで検出した大畦畔である。規模は幅50~100cm、高さは1~2cmである。自然流路 A12014-OR の堤防の機能を果たしたと考えられる。

A12017-OZ G63-I05DC/DD/EE~GE/GF/GHで検出した大畦畔である。規模は幅60~130cm、高さは2~5cmである。3 B区の大畦畔に連続する可能性が高いが、特定は難しい。

B12001-OZ G63-I05BS/CS/CTで検出した大畦畔である。規模は幅80~90cm、高さは良好な部分で3cm程度である。

B12014-OZ G63-I05EQ/FQ/ER~GR/FS/GS/FT/GTで検出した大畦畔である。中央に溝B12053-ORが流れ、非常に規模が大きい。規模は幅4.5~5.5m、全体に削平されているが、残りのよいところで高さは3cm程度ある。

B12021-OZ G63-I05HQ/HR/IR/IS/JS/IT/JTで検出した大畦畔である。中央に溝B12071-ORが流れる。規模は幅1.1~1.5m、高さ1~3cmである。

B12042-OZ G63-I05LR/MR/LS~NS/NTで検出した大畦畔である。規模は幅90~100cm、高さ1~3cmである。なお本畦畔の東に沿って溝B12072-OSが流れている。大畦畔B12014-OZ、B12021-OZ同様、溝B12072-OZをはさんで本畦畔と対になる畦畔が存在していた可能性も考えられる。

**小畦畔** 小畦畔は3 A・3 B区とも幅30~60cm程度である。高さは残りの良いものでも1~3cm程度でしか残っていない。なお小畦畔の一つB12020-OZより、弥生土器(3417)が出土している。壺の頸部で、遺存最下端に削出し突帯がめぐる。弥生時代前期中葉~後半に属する

**水田** 水田の区画は、3 A区と3 B区では様相が異なる(表17)。3 A区では自然流路が流れており、これに大きく規制されている。自然流路A12014-ORの北側では特に区画が小さい。3 B区においては、大畦畔B12001-OZ、B12014-OZ、B12021-OZ、B12042-OZという4条の大畦畔を軸に、長方形ないし正方形の区画が比較的整然と並んでいる。しかし調査区東端部では第10・11面と同様、区画は乱れている。なお3 B区の水田B12064-OZより弥生土器(3418)が出土した。壺の体部で、幅広で低い削出し突帯の上面にヘラ描き沈線文が3条加えられる。弥生時代前期後半に属する。

## 自然流路

3 A区では第11面で検出した自然流路A11001・11002-ORの前身であると考えられる流路を検出した。

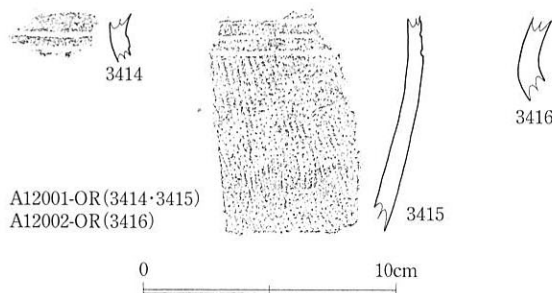


図130 3 A区第12面出土遺物

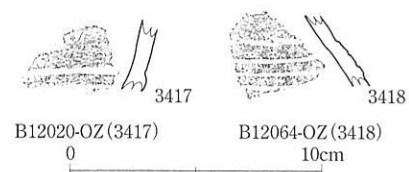


図131 3 B区第12面出土遺物

また調査区内には不規則に流れる自然流路を幾条も検出している。3B区では自然流路はまったく検出されなかった。

A12001-OR G63-I05TD/UD/UE~XE/WF~YF/YGで検出した流路である。幅2.0~4.0m程度、深さ20cm、埋土は7.5Y3/2オリープ黒色粘性砂質土である。遺物は、弥生土器(3414・3415)が出土した。3414は壺の頸部で、削出し突帯がめぐる。弥生時代前期中葉に属する。3415は甕の体部で、遺存最上端にはヘラ描き沈線文が3条みられる。弥生時代前期後半に属する。

A12002-OR G63-I05WF/XF/WG~YG/YHで検出した流路である。自然流路A12001-ORの南に沿って検出した複雑な水流の痕跡である。規模は幅1.2~1.8m、深さ5~8cm、埋土は7.5Y3/2オリープ黒色粘性砂質土である。遺物は、弥生土器(3416)が出土した。壺の頸部で、生駒山西麓産胎土である。弥生時代前期後半に属する

A12012-OR G63-I05KF/KE/LE/LD~NDで検出した流路である。規模は幅30~80cm、深さ6~8cm、埋土は7.5Y3/2オリープ黒色粘性砂質土である。本流路は第11面A11002-ORの前身と考えられる。遺物は出土しなかった。

A12014-OR G63-I05GE~IE/IF~KF/KG/LGで検出した流路である。規模は検出長19.5m、幅0.7~1.5m、深さ2~3cm、埋土は7.5Y3/2オリープ黒色粘性砂質土である。A12012-ORとは本来一連のものであろう。遺物は出土しなかった。

表17 3A・3B区第12面水田一覧

水田	面積	水田面のレベル	備考	水田	面積	水田面のレベル	備考
A12029-OZ	58.5m <sup>2</sup> (推)	8.07~8.12m		B12057-OZ	-	8.08~8.13m	
A12030-OZ	7.0m <sup>2</sup>	8.15m	一筆を完全に検出	B12058-OZ	-	8.01~8.02m	
A12031-OZ	11.6m <sup>2</sup>	8.15~8.16m	一筆を完全に検出	B12059-OZ	11.1m <sup>2</sup>	7.99~8.03m	一筆を完全に検出
A12032-OZ	-	8.11~8.13m		B12060-OZ	33.0m <sup>2</sup>	7.95~8.04m	一筆を完全に検出
A12045-OZ	-	8.06~8.12m		B12061-OZ	27.2m <sup>2</sup> (推)	7.97~8.03m	
A12046-OZ	-	8.06~8.07m		B12062-OZ	-	7.94~8.03m	
A12047-OZ	-	8.05~8.07m		B12063-OZ	-	7.98~8.02m	
A12048-OZ	-	8.10~8.11m		B12064-OZ	23.8m <sup>2</sup>	7.95~8.03m	一筆を完全に検出
A12049-OZ	-	8.04~8.07m		B12065-OZ	23.9m <sup>2</sup>	7.99~8.04m	一筆を完全に検出
A12050-OZ	-	8.13~8.15m		B12066-OZ	-	8.03~8.11m	
A12051-OZ	-	8.13~8.15m		B12067-OZ	-	8.04~8.06m	
A12052-OZ	-	8.13m		B12069-OZ	-	7.99~8.02m	
A12053-OZ	-	8.11~8.15m		B10106-OZ	-	8.02~8.05m	
A12054-OZ	-	8.11~8.15m		B10107-OZ	-	8.01~8.02m	
A12055-OZ	-	8.11~8.13m		B10108-OZ	-	8.01~8.04m	
A12056-OZ	-	8.11~8.15m		B10109-OZ	12.8m <sup>2</sup>	8.03~8.06m	一筆を完全に検出
A12057-OZ	-	8.13~8.17m		B10110-OZ	-	8.07~8.08m	
A12058-OZ	-	8.07m		B10111-OZ	-	8.02~8.04m	
B12044-OZ	-	8.01~8.02m		B10112-OZ	-	8.00~8.03m	
B12045-OZ	-	7.97~8.07m		B10113-OZ	19.6m <sup>2</sup>	8.00~8.06m	一筆を完全に検出
B12046-OZ	-	8.04~8.11m		B10114-OZ	-	8.03~8.07m	
B12047-OZ	-	7.96~8.04m		B10115-OZ	-	8.07~8.13m	
B12048-OZ	16.2m <sup>2</sup>	8.00~8.03m	一筆を完全に検出	B10116-OZ	-	8.06~8.08m	
B12049-OZ	25.2m <sup>2</sup>	7.94~8.01m	一筆を完全に検出	B10117-OZ	-	8.05~8.06m	
B12050-OZ	44.9m <sup>2</sup>	7.94~8.01m	一筆を完全に検出	B10118-OZ	17.8m <sup>2</sup> (推)	8.07~8.12m	
B12051-OZ	-	7.95~7.98m		B10119-OZ	-	8.07~8.12m	
B12052-OZ	6.3m <sup>2</sup> (推)	7.95~7.97m		B10120-OZ	-	8.12~8.16m	
B12054-OZ	-	7.99~8.04m		B10121-OZ	-	8.16m	
B12055-OZ	47.7m <sup>2</sup>	7.99~8.05m	一筆を完全に検出	B10122-OZ	-	8.07~8.17m	
B12056-OZ	40.1m <sup>2</sup> (推)	8.03~8.11m					

## 溝

3 A区に見られる不規則で小規模な溝を除けば、すべて3 B区の大畦畔に伴う溝である。いずれも用水路として機能したと考えられる。

B12053-OS G63-I05EQ/FQ/FR/FS/GS/FT/GTで検出した溝である。大畦畔B12014-OZに伴う。幅2.2~3.0 m、深さ3~5 cm、埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B12071-OS G63-I05HQ/HR/IR/IS/IT/JTで検出した溝である。大畦畔B12021-OZに伴う。幅25~40 cm、深さ3~5 cm、埋土は10Y3/2オリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B12072-OS G63-I05KQ/LQ/LR/MR/MS/NS/NT/OTで検出した溝である。大畦畔B12042-OZに伴う。幅70~90 cmで、北端部のみ広がり2 mに達する。深さ6~15 cm、埋土は7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B12101-OS G63-I05PQ/QQ/QR/RR/RS/SS/ST/TT/TUで検出した溝である。幅50~110 cm、深さ12~15 cm、埋土は5Y4/1灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。本溝付近は削平が著しく畦畔は検出されていないが、大畦畔に伴う溝であった可能性は十分考えられる。

## 足跡

本面は足跡は少なかった。自然流路の影響で部分的に砂礫に覆われた3 A区で比較的まとまって検出したが、明確なものはすべて人であると考えられた。

## 【時期】

本面の時期は、本面の遺構から出土した遺物が弥生時代前期後半を下限とすることから、当該期と考える。ただし3 A区での第11層最下部出土遺物には中期前葉のものが含まれていることから、一部中期にかかる可能性が高い。

## 第12層出土遺物

本層は⑭層と⑮層からなる。⑭層は第12面耕作土である。⑮層は第13面を覆う砂質土であるが、3 A区にのみ認められ、3 B区では⑭層が第13面を直接覆っていた。本層からの検出遺物では、図132~135の個体を図化できた。

**3 A区第12層出土遺物** 弥生土器(3419)、石製品(3420・3421)がある。3419は壺の口縁端部である。3420はサヌカイト製の剝片で、部分的に縁辺にリタッチがある。3421はサヌカイト製のスクレイパーで、厚手の素材を用いる。ともに層位関係等から、弥生時代前期(中葉~後半)に属する。

**3 B区第12層出土遺物** 縄文土器(3422)、弥生土器(3423~3433)、石製品(3434~3436)がある。3422は深鉢の底部で、生駒山西麓産胎土である。縄文時代晩期(長原式)に属する。3423は壺の口縁部である。3424は壺の体部で、遺存最上端にヘラ描き沈線文が2条みられる。3425は壺の体部で、最上端にヘラ描き沈線文が10条みられる。3426は壺の体部で、ヘラ描き沈線文が4条みられる。3427は壺の体部で、遺存最上端にヘラ描き沈線文が3条みられる。3428は壺の体部で、幅広で低い削出し突帯の上面にヘラ描き沈線文が2条以上加えられる。3429は壺の体部で、外面に黒色物質の塗布が確認できる(第4章第4節参照)。3430は、壺の底部である。3431は鉢の口縁で、直線的に上外方に立ち上がる。3432・3433は甕の体部で、遺存最上端にヘラ描き沈線文が2条みられる。これらの弥生土器は、弥生時代前期後半を主体とする。3434~3436はサヌカイト製の剝片で、全くといってよいほど加工痕や使用痕がみられない。剝離縁辺は鋭利である。弥生時代前期(後半主体)に属する。

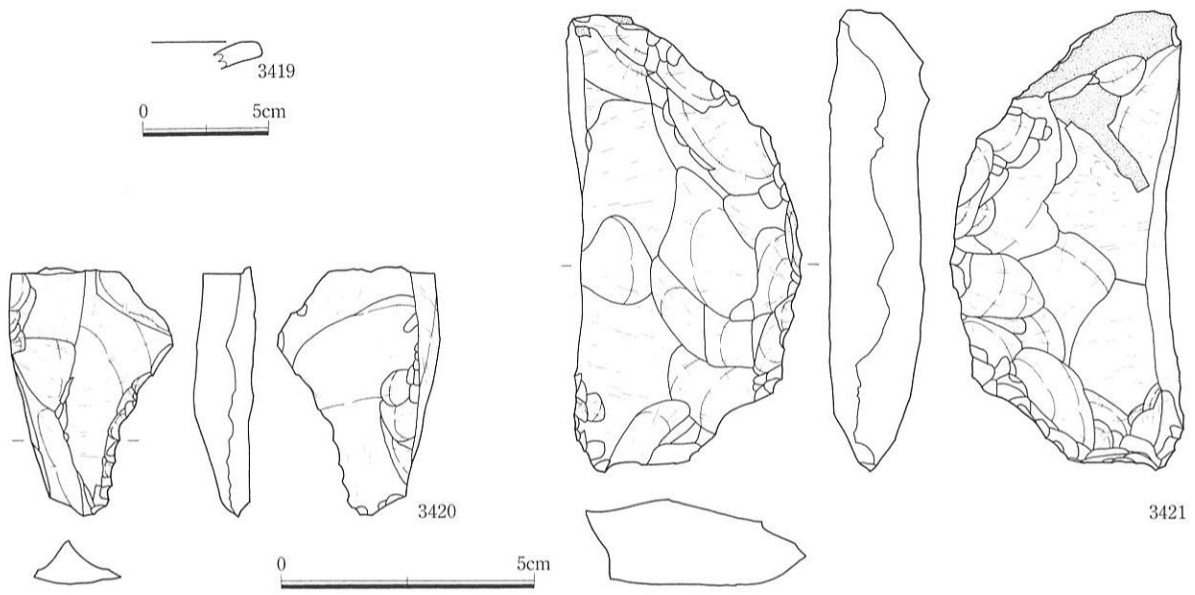


図132 3A区第12層出土遺物

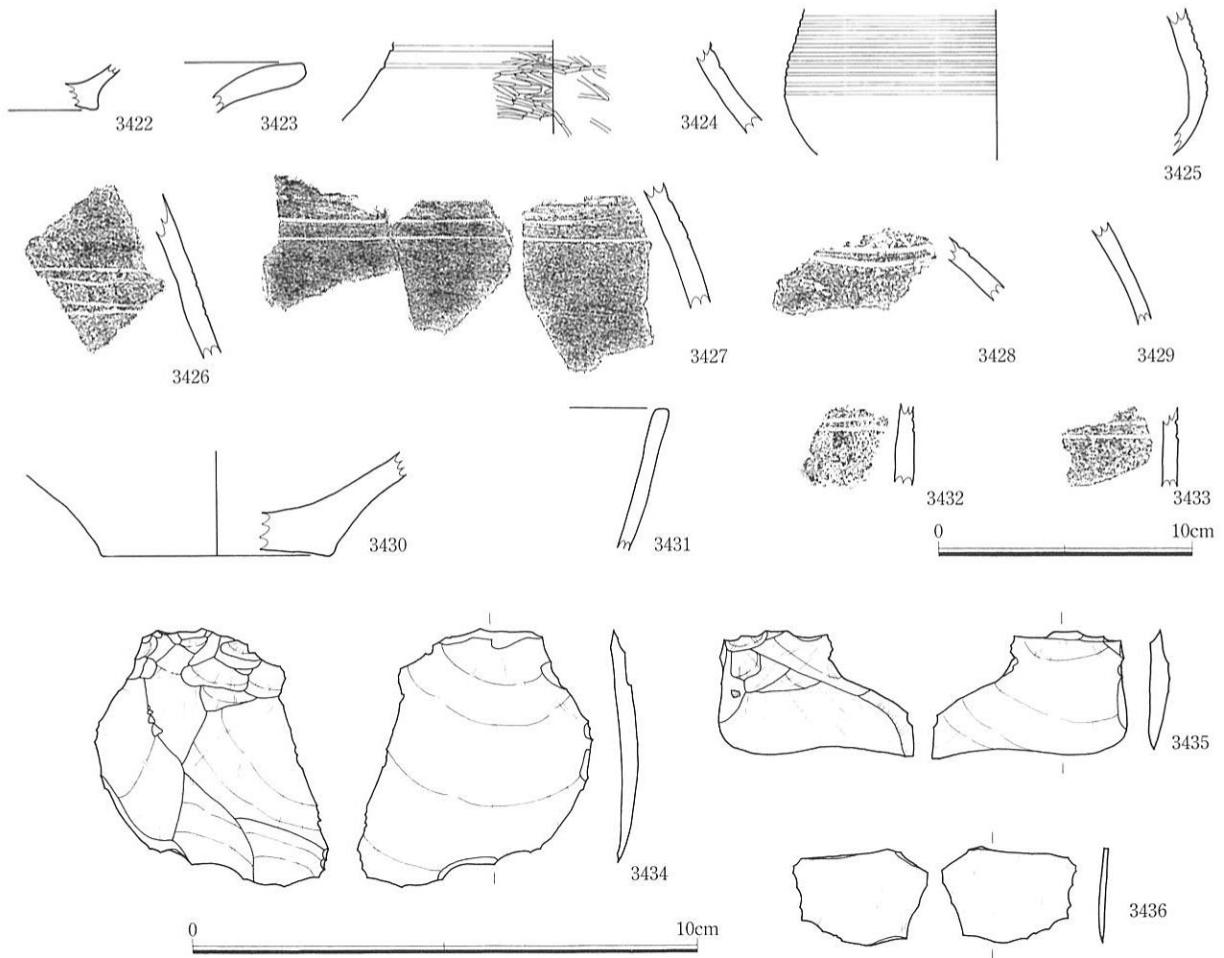


図133 3B区第12層出土遺物

3 A区第12層最下部出土遺物 弥生土器 (3437) がある。壺の口縁部で、端面を持つ。弥生時代前期後半に属する。

3 B区第12層最下部出土遺物 弥生土器 (3438～3440)、石製品 (3441・3442) がある。3438・3439は壺の口縁部、3440は壺の体部である。弥生時代前期後半に属する。3441はサヌカイト製の石鏃で、凹基型である。表裏両面には漆の付着が観察でき、矢柄根挟みへの装着時における接着材と考えられる (第4章第5節参照)。3442はサヌカイト製の剝片である。自然礫面を多く残し縁辺は鋭利である。いずれも弥生時代前期後半に属する。

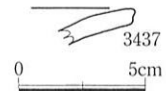


図134 3 A区第12層最下部出土遺物

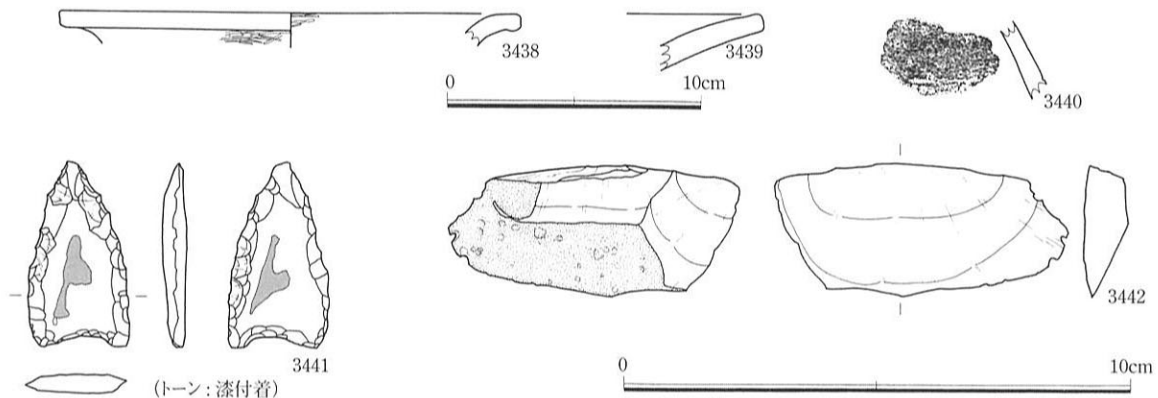


図135 3 B区第12層最下部出土遺物

第13面.....弥生時代前期後半の水田面

#### 【概要】

3 A・3 B区ともほぼ調査区の全面で水田を検出した。

本面のレベルは3 A区がT.P.+7.90～8.20m、3 B区がT.P.+7.80～8.11mである。

#### 【遺構と遺物】

##### 畦畔

3 A区では②層によって本面が覆われていたため、畦畔の遺存状況は比較的良好であった。3 B区では調査区中央部は完全に削平されていたが、西半部と東端部において畦畔を確認した。

**大畦畔** 大畦畔は3 A区で2条、3 B区で4条検出した。3 B区における大畦畔の位置は、ほぼ第12面と同じである。

A13001-OZ G63-I05TD/TE～VE/VF～XFで検出した大畦畔である。規模は幅75～120cm、高さは3～8cmである。本畦畔は用水路としても利用されたと考えられる自然流路A13072-ORに伴う。このA13072-ORを挟んでA13001-OZと対をなす大畦畔A13002-OZは痕跡のみを検出した。なおA13001-OZからは、安山岩系石材の石庖丁 (3443) が出土した。外湾型である。弥生時代前期中葉～後半に属する。

A13009・13010-OZ G63-I05MD/ND/NE/OE/OF/PF/OG/PGで検出した大畦畔である。本畦畔は中央に溝A13022-OSを伴う。この溝を含めた全体の規模は幅1.85～2.85m、高さは2～4cmである。

B13008-OZ G63-I05BS/CS/CTで検出した大畦畔である。規模は幅0.67～2.0m、遺存状況が比較的良好く、高さは5cm程度残っていた。

B13011-OZ G63-I05EQ～GQ/ER～HR/FS～HS/FT～HTで検出した大畦畔である。本畦畔は中央に溝B13001-

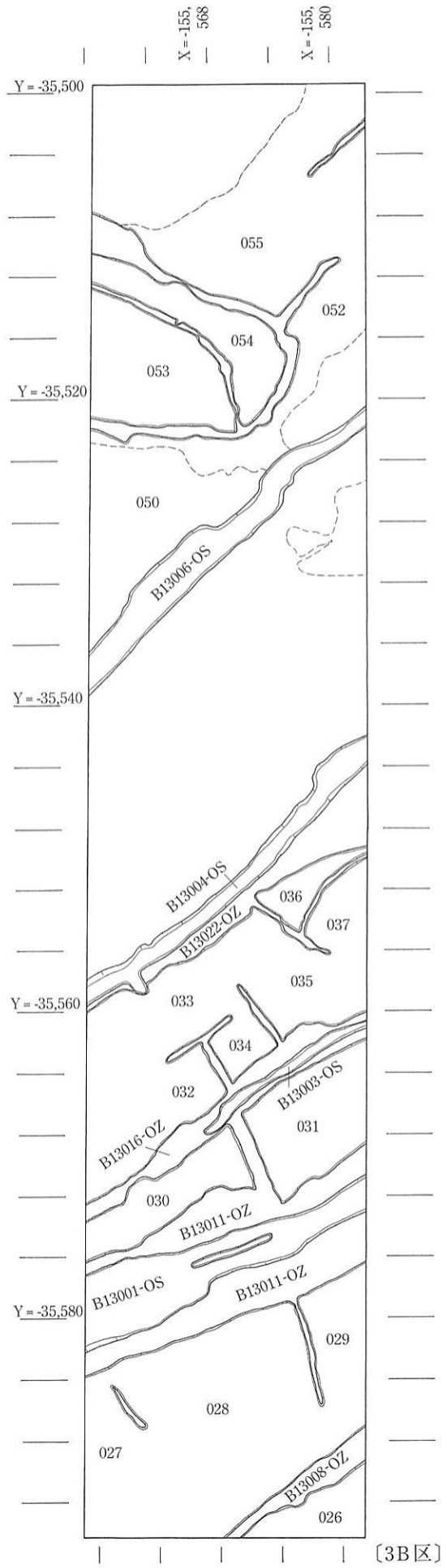
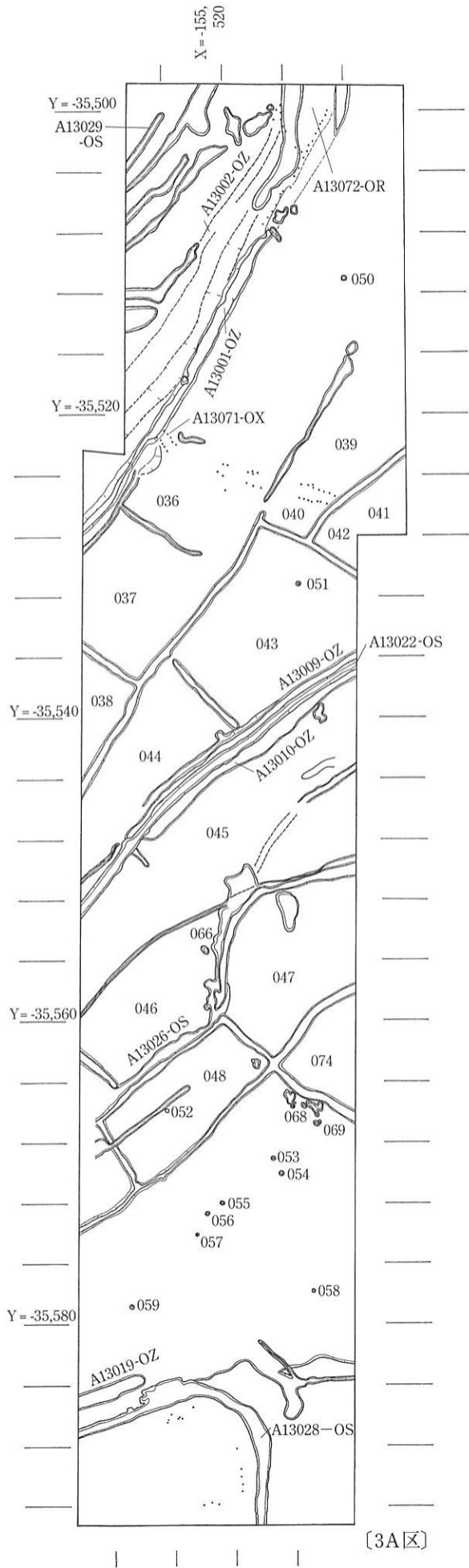


图136 3A·3B区第13面

OSを伴う。規模は幅6.2～8.4m、高さは1～3cmである。

B13016-OZ G63-I05GQ/HQ/HR/IR/IS/JS/IT/JTで検出した大畦畔である。本畦畔は中央に溝B13003-OSを伴う。規模は幅1.2～1.3m、高さは2～4cmである。

B13022-OZ G63-I05KQ/KR/LR/LS/MS/MT/NTで検出した大畦畔である。規模は幅0.6～2.6m、高さは2～3cmである。本畦畔の東には用水路と考えられる溝B13005-OSが流れている。本来は本畦畔と対になる畦畔が溝B13005-OSを挟んで存在したと推測される。

小畦畔 小畦畔は幅30～60cm程度のものが多い。遺存状況の良かった3A区の畦畔では、高さは2～5cm程度残っていた。

水田 本面の水田区画は、3A区では比較的整然と方形ないし長方形の水田が並んでいる。3B区は畦畔の残りが非常に悪かったため、詳細は不明である(表18)。なお3A区の第13面(水田)上からはサヌカイト製の剝片(3444)が、3B区では第13面に接した状態でサヌカイト製の石鏃(3450)が出土した。3450は凹基型に相当し、片面には一部漆が付着する。ともに弥生時代前期中葉～後半に属する。

表18 3A・3B区第13面水田一覧

水田	面積	水田面のレベル	備考	水田	面積	水田面のレベル	備考
A13037-OZ	66.1m <sup>2</sup> (推)	8.11～8.19m		A13048-OZ	51.3m <sup>2</sup>	7.92～7.98m	一筆を完全に検出
A13043-OZ	107.2m <sup>2</sup> (推)	8.08～8.15m		B13034-OZ	11.8m <sup>2</sup>	7.90～7.99m	一筆を完全に検出

### 自然流路

自然流路は3A区で1条検出している。

A13072-OR G63-I05UD/VD/VE/WE/WF/XFで検出した自然流路である。大畦畔A13001・13002-OZが伴う。規模は幅2.5m程度、深さは削平のため特に深い部分でも6～12cmしか残っていない。埋土は植物遺体を多く含んだ5Y3/2オリーブ黒色粘性砂質土である。遺物は出土しなかった。

### 溝

溝は3A区で11条、3B区で6条検出した。ここでは主要な溝に限定して報告する。

A13022-OS G63-I05MD/ND/NE/OE/OF/PF/PGで検出した溝である。大畦畔A13009・13010-OZに伴う。幅50～95cm、深さ5～11m、埋土は5Y5/2灰オリーブ色砂である。遺物は出土しなかった。

A13026-OS G63-I05IC/ID/JD/JE～LE/LF/MF/MGで検出した溝である。畦畔A130012・13013-OZの東脇を流れる溝である。規模は幅0.24～2.05m、深さ3～13cm、埋土は5Y5/3灰オリーブ色砂である。遺物は出土しなかった。

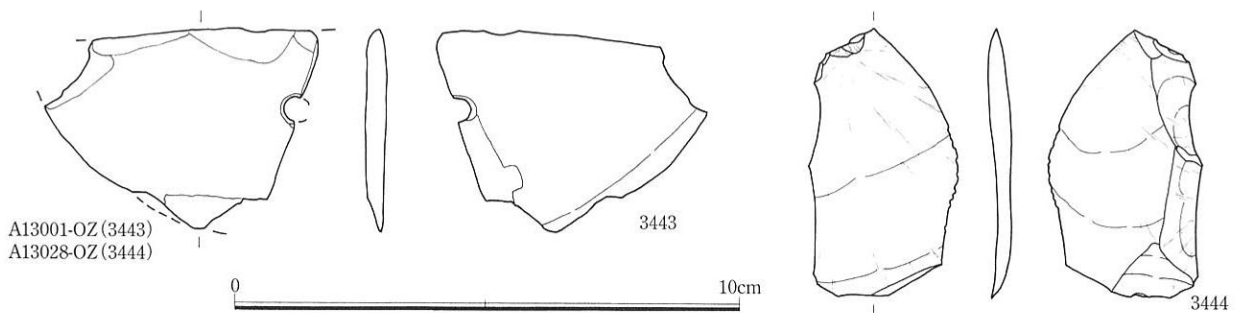


図137 3A区第13面出土遺物(1)



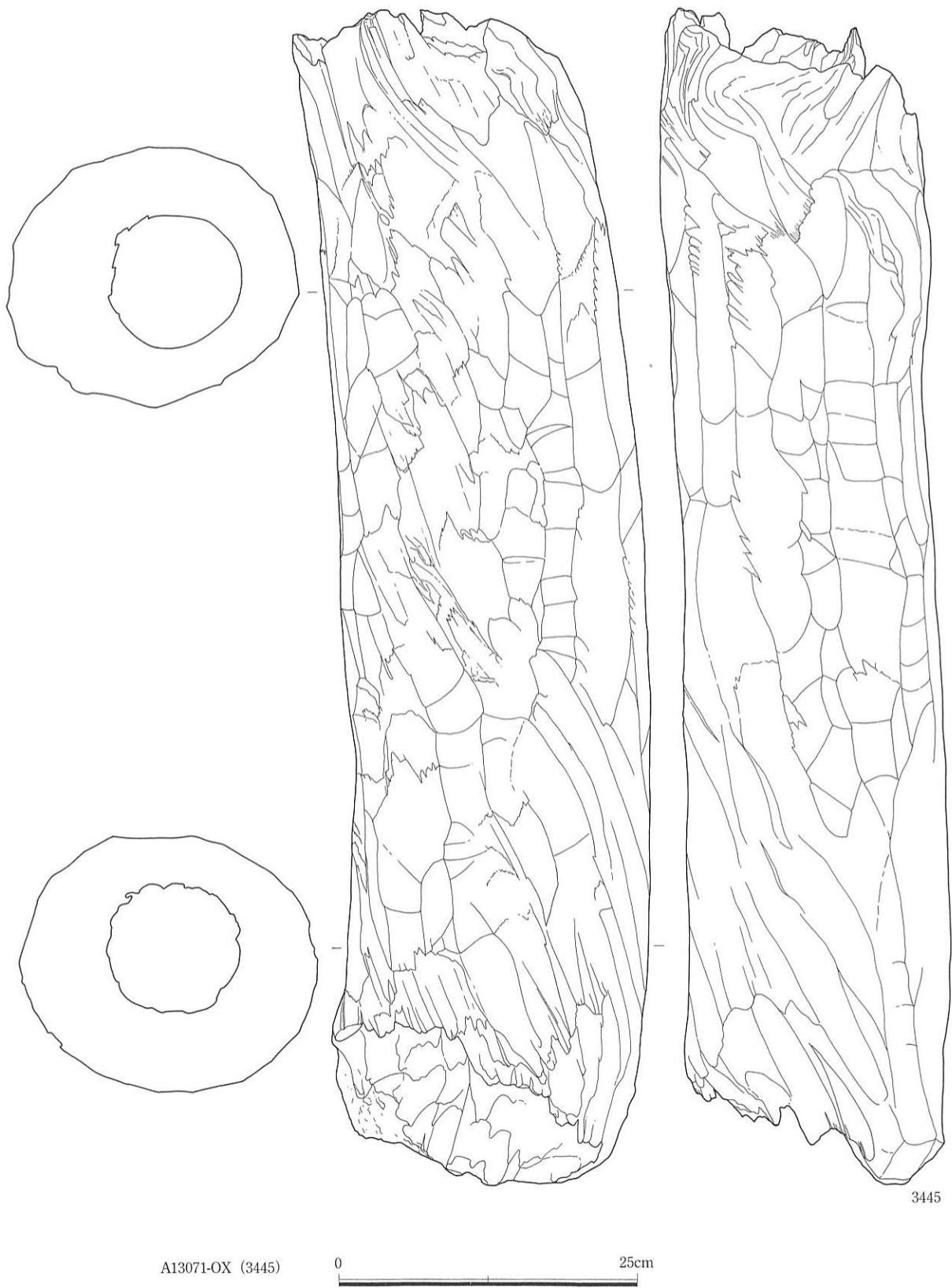


図138 3A区第13面出土遺物(2)



3445  
(外面拓影)

A13071-OX (3445)

0 25cm

图139 3 A区第13面出土遺物(3)

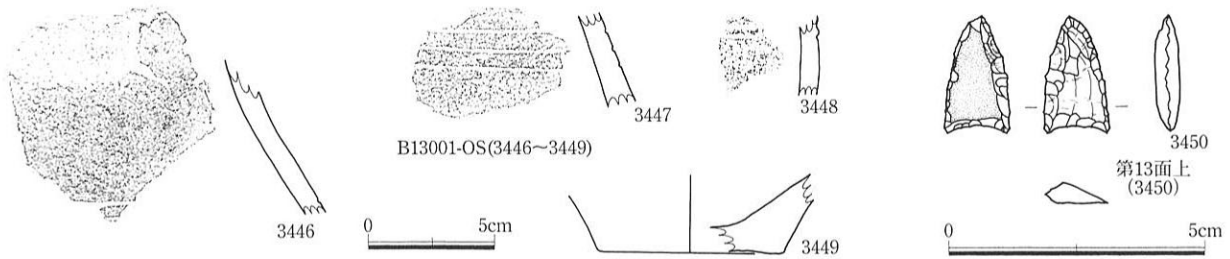


図140 3B区第13面出土遺物

A13029-OS G63-I05CF/DC~DFで検出した、弧を描いて流れる溝である。規模は幅0.5~1.7m、深さ5~10cm、埋土は7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B13001-OS G63-I05EQ/FQ/FR/GR/FS/GS/GTで検出した溝である。大畦畔B13011-OZに伴う。幅1.7~4.5m、深さ3~6cm、埋土は10Y4/1灰色粘質土などである。遺物は弥生土器(3446~3449)が出土した。3446は壺の体部で、最下端にはヘラ描き沈線文が2条みられる。3447は壺の体部で、ヘラ描き沈線文が3条みられる。3448は甕の体部で、最上端にはヘラ描き沈線文が2条みられる。3449は底部である。壺の可能性はある。これらはいずれも弥生時代前期中葉~後半に属する。

B13003-OS G63-I05IR/IS/JS/JTで検出した溝である。大畦畔B13016-OZに伴う。幅45~95cm、深さ2~7cm、埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B13004-OS G63-I05KQ/LQ/LR/LS/MS/MI/NI/OTで検出した溝である。大畦畔B13022-OZに伴う。幅1.0~2.0m、深さ5~9cm、埋土は5Y3/1オリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B13006-OS G63-I05PQ/QQ/RQ/QR/RR/RS/SS/ST/TT/TUで検出した溝である。幅1.0~2.7m、深さ7~12cm、埋土は5Y4/1灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

導水管 (巻頭カラー図版2)

A13071-OX G63-I05TD/TEで検出した導水管である(図141)。露出した状態で検出した。導水管(3445)は丸太材の内部を削り抜いたもので、最大長約99cm、最大径約25cm、内部最大径約11cmを測る。外表面には加工痕が明瞭に残る。樹種はサワラである。左右には固定のために杭が打ち込まれており、周囲にも杭列が認

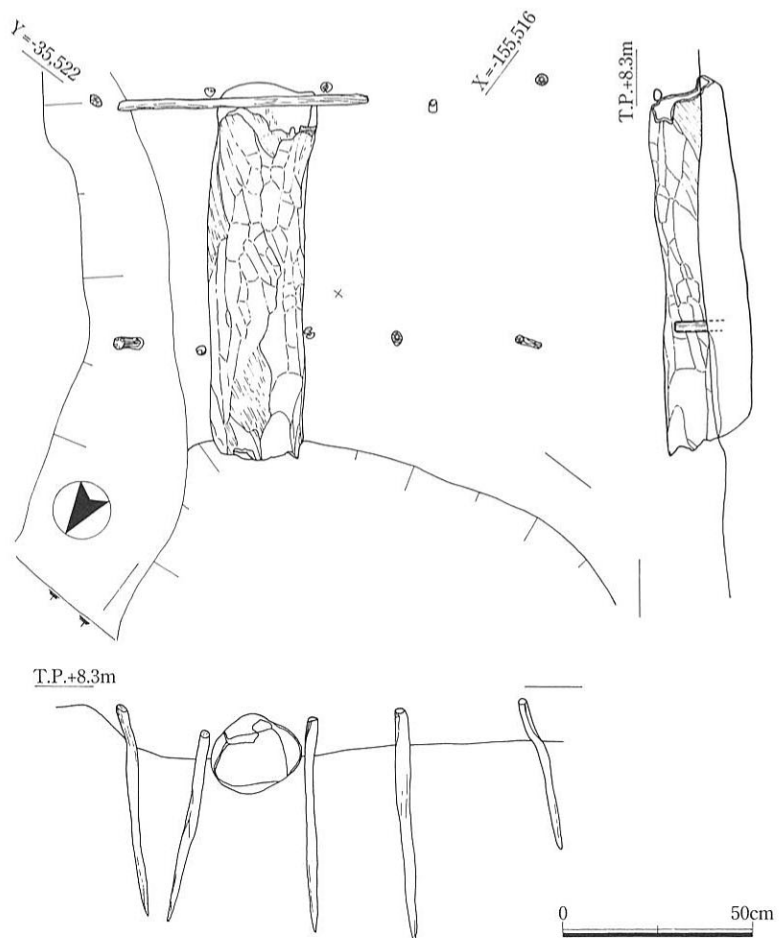


図141 3A区第13面導水管 A13071-OX

められる。杭は現状で直径3～4cm程度、長さは50～60cm程度であった（樹種は第4章第3節参照）。

### ピット

3A区ではピットを12個検出した。柱痕を残すものはない。詳細は表19に記す。

表19 3A区第13面ピット一覧

遺構名	地区割	平面形	長径×短径	深さ	埋土	遺物
A13050-OP	G63-I05WG	円形	32×30cm	11cm	5Y3/2オリーブ黒色粘性砂質土	なし
A13051-OP	G63-I05RG	円形	27×27cm	15cm	5Y3/2オリーブ黒色粘性砂質土	なし
A13053-OP	G63-I05HF	円形	22×22cm	7cm	10G4/1暗緑灰色粘性砂質土	なし
A13054-OP	G63-I05HF	楕円形	27×21cm	5cm	10G4/1暗緑灰色粘性砂質土	なし
A13055-OP	G63-I05HE	隅丸方形	24×24cm	7cm	10G4/1暗緑灰色粘性砂質土	なし
A13056-OP	G63-I05GE	円形	24×22cm	7cm	10G4/1暗緑灰色粘性砂質土	なし
A13057-OP	G63-I05GE	円形	15×15cm	6cm	10G4/1暗緑灰色粘性砂質土	なし
A13058-OP	G63-I05FG	楕円形	29×21cm	8cm	10G4/1暗緑灰色粘性砂質土	なし
A13059-OP	G63-I05FD	円形	22×22cm	7cm	10G4/1暗緑灰色粘性砂質土	なし
A13066-OP	G63-I05LE	楕円形	50×41cm	17cm	5Y3/2オリーブ黒色粘性砂質土	なし
A13068-OP	G63-I05IG	楕円形	39×28cm	5cm	10G4/1暗緑灰色粘性砂質土	なし
A13069-OP	G63-I05IG	不整形	47×38cm	6cm	10G4/1暗緑灰色粘性砂質土	なし

### 足跡

本遺構面では3A区において多く足跡を検出した。3B区では削平が著しいため、足跡は非常に少ない。痕跡が明瞭で、判断のつくものはすべて人であった。

### 【時期】

本遺構面の時期は弥生時代前期後半と考えられる。

### 第13層出土遺物

本層は第13面耕作土である㊸層が相当する。本層からの検出遺物では、図142～146の個体を図化できた。

**3A区第13層出土遺物** 弥生土器（3451～3463）、土製品（3464・3465）、木製品（3466）、石製品（3467）がある。3451は壺の口縁部である。3452は壺の頸部で、最下端にはヘラ描き沈線文が2条みられる。3453は壺の体部で、遺存最上端に低い削出し突帯の一部がめぐる。3454は壺の体部で、最下端にヘラ描き沈線文が2条みられる。3455～3459は壺（ないし鉢）の底部である。3460は甕の体部である。ヘラ描き沈線文が2条みられる。3461は甕の口縁部で、生駒山西麓産胎土である。3462は甕の体部で、最下端にヘラ描き沈線文が2条みられる。3463は甕の体部で、最上端にヘラ描き沈線文が2条みられる。いずれも弥生時代前期中葉～後半に属する。3464・3465は土器片を転用加工した円盤である。3466は小棒状品で、ヤス状木製品となる可能性がある。樹種は不明である。3467は安山岩系石材製の石庖丁で、外湾型に相当する。いずれも層位関係等から弥生時代前期中葉～後半に属する

**3B区第13層出土遺物** 縄文土器（3468・3469）、弥生土器（3470～3501）、土製品（3502～3505）、石製品（3506）などがある。3468は深鉢の体部である。外面の屈曲部以下はヘラケズリ、他は条痕調整される。縄文時代晩期（滋賀里IIIb～IV式）に属する。3469は深鉢の口縁部付近で、口縁端からやや下がった位置に突帯をめぐらせ、突帯上と口縁上端に刻目を加える。生駒山西麓産胎土である。縄文時代晩期（船橋式～長原式）に属する。3470～3473は壺の口縁部で、3471は器壁が薄く、遺存最下端にヘラ描き沈線文を1条めぐらす。3474～3479は壺の体部ないし頸部で、ヘラ描き沈線文を2～4条（以上）めぐ

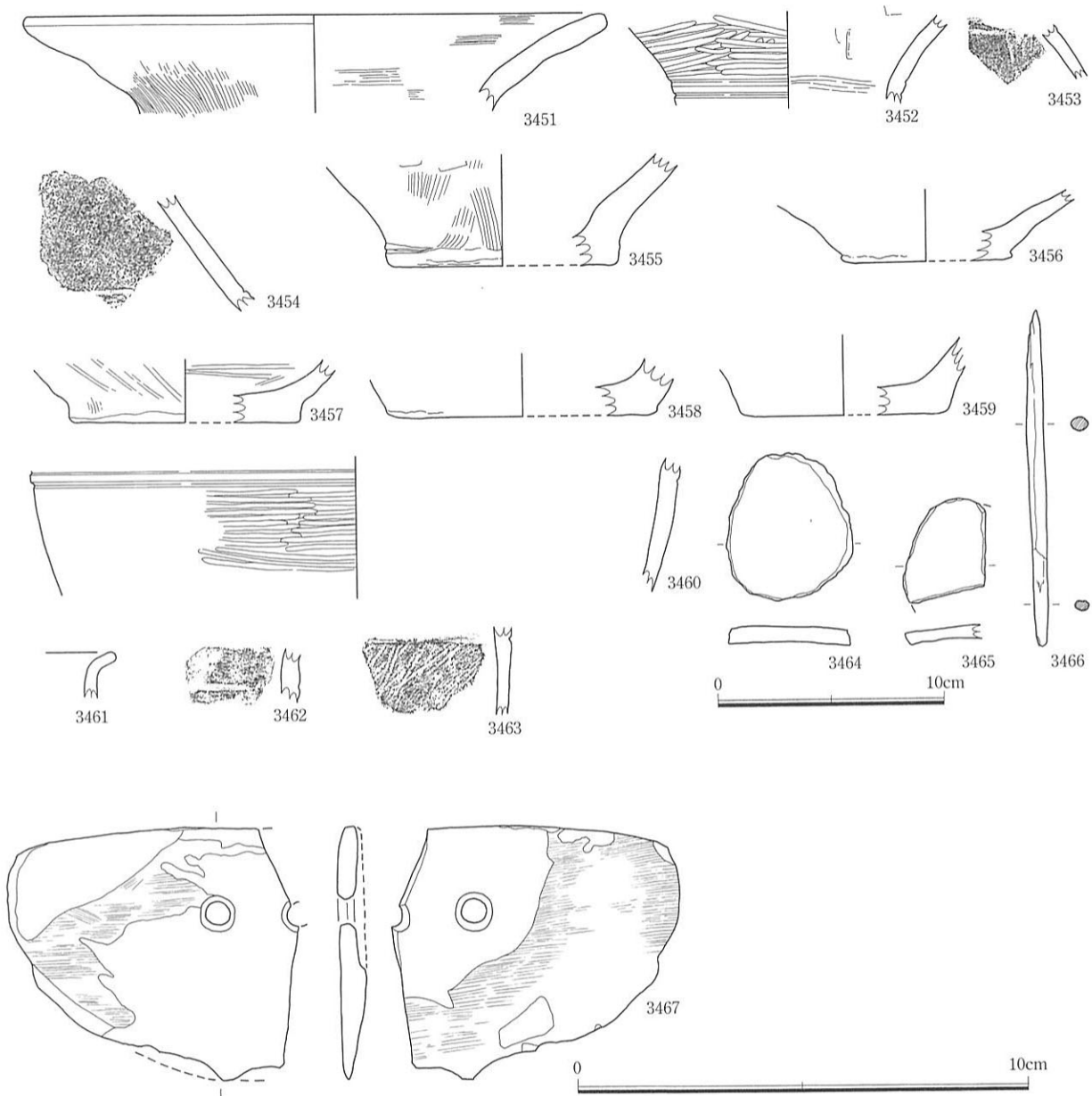


図142 3A区第13層出土遺物

らす。3480は壺の体部で、2条一帯となった断面M字形の貼付け突帯（複条貼付け突帯文）をめぐらし上部に刻目を加える。生駒山西麓産胎土である。3481・3482は壺の体部で、外面には赤色顔料が塗布され、3481では文様を構成するようである。3483・3484は壺蓋で、3483の外面には黒色物質が塗布され、3484の頂部には焼成前の穿孔が穿たれる。3485～3492は壺（ないし鉢）の底部で、3485の側面にはヘラ描き沈線文が4条めぐる。この手法は長門地域に多い。3493は鉢の口縁部である。生駒山西麓産胎土である。3494は甕の口縁部付近で、口縁端部には刻目、口縁下にはヘラ描き沈線文が3条めぐらされ、沈線間には異種工具によるヘラ描き山形文が配される。3495は甕の口縁部付近で、ヘラ描き沈線文が3条めぐる。3496は甕の口縁部で、端面にヘラ描き沈線文が1条加えられる。3497は甕の口縁部付近で、ヘラ描き沈線文が3条めぐる。3498～3501は甕の底部で、3499の内面には炭化物が付着する（第4章第4節参照）。これらの弥生土器は弥生時代前期中葉～後半に属する。3502～3504は土器片を転用加工した円盤である。本来の器種は、3502・3503は壺、3504は甕であった可能性が強い。3505は投弾で、一

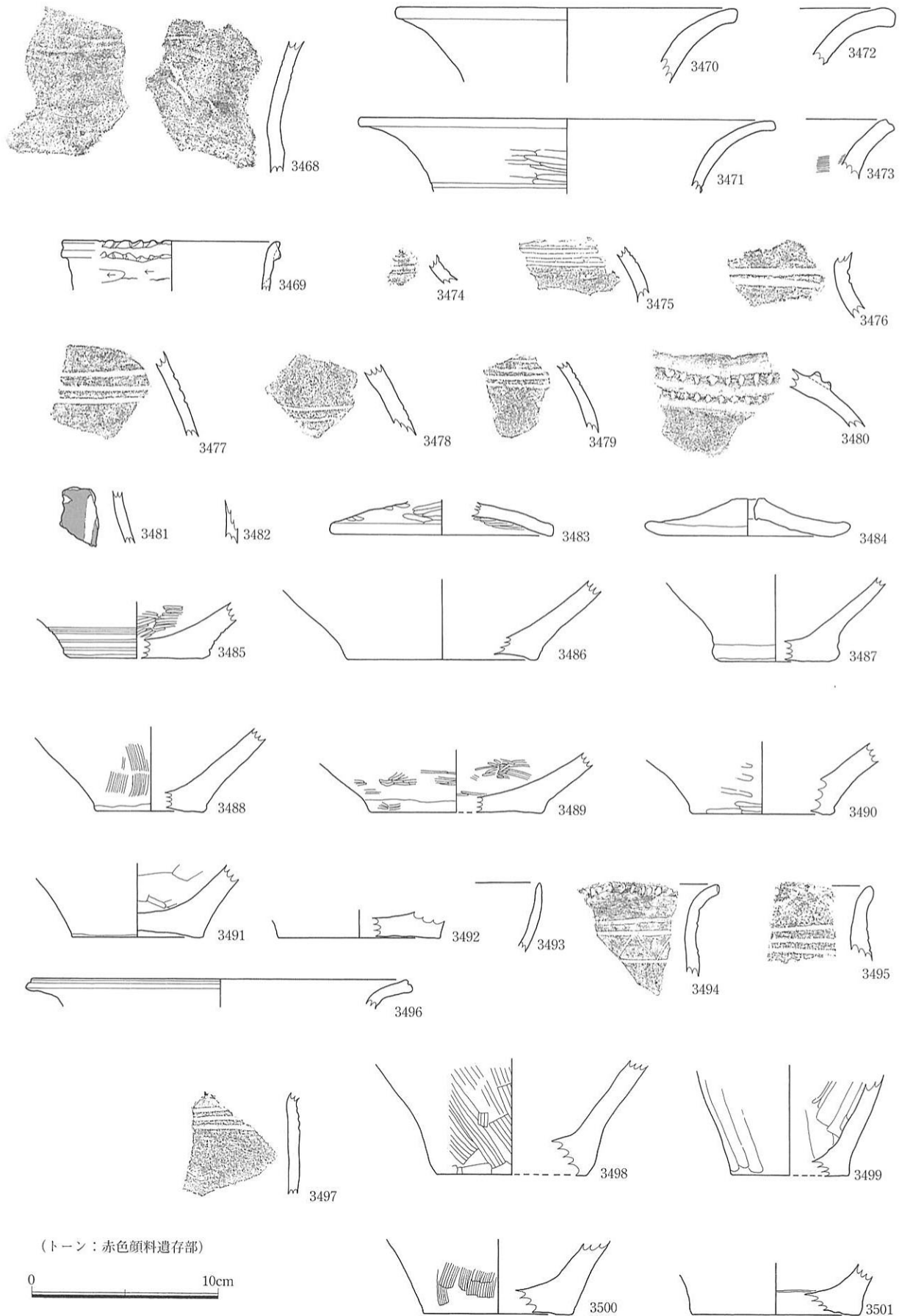


図143 3B区第13層出土遺物(1)

部が欠損する。現状で、27gを量る。尖頭長型に相当する。3506はサヌカイト製の石鏃で、平基型に相当する。これらは層位関係等から弥生時代前期中葉～後半に属する。

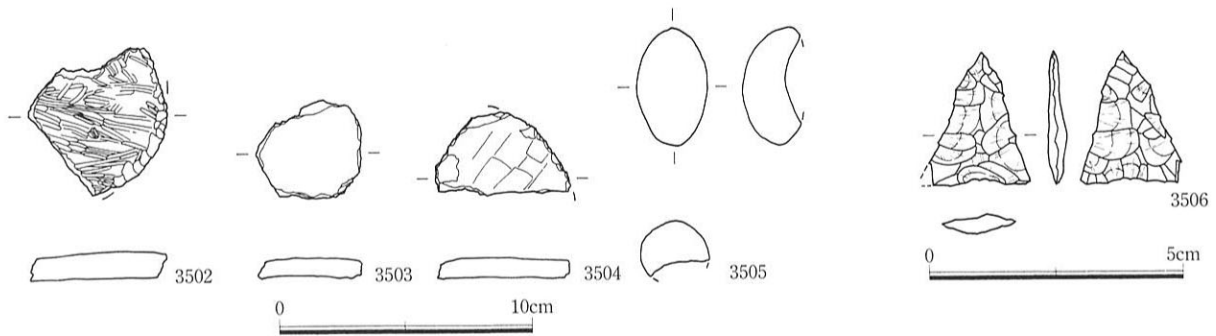


図144 3B区第13層出土遺物(2)

3A区第13層最下部出土遺物 弥生土器(3507～3509)がある。3507は壺の口縁部である。3508は壺の体部で、最上端にヘラ描き沈線文が1条みられる。3509は壺の体部で、ヘラ描き沈線文が7条みられる、沈線文帯の上部を削出し突帯状に低くする。いずれも弥生時代前期中葉～後半に属する。

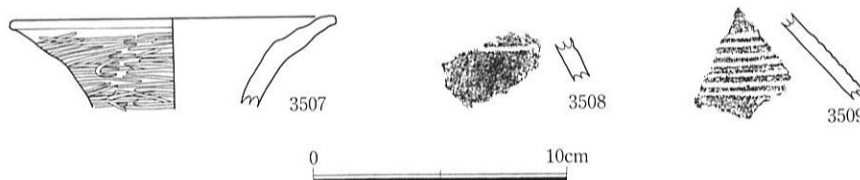


図145 3A区第13層最下部出土遺物

3B区第13層最下部出土遺物 弥生土器(3510)、石製品(3511)がある。3510は壺の体部で、削出し突帯をめぐらし、その上部には現状でヘラ描き沈線文が1条みられる。3511は砂岩製の砥石片で、砥面が一部に確認できる。部分的に加熱を受けた形跡がみられる。柱状型に相当する。ともに弥生時代前期中葉～後半に属する。

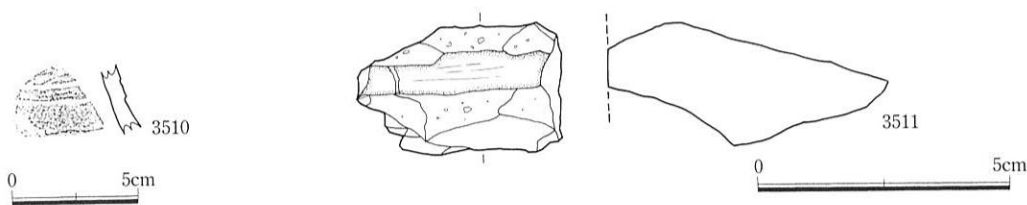


図146 3B区第13層最下部出土遺物

第14面……………弥生時代前期(中葉～)後半の水田面

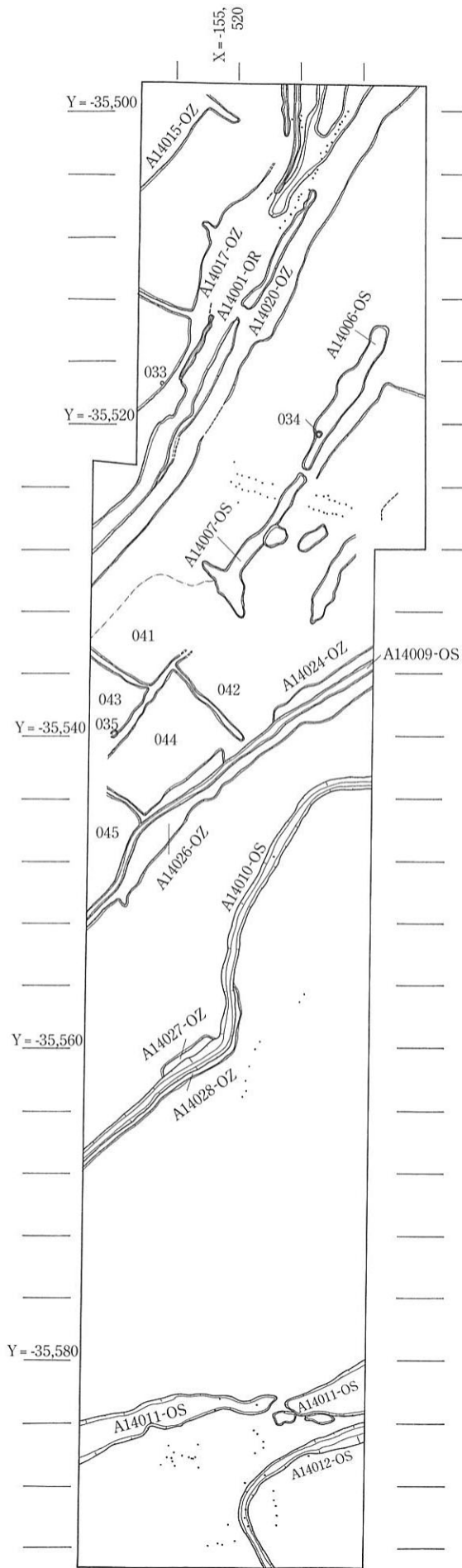
【概要】

3A・3B区ともほぼ調査区の全面で水田を検出した。しかし両区とも削平が著しく、畦畔の遺存状況は悪かった。本面のレベルは3A区がT.P.+7.63～8.09m、3B区がT.P.+7.68～8.02mである。

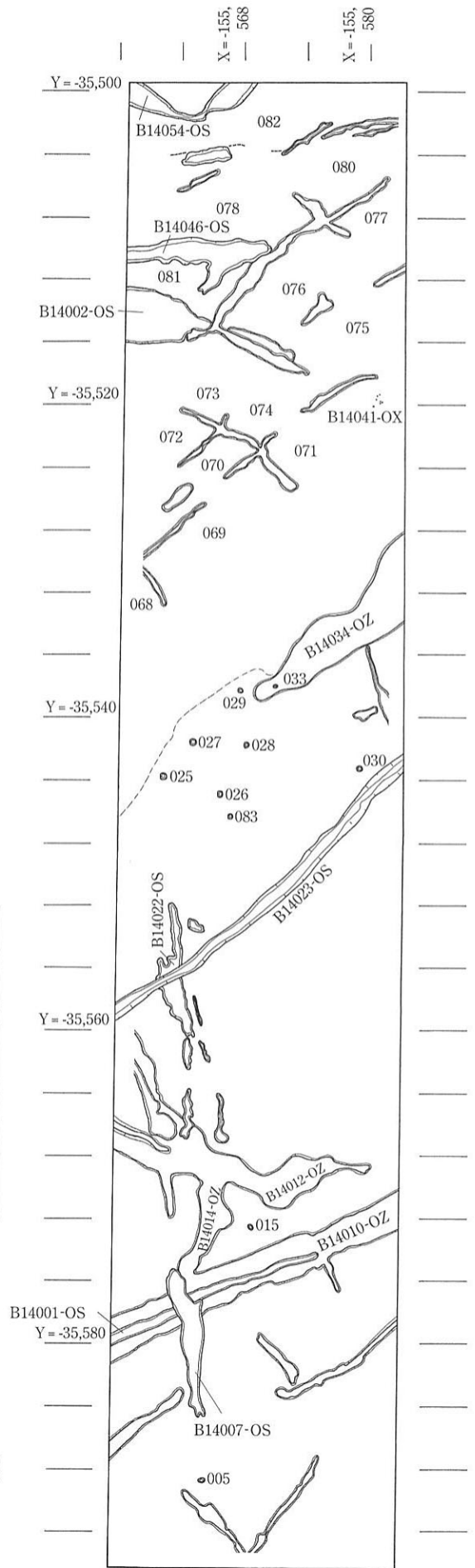
【遺構と遺物】

畦畔

本面の畦畔は削平のため、高まりをほとんど残さないものが多かった。



[3A区]



[3B区]

图147 3A·3B区第14面



**大畦畔** 大畦畔は3A区で4条、3B区で2条を検出した。

A14015-OZ G63-I05YD/YEで検出した大畦畔である。調査区北東隅部で検出したため規模は不明であるが、現状で幅2.3mあるため、大畦畔に含めた。高さは1～3cmである。

A14017・14020-OZ G63-I05SD～UE/TE～XE/VF～XF/WG～YG/YHで検出した大畦畔である。本畦畔は流路A14001-ORに伴う。流路を含めた全体の規模は幅3.8～6.2m、高さは2cmである。

A14024・14026-OZ G63-I05MD～OD/NE/OE/OF/PF/PG/QGで検出した大畦畔である。本畦畔は中央に溝B14009-OSに伴う。全体の規模は幅1.9～2.5m、高さは1cmである。

A14027・14028-OZ G63-I05ID/JD/JE/KEで検出した大畦畔である。部分的にわずかな高まりが残っているにすぎない。本畦畔は中央に溝B14010-OSに伴う。全体の規模は幅1.8m、高さは2cmである。

B14010-OZ G63-I05FQ/FR/GR/FS/GS/GT/HTで検出した大畦畔である。本畦畔は中央に溝B14001-OSに伴う。全体の規模は幅2.2～2.6m、高さは1～2cmである。

B14012・14014-OZ G63-I05HQ～JQ/GR～IR/HS/HTで検出した大畦畔である。完全に削平されており痕跡から復元したが、形状が一定せず疑問も残る。規模は幅0.4～3.0mである。

B14034-OZ G63-I05PQ/QQ/PP～PR/QT/RTで検出した大畦畔である。規模は幅1.1～3.0m、高さは1～2cmである。

**小畦畔** 本面は小畦畔の残りが非常に悪い。規模はおおよそ幅30～50cm程度である。

**水田** 3A区で一筆の水田を検出しており、面積は41.2㎡（推）であるが、3B区は全く不明である。ただし断続的に残る畦畔から見る限りでは、3A区に比べ面積が小さいように見受けられる。

### 自然流路

3A区で自然流路1条を検出した。

A14001-OR G63-I05SD～UD/UE～WE/WF/XF/XG/YGで検出した流路である。直上の第13面の自然流路A13072-ORの流れのために削られ正確な規模は不明であるが、幅2.0～2.5m、深さ5～15cm程度と推測される、埋土は10GY3/1暗緑灰色砂混土である。遺物は、弥生土器（3512）が出土した。壺の口縁部付近で、遺存最下端には削出し突帯の一部が確認できる。弥生時代前期中葉～後半に属する。なお本流路の中で特に深くえぐれた部分（現地調査での呼称は「A14003-OS」）から土製品（3513）が出土した。投弾の完形品で、約26gを量る。尖頭長型である。層位関係等から、弥生時代前期中葉～後半に属する。

### 溝

3A区で13条、3B区で22条検出した。比較的規模の大きい主要な溝のみ報告する。

A14009-OS G63-I05MD/ND/NE/OE/OF/PF/PGで検出した溝である。大畦畔A14024・14026-OZに伴う。規模は幅40～60cm、深さ7cm、埋土は5GY3/1暗オリーブ灰色砂混土である。遺物は出土しなかった。

A14010-OS G63-I05ID/JD/JE～ME/MF/NF/NG/OGで検出した溝である。大畦畔A14027・14028-OZに伴う。規模は幅65～90cm、深さ7～12cm、埋土は7.5Y4/1灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

A14011-OS G63-I05DC/EC/DD/ED/EE/EF/EGで検出した溝である。規模は幅0.8～2.0m、深さ3～10cm、埋土は10GY4/1暗緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

A14012-OS G63-I05CF/DF/DGで検出した溝である。弧を描くように流れる。規模は幅55～100cm、深さ6～12cm、埋土は2.5Y3/1黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

B14001-OS G63-I05FQ/FR/GR/GS/GTで検出した溝である。大畦畔B14010-OZに伴う。規模は幅35～65cm、深さ4cm、埋土は10Y4/1灰色粘質土である。遺物は、弥生土器（3514）が出土した。壺の体部で、外面

の一部に赤色顔料が確認できる。弥生時代前期中葉～後半に属する。

B14002-OS G63-I05VQ/VRで検出した遺構である。規模は幅0.8～3.3m、深さ5cm、埋土は植物遺体を含んだ5Y3/1オリーブ黒色粘質土である。遺物は弥生土器(3515)が出土した。壺の頸部で、遺存最下端に削出し突帯の一部がみられる。弥生時代前期中葉～後半に属する。

B14023-OS G63-I05KQ/KR/LR/LS/MS/MT/NT/NU/OUで検出した溝である。規模は幅55～100cm、深さ12cm、埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色砂混粘質土である。遺物は出土しなかった。

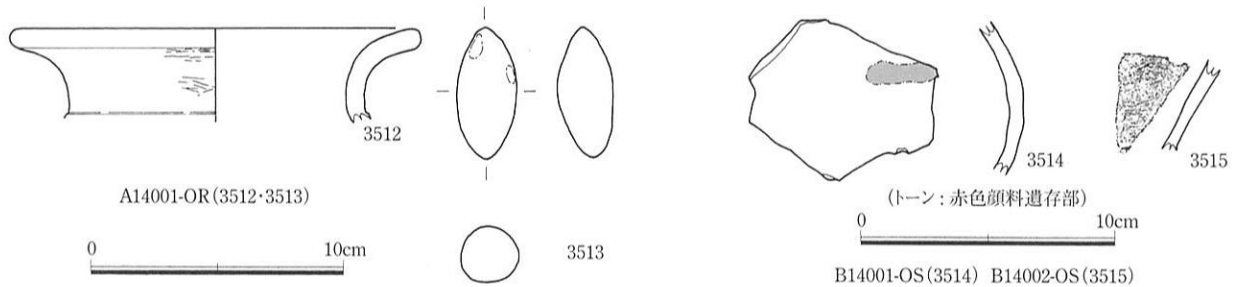


図148 3 A区第14面出土遺物

図149 3 B区第14面出土遺物

### ピット

ピットは3 A区で3個、3 B区で10個検出した(表20)。特にB区中央に7個が集中している。

表20 3 A・3 B区第14面ピット一覧

遺構名	地区割	平面形	長径×短径	深さ	埋土	遺物
A14035-OP	G63-I05PD	楕円形?	36×?cm	4cm	10Y3/1オリーブ黒色粘土	なし
A14034-OP	G63-I05TG	円形	38×34cm	3cm	10Y3/1オリーブ黒色粘土	なし
A14033-OP	G63-I05UD	円形	21×20cm	4cm	10Y3/1オリーブ黒色粘土	なし
B14005-OP	G63-I05CS	楕円形	38×31cm	9cm	5Y3/1オリーブ黒色粘質土	なし
B14015-OP	G63-I05GS	楕円形	35×24cm	9cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B14083-OP	G63-I05NR	円形	28×26cm	6cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B14026-OP	G63-I05NR	楕円形	37×30cm	9cm	10Y4/1灰色砂混粘質土	なし
B14025-OP	G63-I05OQ	円形	37×37cm	10cm	10Y4/1灰色砂混粘質土	なし
B14027-OP	G63-I05OR	円形	39×38cm	12cm	10Y4/1灰色砂混粘質土	なし
B14028-OP	G63-I05OR	不整楕円形	35×29cm	12cm	10Y4/1灰色砂混粘質土	なし
B14029-OP	G63-I05PR	楕円形	28×28cm	8cm	10Y4/1灰色砂混粘質土	なし
B14033-OP	G63-I05PS	円形	20×20cm	8cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B14030-OP	G63-I05OT	円形	35×34cm	9cm	10Y4/1灰色粘質土	なし

### 足跡

本面は削平が著しいため、足跡は3 A区中央部においてまとめて認められるにすぎない。ただ上半が削平されているため、足跡の判別は困難である。

### 【時期】

本面の時期は弥生時代前期(中葉～)後半と考えられる。

### 第14層出土遺物

本層は㉗層と㉘層からなる。本層からの検出遺物では、図150・151の個体を図化できた。

3 A区第14層出土遺物 弥生土器(3516～3526)、石製品(3527・3528)がある。3516は壺の頸部で、

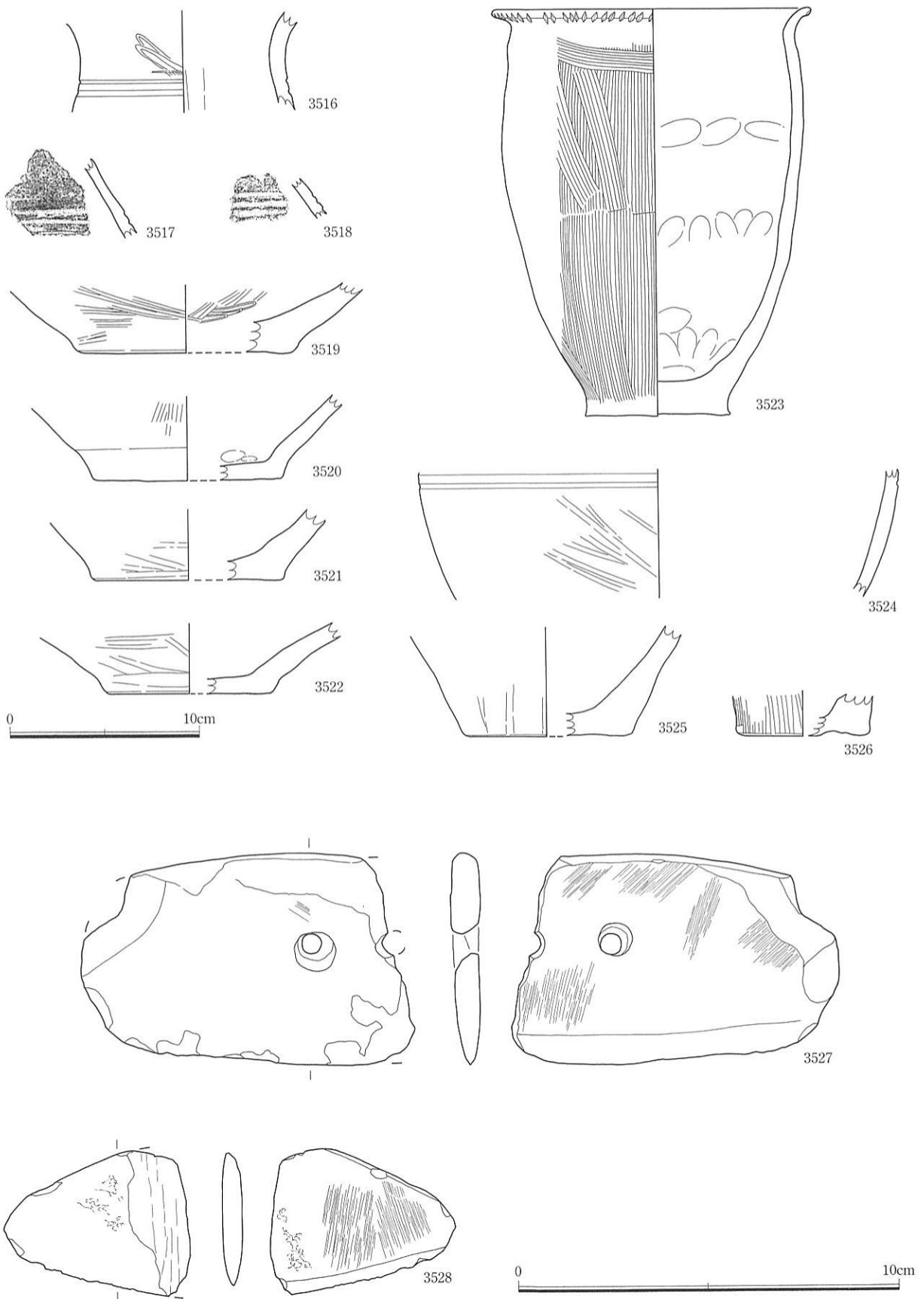


図150 3A区第14層出土遺物

ヘラ描き沈線文が2条みられる。生駒山西麓産胎土である。3517・3518は壺の体部で、最下端にはヘラ描き沈線文が2、3条みられる。3519～3522は壺の底部で、3519の外面には黒色物質が塗布される。3523は甕で、ほぼ全容が判明する。体部は無文であるが、口縁端部には刻目が加えられる。この刻目は口縁端の下方に偏った位置に施されており、和泉地域（大阪府南部）の甕口縁端部の刻目手法と共通性をみせる。3524は甕の体部で、遺存最上端にはヘラ描き沈線文が2条みられる。3525・3526は甕の底部である。これらは弥生時代前期中葉～後半に属する。3527は安山岩系石材（流紋岩の可能性あり）製の石庖丁である。長方形ないし楕円型に相当する。3528は緑色片岩製の石庖丁である。杏仁型に相当する。いずれも層位関係等から弥生時代前期中葉～後半に属する

3 B区第14層出土遺物 縄文土器（3529）、弥生土器（3530～3539）、石製品（3540）がある。3529は深鉢の口縁部付近で、体部から屈折して、口縁部がやや外反しながら上外方にのびる。端部は先すばまりになり、端部には刻目はない。縄文時代晩期（滋賀里III b式）に属する。3530・3531は壺の口縁部付近で、ともに口縁端面を持ち、3530の遺存最下端にはヘラ描き沈線文が2条みられ、3531の口縁端付近には紐通しの円孔が穿たれる。3532は壺の体部で、遺存最下端には段手法がみられる。3533は壺の体部で、ヘラ描き沈線文が3条がみられる。3534は壺の頸部で、削出し突帯とその上部にヘラ描き沈線文が1条（以上）みられる。3535は口縁部をのぞき完存する壺で、文様はない。小形品である。3536・3537

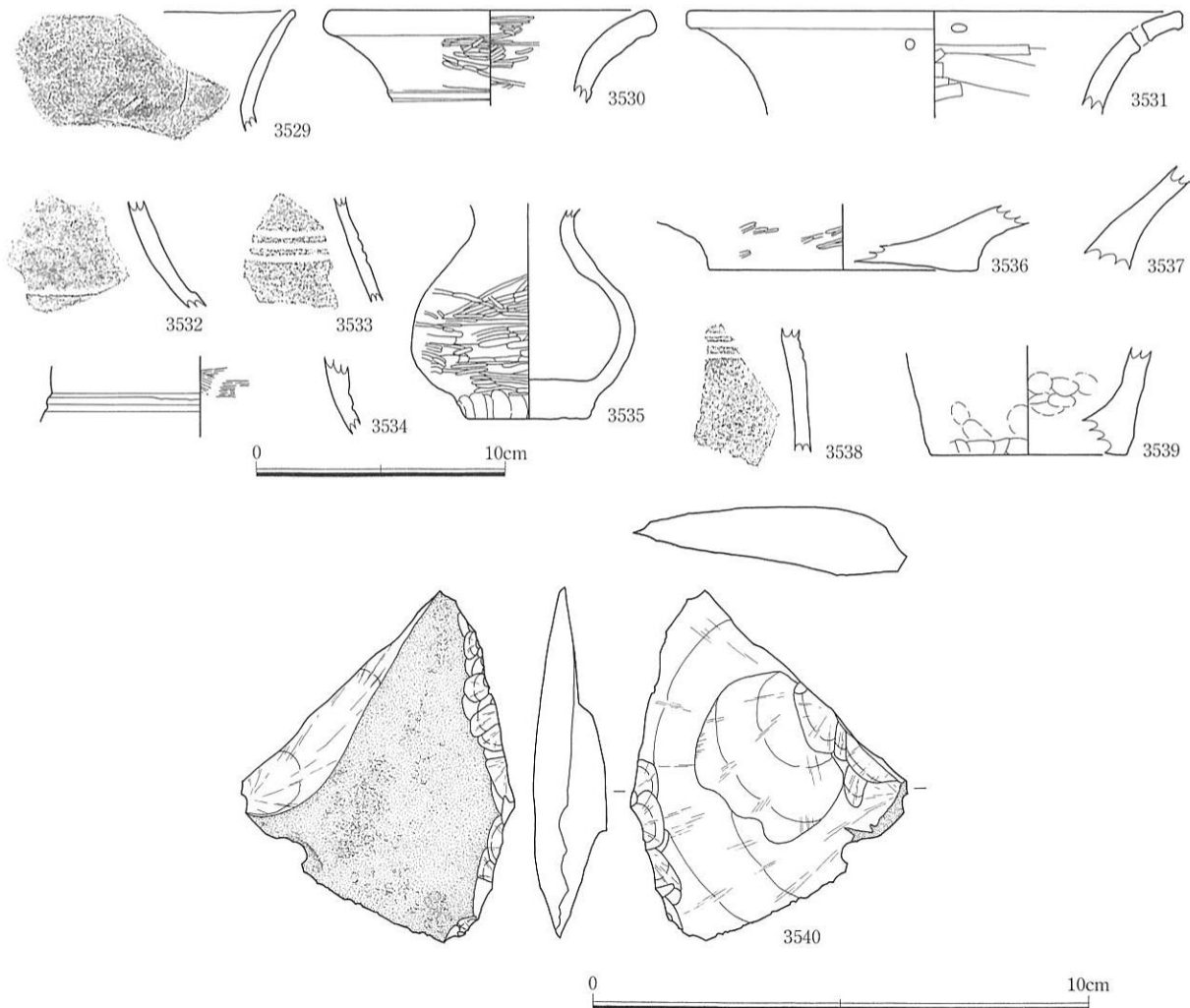


図151 3 B区第14層出土遺物

は壺の底部である。3538は甕の体部で、口縁部の直下にはへら描き沈線文が3条みられる。3539は甕の底部である。これらは弥生時代前期中葉～後半に属する。3540はサヌカイト製のスクレイパーで、自然礫面を多く残し、一側縁にリタッチを加え刃部としている。層位関係等から弥生時代前期中葉～後半に属する。

第15面……………弥生時代前期中葉の小集落

【概要】

本面では溝、土坑、ピットを検出した。3A区ではピットの並びから掘立柱建物が復元できる可能性があり、3B区でも多くのピットが検出されていることから、小規模な集落の存在が推定できる。本面の基盤層となる⑩層は3A・3B区とも西半部では約10cm程度の厚みがあるが、東半部ではほとんど確認されない。これは第16面で検出した自然河川を埋める厚い砂礫層の盛り上がり为本面検出面にまで達しているためである。両調査区東半部では砂礫層の窪み部分にあたかも島状に⑩層が認められるところをみると、高まった部分には当初から⑩層が堆積しなかったわけではなく、いったん堆積した後に高まり部分が削平を受けたものと考えられる。

本面のレベルは3A区がT.P.+7.48～7.94m、3B区がT.P.+7.74～7.86mである。

【遺構と遺物】

溝

溝は3A区で8条、3B区で13条検出した。主要なものを報告する。

A15001-OS G63-I05EE/EF/EGで検出した溝である。規模は幅30～70cm、深さ2～3cm、埋土は5YR1.7/1黒色粘土である。遺物は、弥生土器(3541)が出土した。壺の体部で、遺存最下端にへら描き沈線文が1条みられる。弥生時代前期中葉～後半に属する。なお本溝とA15002・15004・15027・15028-OSは本来同一の溝であったと思われる。

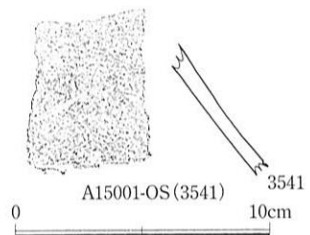


図152 3A区第15面出土遺物

A15006-OS G63-I05JD/JE～LE/MF/NF/NG/OGで検出した溝である。規模は幅50～75cm、深さ5～7cm、埋土は10GY3/1暗緑灰色粘土である。遺物は出土しなかつた。

本溝は第14・13面においてもA14010-OS、A13026-OSという大畦畔に伴う用水路として維持されていく。本溝は畦畔に伴わないが、削平によって失われた可能性も否定できない。本溝が大畦畔に伴う用水路であったとすると、集落域に接して水田が広がっていた可能性も考えられる。

B15001-OS G63-I05FQ/FR/GR/GS/GT/HTで検出した溝である。規模は幅1.35～3.2m、深さ7～10cm、埋土は上層が7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土、下層は10Y3/1オリーブ黒色砂混粘質土である。遺物は、縄文土器(3542～3544)、弥生土器(3545～3560)が出土した。3542～3544は深鉢の体部である。この3点は同一個体と考えられる。縄文時代晩期に属する。3545は壺の口縁部である。3546は壺の体部で、やや低い削出し突帯がめぐり、その上部にへら描き沈線文が1条加えられる。3547は壺の体部で、最下端に低い削出し突帯がめぐり、その上部にへら描き沈線文が2条(以上)加えられる。3548・3549は壺の体部で、最上端にへら描き沈線文が1条みられる。3550は壺の体部で、最下端にへら描き沈線文が2条みられる。外面に黒色物質が塗布される(第4章第4節参照)。3551～3559は壺の底部である。3560は甕の底部で、内面に炭化物が厚く付着する。これらの弥生土器は、弥生時代前期中葉～後半に属する。

B15002-OS G63-I05FQ/ER/FRで検出した溝である。規模は幅1.0m、深さ4～5cm、埋土は7.5Y3/1オ

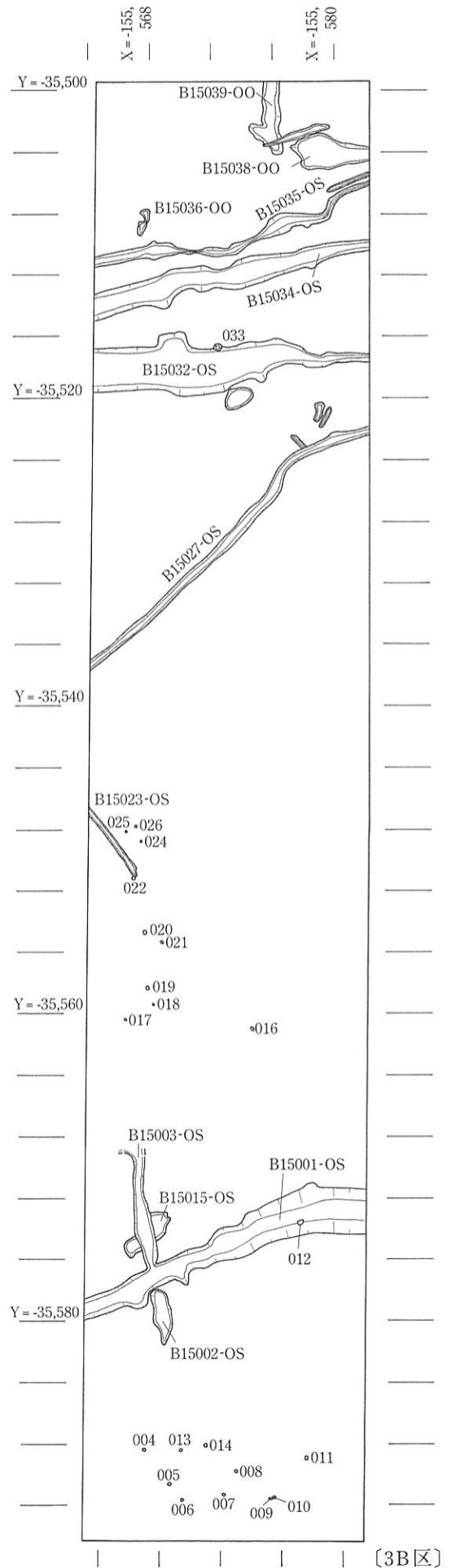
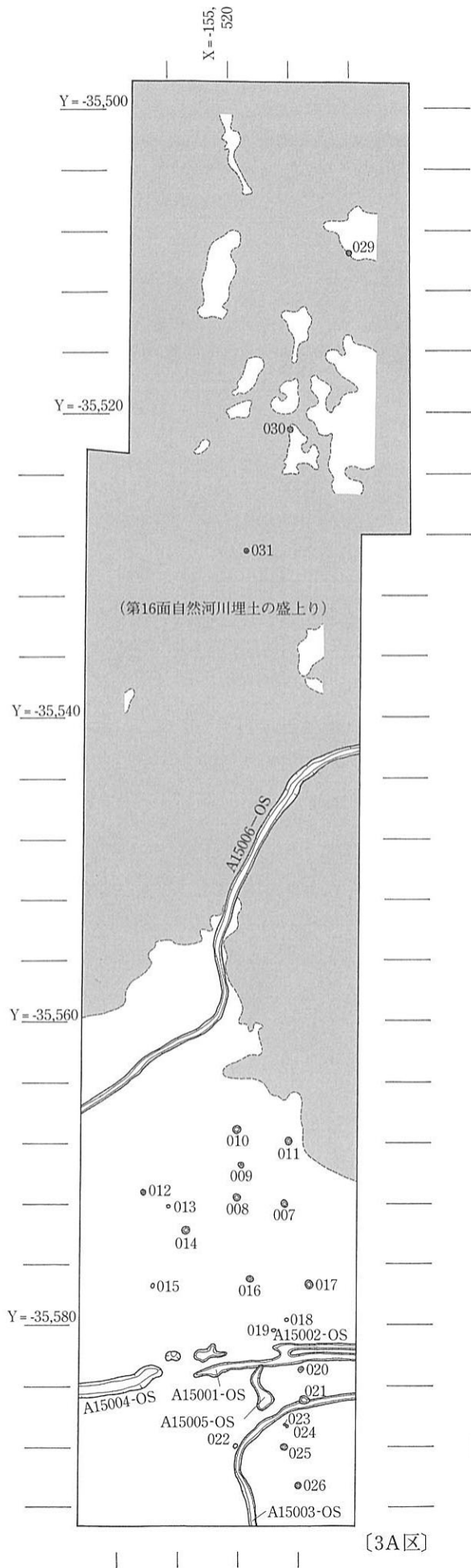


図153 3 A・3 B区第15面  
197

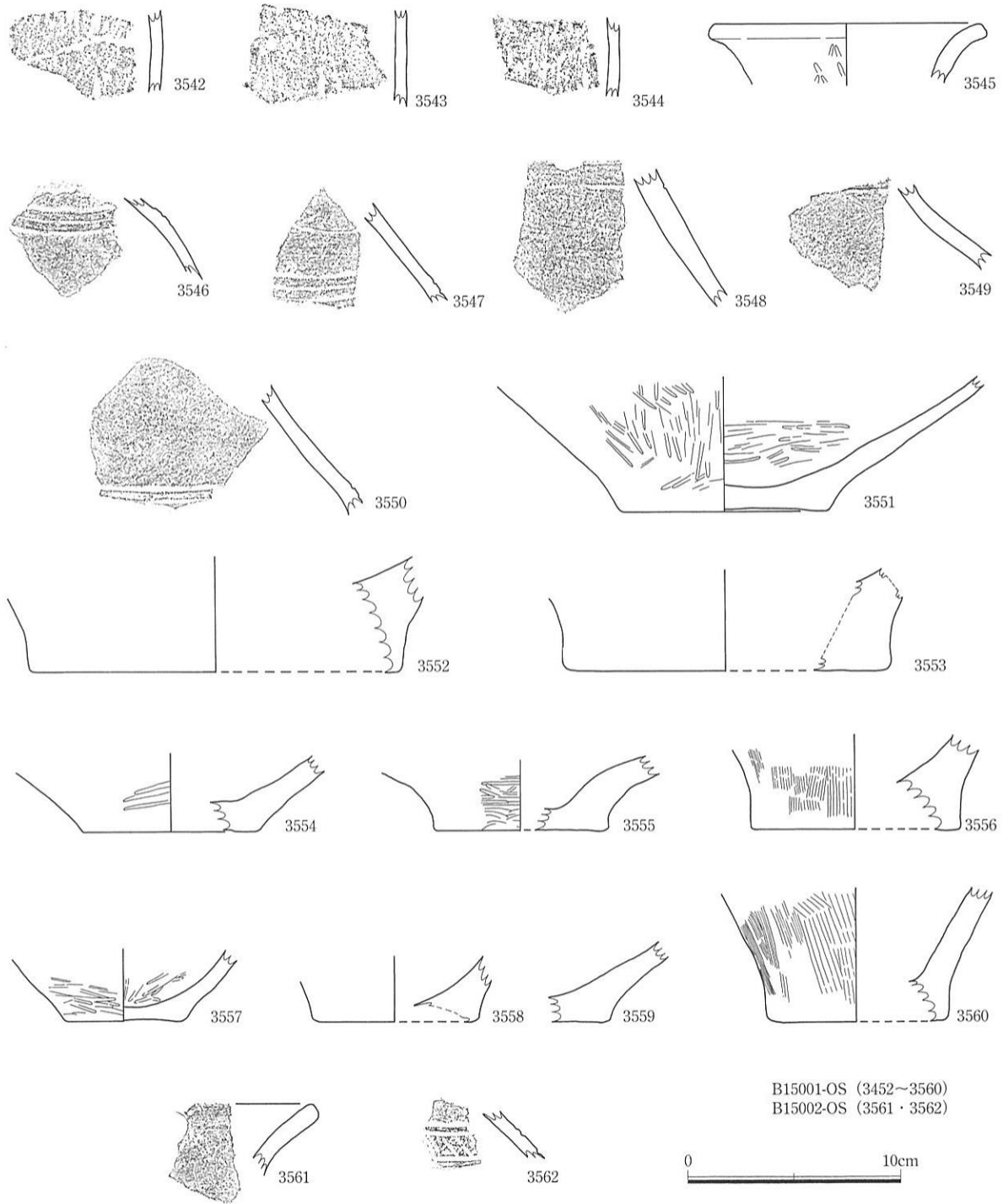


図154 3B区第15面出土遺物(1)

リープ黒色粘質土である。遺物は、弥生土器(3561・3562)が出土した。3561は壺の口縁部である。3562は壺の体部で、低い段をつくりだしその下位にヘラ描き沈線文と同斜格子文で装飾される。弥生時代前期中葉～後半に属する。

B15003-OS G63-I05GQ/HQで検出した溝である。規模は幅65～130cm、深さ3～6cm、埋土は7.5Y3/1オリープ黒色粘質土である。遺物は弥生土器小片が出土した。

B15027-OS G63-I05QQ/QR/RR/RS/SS/ST/TTで検出した溝である。規模は幅60～80cm、深さ7cm、埋土は5Y3/2オリープ黒色粘土である。遺物は出土しなかった。

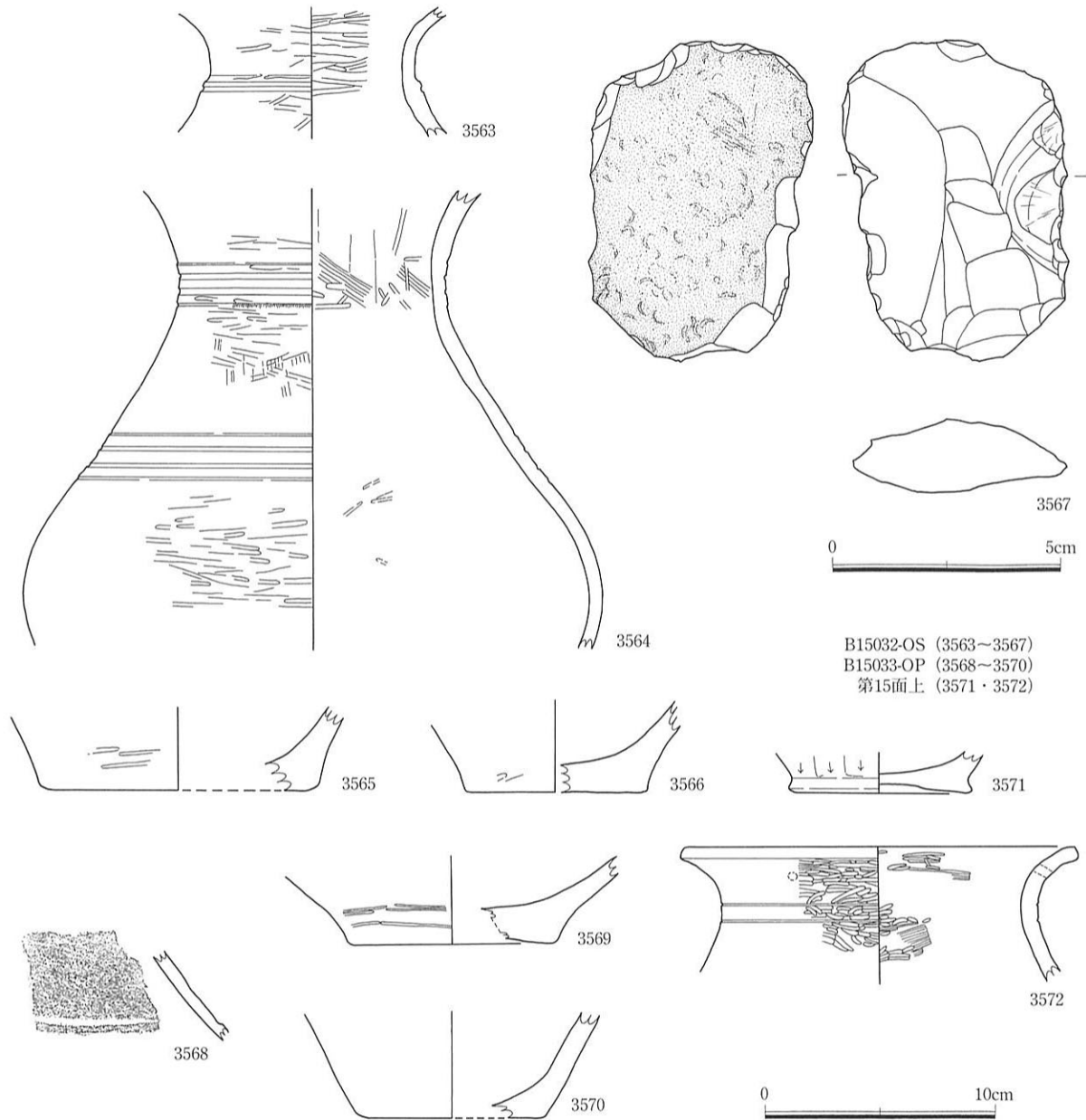


図155 3 B区第15面出土遺物 (2)

B15032-OS G63-I05UQ~UTで検出した溝である。規模は幅0.9~4.2m、深さ5~7cm、埋土は7.5GY4/1暗緑灰色粘土が主である。遺物は弥生土器(3563~3566)、石製品(3567)が出土した。3563は壺の頸部で、段の下位にヘラ描き沈線文が1条みられる。3564は壺の体部で、頸部と肩部に低く幅広の削出し突帯をめぐらし、その上部にヘラ描き沈線文を2条加える。3565は壺の底部、3566は甕の底部である。これらは弥生時代前期中葉~後半に属する。3567はサヌカイト製の石核状品で、自然礫面を多くとどめる。水流によるローリングが顕著で剝離状況は把握しにくい。

B15034-OS G63-I05VQ/VR/WR/VS/WS/WTで検出した溝である。規模は幅1.0~1.9m、深さ7~9cm、埋土は7.5GY4/1暗緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

B15035-OS G63-I05WQ~WT/XTで検出した溝である。規模は幅20~130cm、深さ10~12cm、埋土は7.5GY4/1暗緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。



## 土坑

土坑は3B区で3基検出した（B15036・15038・15039-OO）。いずれもB15032-OSなど溝の集中する調

表21 3A・3B区第15面ピット一覧

遺構名	地区割	平面形	長径×短径	深さ	埋土	遺物
A15007-OP	G63-I05GF	楕円形	53×42cm	11cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15008-OP	G63-I05HF	円形	54×50cm	12cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15009-OP	G63-I05HF	円形	40×38cm	4cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15010-OP	G63-I05IF	円形	55×51cm	5cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15011-OP	G63-I05IF	円形	50×46cm	12cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15012-OP	G63-I05HD	楕円形	37×29cm	3cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15013-OP	G63-I05GD	円形	20×20cm	2cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15014-OP	G63-I05GE	楕円形	54×45cm	7cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15015-OP	G63-I05FG	楕円形	32×19cm	2cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15016-OP	G63-I05FF	円形	48×48cm	10cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15017-OP	G63-I05FG	円形	55×50cm	5cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15018-OP	G63-I05FF	円形	28×28cm	4cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15019-OP	G63-I05EF	円形	23×18cm	4cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15020-OP	G63-I05EG	楕円形	38×32cm	7cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15021-OP	G63-I05DG	楕円形	61×50cm	4cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15022-OP	G63-I05CE	不整楕円形	29×21cm	3cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15023-OP	G63-I05DF	円形	15×15cm	5cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15024-OP	G63-I05DF	円形	22×19cm	4cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15025-OP	G63-I05CF	円形	40×40cm	20cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15026-OP	G63-I05CF	円形	40×38cm	20cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15029-OP	G63-I05WG	円形	33×32cm	17cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15030-OP	G63-I05TG	円形	38×35cm	8cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
A15031-OP	G63-I05RF	円形	30×30cm	10cm	5YR1.7/1黒色粘土	なし
B15004-OP	G63-I05CQ	円形	24×24cm	4cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15005-OP	G63-I05CR	円形	22×21cm	8cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15006-OP	G63-I05CR	円形	24×23cm	7cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15007-OP	G63-I05CS	楕円形	30×21cm	10cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15008-OP	G63-I05CS	円形	26×26cm	8cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15009-OP	G63-I05CS	楕円形	25×18cm	6cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15010-OP	G63-I05CS	楕円形	21×13cm	6cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15011-OP	G63-I05CT	楕円形	24×15cm	5cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15012-OP	G63-I05GT	不整楕円形	38×20cm	4cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15013-OP	G63-I05CR	楕円形	22×17cm	5cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15014-OP	G63-I05DR	円形	28×26cm	7cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15016-OP	G63-I05JS	楕円形	27×16cm	3cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15017-OP	G63-I05JQ	円形	12×12cm	4cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15018-OP	G63-I05KQ	円形	8×8cm	2cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15019-OP	G63-I05KQ	楕円形	25×20cm	6cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15020-OP	G63-I05LQ	楕円形	29×22cm	3cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15021-OP	G63-I05LR	円形	18×18cm	3cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15022-OP	G63-I05MQ	円形	18×18cm	2cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15024-OP	G63-I05MQ	円形	10×10cm	4cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15025-OP	G63-I05MQ	円形	9×9cm	3cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15026-OP	G63-I05NQ	円形	10×9cm	2cm	10Y4/1灰色粘質土	なし
B15033-OP	G63-I05US	円形	40×38cm	13cm	7.5GY4/1暗緑灰色粘質土	弥生土器

査区東端部に位置している。埋土も溝と共通することから、これらの土坑は本来は溝であり、削平の結果、深い部分が土坑状に残ったものと想像される。

ピット

ピットは3A区で23個、B区で22個検出した。詳細は表21に示す。これらのピットのうち、3A区のA15007～15011-OPは平面形はやや歪むが、掘立柱建物を構成する可能性がある。なおピットからはほとんど遺物は出土しなかったが、B15033-OPから弥生土器（3568～3570）が出土している。3568は壺の体部で、遺存最下端に低い段あるいは削出し突帯が作りだされ、その下位にヘラ描き沈線文が1条みられる。3569は壺の底部で、生駒山西麓産胎土である。3570は甕の底部である。これらは弥生時代前期中葉～後半に属する。

第15面出土遺物

3B区において第15面に接した状態で、縄文土器（3571）、弥生土器（3572）が検出できた。3571は、深鉢の底部で、生駒山西麓産胎土である。縄文時代晩期末・長原式に属する。3572は、壺の口縁付近で、頸部にヘラ描き沈線文が2条みられ、口縁端近くに紐通しの円孔を穿つ。内外面に黑色物質の塗布がなされる（第4章第4節参照）。弥生時代前期中葉～後半に属する。

【時期】

本面の時期は遺構出土遺物などから弥生時代前期中葉～後半であると考えられる。

第15層出土遺物

本層からの検出遺物では、㊸層出土の図156の個体を図化できた。

3B区第15層出土遺物 弥生土器（3573）がある。壺の体部小片である。最下端部にヘラ描き沈線文が3条みられる。弥生時代前期中葉～後半に属する。

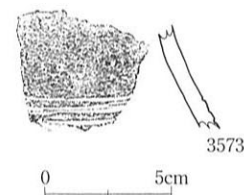


図156 3B区第15層出土遺物

第16面……………縄文時代晩期の自然河川

【概要】

本面では自然河川を検出した。3A区ではほぼ調査区全面が河川の流路にあたり、西端部で肩を検出した。3B区では東半部が自然河川の流路にあたる。西半部では本河川から分かれたとみられる小規模な流路の痕跡が残されていた。

本面のレベル（自然河川の肩）は3A区がT.P.+7.28～7.38m、3B区がT.P.+7.42～7.62mである。

【遺構と遺物】

自然河川A16001-OR・B16010-OR 3A・3B区で検出した自然河川である。埋土は粗砂および2～5mm程度の細礫が主である。河川の幅は東肩部が検出できないところをみると3A区で80m以上ある。しかし堆積する砂礫の厚さは30～50cmあるものの、3A区では川底としている部分のレベルはT.P.+7.3～7.5mほどであり、西肩部とほとんど変わらない。3B区の調査結果を考えあわせると、3A区では肩部がかなり削平されているようだが、これを考慮してもそれほど深い河川ではなかったと思われる。洪水のような一時的な流れにすぎなかったのではないか。本河川の埋土からは遺物は出土しなかった。しかし3B区においてその砂礫上面に接した状態で、縄文土器（3574）

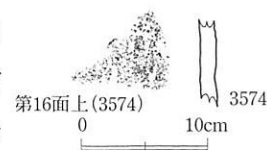
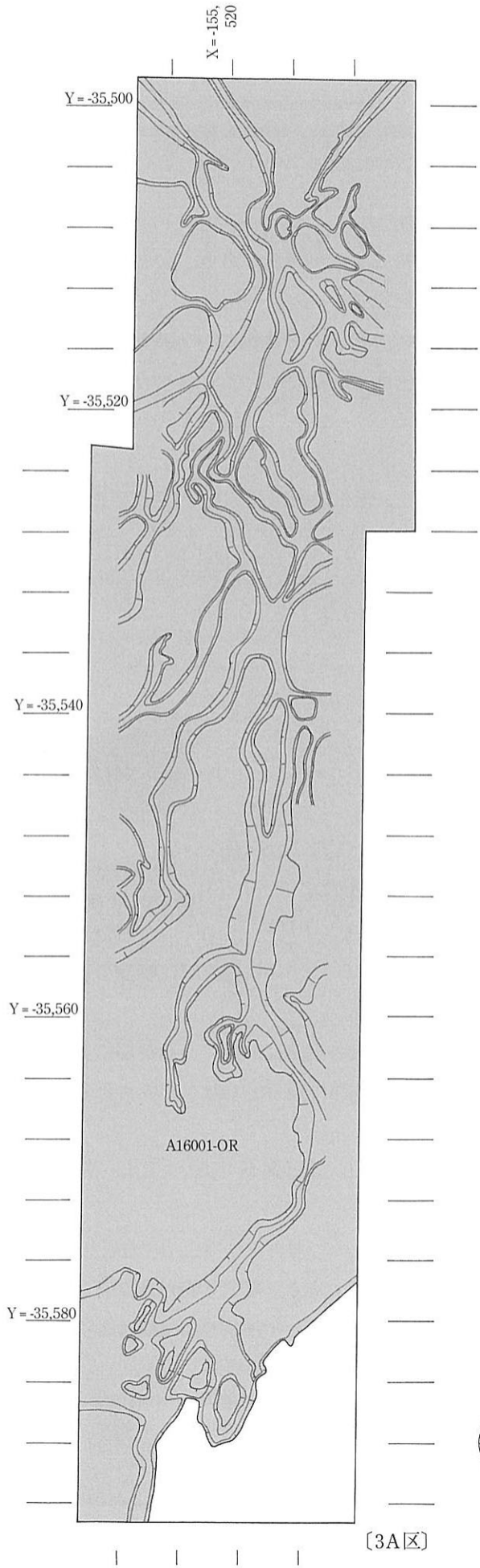
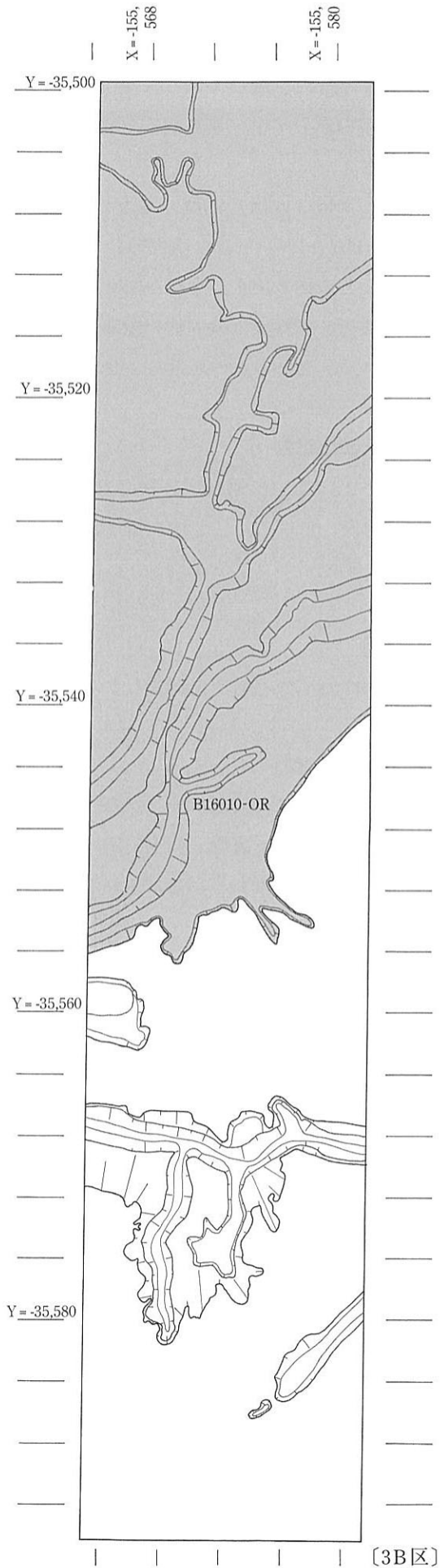


図157 3B区第16面出土遺物



[3A区]



[3B区]

图158 3 A · 3 B区第16面  
202

が出土した。深鉢の体部片で、生駒山西麓産胎土である。縄文時代晩期に属すると考えられる。

#### 【時期】

本面の時期は、第15層遺物、ならびに3B区において本面に接して出土した土器の時期から、縄文時代晩期と考えられる。

#### 第16層出土遺物

本層からの検出遺物では、図159の個体を図化できた。

3B区第16層出土遺物 縄文土器(3575)、石製品(3576)がある。前者は上位、後者は下位から出土した。3575は深鉢の体部である。外面は細線のヘラ描きによる斜格子文で装飾される。縄文時代晩期でも前半のものと考えられる。3576はサヌカイト製の剝片で、自然礫面を多く残し、縁辺は鋭い。

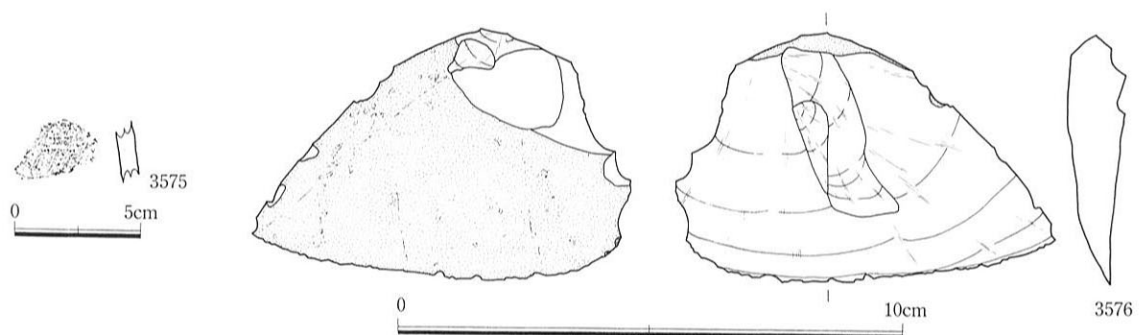


図159 3B区第16層出土遺物

#### 第17面……………縄文時代晩期以前の遺構面

#### 【概要】

本面は3B区の調査の最終段階において、第16面下層の遺構・遺物の有無を確認した際に存在することが判明したものである。本面で検出した遺構は自然河川、土坑、ピットである。

第2章で述べたように、第16面基盤層である③層の下層には第17面までおよそ10層が堆積している。そのほとんどが粘土もしくは粘質土であり、滞水した状態であったことを示している。この下層に遺構面が存在するとは実際予想していなかった。しかし本面を確認した時点ですでに掘削予定深度にほぼ達しており、全体を十分調査することは困難であった。さらに本面が確認された以上、さらに下層における遺構の有無の確認も不可欠な状況であったため、本面より下層は3B区の中央部を掘り下げる形で調査した。したがって、本面で検出した2条の大規模な自然河川については完掘していない。また調査区東半部において検出したピットについては、厳密には本面から掘り込まれていることを確認したわけではない。全体を下げる過程で順次検出したもので、ここでは便宜的に本面の遺構として報告するものであることを明記しておく。ただし、調査区南壁の土層断面の観察によれば、本面以外からのピットの掘り込みは全く認められなかったことも付け加えておく。この3B区における本面のレベルはT.P.+6.3~6.9mである。なお3A区では全面的な調査はできなかったが、調査区西端部G63-I05EE/EFにトレンチを入れ、第16面下層の対応関係を把握することに努めた。第4章第1節の分析試料のうち16~24の試料はこのトレンチにおいて採取したものである。

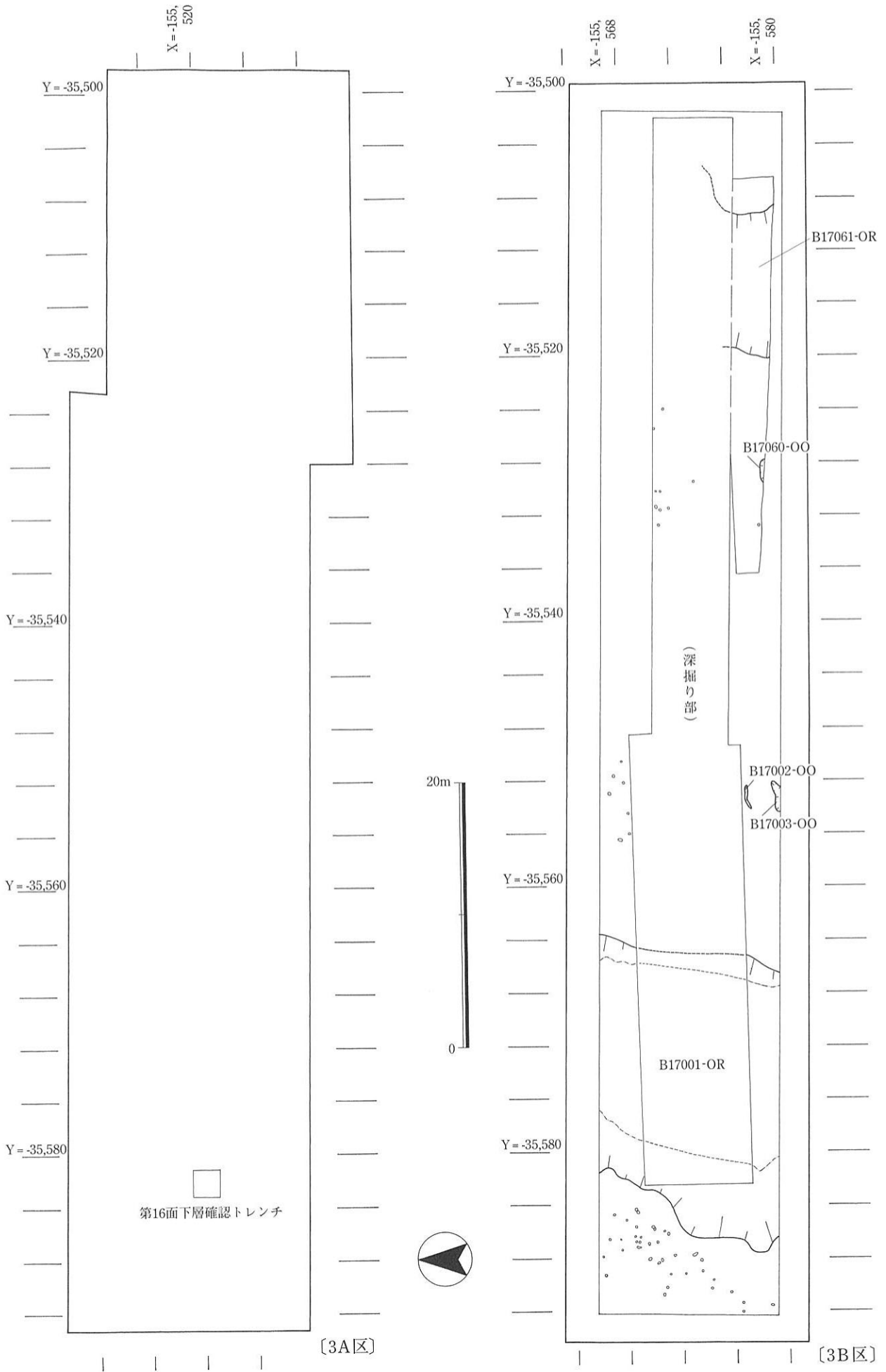


図160 3A・3B区第17面

## 【遺構と遺物】

先述の通り、本面の遺構はすべて3B区のものである。

## 自然河川

自然河川は2条検出した。

B17001-OR G63-I05EQ～JQ/ER～IR/DS～IS/DT～ITで検出した自然河川である。規模は幅17.5～21.0mである。完掘していないため深さは不明である。調査では40cm程度まで下げた。埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色粗砂などである。遺物は、河川最上部付近から縄文土器(3577)、石製品(3578)が出土した。3577は深鉢の体部で、摩滅が顕著であるが、外面にLRと思われる縄文が観察できる。縄文時代後期以前の土器であると考えられる。3578は火山岩製かと推定できる打製石器で、一側縁を両面からの剥離・叩打によって縁辺を整えている。

B17061-OR G63-I05UT～WTで検出した自然河川である。全体を検出していないが、ほぼ南北方向に流れていたと推測する。規模は幅10.0～11.5m、B17001-OR同様完掘していないため深さはわからない。埋土は砂を多く含んだ7.5Y4/1灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

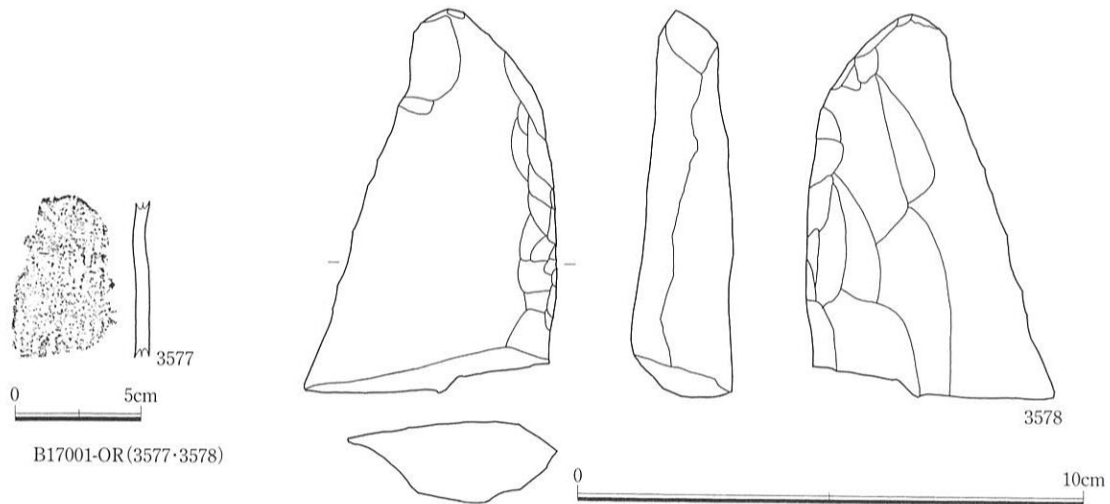


図161 3B区第17面出土遺物

## 土坑

土坑は4基検出した。

B17002-OO G63-I05LTで検出した土坑である。平面形は不整形で、規模は長さ1.83m、幅0.2m、深さ17cm、埋土は7.5Y4.1灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B17003-OO G63-I05LTで検出した土坑である。調査区の端にかかっているため平面形および規模は不明である。埋土は7.5Y4.1灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B17060-OO G63-I05RTで検出した土坑である。調査区の端にかかっているため平面形および規模は不明である。埋土は7.5Y4.1灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

## ピット

本面ではピットを55基検出した。ピットの分布は大きく三カ所に集中している。自然河川B17001-ORの西肩部、同じく東肩部、そしてB17061-ORの西肩部である。調査の条件が悪かったため詳細を示すことができないが、いずれも径15～30cm程度の小規模なものである。深さは30cm程度と深いものもある

が、10cm以下のものが最も多く約半数を占める。柱痕を残すものはなかった。またピットは密集するものの、建物の柱列を復元することはできなかった。

【時期】

本面は第16層出土遺物が縄文時代晩期（前半）に属していることから、それ以前であることは確実である。本面の時期を決定できる遺物は非常に少ないが、自然河川B17001-ORから出土した土器片は縄文時代後期以前のものである可能性がある。後述する第17面付近出土遺物も時期がはっきりわからないが、後期以前と考えても矛盾はない。したがって、ここでは時期を明確にできないものの、本面は縄文時代後期以前にさかのぼる可能性があることを指摘しておきたい。

第17面付近出土遺物

第17面検出中およびさらに下層掘削中の検出遺物では、図162の個体を図化できた。層順を明確にできないものも含まれるが、多くは第17面に関連する資料であろう。

3B区第17層出土遺物 縄文土器（3579～3585）がある。3579～3584は深鉢の体部で、いずれも遺存状態はよくない。3579の内外面にはかろうじて条痕調整が確認できる。3585は深鉢の底部で、やや上げ底を呈する。時期は明確にできない。

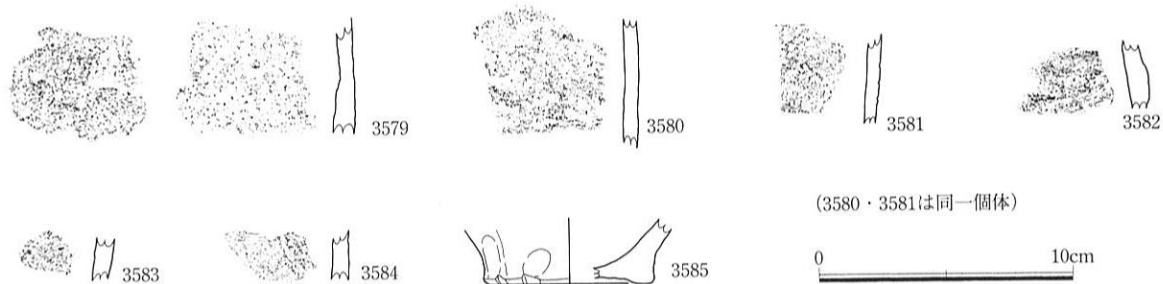


図162 3B区第17面付近出土遺物

その他の遺物……………補遺

最後に、側溝等から出土したために、ここまでの特定の面や包含層で採り上げることはできなかった遺物の中から、重要なものを報告しておくこととしたい（図163・164）。

3A区出土遺物 弥生土器（3586～3588）、土師器（3589～3595）、須恵器（3596～3603）、瓦器（3604～3606）、陶磁器（3607～3611）、瓦（3612）、金属製品（3613）がある。3586は甕の体部で、上端にヘラ描き沈線文が2条みられる。弥生時代前期に属する。3587は台付無頸壺の体部で、櫛描き簾状文と縦位の棒状浮文で装飾される。生駒山西麓産胎土である。弥生時代中期後半に属する。3588は広口壺の口縁部付近で、口縁端は下方に拡張される。生駒山西麓産胎土である。弥生時代後期前半に属する。3589は甕の口縁部で、端部は内側に肥厚される。古墳時代前期（布留式前半）に属する。3590は杯Cで、内面に放射状暗文がみられる。飛鳥時代に属する。3591は皿Aで、内面に放射状暗文がみられる。奈良時代中葉（平城宮III）に属する。3592は皿Aで、口縁端部は屈曲部を持つが、体部内面には暗文はみられない。奈良時代後葉（平城宮IV）に属する。3593は皿Aである。平安時代後期（平安京V）に属する。3594は杯で、口縁はやや屈曲を持って立ち上がる。鎌倉時代前半に属する。3595は皿Aで、口縁端部は屈曲を持つ。平安時代後半期（平安京III～IV）に属するか。3596は杯H蓋で、天井部にヘラ記号がみら

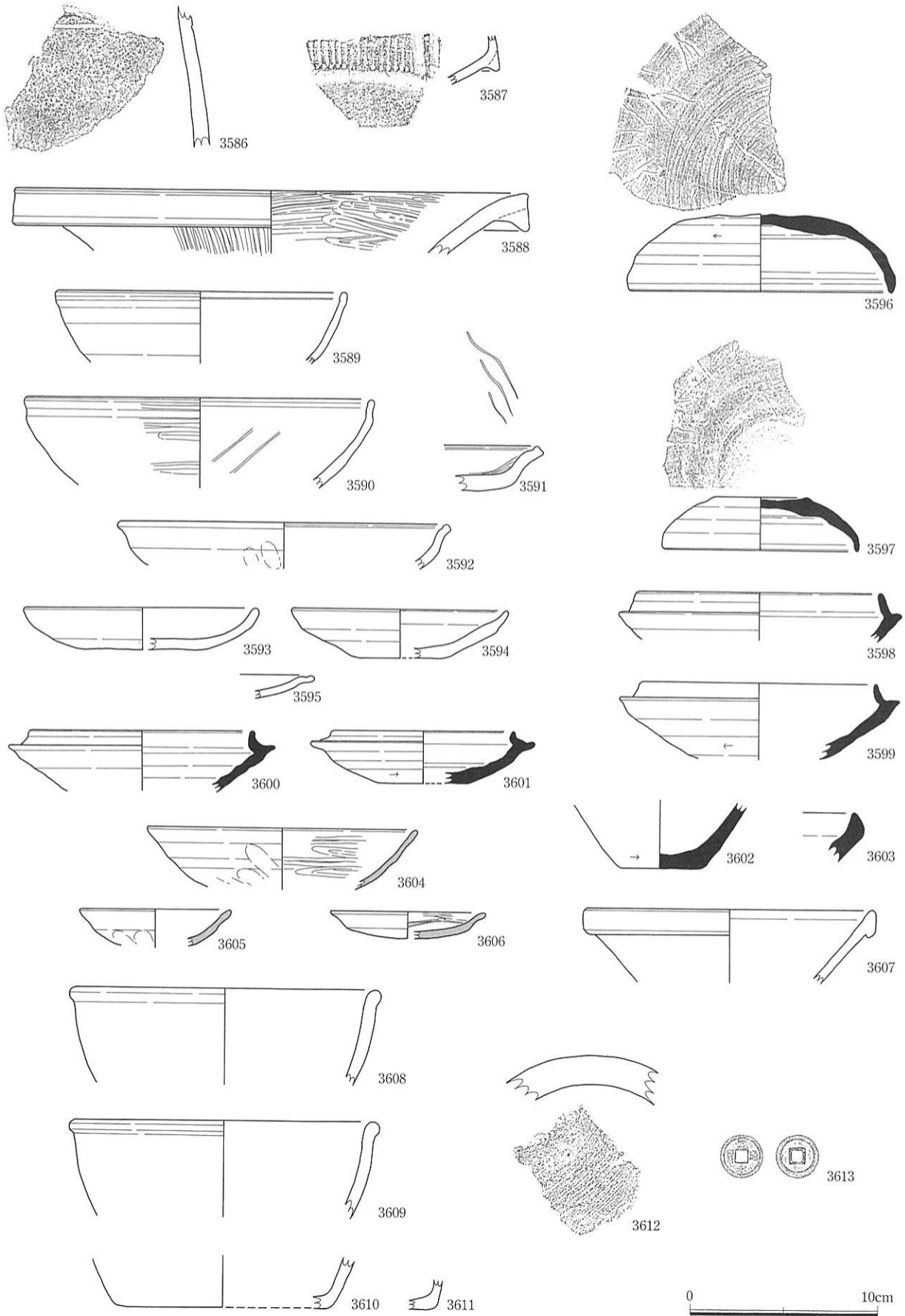


図163 3 A区側溝ほか出土遺物



れる。古墳時代後期（TK43）に属する。3597は杯H蓋で、小形品である。天井部にヘラ記号がみられる。飛鳥時代（飛鳥I）に属する。3598～3601は杯Hで、口縁立ち上がり部は短い。古墳時代後期末～飛鳥時代（TK209～飛鳥I）に属する。3602は壺の底部で平安時代後半に属するか。3603は捏鉢の口縁部で、端部は上方へ拡張される。東播磨系製品にあたる。平安時代後半に属する。3604は碗の口縁部付近で、内面にヘラミガキが施される。鎌倉時代前半期（和泉型III-3）に属する。3605は小皿で、内外面ともにヘラミガキが確認できない。平安時代末～鎌倉時代初頭に属する。3606は小皿で、内面にヘラミガキが施される。鎌倉時代前半期に属する。3607は白磁碗の口縁付近で、口縁端部は外下方に肥厚する。平安時代末に属する。3608・3609は鉢の口縁部付近で、口縁端は外方に丸く肥厚される。3610・3611は鉢の底部で、平底になる。3608～3611は旧日本陸軍の陶製食器で、既知の完形品によれば、口縁内面に紺色の陸軍章がみられ、底外面には生産工場番号が記載される。瀬戸産である可能性が高い。この種の陶器が確認できるのは、当遺跡一帯が旧陸軍の大正飛行場であったことによる。昭和期に属する。3612は丸瓦で、内面に布目圧痕がみられる。平安時代後半～鎌倉時代に属する。3613は銅銭で、「寛永通寶」である。近世に属する。

**3B区出土遺物** 弥生土器（3614～3618）、土師器（3619・3620）、須恵器（3621）、陶器（3622）、石製品（3623）がある。3614は広口壺の口縁部で、生駒山西麓産胎土である。弥生時代前期に属する。3615は壺の体部で、ヘラ描き直線文が3条みられる。弥生時代前期に属する。3616は壺の底部で、生駒山西麓産胎土である。弥生時代中期に属する。3617は台付鉢等の脚台部で、裾付近に円孔が穿たれる。生駒山西麓産胎土である。弥生時代中期後半に属する。3618は高杯の軸部付近で、軸部は短い。弥生時代後期に属する。3619は鉢で、口縁端部付近は屈曲部を持つ。古墳時代前期に属する。3620は杯Cで、内面に放射状暗文がみられる。飛鳥時代（飛鳥IV前後）に属する。3621は杯Bの底部で、高台は底面端付近に付く。奈良時代末～平安時代初頭に属する。3622は緑釉陶器碗の底部付近で、硬質焼成の京都系製品である。平安時代初頭（平安京I新）に属する。3623はサヌカイト製の剥片で、片面の周縁にはリタッチがみられる。弥生時代前期～中期に属すると思われる。

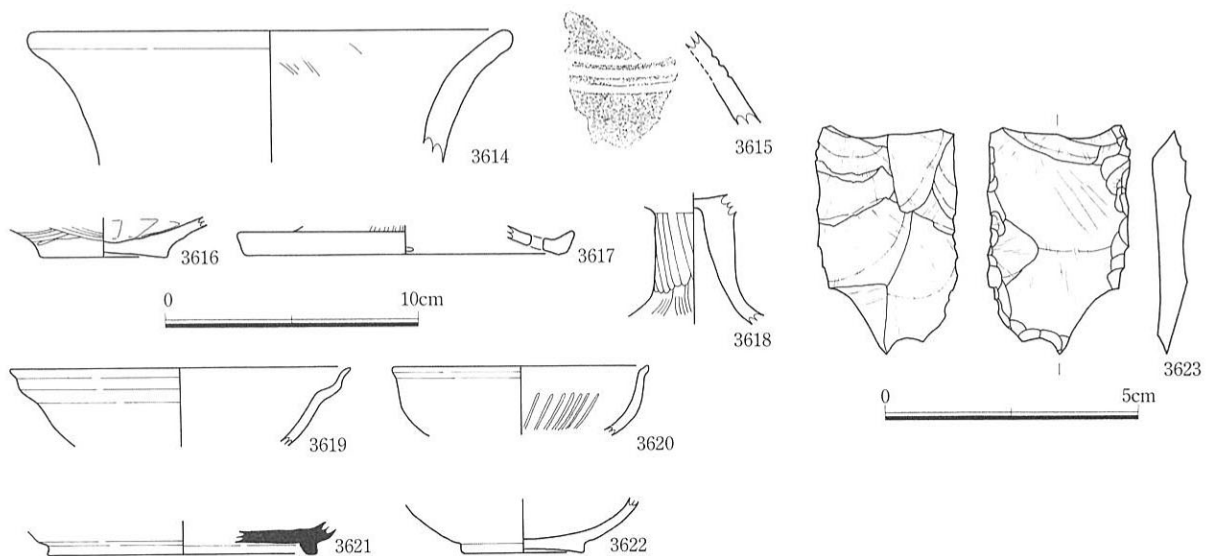


図164 3B区側溝ほか出土遺物